エンジェル・フォール！

五月蓬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
エンジェル・フォール！

【Ｎコード】
Ｎ４６０４Ｖ

【作者名】
五月蓬

【あらすじ】
成績平凡、運動神経並、身長体重標準の普通な兄と、成績優秀、運動神経抜群、容姿淡麗、才色兼備な完璧な妹。
普通な兄に何故か心酔する超絶ブラコン妹と、妹の優秀さにコンプレックスを抱きつつ、そのブラコンっぷりを本気で嫌がる平凡な兄が突然呼び出されたのは異世界「球界テッラ」。
テッラに伝わる「天使の伝承」に導かれ、凡夫な兄貴と完璧な妹が、天使として異世界に巣食う化け物退治に立ち上がる！

凡夫な兄貴に隠された、普通じゃない秘密とは?天使の伝承、それを解き明かし、二人は元の世界に帰る事は出来るのか?世界に巣食う化け物テラスを二人は打ち倒すことができるのか?

多くの謎に、多くの波乱。二人の兄妹から始まる異世界召喚モノ兄妹ファンタジー!

コメディあり、シリアスあり、バトルあり、兄妹あり、奇人変人ありの、ありありだらけのちょっぴりぶっ飛んだ物語!

(12/22　アルファポリス様との出版化協議による結果、タイトルを変更致しました!　旧タイトル「俺は凡夫と言っておろうに!」)

プロローグ：　ミスターノーマル、それが俺（前書き）

一週間に一、二回の不定期更新になります！

プロローグ：　ミスターノーマル、それが俺

普通。普通。普通。

俺を表すのにこれ程に優れた表現があるだろうか？いや、優れてないか。普通だな。

生まれてこのかた目立つことなし。成績平均、運動神経平均、身長平均、体重平均、社交性平均……ｅｔｃ

そして、モテることもなし。特別な友達もなし。教師に目を付けられることもなし。目指す大学もごく普通。苛められることもなければ、キモイと罵られることもない。

まさに『ミスターノーマル』。これ程普通だとむしろ特殊に見えるかもしれないが、その特徴さえも、目立たず地味に生きている。起伏のない平坦なレールを只管に走るマイロード。まあ、苦労もないし楽でもない、普通に生きてれば疑問も抱かずに生きていられただろう。

しかし、そう言うだけあって……俺は普通に生きられない。普通を良いことには受け取れない。

それもこれも全て『こいつ』のせいである。

「兄様（にいさま）。お早う御座います」

「……お早う。早いな」

「薄葉（ウスハ）が遅いんでしょ！明華（アキカ）はとっくに起きてるのよ！」

リビングに入りざまに、朝っぱらから母さんに喧しくされ溜め息が溢れる。昨晩は試験前勉強で夜更ししていたのだから朝くらいゆっくり寝てもいいだろうに。

……しかし、まあそんな言い訳が通用しないことは分かっているから口には出さない。もし勢い余ってそんな言葉を吐いたら「普段から勉強しないからでしょうが！あなた受験生でしょ！」と更に喧しく騒がれるだけだ。

悔しいことに家で俺は文句一つ言えない。

それは全て、寝起きのままのジャージ姿で食卓につく俺の隣、既に朝食も綺麗に殆ど食べ終わりまだ登校時間まで時間はあるのに既にぴしっと制服を身に付けているこの妹、明華（アキカ）のせいだ。

普段からきちんと勉強をこなし、高校二年の今では学年トップの成績を誇る。運動神経も抜群で、あちこちの運動部から引っ張りだこ（何故か全て断っているが）。人当たりも良く、周囲の人間からこいつの悪い話を聞いたことはない。更に真面目で几帳面、なんでもそつなく素早くこなす。そしてこれでもかと言わんばかりにその容姿まで優れている始末。俺はもう見慣れたが、綺麗に束ねられた黒髪はさらりと艶やかに垂れ、化粧のひとつもしないくせにきめ細かく染み一つない肌は美しい陶器を思わせる。潤う唇は色っぽく、綺麗に伸びたまつ毛に二重瞼がその濁りない瞳と相まって、目元を美しく描く。鼻はすっとクセなく整い……ｅｔｃ．ｅｔｃ．ｅｔｃ．・・要は表現できない美しさを持つ。　加えて冗談としか思えないすらっとしたスタイル。要は凄い。兄の俺でも言えるその一言。

俺が決してシスコンな訳ではない。むしろ、俺は妹が、明華が嫌いだと言っていいかもしれない。

「御馳走様でした」

手を合わせ、礼儀正しく一礼すると、母に言われずとも明華は皿を纏めてすぐに台所に運んでいく。そして慣れた手つきで台所にぶら下げたエプロンに手を伸ばすと、するりと鮮やかにそれをも着こなし、皿洗いを始めた。

「いつも悪いわねぇ明華」
「大丈夫だよ。好きでやってるだけだから」
「……薄葉にも見習ってもらいたいもんねぇ」
「俺は関係ないだろ……」

これだから嫌なんだ。いつも俺は明華と比べられる。このせいで、俺は普通でいることが苦痛で仕方がないのだ。

別に全てにおいて負けていることは認めてる。俺にもいいところがあるなんて負け惜しみは言わない。しかし、周りの人間は俺を否定してくる。それだけが堪らなく許せなくて、堪らなく俺を苛立たせた。

明華はこうなのに、明華ちゃんは凄いのに、明華さんはしてるのに……何故周りは俺が普通でいることを許さない？無視すればいいのだろうが、俺は普通だ。そんな言葉に心を揺さぶられる程度に。

だから俺は明華に劣等感を抱かざるを得ない。どうしようもなく暗い、劣等感を。

そもそもそんなことで明華を俺が嫌うのは的外れだという人間も

いるだろう。しかし、俺だってそのくらいは分かっている。優秀な妹が憎い、なんて俺は全く思っていない。劣等感の原因を、明華に押し付けるつもりはない。

むしろ俺はそこではなく、妹のとある一面が途轍もなく嫌いだった。

朝食を食べ終え、皿だけ運んでさっさと部屋に戻った俺はいそいそと制服に着替える。試験前の勉強のおかげで今日は眠い。溢れる欠伸、目に浮かぶ涙を拭いながら背筋を伸ばす。え？なら朝早く起きてやれ？夜ふかしするな？言うな。俺は夜型人間だから仕方がない。

朝食前に顔は洗ったので、朝食後は制服に着替えてすぐに家を出るだけである。二階の自室から荷物を手に飛び出し階段を駆け降りる。

「あ、兄様！もう出るんですか？」

するとリビングから明華の声。はぁ、と溜め息を付いて、俺は鞄をぶら下げリビングからせかせかと出てきた明華から目を逸らしながら頷いた。

「じゃあ私も一緒に……」

やっぱりか。いつものことである。もう流石に慣れた。いや、慣れはしたが気分は良くない。俺は「可愛い妹と一緒に登校……たまらん！」なんて言うようなシスコンではない。むしろこいつと一緒に歩くことには抵抗を覚える。

別にそれは比較される、だとか釣り合わないと笑われる、だとか他所の男に嫉妬される、とか……明華自身に非が全くない理由ではない。

「……行ってくる」
「行ってきます！」
「行ってらっしゃい」

俺は軽く挨拶を、明華ははっきりと挨拶を。母の送り出す言葉を適当に受け流し、家のドアをくぐり道に出る。ちらほらと同じ学校の制服の生徒が通る中、妙に痛い視線を感じながら通学路に乗る俺にぴったりとくっつくように、明華は横に並んだ。

「兄様。夜遅くまでお疲れ様です」
「ああ。俺はお前と違って普段から勉強してないからな。寝てらんねぇや」
「お体に気を付けて下さいね……」
「お前は試験、どうなんだ？」
「……あ、大丈夫、かと」
「俺は駄目そうだよ」

明華は何故か俺には敬語で話しかける。別に普段から威圧して怖がらせてるわけでもないし、家でも両親に向かって敬語を使うからというわけでもない。何故か、明華は俺だけに敬語を使う。……まるで駄目な俺を尊敬しているかのように。おかしな話だ。有り得ない。しかし、明華のおかしいところはこれだけではない。

「そ、そんなことないです！兄様は絶対に大丈夫ですよ！」
「何を根拠に……」
「だって兄様は凄いですもの。……絶対に失敗なんてしないです！」

この言葉が、この眩しいまでの目が、俺が一番大嫌いなものである。

明華は何故か、俺を妙に持ち上げる。「兄様は素晴らしい」とか、「兄様が一番」とか、「兄様は絶対に失敗しない」とか……何を根拠に言っているのかは分からないが、何故か俺を妙に過大評価しているのだ。しまいには「兄様は私よりずっと凄い方です」とまで言い出す。

……俺にはこの妹の言葉が、厭みったらしい皮肉にしか聞こえなかった。優秀な自分に余裕を持って、俺を無責任に評価する。上から目線というか、天に好かれた者の余裕というか……そう言ったものが、劣等感に苦しむ俺にはたまらない苦痛だった。

「それはやめろっていってんだろ……！俺はダメな奴だ……変な励ましはやめろって……！」
「励ましなんかじゃないです！兄様は本当に……」
「黙らないと置いてくぞ？」

少し言いすぎたかもしれない。試験前の疲労で俺も気が立っていた。僅かにその目を潤ませ、口をぎゅっと結ぶ明華を見て、罪悪感が溢れ出す。

その罪悪感はじわりじわりと俺の劣等感と苛立ちを塗りつぶし、やがて深い溜め息と共に、諦めのこもった言葉を吐き出させた。

「……悪かったよ。寝不足でイライラしてたんだ。言いすぎた。ごめん」

ここで意地を張りきれないあたりも中途半端だな、俺。

そう思いつつ、俺は突然ぎゅっと手を握ってくる明華に少し驚かされた。

「……謝るなら誠意を見せてください」

「……分かったよ」

妙な所で強気に出るのが明華だった。こうやって昔からおんぶだのだっこだの手繋ぎだの……色々と要求されたものだ。

こいつが俺をどう思って慕っているような態度を取るのかはわからない。ただ他人の目からしたら、これはブラザーコンプレックス、所謂ブラコンというものに見えていただろう。それほどに普段から明華は俺に付きまとってきた。

これは流石にやめさせるのを諦めかけている。嫌味にしか思えない賞賛よりもこれは根が深いしな。

こうして、嫌いな妹と共に通学路を歩く。春先、散り始めた桜の花びらが鬱陶しい。咲き誇るときは綺麗だとは思うけれど、道に散らばる花びらが邪魔だと思う程度に、俺は普通に美的センスに優れては居なかった。

コンクリートの道を革靴でぎゅっと踏む。それは幾度となく繰り返してきた筈の動作だった。

しかし、その時、その一歩だけは明らかに今までの惰性的な動作とは違う異質なものだった。

踏み出した足元に、奇妙な紋様が浮かび上がる。紋様は淡い光を放っており、その光は線を踏みつけた俺を咎めるように足を這上が

ってくる。

――――天恵ノ契約ニヨリ、汝ヲ天ノ遣イに任命セン

「なんだよこれ……！」
「兄様……！これは……」

明華が怯えた様子でぎゅっと俺の腕にしがみつく。どうやらこれは俺の錯覚ではないらしい。見れば足元の紋様は、俺と明華だけを包み込むように張り巡らされている。周囲の人間は、この紋様にすら、いや……俺達に全く気付いていないようだった。

――――歪ナル者ヲ、其ノ力ニテ討テ

歪なる者？其の力？何を言ってるんだこの声は……！しかも何か……頭に語りかけるような……なんだこの声……！？
光が遂に、俺と明華を完全に包み込む。そして、最後に奇妙な声は俺たちの耳元で大きく響いた。

――――サスレバ、汝ニ望ムモノヲ与エン……！

カッ！

眩い光が俺の視界を塗りつぶす！

目を閉じ、白い世界に身を溶け込ませた俺は、僅かに感じる明華の手の温もりだけを感じながら、ぐらりと揺れる世界の渦巻きのなかに飲み込まれていった……

「……成功……ぞ！」

光が徐々に弱まり、目に走る痛みが和らぐ。そして徐々に、霞んでいた視界が回復していく……

なんだ……何が起きた？

俺はそれを確認するようにゆっくりと目を開く……

「天使様！天使様が我らの呼びかけに応えてくださった！しかも、お二人も！」

天使？

俺の目の前には、数人の人間。こちらを明華のような希望に満ちた目で見つめる奇妙な服装の人間。

横を見ると、目をぱちくりさせながらしがみつく明華。

そして、足元を見ると、そこには俺たちを包み込んだ紋様が刻まれている。

状況がいまいち飲み込めない普通な俺は、ぽかんと目の前の人間たちを見つめた。

「よくぞ降臨なさってくださいました、天使様！どうか我らをお救いくださいませ！」

……どうやら俺と明華は、天使になってしまったようだ。

プロローグ：　ミスターノーマル、それが俺（後書き）

異世界召喚モノとなります。
普通な主人公と完璧な妹。
妹は異常に兄を慕う。しかし兄は見るからに普通……ちょっとありがちな設定の羅列かもですねｗ　しかしちょっとここから捻る……筈ｗ
まだまだ出だしですが、感想、ご意見、ご指摘などなど是非ともお寄せください！よろしくお願いします！

ＥＰ１：　球界テッラ（前書き）

視点：マギア村長、ソフォス

基本的に各話毎に視点を定める予定。視点が意外と重要になってくるかもしれません。

EP1：　球界テッラ

――球界テッラ

我々の住む大地が丸い事が大魔導師マゴスにより証明されてから千年……他にも存在する丸い大地との区別を図るため、この世界は『テッラ』と名付けられた。

テッラは数十年前までは平和で、命の輝きに満ちた世界であった。

……そう、数十年前までは。

球界、そう名付けられた丸い大地。我々が立つこの球界以外の球界にも、我々とはまた違った生命が存在した。多くは友好的に、なんの問題も無く交流を取り持つことが出来たものの、唯一、手を取らない者達もいた。

彼らはその球界を訪れた我々の同士達を皆殺しにし、さらには我々の球界テッラにまで攻め込んできたのだ。

我々は交戦した。他の球界の住人達も協力してくれた。しかし、敗れ去った。その圧倒的な力の前に。

何もない荒れ果てた死の球界、『プルトナス』から訪れた侵略者達……我々が『テラス』と呼ぶ奴等は今、我々のテッラの美しい命の輝きを貪り尽くし、徐々にその大地を侵食し始めている……

一一一一

我らの王国アナトリの首都アギオが奴等の手に落ちてから早一ヶ月……王の兵士もほぼ全滅し、奴等に対抗する戦力はほぼ失われた。僅かに残った戦力と、僅かに生き残った首都の人間達は、魔物から逃れるように国の隅まで追い込まれていき、遂には我らの住まうこの村、マギアにたどり着いた。

既にアナトリは奴等の手に落ちたも同然。我々は首都から逃れてきた王と、僅かな側近の戦士、首都の僅かな生き残り達と共に、完全に追い込まれてしまったのだ。

屈強な戦士達の力と、村に居た優秀な魔導士達、その力により暫くは持ちこたえていたが、遂に限界は訪れる。

そして王国最強の戦士エクエスが討たれ時、遂に後がなくなる。

……このままでは誰一人生き残れない。

そう判断した我々は、遂に藁にも縋る思いで、優秀な魔導士を排出する我が村に伝わる伝承に頼ることを決めたのである。

テッラがまだ名もなき頃、この世界は巨大な化け物に支配されていた。その化け物は命を喰らい、光を奪い、世界を闇に沈めていった。

そんな絶望の中、とある魔導士が描いた魔方陣から彼は現れた。

最初は何も知らぬ未熟な子供。しかし、彼は魔導士の元で多くを学ぶ。

その成長は目を見張るほどで、見る見る内に彼は力を付けていく……そして彼はすぐに魔導士をも超える才を示すこととなる。

魔導士を超える力を行使し、彼は化け物に一人立ち向かった。

そして、見事勝利したのである。

化け物は消え、世界に光は取り戻される。そして彼は人々からこう称えられた。

偉大なる神の住まう天からの使い……『天使』と。

そして何も知らずとも、学び、成長し、大きくなっていき、最後には強大な闇をも打ち払う勇ましきもの……彼らは又の名を『勇者』と呼ばれた。

伝承の天使の魔方陣は既に太古の魔道書に示されていた。彼等は最後の望みとして、この天使に、勇者伝説に縋ることに決めたのである。

村一番の召喚術に精通した魔導士に三日三晩寝ずの儀式を行わせ、私は王と共に、僅かに残った戦士達と共に、儀式の成り行きを見守る。

魔導士マゴが最後に自らの血の一滴を聖杯に垂らし、アルマを魔法陣に流し込んで、ようやく口を開く。

「準備は整いました……最後の呪文で儀式は完成します」

「そうか……頼むぞ……！」

マゴは既に息絶え絶えだった。それを息を呑み見守る私、王、戦士達……

振り絞るように、魔導士は最後の短い言葉を吐き出す。

「……召喚（プロスクリスィ）……！」

それと同時に魔導士が手を掛ける聖杯に、光が灯る。そして光は魔方陣を照らすように輝きだし、その文様をなぞるように光は駆け巡った。

「成功か！？」

「……来ます！」

カッ！

眩い光にその場に居る全員が目を瞑る！

そして……

――

「……現れたのが私達、という訳ですか」

魔方陣から現れたのは二人の天使様だった。その内、美しい容姿を持つ女の姿をした天使様は、我々の話を聞き、直ぐ様理解を示してくださった。言葉はどうやら通じるようだ。

「おいおい、冗談じゃないぞ。なんの夢だこれは？」

もう一人の天使様は、男の姿を持っていらっしゃった。こちらはいまいち話に乗り気では無いようで、全てを否定していた。容姿も変わった衣服を身に付けている以外は特徴もなく、一方の美しき天使様とは似ても似つかない。

我々の視線が自然と女の天使様に向いたのは自然なことだろう。

「まあ兄様。起こってしまった事は事実ですし……これはどうも夢ではなさそうですよ？」
「じゃあ俺の頬っぺた引っ張ってみろよ」
「無理です……私が兄様に痛い思いをさせるなんて……！」
「あああ、そうだったな！お前はそういう妹だったな！」

どうやら兄妹のようだ。しかし、似ていない。

「おい、お前らなんだその目は？似てないとか思ってんだろ？」
「ひっ！も、申し訳ありません！」
「兄様抑えてください！皆さん怯えてますよ！」

凄い形相でこちらを睨んできた兄の天使様。妹の天使様とは酷い違い……恐ろしや。

なんとか兄を抑えてくださった妹の天使様は、優しく此方に微笑みかけて下さった。

「お話は理解できました。少しまだ戸惑う部分はありますけど……ご期待に応じないわけにもいきませんし……」
「おい、お前正気か！？何勝手に話を受けようとしてるんだ！？絶対におかしいだろこんなの！」
「でも兄様……皆さん困ってらっしゃいますし……！」

「ああ、そうだな！お前はいつも困ってる人は放っておけないし、期待されたらなんでも二つ返事で受けちまうよな！でも今回はやめとけ！夢じゃないとしたら、お前、訳の分からない奴と戦うことになるんだぞ！？」

「に、兄様……それは私を心配して下さって……！」

「違うっての！」

うるりと目を潤ませ、喜びの笑顔を浮かべる妹様を突き放す兄の天使様の強いお言葉……それに少し落ち込むと、妹様は少し強い視線を兄に送りました。

「大丈夫です。伝承によると……天使は学び、強くなる……と。つまり、私達もこの世界の事を学べば魔物に対抗できるのでは？」

「では？じゃねぇよ！学ぶったって……何を学ぶんだよ！俺は今日試験を……あああ！そうだよ、今日試験だよ！」

何を言ってるのかさっぱりでしたが、私は妹様の考察が正しいことを確かめるため、恐れ多くも口を挟ませていただきました。

「天使様方の為に、この村には多数の魔導書を取り揃えております……入門から基礎、発展、応用など……一流の魔導士を育てるのに十分すぎる書物があります。どうか一度、それに目を通していただけませんか？」

女の天使様はキラリと目を輝かせると、すくりと魔方陣から立ち上がりました。

「興味深いですね。……あと、私の事は明華（アキカ）で結構ですよ！天使様じゃ呼び辛いでしょうし、私も恥ずかしいですし……」

「お前……ここでも勉強熱心か！」

「え？兄様は興味ないんですか？魔法ですよ魔法！向こうじゃ見れないですよ！」
「子供か！」

美しい天使、アキカ様はとても楽しそうに、兄の天使様はもううんざりだといった様子でした。アキカ様は私に向かってその神々しい笑顔を向けると……

「その魔導書……見せていただいてもよろしいでしょうか？」
「はい。有難うございますアキカ様……マゴ、儀式を終わらせて早々で悪いがアキカ様のご案内を……」
「はい、ソフォス様……ではアキカ様、此方へ……」

マゴには儀式の疲れが残っているだろうが、魔導書を封印した部屋には結界が張られている。それを扱えるのはマゴのみ。彼女に任せるほかないだろう。

「おい待てよ！俺だけ置いてこうってか？俺も行くってのに！ったく！」
「兄様……私と居ないと寂しいという……」
「違うっつーの！」

……兄の天使様もついては行くようだ。

一一一一

村の魔導書庫。厳重に封印を掛けられたその部屋に入り、マゴに本の解説を受けたアキカ様は直ぐ様入門の基礎知識が記された魔導書に目を通し始めました。その手と目の動きの早いこと……基礎の魔導書でも、それなりの魔導士でも、ここまで早く目を通すことが出来るはずも無い……流石は天使様といったところなのでしょうか？

「兄様！やっぱり読めますよ！見慣れない言語の筈なのに……内容が分かります！」

「ああ？……細かっ！こんなのお前はスイスイ読んでんのか！？」

「え？はい……速読はそれなりに出来ますので……」

兄の天使様は一冊の魔導書を手に取り、しかめっ面で睨めっこをしていました。対するアキカ様は早々入門書を読み終えると、ふうと息を吐きました。

「……ちょっとだけ、危なくない程度の事を試してみても宜しいですか？」

「あ、はい。此処の本には個別に結界が張ってありますので……ちょっとしたトラブルでは損傷はありません。ご自由にどうぞ」

マゴの言葉を受け、アキカ様は優しく微笑むと、指を一本立てて、じっとそこを見つめ始めました。するとなんということでしょう。指先にはぽっと火が灯ったのです！なんと入門書を一通り読んだだけで、アキカ様は魔法の仕組みを理解し始めてらっしゃったのです！

「す、凄いです……！魔法の発動はそれこそ基礎を学んでも長い修練が必要になるのに……！しかも詠唱なし……アルマ形成をイメージだけで完成させたのですか？」

「あ、はい……詠唱は『イメージの固定』の為にあるものと思いましたので……それが無い場合に形成がどの程度イメージで操れるかをテストしてみたかったんですけど……中々に難しいですね。やっぱり呪文の暗記も必須ですか……此処にある魔導書、全て目を通しても構いませんか？」

「は、はい！」

「……少し骨が折れそうですけど……よし！行くぞ！」

アキカ様は気合い十分といった様子で、書庫の本に片っ端から手を掛け始めました。いきなり魔法を発動させた事といい……なんという能力の高さ！

やはりアキカ様は伝承の天使様に違いない……！

そう確信し、希望の光に胸を膨らませる私。

その時私は、本を読むことを放棄し、魔導書をめくり続けるアキカ様をじっと見つめる兄の天使様には気を向けることさえしませんでした。

なぜ、天使様は二人顕れたのか……私も、マゴも、王達も……全くその事に気が回りませんでした。

希望の光は、アキカ様一人だけのもので、十分過ぎる程に眩しかったのです。

ＥＰ１：　球界テッラ（後書き）

異世界、テッラでの事情。そして、薄葉と明華の立ち位置の説明回。

明華はどんどん魔導書で魔法の知識を蓄えていくのに対し、薄葉は……やさぐれちゃってますｗ　明華は前向きで状況を飲み込むのが早く、しかも乗り気というポジティブさ……『普通』じゃないからここまで早く順応するということでｗ

まだまだ導入部……早く本筋に入らなければ。

ＥＰ２：　普通の天使様（前書き）

視点：村一番の魔導士：マゴ

まだまだ導入部……

EP2：普通の天使様

驚くべきことに天使、アキカ様は次から次へと魔導書を読み進めていきました。入門、基礎、標準レベル……一般的魔導士が一年を掛けて習得する内容量の魔導書を、一時間足らずで読み上げてしまった時には流石に本当に内容を理解しているのかを疑いました。

「あの……ここに書いてある大気中のアルマの還元技術の記述がそれらしい本からも見つからないんですけど、もしかして此処にある本とは分野が違ったりしますか？」

「え？あ、ああはい……それは魔導というよりは器術という分野の技術ですので……此処は魔導関連の書物しか……あ、必要なら村の書物庫には簡単な物ならあったので持ってきます！」

「あ、大丈夫ですよ！取り敢えず此処にあるものだけ目を通しちゃいますんで。後で自分で行きます！」

……凄い分かってそうな雰囲気。やはり流石は天使様といった所でしょうか。侮っていたのが申し訳なくなりました。

その後、すごい勢いで魔導書を読み進めていくアキカ様。私に尋ねてくる話もだんだんとこの世界に馴染んだ人間のような、そして専門の道に進む人間のような話になってきました。次第に私も返答に困り始めた頃です。

「……ふぅ。終わりが見えないなぁ。魔導……奥が深い……」

本を綴じて語るアキカ様は既に書庫の魔導書の七割近くを読み終えていらっしゃいました。一日も掛からずに……まさに圧巻。

しかし、何故でしょう？

私達の村を、国を、命を救っていただくのだから、此処までの素晴らしい能力を見せつけられることは喜ばしい事なのに……どうして、私は何処か悔しい思いをしているのでしょう？

私は幼少時からずっと村の魔導士に付いて魔導を学んできました。最初は全く魔導書の記述も理解できず、叱られながら、挫けながら、必死で勉強し続けてきました。

そして十二歳にしてようやく一人前の魔導士と認められ、それからもずっと鍛錬を怠ることなく魔導を探求し続けてきました。

そして私は村一番の魔導士と呼ばれるまでに自らの能力を磨きあげたのです。

そう呼ばれることを私は勿論誇りに思ってましたし、自信も持っていました。

しかし、アキカ様はいとも簡単に、私が十年近くを掛けて読んできた魔導書以上の量を読み終えています。しかも、私が未だに理解も解読も出来ない、難解な記述もどうやら理解している様子。

……私の努力は、なんだったんでしょう？

馬鹿な劣等感に唇を噛む。そして馬鹿な自分を戒める。何を考えているのだろう私は。そうして自分が余計に嫌になる。そしてそれを打ち消すように自分を戒め……

そんなきりのない感情のループ。それに気づいた途端にふらりと意識が遠のく。あれ？急にめまいが……

そのまま書庫の床に倒れてしまうかと思った。

しかし、私の体はふわりと受け止められた。

「おい、大丈夫か？顔色悪いぞ」

「あ……天使様」

それはアキカ様のお兄様でした。倒れそうになった私をお兄様は優しく受け止めてくださったのです。

「も、申し訳ありません！」

「いや、いいって。それに天使様って……薄葉（ウスハ）でいいよ、別に」

「は、はい……有難うございます、ウスハ様」

お兄様、ウスハ様は、アキカ様に見せていた強い態度からは想像もつかない穏やかで優しい声でお言葉を掛けてくださいました。そして、先程までの険しい表情からは打って変わって、心配そうな表情を私に向けてくださったのです。

「やっぱり顔色悪いって。大丈夫なのか？」

「は、はい大丈夫です……ちょっと儀式の疲れが出ただけですので……支障ありません」

「儀式？俺達を呼び出した儀式か？……へぇ。見た目俺達と近いくらいなのに。それって結構凄いんじゃないか？伝承に残るような儀式なんだろ？」

凄い、そのウスハ様の言葉に少し嬉しい、と思ってしまう私。私はこんなにも自己顕示欲の強い人間だったのでしょうか？

「そんな……アキカ様に比べたら私なんて……」

「明華と比べるなって。あいつは出来すぎるだけだよ。……え～っと、名前は？」

「あ、ま、マゴと申します」

「マゴか。……あいつと比べてたら絶対負けるって。俺なんか負けっぱなしだからな。ほら、すっごい地味だろ？」

自嘲の笑みを浮かべながら、顔を正面から向けるウスハ様。その自虐的な言葉は、少し冗談を言うようで……もしかしたら、ウスハ様はアキカ様に対して、私が劣等感を抱いていることをお見抜きになったのかもしれません。まるでその言葉は私を励ましてくれているようでした。

「……ぷっ！」

「あ、今笑ったな？」

「あ、申し訳ございません！」

「いやいいって。もっと砕けた感じで。俺、あんまり丁寧に扱われるの得意じゃないんだわ。ほら、俺、地味だろ？いかにも普通って感じだろ？ほれほれ」

「うぷっ……！……申し訳ないですが、確かに普通の方だな～とは思ってました……」

「……だよな～」

何故でしょう。何故かウスハ様はとても親しみやすい印象を受けてしまって……無礼だとは分かっていました。しかし、何故か普通に接することができるような印象を受け、自然とまるで友達のような言葉を出してしまったのです。

「俺はさ、あいつといっつも比べられてる。だから比べられるのが嫌なことくらい分かってんだよ。だから、比べるな。マゴはマゴだろ？凄い儀式を任されるような凄い魔導士なんだろ？」

……それはご自身の立場から来る、同情？共有？

私はその優しくも有難いお言葉に、僅かに熱くなる頬を押さえながら頭を下げました。

「……有難うございます、ウスハ様」

「ウスハでいいっての。様とか嫌なんだよな」

……何故でしょう？とても身近な感じしかしない、とても普通な天使様。良くも悪くも普通……今の私達の状況ではそれは悪いことなのでしょう。

しかし、私は既に本を読むことを放棄した、がっかりすべき天使のウスハ様に、奇妙な感情を抱き始めていました。

「……は、はい……ウスハ……」

「いよっし。それで良し」

もしかしたら、ウスハ様……いえ、ウスハは普通に優しい方なのかもしれません。

―――

こっくりこっくりうとうとうとうと、眠りに落ちていた私。どうやら腰を降ろしたことが災いしたようで、すっかり疲れが出てしまった様子。しまった、天使様方の案内役を任されていたのになんたる失態。

「も、申し訳御座いま……」

言いかけて、私は気付きました。

アキカ様とウスハ、二人がなにやら言い合うような声を。

「お前、伝承の通りにもうある程度魔導とかいうものを理解したんだろ？だったら、呼び出された天使はやっぱりお前なんだ！俺はあの時手を繋いでたから巻き込まれて……」

「いえ！違います！きっと天使として呼び出されたのは兄様です！」

「俺はノーマルだ！そんな天使だとか救世主だとか、そんな取り柄は一切ない！」

「いいえ！兄様は凄いんです！私なんかよりずっと！きっとテラスなんて人達、バッタバッタと薙ぎ倒して……」

「お前の中の俺はどんな超人だよ！とにかく俺は付き合えない！先に帰らせてもらう！」

「そんな……絶対兄様が天使なのに！それにどうやって帰るって言うんです！」

「それは……何かあんだろ帰る方法！」

気まずい……それも有りましたが、何よりウスハの本当の気持ちを聞いて、胸が痛くなりました。

確かにウスハからはアキカ様と違って特別な何かを感じませんでした。それがまさかアキカ様の巻き添えだったからだなんて……

私達は勝手な都合でアキカ様を呼び出した。アキカ様はとても優しいお方だから、その期待に応えてくださろうとしている。

しかし、ウスハは完全に巻き込まれただけ。私達の都合で……

立ち上がろうとした時、肩からパサリと何かが落ちる。

「……ウスハの……上着？」

ウスハとアキカ様が身に付けていた変わった上着。それが私の肩には掛けられていました。その優しさを感じ、余計に胸が痛くなる。

本当は私の事が憎いはず。なのにウスハは私を責めずに気遣いさえ見せてくれる。そして、その遣りどころのない感情を身内のアキカ様にぶつけてしまう。

普通だから。間違っていると分かっていても、何かに当たってしまうんだ。

口論は続き、アキカ様の声が今にも泣き出しそうなものに変わる。

いけない。私が原因なのに。

私は意を決し、天使様の喧嘩に割って入りました。

「ウスハ！止めてください！私が全部悪いんです！アキカ様を呼び

出した私が！」
「うお！びっくりした！マゴ、何だ急に！」
「喧嘩はダメです！責めるなら私を責めてください！勝手な都合で間違ってウスハを呼び出したのは……私なんですから！」
　すると、意外な事に反論してきたのはアキカ様だった。
「マゴさん、それは違います！本当は兄様の方が呼び出される筈だったんです！それにオマケに私が付いてきただけです！」
「え？で、でも……」
「兄様は凄く強いんですよ！それはもう、テラスだかなんだか知りませんけど！鬼やら竜やら！ファンタジーのモンスターなんて兄様の手に掛かれば赤子の手を捻るような……」
「お前、もうやめろ！お前の中の俺は何者だよ！」
　アキカ様は潤んだ目で声を上げます。
「だって兄様には『暗中無心拳』が！」
「それやめろ！恥ずかしいだろうが！ある意味それ黒歴史だぞ！」
「あ、あんちゅうむしんけん？？？」
「ほら見ろ！マゴの頭の上にハテナマークが浮かんでるだろうが！あんなの習いたくて習った訳じゃ……それにあれは栗皆さんのただのお遊びオリジナル拳法であってだな……！」
「兄様は凄いんです！」
「聞き分けないなお前！」
　何やらわかりませんが、アキカ様が此処までウスハにこだわる理由は何なんでしょう？あんちゅうむしんけんというものが関係しているのでしょうか？
　私が首を傾げ考えていると、不意に天井から凄まじい騒音が響き

わたりました。

ズズン！

「わわ！ま、まさか……敵襲ですか！？」
「大変！ほら兄様！行きましょう！テラスかも知れませんよ！」
「俺は無理だ！俺はノーマルだ！」
「いいですからほら！」

アキカ様はウスハを引っ張って、書庫から飛び出して行きます。
私も慌ててそのあとを置いました。

―――

「テラスだ！遂に結界を破って入ってきたぞ！」
「で、でかい！ど、どうするんだあんな化け物！」

外は大混乱。私が張り巡らせた結界が破られたというのです。そんな……数日を費やして、さらには毎日のように強化と点検を繰り返してきた結界が、そう簡単に破られるなんて……！

「あれが……テラス……！」

「いやいやいやいや！無理無理無理無理！あんなの無理だから！絶対無理だから！」

アキカ様も流石に驚かれたようで、ウスハに至っては必死。それも仕方ないこと。あれほどの規模のテラスは私でも初めて見ました。

空を覆い尽くすような長い体に黒い鱗。巨大な口を開き、恐ろしい牙を並べた規格外の大きさのテラスは……伝承に残る、太古のテッラで暴れていたという化け物、『ドラゴン』に非常に類似しているように見えました。

地の底から響くような、天を震わせるような巨大テラスの声が響きわたります。

「テッラの弱き者達よ……今日で貴様らも最期だ。この大地、我々が戴くぞ……我が名はトルメンタ。天空の支配者なり！」

恐ろしいテラス、トルメンタは私達を見下すように、穴のあいた結界から村を見下ろします。私はじわりと湧き出す汗と震える手を抑えるように、ロッドを手に取り前に出ました。

「アキカ様！ウスハ！村人達とお逃げください！此処は私が食い止

めます！」

まだまだ成長途上のアキカ様をここで失うわけにはいかない……！村が落とされても、人がいれば、アキカ様がいれば、必ず反撃のチャンスは来る……！

私は自らの命を捨てる覚悟で、トルメンタを見上げました。

しかし、私の覚悟は意味のないものでした。

「大丈夫ですマゴさん」

次の瞬間、私が感じたのは膨大な量のアルマの奔流。その桁違いのアルマの流れの中心には、声を発したアキカ様が立っていたのです。

「もう、戦える程度の魔導の知識は入ってますから」

それと同時にアキカ様の口が動き出します。それは呪文の詠唱。アルマを思う形に作り上げる、魔法形成の儀式。

そして、それは私がまだ知らぬ……解読できなかった、最上位クラスの魔導書に書かれていた呪文だったようです。

長く複雑な詠唱を、まるで鼻歌でも歌うかのように口ずさみ、アキカ様はアルマを恐ろしい密度で展開なさいました。

「……『ケラヴノス』」

暗雲立ちこめ、膨大なアルマが暗雲の渦の中心に集中していきます。その中には今にも溢れださんとする高密度の力が集まっていました。

その力は、トルメンタの巨大な体を狙いすました巨大な槍のように、鋭い雷（イカズチ）を撃ち下ろしたのです！

自然支配系統……！いきなりそんな超巨大魔法を!?

カッ！

「な、なんだこのアルマは……あああああああああ！！」

トルメンタの叫びが木霊しました。

ゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロッ！！！

雷の槍は、激しい轟音と閃光と共に、トルメンタに直撃しました。

「す、すごい……すごすぎる……」

目も晦ますその強大な一撃は、一瞬でトルメンタの体を黒い消し炭に変えてしまったのです！

「……大きかったんで念のためと思って、ちょっと大きい魔法を選んだけど……失敗失敗。あそこまでの規模は必要なかったかな……もう2ランク位落としたほうがアルマの節約に……」

村にいるほぼ全員が、驚愕しました。

たった一人、変わった様子も見せない平然としたアキカ様は、冷静に魔法の規模やアルマ消費などを計算しておられました。

舞い降りた天使。改めて確認できた希望の光に、村の者たちは、

王は、戦士達は、盛大に湧き上がりました。

ＥＰ２：　普通の天使様（後書き）

明華、あっさりテラス、トルメンタを撃破！
明華はデタラメな魔法を使えるようになりましたｗ
さらっと流していますが、アルマなどなど用語の説明はストーリー中でのちのち出てきます。『アルマ』は要は魔力的なものと捉えてください。
マゴは見た目は高校生位の女の子です。
のちのち、登場人物紹介や用語説明を追加するかも？用語とか結構ややこしくなるかもしれませんのでｗ

薄葉は普通に悪いところも良いところもある男の子。普通にドラゴンなんか出てきたらビビりますｗ

ＥＰ３：　テラス強襲（前書き）

視点：アギオ騎士団第二団長、オルコス

そろそろ導入部、脱出へ……？

EP3：　テラス強襲

天使。伝承に伝わる伝説の存在。

最強の騎士、エクエス様を失った我々が、最後の頼みの綱として召喚したその伝説は、初め見たときは酷く頼りない存在に見えた。

浮き世離れした美しさを持つ一人の天使は、確かに神々しい輝きを放ってはいたものの、弱々しく見える女。とてもテラスに太刀打ちできる存在には見えなかった。

もう一人はさらに不可解。一言で言うと……ぱっとしない。戦えるようには見えないし、もう一人の天使に比べて容姿もいまいち。いまいち顔も印象に残っていない。特徴がないのだ。

この二人が天使？何かの間違いではないのか？

そう思ったのは私だけではないようで、騎士団の騎士達も複雑な表情を浮かべていたのを覚えている。

まぁ、呑気な王は美しい天使、アキカに見惚れて満足気な表情をしていたが。

この儀式は、そもそもリスクが高いものだった。それこそ考えもなしに縋れば、痛い目を見るほどに。

長い時間と労力を費やすこの儀式には、マギアの魔導士を最低十人は必要とするらしい。しかも、その中心となる者には、十分なアルマ量と魔導技術を持つという村一番の魔導士、マゴが絶対に必要だった。

マゴに長時間の儀式実行させる……それは村の守りを相当に弱める事に繋がる。十人の魔導士も、相当な戦力ダウンに繋がる。

騎士団は、少なくとも私は、彼女達マギアの魔導士達の力を大きく評価していたし、アナトリの僅かな生き残り集まるこの村の防衛に、彼女達が必要不可欠な存在になっていることを自覚していた。情けないが、彼女達の力なくして防衛は成り立たないとさえ思っていたのだ。

だからこそ、村長は踏み出せずにいたのだろう。それが酷く危険な諸刃の剣であることを理解して。

私は勿論、異を唱えた。危険すぎると。ここは隣国ノトスに助けを求め、避難受け入れを要求すべきだと私は考えていた。ノトスは幸い、なにやら強力な武力を保持しているようで、テラスの侵攻を見事に食い止めている国の一つである。その助けを得られれば、国の人間達の、王の安全は守られるはずだった。

しかし、それを拒み、儀式の実行を促したのは、その判断を下すべき王だった。

「ノトスの助けなどいらぬ。それに防衛だと?それはお前らの仕事

だろう？それとも何か？こんな田舎の魔導士の力を借りないとならないほどに、お前らは軟弱か？」

下らない自尊心。マギアという小さな村に対する侮り。そんな下らない感情で、王は伝承などに縋ることを決めたのである。

そしてその自尊心は、騎士団の中にも根付いていたようで、第三団長ディオミスは私を見下すように言った。

「オルコス。君も情けなくなったものだね。君にはプライドというものがないのかい？こんな田舎の魔導士など、居なくとも守りに問題はないだろうに」

それに同調するようなディオミスの配下達の視線。そして背後から、私の部下の中にも同じ視線を送る者。

なんということだ。この者達は、冷静に力を、状況を見ることもできないのか？

激しい憤り。それを抱いていたのはマギアの人間も同じだったようだ。その燃え上がるような感情を抑え込み、騎士団を睨む魔導士達。それを宥めるように前に立ち、村一番の魔導士は意見した。

「確かに騎士団の皆様方の守りがあれば安心ですが……しかし、この村に張り巡らせた結界の管理、補修にはこの村の魔導士の力が不可欠です。なので、此処は私が儀式の役割の半分を負担します。なので、手の空いた魔導士に防衛の任を与えて下さらないでしょうか？」

まだまだ若い娘でしかない筈の、村一番の魔導士、マゴの申し出

に王は頷いた。

マゴは騎士団の力を認めた上で、魔導士達の必要性を主張し、更には私の村の防衛に対する不安を少しでも埋めようと、儀式の負担を更に強め、少しでも多くの魔導士を防衛に駆り出せるように計らったのだ。

なんということだ。下らない自尊心、私の力不足、そんなもののために、こんな娘に負担を押し付ける事になるなんて……

私は儀式の実行が決まった後、密かにマゴと接触し、頭を下げた。

「すまなかった。マギアの魔導士達に対する数々の無礼。そしてお前一人に重い役割を押し付ける事になってしまって……全て、私の力不足のせいだ」

「オルコス様、やめてください。オルコス様のお気持ち、皆喜んでいましたよ。私達を必要としてくださっているお気持ち、光栄に思っております」

マゴは優しく微笑み、儀式の準備に追われる中、私を家に招き入れてくれた。

「オルコス様のご心配は尤もです。確かに確証もない儀式、不安は残ります」

「……ならば何故、村長はそんなものを」

「我々魔導士は先人の言葉を信じるしかないのです。そうして成り立ってきたのが、魔導。それを放棄することは、魔導士の歴史と意

志を放棄することと同義。だから私達は信じるしかないのです」
「……そんなにも、先人の言葉が、誇りが大事なものなのだろうか？」

自分よりもずっと年下な娘に何を問うているのだろうか、と言ってから恥ずかしくなる私に、マゴは淀みなく答えた。

「人それぞれ、ですよ。私も大事に思っていますが、それでもやっぱり一番優先すべきは命を守ることだと思っています」

その言葉を聞いて、私はマゴは少し異質な魔導士なのではと思った。恐らくほかの魔導士ならば、先人の言葉は絶対と語るのだろう。儀式に欠片も疑いを持っていなかった魔導士達を思い出し、私ははっとする。

「もしも私が失敗したら、その時はきっとオルコス様のご意見の正しさ、きっと皆さん理解して下さるはずです。本当なら、それが最善なんですよね」

この子は先人の言葉を大切にしているが、現実を見ている。私は現実を重んじ、誇りという騎士に必要不可欠なものを軽視している。似ているようで似ていない。大きな器のマゴと、分かったふりをしている自分。幼稚な自分に腹が立つ。

エクエス様は、どう考えていたのだろうか？

「……失敗する？有り得ない。お前は私の知る中で、最も優秀な魔導士なのだから」
「え？オルコス様？」
「……成功すると信じている。……くれぐれも無理はするな」

「……はい。ありがとうございます」

マゴは頭を下げて、とても嬉しそうに笑った。

悲観的になり、全てに懐疑を抱いていた私は、この大きな器を持った娘を信じてみることにした。そこから、小さな自分を変えようと決意して……

天を覆い尽くす程の巨大テラス、トルメンタ。

それをたった一撃の雷の槍で葬り去った天使アキカ。そのとき、私は天使の伝承が本当であったことを理解し、その天使を疑った事を後悔した。

マゴは成功したのだ。伝承の天使、その召喚に。

私はマゴに歩み寄る。幸いというべきか、王や騎士団の者達は、全員アキカに視線を向けていた。

「マゴ。やったな」

「あ、オルコス様……いえ、私は何も……全てアキカ様が」

「それを喚び出したのはお前だ。自信を持て。……やはり私は間違っていたようだ。伝承は本当だった」

「い、いえオルコス様……そ、そんな……あの」

あたふたとするマゴの表情は、初めて歳相応のものに見えた。

このあとはアキカにもその力を疑っていた事を謝罪したいところだったが、既にかなり周りに絡まれているので話しかける余裕はない。

結界を破られた時はひやりとしたが、取り敢えずはこれで一安心だろう。

そう思って、気を緩めかけたその時だった。

天より降りてくる巨大なアルマを感じ、私は空を見上げた。

「皆さん！伏せてください！」

響いたのはアキカの声。その叫び声から数秒遅れて、アキカは新たな魔法を展開していた。

「『クロイゼルング』！」

数秒、詠唱時間にしては短い時間。それにより空を覆い尽くすように広がったのは弱々しい水流の盾。

その盾は出現したかと思うと、一瞬で赤く染まり始める。

ジュッ！

蒸発。水の盾を楽々と消し去って、その小さな炎球は地面を抉るようにドン！と音を立てて落ちてきた。

「な、何事だ！？」

地面に転がって、王が悲鳴を上げる。

騎士達は王の前に立ち、その炎の墜落地点からむくりと立ち上がる影に剣を向けた。

私は、自分の犯していた過ちに今更ながら気づいた。

結界を切り裂いた一撃。それを私は見ていた筈なのに、気付けなかったのだ。

結界を破壊したのはトルメンタではない。

結界を切り裂いた炎、それと同じアルマを感じさせるそのテラスは、王とそれを囲む騎士にも目をくれず、ゆっくりとアキカの方を見つめていた。

赤い髪に金色の瞳、白銀の鎧を身に付けた剣士風の……そう、そのテラスは人型だった。

人型テラス……それはテラス達の中でも、支配者階級にある者……つまり最上級のテラス。そのアルマ量は、先程の大型テラス、トルメンタとは比較にならないほどに、その小さな器には似合わぬほどに膨大。

「トルメンタを一撃で消し炭にするとは……やるじゃないか。お陰で空に投げ出されて、この汚い地面に足を付くことになってしまった」

トルメンタの背中にこのテラスは乗っていたというのか？そして、あの一撃を察知し、それを回避し地面に降りてきた……そういうことか。

人型テラスは、腰の剣を抜き放ち、それをアキカに向ける。

「俺の名はフロガ。四将が一角『赤熱のフロガ』。……俺の名を聞けたことを光栄に思え」

フロガ。そう名乗った赤い髪のテラスは、凄まじいまでのアルマを剣に集めてにやりと笑った。

その剣を向けられたアキカはというと……

「う……！」

顔をしかめて膝を付いている。何が起こっている？

それを理解できずに居た私に、状況を理解させたのは隣にいたマゴ。そしてまっさきに動き出したのはマゴだった。

杖を片手に、マゴはフロガとアキカの間に立つ。

「……アキカ様！大丈夫ですか！？」

「あ……マゴさん、ご免なさい……！ちょっと……ペース配分失敗しちゃったみたいで……大きいテラスだったから、ちょっと使う力を大きくしすぎちゃったみたいです……」

「……仕方ないです！それは私のミスです！咄嗟でアキカ様にヴィ

ヴロスを渡し損ねた……私の……！」

魔具（ヴィヴロス）。

それを聞いた途端に理解した。

アキカの今置かれている状況を。そしてアキカの能力の凄まじさを。

本来、魔法を扱う場合には杖などといった『魔具（ヴィヴロス）』を用いることが普通である。

それは呪文を記憶し魔導士の詠唱時間を短縮、簡略化したり、消費アルマを軽減する仕組みが組み込まれており、魔導士の魔法使用を大きくサポートしている。

それがなければ、魔法の発動は恐ろしく困難になり、アルマ消費もその魔法が要するそのままの負担を強いられることになる。

つまり、アキカはあれ程の大規模魔法の負担を直接受けているのだ。

魔具（ヴィヴロス）のサポートもなしに、あの魔法を成功させたことはまさに圧巻。

しかし、恐らく、アキカは持ちうるアルマの全てを吐き出してしまった状態なのだ。つまり、魔法がもう使えない状態だということ。雷の槍に加えて、水流の盾まで展開したのはそれだけでも奇跡に近い。しかし天使と言えども、限界はあったのだ。

「やはりな……あれ程の規模の魔法を展開できる者が居るのは信じがたいが……流石にあれが限界だったようだな」

フロガもとっくに気付いている。いや、気付いているからこそ、今、こうして攻めてきているのだ。

「……面白い、と言いたいところだが。お前は驚異だ。悪いが……此処で死んでもらう」

「させない……！」

マゴが呪文を詠唱する。そして、アルマの奔流を巻き起こし、強力な風を巻き起こす！

「『ブフェーラ』！」

強力な風の鎌。マゴの放った一撃は、並のテラス数十匹を恐らく一撃で薙ぎ倒せる程の魔法だったろう。

しかし、フロガは炎を帯びた剣を軽くひと振り。

たったそれだけ。

ゴウッ！

風の鎌は、一瞬で散り、ただの風へと戻される。

「なんだ今のそよ風は？」

「あ……そんな……！」

此処まで圧倒的なのか……！今までに見てきたテラスとは、桁が違いすぎる！

「……邪魔立てするならお前も殺す。退け」

「させない……！オルコス様！アキカ様を連れてお逃げください！」

「な……！」

杖を構え、その体を震わせるマゴ。必死で震える声を振り絞る。

「敵がアキカ様を恐れているのは事実！此処は一旦逃げてください！そうすれば……テラスへの反撃のチャンスが生まれる……！」

「しかしお前は……！」

「この命に替えても……希望の光は守り抜きます……！」

私よりもずっと若い娘が、震えながら、その命を捧げようとしている。

それを放って置けるほど、私は冷酷にはなれなかった。

剣を構えて私はマゴの前に躍り出る。そして、燃え盛る剣を片手に凄まじい威圧感を放つ化け物の前に立った。

「オルコス様！？」

「お前が連れて行け！魔法を乱用出来るほど、儀式の疲れは抜けていないのだろう！？」

「し、しかし……！」

「私の方が勝率が高いと言っている！……此処は命を投げ出す場所ではないだろう！」

私の言葉にマゴはたじろいだ。

「私を信じろ……全員、生きて此処を切り抜ける！」

……私は嘘を吐いた。こんな化け物に、私が勝てるはずがない。

「……だったら、私も戦えば、もっと勝率は上がります」

その嘘は見抜かれたのか、それとも本心から来る言葉か。

マゴは私の後ろで杖を構えた。

「……馬鹿な……やめろ！」

「勝つ……そうですよね？……それとも私の力は信用なりませんか？」

……マゴは私の背中にそっと手を添えた。

「……信じてください」

「……分かった」

王とそれを守る騎士達が、アキカに気を取られているフロガの目を盗んで逃げていく。村人たちも避難をしていて、取り残されたのは、アキカとその兄、そしてそれを守らんとする私とマゴのみ。

……なんと情けない。騎士の誇りとやらは何処へ行ったのやら。

私は皮肉たっぷりの笑みを浮かべて、剣を構える。

「お前も邪魔か……引く気はないのだな」

「騎士は護る者。逃げてどうする」

もう騎士団の騎士達には届かない言葉を、言い聞かせるように呟く。

「駄目！逃げてください二人共！私なら大丈夫……」

「大丈夫なものか！」

アキカの声を私は跳ね除ける。聞けるものか。女を残して逃げるなど……

「……ならばお前ら全員……皆殺しだ」

体中を刺すような凄まじい殺気！私は自らの体が恐怖で震え上がるのを感じる。後ろに立つマゴも同様だったようで、震える息遣いが聞こえてきた。

「う……うおおおおおおおおおおおおお！」

私は恐怖をかき消すように駆け出す！

アルマを剣に集める！マゴはそれをサポートするように、ゴウ！と風を放ち、私の剣に纏わりつかせる！

私の剣のアルマとマゴのアルマが混じり合い、剣は更に強大な暴風を帯びる！

「「『アスファ・リーフ』！！」」

暴風の剣、村の防衛の時、たった一度だけ繰り出した私とマゴの協力魔法剣。その一撃で、燃え盛る炎の如きフロガを、仕留めんと私はその剣を勢い良く振り抜いた！

ギィンッ！！

「……大した力だ。それは認めよう。……だが、温いッ！」

折れて地面に突き刺さる剣先。フロガの灼熱剣は、私とマゴの剣を、楽々とへし折った。

「……纏めて灰塵と化せ……！」

そして、カウンター。フロガはどうやら私とマゴ、アキカとその兄を、纏めてその灼熱剣で焼き尽くすつもりらしい。
フロガの呪文詠唱と共に、剣の炎が凄まじい規模にまでふくれあがる！

「『エクリクスィ』！！」

眩い業火。それを前にして、私は死を覚悟した。

「大丈夫。そう……言いましたよね？」

その時、アキカの声が私の耳に飛び込む。

それだけだった。

アキカの声以外……呪文の詠唱も、私の肉が焼かれる音も、何も聞こえなかった。

遅れてようやく響いたのは、フロガの掠れた声。

「……あ……ありえ……ない……この……俺が……？」

私の目に飛び込んできたもの。

それは、地面にごとりと落ちる、フロガの首。

フロガはしばらく、首だけで言葉を紡ぎ……

「……あ……が……！」

体が遅れて倒れるのと同時に、絶命した。

信じられなかった。

アキカは、魔法も使わずに、あれ程のテラスを討ち倒してしまったのだ。

ＥＰ３：　テラス強襲（後書き）

四将を名乗る強敵テラス、赤熱のフロガを早速撃破！？
アキカも初めてのことなので失敗しちゃったり……
しかし、フロガを倒した力とは？それは後々判明する筈……
……にしても瞬殺ばっかりですねｗ
次回から遂に、人間の反撃が始まる？テラスとの闘争が本格化！

そして徐々に謎が見えてくる……？こうご期待！……いや期待していただけるほど自信があるわけではありませんが……ｗ

……ところでオルコスさん視点だと殆ど居ないみたいな薄葉…
…今回一言も喋りませんでしたねｗ

ＥＰ４：　反撃の狼煙（前書き）

視点：村一番の魔導士、マゴ

此処から急展開に突入？

ＥＰ４：　反撃の狼煙

テラスの襲撃を切り抜けた村は、一転お祭り騒ぎでした。
村人達は危機を乗り越えた事、テラスを圧倒する天使様の降臨に湧き、王様や騎士団はテラスから遂に国を取り戻せる可能性を見出し、士気を高めておりました。

しかし、そんな中でそんな空気に飲み込まれもせず、アキカ様は既に先を見据えていたようです。

「確かに襲撃を乗り切りましたが……その場凌ぎでしかないですよね？」

そう。結界が破られたことは事実。決して私達の安全が確保されている訳ではないのです。また何時テラスの襲撃があるかわかりません。私達は早急に、その対策を練らねばならなかったのです。

アキカ様のお声を聞きたい、と群がる人々を避けるため、今、私と村長、オルコス様、アキカ様とウスハ、そしてアギオ騎士団第三団長ディオミス様は地下の魔道書庫にて対策についての話し合いを行なっておりました。

「その件ですが……結界の修復自体はそうは時間は掛かりませんが、また今後に破られる可能性も否めません。やはりその場凌ぎの対応しか……」
「やはり田舎の魔導士といったところか……役立たずな結界しか張れないとはね。アギオの魔導士さえ生き残っていれば、何も問題はなかったのだがね」
「ディオミス。いい加減その態度、見過ごすわけにはいかんぞ？貴

様とてこの村の魔導士の能力の高さは分かっているだろう？……それさえも分からないのなら、私が唯一お前を認めている事が間違いだった事になるな」

私のせいで険悪になるオルコス様とディオミス様。どうしよう、と悩んでいると、割って入るウスハ。

「何喧嘩してるんすか？話し合いしてんでしょうよ」

「……何？アキカは兎も角、なんの役にも立っていない天使様モドキが、この僕に意見すると？」

「やめろディオミス。非があったのは我々だ」

ディオミス様はプライドの高い方のようで、ウスハに対し威圧的な視線を送りました。しかし全く動じないウスハ。オルコス様もディオミス様を冷静に宥めていらっしゃいましたが、意外というか何というか、一番最初に冷静さを欠いて声を上げたのは、妹のアキカ様だったのです。

「役に立ってない……？貴方の目は節穴ですか！？」

アキカ様は激怒しました。

「私達を守ってくださったのは……あのフロガというテラスを倒したのは兄様でしょう！？最もあの襲撃においての功績を残したのは兄様です！」

……私も、オルコス様も、ディオミス様も……そして、ウスハも唖然としていました。

「な、何を言っているんだいアキカ？あのテラスを倒したのは君……」

「兄様ですっ！」

「いやいやいや！俺何もしてないから！何言ってんんだお前っ！？デカイ竜を黒焦げにしてドヤ顔してたのお前だろうが！あんな化け物相手に魔法も勉強してない俺が勝てるわけないだろ！」

ウスハが全力で否定しています。

オルコス様も口には出さないものの、怪訝な表情でウスハを見つめていました。その反応からしても、とてもウスハがあのフロガを倒したとは思えないのでしょう。

ディオミス様も、アキカ様の物凄い怒りように気が引けたのか、口を噤んでしまいました。

「……アキカ殿。少し落ち着いて……今は今後の対策を講ずるのが先決です。我々も幼稚な言い争いをした非があります。それは申し訳ありませんでした」

オルコス様の言葉に、アキカ様は少しだけ冷静さを取り戻すと、ふうと一息吐いて、きっとその目を見開きました。

「……いいでしょう。皆さん見ていないのだったら、はっきり見せて差し上げます。兄様の本当の力を。……対策については私に考えがあります」

「何勝手に人の本当の力を解放しようとしてんだ！？」

……まだムキになってらっしゃったようです。

―――

アキカ様の提案した作戦に、私も、オルコス様も、ディオミス様も、そしてウスハも驚きを隠せませんでした。

「アナトリ奪還!?それは本気で言っているのかい!?」

「本気も本気、本気と書いてマジですよ」

アキカ様はバン!と机を叩き、キリっとした表情でニヤリっと笑った。何やら勢いがオカシイです。

「フロガが名乗った『四将』。これは恐らく彼が幹部クラスのテラスであることを示しているのでしょう。事実、フロガは今まで見てきたテラスとは、一線を画す強さだった。てすよね?」

「あ、ああ……確かに今まで見てきたテラスとは桁違いに強いアルマを感じた」

「……ということは敵さんも本気で残ったアナトリの人間を潰しに来たんでしょう。いや、正確には捕虜として捕らえて、逆らえば殺す……でしょうか?まぁ、それは置いておいて……」

アキカ様がブツブツと呟きを交えつつ、机をコツコツと叩きます。

「そして今まで、テラスはこの村に張られた結界を破れなかった……ですよね、マゴさん？」
「は、はい……今までにあの結界を破れるテラスはいませんでした」
「……だったらフロガというテラスは何で早くに結界を破りに来なかったのでしょう？」
オルコス様がはっとした様子でアキカ様の前に立ちました。
「……そうか。フロガは幹部。恐らくはテラスのリーダーはそれを動かすのを迷っていた。巨大な戦力を自らの手元から離すのは危険」
「そう。恐らくはフロガを送り込むのを迷っていた。しかし、結界を破る事が出来ないと判断し、仕方なく、遂に彼をかり出した」
アキカ様は自信に満ちた顔で言葉を繋げます。
「ここから推測できる事。まずは一つとしてそれは『フロガを動かす事を迷う状況に敵のリーダーは置かれている』ということ。もしかしたらアナトリの人達の反撃を恐れていたのかもしれません。もしくは、敵対勢力が他にもいるか……それで身を守る戦力を削る事を恐れていた」
「……敵対勢力？」
「もしかしたらテラスも一枚岩ではない……とか、それか生き残った人間側の対抗勢力がいるか……これは少し判断材料が足りないのでまだ推測する事はできないでしょう」
オルコス様は『人間側の対抗勢力』という言葉に僅かに反応を示しました。私はその理由が何となくわかりました。
恐らくは討たれたとされている、最強の戦士、アギオ騎士団第一団長エクエス様を思い浮かべたのでしょう。

事実あの方のご遺体は見つかっておりません。もしかしたら、今も生きていてテラスと戦っているのでは、とオルコス様が希望を抱くのも当然でしょう。

しかし、アキカ様の切り替えに付いていくように、オルコス様は表情を作り替えました。

「……兎に角、『相手にフロガを動かす余裕がなかった』、ということは『それ以外に十分な戦力がなかった』とも推測出来ます。もしもフロガがどうでもいい戦力ならばもっと早くに攻めればいいだけですしね。恐らくはフロガは敵方の切り札。それを決着を着けるために切ってきたんでしょう」

「しかしそれは少し安直すぎやしないかい？確かにここにきて強い駒を使ってきたのには理由があるかもしれないが……」

「ですね。これはある意味賭けです」

あっさりとディオミス様の言葉を認めるアキカ様。『賭け』という言葉に全員が驚いていました。

「私の推測は全てプラス方向に考えてのものです。しかし、もしもこの推測が当たっていたとしたら……これはアナトリ国を奪還する、最大のチャンスとなります」

アナトリ奪還。確かにそれは理想。

「フロガが敵の切り札であったならば、その切り札を切ってきた時点で敵陣は大幅に戦力がダウンしている筈。敵にリーダーは居るでしょうが……恐らくは大した敵ではありません。腕に自信があるのなら、フロガをとっくに送り出している筈。少なくともフロガ以下だとは思っていいでしょう」

アキカ様の推測に、次第にオルコス様が険しい表情を作り始めました。ディオミス様は怪訝な表情で話を聞き、ウスハは……普通の顔をしていました。

「その手薄な守りを一気に叩く！反撃の隙を与えぬまま、一気にリーダーテラスを討ち取る！これでアナトリ奪還です！」

「そこの作戦は荒いな！」

ようやくウスハ様が発言しました。ただのツッコミでしたが。

「大丈夫ですよ。其処は……兄様がドカン！とやってくれますよね？」

「やらねーよ！？何滅茶苦茶言ってんの！？」

「大丈夫ですって！途中に下級のテラスが出てきても、その位はちょちょいと私が片付けますので！」

「いやいやいや！まあ、お前なら出来るかもな！っていうか、お前がもう国取り戻せよ！お前なら出来るって！雷ドッカーン！……で全滅させろよ！」

「それでは兄様の見せ場がないじゃないですか！」

「最初から無いよ！」

本当に兄妹仲睦まじい……羨ましい限りです。

「勿論、この作戦はポジティブな……私の勘が主となり成り立っています。兄を貶されて、私が感情的になっていることも認めましょう」

「急に何を……」

意外な言葉にオルコス様が戸惑いを見せたのを遮るように、アキカ様は自信満々と行った表情でとんでもない提案しました。

「この奪還作戦、私と兄様の二人にお任せいただけないでしょうか？」

唖然。沈黙。

「何を言っている!?そんなの不可能……許せる筈がないだろう！？」

「そうだぞ!?俺が何でお前と二人で行かなきゃならんのだ!?」

「私の力、確かにお見せしたと思いますが？あの時は初めてでしたので調整ミスをしましたが……次はもう大丈夫ですよ」

「しかし……！」

「こんな無茶苦茶な作戦に国民の命は捧げられないでしょう？だから此処は私達が……勿論、勝算あっての申し出ですよ？ちゃんと私と、そして兄様の実力を証明して見せます」

もう聞き分けが無い様子のアキカ様。流石に私も二人だけに向かわせるのはどうかと思いました。

しかし、意外な事にディオミス様は笑いながら賛成しました。

「いいんじゃないか？確かにアキカの力を見れば、十分に敵に対抗できると思うよ」

オルコス様がその投げ出しとも取れる発言に意を唱えようとしますが、ディオミス様はしかし、無責任に放り出すだけでなく、言葉を繋げます。

「……だが、敵の雑兵はどれ程いるか分からないんだ。だから、ア

キカが敵の本陣にたどり着くまで、その護衛を僕に任せて貰えないかな？雑兵相手に無駄なアルマは割けないだろう？ゴミ掃除は僕に任せるといい」

「な……！」

ディオミス様の申し出に、オルコス様も、アキカ様までも驚きを隠せない様子でした。

「いやぁ、面白い。面白いよ天使様。そうでなくては。僕もいい加減受けに飽き飽きしていた所だ。ここで少し、奴らに思い知らせるのもいいかもしれない。我らの誇りを折ろうということが……どれ程罪深きことなのか、刻み込んでやろうじゃないか！」

「いや、誇りとかは……」

「君は兄を誇る為に戦うのだろう？その意気や良し！誇りを守る為に戦えずして、何が騎士か！」

「……それもそうですね！」

「乗っかんな明華！勝手に人を持ち上げるなって言ってんだろ！」

……ディオミス様がこんなキャラだとは思っていませんでした。

「ディオミス！何を馬鹿な……！村の護りはどうする気だ！」

「オルコス。君は馬鹿か？アキカの話を聞いていたのかい？フロガのように結界を破れる敵は稀。それもフロガを討った今、新たな敵が訪れる可能性もほぼ無い。来るならとっくに来ているはずだ。だろう？」

「しかし……！」

「まだ文句があるのなら、僕の第三団は置いていこう。雑魚の掃除など、僕一人で十分だ。君は残る騎士団全員を従えて村を守ればいいじゃないか？信頼の置ける魔導士とやらと共にね」

ディオミス様の激しい言葉の雪崩に、オルコス様は口を一瞬結びました。そして、ふうと息を吐き、諦めたように首を降りました。

「……ディオミス。お前の実力は私も認めている。そしてアキカ殿。貴女の実力も、確かに敵を討つのに十分すぎるでしょう」

ウスハが一瞬残念そうな顔をしましたが、すぐさまうんうんと頷きました。そういえばオルコス様はさっきから結構ウスハの存在を忘れている節がありますね。ちょっとそれはかわいそうだと思いました。

「……これ以上、我々には打開策がないのは確か。この奪還作戦、信じてみてもいいかもしれない」

「じゃ、じゃあ……この作戦を？」

「……ディオミス。よろしく頼む。アキカ殿を、敵の大将の元まで導いてくれ。村の防衛は私に任せろ」

「当然。僕を舐めて貰っては困る。一騎当千の騎士の相手は困るけれど、千の騎士を掃討するのは僕も得意だと知っているだろう？」

ディオミス様は、プライドの高い方だとは思っていました。しかし、自身の力は把握しているようで、その言葉からもディオミス様が、請け負った仕事に自信を持っていらっしゃること、苦手とすることがあるということも理解できました。

「敵の本陣はアギオ中心にあるアナトリ城。そこまでの案内はディオミスがする。十分な準備を怠るな。アキカ殿はまだ十分にアルマも回復していまい」

「はい！少しだけ休んですぐにでも！フロガを失った事を敵が理解し、警戒する前に行けるのがベストですね！……そうだ、休んでいる間に……マゴさん！魔具（ヴィヴロス）の事、教えてもらえますか？」

「あ、はい！仕立て屋は村にも居ますので……出来る限り上質な素材のものを用意させていただきます！」

こうして、テラス襲撃の夜は明けました。

十分な作戦、そして十分な準備。

アナトリ奪還に向けて、作戦は着々と動き始めました。

伝承の天使様の、新たなる伝説が此処から幕を開けようとしています。

「オルコス様……どうして、あんな危険な仕事を認めたのですか？」

「……信じてみようと思ったのだ。少しくらいは、な」

オルコス様のお言葉に、私も頷きました。

きっと、絶対に大丈夫。アキカ様なら、きっとやって下さる。

私は村を全力で守りましょう……オルコス様と共に。

其々の想いを胸に、作戦実行の日は意外なまでに直ぐに訪れました。

そして、私達は驚愕させられることになるのです。

……うっかり忘れかけていた、普通の天使様、ウスハによって。

ＥＰ４：　反撃の狼煙（後書き）

遂にテラスへの反撃が始まる！
プライド高き騎士、ディオミスと共に、アキカと（ついでにウスハ）が戦場に赴く！？
アナトり奪還なるか！？
そして、アキカが語るウスハの秘密とは！？

次回、「だって兄様ですもの」に続く！

……そしてもうすぐ第一章完結！

アキカは兄の事となると盲目になる暴走タイプですｗ

ＥＰ５：　だって兄様ですもの（前書き）

視点：アギオ騎士団第三団長、ディオミス

アナトリ奪還の作戦が開始！

ＥＰ５：　だって兄様ですもの

天使アキカ。

僕は最初に伝承の儀式によって天使を呼び出すと聞いたときは正直当てになるものかと思っていた。そして天使とは大層な呼び名だが、本当にそれはそれほどのものなのか？そんな疑問を振り払えずに、僕はその儀式を眺めていた。

王は相当な期待を寄せていたようだ。だからそれに僕は従ったまで。別に成功しようがしまいが構わない。僕達はどうせ、此処で朽ち果てるのだから。そんな投げやりな気持ちで僕は全てを諦めていた。

僕の望みはせめて戦場で朽ちる事。それが騎士の誇りであり、僕の美学。

……この意志を、せめて貫き通せればなあ……格好がついただろうに。

しかし、僕はアキカを目の前にして……美しい、そう思ってしまった。彼女が本当に天の使いなのだと、そう信じてしまった。その力を目の当たりにするまでもなく。

なんて……悔しく情けない事か……僕の意志は簡単に揺らいでしまったのだ。

そしてその力を目の当たりにして、僕は下らなくも眩い幻想に期待を抱いてしまった。

アナトリ奪還。

圧倒的な力を持つ、美しき天使。その降臨に僕は可能性を見出した。

そもそも僕は腕には自信はある。

しかし、誰にも負けない……そう言い切るほどの自信はない。

僕が得意とするのは集団戦。ゴミクズのような雑兵を一掃する、低威力広範囲の掃討魔法が持ち味だと自負している。

だから僕は小技では揺るぎはしない……強力な兵を相手にできる自信はない。それは例えばオルコス。そして、エクエス。……更にはエクエスを圧倒した『あのテラス』。

そう。僕は強い。しかしそれは弱者に対してのみ。だが、僕は自分の力を恥じたことなどない。何故ならこの世は弱者と強者の二通りで出来ている。弱者を捩じ伏せる僕は、恥じることなき強者。

……とまぁ、自慢話はやめておこう。

結局、僕は強者には勝てない。絶対に、とは言わないが、確実に勝てると語れない限りは僕は敗北しているものと思っている。

だからこそ、僕は諦めていた。『あのテラス』が敵に居る限り、僕達に勝ち目はない。エクエスでさえ歯が立たない相手だ。オルコスは勿論、僕など論外。あの村の魔導士でも無理だろう。……それこそ情けなく他国に助けを求めるというオルコスの案でも用いない

限り。

しかし、光は見えた。天使という光が。

アキカなら、確実に『あのテラス』を打ち負かせる。

そう、僕は『隠し事』をした。

エクエスの敗北を目の当たりにした唯一の存在でありながら、それを打ち破った『あのテラス』の事は黙っていたのだ。

アキカの推測は間違っていた訳だ。敵陣のリーダーは、確実にフロガというあのテラスを超えている。

しかし、それを告げたらオルコスの奴が黙ってはいまい。アキカは煽れば乗っかるだろうが、あいつの頑固さは厄介だ。今回の奪還作戦に賛成しただけでも意外なのだ。

僕は騙した。しかし、これは勝利の為。

償い？そんなものはするつもりはない。しかし、もしもそれが責められるべき事なのだとしたら……

アキカを無傷で『あのテラス』まで導く。それをもって、僕の誠

意としようではないか。

僕達は、捕らえ躾た馬型テラスを操り遂に敵陣、首都アギオを目の前にしていた。道中は荒地ということもあり、獣型のテラス位しか徘徊していなかったが、それは軽く切り伏せて来た。

「……さて、此処からは本番だ。チェックメイトまで、一気に進むよ。アキカ。君は休んでいるといい。僕が道を開こう」

「いや、いいです」

……アキカはどうやら僕のことを嫌っているらしい。まぁ、僕は他人とのコミュニケーションの時に感情をオブラートに包まないタイプだから、嫌われる事は多いし気にしないのが大概だったが……まぁ、一目惚れした天使様に此処まで嫌われるのは中々に傷付く。

アキカが僕の同行に口を挟まなかったのは、恐らくはオルコスの賛同を得るためだろう。つまりは僕を利用したのだ。

……まぁ、その強かさも美しいのだけどね。

アキカは相も変わらずぷいっとした様子で、僕の顔すら見てくれない。

「兄様だけで事足りますから！」

「だから俺に何を望むというんだ！？……ってか、無理矢理馬に乗せやがって！俺は戦えんぞ！？なのに何敵陣まで連れてきてくれてんだ！」

……五月蝿い。どう考えてもお荷物だろう、と僕はアキカの兄を名乗る微妙な天使を睨んだ。この反応、冗談抜きのものだと思うが……なぜかアキカは頑なにこいつを擁護する。絶対にこの男に、力などあるはずもない。

まぁ、口に出せばアキカに睨まれてしまうので言いはしないが。

「……まぁ、兄様だけでは問題ないのは確かですけど……それでも一々一匹一匹を相手にするのは面倒ですから。下級テラスの処理は私がやります」

「ぼ、僕は？」

「貴方は兄様の凄い活躍の目撃者です」

「……アハハ。面白いね、それ」

嫌われすぎている。あれか。兄を馬鹿にしたのがいけなかったか。

……今更自分の素直さが憎たらしくなってきたよ、僕。

まぁ、それでも譲れない部分はあるわけで。

「……だけど、雑魚の処理は僕にも手伝わせて欲しい。そうしないと、オルコスにこっ酷く叱られるからね。僕も、君達も」

「……むぅ」

「それに残念ながら……拒まれても僕はやらせてもらうよ」

僕は懐からナイフを取り出す。僕の魔具（ヴィヴロス）『タウゼントフューサー』、それに刻み込んだメモリーを呼び出し、短縮された呪文を数秒で唱える。

「……『シエンピエス』」

ナイフを一振り。

伸びるのは放射状に広がる『百の手』。鋭く尖った針の如きその手を、周囲を取り囲むように潜む雑魚テラスの胸を貫く。

隠れたつもりだろうが、僕の前では無意味。百足らずといったところか？まぁ、そうと踏んでこの魔法を選んだ訳だが。

「……何をしたんですか？」

「いや、何でもない。早速、首都に入ろう」

アキカも流石に戦争などには慣れていないのだろう。周囲に潜む敵には気付いていなかったようだ。だから静かに、音も立てない暗殺向きの魔法で軽く悟られずに仕留めたのだが。まぁ、此処で言うのも野暮というもの。僕は取り敢えず首都の入口で待ち構える敵がいた事は話さない。

「軽く敵を殲滅しておいて、何を言ってるんですか」

「……見えてた？」

「はい。少しは参考になりました。必要最低限まで細めた針のような一撃で、敵の急所を的確に打ち抜く。アルマを極限まで絞り込んだ低コスト広範囲攻撃、私には真似できない緻密さでした。熟練の技、といったところですか」

「はは……流石は天使様」

思わず漏れる苦笑。格好つけさせてくれよ、そこは。

「さて、此処からは歩いて行こうか」

「敵の本拠地で馬に乗りながら戦う自信はありませんしね」

「嘘つけ！馬に乗りながら通りすがりに化け物黒焦げにしてきただろうが！」

アキカはひらりと馬から飛び降り、ぶんぶんとその指に輝く指輪をかざす様に手を前に出す。彼女の魔具（ヴィヴロス）はどうやら指輪タイプのようだ。赤い石を装飾とした指輪……その赤い石は確か『エマ』と呼ばれる希少な素材。かなり高性能な魔具の媒体だったと思う。……魔具方面にはどうにも疎いので曖昧な記憶だが。

「さぁ、行きましょう兄様！今から兄様の伝説を築くのです！」
「築かねーよ！？」
「……ハハ、仲の良い兄弟だ。でもそろそろ前を見たほうがいいかな？」

アキカのこれは……ブラコンという奴かな？まあ、いいか。
首都の入口からはかなりの数の人型テラスが駆けてくる。鎧を身に付け武器を握り……おお、随分とやる気満々のようだ。

「駆け抜けよう。僕に続いて」
「いいえ、此処は私が！」
「止まるだけ時間の無駄さ。いいから走って僕に続いて。お兄さんも付いてこないと置いてくよ？」
「はぁ！？敵地で！？……ちっくしょう、分かったよ！」

僕は先陣を切って駆け出す。アキカもどうやら勢いに押されて付いてきてくれたようだ。そして、文句ばかりの兄様も、流石のこの状況……付いて来ざるを得ないだろう。

「此処は通さん！者共、引っ捕えよ！」
「おやおや……どうやら敵さんは、僕達を舐めているようだ。捕える？……それは強い奴にしか出来ないよ……！」

向かい来る兵士達を前に、血が沸く感覚。そう。これだ。これだ！タウゼントフューサーを向けると、兵士達は鼻で笑った。そうだね。確かにこの魔具はしょぼいナイフにしか見えないさ。

そうやって油断した雑兵の顔が、絶望に染まる瞬間が快感だよ……！

タウゼントフューサーの銀色の刀身を軽く舐める。それは魔具のシステム切り替えの合図。その一動作により先程までのアルマ増幅機能から、より緻密なコントロールを可能にするアルマ制御機能へと切り替わる。

さっきの『百の手』程度の魔法、しかもアルマ増幅機能の組み合わせのおかげで、僕の残存アルマ量は９９％以上、消費は１％にも満たなかった。

今度は少し消費を増やして……『一騎当千』の力を見せてやろうじゃないか！

呪文詠唱の短縮手続きは各モードに搭載済み。此方こそが僕の本領。

兵士達との接触までの数秒。勿論、『シエンピエス』の展開よりかは時間が掛かるが、それでも僅かな時間。

兵士達とすれ違うタイミングで、僕の十八番は発動する。

「『タウゼント』」

体から吹き出す細い触手のようなアルマの針に、自身の手足の様

に意識を通わせる。それは僕の『千手』。変幻自在の千の腕。
僕のアルマコントロールは、騎士団の誰をも凌ぐ！

すれ違いざまに兵士の鎧を縫うように隙間から一刺し、二刺し、三刺し……

ガシャガシャと崩れ落ちる雑兵共。それには目もくれずに駆け抜ける。

一匹たりとも逃さない……駆け抜ける道に現れるテラスは全部殺す、殺す、殺す！千本の腕は、一匹たりともテラスを逃がさない。家屋の屋根から狙う者も、隠れる様に佇む者も、全て、全て、全て！千の腕は敵を貫く。そして千の腕は敵を探る。意識を通わせた細腕は、全長約２ｍ。それを手当り次第に伸ばし、その触覚で敵を探知、貫く。

「なんてコントロール……」
「どうだい？少しは見直してくれたかな？」

軽口を叩きながら、王城へ向かう通路を駆ける。敵兵をちぎっては投げ、ちぎっては投げの一人舞台。

さぁて、そろそろフィナーレだ……！

見えてきた城門。それが目に入り、思わずにやりと笑みが溢れる。

城門を塞ぐ十人程の敵、それを最後の気晴らしと言わんばかりにそれぞれ贅沢に百本ずつの腕で貫く！

「さぁ、僕は火力不足なんでね。突入のフィナーレは頼むよ、アキカ！」

「……予定と大分違いますよ。……力が有り余ってますッ！」

後ろから駆けてきたアキカは指輪をはめた手を前にかざす。そして、有り得ないスピードの……まるで早口言葉のような詠唱。

僕とほぼ同じ詠唱時間、それで彼女が唱え終えたのは、僕の二倍近い長さの呪文だった。

「『イムプルスス』！」

ダッシュの勢いそのままに、アキカが城門に手を当てる。

ズドン！

それと同時に走る強烈な衝撃。地面も揺らすその衝撃は、閉ざされた城門を楽々と弾き飛ばした！

大した火力。これは僕には真似できないな……

吹き飛んだ城門に巻き込まれて、城の内部に潜んでいたテラスも吹き飛んだようで、城の入口までの道は一気に開かれた。

そのまま僕とアキカは城に駆け込む。

千手はまだ解いていない。そのまま今までの勢いに乗せて、城の内部のテラスを一掃。長い階段を駆け上がった先には、懐かしき王の間の扉。

その扉が見えてくる前に、既に城のマップをマギアで暗記してき

たアキカは詠唱を終えていた。そのまま掌をかざし、強烈な炎を膨れ上がらせる！

「『メテオリティス』！！」

放たれたのは巨大な炎の弾丸。決して大きくはないそれは、王の間の扉を直撃……いや、貫通した。どろりと溶けて、大穴を開けた扉。

ジュウウウウウッ！

扉を突き抜けた炎の弾丸は、その奥に潜む何者かに受け止められた！

扉をドロドロに溶かした超光熱な炎、それを掌で受け止めた『あのテラス』は、玉座に威風堂々腰を掛け、僕達の来訪を迎え入れた。

「マイクテステス、本日は晴天ナリー。おホン。ヨウコソ、愚かなるテッラの民。熱いプレゼントに感謝。センクス」

「あれが親玉……？随分と奇妙な姿ですね……生き物ですか？」

アキカが驚くのも無理はない。そのテラスは、明らかに異形の存在だった。

球体の白い体。それを囲うような黄色いリング。其処から独立し

たように浮遊する足と手。頭は無い。
生き物らしい要素のまるでないそのテラスは、どこから出しているかも分からない声を、王の間に響かせる。

「ワタシは『エストォォォォレリャ』。この地のマスター。テッラの民よ、お前らまさかフロガを倒して?」
「不味かった?あいつを倒しちゃ?」

アキカが挑発するように、奇形テラス、エストレリャを睨みつける。すると、エストレリャは、パンパンと浮遊する二つの掌を叩き合わせて、声を響かせた。

「ブラボーブラボー。貴重な戦力、持ってかれマシタね。不味い。不味い。非常に不味い。おかげで此処まで楽々突破されマシタしね」

不味い、そう言いつつも声のトーンに変化は見られない。僕には分かっていた。

こいつは余裕だ。今、アキカの強烈な炎をその掌に受けても、なお。

相も変わらずの不気味さ、僕は思わず身震いした。

「バット、だがしかし、幸いな事に、とても嬉しい残念なオシラセがアリマス。アーアー、マイクテス」

直感した。それでも遅かった。

「ワタシ、フロガより、ズット強いカラ」

魔法ではない、単純な物理攻撃。奴の手が、空を走るように分離し飛来する！拳を握り、その手で殴ろうとする対象はアキカ。呪文の詠唱の暇さえ与えないその高速の拳に、僕が割って入る間も無く、今はまだ魔法しか覚えていないアキカに、容赦ない鉄拳が突き刺さろうとしていた。

「アキカ！」

「大丈夫」

目の前に迫る拳。それでもアキカは動じずに、余裕に満ちた、期待に満ちた笑顔を浮かべていた。

「だって兄様ですもの」

スッ……

その時だった。

コンマ一秒。ほんの僅かな時間を縫うように、アキカの前にはひとつの影が立ち塞がった。

その影に、エストレリャの拳が突き刺さる！

「……！？」

筈だった。

しかし、拳は予想外の動きを見せる。

パカッ……

小気味のいい音と共に、影に接触した拳は……真っ二つに『割れた』。

「の、ノオオオオオオン！ワタシの手がッ！手ガガガガガガガガッ！」

そして、二つに分かれた拳は、そのまま後方の壁に突き刺さる！

「そう……兄様ですもの。このステージの主役は……ね♪」

アキカがパチンとウィンクする。

エストレリャとアキカ、その間に割って入ったその影は……

「……お兄さん？」

アキカの兄、ウスハだった。

ＥＰ５：　だって兄様ですもの（後書き）

ウスハ、動く！
普通の男、ミスターノーマルのウスハが何故？
次回、アナトリを支配するテラス、エストレリャと決戦！
その意外な結末とは？そしてウスハの秘密とは？

次回、「天使か悪魔か」に続く！

……超スピード展開ですねｗ　次回は複数視点の入り乱れとなります！

ＥＰ６：　天使か悪魔か（前書き）

視点：複数

今回は話中で視点が切り替わります。

ＥＰ６：　天使か悪魔か

視点：アギオ騎士団第三団長、ディオミス

何故、あそこにあいつが立っている？

何故、エストレリャの攻撃は防がれた？

疑問しかないこの状況で、アキカは恍惚とした笑顔を浮かべて、前に立つ兄のウスハの背中に寄り添った。

「兄様……やっぱりこんな世界でも、兄様は一番です……！」

今のエストレリャの攻撃を、ウスハが防いだとでもいうのか？アルマの動きは全く見られなかったというのに？馬鹿な。何かの間違いだ……そう思いたくとも、ウスハが割り込み、攻撃が、エストレリャの拳が割れたのは事実。

ただただ混乱に飲まれる僕に、アキカはすっと歩み寄ってきた。

「どうですか？見ましたか？」

「……え？」

「見えてないんですか？しっかり見ていて下さいよ。貴方には、きちんと兄様の勇姿を語ってもらわなきゃいけないんですから」

見えてない？いや、何かが本当に起こっていたのか？そしてやはりアレはウスハがやってのけたのか？

戸惑う僕を、アキカはふうと溜め息を零してじとっとした目で睨んだ。うん。その目も素敵だ。……だから挫けないっ……！

「……貴方『も』ですか。……でも、大丈夫です。今回は相手が良いですから……見えますよ」

その失望は、どうやら僕だけに向けられたものではなかったようだ。それは彼女の兄を理解できない全員に向けられたもの……まぁ、僕にぐらいしかあからさまに態度に出したりしたりはしないのだろうけど。

……まぁ、僕が相当嫌われてることが改めて分かったことは置いておいて……アレが、あのエストレリャが良い相手？

僕にはとてもそうは思えない。

確かに僕はアキカならば勝てると思っている。いや、アキカにしか勝てないと思っている。

奇妙な形状のテラス、エストレリャはそれ程に強大。見るだけでその膨大なアルマ量が……フロガを大きく上回る恐ろしい空気が理解できる。

「アー、アー。マイクテステス。邪魔者登場。しかもアルマがカラッキシ。ワッツハプン？トリック分析、トリック分析、オーケー理解。取り敢えず、ぶっ殺せば万事オーケー」

……気味の悪い喋り方だ。……テラス、エストレリャは、その拳を真っ二つに割られながらも、余裕の様子だ。

そう、アレは些細なダメージにもなっていなかった。

割れたはずの奴の手は、ふわりと主人の元に戻ると、何事もなかったかのように割れ目同士を合わせて接合される。
あっという間の修復を終えて、エストレリャは新たな敵、ウスハにその掌を向けた。

「テス、テス、マァァァイクテス。オーケー。ナマムギナマモメナママママゴ……アカパジャマアゴパッ……オーケー、舌は回ってマス」

それはあの時に見た予備動作と全く同じだった。
僕とエクエスと対峙した奴は、その予備動作の後に、本当の力を見せつけてきた。その圧倒的な力の前に、エクエスはたった一人で立ち向かい、僕は奴に促されるままに撤退を余儀なくされた訳だ……！

「アキカ！早く奴を倒すべきだ！このままではウスハが危ない！」
「大丈夫。だって兄様ですもの」
「大丈夫なものか！奴はまだ本気じゃない！大きいのがくるぞ！」
「……見ていれば分かります」

アキカは全く僕の話に耳を貸さない。全くエストレリャに攻撃を仕掛けない。
そして、僕の焦りも虚しく、エストレリャはそのおぞましい姿を露わにした。

「「「「テス、テス、マァァァイク、テス。準備オーケー、レディ、ファイア」」」」

グパァッ……

その球体状の体から、四つの口が開く。白い歯を並べ、白い唇をぱくぱくと動かしながら、口は声を揃えて準備運動を終える。

「～～～～～～」
「ーーーーーー」
「＊＊＊＊＊＊＊」
「＋＋＋＋＋＋＋」

四つの口が同時に動く！それは人間には到底不可能なテラスの超越的技術……『四並行詠唱』！

一つの魔法より、二つの魔法が強いに決まっている。二つの魔法より、三つの魔法が強いに決まっている。

四つの魔法の同時発動が、強力なのは明らか。

しかも、単純計算では終わらない。魔法は相性により相互に作用する。

四つの魔法を同時に操れるということは、その相性により、威力を四倍以上にまで引き出せるということ！

「「「「『スタブロス・トゥ・ノトゥ』」」」」

ウスハを囲うように、四つの色違いの光の球が出現する。赤、青、緑、黄……色鮮やかな光の球は、まるでウスハを睨むように、その照準を合わせた。

ギュオンッ！

一秒にも満たない照準、そして射撃！四つの光は、強烈なアルマを秘めたレーザーを中心に立つウスハに向けて放つ！

四色の高密度アルマの十字架……あれを受けては一溜りもない！

しかし、僕は動けなかった。それは僕の能力の低さのせいでもあり……

その衝撃の訪れの信じ難い速さのせいでもあった。

そう。その攻撃は紛れも無く僕や騎士団の人間では、対抗できない最高クラスの破壊力だったのだ。

だからこそ、ウスハは『大きく』動いた。

フッと、ウスハはその両手を体の周りを一周させるように振った。自身の体も回転させながら、足を軸として、まるでコマのように。

ジュッ！！

まるで小さな炎に水をかけたかのように、僅かな音だけを立てて、エストレリャの超上級魔法、『スタブロス・トゥ・ノトゥ』は、呆

気なく消し去られた。

ウスハの手刀、そこから放たれた、目に見えぬ鎌風によって。

「「「「ワッツハプン!?アルマ反応ナシ!?ワーニン!ワーニン!アレはアルマでナシ!?ワーニン!ワーニン!ヘルプミー!」」」」」

エストレリャの明らかな動揺。先ほどの、手を割られた時とは比べ物にならない焦り。それもそのはず。

ウスハはアルマを用い、魔法を使役することなく……ただの手刀で、あれほどの最上級魔法を無効化したのだ。

僕も驚きを隠せない……なんてレベルじゃなかった。開いた口が塞がらないどころか、顎が地面に付くかと思うくらいに顎が外れてあんぐり状態……すまない。僕も自分で何を言っているのかわからないんだ。

それくらいに、僕は驚愕した。

「「「「殺せ!殺せ!奴を殺せ!」」」」」

エストレリャの必死の叫び。

それに反応し、王の間の奥から駆けてくるのは三体のテラス!

そのそれぞれが、フロガと同等、もしくはそれ以上のアルマ量だ!

「「「「我ら四将!」」」」」

四将、それがフロガと同等クラスのテラスであることは明らかだった。エストレリャ陣営には、まだまだフロガクラスの強兵が残っていたのだ!

「エストレリャ様のゲーム……それによって生かされていたテッラの愚民風情が……」
「フロガを討った程度で図に乗るな……！」
「もうお遊びはおしまいだ……」
「「「我らの総力をもって抹殺する！！！」」」

奴は遊んでいた……それだけだったのだ。
じわじわと僕達を追い込み、そして、最小限の駒で刈り取る。
それに生かされていただけ……その事実に僕は絶望した。
いくらなんでもあれ程のテラスが三体……いや、エストレリャも含めて四体。こんな相手に、いくらアキカと言えど、奇妙な力を見せたウスハと言えど、勝てるとは思えない……！

……と、僕がネガティブオーラを放つ前に

「な……」
「に……」
「を……？」

四将を名乗る三体のテラスは、何時の間にか動いていたウスハにすれ違いざまに首を撥ねられていた。ウネウネとまるで地を這う蛇のように体をうねらせ、まるで蝶のように、空中を舞うウスハ。首なんてガクンガクン揺らしながら、まるで子供に振り回される人形のように踊る。

……正直、怖い！あれ、人間の動きじゃないよ！

しかもなんでさっきから無言！？怖い！

「ああ……素晴らしいです兄様……やはり兄様は、この世界ならば最高に輝けます……！」

「ア、アキカ！あ、あれは一体何なんだい！？」

あの動きに恍惚とした表情を浮かべて、頬に手を当てながら赤い顔をふるふると振るアキカにドン引きしながら、僕は尋ねた。

ウスハは無言のまま、空中にぶん投げられたマリオネットみたいに規則性もヘッタクレもない滅茶苦茶な動きをしながら、エストレリャに迫っている！

「……アレは『暗中無心拳』……兄様含めて、この世でたった二人しか使えない……最強にして最凶で最狂の……」

やたら溜めるなアキカ！早く言ってくれ！

「暗殺拳です♪」

「あ、暗殺拳……？」

可愛らしく、えへっ♪とウインクしながらとんでもない事を言ったアキカに、僕は唖然とする他なかった。

一一一一

視点：杏樹明華（アンジュアキカ）

エストレリャ……それは確かに強い相手でした。
トルメンタとフロガ……二人（？）のテラスを相手にして、この世界では、あらゆる生物の力量が、体格には依らずに、アルマという魔力的要素で測れる事を学んだ今、私はこの奇妙なテラスの実力をまじまじと感じる事ができました。

……まぁ、私がトルメンタに使った『ケラヴノス』。あれを二発位当てればようやく倒せる位でしょう。今、マゴさんに用意してもらったこの魔具（ヴィヴロス）、『アルティメットアキカゴールデンスペシャル（仮）』があれば、『ケラヴノス』の五、六発は軽くいけるので、まぁ、当初は手こずったかもしれませんが、今となっては倒せなくもない相手ですね。

しかし、この力量……兄様の動きを一般人用に可視化するにはギリギリ丁度良いぐらいです。私は思わず情けない笑みを浮かべてしまいました。

まぁ、元々あのフロガというテラスの雰囲気からして、自分より弱い相手には従わないだろうなぁ～とは思ってましたし、それに四将なんて、いかにもＲＰＧの四天王みたいなポジションを名乗っていたので、少なくとも同等以上の相手が三人は居るとは踏んでました。
大方予想通りです！

あえて、派手に王の間に乗り込み、自らの力を誇示しました。

それでエストレリャが私に警戒してくれたのは儲けです！

愚かなことに……いいえ、有り難い事にエストレリャは私達に思い切り『殺意』をぶつけてくれたのです。

もう、これでゲームオーバー。

だって、兄様の『スイッチ』が入ってしまったんですもの。

背後から感じる兄様の気配。もう既に、スイッチオン状態です。

そして、エストレリャの一撃を開幕の合図として、お兄様は私の前に舞い降りたのです！

『暗中無心拳』。それは兄様と師匠の山田さんのみが使える……最強にして最悪の『暗殺拳』。

……兄様は、小さい頃からその才能を見出されて山田さんから稽古を受けていましたが、兄様はそれを「山田さんが自分で考えた、オリジナルのお遊び拳法」程度にしか捉えていないようです。

しかし、本人の思い込みとは無関係に、この暗殺拳は容赦なく起動するのです。

『暗中無心拳』の真髄は、その文字通り、『暗闇の中で、無心で振るう』事にあります。

それは暗殺、つまり殺しに長けた拳法において、最高の性質。

暗中無心拳、それの第一段階を体得したものは、『敵を見ない』。殺す対象を、まるで視界に入ってすらいないかのように、まるで見ようとしないのです。

対象が死んだとしても、決して。

ならばどうやって相手を認識するのか？答えはその『スイッチ』にも関わっています。

暗中無心拳、その第一段階を体得した者は、『殺意に反応する』。殺意を向けた相手を無意識下で『敵』と認証し、その敵を意識外に追いやります。そして、そのまま殺意の糸を手繰るように、その相手をただただ追尾し無意識の内にその拳を振るうのです。

その機動力と攻撃力は『殺意』が色濃ければ色濃いほどに、鋭く、素早く、圧倒的にふくれあがります。殺す気満々の相手には容赦はしないのです。某スナイパーさんみたいに、背後に近づく者はドカン！です。……まぁ、悪意さえなければ手出しはされませんが。

これによる利点は『罪悪感を感じない事』。

冷酷になりきれない、そんな時は誰にでもあります。しかし、この暗中無心拳の体得者は、『罪の意識など感じない』。

ただ『無心』で拳を振るうのです。

これが暗中無心拳、第一段階『無心』の境地。

そして次に第二段階『暗中』の境地。

これはひとつとして、『殺意』をより強力に感知する能力。

これにより、体得者は『殺意』を完全に感じ取る事が出来ます。僅かな『悪意』、『殺意』でも、正確に把握し、その濃度までも見極める……暗闇であっても、目が見えなくとも、その『殺意』を辿る拳には全て無意味。

そしてそれは『相手の嘘に騙されない』。

相手の『殺気』、『悪意』に敏感なその性質は、相手の攻撃の狙いすら見切ります。故にフェイクは通じず、騙し討ちも無駄。完全に『危険を捌き、危険を討つ』、無駄なき機械の如き拳なのです。

そして、『暗中』のもう一つの極意。それはこの上なく暗殺向きな……兄様の最大の才能。

それは兄様の一見しても一般人と何ら変わりない容姿と性質……それは兄様が普通であるのではありません。これぞ『暗中』の極意。兄様は『暗中に潜んでいるのです』！

普遍的な存在を装い、周囲の目を浴びない影の存在に身を落とす……そして気取られず、速やかに職務を全うする。

これぞ『暗』殺。全ては周囲の視線を完璧に欺く隠れ蓑なのです。

実際に、兄様はその場にいながら、この世界の人々の話題からさ

らりと離れていたりしました。その時点で、異世界から来たという特殊なステータスが付きながらも、楽々と人々の意識下から離れることに成功しているのです！

ノーマーク状態の兄様……おかげでフロガの首を撥ねた時、誰にも気付かれませんでした。

これは暗中無心拳の極意に兄様が限りなく近い事の証明でもあるのですが、如何せん私は悔しくてたまりませんでした。

心なく、殺意や悪意に対してのみ牙を向く、暗闇に潜む正義の暗殺者……そんな格好よくて、圧倒的な強さを誇る素晴らしい存在が、私の最高の兄様、杏樹薄葉（アンジュウスハ）なのです！

とまぁ、ここまで兄様の素晴らしさを熱弁させていただきましたが、まだまだこれで兄様の魅力を語り切れていません！まぁ、本来なら小一時間では足りない程の話題なので、決着がそう遠くない今は控えさせていただきます！……はぁ、兄様の事となると私……胸が熱くなって歯止めが効かなくなっちゃいます……直さないと、兄様に嫌われちゃう……と、ネガティブにはなりませんよ！

兄様はまだまだ完璧に暗中無心拳を習得した訳ではありません。まだ、その制御まではマスターしていません。まぁ、日常生活で殺らなきゃ殺られる程の殺意を浴びることはないので支障はないのですが、そのせいで兄様は『無心』、つまり自身の能力に気付いていないのです。

そのせいで、兄様は私に変な劣等感を抱いているようです。本当

は兄様の方が凄いのに……

だから、私は、例え兄様が理解できなくとも、嫌味と受け取っても、一途に兄様の凄さを語り続けるんです。兄様に、いつか理解していただける日を信じて。例え、嫌われても、私は兄様の理解者になりたいんです。

これは自己満足かも知れません。でも、私は兄様を慕うしか、その愛を示す方法を知らないから……

私は、エストレリャの拳を手刀一発で切断した兄様の背中を見ながら、その愛の詰まった胸の痛みをぎゅっと抑えつけるのです。

……ああ、また私を護ってくれた。

……と、勝手な妄想。

本当は、兄様は自分が攻撃の射線に入ったから反応したのであって、私が狙われたから動いた訳じゃないんですけどね。

わざと殺意の射線に入って、私の前に立たせて、兄様の騎士（ナイト）姿を妄想する……それだけで、白飯三杯は行けます……じゅるり。

おっと、はしたない。気を付けなければ……

それはさて置き、解説し忘れておりましたが、兄様の暗中無心拳の最大の極意は、『暗中』や『無心』といった、そんな小細工じみた事ではないことを理解しなくてはなりません。

その極意は『強さ』にある。

相手に気取られない程の速度を誇り、遠距離の相手でもその巻き起こす鎌風により仕留める恐るべき手刀。戦車隊でも一撃で纏めて両断する脚。相手の反応すら許さない速度。

あくまで『人知れず殺す』事に特化した結果、この拳法は『圧倒的に殺す』ものへと変貌していたのです。

それこそ、私の雷や、エストレリャの超高レベル魔法など、腕を振り回すだけでかき消せるほどに、その技は圧倒的なのです。

攻撃を軽くかき消し、視線をぼーっとそっぽに向けたまま、動き出す兄様！ああ、なんて格好イイ動き！

そして四将（笑）が飛び出してきても、その手刀、『暗黒魔神刀（私命名）』で、悟られることなく首を撥ねます！

それを見た時のエストレリャの絶望に満ちた悲鳴が、全てを物語っていました。

「「「「ストップ！ストップ！アイムソーリー！許してクダサイ！」」」」

エストレリャの命乞い。しかし兄様は止まりません。

……『殺意』、隠しきれてませんね。素直に命乞いすれば、兄様も止まるのに。

構わずに突撃する兄様に、命乞いが無駄だと判断したのか、エストレリャは絶叫し、愚かにもその拳で反撃に移ろうとしました。

「「「「チックショオオオオオオオオ！愚民……風情がァァァァァァ！！！」」」」

兄様は空中でその足を縦に振り下ろしなら、地面にストンと着地します。

それは触れずとも敵を割く、兄様の最強の一撃！

死神の鎌……『デスシックル（私命名）』！！

その踵落としは、強烈な鎌風を発生させ、離れたエストレリャの体に線を入れます。

「「「「グ……ギガ……！コノワタシガ……敗れると……イウノカッ！？」」」」

一刀両断。一撃必殺。

明後日の方向を向く兄様を前にして、エストレリャは綺麗に二つに別れて、崩れ落ちました。

そして、兄様は、その死体には目もくれず、振り向き私とディオミスさんに言うのです。

「お前足早いよッ！！俺だけあんなヤバイところに置いていくつもりかッ！？」

ディオミスさんは唖然とし、その伝説の始まりをしっかりとその双眼に刻み込んだようでした。

よしっ！と私はガッツポーズ。

アナトリ国奪還……その偉業をもって、兄様の存在は認められるのです！

この世界こそ、兄様が輝く世界……こうして、兄様の伝説は始まりました！

ＥＰ６：　天使か悪魔か（後書き）

遂に明かされたウスハの才能！テラス、エストレリャを圧倒！そして、遂に、アナトリ奪還！
凱旋するウスハを待ち受けるものとは？

次回、第一章最終話「俺の妹じゃあるまいし！」！

そして伝説は動き出す……？

……遂にウスハ暴走ですねｗ　彼が一見『普通』なのは、その実力を隠すためだったのだ！……本人は全く気づいてませんがｗ　ちなみにタイトルの天使か悪魔か、はウスハのこと。見た目と力、本当に天使なんだか悪魔なんだかｗ

　そして、ちょっとクレイジーなレベルで兄にメロメロなアキカ。ちょっと（相当？）危険な子に見えますねｗ　そして完璧超人と思われがちなアキカの数少ない弱点、「ダサいネーミングセンス」もちらほら登場させつつ……ｗ　次回、第一章を終えて、物語の本番が始まります！

……そして、名前すら出てこないフロガ以外の四将……ｗ　まさに四将（笑）　ただの噛ませ犬もいいところですねｗ

ここまでで物語の土台は出来上がりました！よろしければここからもお付き合いください！

評価、感想、ご指摘、ご意見ナドナド……お暇でしたら是非是非よ

ろしくお願いします！……心待ちにしております！

EP7：　俺の妹じゃあるまいし！（前書き）

視点：複数

ついに一章完結！そして物語は動き出す！？

EP7：　俺の妹じゃあるまいし！

視点：杏樹薄葉（アンジュウスハ）

何故か俺は昔を思い出していた。

小学三年生の頃だったか、公園で当時小学二年生の明華と一緒にサッカーボールを蹴っていた俺に、あの人は声を掛けてきた。

「君、拳法に興味はないかな？」

「ん？おじさん誰？」

「日本国憲法なら全部覚えましたよ？」

「いや……そっちの憲法じゃなくて。こうアチョーアチョーする方の拳法だよ……って、君小さいのに凄いな……」

正直、明華とのリフティング勝負中、明華はまだまだあと数十分は終わらないんじゃないかと思い始めていた俺。十回で早々にリタイアした俺に対し、既に五百回近く続けて、未だにポンポンとボールを弾ませている明華を取り敢えず置いておいて、おじさんの話を聞くことにした。

明華も余裕があるようだったが、どうやらおじさんは俺に用事があったらしい。

「お嬢ちゃんじゃなくて……お兄さんの君。君はおじさんの『暗中無心拳』を受け継ぐ気はないかな？」
「なにそれ？」
「北斗〇拳みたいなものさ」
「すげぇ！」
「え～！お兄ちゃんだけずるい！私もやりたい！」

おじさんは少し困った顔をして、明華に言った。

「ごめんね。残念だけど……これは君のお兄ちゃんしかできないんだよ」

俺しかできない……それは何をやっても明華に負けっぱなしだった当時の俺からしたら、とても甘い響きだった。
勉強では勿論、駆けっこやゲームでも負けっぱなしなだけでなく、相撲でも投げ飛ばされっぱなしな俺としては、そろそろ兄の威厳を見せたかったということもあっただろう。

「やる！」
「そうかい。じゃあ、早速うちの道場に来てくれるかな？」
「うん！」
「私も行くー！」

危険な子供達である。全く知らないおじさんに、こうもあっさり付いていくとは。
しかし、以前も明華とセットで誘拐されかけた俺は、その時誘拐犯の腕を捻り上げて拘束し、誘拐犯を言葉責めで泣かせてそのまま帰った明華のおかげで、誘拐とかそういったものに対する危機感はなく、軽い気持ちでおじさんについて行ったのである。

……数ヶ月の修行を施されて、「暗中無心拳の歴史はどんなものですか？」という明華の問いに対して、一見近所の冴えないおじさんにしか見えない師匠、山田太郎（ヤマダタロウ）が「僕が作ったんだよ」と答えたのを聞いて、絶望したのは最悪の思い出である。

そう。俺は小学生時代の輝かしく楽しい時間の多くを、うっかり近所のおっさんの「僕が考えた最強の拳法」の習得に費やしてしまったのである。

当時の俺はそれが中二病というものだということを理解していた。

しかし、俺は山田さんの修行によって、多少山田さんに恐縮してしまう癖が付いてしまったようで、あろうことか高校三年になった今も、道場という名の山田さん宅に通いつめているという悪循環。……っていうかやたらと明華が行きたがるから行かざるを得ないというのもある。俺の腕力では、あいつの腕引きに対抗できない。

あいつはいつも楽しそうに俺の修行風景を眺めていた。やめろ。見ないでくれ。いや、マジで。

奇妙な構えを取りながら、アホみたいなポーズで踊っていた姿を思い出すと吐き気がする。山田さん曰く、「暗中無心拳の基礎動作だ」だとさ。あんなタコみたいな気持ち悪い動き、実戦で使えるわけないだろう！……まぁ、今では手刀だったり蹴りだったり、精神統一だったりと、まだ恥ずかしくない事をさせられているので妥協はしているが……それでもヘナチョコフニャフニャ初心者拳法、動きがどうも実戦的でないのは確実である。

何から何まで変なおっさんだった。変な拳法だった。

「なんで俺しかできないの？」

そう尋ねた俺に、山田さんは答えた。

「地味だからさ」

小学三年生の子供心にもそれは響いた。それと俺の名前を聞いたときに山田さんが言った言葉も、今も残る大きな傷跡になっている。

「薄葉か……いい名前だ。影が薄そうで」

……知ってたよ！

影が薄そうな名前だって知ってたよ！

そもそもなんだよ『薄葉（ウスハ）』って！『薄い葉っぱ』って！妹の『明華』に対して酷すぎるだろうよ！『明るい華』ＶＳ『薄い葉っぱ』……親の悪意しか感じないよ！

……って、俺はなんでこんな『普通な』俺の唯一の『普通じゃない』黒歴史の回想をしているのか？

そういえば、俺は今、とっとと俺を猛獣さ迷う危険地帯に放置し

て駆けて行った明華とディオミスとかいう騎士を追いかけて走っているところで……

その時、明華とディオミスの姿が視界に飛び込み、俺は考えることをやめた。

―――

そして、今、俺は良く分からない状況に置かれている。

馬型の化け物、テラスに乗って、村の近くまで帰ってきた俺達は、馬から降りて、村の前まで歩いてきていた。

そう。そこまではいい。どうやら二人は敵のボスを倒したらしく、残った雑魚テラスも逃げていったらしい。ＯＫ、明華ならやれるのは分かってる。

だが、何故俺は今、二本の腕を、明華とディオミス、それぞれに抱えられているのだろうか？

明華がべったりくっついてくるのは良くあることだ。まぁ、それでも本来はお断りだが。問題は俺の左腕にしがみついているキザっぽい騎士、ディオミスだ。

「ディオミスさん……兄様を離してもらえません？」

「その頼みは聞けないな、アキカ。君が僕に見向きもしてくれないのなら、僕はウスハを貰うからさ！」

「兄様は渡しません！それに男同士でベタベタしないで下さい気持ち悪い！」

引っ張るな、明華……いやいやいやいや。そこじゃない。なんだこのディオミスって騎士。なんで俺にこんなにべったりくっついてくるんだ。俺等、男同士だぞ？いやまぁ女が俺に見向きするとは思ってないけどね？

「男同士？関係ないさ！僕は強い者なら構わない！」

構うよ！？何、この人男色家！？やめて！なんで俺に！？強い者、って明華じゃあるまいし！

両手に華……いや、華じゃないか。変なの二つを抱えて、俺は何もしていないのに、まるでリーダーであるかのように凱旋した。

……迎えに出てきた村人達が、王様が、騎士団の皆様方が、凄い目で見ていた事は言うまでもあるまい。

「今帰ったよ！アギオに巣食うテラスは討ち滅ぼした！この我らが天使……ウスハがね！！」

「ちょ……！？」

ディオミスさん、あんた何を言ってるんだ！？嘘つくなや！

「そう！この兄様が！」

明華まで乗っかるな！もしかして、ディオミス……こいつ、明華菌に感染したのか！？

きょとんとしている歓迎の人集り。それも当然。そう、俺があんな化け物を倒したなんて、信じられるわけが………

うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！

沸き上がる歓声！「ウスハ様！ウスハ様！」とかいう声も聞こえる。

…………お前ら全員、素直かッ！！！

……と、沸き上がる人の群れに、ツッコミを入れられない程度に、俺は普通にビビリなのである。

一一一

村はもうお祭り騒ぎだった。俺も何故か勝手に天使に祭り上げられて、滅茶苦茶囲まれた。もうね、辛いわけですよ。身の丈に合わない称号を背負わされるのは。高校二年時の明華の「兄様こそこの高校最強ですよ」発言により、何か古臭い不良に囲まれた時くらい泣きたくなる状態である。その時は勿論逃げたさ。無我夢中でな！

そんな俺を助けてくれたのは、騎士団団長のオルコスさんで……

オルコスさんの機転と助けで、俺と明華は何とかその群集から逃れ、落ち着いたマゴの家に招かれたのである。

「いやぁ……災難だった。これも全てあんたと明華の……いや、明華菌のせいだ！」

「アキカキン？なんですかそれは兄様」

「なんでもないよ！言い直させるな！」

「まぁまぁ、そう気を立てないでくれよウスハ！僕らの仲じゃないか！」

「知らないよ！あんた一体何なんだよ！俺のことバカにしてたくせ

に！」

ディオミスがやたらと絡みついてくる。気色悪い。対抗するように明華も絡みついてくる。うん。この男よりかは幾分かマシだ。ハァハァさえしてなければ、な。

「ウスハ、凄いですよ！アキカ様が仰っていた通りだったんですね！」

「だからマゴまで何故信じる！？一目見ただけでわかるだろ！俺は何も……」

「疑いようが無いさ。あのディオミスが認めているのだからな」

机にコップを並べながら目を輝かせるマゴ。それに反論する俺に、俺の向かいの席に座るオルコスさんが、なんで皆が皆、明華やディオミスの言い分を信じているのか、その理由を語ってくれた。

「ディオミスは本当に強いと認めた奴しか評価しない。それこそ、圧倒的に強い奴にしか、な。無駄にプライドの高いこいつの事は、今村に居る人間の殆どが知っているだろう」

「そうだよウスハ。君は実に素晴らしい！この僕に認められた事、光栄に思うがいいよ！どうだい？僕とペアを組まないか？そして、知らしめてやろうじゃないか……僕達の素晴らしさを！」

「駄目です！兄様とペアを組むのは私！離れてください、この変態騎士！」

「アキカ、それは焼きもちかい？」

「ころ……怪我させますわよ？おほほほほ」

「ご、ごめんなさい……」

……ディオミス……！何余計な事を言ってくれてんだ……！お前が言ったから皆信じたってか……！お前まで明華みたいな事いいや

がるから、俺が凄く気まずい思いをすることになるんだろうが……！

……まさか、明華に脅されて……！？……あ、あり得る！

よく知らないが、良い子な振りして裏で何やってるか分からないこいつならあり得る！

「ははは。ディオミスが此処まで惚れ込むとは……ウスハ殿、私は貴方への評価を誤っていたようだ」

「フン。全くオルコス。君って奴は本当に情けないね。ウスハの力も見抜けないとは……いやぁ素晴らしかったよ、あの最後の一撃。あのエストレリャを真っ二つにしたあの攻撃……鳥肌が立ったね！」

「何最初から知ってたみたいに言ってるんですか！あなたが一番馬鹿にしてたのに！」

だから勝手に話を進めるなって！エストレリャって誰だよ！滅茶苦茶言いにくいなその名前！

はぁ……、もう疲れた。なんだか妙に今日は怠いんだよなぁ。慣れない環境に居るからか？それとも、この二人にしがみつかれているからか？

「……悪い。ちょっと放してくれ。もう疲れた」

「あ、ごめんなさい兄様」

「そりゃ疲れるだろうね。あれだけの大活躍だったんだし」

「だからしてねーっての！」

窓から覗く外の景色はとっくに闇に落ちていた。通りで眠いわけだ。

……こっちに来てからは勉強の口実ができると思って、ちゃっかりいつも以上に寝ていることは秘密だ。

「悪い。ちょっと宿に戻っていいか？」

俺は先に、この世界を訪れてから借りていた宿に戻らせてもらうことにする。

「そうですね。早くお休みになったほうがいいかもしれませんね」

「そうだね、ウスハ。ゆっくり休むといい。君は今日、素晴らしい働きをしたのだから」

「してねーよ！あれか？俺に暗示を掛けるつもりか！？……もういいや。じゃ、お先に失礼しますよっと」

俺はもう反論するのにも疲れて、マゴの家を出る。

……その時、たった一つだけ、俺は気に掛かる事があった。

腕から振りほどいた明華は、思っていたよりもすぐに俺を解放した。

あいつにしては、やけにあっさりしてるな……

そう思いつつ、「お休みなさい」という明華の言葉に「お休み」と一言返し、扉を閉めた。

一一一一

視点：杏樹明華（アンジュアキカ）

兄様も流石にあれ程に動いたのは久しぶりだったので、相当に疲れたようでした。

少し、ムキになって、兄様に無理させてしまったかな……と今更になって後悔する私。でも、よかった。皆、兄様を認めてくれた。これで少しは、兄様の変な劣等感が和らいでくれたらいいのにな。

そして、此処からは、普段は『普通』でしか居られない兄様の代わりに、私が踏ん張るところです。

「アキカ様はお休みにならないでよろしいのですか？」

「アキカも早く休んだほうがいい。……明日から、少し面倒な事になりそうだからね」

気遣うマゴさんの言葉に、ふぅと溜め息をつきながら、遠い目を

しているディオミスさん。大体その『面倒な事』の内容も分かってはいました。

既に私は考えていました。

そして、一応の疑問をマゴさんに私は投げかけます。

「マゴさん。伝承の天使、っていうのは……元の世界に帰ったんですか？」

「……！」

マゴさんの表情が、明らかに変化しました。大方予想通りです。

マゴさんのその目に、涙が溜まり、深々と頭を下げたのは、すぐのことでした。

「……申し訳ありませんっ！」

「マゴ……まさか」

オルコスさんが目を見開き、マゴさんを見下ろします。

そう。伝承の天使が、元いた世界に帰ったという話は、伝承の何処にも出てきていない。そもそも、こんなただでさえ信じ難い異世界への道に、都合良く往復切符があるものだろうか？そう、現実はそう甘くはないのです。

難解な儀式、それにより呼び出された私達が、都合良く帰れる？

……まさか。

それと同等の儀式と代償、それなくして、帰りの切符が買えるわ

けがありません。

「いいんですよマゴさん。元々、分かってましたから」

「申し訳ありません……！私達の勝手で……アキカ様とウスハを喚び出して……！」

「二人は……元居た世界に帰れないのか！？」

「オルコス。今更だよ。……それに儀式手順の問題も勿論だけど、他にも問題は山積みじゃないか」

ディオミスさんは、先程までの兄様にデレデレだった状態から立ち直り、冷めた目でオルコスさんを睨みました。

「……あの、王が。ウスハとアキカをみすみす見逃すとでも思っているのかい？……恐らくは従者にウスハを欲しがるだろう。それと……あの目を見る限り、アキカは妻としてでも迎え入れるつもりじゃないかな？」

そう。ディオミスさんの言う通り。

私達は必要として呼び出された。それがこれで、用済みですよと解放される筈もない。なんか下衆みたいな目で、あの王様が見ていた時から気付いていました。あれは、私に対する純粋な好意の目ではなくて、独占欲に満ちた大嫌いな目。私は幸いながらそういったものを見慣れていたので、すぐに分かりました。

「ま、僕としてはアキカやウスハと一緒に剣を振るえるのなら、それ程に嬉しい事はないけどね。……だが、僕とて『剣』。君達の思うところ位は理解できるつもりだよ。やっぱり剣も持ち主を選びたいよね」

ディオミスさんは、何だかんだでよく見ている方でした。力を冷静に見極め、自分がどう動くべきかを判断し、認めるものは認める。少しプライドが高くて、譲れない部分も多そうですが、それでもちゃんと物を見ている方でした。

「……明日朝早く、此処を出るつもりかい？」

「な！」

「……あなたに見透かされると、少しシャクですね」

「え？え？ア、アキカ様……？それは本当ですか？」

……折角此れから話そうというのに、兄様のことだってそうですが、本当に嫌な人です、ディオミスさんは。

「……元の世界に帰るヒント。もしかしたらこの世界中を回ったら、見つかるかも知れません」

そう。それは希望的観測にしか過ぎません。もしかしたら、向こうに帰る儀式なんて、見つからないかも知れません。

しかし、可能性はある。なぜなら天使の伝承は、このアナトリだけのものではなく、世界全てに関わる形で語られているのだから。

そして、その伝承が真実だったのだから、世界に響いたその伝承、他の場所にも語り継がれていない訳がない。

もしかしたらその中に、伝承の天使のその後が語られているものがあるかもしれない。

そしてそんな希望はともかく、此処に留まる事は、縛られるということ。それこそ完全に、元の世界に帰る事を諦める事と同義です。

ならば此処を離れ、希望に縋るのが一番の道。私は少なくともそう考えました。

まぁ、勿論目的はそれだけではありません。加えて言えば……

「それに、兄様の力を世界中に知らしめてやらねばなりませんしね！」

そう。この世界ならば、兄様の『力』は最大限に発揮される。兄様が、最大限に輝くことができる。

その為に、そして、私達を頼ってくれた、この村の、国の、世界の人達の安寧の為に……

「……ちょっと、テラスを纏めて倒して来ちゃいますね！」

私は頼られる事は嫌いじゃない。むしろ好きだ。

この世界の人々は、私を、兄様を頼ってくれた。それだけで、私は最初から、この世界の人々を助けたいと思っていた。

傲慢かもしれない。世界を救う救世主？……私は其処までできる人間じゃない。

でも、頑張りたい。尽くしたい。

それに、いつだって私の騎士になってくれる兄様が居るんですもの。できないことなんて、何もない。

「……大丈夫です。マゴさん、これを」

私は、今までテラスを観察してきて見出した、エストレリャの亡骸から見つけた成果を用いた一つの実験成果をマゴさんに手渡しました。

「これは……？」

「命名『対テラス用結界石アキカスペシャル一号』。……テラス特有のアルマを弾き出す特殊結界、そして呪文超短縮機能を組み込んだ私のオリジナルの魔具（ヴィヴロス）です。大体、この国を覆い尽くす規模で展開できるように調整してありますので、これを持って私の教える呪文を唱えれば、まずテラスに侵入されない強固な結界が作れる筈です」

「そ、そんなものを作ったのですか！？」

エストレリャの体から見つけ出した不思議な石。それから優秀なアルマ量と、情報入力領域を見いだせたので、私はこっそり持ち帰り、帰り道で中身を確認し、テラスのアルマ形式を参考にしながら、彼らのアルマだけを弾き出す結界を考案しました。

これにより、テラスのアルマ形式を持つ者は、決して中には入れないでしょう。

結界の防御対象範囲を限定することで、アルマの節約を行い、巨大結界の展開をサポート。さらに、その優秀なアルマ貯蓄量と呪文記憶容量により、さらにアルマ消費を軽量化、そして呪文の簡略化を成し遂げました。

これも、マゴさんに紹介していただいた魔具仕立て屋さんの卓越した技術を実際に見せていただいたおかげでしょう。

まぁ、エストレリャの入力があった魔具素体があったからこそ、テラス対策情報を組み込めたのであって、二度同じものが作れるとは思えませんが。

「これでアナトリは私達がいなくても二度とテラスに侵される事はないでしょう」

「凄い……触っただけでわかります。とても高度で……強力な魔具」

「結界しか張れませんから大したものじゃないですよ」

「そんなことないです！凄い！凄いです！」

マゴさんの惜しみない賞賛。不慣れな事で、その道のプロに褒められると、なかなかにこそばゆいものです。ちょっと熱くなった頬を抑えて、私は気持ちを落ち着けました。

「……私は……勝手にアキカ様を喚び出したのに……此処までしていただいて……私……私……！」

「大丈夫。大丈夫ですよ。私はそんなこと、全く気にしてないですから」

泣き崩れるマゴさんの背中を、私はそっと撫でました。

そう。大丈夫。私は大丈夫。それをずっと自分に言い聞かせるように、私は今までも生きてきました。

そして、これからもずっと……

「……ま、これである程度は心配ないでしょう。でも、それでもその結界をも破るテラスが現れないとも限らないので……もう一つ」

最後に私は心残りのないように、もう一つの魔具をマゴさんに手渡しました。

「命名『信号弾』……私のアルマを込めておきました。これはごく簡単な呪文で発動できます。効力は超広範囲に込めてあるアルマをただ放出するだけです。もしものことがあったら、この魔具を使ってください。放出されるアルマを私が知覚出来ることは確認済みなので、それを受け取ったら何処にいても急いで駆けつけますから」

「……其処まで……」

「遠慮はなしですよ。私の好意、跳ね除けられると少し悲しいな……」

「い、いえ！そんなつもりは……」

「じゃ、受け取ってください」

私は押し付けるようにマゴさんの手にそのガラス玉のような魔具を握らせ、それっきりでこの話を終わりにすることにしました。変に感謝をされるのも苦手なので。

「じゃ、あとはコレ。呪文を書いたメモです。絶対になくさないで下さいね？それじゃ、私は明日早いので休ませていただきます」

これでこの村も、この国も大丈夫でしょう。私は安心して、宿に

戻ろうとしました。

「残念だけど、後に渡した方の魔具は必要ないね」

それはディオミスさんの言葉。

「何故なら、あのエストレリャが居なければ、僕達騎士団だけでこの国は守れるからだ。だから余計な心配なんてしないでいいよ」

「……変態の癖に、戯言を」

気が利くんだか、感じが悪いだけなんだか……私は改めて安心して、その場を後にしました。

一一一一

視点：杏樹薄葉（アンジュウスハ）

早朝、というか、まだ外も暗い中、俺は叩き起された。

「……う～～～もうちょっと寝かせて……って、明華！？何人の部屋に入って……！」
「しーっ！兄様お静かに！……早く出ますよ」
「……は？出る？お前、何を言って……」

明華は既に、きちっと身支度を整え、なにやら大きなバッグを背負って其処に居た。

「さぁ、いざ行かん！テラス全滅の旅へ！」
「お前何言ってんだ！？ってか、お前はどうして俺の部屋に……」
「鍵をこじ開けて入ったんですよ。昨日の晩からいましたけど？」
「寝てる俺に何をした！？」
「やですわ兄様。オホホのホ。向こうに居た時にいつもしていたこと位しかしてませんわ」
「そうか……なら良かっ……良かないっ！！」

元居た世界での衝撃の事実。夜な夜なこいつは俺の部屋で何かしていたようだ。もうやだこの妹。

「とにかくっ！そんな事はどうでもいいですから！早く！準備は私が終えてますのでそのままでいいですからっ！」
「どうでもいい！？いや、やめろ引っ張るな！まだ話が飲み込めて……分かった！分かったから足を引っ張るな！立って歩かせろ！」

布団から足を持って俺を引き摺りおろし、そのまま俺を引き摺りながら運ぶ明華。痛い！痛い！必死でもがく俺。
しかし、抵抗虚しく、俺は表まで引きずられていく。こいつに力で勝てる気がしない。

「なんだよ旅って！帰らないのかよ！」

「実は元の世界に帰るには、テラスの親玉を倒さなきゃいけないんですよ（棒）」
「嘘つけ！お前、何企んでやがる！？」
「さぁ、兄様！兄様の伝説を、この世界に刻み込むのです！」
「それが目的か！お前は宣教師か！」

ヤバい。もうテストとかは正直今更だしどうでもいいけど、こいつに付き合わされたら俺が持たん！
だが、この馬鹿力に逆らえない位には、ミスターノーマルな俺は普通にミスパーフェクトには勝てないのである。

こっそりと宿の出口を開けて、明華は俺を引きずりながら、外に出る。

「……あ」

すると、明華の足は止まった。そして、俺の足をぽっと放す。
ようやく足を解放された俺は、ようやく寝巻き姿のまま起き上がり、明華の前に立つ人間の姿を確認した。

それは、魔導士マゴ。そして、騎士オルコスとディオミス。

「黙って出ていこうなどとは人が悪い。見送りくらいはさせて貰えないか？」
「あはは……まさか、待ち伏せされるとは思いませんでした」

明華が珍しく苦笑する。オルコスさんはそんな明華に一つ小包を手渡した。

「隣国への入国には通行料が掛かる。そして、身分を証明するもの

も必要だ。これは少しばかりのお礼と、貴女方の仮の身分証明書だ。此方で身分は保証しておくので、問題なく通れるはずだ」
「……ありゃりゃ。失念してました。……ありがとうございます」
「どうせ、金も身分証もなくても強引に突破するつもりだったんだろう？」
「失敬な、この変態」
「おお、相変わらずの風当たりの強さだ。全く、君の妹は怖いねウスハ」
「兄様に触るなっ！」

ディオミスをがるると威嚇する明華。まぁ、今回ばかりは助かったので、明華に感謝である。俺、この人苦手だしな。

「アキカ様。少し頼りない情報だとは思いますが……少し、お耳に入れたいことが」

ディオミスを抑えつけるオルコスさんを余所に、マゴは明華に歩み寄った。

「実は、国境に近いマギアの村にはノトス出身の方も多く訪れまして……その方のお話で、少し気になるものがあったんです」
「ノトスの？」

明華が首を傾げる。

「この世界では、実はアキカ様やウスハのような黒髪黒眼の人間は珍しいんです。そして、その珍しい特徴を持った人間が、ノトスには居ると……」
「まさか……」

マゴが頷く。俺でもその話の流れは理解できた。

「伝承が真実だった、そう分かった今なら考えられます。もしかしたら、その方も『伝承の天使』なのかも知れません。首都に居るというその方は、どうやら腕利きの剣士のようで……ノトスの平穏が守られているのはその方の御陰だそうで……」

「私もノトスにはなにやら秘密の切り札があると聞いていたが……それが天使だというのなら頷ける。アキカやウスハのような天使を、ノトスは既に召喚していたというわけか」

オルコスさんの言葉に、俺は関係ないでしょうが！そう言おうかとも思ったが黙っておく。それくらいの空気を読めるくらいには俺は普通だ。

「あくまで噂です。……お役に立てる情報かはわかりませんが」

「いいえ。ありがとうございますマゴさん！事実、ノトスは平和なんですよね？だったら有り得ない話ではありません。そして、其処には天使の伝承もあるはず……」

俺はいまいち明華の目的はわからなかったが、一応俺達と同じ境遇にある人間がいることくらいは理解できた。

「こんなことしかできませんが……本当に感謝しています。……ありがとうございます！」

「いいですって。ね？」

頭を何度も下げるマゴに、明華は優しく微笑む。

……ま、根は優しいんだよな、明華も。俺のことが絡まなければ。

と、その確かに天使のような笑顔に、少しだけ俺が見入っていると、マゴは次に俺に近寄ってきた。そして、手を握り、俺の顔を見つめる。

「……ウスハ、お気を付けて。大変でしょうけど……でも、ウスハなら大丈夫です！だって、ウスハはとっても優しい天使様なんですから！」

「いやいや！俺は何もできないって！それにやめろその期待の目！俺の妹じゃあるまいし！」

「ウスハ、君がテラスを滅ぼす日を期待しているよ。できれば身近でその勇姿を見たかったけど……ま、仕方ないね」

「やめろ！期待すんな！俺の妹じゃあるまいし！」

「ウスハ殿……ご武運を」

「あああああああああ、もう！全員何なんだよ！俺の妹じゃあるまいし！そんなに期待の目で俺を見るな！」

「俺は凡夫と言っておろうに！」

「「「またまた～（笑）」」」

「明華ぁ！お前のせいでっ……！」

「えへ♪アナトリの兄様信仰は完璧ですね♪次はノトスです！」

「お前は俺を神にでもするつもりか！？」

アキカは俺の腕をぐいと引っ張る。

「では行きますね！」

「あ、だったら国の外まで見送りを……」
「あ、ここで大丈夫です」

ぐいっと俺の体が持ち上がる。え？ちょ……明華さん？なんで俺はお姫様抱っこをされてるんでしょうか？そして、ぼそぼそと何を呟いて？

「……『フリューゲル』」

ファサ……

その呪文が終わった時、明華の背中には、白く光り輝く翼が現れた。

「……そ、その翼」
「美しい……」
「アキカ殿……それは……！」

驚き唖然とする三人を前に、明華はエヘッ♪と笑って舌をちろっと出してみせた。

「ちょっと魔道書を参考に、自作しちゃいました♪これでノトスまで……一飛びです！」
「え？明華？いま飛ぶって……」
「それでは皆さん、ご機嫌よう！」
「って、ぎゃあああああああああああああ！！」

バサッ……！

明華の翼がはためくと、俺を抱えた明華の体が勢い良く飛び上がる！俺はそのぞわっとする感覚に、悲鳴を上げた！

……やっぱり、天使はこっちじゃねぇか！

呆然と見上げる三人の人影は次第に小さくなっていく。
鳥肌ものの景色を見下ろし、俺はもう意識が飛ぶかと思った。

「それでは兄様参りましょう！伝説の向こう側へ！」
「一人で行けよもう！」

……こうして、普通な俺と、天使な妹、明華の、異世界テッラの旅は始まったのである。

EP7：　俺の妹じゃあるまいし！（後書き）

第一章、「アナトリの天使」完結です！とはいえ、本当の物語はここからスタートですが……
これからウスハとアキカを待ち受けるものとは？ここから異世界テッラの旅の始まりです！二人はテラスを倒せるのか？そして元いた世界に帰る方法を見つけられるのか？
ここからが本番！

次回から、隣国ノトスへ突入！そこで待ち受けるものとは？そして天使はいるのか？

ここまで読んでくださった方に感謝を、そしてお暇でしたら是非是非お付き合いを……！
まだまだ物語はこれからですので！

感想、ご意見、ご指摘、評価などを頂けたら嬉しいです！

EP8：　癒しの天使（前書き）

視点：杏樹明華（アンジュアキカ）

ノトス編に突入です！
ちょっとした長い説明が入ります。疲れちゃいましたらゴメンナサイ！

EP8：　癒しの天使

ノトスという国は、私達が喚び出されたアナトリと比べるとかなり大きな国です。そして、小さな集落の多いアナトリと比べ、大きな街が多いという分かりやすい位に違った特色を持つ国のようです。

そしてその土地柄も大分違うようで、乾燥した気候のアナトリと比べて、湿原や水地が多いのも特徴です。

私達がまっ先に目指したのは、首都パラディソス。其処に辿り着くには、野生テラス（テラスは集団を形成して行動するものの他に、個々に活動するものもいるそうです）の溜まり場となっている『エマ湿原』、険しい地形の『コカロ渓谷』という関門を越えていかないといけないようです。

途中にそれなりの大きさの街はあるそうですが、やはりその道が厳しいものであることには変わりはないでしょう。

……そこで、私が考案した魔法『フリューゲル』の出番です！

この魔法の原理は、簡単に言うと魔法による浮遊と移動という事象を『翼』という扱いやすいイメージで制御するというもの。

……まぁ、細かい理論は色々とありますが、要は普通に『翼を生やした』ということです。それを操作する筋力も、魔法で補うことができるので、人間である私でも飛行ができるというわけです。

これでまずはエマ湿原をすっ飛ばしてしまいました。ついでに、人を襲っているテラスに、ちょろっと落雷攻撃しながら。助けた人は、唖然とした様子で私と兄様を見上げていましたね。ちょっとあの顔は面白かったです。

魔法。憧れますよねやっぱり！実際使えるとこうも楽しいなんて！

と、子供っぽくはしゃぎたいのを抑えて……

「兄様。そろそろエマ湿原を越えます。確か小さな村がある筈なので、そこで休憩しても構いませんか？」

「ん？いや、お前のペースで構わないが……やっぱり疲れるのか？」

「え？に、兄様？……そんな、私のことを心配して？」

「まぁな。無理はするなよ」

素直に心配されて、ちょっと嬉しいです。

「いえ。体力的には問題ないんですが……まだまだ道のりは長いので、少しペース配分を考えて……」

「そうか。俺はお前の好きにしてもらって構わない。俺は抱かれてるだけだしな」

す、好きにして？じゃ、じゃああんなことやこんなことも……

…じゅるり。

「好きにしてってのは休憩のタイミングのことな？」

……ええ。分かってますとも。ちょっとした冗談です。夢見させてくれてもいいじゃないですか。

「あ、見えてきました。ひとまずちょっと離れた所で降りますね。直接降りたら騒ぎになりそうなので」

私はその羽を休めるために、村から少し離れた湿原の一角に、一旦着地しました。

一一一一

通行料や身分証明が必要となるのはまだまだ先のようで、この辺りは辺境の地といったような場所のようです。地図を見ただけじゃ分からないこともあるもの。流石に各地の情勢などを知る為の資料はマギア滞在中には十分に見つかりませんでした。

その村、アラク村は、ひどく寂しい静かな村でした。

「あんたら何処から来たんだい？まさかエマ湿原を越えて？」
「はい」
「そりゃたまげた。大したもんだねぇ。たった二人であの魔境を抜けちまうなんて……凄い魔導士さんなのかね？」
「そんなわけあるまいて。アルクダやら他のテラスに出会わなかっ

ただけじゃろ」
「アルクダ？」
村に入ってすぐに、おばあさんとおじいさんに声をかけられました。アルクダ、という名前に首を傾げると、おばあさんは説明してくださいました。
「アルクダってぇのは熊みたいなテラスのことさね。私らの倍近い大きさの凶暴なテラスさ。知性は低いからまだいいけども、その力は相当なものでね。出会ったら最後とまで言われるテラスだよ」
熊みたいなテラス？
「……お前が最初に黒焦げにしたやつじゃないか？」
「あ、あの馬車を襲っていた奴ですかね？」
「……黒焦げ？まさか、あんたら、本当にアルクダを倒したのかい！？」
「……証拠はないですけど。多分、もう消し炭ですし」
ほおお、と驚いた様子を見せたおばあさんとおじいさん。まぁ、信じてはもらえないでしょう。と、おもいきや……
「そりゃたまげたなぁ！大したもんじゃて」
「ありがとうございますじゃ……ずっと、わしらも首都に駆除依頼を出しておったんですが……いつまでも返事がこないで、怯えながら毎日を暮らしておったんです……！」
「これはお礼をせんと！ささ、どうぞ此方へ！お疲れでしょう！」
信じちゃいました。

「この世界の人間は皆素直かっ！」

兄様のツッコミに、初めて私は頷けた気がしました。

私と兄様はおじいさん達の案内で、村の中へと招かれます。小さな村で、大したものもなさそうですが、休む場所と多少口にできるものがあればアルマの回復は十分そう。まぁ、念には念を、その程度の気持ちで休憩を申し出たので、あまり休めずとも大丈夫ではありましたが。

「ささ、此方へ」

招かれたのは、少し古びた木造建築。扉を開けっ放しのその中に、私達は引っ張り込まれました。

そして、出されたのはおにぎりとお茶。随分と和風。

「大したものも御座いませんが……どうぞごゆっくり」

「ありがとうございます。いただきます」

「いただきます」

正直、びっくりはしました。これでも結構豪華なのでは、そう思ったのです。

この村は酷く寂れていました。勝手な偏見ですが、そう余裕がある村ではないのでは、と思っていたのです。

何処かの物語の小さな村は大体そういう事情を抱えているのでは、という思い込みです。

しかし、よくよく見れば、おじいさんもおばあさんも随分と健康的でした。やせ細っている……とかそういうことはなく。

「意外に豊かな村なんですかね……？」

おにぎりに齧り付きながら、ふむ、と呟くと、隣で兄様が不思議そうな顔をしていました。兄様の言葉を借りるなら、そういった事に興味を抱かないあたり、兄様は普通なのでしょう。

「美味しいですね」

「だな」

普通の、向こうにいた頃とも変わらないおにぎりを味わいながら、私はふと気になりました。例えば農業だとかにも魔法の技術は生かされているのでしょうか？決していいとは言えないこの辺りの気候や地質、にもかかわらず、こんなに立派なおにぎりを恩人とはいえ他人にほいと出せる余裕があるのには理由があるのでしょうか？

私は少し、この村を見てみたくなりました。……すぐに何かに釣られてしまうのは悪い癖かもしれません。少し反省。

でも、改めたりはしないのですが。

「御馳走様でした」

「御馳走様でした」

探究心に任せて、私はこの村のことを調べようとしました。

……しかし、その答えは、意外なまでにすぐに見つかったのです。

「いかがでした？」

「美味しかったです」

「それは良かった。今はとても作物の出来がいいんですよ。これも、グゼさんが村にお越しになってくださったおかげですじゃ」

「グゼ様？」

その名前に首を傾げた私に、おじいさんは開いた戸の先の畑を指差し、教えてくれました。

「あの子ですじゃ」

そこに居たのは、白く長い髪を垂らし、この村の質素なイメージとは掛け離れた白い法衣のような衣服を纏った、とても綺麗な女性。おじいさんの呼び掛けに、その女性は気づくと、その緑色の瞳を向け、淑やかに微笑みました。

一一一一

間近で見ると、その女性、グゼさんの綺麗さはさらに凄いもので

した。

綺麗な光沢を持つその白い髪をさらりと流し、おっとりとした印象を与える垂れた目、髪には負けるものの、それでも白い肌、可愛らしい淡い桃色の唇、目鼻筋はかなり整っており、全身からお淑やかな雰囲気を漂わせる……とても上品な美しさを持つ女性でした。

「初めまして……私、グゼと申します」

「初めまして。私は明華と申します」

「は、は、初めまして。明華の兄の……う、薄葉ですっ……！」

兄様が緊張している……っ！？

そんな……まさか……！なんで頬を赤くしているんですか！？まさか……兄様……グゼさんに……！確かに、グゼさんはビックリするくらいに綺麗だけど……でもそんな……！私の勘違いですよね？大丈夫ですよね？

「グ、グゼさん……き、き、きききき綺麗でしゅねっ！」

「え？……あ、有難うございます」

……兄様ァッ！！

そんな……他所の女性に兄様が取られちゃう……！グゼさんも綺麗と言われて頬を赤くしてるし……可愛いですけど！それに兄様、テンパリすぎです！噛んでます！いや！いや！そんな……兄様……っ！あれですか？おとなしい感じの、ふんわりした子が好みですか！？いや！いや！

悔しいっ……！

それは私が初めて抱いた感情でした。

「……グゼさんは一体この村で何をなさっているんですか？」

しかし、ぐっとその感情を抑え込み、私は今すぐ泣きながら此処を飛び出していきたいのを我慢します。

「……えと、この辺りはとても作物が育ちにくい環境ですので、ちょっと魔法での保護や成長促進の環境作りをお手伝いさせていただいてます」

「魔法でそんなことが出来るのですか？」

どうやら興味深い話のおかげで、私の負の感情は飛んでいってしまったようです。

「はい。魔法はアルマを使役する術。生命の源であるアルマを操れれば、あらゆる命を育むことが出来るのです」

「成程……魔道書でも見ませんでしたけど……確かに有り得そうですね」

「あ、魔道の分類としては『治癒術』にあたるものです。ちょっとした応用技術なので、一般に出回るような魔道書にはないかと」

「凄い！治癒術ですか！実は治癒術の記述が中々見つからなくて……」

「一般魔導とはジャンルが少し違うようですし……確かにないかもしれませんね。興味がありましたら……ちょっとした魔道書なら持ち歩いていますけれど……如何でしょう？」

「え？いいんですか！是非！」

「お、おいおいおいおい！全然話に付いていけないぞ！？俺も話に混ぜてくれ！」

……兄様ァ。

私が魔法の話をしても、全く食らいつかないのに……グゼさんが絡んだ途端にぃ……！！

……ええ、分かってますよ。私は兄様にとって、なんの魅力もない嫌な女ですよ……そりゃそうですよ、妹ですもの。

だからいいですも～んだ！……まぁ、説明はしませんけどね！

「あ、治癒術についてご興味が？」

「いや。俺、魔法ってのがイマイチ理解できないんだよなぁ……アルマとかチンプンカンプンでさ」

「ええ？あんた、そんなことも知らんのかえ？学校やら親やらに習わんかったんかい？」

おじいさんに驚かれてしまいました。兄様が馬鹿にされたり侮られるのは嫌ですけど……今回はざまあみろです！ふっひひ！気まずそうな顔の兄様も可愛くて好きですよ！グゼさんにも変な目で見られてしまえばいいのです！

「……私は其処まで魔法に精通している訳ではないので、上手く説明出来るかは分かりませんが……簡単な説明だけなら致しましょうか？」

「は、はい！是非！」

グゼさんは全く不思議がる様子も侮る様子も見せずに、首を傾け兄様に言いました。それに嬉々として頷く兄様。

……駄目だ。この人、人格者だ！……兄様に子供じみた悪意を向けた自分が恥ずかしくなってしまうレベルです。

「アルマ……というのは、簡潔に言うと『生命の源』のようなものです。人間や動物、植物、そしてあの偉業の魔物、テラスにも……命ある者全てに宿る……そうですね、命を支えるエネルギー、そう言ったら分かりやすいでしょうか？」

「凄く分かりやすいです！」

兄様ァ……！家でもそんなに真剣に勉強することないのにぃ……！

「命を支える程のエネルギー……それを用いれば、何か大きな現象を起こせるのではないか？それを、実際に実現したものが魔法という訳です」

「なるほど！」

なるほど！じゃないですよ！道中に私だっていっぱい魔法のお話してたのに！大体似たような説明を五回はしたじゃないですか！

「それを実現する手段としての呪文の話も交えると……ちょっとキリがないので割愛させていただきますね」

「いえ、全然！だいたいのことは分かりました！」

鼻の下伸ばしちゃって……！兄様の言葉を借りると、兄様は綺麗な異性にデレてしまう程度には普通なのです……！

でも、だからって……でも、だからって……！

「グゼさんの治癒術っていうのはその魔法の一種ですか？」

「正確には『魔導の一種』と言った方が正しいかも知れませんね。そういう意味では先程の説明は少し間違いかもしれません。先程の考えは、正確には『魔導』と呼ばれるものです」

こんなに積極的な兄様は初めてです……！男はやはり狼なのです

ね！なんでも「嫌だよ！」ばかりの草食系の兄様が、今や軟派な肉食系狼です！……だが、そんな兄様もアリなのが悔しいっ……！

「魔法も魔導の術の一つと言えますね。まぁ、最もポピュラーで扱いやすいので、魔法イコール魔導とい考える風潮が今は強いそうですし、あながち魔導を魔法と呼んでしまうのは間違いではありませんね。でも、正確に言うと魔導には他にも複数の術があるのです」

「それに入るのが治癒術……と？」

キリッ！とした表情で知った風な口をきく兄様。なんですかそのどや顔は！

……やだ、格好いい。

「はい。魔法は『アルマを変換し事象を起こす術』だとすると、治癒術（ユジュツ）は『アルマを生命力として与える術』と言いましょうか……要はアルマを元ある形のまま、元の役割のまま動かす術ですね。私も歴史には詳しくありませんが、実は成り立ちは治癒術の方が早く、その操作技術を発展させて、魔法という概念は誕生したとか……」

「すげぇ……じゃあ、魔法のルーツが治癒術というわけか！」

「あくまで説ですが、ね。それに、私は全く詳しくありませんが、魔導には他にも器術（キジュツ）、付術（フジュツ）などなど、数え切れない程のジャンルがあるそうです」

「へぇ～～～、グゼさんは物知りだなぁ」

「い、いえ……受け売りです。私もそう詳しくはないので……知っているのは専門の治癒術と魔法を少々程度……」

少し照れて頬を赤くするグゼさん。その、少し大人びた感じの綺麗な声が、少し小さなこ可愛らしい声に変わる様……兄様にド直球のようで。治癒術操る癒しの天使……そんな感じの立ち位置もド直

球なのでしょう。鼻の下伸びっぱなしです兄様……だが、普段の不機嫌そうな顔とのギャップもまたよし！

……私はさっきから何を興奮しているのだろうか？

「あ、そういえば治癒術の魔道書……」

放心状態の私に、グゼさんは思い出したように話を戻してきました。どうやらあまりいい表情をしていなかったようで、グゼさんは気を遣ってくださったようです。

……こんな良い人に、こんな顔をしてしまうなんて……嫉妬深い女ですね、私。そういうの、一番嫌いなのに……

「お借りしてもいいんですか？」

「ええ。私としても、治癒術を志す方が増えるのは喜ばしいことですので！治癒術の知識が広まれば、それだけ多くの生命が安息を得られるということですので」

天使、というのはこういう人のことを言うのでしょうか？その時、その笑顔に、その優しい空気に、私も思わず少し見惚れてしまいました。

でも、自分の器の小ささを恥じつつ、後悔より反省を。これくらいでは挫けません……！そして、正々堂々自分を磨き、実力で兄様を振り向かせて見せます……！

妬みません。でも、グゼさんは私のライバル……勝手に、対抗意

識を燃やすくらいはお許しを。

……なんて、一人相撲に励んで、ようやく気持ちも落ち着いて来た頃でした。

「じゃあ少しお待ちください……すぐに用意してきますので……」

その場から離れようとしたグゼさん。そんなグゼさんの前に、転がるようにして一人の男性が倒れ込んできたのが、その事態の発端でした。

「グゼ様……ようやく……見つけた……」

「……アルムさん!?」

鎧を纏った騎士らしき男。男は傷だらけの顔を上げ、駆け寄ったグゼさんにすがるように手を伸ばします。

「どうして此処に!?……それより酷い怪我……直ぐに治癒を……!」

「グゼ様……それよりも此処から早くお逃げ下さい……!奴等に……気付かれました……!」

「どうしたんですか!?一体何が……」

そして、私が外へ出ていこうとしたその時。

「見つけたぞ」

一つの男の声が、グゼさんの顔色を忽ち変えました。

表に出た私。そして後に続いて出てきた兄様。

グゼさんが顔面蒼白で見上げるのは、十人近い騎士を従えた、白い鎧を纏った中年の騎士でした。

「あ……あ……！」

「くっ……！早くお逃げください！」

「無駄だよ。まさか、貴様が生きているとは思わなかったなぁ……しかも、よくもまぁ大胆な行動に出たモノだ。逃げるなよ。抵抗すれば殺す」

その並々ならぬ雰囲気。

そして、白い鎧の騎士は、その槍をグゼさんに向けて、高々と叫びました。

「反国家団体エクスィレオスィ代表、グゼ……貴様を反逆罪で連行する！」

……どうやら国絡みの大きな事件に、私達は巻き込まれてしまったようです。

EP8：　癒しの天使（後書き）

ノトス編の始まりは、意外な事件に巻き込まれる所から始まる？
治癒術を操る女、グゼ。その素性とは？国家が動くその事件に、まだ高校生の兄妹はどう立ち向かう？
首都に辿りつき、二人は天使と出会えるのか？そして、元の世界に帰るヒントは得られるのか？
そして薄葉はグゼに惚れてしまったのか！？
波乱の次回へ続く！

白髪緑眼の美人、グゼ登場。デレデレ薄葉に、パニック明華……二人共ちょっと暴走気味ですｗ
そして、ちょっと解説回。簡単な魔導のお話が出てきました。ちらりと名前の出てきた魔導の一種。付術の登場は近いかもしれませんが、器術の登場は大分先になるかと思います。そして、他にも術はある？……こういう解説を載せた、用語集などもその内用意したいところです。それでも、本編中で簡単な解説は出ると思いますが。
色々と用語も出てきてややこしいかもしれませんが、ご了承を……
ｍ（＿＿）ｍ

Ｅｐ９：　エクスィレオスィ（前書き）

視点：救済団体エクスィレオスィ構成員、アルム

謎の治癒術使い、グゼの素性が明らかに？

EP9：　エクスィレオスィ

全てはグゼ様の、分け隔て無き慈愛の心が災いした。

我々、救済団体エクスィレオスィの目的は、恵まれぬ人々の救済。格差根付くこのノトスの体制を見直させ、全ての者に平等な恵みと救済を与える為に発足したという。俺は発足当初からのメンバーではないので、始まりに関しては詳しくないが、少なくともその理念は理解しているつもりだし、大きくそれには賛同している。

俺の村は流行病によって、深刻な状態に追いやられていた。そして、村を守る結界の不調により、小型ながらもテラスの侵入が相次ぎ、次々と村人は減らされていった。

中央に支援を申請しても、返事すらない状態が続いた。恐らくは俺達の村を囲うダクリ平原が、大型の野良テラスが潜む危険地域の為、切り捨てられたのだろう。

村人達が一か八かダクリ平原を越えて、大きな街に移ろうという判断を下そうとした時のことだった。

エクスィレオスィ、グゼ様が何人もの魔導士や騎士を引き連れて、村に訪れて下さったのは。

中央への申請は、却下という形で止まっていた。しかし、中央に隠れるエクスィレオスィの賛同者が、秘密裏にその申請の情報を流していたという。他の小さな村の通ることない申請も、全てがエクスィレオスィに流れ、グゼ様は組織を率いて、各地の村に回っていると言った。

流行病はグゼ様の優れた治癒術により、一日と待たずに全て取り払われた。
魔導士により、結界の修復も行われた。
騎士達は、グゼ様を護りながら、テラス達を追い払いながら、此処まで到達したという。

そして、驚いたことに、グゼ様率いるエクスィレオスィは、ダクリ平原のテラスを一匹たりとも殺さなかったという。
戦い傷つけたテラスでさえも、グゼ様はその治癒術で治療なさっていた。
本能に生きる野生テラスにも、恩を感じる心があるのか？

村の近くまで来ていた大型テラス、フィールは、まるで飼い慣らされた犬のように、グゼ様に擦り寄り、まるで人を襲う様子を見せなかった。

俺はその光景に衝撃を受けた。

まるで天使。中央に巣食う、王の駒であるあの黒い天使とは全く違う、慈悲深き真なる天使。俺も村人達も、皆がそう思った。

この方ならば、人もテラスも統一し、真に平等な理想郷を築けるのではないか？俺はそう思った。

元々、村の中でも多少は剣術や魔導にも精通している俺は、直ぐ様エクスィレオスィへの入団を志願した。グゼ様は拒まなかった。

グゼ様は手懐けたフィールを村に残し、人々と協力して生きてい

くようにと仰った。フィールは噺き、それに賛同したような素振りを見せると、それ以降は村の守護者として働くようになった。
テラス、フィールの持つアルマ量は膨大で、それは村に豊かな自然と恵みをもたらした。

そして俺は安心して、グゼ様に付いて村を離れることができたのである。

エクスィレオスィに入って、俺は驚愕した。
志を同じくする者は、想像以上の数だった。
元王宮勤めの騎士、ノトスでも指折りの魔導士などなど、相当な有力者も数多くいた。それこそ、俺程度の実力では、なんの役にも立てないほどに。

しかし、グゼ様はそんな俺の名前も呼んでくれた。志のみを共にする、動けない者の名前も呼んでくれた。

『人』を顧みない国とは、何もかもが違った。

グゼ様は、本当の意味で『天使』と崇められたのである。

そんなグゼ様に国が目を付けたのは当然の事だった。国は最初、グゼ様に王の下で働くように要求した。
しかし、当然グゼ様は断った。当然だ。何故ならグゼ様はこの国の在り方を憂いてエクスィレオスィを結成したのだから。

何も非難される謂れは無いはずだ。しかし、あくまで勝手な国は、強硬手段に出た。

エクスィレオスィの本部を襲撃し、グゼ様を連れ去ろうとしたのだ。

しかし、指折りの戦士が揃う本部を、甘ったれた中央の騎士共が落とせるはずも無く、その襲撃は失敗に終わったかと思われた。しかも、支持者の多いグゼ様に手を出したのだ。国中の反感を買った国家は、その体制を問われるかと思われた。

だが、王の下には『奴』が居た。そして、グゼ様は優し過ぎたのだ。

惨劇。エクスィレオスィの本部は、血の海と化した。

王がこの世に呼び寄せたという黒髪の天使、イツキの手によって。

俺もその剣技を目の当たりにして驚愕した。あれはまさに鬼神。その圧倒的な剣技によって、騎士も魔導士も、一瞬で全滅した。

唯一の奇跡は、グゼ様を連れて数人の構成員が、その場を脱出出来たことだろう。グゼ様は、剣を向けられながらもその場から上手く逃れることが出来たのだ。

その暴挙、許されるものではなかった筈だった。しかし、王は掴んでいたのだ。

グゼ様が、テラスの命を救い、意思を通わせて居た事を。

王はグゼ様を『テラスに与する悪魔』とし、国中に嘘の情報を流した。

テラスを率いてノトスの転覆を企んでいる反逆者として、王はグゼ様を指名手配し、我々エクスィレオスィを反国家団体に指定したのだ。

中央に近い豊かな都市に住まう者達は、忽ちそれを信じ込んだ。

彼等は、貧民を救おうとしているグゼ様に反感を抱いていた。自分達の優越感を奪い去る敵として。

彼等による我々の迫害はすぐに始まった。

構成員は追放され、時には暴行を受け、時には死に追いやられもした。仲間だったはずの数人はすぐに裏切り、仲間を売った。あれほどにグゼ様を支援していた者達もすぐに知らん顔で離れていった。

エクスィレオスィはバラバラに散り、グゼ様を護るべく、まだまだグゼ様を慕う地方へと逃れた。

グゼ様は涙を流しながら、犠牲になった同士の名前を連ねて謝罪した。

私が力不足なばかりに……私が勝手なばかりに……

その姿は余りにも悲しく、俺にこの方を護る意志を固めさせた。

そしてグゼ様は、散っていった同志達に報いる為にと、各地の村を転々とするようになった。誰も傍に付けずに、誰にも知られずに、ただ一人で……

それはこれ以上、同志を巻き込みたくないという意思からかはわからない。しかし、その御陰で、国も俺達でさえも、グゼ様の行方は分からなかった。

つい最近までは……

グゼ様がエマ湿原とコカロ渓谷に挟まれた辺境の村、アラクに居ることが、国にバレたのだ。密告があったのだという。

国の中心部に潜み、情報を収集していた同士からその報告を受け、俺を含めたエクスィレオスィのメンバーは、直ぐ様アラクへと向かった。

しかし、コカロ渓谷には、凶暴なテラス、アエトスが潜んでいた。アエトスの襲撃により、多くの人員を失った俺達に、更なる障害が待ち受けていた。

コカロ渓谷を抜ける直前、王の騎士団と遭遇したのだ。

奴等は不意を討つように、俺達に攻撃を仕掛けてきた。もう、逃げることしかできない俺達は、再び徐々に戦力を失っていき……

俺だけが、命からがらアラクの村までたどり着けたのだ。

しかし、すぐ後ろまで騎士団は迫っていた。そして、俺ももう戦えそうもない。俺はようやく見つけたグゼ様に、逃げるよう促すことしかできなかったのだ。

「さぁ、投降せよ！さもなくば殺す！許可は出ている！」

白い鎧の男、ノトスの騎士団でも上位に位置する実力者アニードが、俺に治癒術をかけようと駆け寄ったグゼ様に槍を向ける。

糞……！今は動けないというのに……！いや、動けたところでこいつに俺が勝てるはずもない……！

悔しかった。自分の弱さが。自分の情けなさが。俺に優しく添えられた、細く美しいグゼ様の手が僅かに震えている。

「……分かりました。付いていきます。だけど……アルムさんの治療が終わるまで、待っていただけませんか……」

「いけません、グゼ様……！ついていっては……！俺には構わず、早く逃げてください……！」

「そんなこと……できません……」

グゼ様は優し過ぎた。少しの犠牲も許せない程に。だから、今、俺を見捨てて逃げられないのも当然だった。俺には分かっていたはずだ。

そして、そんなグゼ様を弄ぶかのように、アニードはいやらしくその下卑た笑みを浮かべた。

「何を言っている？お前には選択権も、要求権もないことがまだ理解できていないのか？そいつはいらない。だから処分する。そして、お前は王の元へ連れ帰る。抵抗するなら処分する」

「『あの時』のように、なぁ？」

その言葉は、グゼ様の顔を一気に引き攣らせた。

俺はアニードの語る『あの時』を知らない。だから、グゼ様が何故其処まで顔色を変えるのかは理解できない。

しかし、こいつが許せない相手であることだけはすぐに理解できた。

俺は痛む体を奮い立たせて、アニードに剣を向ける。

「……やる気か？」

「グゼ様は俺がお守りする……！」

「……」

その時、背中にそっと手が添えられる感覚。それは、何度も味わったことのある優しい感触。

グゼ様の治癒術だ。

「『リーベ』」

鼓動が高鳴るのを感じる。グゼ様の暖かいアルマがその身に染み込むように流れてくるのを感じる。痛む傷からは痛みが失せ、上が

らない腕は次第に軽さを取り戻していく。
そして何より、その優しさが俺の感情を高揚させる。

行ける……！

そう思い、踏み出そうとした俺。しかし、グゼ様はぐっとその弱々しい力で、俺の首根っこを掴むと、後ろに引っ張った。不意をうつ行動に、俺は思わず後ろによろめく。
そして、グゼ様は、俺の前に立った。

「傷は治しました。これで走れますね？……逃げて下さい。私の事は気にしないで下さい。大人しくしていれば、何もされないのでしょうから……」
「グゼ様……！？何を言うのです！俺は戦えます！だから……！」
「止めてください！……もう、目の前で、同志が倒れる所を見たくはありません……！」

悲痛。それは余りにも悲しい後ろ姿。

俺には、この人を護ることができないのか？

無力を噛み締め、俺はがくりと肩を落とす。

「さぁ、私を連れていってください。もしも、アルムさんに手出しをしたら……私も『それなりの手段』を選ばせて頂きます。……王の『理想』は、私を生かして傍に寄せる事なのでしょう？」
「……『それなりの手段』、か。随分と大きな態度に出たな。貧弱な出来損ない風情が……お前はまだ勘違いしているようだ」

アニードの声が不気味に歪んだのに、俺は一瞬気付くのが遅れた。

「生かして連れるのはあくまで『理想』……『危険因子』であるお前を、私は殺しても一向に構わないのだよ！」

アニードは不気味に微笑むと、その槍を突き出し、グゼ様に迫った。

しまった！間に合わ……

「兄様ＧＯ！」
「おわぁっ！？」

間に合わなかった、そう思ったその時であった。突如、一人の奇妙な男がグゼ様の前に、アニードの前に立ち塞がったのである！

アニードは突然の事に驚き、思わず足を止めた。

「……なんだお前は？」
「え？い、いや俺は……おいおいおいおい！明華ァ……！何押してくれてんだ……ヤバいところに入っちゃっただろうが！」
「大丈夫ですよ兄様！格好いい所見せちゃって下さい！」

黒髪の男は、涙目で離れた所で声援を送る同じく黒髪の女に合図を送ったようだった。誰だ？何故出てきた？手ぶらで……

「……っくぅぅう……！ちくしょおおお！……お、おおやってやんよ！おいこらお前っ！グゼさんに何しようとしてんだぁ！」

「ウ、ウスハさん!?あ、危ないです!危ないですから下がって!」
「お、俺がグゼさんを護る!……あ、明華さん……もしものときは助けてくださいますよね?ね?」
……ガタガタ震えて何を言っているんだこの男は。アニードにこんなぱっとしない男が勝てるものか。
だが、その姿に俺は感銘を受けた。
勝てないからなんだ。意味がないからなんだ。
男なら、護ると決めたら立つものだろうが!
「……邪魔立てするならお前も処分するぞ?」
俺は意を決した。グゼ様に心配されようとも、期待されずとも、俺はグゼ様の為に、その前に立つ!
そして、俺は震える腕を持ち上げて、アニードに立ち向かおうとしたその時。
男を戦線に押し出した女は、小悪魔のような笑みを浮かべて囁いた。
「……言っちゃいました、ね?」
刹那、男はがくんと首を空を眺めるように傾けた!

アニードは驚き、びくりとその身を弾ませる！

そして、その一瞬の隙。いや、俺も驚き瞬きをしたそのほんの少しの時間。文字通り、目にも止まらぬ速さで、男はアニードの背後に、背中を向けて立っていた。

カラン！

アニードの手から槍がこぼれ落ちる。アニードは唖然として、槍を落とした腕を見下ろした。

腕は本来なら曲がらない方向に、曲がっていた。

「う、う、うあああああああああああああ！！！」

「アニード様！！」

後ろに控える騎士達が声を上げる。

それを牽制するかのように、虚空を見つめる黒髪の男は、ガクン、ガクンと振り子のように首を揺らした。

「格好つけて『処分する』という割には、人一人殺すほどの覚悟も出来ていなかったようですね。ま、そのお陰で腕が折られるだけで済んで良かったじゃないですか」

「な、何をした！？私に何をした！？……腕が！私の腕がぁぁぁ！」

「おのれ、よくもアニード様を……！」

「あ、やめておいたほうがいいですよ」

黒髪の女は、茶々を入れるように囁く。

「兄様、完全にスイッチ入っちゃってますから」

剣を構えた剣士達が、次々と剣を落とし、崩れ落ち、悲鳴を上げ始めたのはすぐのことだった。

腕を折られた者、脚を折られた者、鎧が粉々に砕け散り呻く者、残る十人近くの騎士が、一瞬で全員動きを止めて、叫び出したのだ。

「うあああああ！！」

「い、痛い！痛い！」

「た、たす、助け……息が……息が……！」

その男が何かをしたのは一目瞭然だった。

男は一歩も動かず、何もない虚空をただじっと見つめながら、冷めた目で、凍りつくような目で、まるで関心すらないような目で、ただそこに立ち尽くしていた。

何をしたのかは分からない。それほどに圧倒的だった。

「……あらあら。皆生きてるじゃないですか。全員口だけで、人を殺す覚悟が出来てないですね。兄様は向けられた殺意に応じて報復する。あなた達は人を殺すことがどういうことかも分からずに、剣を振るっていたんですね」

呆れ顔で、黒髪の女はアニードに歩み寄る。そして、その顔を見下ろすと、にっこりと微笑んだ。それは美しい笑顔で……天使のものにも悪魔のものにも見えた。

「……で、どうしますか？私、今見たところ、あなた方の方が悪役に見えて仕方がなかったんですけど……」
「ひ、ひいいいい！」
「……グゼさんになんの用なんですか？返答次第では、ちょっと私もキレますよ？」

アニードは震え上がった。その笑顔の裏に、どす黒いアルマが渦巻いている。それも、そこらの上級テラスとも遜色ない、強烈な密度のアルマが。その怒りを向けられていない俺でさえも、手が震えるのを感じた。

直接その敵意を向けられたアニードが、言葉を発する事ができなかったのもうなずける。このプレッシャーの中で、口を開ける者は殆どいないだろう。

「……返事がありませんね？……どうしてくれましょう。私の大切なお友達に酷い事をしようとしたあなたを……」

怖い。滅茶苦茶に怖い。この人、悪魔だ。怖すぎる。

アニードが震え、口をぱくぱくさせている。恐ろしい悪魔の威圧に、奴が壊れかけたとき、救いの天使は手を伸ばした。

「……アキカさん。もう、やめてあげてください」
「……グゼさん？」

グゼ様は、悲しげな瞳をアニードに向けて、そっと横たわる体に歩み寄った。そして、その手を体に充てがい、ふわりと優しい光を手に灯す。

「グゼ様……！？何を……」

グゼ様は、優しく、物憂げに微笑み、自身の暖かいアルマをアニードに流し込む。

「……腕、大丈夫ですか？」

「……！」

アニードの捻じ曲がった腕は、綺麗に元通りになっていた。アニードは目を見開き、腕をゆっくりと持ち上げる。先ほどまで、ぴくりとも動かなかった手は、指は、なんの問題もなく動いているようだった。

「お前……何故……！」

「……汚い取引を持ち掛けて申し訳ありません。しかし、此処は話を聞いて戴けないでしょうか？……残るお怪我をされた騎士様方も、きちんと治療致します。だから……今回は素直に引いて戴けないでしょうか？」

アニードは顔を引き攣らせた。

グゼ様は、自分に剣を向けた敵でさえも、癒すというのだ。

しかし、交換条件として、今は引き返すことを約束させて。

おそらくはその取引自体は、グゼ様の望みではなかったのでしょう。しかし、俺や割って入った二人の男女、この村の人間の事を思いやり、グゼ様はその取引を持ちかけたのでしょう。何処かその言葉を連ねる表情は、とても辛そうに見えました。

「私に……取引を持ちかけるというのか……！」
「……貴方様の立場は重々分かっております。しかし、私にも譲れないものがあります」
その言葉を発したグゼ様の表情は、とても強い意志を秘めたものだった。
アニードは僅かに表情を歪め、ぐっと唇を噛み締める。そして……
「……部下を、治療してやってくれ」
「……はい」
アニードは折れた。
グゼ様は、その顔に喜びの色も浮かべずに、走るようにしてアニードの部下達に駆け寄って、直ぐ様治癒術を展開された。
騎士達の体が、綺麗に元通りになり、その泣き崩れた表情が直ったのは直ぐの事だった。
「ありがとうございます……！ありがとうございます……！」
「申し訳ありませんでした……！申し訳ありませんでした……！」
奇跡の治癒術。その優しい温もりに触れた騎士達は、頭を何度も

下げて、涙を流しながらグゼ様に同じ言葉を繰り返し贈った。

「お礼など止してください……痛むところはもうありませんか？」

「はい……！ありがとうございます……！」

「よかったです……」

その優しい笑顔を向けられ、騎士達は惚けていた。

貴様らも知っただろう。グゼ様の素晴らしさを。慈悲深さを。天使の如き輝きを。

頬を染め、その笑顔に見入る騎士達。それを一喝したのはアニードだった。

「貴様ら！何を反逆者に頭を下げている！」

「ア、アニード様……！」

アニードはそのまま村の出口、コカロ渓谷方面に向かって歩き出す。

「グゼ。今回だけは見逃そう。しかし、これで貸し借り無しだ。礼は言わない」

「何を偉そうに……！」

黒髪の女が、敵意剥き出しで言う。アニードはそれに反応一つ見せずに、そのまま背中を向けて、立ち止まった。

「今回だけだ。……早く国の外にでも逃げるがいい。お前ほどの治癒術の腕があれば、どの国でも手厚く歓迎されるだろう。そうすれば、私達もお前に手出しはできない」

「アニードさん……」

アニードは顔も見せずに、静かに、殆ど聞こえない程の声で呟いた。

「……すまなかった」

騎士達は、慌ててアニードの後に続く。

その背中に、グゼ様は言う。

「私は……逃げません」

「……」

「この国の、病を治すまでは……」

後ろ姿で分からなかったが、何故かその時、アニードは笑ったように見えた。そして、奴らは去っていく。

こうして、グゼ様の危機は、黒髪の二人の悪魔によって、守られた。

悪魔に天使を守られるとは……おかしなはなしである。

恥を偲んでの願いだった。

黒髪の悪魔、アキカとウスハ。その二人に、俺は深々と頭を下げて、その頼みを申し付けた。

「アキカ様、ウスハ様……どうか、グゼ様を、グゼ様を首都パラディソスまで護衛して戴けないでしょうか！？」

二人はキョトンとした様子で、俺の話を聞いていた。

「無礼なのは百も承知！しかし、俺一人では、グゼ様をパラディソすまで送り届けることすら出来ません……渓谷に潜むテラスは、それ程に強力なのです」

「私からも……お願いします」

意外な事に、その懇願は、グゼ様の口からも飛び出した。

絶対に人を頼る事のないグゼ様が、初めて俺の前で、人を頼っていた。

「お二人を既に危険な事に巻き込んでしまい……取り返しのつかない事をしてしまって申し訳ありません。いくら謝罪しても、私の罪は償えないでしょう。その上でこのような事を頼むのは……勝手な事だとは理解しております」

「い、いや……別に大丈夫だよなぁ？……な、明華？」

「はい。あの程度、兄様と私にかかればなんてことありませんよ！」

力強い言葉で、全く気にした様子を見せない二人。人がいいのだろう。それは辛そうに言葉を紡ぐグゼ様を気遣っているようだった。

「でも、ひとつだけ、聞かせて下さい」

その言葉を紡いだのはアキカ。真剣な眼差しをグゼ様に向け、アキカは問うた。

「……首都に向かって、グゼさんは何をするおつもりですか？」

そのアキカの問いに、グゼ様は力強い視線と共に、強く、真っ直ぐに返答した。

「この国の病を治しに行きます」

それはグゼ様がいつからか語りだした理想。夢。

この国に巣食う、弱者を淘汰するシステムを作り替える。強者が幅を利かせる理不尽を問いただす。

グゼ様は、遂にそのために動き出そうとしていた。

「……黒髪に黒い瞳……あなた方を見たとき、もしやとは思っていました。しかし、先程のお力を見て確信しました」

「あなた方は、伝承に残る……天使様、ですね？」

天使？伝承？俺はその言葉の意味を図りかねた。しかし、アキカとウスハは驚いたように目を見開き、口を開いた。

「グゼさん……伝承を、ご存知なんですか？」

「はい。かつて世界を救ったという……黒髪、黒眼の天使の伝承。存じております」

アキカとウスハは顔を見合わせた。

「グゼさん。その伝承を記した書物は……」

「首都、パラディソスの王城、その書庫に安置されております」

どうやら、二人の目的は、首都にあるようだった。

グゼ様は、言葉を続けます。

「アキカ様、ウスハ様、どうか……小さい私めに、そのお力を貸しては戴けないでしょうか？世界を変えるその力の一端を、どうか国を変える為に貸していただけませんでしょうか？代償はいくらでも支払います……なので、お願いします……どうか、どうか……」

「堅苦しいのはナシですよ、グゼさん！」

アキカが笑顔で言う。

「私たち、もうお友達ですよね？楽しく魔導のお話したんですもん！治癒術の魔道書も貸してくださるんですよね？」

「え、あ……はい」

「グゼさんは、見返りを求めて貸してくれる約束をしたんですか？」

「い、いえ！そんなことは……」

アキカはぎゅっとグゼ様の手を握り、微笑みかける。その時、初めて彼女の顔は、天使のように見えた。

「当然！だって友達は、見返りを求めて付き合うものじゃないですから！困っているときに、助けてあげたくなるのが友達、ですよね？」

「そ、そうだぞ！俺もできる限りのことはするからさ！」

ウスハもその手をアキカと共に重ねる。

グゼ様はその頬を朱に染めて、その緑色の瞳を潤ませながら口元を緩めた。

「……ありがとう……アキカさん、ウスハさん……」

アキカは勢い良く立ち上がる。そしてその拳をぐっと握り、声高

らかに宣言した。

「さぁ！国盗り合戦の始まりです！兄様の伝説を、ノトスの歴史に刻み込んでやりましょう！」

「国は盗らねぇよ！？お前、何言ってんだ！？趣旨理解してんのか！？」

その気の抜けた遣り取りに、グゼ様がくすりと微笑んだ。

アキカとウスハ、悪魔のような天使が、グゼ様の友となった。

ノトスは確実に動き出す。

EP9：　エクスィレオスィ（後書き）

グゼとアルム、新しい仲間を加えて、薄葉と明華は首都パラディソスを目指し、コカロ渓谷へ！
凶暴なテラス、アエトスの待つ魔境を、二人はグゼを守りながら切り抜けられるのか？
次回、「コカロ渓谷」に続く！

黒髪の天使の伝承はノトスにもありました！そして、ノトスにも黒髪の天使が居る？
様々な伏線を残しつつ、ノトス編はまだまだ続きます！

ＥＰ１０：　コカロ渓谷（前書き）

視点：杏樹薄葉（アンジュウスハ）

難所、コカロ渓谷に突入！

ＥＰ１０：　コカロ渓谷

その時、俺に電流が走った。

俺の初恋は幼稚園での事だった。

相手は同い年の間でもアイドルだった美奈ちゃんだ。

勿論、俺はその恋心を吐き出すことなく、そのまま小学校に進むと美奈ちゃんとは離れ離れになった。

叶うどころか、破れることすらなく、俺の初恋は自然消滅するという、普通で情けない結果に終わってしまった。

俺は小学校でも恋をした。

その子、愛花ちゃんは落ち着いた雰囲気で、別段学校でも人気がある訳ではなかった。それは偶然か、それとも高嶺の花には俺のような一般人では手が届かないと本能が理解していたせいか、とにかく俺は今度こそは、と一年生の時から意気込んでいたものである。

……そして、俺の六年間は、意気込んだままで終わった。いざ、告白しようにも、アプローチしようにも、踏み出せなかった結果がこれである。

愛花ちゃんは俺とは違う中学に入ってから、ずいぶんと格好良い彼氏を見つけたようだ。そう、人気こそなくとも、普通の俺が好きになるのだから、普通に可愛い子ではあったのだ。

そして中学。

俺は恋をしなかった。

高校。俺は恋をしなかった。

気が萎えたのか、なんなのか……よく分からないが、そういった事を諦めている俺がいた。

どうせ、俺はぱっとしない。彼女とか作れるのは、普通よりかはイケてる男だけなのだ。何においても特徴のない俺には、評価されるべき部分がない。

それに、俺の隣でやたらと目を光らせている変態がいた。あいつに睨まれると、だいたいの女は逃げていく。いや、それ以前にあいつが隣にいると、俺の存在が誰にも感知されない。

もう恋なんてしないし！彼女とか面倒くさいだけだし！結婚とかしたら大変だし！

……なんて、モテない男同盟の残念な奴らと誓い、愚痴り、言い訳したりしながら……恋なんて忘れていた俺に衝撃が走った。

癒しを与える天使が其処にはいた。

「……どうかしましたか？」

「い、いえ、何も！」

白い髪を靡かせ、緑色のエメラルドのような瞳輝かせる可憐でお淑やかなその人、グゼさん。

俺は一目見た時から、その美しさに心奪われていた。

それが高嶺の花だと分かっていても、手が伸ばしたくなるほどに。
その花は美しかったのだ。

俺達は今、ココロ渓谷を歩いている。

岩ばかりで、横には深い奈落広がる恐ろしい場所だ。ガクブルものである。
まぁ、道は広いし誤って転落なんてことはないのだろうが、それでも横に顔を覗かせるのは気が引ける。

本来の明華なら、何とかっていう魔法でひとっ飛びなのだろうが、流石に三人を抱えて飛ぶことはできないらしい。
出来なくもない、みたいな事は言っていたが、この辺りに出没するというテラス、アエトスは空飛ぶ化け物らしく、流石に安全性と確実性を考えると、それは避けた方がいいと判断したらしい。

少し時間は掛かるが、まぁ俺はそれでも良かった。何せグゼさんと一緒に首都パラディソスを目指すことが出来るのだから！

「何にやけてるんですか兄様？」
「いや？何も？」

妙に視線の鋭い妹、明華。こいつは顔ばっかりいいくせに、お淑やかさが足りない（特に俺の前では）。それに対してこれを見てみろよ！落ち着いてるし、優しいし、綺麗だし……文句無しの百点満点だよ！

アエトスさん、出てくるなよ？出てきたら、俺、何もできなくて格好悪い思いをすることになるからな……出来るだけ、グゼさんの好感度を落としたくないんだよ俺。……いや、多少格好悪くても、グゼさんはそういう事で人を悪く思う人じゃないな！

「……ふぅ。ちょっと広い所に出ましたし、少し休憩しましょう」
「そうですね。体力は十分にキープして置かなければ、アエトスにも対抗できませんし」

少し開けた場所に出た。そして、明華は休憩を提案する。まぁ、あいつはフルマラソンを息切れなしで、笑顔で手を振りながら走り抜ける超元気な奴だから、体力的余裕が無いわけではないのだろう。どちらかというと、それは体力のなさそうなグゼさんに気を遣った判断なのだろうと思う。

いくつかある丁度良い大きさの岩を椅子にし、俺達は休憩することにした。

「グゼさん、汚れるんでこれを」

さりげなくハンカチを敷く紳士さを忘れない俺。

「あ、大丈夫ですよ。ウスハさんが汚れるといけないですからご自分で……」
「いえ。俺は大丈夫ですから」
「あ……ありがとうございます。ではお言葉に甘えて……」

申し訳なさそうに、グゼさんが腰を降ろす。その座る所作も可愛らしいなぁ……

あと、誤解のないように言っておくが、別にグゼさんに座らせたハンカチに対して俺が変な感情を抱くような事はない。決してない。これはただの紳士的な気遣いから来る行動だということを理解していただきたい。俺はノーマルだ！

「皆さん、少しお食事にしましょう。アラクを出発する時に、フィトさんから頂いたお団子がありますので」

ちなみにフィトさんとは、俺達にお握りを出してくれた素直なおじいさんの事である。俺はグゼさんが立ち上がって配る団子を、グゼさんの手作りだと妄想しながら、喜んでそれを受け取った。

「では、生命の恵みに感謝して……いただきます」
「いただきます」

グゼさんに合わせて手を合わせる。そして、早速一口頂くことにした。

「よく噛んで召し上がった方がいいですよ。その方が美味しくいただけますし、アルマの吸収効率もいいそうですよ」
「え？アルマの吸収効率？食べるとアルマ吸収出来るんですか？」

グゼさんのアドバイスに疑問符を浮かべる俺。するとグゼさんは優しく微笑み解説してくれた。やっぱり天使や。

「食事は生命を頂く儀式……食べる事はアルマを頂く行為です。食物も生命ですから、それを食せばそのアルマを頂けるのです。それは例えこのような姿になったとしても、命の輝きであるアルマは失われないのです」

「へぇ～～～食べれば回復出来るのか～～～」

「身を休めれば自然にアルマも体に溜まっていきますが、やはり何かを口にすると増幅量も違います。生命に感謝ですね」

つまりあれだ。体力とＭＰ（マジックポイント）を同時回復できるということか。なんと便利。……まぁ、俺には体力もＭＰもいらんのだが。非戦闘要因だしな。

「どちらかというと、体力とＭＰが同時回復というよりは……体力自体がＭＰみたいなものなんですよ兄様」

「そうなのか？……って、何心読んでるんだお前！？」

明華の解説。そして読心。やだこいつ怖い。

「そうですね。アルマは生命を支えるエネルギー。体力とも直結するものですから、アキカさんの仰る通り……感覚としては体力をＭＰに変換しているというものに大きな間違いはないと思いますね」

グゼさんも補足。……ってかグゼさん、あなたはＭＰ知ってちゃダメでしょ！

「しっかり食べねば魔法も使えない……しっかり休まねば魔法も使えない……体調面への気遣いは、戦いに置いて必要と言うわけだ！」

アルムさん、なぜ無理矢理入ってきた？そういえば、今回初のセリフだな。焦っていたのか？忘れられてるかと思って？

……とまぁ、グゼさんアルマ講座も程々に、ある程度の休憩を終えた俺達は再び立ち上がり、ココカロ渓谷を進んでいく。

それにしても何もない。テラスの一匹も出てこない。

「それにしてもテラスがいませんね。もしかして、アニードさんとその仲間達が倒して通っていっちゃったんでしょうか？」

明華が周囲を見回しながら呟く。アニード？誰だっけ？……ああ、あのおっさん騎士か！そう言えば何処行ったんだっけか？この言いぶりだと明華の奴、ボコボコにして屈服させて追い返したのか？……成程、かわいそうに。

「……アニードさん」

何やらグゼさんが意味深な表情をしているぞ？なんだ？そう言えば、グゼさん、確かあのおっさんに槍向けられてたよな？それなのになぜ、心配そうな顔を？……はっ！敵にも気遣い忘れぬグゼさん……まさに天使！

それにしても物憂げな顔も御美しい……

「何にせよ、テラスが出てこなくて良かったではないですかグゼ様！この分だと、何事も無くコカロ渓谷を越えられそうですね！アエトスもいなさそうですし！」

おい、アルム君。変なフラグは立てるな。そんなこと言ってたら、バーン！とアエトスってテラスが出てくるかもしれないだろ？

全く、フラグはそんなに立てるなと……

バサァッ……

「……エサ、ミツケタ」

クチバシだけでも人一人の大きさはありそうな巨大な鳥。奈落の底から這い上がるように、その鳥は巨大な羽音を立てながら俺たちの目の前に姿を現した。

「……ア、アエトスだっ！！」

アルム君いい加減にしろ！なんというフラグ回収速度！本当に出てきちまっただろうが！にしてもデカいな！しかも何か不吉な言葉を喋ってますよ！食われる！

赤い羽に身を包む金色の目の怪鳥型テラス、アエトスは、バサバサと羽撃きながら、値踏みするように俺達を見渡す。

「……エサ、エサ、エサ、エサ……！」

ヨダレ垂らしてる！食う気満々だこいつ！エサしか言ってない！

「よし！兄様ＧＯ！」

「無理だよ！お前がやれ！あの雷ドッカンアタックみたいなので！」

「……エサァァァァ！！」

アエトスが羽を羽ばたかせる。すると強烈な突風が吹き荒れた！

「うお！？やばいやばい！」

「くっ……！グゼ様には指一本触れさせん！はぁ！」

アルム君がブン！と剣を放り投げた！

……剣、投げんなよッ！！

アエトスは普通に避けた。

ダメだ。この人、アホの子だ！こうなったら明華に何とかしてもらうしか……

「はぁ！」

アルム君、謎の掛け声。
すると、剣は回転しながら宙を舞い、ぐるりとUターンすると、
アエトスの背中に突き刺さった！

「ギャアアアアアア！」

アエトスの悲鳴が響きわたる！
アルムさん、今の技だったのか！意外とやるよる！

しかし、アエトスもその程度では落ちはしない。さらに羽撃きを加速させ、強烈な突風を巻き起こす！

ゴオオオオオオオオオオッ！

「クエエエエエッ！」
「く……！」
「ヤバいヤバい！」

アエトスの突風は、それこそ直接的にダメージを与えるものではない。しかし、多少広いとはいえ、すぐそばは谷底というこの足場では、かなり驚異的な攻撃になる。立つこともままならない嵐の中、俺達は動けずにいた。
俺も、アルムさんも、グゼさんも伏せるようにして風を凌ぐ。

そして、あの明華までもが、膝をついていたのだ。ヤバい、こいつが余裕がないということは、結構ピンチなんじゃ？

「『ケラヴノス』」

ゴロゴロゴロゴロッ！！

嘘です。こいつ、伏せながら余裕で呪文を唱えてました。最初に馬鹿デカいテラスを消し炭にした時と同じように、上空に雷雲が渦巻き始める。

そして、ゴロゴロと激しい音を立てながら、遂にあの雷の槍を降り注がせた！

ピシャァッ！！

迫る雷の槍に、アルムさんは驚愕していた。そして、槍はアエトスの背中に目掛けて直進し、その体を消し炭に……

ヒュンッ！

できない！？

アエトスは、何と雷の槍をすんでの所で回避した！奈落の底で、雷の槍が轟音を轟かせる！明華の魔法は、不発に終わったのだ！

アエトスは、そのまま回避に使った移動スピードを増しながら、俺達を中心に円を描くように上空を飛び回る！心なしかブツブツ喋ってるのは気のせいか？

「『ネロポンディ』」

気のせいじゃなかった！

アエトスが描いた円の中心から、光の雨が降り注ぐ！あの鳥、魔法使ってきやがった！

「『アスピダ』！」

対抗するのは明華の魔法。淡い光の盾が、アエトスの光の雨を受け止める！

ズドドドドドドドドド！

激しい音を立てながら、光の雨が無力化されていく！そして、その無数の攻撃は、最後まで明華の盾にヒビ一つ入れることなく、終了する。

そして、明華の動きはこれだけでは終わらなかった。

「『フリューゲル』」

素早い呪文詠唱。そして、明華は間髪入れずに翼を生やし、飛翔する！

「と、飛んだ！？」

アルムさんが再び驚愕。明華は空に浮かび上がり、アエトスと対峙する。あいつ、あの鳥に空中戦仕掛けるつもりか！？

「……ちょっと、危ないですね」

明華が珍しく緊迫した表情をつくる。それだけこのテラスが強敵だということだろうか？

「……そう来られると、私がやらなきゃいけなくなるじゃないですか」

私がやらなきゃいけなくなる？いまいち言っている意味がわからなかった。明華は此方を見下ろすと、大きな声を上げる。

「兄様！アルムさん！グゼさんを護っていて下さい！アエトスの狙いはグゼさんです！」

何？グゼさんが狙い？

何を根拠に明華がそう言うのかは分からないが、あいつは根拠もないことをはっきりと言いはしないし、それなりに行動に意味をもたせる。あいつの言う事を聞いていれば間違いない、それだけは長年の付き合いとして、俺も認めていた。

「私はこの鳥、ちゃちゃっと焼き鳥にしちゃうので♪」

めっちゃ頼りになりますぜ明華さん！ウインク一つ、アエトスに掌をかざすその姿は、負ける気がしなかった。

「キエエエエエエエエ！」

アエトスが明華目掛けて飛翔する！その高速の突撃を、明華はひらりと落ちるようにして回避する。

ブオッ！

アエトスが飛翔すると、渓谷の岩が砕け飛び散る！俺はグゼさんに降りかかるその破片を、背を盾にしてガードする！

「大丈夫ですか、グゼさん！」
「無理はなさらないで下さいウスハさん！」
「大丈夫、大丈夫……！余裕だっての！」

本当は多少痛かったが、受けるつもりでいたら幾分かマシである。そして、何より、情けないが俺にはこれくらいしか出来ることはなかった。

ぽわりと俺の腹の辺りに暖かい感覚。
気付けばグゼさんが、俺の腹に手を当てて、何やら呪文を唱えて

いた。

「『リーベ』」

暖かい感触が流れ込む。そして、わずかに痛む背中から痛みが消え失せ、心地よい感覚が心を満たす。

これが……グゼさんの治癒術か。

「……ごめんなさい。私には、これしか出来ないんです……」

「ありがとうございます……十分心強いですよ！」

グゼさんに降りかかる破片を俺は防ぐ。

しかし、飛ぶだけで岩が砕けるなんて……あいつ、どれだけ強烈な風を起こしてるんだよ……！明華は大丈夫なのか？

「……ちょっと五月蝿いですね」

明華は余裕の表情だった。風によって、傷一つ受けずに空を舞う。アエトスの突撃をひらり、ひらりと躱し、掌の指輪をかざす！

「『デスマッチ』」

瞬間、明華の指輪から放たれた光の檻。それがアエトスと明華を包み込むように広がる！まるで明華とアエトスを隔離するように広

がった檻の壁、それに飛翔の勢い余ってアエトスが激突し、悲鳴を上げる！

「ああ、この結界はそう簡単には壊れませんよ？これで一体一、余計な風で兄様達は傷付けられませんよ？」

不敵な笑みを浮かべ、明華は球体状に広がった光の檻の底に降り立つ。

「さ、文字通りのデスマッチ。何処からでも掛かって来なさい」

完全に隔離された空間。それはアエトスの自由な飛行さえも封じ込めているようだった。ここからはワンサイドゲームである。

「キエエエエエ！」

叫びを上げて、翼を激しく動かすアエトス！ゴウ！と強烈な音を立てるその強烈な暴風を前に、明華は自身の背中に生える翼をひと振り。

ふわり、と風は一瞬で勢いをなくす。

「要は風の支配率。大きいだけで、風を全く制御出来てないけど？」

明華は反撃と言わんばかりに、翼を一回だけバサリとはためかせる。すると、今度は強烈な暴風がアエトスに襲いかかる！

ゴウ！と風が暴れ、アエトスはバタバタと慌てるように翼を動かし壁に叩きつけられる！

ああ、何か可哀想になってきたなぁ……

空を支配する鳥のテラスが、今や文字通り篭の鳥である。明華は相変わらずおっかない。

「……オノレ、オノレ、エサ、エサ！」

アエトスが叫ぶ。

「……もしかして、あのテラスは……」

その時、俺の傍でグゼさんが呟いた。そして、グゼさんは俺とアルムさんの護りを抜け出し、谷底スレスレまで巨大な光の篭に駆け寄り、声を搾り出すように叫んだ。

「アキカさん！ちょっと待って下さい！」

「グゼさん！危ないって！」

明華はくるりとグゼさんを振り返る。突然、グゼさんは何を言い出すのか？そんな感じの表情で。

俺でさえ驚いた。まさか、あのテラスを想って？いやいや、俺達を食いにかかるテラスだぞ？いくらなんでも……

グゼさんはぶら下げた袋に手を入れる。そして取り出したのは……

「もしかしたら……これが欲しいだけなんじゃないでしょうか？」

団子である。

「グ、グゼさん……？それは流石に……」

明華が引き気味に口元を引き攣らせている。……グゼさん、もしかして不思議ちゃん？いや、それでも俺は一向に構わないけど……

「クエッ！エサ！エサ！」

アエトスさんが何やら騒ぎ始めました。ヨダレを垂らしながらグゼさんを見ています。

「え？いやいやいや……まさかね？そんな、可愛い話あるわけ……」

「これ、いりますかー？」

「イル！」

グゼさんの問いかけに、アエトスは元気に返事をした。

―――

「ごめんなさい……すっかり忘れていました。以前此処を通ったときに、ケガをしていたテラスを治療して、食べ物を分けて差し上げたんです。その時にちょっと懐かれちゃいまして……この子はその時のテラスだったようです。私の事を覚えていてくれたようですね。しかしこの子がアエトスだったとは……」

「クエー！ダンゴー！ダンゴー！エサー！」

アエトスは、ツンツンと団子をつつきながら声を上げる。

「こらこら、ピーちゃん。私はエサという名前じゃないですよ。私はグゼです」

「エサー」

グゼさんの話によると……

以前、グゼさんはアラクの村へ向かう途中、此処を一人で通ったという。一か八か、かなりの覚悟を決めて此処を通ったグゼさんは、道の途中で小さな（とは言っても人の大きさ位の）ケガをしたテラスを見つけたという。これは今話していて気付いた話なのだが、どうやら本物のアエトスはその当時、既に何者かによって討伐されていたようだ。今、こうしてどう考えたって小さすぎる団子をつついてるアエトスは、どうやらアエトスの子供のようで……

グゼさんはその子供（グゼさん命名、ピーちゃん。可愛い）に治療をして、「鳥のエサはないですけど……」と、少しだけ持っていた食料をあげたらしい。その時、グゼさんは妙にピーちゃんに懐かれてしまったらしく、暫くピーちゃんが食料を自分で取れるようになるまで、面倒を見ていたらしい。

そして、ピーちゃんがエサを取れるようになった頃、改めてグゼさんは村へと向かったという。ピーちゃんの目を盗んで。

「まさか、ほんの少しの間に此処まで大きくなっているとは思いませんでした……」

全くである。グゼさんがピーちゃんの面倒を見てから一年も経っていないという。人の大きさから、此処までになるって、どんな成長スピードだよ！

しかし、ピーちゃんの背中に乗り、突き刺さった剣や、明華のイジメによるダメージを癒すグゼさんの無邪気な笑顔は、とても可愛らしかった。まさに、天使である。

「グゼさんには敵わないなぁ……まさか、テラスを手懐けちゃってたなんて」

明華が感心したような、呆れたような溜め息を漏らし、苦笑した。それに、グゼさんは微笑みながら返す。

「動物型テラスは、人間でいうような悪い感情を持っているわけではないんです。ただ、少し飢えているだけ。恵みのないプルトナスから来て、恵みを欲しているだけなんです。そこに悪意なんてなくて、ただ貪欲に欲するだけ。だからこそ、恵みを共有すれば分かり合うこともできるんです」

傷を全て治療し終え、グゼさんはピーちゃんの頭を撫でた。まるで子を見る母のように、その微笑みはとても優しかった。

「クエー！エサー！ドコイクー！」

ピーちゃんは、ほんの少しの団子で満足したらしい。デカい割に超小食である。

「これから……そうですね。まずは渓谷途中のランフォスの街に向かうところです」

グゼさんの言葉を聞いたピーちゃんは、バサバサと翼をはためかせる。

「クエー！ランフォスシッテル！ココカラトオイ！」
「そうですね。少し遠いですね」
「ノレー！オクルー！」
「え？」

ピーちゃんはクエクエ鳴きながら、グゼさんに顔を寄せる。

「ミンナノレー！ランフォス、スグツクー！ピーチャン、ハヤイー

！」

どうやら乗せていってくれるらしい。なんという桃太郎。キジとかいうレベルじゃない怪鳥が仲間になってしまった。

グゼさんはくすりと微笑み、ピーちゃんの頭を撫でる。やっぱり、こういう動作にきゅんと来てしまうんだよなぁ、可憐だ。

「じゃあ、お願いしますね。でも、街に近づきすぎると怖がられちゃいますから……少し離れた所までお願い出来ますか？」

「クエー！マカセロ！オロスバショ、ソコデオシエロ！」

俺達は難なくコカロ渓谷の中間地点までを無事に越えられそうである。

Ｅｐ１０：　コカロ渓谷（後書き）

コカロ渓谷のテラス、アエトスが仲間になった！これで一同は無事にコカロ渓谷の中間地点、ランフォスへ！
一同がランフォスで起こす行動とは？

リアル桃太郎グゼさん！お腰につけたきびだんご、一つ私にくださいな♪
あっけなくアエトスことピーちゃんも手懐けて、コカロ渓谷の序盤も乗り切りました。途中の街ランフォスを越えて、コカロ渓谷はまだまだ続きますが……
ちなみに薄葉のスイッチが入らなかったのは、ピーちゃんの興味がむいていなかったから。グゼの懐の団子の匂いにしか興味がなかったようですｗ　明華も薄葉のスイッチが入らなかった事から、そのターゲットが他にあることを判断した、という訳です。意外と便利な薄葉の特性……
次回はランフォスに突入！そこではどんな問題が？

よろしければ感想、評価、ご意見、ご指摘、などなど、なんでもお寄せください！

全話の前書きでミスのご指摘が有りましたので、修正いたしました！

Ｅｐ１１：　セルセラコミュニティ（前書き）

視点：杏樹明華（アンジュアキカ）

道中はまだまだ……

Ｅｐ１１：　セルセラコミュニティ

ピーちゃんに近場まで送って貰って、予定よりも早くランフォスに到着した私達。

ランフォスはそれなりに大きな街では有りましたが、コカロ渓谷内に佇む街、流石に辺境の地といった様子で、まだまだ通行許可がなくとも通れる場所のようです。

通行許可が必要となるのは、この先、コカロ渓谷をに抜けた先の落ち着いた場所、『ジヴォート平原』から。この辺りとなると、主要都市が密集し、大分警備が厳しくなります。

そこで、そこに辿り着く前に、私達はとある問題を解決しなければなりませんでした。

「グゼさんもアルムさんも、今のままだとパラディソスに入れませんよね？」

そう。二人は反国家組織の認定を受けたエクスィレオスィのメンバーです。グゼさんの人柄と行動、彼女達に対するノトスの騎士団の態度などなど、それらから私はグゼさんが反逆罪に問われる悪人だとは思えなかったし、その事の説明は既に受けていて、私は私の中でエクスィレオスィという人を救うために生まれた組織が悪だとは思えませんでした。

しかし、世間の目は違うという現実。
どれだけ高い志を持とうとも、世間が認めなければそれは『悪』。
罪人と扱われるグゼさんとアルムさんが、検問所を抜けられないのは事実です。
彼女達をどうやって、ノトスの門の先に渡すか……それはかなり難しい問題となっていました。

「それなら俺に考えがある」

それはアルムさんの提案。

「ランフォスには『コミュニティ』の支部がある。そこでメンバー登録を行い、新しい偽の身分証を作る」
「「コミュニティ？」」

揃って疑問の声を発する私と兄様。やだ、私と兄様、息ピッタリ／／／／

……と、冗談は置いておいて、私達はアルムさんの提案に上がった、『コミュニティ』について、此処で初めて知ることになりました。

一一一一

『セルセラコミュニティ』、通称『コミュニティ』。
それは、一言では表現しにくいですが、あえて言うなら『便利屋組織』。
歴史に名を残す人物、セルセラの作り上げた組織です。

コミュニティにはいくつかの顔があります。
まずはメインの『便利屋』。
コミュニティの支部は世界中に点在しており、その各所で様々な種類問わぬ『依頼』を受け付けているそうです。依頼には報酬を出す必要はありますが、基本的にコミュニティはどんな仕事でも受け付けるそうです。それが例え戦争の傭兵募集であっても、窃盗であっても、暗殺であっても……構わず受け付けてしまうそうです。それを聞いた時は驚きましたが、あくまで『基本的に』。その基準についてはのちの特徴と絡みます。
出されたい依頼は、依頼に関わる場所の近場のコミュニティの依頼掲示板に、報酬内容と共に記載され張り出されます。
それは、コミュニティのメンバーが報酬を見て、仕事内容を見て、その依頼を受けるかどうかを判断し、各個が仕事に取り組みます。
つまりどんな仕事を依頼しても問題ありませんが、受けてもらえるかはメンバー次第、というわけです。

……そして、着目すべきは、このメンバー。
何と、メンバーには誰にでもなることができるのです。

各支部でコミュニティ参加申請をすれば、どんな立場の人間でもコミュニティに参加することができます。身分も素性も問わずに受け入れてくれるそうです。まぁ、審査はあるそうですが……

メンバーとなれば、コミュニティメンバー会員証が与えられ、そ

れはコミュニティが設置された全国での身分証として機能するのです！

しかもコミュニティは全国にあるので、これ一枚で国への申請などがなくても各国の入国審査を突破できるスグレモノ！

これじゃあ悪人に利用されるのでは？と思いましたが、それなりの審査があるようですし、しかもその問題点も実はこのコミュニティの重要な意味を含んでいるそうです。

コミュニティは社会貢献を目的とした慈善団体のようなもの。此処に所属し、依頼をこなしながら社会貢献することを条件に、過去に何かを抱えた人間でも社会復帰のチャンスを与える……そういった意図もあるからこそ、こういったシステムをとっていろのだそうです。まぁだからこそ、一定期間依頼をこなさなければその会員証は失効するらしいですが。

なんにせよ、グゼさんもアルムさんもこのコミュニティの会員証さえ入手すれば（勿論、身分を偽る必要はありますが）、上手く立ち回ることで、パラディソスへの道も開けるかもしれない、というのがアルムさんの提案でした。

そして、このコミュニティに加入することは、私達にとっても大きなメリットが有りました。

まずは、その会員証は、『全国共通で承認される事』。

これから旅を続ける上で、アナトリで発行された身分証は効果を持たない場面も出てきます。アナトリの身分証を認めていない国もあるそうですから。その時に、この会員証があれば、大体問題はないそうです。

そしてコミュニティのもう一つの特徴、『情報網』。
コミュニティには多くの情報が集まるそうです。それこそ、何処かの王様の晩ご飯から、国家の根幹を揺るがす重大な情報まで、様々な情報が。そして、メンバーはその情報を自由に買い取ることが出来るそうです。まぁ、ちょっとした制限はありますが。
勿論、あるかどうかは分かりませんが、私達が元の世界に帰るためのヒントも十二分に見つかる可能性があるでしょう。

とまぁ他にも色々と美味しい部分や注意すべき点などがまだまだありますが、なんにせよグゼさんとアルムさんの抱える問題を解決するにあたって、これ以外には別段方法も見つからないので、頼らざるを得ないのは事実。それに、依頼をこなす手間があれども加入しておいて損はないでしょう。

というわけで、私達は早速身を隠すようにコミュニティランフォス支部に転がり込みました。勿論、グゼさんとアルムさんにはちょっとした変装をしてもらって。

コミュニティは一見酒場のような場所でした。
扉を潜ると、カウンターの奥の女性がハキハキとした声をあげました。

「いらっしゃいませー！依頼ですか！？それともコミュニティ参加希望者ですか！？」

女性は何やら白い仮面を付けていました。目の部分にも、どこにも穴の空いていない、ただただまっさらな白い仮面。一瞬見たときびっくりしましたよ。のっぺらぼうかと。

「コミュニティ参加希望だ」

アルムさんが前に出る。ちなみに、ちょっとした変装としてサングラス着用と、髪の毛をちょっとした魔法で赤く染めてツンツンに立てている。我ながら随分といい変装をさせたものだと思う。凄く格好いい。

「おい、明華！やっぱりアルムさん怪しすぎるだろ！」
「え？普通ですよ？」
「お前のセンスに脱帽だわ……」

何故、兄様が呆れているのかは知りませんが、取り敢えず全員でカウンターに歩み寄ります。仮面の女性は表情こそ見えませんが口で「ニッコリ！」と言っていましたので、おそらく笑ったのでしょう。

「わお！新人さん来ましたー！ようこそ、セルセラコミュニティへ！私はセルセラコミュニティ窓口係兼情報管理係兼案内係のジアミエンと申します！今後とも宜しく！私、各地のコミュニティに居ますので！」

ジアミエンさんが奇妙な事を口走ったが、スルーしておこう。今はコミュニティ加入が先決である。
ジアミエンさんは鼻歌交じりに、カウンターをごそごそと漁り、四枚の紙を取り出した。

「まずはこの誓約書にサインを宜しくお願いできます？ああ、名前とかはいりませんから！メンバー志望者の素性は探らない決まりになってますので！ＹＥＳかＮＯに指を押し当てるだけでＯＫです！」

『あなたはセルセラコミュニティに加入することを希望しますか？』と書かれた紙には、下にＹＥＳとＮＯの二つの選択肢が刻まれている。丸い円に囲まれたこのスペースに指を押し当てるらしい。

……しかし、名前も聞かないとは……無用心というか無神経というか……もしも会員証を使って悪事を働かれたりしたらどう責任を取るつもりなのだろうか？

「ちなみにこんな適当な申請で、悪事を働かれたりしないの～？とか思っちゃってたりしたらその点はご安心を！コミュニティの網は広大ですので、そんな良からぬ考えは見透かされちゃってますから♪本当にヤバい事を考えてる人間は、セルセラの名にかけてメンバー名簿からデリートです♪」

……釘を刺したというわけですか。グゼさんは大丈夫なんでしょうか？

「気になさらなくて大丈夫！変装してる位なら、気にしませんよ♪例えそれが世間の目から見たら悪党とされている方でもね？」

この人、見抜いている？その上で何も言及しない？ちょっと警戒したほうがいいのでしょうか？さっきからやたらと心を見透かしてきてますし……

私達は警戒しつつ、当然のように『ＹＥＳ』に指を押し当てました。すると、その部分には淡く光が点ります。

「はいはい認証しましたー！ごめんなさいね？アルマカラーだけはちょっとサンプル取らせてもらいますよ？これでどこにいてもコミュニティは皆さんの居場所がまるわかりです！」

「発信機でも付けられたみたいですね」

「そんな感じですかね？ま、あなた達の情報を悪用したりはしないから！プライバシーのなんとやら、ってやつ？なっはは！」

急にフレンドリーな話し方に切り替わるジアミエンさん。

「あ、何？フレンドリーな態度が引っかかる？まぁまぁ、いいじゃんいいじゃん♪今日から私達はセルセラの名のもとに集うファミリーでしょ？仲良く行こうぜマイブラザー！」

どうやらメンバーとして受け入れたという証だそうです。本当に入れちゃったよこの人……助かりますが、こっちが不安になってきます。

「さてさて、早速会員証を配布しないとね♪……がさごそ……ホレ！」

口でがさごそ言いながら、ジアミエンさんが取り出したカードを私達一人に一枚ずつ放り投げる。そこにはセルセラコミュニティのシンボルらしい、鎖を纏った天使の姿が描かれていました。そして右下にはなにやら『０』という数字。そして裏には『Ｅ』の文字……

「一応、セルセラコミュニティ独自技術のアルマ認証で所有者は確認できるけど、不安だったら名前書いてねー？」

「あの……この右下の数字はなんですか？それに裏の『E』というのは……」

その疑問を投げかけたのはグゼさん。ちなみに少し目立つ白い髪に魔法で比較的目立たない青色を着色（ノトスには青い髪の人間が多いそうです）。さらに緑色の瞳も青に。そして、髪はポニーテールに。そして、おまけにメガネを一つ（この世界にもメガネはあるそうで）。はい、中々に可愛らしく仕上がったと思います。……兄様が相変わらず鼻の下を伸ばしっぱなしな位には。あと、目立つ法衣も一般的な服装に変更しました。

ジエミエンさんは「なはっ！」と笑うと頭をこつんと叩きました。

「いっけねー！うっかり！それ、結構重要だったね！」

「てへ♪」と口に出すジアミエンさん。特徴的な人である。

「実は今、その会員証、失効してるんだった！」

「えええ！？それってどういうことですか！？」

私の問い掛けに、「まぁまぁ落ち着いて」と手で制し、ジアミエンさんは自分もカードを取り出して、ぴらりと見せてくれました。

「この右下の数字、これはコミュニティメンバーカードの有効期限！この数字の日にち分だけ、メンバーカードは有効になるよ！例えば検問を越えたり、コミュニティの情報網を使ったりね！他にも特典はあるけどまずはスルー！」

「これが０って事は……検問も越えられないのか？」

「イエス、ミスターアルム！ご名答！」

アルムさんをびしりと指差すジアミエンさん。……アルムさん、名乗ってない気がしましたが。

「それじゃ困るよね？そこで登場、『クエストポイントシステム』！テッテレー！」

「クエストポイントシステム？」

「イエッス！」

この人、やたらとテンションが高い。しかものっぺらぼうである。怖い。

「各所から集められた依頼……それをこなす事で、提示された報酬に加えて、コミュニティからそれに見合った『クエストポイント』を支給する！それが直接有効期限に結びつく、それが『クエストポイントシステム』！」

「つまり働かなければ恩恵は受けられない……そういうことか」

「働かざるもの食うべからず！それ、社会の常識だね♪……要は悪人でも善行を積まないとダメって訳よ。そして、イイ事したら、悪い気持ちもぶっ飛んじゃうでしょ！はい、人類皆平和！めでたしめでたしハッピーニューイヤー！」

「ジアミエンさん適当にしゃべってますよね？」

「ＮＯ！といったら嘘になるかな？ええやないのええやないの！ファミリーなんだから！」

ジアミエンさんの適当なしゃべりは無視して、取り敢えず分かったことは、『依頼をこなさなければ会員証は機能しないということ』。つまりは最初に一つ、何か依頼を解決しなければカードは使えないということです。

「まぁ、その数字は日に日に減っていくけど……裏面の右下辺りに

は今までの獲得クエストポイントが加算されてくからね！それで如何にその持ち主がコミュニティに貢献しているかがわかるよ！そして、そのクエストポイントには更なる秘密が！」

「勿体ぶらずに早く言えよ！」

「落ち着け地味男君！地味な男でジミオ君！ジアミエンさんはお喋りが大好きなんだ！だから、無駄に口を開くけど許してチョンマゲ♪さぁさ、このクエストポイントとは！」

兄様が凹んでいます。ジミオ君が効いたみたいです。落ち込む姿も可愛いです。

「なんと貯まるとそれに応じて景品が！コミュニティに貢献したものへのご褒美だよ！あ、景品表はあっちの掲示板を見てね♪……そして、貯まれば貯まるほど……この裏面の『ランク』がアップしていくのです！」

ジアミエンさんのカードの裏には『A』の文字。それがランクらしいです。

「Eから始まりAまで、さらにはその上S、SS、SSS！ポイントを貯めればカードのランクはアップ！Bから上は、ポイントによるカード失効はなくなっちゃう！そして、ランクによっては提供されない情報や依頼もあるので、ランクアップはコミュニティ内での立ち回りには必須だよ！」

これが『制限』というわけです。コミュニティに居ても、欲しい情報や恩恵を自由に受けられる訳ではない。それを得るには、数多くのクエストをこなし、コミュニティの信頼を勝ち取ることが必要と言うわけです。

ある程度の評価を得るまでは、依頼解決に追われる……そういう

システムで、コミュニティは回っているのです。

ということは、グゼさんアルムさんは兎に角、情報を求める私達はこれから沢山の依頼を解決しなければならないわけで……この旅は人助けの旅にもなりそうです。それもアリ、ですかね？

まぁ、今の時点では、カードを有効にするために、何かの依頼を兎に角一つ解決することから始めなければなりません。

「ま、取り敢えずは頑張ってみて！あっちにある依頼掲示板から好きな依頼書をカウンターに持ってきてね！そしたら依頼を受けられるから！あ、ちなみに四人で受けるなら、報酬とクエストポイントは四分されるから、もしも何日かかけて首都に行くなら、四人分のカードが有効でいられるだけのクエストポイントの依頼を選んでね？複数回受けても構わないけど」

「……ご親切にどうも」

全てお見通しという訳ですか。しかし、それならこのコミュニティの温いシステムにも納得です。

セルセラコミュニティは絶対の自信を持っている。

だからこそ、利用される事はないと踏んでいる。

「あ、最後に言い忘れてた！」

「なんですか？」

ジアミエンさんは、仮面の下にその表情を隠しながら、「にやり」と口に出す。

「偉大なる始祖、セルセラの名の下に私達はあるってことをお忘れ

なく♪セルセラの名を汚すことは、断じてないよう。コミュニティが世界に認められているのは、全てセルセラのおかげなのだから」

セルセラ。それがどんな人物なのか？それともそれは本当に人なのか？それさえわかりませんが、その名前がこのコミュニティでは絶対なのでしょう。

そして、その名前があるからこそ、こんなずぼらな体制が許されている……世界にそんな犯罪者でさえも匿う組織が認められているのだ。

この世界の事はまだまだわからないなぁ……

そう思いつつ、私達は依頼掲示板の前に移動しました。

依頼掲示板に張り出された依頼は実に様々。お使いから護衛、テラス退治に捜し物、子供のお使いのようなものから危険なものまで多種多様。しかし如何にも危険そうな依頼は高報酬ですが低ランクだと受けられないようです。

つまり私達が受けるべきは、四人で分けても十分なだけのクエストポイントが支給される依頼。二、三日で着くはずですが、出来ればもっと余裕を持ちたいところ。

しかし、中々にＥランクＯＫの依頼にはいい感じのクエストポイントのものがありません。よくて１０ポイント、これだと余裕がありません。

「仕方ない……妥協してこれを……」

アルムさんが一枚の紙に手を伸ばそうとした時、すっとその目の前に手が伸ばされました。
その手は目の前に一枚の依頼書を貼り付けたのです。

「ん？」

全員がその依頼書に注目します。

『ＥランクＯＫ！報酬２００００リコ！簡単なお仕事です！』

そう書かれた依頼書。隅のクエストポイント額には４０の文字。

「これは……かなりいい感じなんじゃないですか？」
「報酬もかなり……ＥランクＯＫの割には相当だぞ？」

ちなみにリコとは世界共通の通貨単位です。以前お店を見た限りでは大体１リコ＝１円みたいな感覚でしょうか。

「報酬を四等分して十日分。これは大分余裕がありますね。しかも依頼一つで２００００。四人で分けて５０００。かなり高額ですね」
「これはかなりきつい仕事なんじゃないか？」

四人でその依頼内容を凝視します。その依頼内容とは……

『最近肩がこっちゃって……肩揉みヨロシク～♪　Ｂｙカウンターのジアミエンさん』

隣で紙を張り出した仮面の女性がピースする。

「イェイ♪」

その背後に、何枚かの依頼書を握っているのは見え見えでした。

……この人。自分の肩揉みさせるために、高額依頼全部剥がしおった！

「ジアミエンさんのお使いクエスト～♪新人に優しいジアミエンさんは、新入りには特別な依頼を与えているのだ！」

「新人に毎度肩揉ませてるの！？」

「いんや～！たまには腰も、あと牛乳買ってこいとか、掃除しろとか……」

「パシリじゃねぇか！」

「パシリで一人十日、割高でしょ？」

白い仮面の奥で「にやり」と一声。

……コミュニティ奥の休憩所で、何人かの大男が、「またジアミエンさんの新人イビリだ……」とか「また職権乱用だ」と言っています。

……どうやらコミュニティにおいて、このジアミエンさんは相当の厄介者のようです……

ーーーー

ジアミエンさんの岩のように硬い肩を、私と兄様とアルムさんは、彼女が「いい」と言うまで揉まされました。ちなみにグゼさんは兄様とアルムさんが「いいですいいです俺がやります！」と積極的に代わりを申し出たので、あわあわしてましたが無理矢理下がらされたようです。……一応、私もレディなんですが。いや、一応じゃなくてレディですね。

「まだまだ～～まだこりまくってるわ～～～。岩のように硬いっしょ？」

実に二時間。ぶっ続けで肩揉み……ジアミエンさんは全く「いい」と言いません。

結局、グゼさんが治癒術で肩こり治療を施して、ようやくジアミエンさんは「すっきりした～」と終わりの許可を出しました。……グゼさん、最初からやってください。

ジアミエンさんは最後に、肩から肩パットを取り出して、うい～、とオヤジ臭い声を漏らしました。

……ん？何かおかしいですよ？私達、ずっと肩揉んでましたよね？

「ほらほら、依頼達成～。カード出して～」

私達は黙ってカードを差し出しました。すると、ジアミエンさんはポンポンと下から取り出したスタンプを押し付けます。するとカードに記載されたクエストポイントが１０に変化しました。

「これで十日は持つからね～。ゆっくりとパラディソスを目指すといいよ。あ、あと報酬の２００００リコ」

差し出された四つ分けの袋を受け取る私達を見て（目が見えているかはわかりませんが）、ジアミエンさんは「くっくっく」と笑います。そして、頬杖を付きながら、「にやり」と笑みを浮かべました。

「それと可愛い新人にジアミエンさんからの入会祝いね。面白い情報を一つあげよう」

その指を私と兄様の頭に交互にさすジアミエンさん。そして、その情報を、まるで私達の行く道を見抜いているかのように、示しました。

「黒髪、そう黒髪。首都パラディソスに入る前の防衛ライン、ノトス砦に『黒髪の天使』が待ってるよ」

「天使……！？」

「名前はイツキ。伝承の天使にして、ノトス一の超一流の剣術使い

だ」

天使イツキ、黒髪の伝承の天使。ジアミエンさんの情報を真実と受け取るのなら、この国に天使の伝承があることはまず間違いないでしょう。その天使からも情報を得られるやもしれません。見えてきた光に、思わず頬を緩めかけた私は、隣でグゼさんの顔色が急変した殊に気付きました。

青ざめた……何かを恐れているような表情。その天使の名が、彼女を震え上がらせたようでした。

一体何が？

そして、ジアミエンさんは全てを見透かすように更なる不穏な情報を続けます。

「残念ながら、話し合いで仲良しこよしとはいかないかな？君達は、イツキとの衝突を避けられない」

「……その天使と、戦わなければならないということですか？」

「ご名答。いや、誰でもわかるか」

天使と戦わなければならない？話し合いは無駄？それは何故？

……グゼさんの様子を見て、薄々は気づいていました。恐らくは、グゼさんと何か大きな関わりがあると。

エクスィレオスィという反国家組織の代表、彼女には敵が多そうでした。故に天使が敵対してもおかしくはない？それとも何か因縁が？

考えるだけ無駄でした。震えるグゼさんから、無理に聞き出す気

も起きません。

「厄介な相手になるだろう。だから、首都を目指すのなら、ジヴォート平原のナガーの街を通るルートじゃなくて、フテルナという村を通るルートをおすすめするよ。ナガーにはノトス軍の兵士が配置されているからね。相手していたら体力を無駄に消費する。流石にそれだとイツキは手に負えないだろうからね。それに何やら怪しい団体の代表を探しているようだよ？」

つーんとそっぽをむいて、わざとらしい態度を取るジアミエンさん。本当にどうやら事情を知っているようです。

「……なんでそんな情報をくれるんですか？」

私は尋ねました。

「信じるも信じないも君ら次第だよ。タダで貰った情報に縋るか、それとも罠だと思って無視するかそれも自由。ただなんで情報をくれるのか、と聞かれたら私はこう答えるかな」

ジアミエンさんが「キラーン」と呟き、顎の下に指を当てる。

「肩こりのついでに腰のコリも解してもらった分の報酬だ。中々の治癒術、気持ち良かったよ」

ジアミエンさんの突き出した手はグゼさんにむいていました。グゼさんはその手を握り、握手をします。

「……それに私は善人じゃないからね？ちょっと国が荒れる様を見てみたかったり……そしたらコミュニティに入る依頼もぐんぐ

ん増えて、ガッポガッポの大儲け……って、これ以上は怒られるかな？」

「でへへー」と笑って、ジアミエンさんはぱっとグゼさんの手を離しました。どことなく、グゼさんの表情が固い気がしたのは気のせいでしょうか？

「さ、またのお越しを新人君。依頼をガンガンこなしてセルセラの名を、是非とも世界に轟かせる礎となってくれたまえ！」

「色々とありがとうございました！」

「君たちも対価を払っている。お礼はいいっこなしだ」

私達は、その怪しい仮面の女性と順番に握手を交わし、コミュニティを後にします。

そして、私達は、再び首都パラディソスを目指して前進します。

Ｅｐ１１：　セルセラコミュニティ（後書き）

セルセラコミュニティという要素の説明みたいな話です。今回は、グゼとアルムの検問突破手段の獲得みたいな役割しかありませんでしたが、明華と薄葉のこれからの旅においては結構重要な要素になってくると思います。少し怪しいジアミエンさん、彼女が象徴するように、立ち位置が非常に怪しいにも関わらず世界的な信用を得ている理由はのちのち明らかになるでしょう。

そして、まだまだ続く道中話もそろそろおしまい？次回、一同はノトス砦にたどり着く？

ノトス編がそろそろ動き出すターニングポイントです。
ちなみにノトス編は、導入のアナトリ編よりも大分長くなる予定です。

ＥＰ１２：　遭遇のノトス砦（前書き）

視点：救済団体エクスィレオスィ構成員、アルム

ＥＰ１２：　遭遇のノトス砦

無事にセルセラコミュニティでメンバーズカードを入手した俺達は、もしもの場合に備えて、足早にランフォスを離れる事にした。カードの期限は十日。確かに長いが、何かトラブルに巻き込まれた場合、それでも安心できるかどうかと考えると、なるべく急いだ方がいいという結論に至った。ゆっくりと依頼をこなしてクエストポイントを稼いで期限を伸ばせばいいかもしれないが、逆にそこまでの時間が掛かるとは思えない。

アキカとウスハ兎に角、俺とグゼ様はパラディソスに到達出来ればそれでいい。それまでの門をくぐれればよかった。

「私達も少し急ぎたいですしね。もしかしたら、黒髪の天使も砦にそう長くは留まらないかもしれませんから」

アキカはどうやら『奴』に会う気満々のようだった。

確かに、アキカとウスハ、その二人が居れば、『奴』に十分対抗出来るかもしれない。しかし、それでも理想は奴との接触を避ける事だった。

「……アキカ、出来ることならイツキとの戦いは避けたほうがいい」

「別に接触したから即戦闘とはいかないですよ。それに万が一、向こうがやる気でも……兄様は当然の事、私だって負ける気はさらさらありませんよ？」

「あいつを舐めるな……あいつの強さは本物だ。一国の治安を、その腕一つで取り戻すほどの化け物だぞ」

「じゃあ兄様の前には世界が平伏しますね」
「俺は一体何者だよ！」

それはこっちのセリフである。この兄妹、本当にグゼ様の仰る通りの天使なのか？

アキカはまだその特性が見える。

彼女は、異常なまでのアルマ量を誇っている。それが彼女の底なしの体力故なのかは分からない。そして、異常なまでの魔法バリエーションがある。普通の魔導士は、魔法を使うにしても、せいぜい魔具（ヴィヴロス）に呪文短縮を記憶できる二、三個……多くても五、六個の魔法しか扱わない。それはそれなりの魔導士を名乗る者が使うレベルの魔法ともなると、呪文の長さが洒落にならない事が大きな原因となっている。

魔法はその効力に応じて、それを構成するのに長く複雑な呪文が必要となってくる。それは幾つも暗記するには労力を費やしすぎる程に、そして一々唱えていたら数分も時間をロスする程に。

そのため、実践を見据えて魔導士は、魔具（ヴィヴロス）に『呪文短縮』の機能を組み込むことになる。これは魔具にあらかじめ魔法の構成手順を記憶させる事で、呪文の余計な部分のカットをはかるものである。呪文は魔法の設計図を読み上げるようなもの、故にこのようにして呪文の大幅短縮が可能となる。

これにより、余計な暗記は必要とせず、短い呪文でそれなりの効力を持つ魔法を発動させることを可能とする。

しかし、魔具にも容量がある。組み込める機能には限界があるのだ。その為、魔具にもよるが、呪文短縮の機能は多くて六個ほど。つまり魔導士は魔具に記録した少量の魔法を駆使して戦うのだ。そしてそこから、アルマ負担を抑える機能なども組み込めば、使える魔法はさらに減少する。故に実際の魔法の使い分けはさらに数が少

ないだろう。
それでも、わずかな魔法で解決できる状況は多いので問題にはならない。しかし、理想をいえば、バラエティ豊かな魔法を打ち分けることが出来るのが望ましい。

アキカはそれを成し遂げる稀有な魔導士の才を持つ。

彼女はあろうことか、難解で長い呪文を、正確に、複数暗記しているのだ。そして、それを操る滑舌というべきか？それも異常なまでに優れており、恐ろしい早口詠唱で魔法の発動を可能にしている。そして、呪文短縮のスペースをアルマ軽減に回すことで、彼女は持ち前の大量のアルマを用いて、強力で臨機応変な魔法を自由にうちわけ乱射するという、驚異の『魔法弾薬庫』となるのだ。
一人で一国の魔導兵団に匹敵する性能。確かに驚異的、天使というのも頷ける。

しかし、それだけではとてもイツキに勝てるとは思えなかったが。

そして、問題なのは兄のウスハ。こちらはまるで理解が及ばぬ存在だった。

感じ取れるアルマ量は極めて希薄。それを扱う手段も持っていない。

しかし、強い。理不尽に強い。彼はただ、出鱈目に速く、出鱈目に強いのだ。

それを身体能力だけで成し遂げているとでもいうのか？俄かには

信じがたいが、それぐらいしか思いつかない。なぜなら彼からアルマの放出を感じ取ったことは一度もない。

普段は臆病で、いまいち頼り甲斐のない地味な印象。しかし、イツキに勝てるとしたら、俺は彼しか居ないと思った。

とても天使には見えない。しかし、強い。

彼らが天使であろうとなかろうと、俺達は彼らに縋るしか、国の牙に対抗する術はなかった。

コカロ渓谷の支配者、アエトスさえ居なければ、コカロ渓谷は大した難所にはならない。どうやら、アエトスというのはこのコカロ渓谷に複数存在するらしいが、グゼ様が手懐けた一匹のおかげだろうか？他のアエトスは愚か、危険な野生動物にも、テラスにも全く出会うことなく、俺達はコカロ渓谷を突破した。

そして到達したジヴォート平原。この辺りになると、テラス対策もかなり行き届いており、危険なテラスと遭遇するという可能性は激減する。道の整備もある程度整い、交通機関も通い出すが、エクスィレオスィに属する身、変装こそしているが、周囲の目を避けたい事とコミュニティで得た情報を頼りに、俺達はジヴォート平原でも交通機関の開通していない少し外れにある村、フテルナを目指すことになった。

コカロ渓谷からフテルナまでの道は、まだ整備されていない少し

荒れた道である（それでもコカロ渓谷に比べればまだ落ち着いた道だが）。そして、フテルナ、コカロ渓谷間の道自体が、あまり需要のあるものではない事もあり、道中で人と出会うことはなかった。テラスも見かけず、野生動物も居ない……これが長閑なピクニックなのでは、と思う程に静かで落ち着いた道中だった。

しかし、グゼ様の表情はずっと沈んだままだった。

それもあの黒髪の天使、イツキの話を聞いてからである。

確かに、イツキにはただならぬ因縁がある。グゼ様は目の前で同志をやられ、さらにはご自身もその刃を向けられたのだ。奴を恐れるのも無理はない。

しかし、何故かそれ以外の理由があるような気がしてならないのは気のせいだろうか？それこそ、俺も知らないグゼ様の過去……何か根深いものがあるのではないか？グゼ様のその暗い表情の奥底に、俺は何かがあるような気がした。

「見えてきましたよ」

アキカの言葉で、俺はグゼ様にずっと向けていた意識を前方に戻す。そこには、それなりに大きな村、フテルナが見えてきていた。

一一一一

フテルナは『フィラフトの葉』の栽培で有名な村である。フィラフトの木から取れる葉は、日の光を浴びてアルマを生成する特性を持っているので、しばしば魔具（ヴィヴロス）の作成に使われるのだ。アルマ軽減の機能を担う素材として、比較的安価なこともあり、需要が高い。

そして、太陽がある限り咲き続けると言われるフィラフトの花は、この村の名物として、ノトス観光の名物の一つともされている。

俺達は、フィラフト茶を振舞う茶店に入り、一時の休息を味わっていた。

「フィラフトの花、綺麗ですね～」

ずずずとフィラフト茶を啜りながら、アキカが表に生えるフィラフトの木を見上げている。とても、これから天使と戦うことになるかもしれない状況の雰囲気ではない。

「アルムさんもそう硬い表情しないでくださいよ。物事には落ち着いて、リラックスして臨まないと」

「多少の緊張感はあってもいいと思うんだが」

「……それにしても表情硬すぎですよ」

アキカは俺の耳元で囁く。

「……グゼさんの様子がおかしいの、気付いてます？」

フィラフトの木、その側まで歩み寄り、その花を見上げるグゼ様。

その姿を眺めながら、アキカは溜め息をつく。

「……信用されてないんですかね。秘密を抱え込まれちゃって。まぁ、話したくない事もあるとは思うんですが」

アキカは茶をちびちびと飲みながら、ぽかんとした表情を浮かべる。呑気そうな先程までの空気は一転していた。物憂げな、何処か何かを心配するような表情。

「……天使、イツキでしたっけ。その天使が、グゼさんにあんな表情をさせているのだとしたら……私、一発くらいぶん殴ってやりたいですね」

「アキカ……」

「……ま、私と兄様が万に一つも劣る訳ないじゃないですか。だから、グゼさんに余計な心配をさせる必要、ないですよね？」

アキカを少し誤解していた。

俺はてっきり彼女はかなり優秀だが兄が大好きすぎるだけのひょうきんものなのかと思っていた。優秀故の余裕、天才故にああまで平気でいられるのかと思ったが、どうやらそうでもないようだった。むしろその裏では、誰よりも深く他人の事を考えているのではないか。

「強がりではありませんよ」

じっとその横顔見ている事を気取られたのだろうか。アキカはにやりと得意げな笑みを浮かべた。

「兄様も、私も、まだまだ『切り札』どころか力の一端も見せていませんから」

……本当だとしたら恐ろしい話だ。あれ程の規模の魔法を乱射していて、あれ程現実離れした動きを見せておいて、あれがまだまだ力の一端ですらない？
冗談だと思いたいくらいだ。

どちらにせよ、その笑みには、俺の心配を払拭する程の明るさがあった。

フィラフトの木に手を当て、グゼ様が花を見上げる。その美しくも儚い姿を見て、アキカの強さを見せつけられ、俺は改めて決意する。
役には立てないかもしれない。しかし、必ずグゼ様の支えになろうと。

「……さ、十分に休めたら、向かいましょうか」
「ああ。イツキが居る……ノトス砦へ」

ノトス砦、パラディソスに向かうためには避けては通れぬ関門。
そして、其処にはやはり『奴』が居た。

一一一一

フテルナ、ノトス砦間のルートは、それなりに整備の行き届いた道がある。フィラフトの木の輸送ルートがあり、首都直通のこの道の需要は高く、それなりに人通りも多いはずだった。

しかし、人は居なかった。全く、誰一人。

まるで俺達を通すように、その道は開けていたのだ。

『奴』は待ち構えていたのだ。あえて、誰も差し向けずに。

見えてきたノトス砦。その門の前に奴は居た。

「……どうだ？ノトス観光は十分に楽しんだか？」

身軽なノトス軍将校の服に身を包み、その腰には刀形状の魔具（ヴィヴロス）。肩ほどまで垂らした、世にも珍しき黒い髪。そして、鋭く、猛獣をも意殺すような鋭い目。その顔の凛々しさからは想像もつかない程の、野性的な威圧。

腕を後ろに組みながら、奴は……王の最強の駒、天使イツキはただ一人で門の前に立ち塞がった。

「……グゼ。あの時、折角見逃してやったというのに……未練たらしくノトスに残ったかと思えば、反逆を企てノコノコと戻ってくるとは」

「……イツキ」

その鋭い視線に射られたグゼ様が、恐れに染まった視線を返す。そして、グゼ、イツキ、名前で呼び合う二人。

「……話はアニードの奴から聞かせて貰った。黒髪の強靭な戦士が、貴様の護衛に付いていると」

「あなたが天使、イツキさんなのですか？」

アキカはその威圧に一切屈することなく、前に出る。イツキはその鋭い目をぴくりとも動かさずに、淡々と口を開く。

「天使、か。この世界に呼び出された伝承に従うのならば、そういう事になるのだろうな。そういう貴様らも同じなのだろう？」

「そうなりますね」

アキカはまだまだ前に出る。奴のリーチをまるで恐れていないかのように。その顔に余裕の笑みを浮かべながら。

「……実は私達、元の世界に帰る方法を探しているんですよ。あなたも元の世界に帰りたいとは思いませんか？私達、協力できると思うんですけど」

話し合いを持ちかけるアキカ。どうやら最初から戦うつもりはな

いようだ。しかし、奴は王の犬。例えアキカの話を聞き入れても、グゼ様を見逃す筈もない。一体どうするつもりなのか？

イツキはアキカの語り掛けに、初めて表情を崩した。

それは嘲笑。イツキはアキカに呆れたように笑った。

「交渉を持ち掛ける気か？交渉に易々応じたあの駄犬共と私を一緒にしない方がいい。私は誰にも唆されん。そして、貴様は何やら勘違いしているようだが……」

イツキは腰の刀を抜き放つ。

「私は元の世界に帰りたいなどと、一度たりとも思った事はないッ！」

「……いきなり刀を抜くような人とは、話し合いの余地はなさそうですね」

アキカはその指輪型の魔具（ヴィヴロス）をかざすように手を伸ばす。

戦う気か！

アキカのアルマが激しく渦巻き、周囲に言い知れぬ圧力を生み出す！そして、アキカは口を素早く動かし呪文の詠唱を初め……

どさり……

そのまま魔法を発動させる事もなく、その場に静かに崩れ落ちた。

「……アキカ？」

倒れたアキカの隣には、瞬きする間も与えずに、音も無くイツキが立つ。

馬鹿な。あれ程の距離を、全く気取られずに移動したのか……！？

「安心しろ。貴重な天使、殺さずに連れ帰るよう指示を受けている。気絶させただけだ」

「おい明華！？冗談だろ！？お前、何してんだよ！？」

アキカは動かない。ウスハの必死の呼びかけにも応じることなく、その場で倒れ伏せている。

そんな馬鹿な。イツキは此処までの力を持っているのか……！？

完全に予想外。想定外。アキカが此処まで早く倒されるなんて……！

「……巫山戯た規模の大砲をぶち込もうと企んでいたようだが、詠唱などという無駄な動作があれば、私に追いつける筈もない。攻撃に三秒も時間を掛けているようでは……私の前では十回死ぬぞ？……もう聞こえてはいないか」

「くっ……おのれ……！」

俺は剣を構え、イツキに切りかかろうとした。しかし、それは許されない。

「『構える』、その動作がある時点で五回は死ぬぞ」

一瞬。俺が剣を抜き放ち、前に持ち上げるまでの一瞬で、俺の剣は『五回』斬られていた。五つの線が入った剣は、カランカランと地面に転がり落ちる。

「な……あ……！」

イツキは俺に目もくれず、通りすがり際に強烈な足払い。一瞬で空がひっくり返り、俺は地面に倒された。

強すぎる……！

「……『付術』。アルマで事象を引き起こす魔法とは違い、『アルマで物質に性質を付加する』魔導。固くする、強くする、そんな単純な操作しかできないが……詠唱の必要もなしにアルマコントロールだけで成し遂げられるこの魔導は……『速さ』で魔法を圧倒する！」

イツキは自らその力を明かす。そして、その上で勝利宣言をした。

「ノロマな魔導士風情が私に勝てるものか。付術無しで、私に勝てると思うなよ？」

付術、魔法よりはシンプルなものの、魔法と違い、サポートシステムのない魔導。それゆえ需要が低く、使い手も少ないこの魔導が、イツキの武器だとは思わなかった。付術は確かに使用者の身体能力向上などの力を与えるが、アルマコントロールはかなりの難関。僅かに重いものを持てるようになる程度の効力しかないはずだ。

目にも止まらぬスピードの実現、剣を斬り裂く程の斬撃を繰り出す力、其処までの強化が本当に可能なのか？

これがが天使……全てを圧倒する存在……！

不味い。このままでは……！

「……貴様も天使か？」

イツキの声色が変わった。何事かと、俺は声の方向を向く。

其処には、グゼ様の目の前に、グゼ様を庇うように立つウスハがいた。

「黒髪黒眼、しかし貴様からは気迫が感じられない。アルマの反応も弱い。本当に天使か？」

「天使じゃねぇよクソッタレ！」

ウスハは震えていた。

怯えた様子で、それでもイツキを睨みつけながら。

「……震えているぞ。天使で無いなら、一般人は帰れ」
「うるせぇ！グゼさんには指一本触れさせねぇぞ！」
「……其処まで存在が希薄な癖に、そいつを護ろうと？」

イツキは嘲るように笑った。

「笑わせるな！見栄など張らなくていいんだよ！とっとと逃げ帰れ！……ああ、貴様、そいつに騙されているな？」
「な……！」

イツキは再び一瞬の足払い。ウスハを楽々地面に転がす。まるで服についた埃を払うかのように、易々と。

何故ウスハは本気を出さない……！？不味い、不味いぞ……！

「させ……ん……！」

俺は立ち上がろうと力を入れる。しかし、足が動かない。

「無駄だ。貴様の足、暫くは使い物にならんぞ。そこでゆっくり見ているといい」

イツキが冷酷に俺を見下す。こいつが何かしたのか！？

イツキはアキカ、俺、ウスハを易々と捩じ伏せ、グゼ様に迫る。

「グゼ……貴様は相変わらず下劣な奴だ……！またその容姿で他人を唆し、利用しているのか……！」

「……イツキ……」
「私の名前を気安く呼ぶなッ！此の外道が！」
「貴様……グゼ様に何を……！貴様にグゼ様の何が分かるッ……！」
「分かるとも！こいつは他人を利用し食い物にする、醜く卑劣な下衆だ！……やはり、あの時、生かして置くべきでは無かったか……！」

刀をスッとグゼ様の首元に向けるイツキ。こいつ……まさか本気で……！？

俺は動かない足を引き摺り、叫ぶ。何を叫んでいたのか、わからない程に無我夢中で。

何故、俺は守れないのか……大切な人を。村を守れなかった俺を救ってくれた、たった一人の人でさえも……どうして俺は守れないのか！

「死ね」

イツキが冷酷に死を宣告する。もう駄目かと思った。しかし、意外な形で救いの手は伸びた。

「イツキ様！お待ちください！」

その人影は、ノトス砦から現れた。
腕を押さえ、傷のついた顔を歪ませるその男は、イツキの名を叫びながら駆け寄ってきた。イツキは手を止め、その男が近寄ってくるのを待つ。

「アニード。なんだ?」
「命までは取らなくともよろしいでしょう!?王の下に連れていき、話を聞くだけでも……」
「何を甘えた事を言っている、アニード?貴様、まさかこいつに唆されて……!」
「違います!」

その男、ノトスの騎士団の幹部、アニードは、必死の形相で訴える。

「グゼ様は、立派な人間に成られました!『あの時』よりもずっとお強く、ずっと逞しく、高い志を持って……変わられたのです!今のグゼ様が、テラスを率いた反逆など、企てる筈が御座いません!」
「……やはり唆されているな」
「違います!グゼ様の働きは、地方の各村でも話題になっております!これは紛れもない事実!」
「アニード。貴様、腕一本じゃ足りないようだな」

イツキが鬼の形相で、アニードの胸倉を掴み上げる。その鬼気迫る表情が、何処からくるものなのか?俺は理解できずに恐怖した。

「こいつは危険だ。だから殺す。王の為、国の為に。騙されるな。こいつを王に近付けたら……この国は終わるぞ!」

「……何故、其処まで頑なにグゼ様を拒むのですか……！」

アニードが次はその表情を険しく作り替えた。

「何故、『御兄妹』に、それ程冷酷に手を掛けられるのですかッ！？」

……兄……妹？……グゼ様と、イツキが、兄妹？

俺は唖然としていた。

イツキはアニードのその言葉に、その顔をますます歪める。

「貴様……！……減らず口をッ……！」

グイ！とアニードの体を引っ張り、地面に放り投げるイツキ。そして、その鬼のような眼をグゼ様に向ける。

「イツキ様！グゼ様は昔のような弱い人間ではありません！お願いです！踏みとどまってください！」

「黙れ黙れ黙れぇ！！……こいつと兄妹？だから殺すな？……笑わせるな！私は昔からこいつの事が……大嫌いだったんだよッ！！」

「イツキ様ッ！！」

イツキは怒りに身を任せ、その刀を勢い良く振り抜く！

ズバッ！！

そして、イツキ目掛けて飛んできた岩の塊はまっぷたつになる。

「な！？」

「……小癪な……！」

イツキは顔を歪め、岩の飛んできた方向を睨む。そこに居たのは

……

「あれま。防がれちゃいましたか」
「アキカ！？」
「明華！お前、やられた振りとかしてるんじゃねぇよ！びっくりしただろうが！」
アキカ。倒された筈のアキカが、平然とした表情で立っていたのだ。
「まさか、まるで平気とは……中々に頑丈なようだな。流石は天使といったところか」
「イツキさん。あなた、結構小物ですね？私は別に頑丈じゃありませんよ。……もしかしてお気付きでないんですか？」
「……何？」
アキカは笑う。余裕の表情で。いや、とても恐ろしい笑顔で。
「逸らしたんですよ。あなたの一撃を」
「……馬鹿な。何を言って……」
「いやぁ……いきなり飛びかかってくるのでびっくりしましたよ。でも、首筋を打つ感覚ぐらい、把握できませんかね？思いっきり逸らしたのに気づかないなんて」
イツキが唖然としている。何を言っているのかさっぱり分からないといった様子で。恐らくは、その時点でイツキはアキカに遅れを取っているのだろう。
アキカは、ただの魔導弾薬庫ではなかった。
「あいつに接近戦を挑むとか……相手もバカだろ」

「……それはどういう事なんだ、ウスハ？」

ウスハはよっこいしょ、と身を起こしながら、溜め息をついた。

「まだあいつも不慣れな魔法で喧嘩売ったほうが可能性はあったってことだよ」

不慣れ？あの規模の魔法を使っているのに？

そういえば二人は異世界から呼び出された天使。こちらに来てからまだ日が浅い。

「しかも手の内晒すとか……明華の前じゃ絶対にやっちゃいけない」

ウスハのなんとも言えない表情。

「あいつはスグに真似るんだよ。相手の技術を何でも。あいつに心折られた格闘技の先生がどれだけいると思う？……あいつは理不尽なくらいに『天才』なんだよ」

「……え？」

イツキの顔が歪むのはその直後だった。歪む、といっても表情を変えたわけではない。

アキカの拳が、本当にイツキの顔を歪めたのだ。

「ぐがっ……!?」

イツキの体がゴロゴロと転がる！地面に倒れ伏したイツキは、何度も繰り返し瞬きしながら、自身に起こった現実を受け入れられていないようだった。

そして、その顔を上げて、改めてその現実を認識する。

悪魔の微笑みを浮かべる、理不尽な天才を前に。

「付術……戴きました♪さて、早く立ってくださいよ。私は今、とてもがっかりしているんですから」

アキカはパキパキと指の骨を鳴らし、首を可愛らしく傾ける。

その恐ろしい威圧には、俺も震え上がらずには居られなかった。

「兄様の力も見抜けないなんて……折角、やられた振りして兄様の勇姿を刻み込もうとしてたのに……あなた、兄様の当て馬の価値ないですよ?」

「だからお前は俺に何を期待してるんだ!?」

イツキがわなわなと震える。「当て馬」、その言葉がその表情を憎悪に染め上げていく。

「当て馬……？当て馬……だと……！……貴様ッ……！」
「立てって言ってんだよ、この外道」

アキカの声色が変わる。
今までとは違う、少しだけ低い……怒りに満ち溢れた声で。

「一発じゃ足りないわ、やっぱり。……泣いてグゼさんに謝るまで……ボッコボコにしてあげる」
「私を舐めるな……！殺す、殺す、殺してやる……！」

イツキが立ち上がり、刀を揺らす。
それを鼻で笑うように見下し、アキカはちょいちょいと手招きした。

「ほら。かかってきたら？……この、小物」
「……うおおおおおおおおおッ！」

互いに怒りの炎を燃やし、二人の天使が激突する。

ＥＰ１２：　遭遇のノトス砦（後書き）

明華と天使イツキが激突！イツキとグゼは兄妹？二人の間に隠された秘密とは？そして、明華ＶＳイツキの天使対決の行方は？大国ノトスが大きく揺れる！
次回、ノトス編佳境？

遂に天使、イツキの登場です。やっぱり天使、反則的に強いです。しかし、それ以上に巫山戯た明華の性能……　それにしても薄葉、まるで仕事しませんねｗ
遂にノトス編もターニングポイントに突入！此処から話が大きく動いていきます！

ＥＰ１３：　救世の聖域（前書き）

視点：複数

Ｅｐ１３：　救世の聖域

視点：ノトス騎士団騎士、アニード

『天使の伝承』、ノトス王家の書庫から見つかったその書物を、王が見つけ出した時からノトスは変わった。
末端である私には、多くが語られることはなかったが、伝承は大体こんな感じだったそうだ。

異形の怪物が支配する大地。かつてそれはあったという。

ある魔導士が偶然見つけたその儀式で、黒髪黒眼の天使は舞い降りた。

天使はまだまだ幼かった。子を成せなかった魔導士は、とても大切に天使を育てた。

天使はとても頭が良かった。

みるみる内に、魔導の心得を吸収していく天使は、気づけば魔導士を大きく超えていた。

そして、育ててもらった恩返しにと、天使は一人で怪物退治に向かったという。

天使は怪物を討ち滅ぼし、世界には平和が訪れた。

御伽噺のような話だ。一人で世界を支配する怪物を討ち滅ぼす？そんな人間がいるものなのか？

しかし、王は何かにとり憑かれたかのように書庫から伝承に絡んだ書物を探し、読み漁ったという。

そして、断片的な儀式を寄せ集め、遂にご自身の手でその儀式を解明したのだ。

当時、両親に早くに先立たれ、若くして王の座についたあの方は、もしかしたら欲していたのかもしれない。

世界を揺るがすほどの力を、自分の手元に置くことを。

若き王は侮られていた。そしてその命はいつでも危機に晒されていた。私を含め、一部の心を許せる相手、それにしか王は口さえ開かなかった。

そして、王は一部の信頼する魔導士を集め、秘密裏にその儀式を執り行ったのである。

結論から言うと、儀式は成功した。しかし、思わぬ結果で。

黒髪の天使は二人現れたのだ。

天使イツキは、刀型の魔具（ヴィヴロス）、『パラドスィ』を片手で構え、目の前の天使アキカを捉える。

「『付術』を覚えた？馬鹿にするな！」

「馬鹿にしてませんよ。原理は魔法よりももっと簡単。欲しい性質をイメージして、それをアルマに投影するだけですよね？構成する必要がないから、魔法みたいに呪文の設計図は要らない……だから早い。その分、体や武器という器からははみ出せない、自由度の低い魔導とも言えますけど……」

アキカは簡単に語り、その手にアルマを宿して見せる。それはまごうことなき『付術』。

原理は大方アキカの述べた通り。アルマが肉体を動かす動力という考えを特化させた魔導、それが付術。

しかし言えば簡単だが、そのアルマコントロールを覚えるのには相当な時間が掛かる。それこそ、サポートが多々存在する魔法と比べると、取っ付きにくい技術である事は確実。実際に、それを扱うのは一部の騎士の家系や、ある国の兵士位……一朝一夕で身に付くものではない。

あのイツキでさえも、その始動には三日を要した。それでも歴代の付術使いのなかでは、トップクラスのスピードである。

そして、六年の研鑽により磨きあげられたイツキの付術は、最早ノトス一……いや、世界でもトップクラスの筈だ。

そのイツキが、油断していたとは言え捉えきれないスピードの付術移動……やはりアキカも天使。しかも、下手をしたら……

イツキよりも上位の天使……？

「随分と回る口だな……！すぐに削ぎ落としてやるッ！」

イツキは怒りの炎を燃え滾らせながら、足にアルマを集中させる。一瞬で成し遂げたのは、『脚の諸機能の強化』。全てを凌駕する『天使の脚』が、地面を抉るように踏み付ける。

その速度、長く見慣れた私がようやく目で追えるレベル。普通の人間では、テラスでは、目で捉える事など不可能だろう。

しかし、天使は一味も二味も違うと言うことか？

アキカのアルマの流れが瞬間的にその目に移動する。いや、正確には流れは無数に分岐し、その体の各所に複雑に、細い糸を張り巡らせるように分散される。その内でも色の濃い目に集まるアルマは、その黒い瞳に僅かに光を点した。

とん。

その足は軽く一歩後ろに落とされた。体を軽く傾けたその動作は、

イツキの袈裟斬りをスレスレの所で避ける。

空を切るイツキのパラドスィ。イツキの顔に驚愕の色が浮かび上がる。殺す気の、必殺の一撃がひらりと涼しい顔で躱され、動揺があったのは確実。しかし、イツキもこの程度で手を休めるほど甘くも弱くもない。

声も発せず前進。僅かにずらされた距離を詰め、グンとその顔をアキカの傍に近づける。

来る……！

「『阿修羅』」

イツキの剣術の恐ろしさは、その付術の腕から来るのは確かである。しかし、それだけがその力を象徴するものではない。

イツキが編み出した『魔導剣術』、その恐ろしさはいうなれば複数魔導の混合使用にある。

イツキが僅かな時間で唱えた呪文、その高速移動の間に詠唱の終わる呪文は、魔具の呪文短縮の効果に加え、付術による詠唱の高速化も加わり、一瞬での呪文詠唱によるものである。付術による強化を、詠唱高速化に用いる技術は完全にイツキのオリジナル。付術と魔法を同時発動させる事は超難解で、常人に真似できる事の叶わぬ達人技。

それにより展開されるのは、無数のアルマの刃。イツキはそれにより、近接状態からアキカを串刺しにせんとする。不意を突く必殺

の一撃、しかしそれはどうやら不意打ちにもなっていなかったようだ。

すっ……

まるでそれは幻であるかのように、アキカの体はすり抜ける様にイツキの横を一瞬で通り抜ける。イツキの前進、それに合わせて、アキカは同時に前進したのだ。するりと横を通り過ぎるアキカは、再び突き出された刃を寸での所で回避する。

互いに背中が向き合ったその瞬間に、イツキはアキカの回避に気付き、直ぐ様振り向き様に刀を薙ぎ払う。

しかしそれは何も捉える事なく、その視界にはかなりの距離を取ったアキカが、悠々とイツキの方向を振り向く様子だった。

「逃げるか……！」

イツキが眉間にしわを寄せ、再び駆け出す。未だに魔法『阿修羅』の効果は持続し、その突きつける刃は全部で六枚。イツキは駆けながら体を捻るようにしてそれら全ての刃を振り回す。イツキの曲芸じみた剣術、『六刀流』。容赦なく襲い来る六つの刃、それを目の前にアキカは……

「『フリューゲル』」

ふわり……

上へ『翔んだ』。光の翼を背負い、イツキのリーチから離れるよ

うに。

「な……！？魔法……！？呪文も唱えずに、どうやって……！！」

「あなたも面白い動きを見せて下さったので、ちょっと私も一発芸を披露させていただきましたよ」

驚愕し、空を翔ぶアキカを見上げるイツキに、アキカは口元に指を当て、ぎゅっと唇を結ぶ。

「口で呪文の詠唱を確かめるの、止めたほうがいいですよ？」

「ふ、腹話術……！？」

アキカは口を閉ざしながら、言葉を発した。そう、彼女はその口を閉ざしたまま、今までのイツキとの交戦途中に淡々と、小声で呪文詠唱を行なっていたのだ。そして、不意を打つ形でその魔法を発動させたのだ。

イツキは敵が空を飛べる相手でも、問題なく対処できる技術は持っている。しかし、その突然の不意打ちに、僅かに怯みを見せた。

その隙が、アキカに一転攻撃チャンスを与える。

アキカの詠唱が堂々と行われる。その素早く動く口、そこから呪文の複雑さと長さが伺える。

一体どれほどの規模の魔法を発動させようとしている……？

辺りを雷雲が覆い尽くす。ノトス砦一帯が暗闇に落ちる。そして、ゴロゴロと暗雲から轟音が漏れだし、アキカは手を振り下ろした。

「『ヒリャ・ケラヴノス』」

カッ！

その強烈な閃光と共に、雷雲から無数の線が降り注ぐ。それは百、いや数百？ひと目では数え切れぬ程の、無数の細い雷！

それはまるで意思を持つ蛇のように、うねりながらイツキ目掛けて落ちてくる！

「安心してください。威力を分散した雷です。当たっても……多分ビリビリするだけですよ♪」

「ぐっ……何だ、何だこの規模は！？」

降り注ぐ雷の針は、それこそ雷よりはスピードが劣るものの、それでもかなりのスピードでイツキ一人を目掛けて降り注ぐ！イツキは走る。そして、その雷を回避せんとする。

しかし、数が数。雷の針の一発が、イツキの腕を掠める！

「がッ！？」

バチィッ！と音を立て、イツキの服が焦げる。本当に命を奪うまでのダメージはないらしいが、イツキが顔をしかめる程度のダメージはあるようだった。そして、雷はまだまだ止まらない。そのダメージの隙は、さらなる雷の接近を許す。

「舐め……るなぁッ！！」

イツキは体を振り回し、六つの刃で雷を迎え撃つ！

振り回す刃で、かなりのスピードの雷の針を、神速の刃で切り刻む。雷を斬る……そんな巫山戯た芸当を成し遂げるのも、イツキが天使である故か。

無数の雷を操る空飛ぶ天使と、雷を斬る六刀の天使、その浮き世離れした戦いを目の当たりにして、私は声を発することさえできなかった。

「……フッ！」

イツキは雷の処理により、平静を取り戻したのか、その目を鋭く光らせ、上空のアキカを睨みつける。そして、その刀、パラドスィを構え、反撃に移る。

「……『翔龍乃滝』」

六つの刃、内アルマで形成された五つが砕け散る。そして、イツキは刀を勢い良く振り上げる！その斬撃は形を成し、まるで天に登る柱のように上空目掛けて伸びていく！

アキカは眼前に迫るそれに対し、背中に生やす翼を一回だけ大きく翔かせた。すると、斬撃は勢いを失い、アキカの腕ひと振りでかき消される！

「何故ッ……！」

「さぁ？自分で少しは考えたらどうですか？」

アキカがそのまま勢い良く急降下する！何故、ここにきて間合いの利を無視するような行動に出る？

イツキも迫り来るアキカを迎え撃たんと、その刀を構え、迎撃の体勢を取る。

イツキの剣術、接近戦において無敵を誇るその力を前に、いくらなんでもまともにぶつかって勝てるはずはない。例え、常識はずれのスピードでも、正面から迎えばイツキは容易に迎撃するだろう。

「……馬鹿正直に、そんな動きが優等するとでも……」

「思いますよ？」

そして、接触。

イツキは目にもとまらぬ斬撃を放ち、アキカはそれを『避けた』。なんのひねりもなく、なんの工夫も策もなく、ただ、高速の急降下途中で、その身を逸らして、刀の軌道から体を外したのだ。

それは最も残酷な真実。

アキカは単純に、イツキの攻撃を完全に見切ったのだ。

地面に降り立ち、アキカは直ぐ様その手で刀を握るイツキの手を制す。イツキは慌てて空いた手をアキカに伸ばすが、その手さえもアキカの手に制される。其処からは全く見えなかった。

何故かイツキの体は地を離れ、宙を舞っていた。一瞬で何が起こ

ったのかは分からないが、アキカはイツキを『投げ飛ばした』のだ。身の丈はイツキを下回り、その細身からはとても力があるようには思えない。しかし、宙を舞い、そのまま地面に叩き落とされるイツキの姿が、その信じ難い事実を示していた。

アキカはその手にいつの間にか奪い取ったイツキの魔具、パラドスィを握っていた。今の遣り取りの間に、掠め取ったとでも言うのか？アキカはそれを深々と地面に突き刺し、地面に仰向けに倒れるイツキを見下ろした。

「……まだ、続けますか？もう十分に差は見せつけたと思うんですが」

圧倒的。アキカに見下ろされ、イツキの表情がみるみる内に引きつっていくのが分かる。

勝敗は決した。

天使イツキと天使アキカの勝負は、アキカの圧勝に終わったのだ。

イツキは、顔を歪め、口を開いた。

「……お前等は何も分かっていない」

その声は震えていた。それは怒りか、それとも恐れか。イツキは負け惜しみにしか思えないような、その言葉を叫ぶ。

「お前等はグゼに騙されているのだ！！」

「この後に及んでまだ下らないことを……」

アキカの表情がみるみる内に冷めていく。イツキはそれでも叫び続ける。

「そいつは……お前等を利用している！綺麗事を並べて、この国に、王に、全てに復讐するために！」

私も黙っては居られなかった。イツキのその頑なな言葉を前にして。

「イツキ様……何故、其処までグゼ様を……」

「アニード……！お前まで惑わされているのかッ！？」

その時だった。

一つの声が、ノトス砦前で響いた。

「グゼ！よく無事で！」

気付けばノトス砦の門が開いている。その先から、馬とに乗った一人の男が姿を現した。男は馬を走らせ、直ぐ様グゼの元に近寄っていく。

グゼの近くで倒れているエクスィレオスィの構成員が、顔を上げて男を見上げた。

「あ、あなたは……？」

「俺はエクスィレオスィのヴロミコだ。グゼがノトス砦に居ると聞

いて駆けつけた！さっきの雷雲の魔法を察知して、ノトス軍が向かっている！早くこっちへ！」

「ヴロミコ……！ありがとうございます……！少し、待ってください……！」

グゼは、倒れる構成員の男、アルムに近寄り、その治癒術で瞬時に足を治療する。そして、ヴロミコはグゼとアルムの二人を、軽々と馬の上に引っ張り上げた。

「ちょ、ちょっと待ってくれ！まだ二人が……」

「私達なら大丈夫ですよ！兄様一人なら抱えて飛べますんで！」

「飛ぶ……？それに二人というのは……」

ヴロミコはアキカとウスハ、二人の天使を見て、怪訝な表情を浮かべたが、直ぐ様グゼに耳打ちされて事態を飲み込んだようだった。

「そうか……すまない！我々は先に向かわせてもらおう！」

「グゼさんをよろしくお願いしますね！」

「アキカさんもウスハさんもお気を付けて……！お先に失礼します！」

そうして、ヴロミコに連れられ、グゼとアルムがノトス砦を越えて進んでいく。それを睨んで、イツキは声を荒らげた！

「退けぇッ！あいつを今すぐ止めなければ……！あいつを追って殺さないと……！」

「そんなこと言われて、私が退くと思いますか？」

「いいから退け！お前等は騙されている！本当に、あいつはこの国を……！」

「なんの根拠があってそんなことを言うんですか？」

アキカに胸倉を押さえつけられ、必死でもがくイツキが叫ぶ。

「……お前等は何も疑問に思わないのか!?あいつは私と同じ天使だ!」

「そういえば兄妹、とか言ってましたけど……」

アキカがそれが?といった様子でイツキを睨む。

「あいつはお前等にその事を隠していた、違うか!?」

「……そうですね」

「何故隠す必要がある!?お前等は元の世界に帰るため、他の天使との接触を求めていたはずだ!なのに何故、あいつは自身が同じ境遇にあることを語らなかった!」

……イツキの言葉に、僅かにアキカとウスハが反応を示した。

「それは……」

「知られたら都合が悪いからだ!あくまで治癒術しか使えないか弱い存在であることを示し、自身が危険な存在であることを隠すためにな!そして、奴はその仮面で多くの人間を欺き、統率し、国へ牙を剥こうとしている!さらには、その治癒術でテラスをも多く手懐けている……!」

「お前いい加減にしろよ!たったそれだけで、グゼさんがなんで悪人になるんだよ!?別に天使だと名乗らなかったのだって別の理由が……!あんなに優しい人が……そんな訳ないだろうが!」

ウスハの必死の言葉に、イツキは顔をしかめて、唇を噛み締めた。

「……やはり、騙されているな……！あの……『糞兄貴』に……！」

「……え？」

アキカとウスハは、唖然として声を漏らした。

―――

視点：救済団体エクスィレオスィ構成員、アルム

アキカとウスハ、二人の助け。そしてこの男、ヴロミコの助けに

より、俺とグゼ様はノトス砦を突破して、首都パラディソスへと向かっていた。

「……あぁ、グゼ。無事で良かったよ……心配したんだぞ？」

「ありがとうございますヴロミコ……」

グゼ様を呼び捨てにするヴロミコ。親しい仲なのだろうか？初期からのメンバーだったり……そういう関係か？

「イツキは止まった……これで存分に行動に移れるというわけだ」

ヴロミコの言葉に、グゼ様は笑った。

今まで見せた事もない、とても楽しそうな笑顔で。

「はい！本当なら、もっと早くに王城に出向ける筈でしたが……イツキちゃんにうっかりバレてしまったのが災いしましたから」

「グゼ様……？」

その笑顔に、俺は思わず身震いした。

何故だ？何故、グゼ様の笑顔に、俺は恐れをなしているのか？

「だが、その御陰で『下準備』が念入りにこなせた、違うか？」

「はい。そうですね。……ノトス全体に、十分過ぎる程に『種』は蒔きました。後は、王城で、王の目の前で、『花』を咲かせるだ

けですね」
「グゼ様……一体、何の話を……」
「ああ、アルムさんは知らないですよね？」

聞いてはいけない。俺の本能がそう告げていた。俺の描いていた理想、それとは大きくかけ離れた、グゼ様の笑顔。それがその不吉な空気を漂わせていた。

「これから私達はノトス王に宣言しに行きます。ノトスの改変、並びに世界の改変を」
「世界？」

跨る馬が、徐々にその姿をふくれあがらせる。黒い鎧に包まれた、不気味な化け物へと姿を変える。

グゼはテラスを従えて、ノトスへの反逆を企む罪人……

そんな筈はない。この人は優しい方だ。テラスにも等しく愛を与える、とても優しい人なだけだ。

「間違いは正す、そうすべきですよね？けれど、力で私達を否定する者には、言葉という武器は通じないのです」

それを否定したら、あなたは一体何をするつもりなんですか？

「しかし、血を流せばそれは彼らと同じ。私達は血を流さずに思い知らせねばなりません」

思い知らせる？血を流さずに？どうやって？

「『無血革命』、その達成こそが私達、エクスィレオスィの終着点」

跨る馬、その正体は黒い馬型テラス。鼻息荒く駆けるその姿は、とてもその背に跨るグゼ様には似合わない。

「……アルムさんは黙って付いてきて下さればいいのですよ。あなたが私を助けに来てくれたとき、とても感激しましたから。あなたには、最も中心に近い位置で見てもらいましょう」

グゼ様が、染められた青い髪に指を通す。そして、振り払うと、その髪は忽ち色を変えた。

元の美しく清らかな『白』ではなく、暗く闇を象徴するような『黒』へと。

「眩い『表面』しか見れない愚者が滅び、ノトスが生まれ変わる様を」

黒い髪をなびかせ、黒い瞳を俺に向けたグゼ様。その黒い髪と黒い瞳は、イツキとはまた違った恐ろしさを秘めていた。

「多数という衣に身を包み、高きから弱きを見下す者達に、『償い』を。それが私達、虐げられる者達の集まり、『エクスィレオスィ』」

空が黒く染まり始めた。空を覆うのは無数の飛行型テラス。

「……少し、早いのではないですか？」

「いや。あの雷の魔法で国も気付いたようだからな。予定変更だ。何、グゼ。お前の手を汚させたりはしないさ……心配せずともお前の『無血革命』は邪魔しない」

「当然ですよ。あなたは私を理解してくれていると『信じて』いますから」

「例え、『テラス』と云えども、俺達は命の恩義を忘れたりはしない」

テラス？どういうことだ？まさか、この男、ヴロミコも……！？

「そう。テラスです」

俺の心の内の疑問に答えたのは、漆黒の瞳で俺を縛り付けるように見つめるグゼ様だった。

「ヴロミコも、今私達を運んでいるベゲモートも、空を覆い尽くすミラも、アルコも、コルジャも、コラキも……」

「グゼ……流石に全員の名前を語っていたら、ベゲモートの足だとパラディソスを通り越して、王城までぶち抜いてしまうぞ？」

「……ですね。残る同志には申し訳ありませんが……紹介は後程にさせていただきましょう。兎に角、アルムさん。そんな恐れた表情で彼等を見ないであげてください。あなたもピーちゃんという……私に心を開いてくれたテラスともう会っているでしょう？」

確かに会っている。しかし、何故？何故、こんなにも恐ろしいと

思ってしまうのか？何故、あれほどに敬愛していたグゼ様に俺は怯えているのか？

グゼ様は変わらない笑顔で、辛い思いをする前には見せてくださっていた笑顔で、俺に優しい声をかけてくれているのに。どうして？

「……アルムさんも、人間側の同志の皆さんも、傷つけたりしません。当然、苦しむ人々達も。ただし、それを軽んじる……聞き分けのない人達には……『傷つけはしませんが』、相応の『償い』を。だから心配しないでください、ね？」

「グゼ様……あなたは、全てを救うのではないのですか？」

「救いますよ。余すことなく、全て」

「ああ、見えてきたぞグゼ。俺達の、新たな世界を作り上げるための出発点が」

「いいえ。あれは終着点。今までの腐った『形』だけの世界の」

首都パラディソスが見えてきた。その上空には無数のテラス。そして、周囲に迫る陸上型のテラス、人型のテラス……その規模は既に戦争といっても過言ではないまでに膨れ上がっていた。

グゼ様は、何を考えている？俺は、何を信じればいい？

「アルム。お前の気持ちは良く分かる。テラスの俺が言っても信じられないかもしれないが、確かにお前の思い描いていたグゼの革命とは、今の光景は大きく違って映るだろう」

そんな迷いを抱いた俺に、そのテラス、ヴロミコは語りかける。

「だが、彼処に集うテラス達が、お前達人間が、グゼの元に集ったのは何故か、考えて欲しい」

グゼ様の元に集った理由？それはグゼ様が俺達を救ってくれたから？そして、あのテラス達も、アエトスと同じように、グゼ様に救われたから？

「『形』に囚われるな。『本質』を見ろ。グゼの求めるものは、其処にある」

本質……？

「ヴロミコ。アルムさんに余計な事は吹き込まないで下さい。私は何かの教祖になるつもりなどありません」

「それは失礼した。そう膨れるな」

迷い、口を噤む俺に、グゼ様は微笑み掛けてくれた。

そのとき、俺はこのグゼ様はいつもと変わらぬグゼ様なのだと察した。

迫る首都。門には既にテラスを恐れて慌てふためく門番のみ。

「計画変更、強行突破。グゼ、アルム、しっかり掴まっていろ！目

指すは王の間……いや、『救世（グゼ）の聖域（セイイキ）』！

「さぁ、ノトスの、テッラの、プルトナスの……未来を変える『無血革命』……始めましょう！」

俺達を乗せた巨大テラス、ベゲモートはパラディソスの門を突き破る。

グゼ様の訪れを祝福するようなテラス達の雄叫びと共に、

ノトスの、世界の歴史を変える、『無血革命』がその幕を開いた。

Ｅｐ１３：　救世の聖域（後書き）

グゼの『無血革命』が始まる！多くのテラスと人間を従え、グゼが築くものとは？そして、イツキとグゼの因縁とは？

次回、『救世と済』に続く！

突如の急展開で戸惑う方も多いかも……申し訳ありません。伏線らしい伏線はあまり見えないかも知れませんが、一応当初からの予定通りの展開で、いきなり捻った訳では御座いませんのでご了承を……ｗ

一応ではありますが、例えばグゼは一度も『女』だと自分自身で名乗っていないということ、あとグゼの視点が一度もなかった事が伏線ということで……ｗ　他にも多少ありますが、そういった話は次回以降でということで……

ＥＰ１４：　救世と済（前書き）

視点：黒髪の天使、イツキ

ＥＰ１４：　救世と済

才羽済（サイバイツキ）。六年ちょっと前までの私の名前。当時、私は１４歳だった。

その頃の私は自分に絶望していた事を覚えている。

私は女である事を恨めしく思っていた。

当時から私が励んでいたのは剣道。竹刀を握り、毎日練習を欠かさない剣道少女だった。いや、少女とは言い難いかもな。そんな可愛いものでもなかった。

そして、私は努力の割には結果が付いてこない……まぁ、恵まれないタイプだったわけだ。

頭の中では分かっている。どう動けばいいのか、相手はどう動いてくるのか、全てが見えている。しかし、体がついてこない。相手の動きに対応する動きが閃こうとも、それが実現できるスペックが私の体にはなかった。

何と恨めしい事か、この体は。

当時、圧倒的な強さを見せていた……名前ももう忘れたが、同学年の男に、私はいつも嫉妬に満ちた視線を送っていたのを覚えている。

私も男に生まれてくれれば……

そう思ったことは一度や二度などではなかった。そしてそれは、決して自分の運動能力の低さからくる絶望ではなかった。

私の二つ上の兄、才羽救世（サイバグゼ）。間違えてはいけない。あいつは『姉』ではない、『兄』だ。

あいつは、男らしからぬ容姿を持っていた。それは幼少時から認められるほどに、酷く少女的で可愛らしかったという。

幼稚園に通う頃、しょっちゅうのように男に好かれ、困った顔をしていたのを、幼かった私も覚えている。

そして、私が小学三年の時だったか？同じクラスの男友達に、「お前の姉ちゃん可愛いよな」と言われたのを生々しく覚えている。「姉じゃなくて兄だけど」なんて言ったら「冗談よせよ」とよく笑われたものだ。その後本当だと分かって、鼻をひくひくさせていたのは笑えた。

……あいつは自分の事を進んで話さないので、後に当時の仲間から聞いたのだが、当時からクラスでは女子人気ナンバーワンの座を常にキープしていたとか（男子だが）。いや、学年を跨いで相当の美少女（少年だが）として通っていたという。

その兄を見ていたから、その兄と比較されてきたから、私は女である自分を恥ずかしく思っていた。

「少女より少女らしい兄」、その存在は「少年より少年らしい私」

と比較され、私は女らしくないことを度々笑われた。
「救世さんの方が可愛い」、「救世さんの方が女っぽい」、「お前は男らしい」……そんな言葉が、私に、兄に対する「女としての」劣等感を刻み込んでいた。

加えてあいつはとても病弱で、今にも散ってしまいそうな儚い花を思わせた。だから、私はいつも兄に何かがあると助けていた。あいつは持て囃されてもいたが、苛めのターゲットになることも少なくなかった。女みたいな男、格好のターゲットだろう。
そして、反撃する力もない貧弱な兄を、私はいつも守っていた。ガキ大将（少し古いか？）と呼ばれるような年上の悪餓鬼を相手取り、生傷耐えぬ喧嘩を繰り広げたりしたものだ。

弱く、女々しい兄が恨めしかった。女として私よりも高みに立つ兄。弱くて私を守ってくれない兄。いつも私が守らないと生きていけない兄。それでも何処か賢くて私に微笑みかけてくる兄。喧嘩をした私を、時に私だけの問題である時も庇ってくれる兄。優しくて、とても優しい兄。私の嫉妬も、笑顔で受け止める兄。

全部大嫌いだった。あいつを見れば見るほどに、自分が女として不出来だと思えてきた。

私達は生まれて来るのに失敗したのだ。

本当ならば、私が兄であるべきだった。あいつが妹であるべきだった。

生まれてくるのに失敗した私は、失敗だと分かっているのに笑っ

ていられる兄が大嫌いだった。

なんて理不尽な怒りなのだろう。私も分かっていた。でも、受け入れられなかった。

そして、あいつが中学生になった時から、あいつは変わってしまった。私が大嫌いで憎らしくて忌々しいあいつに変わってしまった。

以前のあいつは少年だった。髪の毛を無駄に伸ばしたりはしないし（それでも好みの問題で多少は長めだったが）、一人称も「僕」。スカートを履きたいなんて言ったりしない、ごく普通の少年。ただ、両親が買ってくる服が、少女っぽさを含んでいるから少女に見えるだけ。

あいつは女っぽい自分を嫌っていた。そして、弱々しくも自分の容姿に流されないでいた。

あいつが中学生になって一ヶ月たった頃、あいつの髪が伸び始めた。

あいつが中学生になって二ヶ月たった頃、あいつの仕草が女っぽくなってきた。

あいつが中学生になって三ヶ月たった頃、あいつは「私」と言い出した。

あいつが中学生になって四ヶ月たった頃、あいつは笑顔で頬を染

める男と話をしていた。

あいつが、あいつが、あいつが……どんどん女になっていくようだった。

綺麗と言われてあいつはありがとうと言った。可愛いと言われてあいつは照れた。

女の子より女の子っぽいと言われてあいつは笑った。

あいつは受け入れ始めていた。あいつは認め始めていた。自身の女らしさを。そして、それを喜び始めていたのだ。

そして、あいつは利用した。女らしさを男に向けて、自らに降りかかる火の粉を振り払った。

笑顔で、笑顔で、笑顔で、笑顔で、笑顔で……

卑劣、姑息、醜悪……！許せなかった……男でありながら、女の武器を振りかざす、姑息で卑怯な兄が……憎たらしかった、忌々しかった、目障りだった、大嫌いだった……！

押せば倒れる程に弱かった。なのに男だ。

私とは比べ物にならない位に美しかった。なのに男だ。

男なのに女みたいだった。なのに私の成りたかった男だ……！

何故、神は、こんな姑息で軟弱な兄に、男の体を与えたのだ！

何故、神は、兄よりも強くあろうとする私に、女の体を与えたのだ！

憎い、憎い、憎い、憎い、憎い、憎い……！

私は救世とは話さなくなった。救世はとても悲しそうに笑っていた。

救世は私と話をしようとしてきた。私は掴んだ弱々しい手を振り払おうとした。

その時、私達は魔法陣に囲まれていた。

繋いだ手を伝って、不思議な力が私達を包み込んだ。

それが私達、才羽兄妹……救世（グゼ）と済（イツキ）が、異世界テッラに舞い降りた日だった。

一一一一

「おお、やはり伝承は本当だったか！……しかも、まさか二人も喚び出せるとはな……！」

私達は城の一室に喚び出された。その時、初めて目の前に現れたのは、何人かの魔導士と、一人の小綺麗な感じの当時は同い年位の子供だった。

彼こそがノトスの王、レークス。私の運命を変えてくれた人物である。

幼くも王位についたレークスは、私達に力を貸して欲しいと願ってきた。そして、自身の知る天使の伝承を事細かに語り、私達の立ち位置を教えてくれた。それに絡めてこの世界の事、レークスの立場などなど、事細かに見たこともない応接間で語ってくれた。

胸が踊った。私が天使？

「すぐに使い物になれとは言わぬ。今は取り敢えず最高の特訓環境を与えよう。充足した生活を約束しよう。そしていずれ……お前達が天使と呼ぶに相応しい力を得たときは……ノトスの、私の為にその力を貸してくれぬか？」

不安げに表情を曇らせる救世を他所に、私は高ぶる気持ちを抑えつつ、肯定の返事を返した。救世にも思うところがあったようだが、私を真似るように、これ以外に選択肢がないことを理解したように、無言で、怯えた表情で頷いた。

そして、其処には理想があった。

付術、アルマをコントロールし身体能力を底上げすることを可能にする術は、私が追い求めていた『イメージに付いていく体』を作り出す事を可能にしたのだ。

私は剣を握り、それを扱うイメージを抱きつつ剣を振る。重く扱いづらい剣、それがより軽くなるよう、より上手く動くようイメージを固め素振りを続ける。

付術は私と相性がよかったようで、書物でその記述を発見してから数日で、私はその基礎を理解し始めていた。

剣を降るほど強くなる。イメージに付いていく体をイメージし、それを付術で成し遂げる。私がずっと求めていた剣は、次第に完成していった。

私は、この世界こそが、私の来るべき世界だったのだと、遂に理解した。

しかし、救世にとってはこの世界はこの上なく似合わないものだった。

騎士に剣の扱いを教わろうにも、剣すら持ち上げられない救世。
魔導書を読み漁っても、並程度の魔法しか理解できない。
そして何より軟弱で、弱々しく、まるで使える場面がない。

次第に騎士からも、王からもその力を認められるようになっていく私とは対照的に、救世は徐々にその非力さを見抜かれ、役立たずの烙印を押されることになる。

いい気味であった。此処では問われるのは力のみ。下らない色仕掛けや姑息な策略などは通用しない。救世は落ちるべくして落ちていったのだ。

そしてやがて城内で、天使の事を知る者は囁き始める。

グゼは、イツキのオマケで、うっかり付いてきてしまっただけの……天使でもない役立たずだと。

そして、一年が過ぎた頃。

王は、レークスはとうとう救世を見放した。

「お前のような役立たずに用はない。出て行け」

救世は笑って「はい」と言った。あいつ自身にとっても、これは良いことなのだ。
力になれないプレッシャー、それに押しつぶされそうになりながらこの城で生きるより、私の使命に付き合わされるより、外で身の丈にあった生活をすればいい。
私は悲壮に沈む救世の顔から目を逸らし、結局あいつを助けなかった。

捨てられたのに、役立たずと罵られたのに、あいつはやはり笑っていた。うっすらと、静かに、悲しそうに。

そして、あいつは思い立ったのだろう。王への復讐を。呼び寄せておいて、役立たずだと罵ったレークスを、強く恨んで。

その気味の悪い笑顔の裏で、あいつはその姑息な顔で国を睨んでいたのだ。

二年後の事だ。国に反感を示す者を集めた組織がある。その時、既にレークス王の右腕として働いていた私が、調査員が何人も行方を晦ましたという危険さから、直々に任務を承って、その組織、エクスィレオスィに潜入したときの事だ。

その中心に、あいつは居た。

髪を白く染め上げ、緑色に彩った瞳を輝かせ、より美しく、より神々しく女に磨きを掛けた……あの糞兄貴は。

エクスィレオスィ率いる女神として、あいつは君臨していたのだ。

不気味なテラスと狂信者に取り囲まれて、あの時の笑顔を浮かべていた。

そして、あいつは語った。

この国は腐っていると、この国は作り直さなければならないと、弱者の為の国をつくると。

何処までも姑息。自身の弱さを主張し、全てを利用し復讐を果たそうとする。テラスさえも唆し、あらゆる者を欺き、ノトス改変を語るあいつの姿は天使などではなく……『悪魔』のように映った。

「済ちゃん、私の邪魔を、しないでもらえますか？」

悪魔は私に微笑みかけた。あいつはとっくに気付いていた。私が嗅ぎ回っていることを。私にテラスや狂信者達が気付く。

私は咄嗟に、刀を抜いた。

テラスや人間、其処らの雑魚に私が負けるはずも無く、直ぐに国に、王に、私を正しい道へ導いてくれたレークスに、牙を剥く卑怯者全員を斬り捨てた。

そして、屍の山をくぐり抜け、遂に悪魔に刃を突き付けた。

「……済ちゃん。そんなに私が嫌いですか？」

憂いに満ちた目で、救世は悲しげに笑った。

思えばその時、私があいつの首を撥ねていれば全ては終わってい

た筈だった。

しかし、私は情けを掛けた。今更になって、兄妹の情に流されたのだ。

「この国から出て行け。そして、二度と馬鹿な真似はするな。救世は死んだ。お前は此れから別の人間として生きて行け」

いや、情けをかけずとも、私はあいつを殺せなかった。

「……済ちゃんは本当は優しい子ですしね。お情け、感謝しています」

あいつは変わった。この世界に来てからではない。

あの時、中学生になったときから、あいつは全く別のあいつになっていた。

「……さよなら。イツキ」

あいつは最後に笑った。

……そして、懲りずに再び帰ってきたのだ。

二人の黒髪の天使を連れて……

「離せ……私はあいつを止めに行く」

私は、情けなくも、全てを白状した。
私を圧倒した天使、アキカに。
私達の過去と、あいつがノトスを恨む理由を。
アキカは体を震わせ、私を押え付ける力を僅かに緩めた。それでも抜け出せない程に強い力ではあったが。なんだこいつ、女の癖にやたらと馬鹿力だな……！

そして、アキカは震える口を開いた。

「グ、グゼさんが……男……？」
「……あ、ああ……其処か」

ちょっと驚いてる部分が違ったが。いや、大体あっているかもしれないが。

「そ、そんな……あんなに綺麗なのに……」

「……まぁ、確かに綺麗だが……」

「ライバル視してたのに……！」

「そ、それはお気の毒に……」

……こいつには緊張感というものがないのだろうか？

こっちは真面目にやっているのに……！

「そ、それはともかく！あいつにはこのノトスに復讐する理由がある！そして、このタイミングでやってきた、この空を覆うテラス……もう、あいつが黒なのは明らかだろう！」

「信じないぞ、俺は！」

声を上げたのは、もう一人の黒髪の天使。ウスハと言ったか？

こいつもやはり騙されている。

「分かるだろう！あいつはテラスを従えている！そして今、パラディソスにいる王に総攻撃を仕掛けようとしている！あいつに続くように首都へ向かうテラスの大群、あれをお前はどう説明する！？」

「そんなことじゃねぇ！」

強い言葉で私の言葉は跳ね除けられた。そして、ウスハはぐっと拳を握り、叫ぶ。

「……グゼさんは女の子だ！絶対にお前の言うことは信じないぞッ！あんなに可愛い男の子がいるわけがないだろうがッ！！」

……お前もかッ！

気付けば私を押え付けるアキカが可哀想なモノを見るような目になって、ウスハに向けられている。

私はこれはこれでどう声を掛けたらいいのか分からずに、困惑した。そして、アキカに尋ねる。

「……もしかして、惚れてたのか？アイツ」

「……はい」

やはり騙されていたか！などと勢い良く叫ぶ気にもなれなかった。彼処まで頑なに現実逃避している姿を見ていると、何だかこっちが申し訳ない気分になってくる。

……しかし、王の身に危険が迫っているのは事実。既に恥はかいた。ならば、もう下らないプライドになんて従っていられない！

「……と、とにかくだ！私を離せ！王の身が危ない！……私を信じられないのならそれでも構わないッ！だが、せめて！テラスの大群が迫るこの危機から、王を私に護らせてくれ！あの人は……私の運命を変えてくれた大事な人なのだ！」

私は懇願した。

しかし、駄目か……さっきまで殺し合いを演じていた相手だ。今、こうして生かされているだけでも奇跡だというのに……こんな願いを聞き入れてもらえは……

「……それならいいですよ？」
「やはりダメか……え？」
「いや、いいって言ってるんです」

アキカはさらりと言葉を返す。まるで殺し合いなどなかったかのように、平然とした様子で。

「グゼさんに手出しをさせるつもりはありませんが……それなら話は別です。今、ノトスで何が起こっているのか、それを確かめたくもありますし……」

ぐっと胸倉を離し、私を開放するアキカ。その顔にはにやりと何かを企んでいる笑みが浮かぶ。

「私達が同行しても構わないのなら、王様の所まで行くのは構いま

せん」
「同行……だと？」
「はい。私達だって、人が危ない目に遭っているのを黙って見ている程冷酷ではありませんよ。あれ程のテラスが首都に集まる事態……それによる被害を防ぐ手伝い位はさせてくださいよ」
アキカは遠くで地面を殴っているウスハにっこり微笑む。
「兄様！兄様も真相を知りたいですよね？」
「……え？」
「グゼさんが女性なのか男性なのか」
「……グゼさんは女の子だ！」
「だから確認に行きましょう！」
「うう……！分かったよ！」
ウスハは軽くベソを掻きながらとてとてと駆け寄ってくる。どんだけショックだったんだコイツ……？アニードの報告だと、男の方……コイツがヤバいと聞いていたが……？
とてもじゃないが迫力の欠片もない。むしろ情けない。
アキカは続いてアニードの方に笑顔を向ける。
「アニードさんも行きます？」
「あ、ああ……私も向かうが……」
「じゃ、決まりですね♪じゃ、ひとっ飛びと行きましょうか！」
アキカは呪文を唱え始める。近くで見て分かる、その口の速さ。
そして今、アキカの唱える呪文は十数秒オーバーのアキカにしては規格外の長さの詠唱。普段の数倍の呪文量……それが意味するとこ

ろは……

「……『デア』」

アキカの体が光に包まれる。今まで感じた事のない膨大なアルマが渦巻き、勢い良く放出される！光となったそのアルマは次第に巨大な『何か』を形作る。

美しい衣に身を包み、巨大な翼を背から生やす……例えるならそれは女神。アキカの魔法で生み出されたのは巨大な神々しき女神。

女神が降ろす掌。アキカは其処に飛び乗り、にっこりと笑う。

「さ、乗ってください。ちょっと奮発しましたから、四人でも余裕ですよ！」

アニードは口をあんぐりと開けていた。ウスハも同様だった。恐らく私も同様だっただろう。

悪巫山戯が過ぎるだろう、この女……

「ウスハ……でいいか？」

「ああ」

「あいつ、お前の妹……化け物か？」

「化け物だな」

兄であるウスハでさえ引いている。それくらいのレベルの、素人目で見てもそれは異常な規模の、ずば抜けた魔法だった。

アキカに手招きされて、私達は恐る恐る女神の掌の上に乗る。不思議な光は、とても暖かく優しい感覚がした。

「今からパラディソスに飛びます！……それとコレ、結構な規模の魔法ですので、私の残りアルマを大分削っちゃったんですよね～。だから後、ざっと１０％位しか余力がありませんので、いざというときは皆さんよろしくお願いしますね～♪」

「な……むう、任された」

「お、俺は何もできないぞ！？」

アキカはてへっ♪と舌を出して（あれだけ恐ろしい真似をやってのける化け物には不似合いだな）、私達に頭を下げる。それに応じてアニードとウスハがそれぞれ反応を示す。

しかし、私にはどうしても理解できなかった。

「……何故、私を王の元に連れていく？」

「え？護るからですよね？」

「そうではない！」

そうではない。アキカの恍けた態度に、私は声を荒らげて詰め寄った。

「さっきまで殺し合いをしていた相手だぞ！？その前で余力がないなどとよく言えたものだな！しかも、その敵の為に、これだけの魔法を使うと？お前は一体何を考えて……」

「だって、四人同時に運べる魔法、これしかないから仕方ないじゃ

ないですか。『フリューゲル』と『デア』、その中間くらいが丁度良いんでしょうけどまだ開発途中なんですもん」

「そうじゃなくてだな……！」

威勢よく叫ぶ私。アキカは恍けていたが、突然その口を止めるように私の口に指を当てる。そして、のんきな笑顔を浮かべていた。

「大丈夫ですって。１０％程度でも、私はあなたに負けませんから♪」

「……！」

「というのは冗談ですよ？怖い顔しないでください」

怒りを抱いたのではなかった。その一瞬垣間見えたアキカの素の表情に、私は恐れをなしたのだ。

こいつは本物の『天才』。本当に力の１０％でも、私は負けるのではないか？そう、錯覚させるほどに、アキカは底知れぬ何かを持っていた。

「王様を護りたいんでしょう？そんな想いを疑って掛かるほど。私も薄情じゃありませんよ♪」

笑顔。そうか、こいつは救世と少し似ているのか。笑顔の下に、何かを隠せる……大きな何かを抱えながらも平然としていられる、最も怖いタイプの人間。

そこまで意識して、私は認めたくない事実に気付く。

……私は救世を、恐れている？

アキカとの引き合いにあいつを出すほどに？

得体のしれない悪寒から、体がぶるりと震える。

「ま、そんな危険をわざわざ教えてくれる人が、弱っている乙女を襲う真似なんてしないだろうとも思いますしね♪」

「乙女……なんて柄か？」

「お互い様ですよ、イツキ『ちゃん』♪」

「……だな」

私は腰の鞘に刀を収める。

全く、掴みどころのない奴だ……心底呆れた。気付けば震えも収まっていた。

「アニードも、ウスハも手を出さなくても構わん。邪魔するものの排除は、私一人で十分だ！そして、王に手を出す不届き者の始末もな！」

「イツキ様……私も共に」

「が、頑張れ！」

「兄様も頑張るんですよ！それじゃ、行きますよ！」

ふわっ……

巨大な光の女神が飛翔する。そして、首都パラディソスに向けて動き出す。

「兄様は、最後の舞台で頑張ってもらわなくてはならないんですから♪」
「はぁ！？お前何言ってんだ！？」
「確かめるんですよ」
アキカはにっと悪い企みを匂わせる笑みを浮かべる。そして、その笑みは、ウスハだけでなく、何故か私にも向けられていた。
「グゼさんの『本心』を、ね！」
救世の、本心？
意味を図りかねるその言葉に、怪訝な表情を浮かべた私。それから顔を逸らすように、アキカは前方を睨む。
「さぁ、来ましたよ！邪魔をする気満々みたいです！」
迫り来る飛行型テラスの大群。それを前にして、私は直ぐ様意識を切り替えた。
「全く……本当に掴めない奴だ」
愛刀、魔具（ヴィヴロス）『パラドスィ』を構え、私は前方のテラスを見据える。
「我が道を阻む者は、全て纏めて斬り伏せるッ！」

ノトスの命運を掛けた、我が恩人レークスを守る為の戦いが、大嫌いな兄貴との決着を付ける戦いが、今、火蓋を切る。

Ｅｐ１４：　救世と済（後書き）

イツキと共に、危機迫るノトスを護るため、事の真相に迫るため、明華と薄葉は遂に首都パラディソスへ！
その先で待ち受ける真実とは？そしてグゼの本心とは？
次回、「利用する者」に続く！

今回は救世（グゼ）と済（イツキ）の、テッラ召喚の過去編ですね。済の中では救世は相当に憎らしいものになっています。救世は果たして済の思うとおりの悪人なのか？それとも……？新たな天使兄妹を中心に、ノトス編佳境に突入です！

ＥＰ１５：　利用する者（前書き）

視点：複数

ＥＰ１５：　利用する者

視点：救済団体エクスィレオスィ構成員、テラス、ヴロミコ

「お久しぶりです……王様、いいえ……レークス様」

遂にたどり着いた王城、そこで若き王、レークスとの再開を果たしたグゼは笑顔で頭を下げた。まるで、旧来の友人と挨拶するかのように。……憎むべき相手にこの態度、相変わらず本質の掴めない奴だ。

「グゼ……グゼなのか……？」

「はい。グゼで御座いますよ。私に御用との事で、折角の再開を邪魔する者を少し黙らせてから参りました。イツキちゃんがいたら話にならないですし、ね」

「……イツキをどうした？」

「ちょっとお友達に相手をしてもらっているだけですよ。心配なさらずとも、城に居た兵士や騎士達は怪我一つしていませんから。少し、黙ってもらいましたけど」

「そこの男がやったのか……？」

「いいえ？私がやりましたけど？」

平然と返すグゼの言葉に、レークスは懐疑の目を向けた。まぁ、当然の反応だろう。グゼの話を聞く限り、こいつはグゼに力がある

とは思っていまい。せいぜい優秀な治癒術士としか思っていないのだろう。まぁ、『優秀』の度合いが強すぎるだけで、その表現に語弊はないのだが。

グゼはレークスのその目を見て、楽しそうにくすりと笑った。

「懐かしいですね……あの時と全く同じです。あなたが剣を持ち上げられない私を見ていた時と、全く同じ目です。……今も箸より重いものは持てませんが、ね。あ、今の笑うところですよ～？」

レークスもエクスィレオスィの一員のアルムも、唖然としている。グゼのイメージからは思いもつかないジョークに驚いているのだろう。まぁ、初見は俺も驚いたが。『アレ』を使うと、グゼは多少ハイになるから普段のお淑やかさが減少する、というより少し明るくなる。

「……で、ご用があると聞いて来たのですが。レークス様、私に何か求めるモノでも？あ、体、とかは止めてくださいね？一応、私、あっちの趣味はないんです」

……ちょっと下ネタを挟むのは止めて欲しい。一応、俺もお前に……いや、なんでもない。

グゼの言葉に、レークスは微妙な表情をしたものの、すぐに気を取り直して堂々と構える。

そして、愚か者らしい、想像以上……いや、以下の巫山戯た要求を出してきた。

「お前の噂は聞いてたぞ。優れた治癒術を身に付けたようだな。ど

うだ？私の元に戻っては来ぬか？今のお前になら、最高の待遇を与えてやるぞ？」

胸の奥底が燃え上がるような感覚。

グゼを勝手に呼び寄せて、使えなかったら捨て置いて、いざ力を付けたとなったら欲しくなったから戻ってこい、と？

何処までも巫山戯た王だ。若さ故？いや、こいつは人間として腐っている。テラスの俺が人間の有り様にとやかく言うつもりは毛頭ないが、それでもこいつがクズだとは分かる。

後ろにいる人間のアルムでさえも、その表情を歪ませているのだから、人間の目から見てもこいつはクズなのだろう。

俺は怒りに任せて魔具を構えようとした。

しかし、グゼが制止する。

「光栄です。私の力を認めて下さったのですね。ああ、身に余る感激……そもそも、私はあなたのお力になりたくて、此処まで戻ってきたのですよ？」

「グゼ様……？何を言ってるのですか……？」

アルムがグゼの意外な言葉に目を見開き、唖然としている。

私も言葉の内容にこそ驚いたが、グゼの態度には何も驚きはしなかった。

レークスは喜々とした表情で椅子から立ち上がる。そして、手を叩きながらグゼへと歩み寄った。

「そうか！ならば話は早い！」

「ですね」

レークスとグゼは笑顔を向かい合わせ、互いに手を伸ばした。そして固く握手を交わし……

グゼは優しく囁いた。

「あなたの望む、『あなたを侮らない』世界を創りましょう」

その言葉の意味をレークスが理解する間も無く、グゼは世界の再構成を開始する。

「此処が始まりの場所です……『世界樹』」

地面が僅かに振動する。そして、レークスの足元にヒビが入る。

「な、何をした!?」

「レークス様。安心して下さい。お怪我はさせませんから……」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ……

地面から顔を出すのは木の幹。木はグングンと伸び、レークスを絡めとる。

「う、うわあああああ！」

「お口にチャック。少し、静かにしてもらえますか？」

ぎしりと木の幹が、レークスの口を塞ぐ。声を上げることさえ適わなくなったレークスは、そのままどんどんと伸びていく木の幹に飲み込まれ、その姿を消す。木はどんどん太く、長く成長し、遂には城の天井さえぶち破る。

その巨大な樹、グゼの世界改変のスタート地点、『世界樹』。

「それではレークス様、お聴きください。変わり行く世界の音を」

グゼが懐から取り出すのはタクト型魔具（ヴィヴロス）、『ポリコス・アステラス』。グゼはタクトを振り、歌う様に呪文を唱える。

穏やかで、美しい、透き通った声が響きわたる。

城に、首都に、平原に、国中に……

「……繋がりましょう。『スィドロフォス』」

その美しい歌声に誘われたかのように、俺の、アルムの背中から美しい花が咲く。そして、一面を花園に変えた王の間の中心で、膨大なアルマの渦の中心に立ちながら、グゼがタクトを操る。

グゼの蒔いた『種』が遂に『花』を開く。

ノトス中から膨大なアルマが世界樹を目指して流動する。世界樹を伝い、国一つを成す程のアルマがグゼの小さな体に流れ込む。凄まじい。その一言に尽きる光景。

「……あはっ」

アルマの眩い輝きの中でタクトを振るグゼの姿は、とても美しく輝いていた。俺も勿論の事、隣で見つめるアルムも見惚れているようだった。

「あはははははははっ！」

グゼは笑う。楽しそうに。愉しそうに。

「……やっと、会える、ね？……お待たせ、そして久しぶり」

ガシャァァァンッ！

王の間の扉をぶち破り、奴は姿を現した。

その姿を見て、黒髪を優雅に靡かせ、その黒い瞳を怪しく輝かせたグゼが、奴の目を真っ直ぐに見つめた。

「救世ッ……！」

「済ちゃんっ……ずぅっと、ずぅっと……会いたかったよっ！！」

黒髪の天使イツキ。

奴は二人の黒髪の天使と共に、その姿を現した。

それをグゼは最高の笑顔で、似合わない明るい笑顔で、迎え入れた。

――

視点：杏樹明華（アンジュアキカ）

上空から襲い来るテラスをイツキさんは楽々と一掃して、私達は何事もなくパラディソスへ突入し、ノトス城の前まで辿り着きました。

しかし、そこで不思議な事に気付きます。いや、正確には上空に居るときから気付いていたと言った方が正しいかもしれません。

首都には続々とテラス達集結しつつありました。しかし、テラス達は、一般の人間には全く手を出して居ないのです。
襲っているのは攻撃を仕掛ける兵士のみ。やられたらやり返す、そんな感じの動きしか見せていません。

このテラス達は何が目的なのか？

もしかして、邪魔者を抑える為だけに動いている？

「イツキ様！アキカ様！ウスハ様！首都の防衛は私に、騎士団と軍部にお任せ下さい！グゼ様を……王をどうかよろしくお願いします」

アニードさんは、城の前で私達と別れ、テラスにより混乱している首都の中へと向かっていきました。私としては、イツキさんの行動を見張る必要もありますし、兄様の『切り札一号』を引き出す為にも、グゼさんの本心を確かめる為にも、王の元へ向かう必要がありました。なので、アニードさんの申し出には少しほっとしました。
あまり被害は出ていなさそうでしたが、それでも心配でしたので。

私達は城の中へと一歩踏み出しました。その時です。

激しい轟音が城内に響きわたります。

城がミシミシと音を立てて、天井の一部を崩落させる。地面は揺れ、城全体が揺さぶられているのが分かります。
そして、遅れて雪崩込むように、巨大な樹の根が私達目掛けてメキメキと伸びてきました。

「ちっ……！」

イツキさんが迫る樹の根を刀で切り捨てます。しかし、勢い良く伸び、息をつく間も与えないその樹の根の洪水を捌ききる事は流石にできません。

私は残る力を削いで、防壁を貼らざるを得なくなりました。

「『アスピダ』！」

樹の根の流れを盾の魔法で防御。樹は受け流されるように私達を避けて城中を埋め尽くすように伸びました。そして、見る見る内に樹の根は城の中を占拠してしまったのです。

「な、なんだよこれ……」

「悪いアキカ。私が捌ききれずに……」

「いいですよ。相性の問題です。それより少し心配になってきましたね。王様の身が」

「……これは救世の……いや、あいつにこんな事ができる筈がない。仲間のあいつ……あの男が？……急ぐぞ！」

イツキさんは樹の根を切裂き、先へと進む道を作りながら進んでいきます。彼女はこの魔法、いえ魔法かも分からないこの樹の根の生みの親を、エクスィレオスィの構成員、グゼさんを連れていった男、ヴロミコだと思っているようです。

……どう考えてもこの樹の根からはグゼさんのアルマしか感じないんですけどね。イツキさんはおろか、全快の私でも持ち得ない、扱い得ない程の規模の……膨大な量の。

イツキさんを先頭に、根を掻き分けて進むと、樹の根に飲まれた無数の人達。気を失っているだけのようでしたが、気のせいでしょうか？アルマ量が妙に少ないような……そんな感覚。

「……解放したいところだが、止まっている暇はなさそうだ。どうせ気を失っているから逃がすことまではできなさそうだしな」

イツキさんは何人かの脈を取り、無事を確認するとそれを置いてさらに先へと進みます。根は幸い巻き込まれた人を圧迫していないようでしたし、複雑に絡みついているので中々解放には手間が掛かりそうでした。これなら元を断つ方が確かに早いかもしれません。

そして、上階に上がり、樹の根の防壁が殆どが見えなくなってきた時、不意にそれは聞こえてきたのです。

「歌？」

城内に美しい歌声が響きわたりました。いや、これは呪文でしょうか？聞いたこともない、長く不思議な呪文。魔法を学んでみると、意外と呪文の法則性などが見えてくるものですが、それは私の知る魔法の法則には当てはまらない……全くのイレギュラー。強いて言うなら、それは何処かで聞いたとこがあるような……

そう、それはどことなくグゼさんの治癒術の呪文に似た法則を持

っていたのです。そして、それを唱える歌声はグゼさんのもの。

どうやら本当に王城で何かを始めるつもりのようです。

イツキさんはその歌声を聞いて、直ぐ様王の間へ向かう道を駆けていきました。それを兄様の手を引きながら追う私。

そして、勢い良くぶち破った王の間の扉の向こうには……花畑の中心で、巨大な樹を前にタクトを振るグゼさんの姿があった。

グゼさんは私達を見て笑顔を浮かべた。今までの彼女……あ、彼には似合わない、楽しげな笑顔を。

「救世ッ……！」

「済ちゃんっ……ずぅっと、ずぅっと……会いたかったよっ！！」

奇妙な声色で歌を止めたグゼさんは目を潤ませながら叫んだ。明らかに様子がおかしい。

「王を……レークスを何処にやった!?」

「大丈夫ですよ、済ちゃん！レークス様ならこの世界樹の中だから！」

「何……！」

「怪我もしてないし生きてますよ？気絶もしていないでちゃあんと声も聴いてます。だから今はいいじゃないですか？せっかくの再会、

噛み締めましょうよ！」

何故かふらふらと酔ったように頭を揺らして、とろんとした視線をイツキさんに送りながら、グゼさんはくいくいとタクト型の魔具振りました。酔ってる？それともこれが本性なんでしょうか？今や完全に髪も瞳も黒く染めたグゼさんは、何から何まで初めて出会った時から変わってしまったのです。

そんな豹変したグゼさんの姿を見て、私が握る兄様の手は震えていました。

裏切られた……きっとそう思っているのでしょう。

「グゼさん……」

「なんですか？ウスハさん」

兄様は私の手を振りほどいて、前進し叫びました。

「グゼさんが男とか……マジで嘘ですよね！？」

……はい。兄様は平常運転でした。恋は盲目、とはよく言ったものです。今の状況まるで見えていませんね。……だが、そんな情熱的な兄様も……イイっ！

「……ああ、嘘も何も……私、一言も自分が女とは言ってないと思いますけど？……あ、もしかして惚れてくれちゃってました？やだ、私ったら……罪な女ですね。いや、男ですけど」

「う、あ……」

兄様が壊れかけている！グゼさんの奇妙なテンションについていけてない！しかも予想外に男宣言が響いているみたいです！そんな様子を見て、グゼさんはくすりと笑うと、ふわっと甘い香りを漂わせながら姿を消す。

そして一瞬で兄様の傍まで迫ると、その綺麗な顔を兄様の耳元にぐいと寄せました。

「……あ、でも私は男ですけど……ウスハさんが愛してくださるのなら、女で居て欲しいというのなら……」

兄様も、イツキさんも、私も、向こうで見ているヴロミコさんも、アルムさんも、一気に顔が赤くなりました。

「……女になってもいいですよ？」

……な、何を言ってるんですかこの人は！？一体、どういう反応をすればいいのですか！？皆、顔を赤くしてオロオロしてますし！今まさに自体の渦中にいる兄様もネジが外れたようにあばば言ってますし！

グ、グゼさんってこういう人だったんだ……恐ろしい人！

「あれ？冗談ですよ？もしかして間に受けちゃいました？止めてくださいよ～、私、そういう趣味はないんですから、もぉ～～」

「グググ、グゼっ！悪酔いし過ぎだ！少しはアルマの吸収量を抑え

ろっ！見てられん！」

ヴロミコさんがあわあわしながら顔を赤くしている。

「酔ってませ～ん！私は別に酔ってませんでふよ？」

……酔ってる？アルマ吸収？

ふらふらとしているグゼさんの肩を支えて、ヴロミコさんが大きな樹の幹に寄りかからせる。

「お前はそこでしばらく休んでいろ。最終目的にのみ集中しておけ」

「……はいはい。分かりました。でも、私、酔ってないですよ？」

「分かったから。……ったく。目的の為とは言え見たくなかったな、お前のその姿」

唖然としている私達を他所に、ヴロミコさんが、アルムさんを引き連れて、私達の前に立ち塞がりました。

背中からは……花？辺り一面に咲き誇るものと同じ花を咲かせています。

「……と、まぁ今はグゼは少しアルマ酔いしている最中でな。悪いが少しの間、お前たちの相手は我々がさせてもらおうか」

「アルマ酔い？」

聞き覚えのない言葉に、私は疑問符を浮かべました。しかし、ヴロミコさんはそれに答えをよこさずに、その手に付けたメリケンサックのような魔具を構えました。それに付き従って、アルムさんも剣を構えます。

「……兎に角、だ。グゼに手を出すのならば……容赦はしない。グゼに賛同し、協力するというのなら手は出さない」
「賛同も何も……私達はグゼさんが何をしようとしているのかさえ分からないんですが」
「上等だ。王に手を出して置いて……貴様らこそ容赦して貰えると思うなよ？」
「ちょっとイツキさん！話が違い……」

ます！と言い切る前に、イツキさんは刀を抜き放ち、ヴロミコさんに突撃していきました。もう！まだグゼさんの目的も何も分かってないのに！

いくら何でも、大したアルマ量も持たないヴロミコさんに、イツキさんが容赦なく斬り掛ったら……

あれ？

その異変に気付いたのは、ヴロミコさんがファイティングポーズをとった瞬間。ヴロミコさんの一般人的アルマが、突如テラスに共通した、少し寒気のするアルマへと変貌しました。そして加えてそのアルマには濁り気。

どうして、ヴロミコさんからグゼさんのアルマが？

一気に二種類の混じり気のあるアルマを爆発させて、ヴロミコさんは一瞬でイツキさんの前に立ち塞がり……

「天使？それがどうした。今の俺『達』は、その程度に屈しはしない！」

反射的に振り抜かれた刀を、そのメリケンサックで受け止めました。

ギンと激しい金属音を立てながら、イツキさんが間合いを取りつつ刀を操る。それを的確に拳で受け止めながら、ヴロミコさんが間合いを詰める。

イツキさんのスピードに、完全に対応している？

「くっ……！」

「どうした？それがノトス最強の天使の実力か？」

「調子に……乗るなッ！」

イツキさんが片手で繰る刀を加速させる。瞬間的に爆発するように付術により身体能力を跳ね上げ、強引に纏わりつくヴロミコさんを振り払う。ギン！と金属音を立て、ヴロミコさんは後ろに飛ばされつつも、そのまま身軽に着地する。

イツキさんは顔を顰めてヴロミコさんを睨む。

「……貴様、テラスか……！しかも、かなり上位の……！」

「半分正解、半分間違いだ。確かに俺はテラスだが……上位などと呼ばれる程の実力はないさ」

「……巫山戯るな。私も今までテラスを何度も相手にしてきた。お前はそのテラスの中でも、ずば抜けて強い」

「天使殿のお褒めの言葉、有り難く受取りたい所だが……その賛辞は俺に向けられるべきではないな」

ヴロミコさんが親指を後ろに向けて、樹に寄りかかりながらふわふわとした様子でタクトを振るグゼさんを指さす。

「今まさにお前を圧倒している力は……お前が弱いと罵り、侮り、見捨てた……グゼの力だ」

「グゼの……だと？しかも、私を圧倒？巫山戯るな。私は貴様に遅れなど……」

イツキさんが喋り終わる前に、私は反射的にその勝負に介入していた。付術により瞬間的に加速、そしてヴロミコさんの『居た』位置を睨み続けるイツキさんの首根っこを掴み、思い切り後ろに引き倒す。そして、少量のアルマの付術によって、最低限のプロテクトにより掌を保護。

イツキさんの頭があった位置に振り抜かれた鉄の拳を、庇うように掌で受け止めた。

キィン！と音を立てて、ヴロミコさんの拳が止まる。想像以上のアルマによる密度の高い付術。その強化メリケンサックの衝撃が、私の腕を伝い電撃的な刺激を体に伝える。

「ぐっ……！」

「ア、アキカ！？」

痛い。しかし握力に力を集中して、その拳を捕らえる。此処で止めなければ、イツキさんに追撃の一発が飛んでいく。

「……天使アキカ。何故、イツキを庇う？お前はグゼの側に付くのではないのか？」
「いえ、保留ですよ。ただ、緊急で女の子の顔を思い切り殴ろうとしたあなたを止めに入っただけです」
「其方側につくと見ていいんだな？」
「だから私は兄様だけの味方ですって。どちらにつく気もないです。……今の、まともに受けていたら、イツキさん死んでましたよ？」

私はその視線をヴロミコ、ではなくグゼさんに向ける。

「止めたほうがよかったですよね？グゼさん」

ふらふらとタクトを振るグゼさんは、にっこりと笑って首を横に振る。

「どちらでも構いません。安心して下さい。死者も怪我人も出しませんので」
「それはあなたが治すという意味ですか？死人すらもあなたは治せると？」
「はい。今の私は何でも出来ますよ？死者を呼び戻す事も、朝飯前です」

自信に満ち溢れた言葉。死者を蘇らせる？そんな事が本当にできるとでも？

そして、何より妹が死ぬかもしれない状況で、それを止めようとしない？

これは本当にグゼさんなのか？

「……済ちゃん。どう？私の力、分かったかな？今の動き、全く見えなかったでしょ？」
「巫山戯るな……！」
私の後ろで倒れるイツキさんは、ぐぐっと体を起こし、グゼさんを睨む。
「あれはそこの男の力だろうが！他人を利用し、そこで北叟笑んでいるだけの貴様が、それを力として誇るな！」
イツキさんは直ぐ様その体を起こし、爆発的なスピードで駆け出しました。そして、向かうのはグゼさん。
「イ、イツキさん！話が違い……」
私がヴロミコの拳を解放し、止めに行こうとしたその時。私は気付きました。
ヴロミコが、まるで焦っていない事に。
そして、次の瞬間、私は言葉を変えました。
「イツキさん！横です！」
「……な！？」
イツキさんが反応を遅らせる程のスピード。ヴロミコとほぼ同スピードで、彼はグゼさんに襲いかかるイツキさんに飛びかかっていました。

「グゼ様には……指一本触れさせんッ！」

エクスィレオスィの一員、アルムさん。

並程度のアルマしか持ち得ない筈のアルムさんは、ヴロミコと同等の膨大なアルマを燃え上がらせながら、その強力な付術を操り、イツキさんに斬りかかっていたのです。

「ちっ……！」

それでも早くに気付けた事が幸いしてか、刀でその攻撃をいなし、イツキさんは直ぐ様アルムさんと対峙した。

「……どういう事だ……！？さっきまでとはまるで別人……！」

「ああ、さっきまでとは違う。次はお前からグゼ様を守り抜いてやる」

アルムさんは、その膨大なアルマを纏いながら、今までとは段違いの気迫でイツキさんに剣を向ける。

そのアルマは……やはり、グゼさんのもの。

「済ちゃん。あなたは今、私が他人を利用し北叟笑んでいると言いましたね？」

グゼさんはタクトを振りながら微笑む。

「否定しません。私はヴロミコを、アルムさんを利用しています」

笑顔。無邪気で楽しげな笑顔。

私は初めてグゼさんに恐ろしい何かを感じました。

「だが、俺達もまた、グゼを利用している」

私の前で、拳を構えるヴロミコがグゼさんのアルマを纏いながら不敵に笑む。

アルムさんは険しい表情で、さらにグゼさんのアルマを色濃く纏い始めました。

その二人の様子を和かに眺めながら、グゼさんは今も尚膨れ上がりつつあるアルマを満ち溢れさせながら、タクトに色っぽくキスをした。

「私達は、利用し、利用される。これ程美しく強固な人間関係はありません」

グゼさんは似合わない言葉を並べ、首を傾け可愛らしく微笑んだ。

「誰かに何かをして欲しいのは当然じゃないですか。それを割り切った人間関係こそ、裏切りのない真なる人間関係。見返りがあって当然の、途切れない善意の輪」

そして、グゼさんは堂々と、その計画を宣言する。

「そして、私『達』の輪は……世界に広がる。等価交換、当然の摂理に従った『繋がり』の形成……互いに与え、互いに背負う、絶対平等の集合体の形成。痛みも喜びも共有できる、世界の形成。それにより、恵まれない人々は当然の『恵み』を得て、痛みを知らない

人々は当然の『痛み』を知る」

巨大な樹、それに添えられた細い指先が艶かしく動く。

「今、この中に居るレークス様……『最も恵まれている人』を媒体に、絶対平等の繋がり、『共有集合体』、『償（エクスィレオスィ）』を形成します。その時、恵まれたモノ達は、受けるべき痛みを受け……恵まれないモノ達は受けるべき恵みを受ける。上に立つ者が、下に倒れる者に『償う』時がきたのです」

エクスィレオスィ。それが何なのか、私には理解できませんでしたが、何やらとんでもない規模の魔法を発動させようとしているのは分かりました。

そしてそれにより、王、レークスは『罰』を受ける。

「『償（エクスィレオスィ）』の証はこの花。この花がノトス中の人間の背中に咲いた時。儀式は完遂し、『恵み』と『痛み』の配分は完了します。今、国中には私の支持で動き、花の『種』を蒔いている者が多数います……あと十数分程で、全ての人間の背中に花を咲かせ、『償（エクスィレオスィ）』は発動するでしょう」

十数分……それが過ぎた時に、何かが起こる。しかし、グゼさんは何故それを話すのか？最後まで私達を騙し抜き、計画を滞りなく進めるべきなのではないのか？

「平等（フェア）でないでしょう？」

グゼさんは、私やイツキさんの思考を読み取るかのように、言葉を紡ぐ。

「私が正しいのか、済ちゃんが正しいのか、それを正々堂々決せずに、嘘偽りで計画を完遂したら、不平等ではないですか」

平等を謳うグゼさんのプライドということか、つまり彼女……あ、彼は宣言したのである。

「丁度、此処には六人。三対三で平等ではないですか。此処で決しましょう」

「どちらが正しいか、正々堂々平等に」

グゼさんは手に握るタクトをかざし、不敵に笑んだ。

「私の魔具、『ポリコス・アステラス』。此れを私から奪えたら儀式は止まります。『償（エクスィレオスィ）』は動く事無く、レークス様は解放されるでしょう。しかし、もしも儀式が完遂された場合」

グゼさんは今までで一番歪んだ、初めて悪意に満ちた笑みを浮かべてその末路を告げた。

「『恵まれた者』の象徴として、『生贄』として『世界樹』の一部となってもらいます」

生贄？つまり、それがグゼさんの、レークスに対する復讐？

「させるか……！」

イツキさんの表情が、険しくなっていく。

「レークスは私が救い出す……貴様などに奪わせるものか……！」

イツキさんの憎悪をまっすぐに受け止め、グゼさんは微笑んだ。

「頑張って下さいね♪」

……国を揺るがす、平等の名の元に、『恵まれた者』に下される裁き。そういった所でしょうか？

それに、レークスという王に与えられる罰。

……私はそれを全否定するつもりはないんですけどね。

グゼさんが正しいのか、間違っているのかは、今私が、私達が戦う理由とは全く関係がありませんでした。

さらにいえば、『それを見定めること』が、私と兄様が此処に来た理由とでも言えましょうか？

私は傷付く人を見捨てる程に冷酷ではありませんが、悪いと思った人に『償い』を求めないほどに優しくもありませんしね。

その『見定め』の為にも、グゼさんを遠ざけるこの人には、ヴロミコにはご退場願いましょう。

僅かに残る私のアルマを全て注いで。

そして、グゼさんを見定めるメインのお仕事は、全て兄様にお任せしましょう。主役は美味しい所をもっていかないとですね！

こうしてノトスの命運が掛かった、最後の十分が動き出したのです。

Ｅｐ１５：　利用する者（後書き）

ノトスの命運を掛けた文字通りの最終決戦へ突入！ノトスを根本から変えてしまうというその儀式は止められるのか？そして、グゼを見定める事はできるのか？次回、最終局面！

ノトス編も大分終盤に近づいて参りました！三対三の最終決戦に突入です！グゼの力の秘密が次回明らかに？

今回のタイトルは少し分かりにくかったかもしれません。今回の内容について、というよりも全体を指しての意味合いが強いので……

そして、空気な主人公兄……何気に後半全く喋っておらず、動きすらしておりません……ｗ　そういう立ち位置なんです！

そして最後に美味しいところを持っていく、そんな主人公……になるんでしょうかね？

次回こそは動くかも？

ＥＰ１６：　だって兄様を愛していますから！（前書き）

視点：杏樹明華（アンジュアキカ）

ＥＰ１６：　だって兄様を愛していますから！

残り時間十分。

私はテラスらしき男、エクスィレオスィの構成員であるヴロミコと対峙する。姿は人型で、「らしき」と言ったように、見た目は完全に人間そのものです。すらりとした長身に、皮の鎧、空色の短髪が印象的な気の強そうな相手です。

そしてその拳には魔具（ヴィヴロス）らしき、鉄のメリケンサック。男が拳闘士であることは明らかでした。

しかし、それが魔具であるとすれば、それは単なる魔法発動のツールでしかない事も十二分に考えられます。先程のイツキさんとの交戦で、この人も付術を操る事は分かっていました。その驚異的なスピードに注意しつつ、拳のリーチ以上の効力を持つ魔法にも注意したいところ。

いつもはそれなりに恵まれた反射神経に任せて、思うがままに戦闘に望む私も今日は少し冷静に動かなければなりません。何故なら私に残るアルマは、既に全快時の一割にも満たないからです。

相手のスピードを考えると、広範囲攻撃を可能とする魔法が欲しいですが、今はそれどころかそれなりの攻撃魔法をやっと一、二発打てる程度。付術使いにタイマン勝負を挑む場合は、こちらもそのスピードに対抗する為に付術による移動力強化が必要となるから、それにもアルマを割き、しかも付術使いの防御力を突破する決め手となる魔法にはそれなりの威力が欲しいので、それに割くアルマも

相当。となると、チャンスは一発。

「……ハラハラしますね」

自らをギリギリに追い込んでの勝負。逆に燃えるじゃないですか！

私は足と視覚、聴覚、触覚にアルマを張り巡らせる。フィニッシュブロー足りえる魔法用のアルマを残し、残り全ては付術による身体能力強化に回す！幸い相手のスピードを目視できたので、それに対応できるスピードギリギリにアルマ量を設定し、アルマ消費をギリギリまで節約。もしも、相手がもっと速くなったら？その時は気合です！

「さ、始めましょうか。ヴロミコさん」

「あくまでやる気か……いいだろう。手加減も遠慮もナシだ。……グゼと俺の力を、見せてやろう！」

ヴロミコの背中の花がふわりと大きく膨れ上がる。それと同時にヴロミコの中のアルマが異様なまでに膨れ上がる！

……これ、絶対に一個体が持てるアルマの量はないですよね？

「うおおおおおお！」

足に膨大なアルマの一部を移動させ、付術による脚力強化で猛進してくるヴロミコ。その目にも止まらぬスピードを、視力強化で捉えた私は、最小限の動きでそれを躱しました。風が痛く感じる程の通過スピード。勢い余って私の横を通り過ぎたヴロミコは、急ブレ

ーキを掛けながらUターンし、再び戻ってきました。

「猪ですかあなたは」

「悪いな。まだまだ制御仕切れていないのでな」

まだまだ？ということはこれは最近手に入れた力なのでしょうか？この膨大な、グゼさんの色を含んだアルマ。それは何らかの手段をもって得ているものなのでしょうか？何か、何か……

……なんて、まどろっこしい分析はやめましょう。どう見ても背中の花が怪しいです。本当にありがとうございました。

「その花、どういう魔法ですか？」

突進を再び躱し、軽く雑談する感覚で尋ねる。

「……魔法ではない。これは『治癒術』だ」

おや予想外の答えが帰ってきました。ＭＡＸスピードがどうにも扱い辛い事に気付いたらしいヴロミコは動きを止めて足踏みを始めました。制御できるスピードと力の感覚を調整しているのでしょう。

そして、先ほどは何の問題も無くイツキさんに接近し、拳を叩き込むという一連の攻撃動作を実現していた事を考えると……今の制

御ミスは、その拳を受け止めた私に対する過大評価による力の入れすぎか、それとも今も徐々に力が増幅している為にアルマの最大出力量が増えすぎた為か……まあ、どちらにせよ、これから適正スピードへとどんどん近づいていくのでしょうし、どうでもいいですね。

それより問題は、あの花が『治癒術』によるものだということ。治癒術って人を癒したりするものじゃなかったんですかね？

「その顔、グゼの治癒術を侮っていたようだな」

侮ってはいませんが……何やら何故か私には不向きな技術のようですし、むしろ尊敬もしている位です。

ヴロミコはどうやらアルマ出力量の確認が終わったらしく、再びファイティングポーズを取りました。

「治癒術、馬鹿はその言葉を聞いただけでそれは『他者を治し癒す術』だと思い込む。愚かにもその『本質』を見られない」

「『本質』？……アルマを生命エネルギーと見立てて、それを他者に分け与えることで相手を癒す……というやつですか？」

……とまぁ、此処まで言って、私ははっとしました。

全てとは言わずとも、この花の治癒術の力の一端を理解したからです。

「……つまり、『アルマの譲渡』。今のあなたはグゼさんからアルマの供給を受け続けている状態、という訳ですか」

「察しがいいな。お前は中々に本質を見極めているようだ」

つまりは治癒術の魔法とも付術とも違う『本質』とは、傷を癒す事ではなく、『自身のアルマを他者に分け与えている』ということ。魔法はあくまでアルマで自分の内から事象を形成するもの、付術は自分の一部（武器も自分の操る体の一部、動物の牙みたいなものと考えられますね）にアルマを集中させて性能を向上させるもの。あくまで自身にアルマを作用させるものです。

それに対し、治癒術は相手にアルマを与え、治癒力を促進したりする……他者にアルマを作用させるもの。これは意外と大きな違いです。

そしてアルマの譲渡ができるということは、他者にエネルギーを供給できるということ。

つまりこの一個体がなせる筈のない高パフォーマンスは、『二人分』のアルマがあるからこそなせるものなのです。

……というのは全くの嘘。明らかにそのアルマ量は『二人』のものではないです。そして、向こうでイツキさんと剣を交えるアルムさんもそのアルマ量が大幅に増幅しています。

グゼさんが供給しているアルマ量が尋常ではないのです。

そこに何か秘密がある？グゼさんが膨大なアルマを生成、供給できる秘密……

まぁ、もういいでしょう。分かってますとも。外で見たアルマ量の少ない兵士、そして今も増幅を続けるグゼさんのアルマ。その聞

くも恐ろしい治癒術の『本当の顔』。

「……『アルマの譲渡』、いいえ言い方が少し違いますか。『アルマの移動』の方が正しいですかね？」

「其処まで見抜くとは……流石はグゼが評価した天使だ！」

ヴロミコがクン、と加速し、部屋に咲き乱れる花を踏みつけ散らしながら、私の前に立ちました。お喋りに興じているように見えますが、それでも私は一応集中しています。迫るジャブを体を振りながら躱し、言葉を続けます。

「治癒術は『アルマを移動させる術』。それは相手に受け渡す事も……『相手から奪う事』も可能にする。つまり、グゼさんは今、何処かから莫大な量のアルマを吸収しているんですよね？表の兵士も活動が鈍るレベルまでアルマを奪ったのですか？」

「『奪う』？人聞きの悪い……まぁ、表の兵士は確かに奪ったと言えるがな」

喋る事で、意識が散漫になる……互いに余裕を持っているつもりでも、それを意識できるかできないかでは大きな差が付きます。ヴロミコは無意識の内に会話に集中して、攻撃のパターンが単調になっていました。そして、会話が弾むことでそれさえ気にならなくなる……そうなれば回避は容易です。

どうやらこの人はお喋りが好きなようですね。情報も得られて、戦いにも余裕が出る。ある意味扱いやすい……勝手に手の内をバラして余裕があると語りだす漫画の悪役みたいでやりやすいです。

「グゼの編み出した世界最大級の治癒術、『償（エクスィレオスィ）』。その前段階の『スィドロフォス』は、今までグゼがアルマを与えてきた者のアルマ

をリンクさせる！」

今までアルマを与えてきた者？……それはつまり……

「今までグゼが治癒術で救ってきた、無数の人間達、テラス達のアルマが！この花を通じて共有されているのだ！そしてその数……」

その数……？

「……その数……」

「その数……？」

「……沢山だ！」

ああ、はい。沢山ですね。

「私もいまいち覚えていないんですよ。何年間も続けてきて、治癒を施した人の数を両の指で数え切れなくなった時から数えるのをやめてましたから」

「じゅ、十人でやめたんですか。なんとまあ……寛大というか……」

後ろの方で補足するグゼさん。大概適当のようだ。

「と、とにかく！このノトスの多くの人間が、グゼの施しを受けているのだ！それら全ての人間のアルマが、今俺達に流れ込んでいる！分かるか？そして今もなお！リンクに繋がる者が新たなるリンクを各地で広げつつある！」

成程。今もまさにアルマ提供者が増え続けているから、グゼさんのアルマがさらに増加していっているという訳ですか。

そして、その規模は最終的には……

「分かるか？制限時間が迫るにつれて、俺達はさらに強くなる！その戦力は……ノトス一国分だ！」

わお。私達は今まさに、国を相手取っているという訳ですか。

いや、正確には一国分の戦力、というのには語弊があるのでしょう。

一国分の戦力と言われると、その国全体の保有する戦力を指すように捉えてしまいますが、この場合はもっと恐ろしい。

何故なら本来なら戦力として換算されない筈の、国の多くを占める一般人をも、戦力として数える事が出来るから。

アルマというこの世界の人間が持ちうる戦力。例え一般人でも、それを掛け合せればそれは桁違いの数値となるでしょう。それこそ兵力と比べ、数倍以上はくだらないかもしれません。

言葉通り国一つを敵に回す、という感じですね。

さて、それではそろそろお時間です。猿でも分かる解決法で、ぱぱっとヴロミコさんには退場願いましょう。

攻撃を躱しながら、呪文を唱える。あえてその口の動きが相手に見えるように。そして、一気に後ろに飛び退きます。

「させるかッ！」

私の余力を知らないヴロミコは焦ったでしょう。私がそれなりの規模の魔法を扱えるのはグゼさんから聞いているでしょうから。

ヴロミコは開いた距離を詰めようと、全力で地面を蹴り、思い切り拳を振り抜きます。

釣れた。

ヴロミコの視線は私の口元に向きました。そこですかさず体を落としての足払い。

「足元がお留守ですよ」

「グッ！」

勢いに乗せて体を浮かせた片足立ちの状態。更には、詠唱を止めようという焦りから生まれた大振りな右ストレートの勢いが加わり、ヴロミコの体は前のめりにバランスを崩します。私は直ぐ様低い姿勢から地面を蹴り、くるりとステップ。背中を丸見せのヴロミコに目掛けて、その魔法を発動させました。

手に握るは火球。

狙うは背中。

その火球を叩きつけるように打ち込む。

「『フォティア』！」

ゴウ！と直撃した火球が唸る！

「ぐあッ！？」

ヴロミコは顔を歪める。しかしそれは致命傷には成り得ない。一応、最下級クラスの炎の魔法ですので。

「……迂闊だった。だが、その程度で倒れる俺ではないぞ……！」

「ええ。倒れたら拍子抜けですよ。……でも、背中の花はどうでしょう？」

「な……！？」

私の狙いはあくまで『花』。グゼさんとのアルマ共有のパイプラインと、ヴロミコ自身が語った花です。

ヴロミコは周囲に咲く同じ花を踏みつけ、散らしていました。つまり耐久力は其処まで高くないのでしょう。しかし、手で摘み取るには少し不安。そこで炎で焼き尽くす事で除去。これによりパイプラインは断絶され……

「おのれ……それが狙いかッ！」

ヴロミコのアルマは見る見る内に減少していきます。わお。思った以上に減りましたね。しばらくはヴロミコの中にアルマが残留すると思いましたが。

振り向いたヴロミコ。そしてすかさず私はその顎目掛けて強化した足を打ち込む。勿論、経験則から加減をして。

音も無くとんと足が触れ、ヴロミコがぐらりとバランスを崩す。そして、糸の切れた人形のように、ばたりと後ろに倒れました。

「……！？……な、何をした！？」

「ああ、動かないほうがいいですよ。脳震盪起こしてますから。意識は一瞬しか飛んでないみたいですけど、暫くは目眩がしてふらつくと思います。……ま、残り数分の間には治らないでしょう。無理して動くと後が怖いですから大人しくしていて下さい」

倒れ、立ち上がれないヴロミコに忠告をして、私は兄様の元へと向かいました。未だ交戦を続けるイツキさんも心配でしたが、兄様の『あれ』を動かせば、グゼさんから魔具を取り上げる事は容易でしょう。

そして、私が兄様の傍に駆け寄ったその時。

「……何で立っちゃいますかね？」

立ち上がる気配を感じて、私は再び視線を戻しました。

「グゼの邪魔はさせません……！」
「フラフラじゃないですか。寝ていて下さい。そうしないと私も手加減できませんよ？」
「手加減など無用……！俺はこの命を賭してでも、グゼを護り抜く！」

手加減しないと死んじゃうから言っているんですけどね。付術に頼らずとも、人間の形を成す生き物なら上手く蹴れば簡単に死んでしまいます。……動機はなんであれ、人の為に動く人なのでテラスといえど見逃すつもりでしたが……

「……何をそんなにムキになるのですか？グゼさんのアルマ量、それを見て、あなたはグゼさんを護れる立場にあるとでも？」

兄様の活躍を邪魔する邪魔者を前に、私の中の残酷な感情が顔を覗かせます。

本当に、ねじ伏せてしまいましょうか？

しかし、ヴロミコの真っ直ぐな視線と共に放たれた言葉が、私を怯ませました。

「……ああ。確かに俺はグゼより弱いが……俺はあいつを意地でも護る！……だって俺は、グゼを、愛しているのだから！！」

ほえ？

驚き口をぽかんと開いていたのは、私だけではありませんでした。私の後ろで立つ兄様も、向こうで剣を交えていた筈のアルムさんとイツキさんも、樹の前でタクトを振る手を止めているグゼさんも、その場にいる全員が驚き唖然としていました。

「……何を言って……グゼさんは男性ですよ？」

「それがどうした！！」

その気迫に再び私は怯まされます。その言葉には、強い情熱が篭っていました。

「あいつは傷つき、人からも、テラスからも見放された……孤独だった俺を癒やし、傍に歩み寄ってくれた……唯一の存在なのだ！美しく淑やかで強い芯を持ち、そして何より優しい……そんなグゼに俺がどれ程救われたと思う！？」

興奮し語るヴロミコ。その過去に何があったのかは分かりませんが、その想いは本物のようでした。

「男？女？そんなものは関係あるかッ！グゼはグゼ、俺の愛する唯一の存在！それを下らない括りで……お前なんぞに否定はさせん！」

私は呆気に取られていました。

男も女も関係ない、愛する者は愛する者、下らない括りなんて関係ない……それを否定なんてさせない……私はどうして、こんなにも感銘を受けているのでしょうか？

「グゼ……俺は絶対にお前を護り抜く。だからもし、『償（エクスィレオスィ）』が完成したら……お前も俺を愛してくれないか？」

それは紛う事無き愛の告白。なんということでしょう。

「……俺だって、グゼ様を愛している！」

続いて声を上げたのは、アルムさん。

「俺はグゼ様から救われた時から、一生この人に付いていくと決めたんだ！例えグゼ様がどんな道を進もうとも！……俺だってこの愛、ヴロミコに負けるつもりなどない！」

な、なんて熱いのでしょう……グゼさんを巡る男の熱い想いの激突……私まで赤くなってきましたよ。

「俺だってそうだ！」

此処でまさかの兄様登場！？

「もう……男でもいいや！俺、綺麗で可愛くてお淑やかで優しくて天使なグゼさんが……好きだぁぁぁ！」

に、兄様が告白した！？昔は怯えて好きな子と話もできなかった

兄様が!?なんということでしょう!

「私だって譲れない……!レークスは、私に生き甲斐を与えてくれた……相応しい居場所を与えてくれた!……私は意地でもレークスを救い出す!私もレークスを愛しているのだから!」

イツキさんまで!?

な、なんという愛の入り乱れる花畑……!

そう、愛に身分や立場など関係はない。大切なのはその想い……

兄妹なんて立場、関係ないではありませんかッ!!

私はずっと秘めていたこの想いを、此処で叫ぶと決めました!

「私達も……兄妹とか、関係ありませんよね……!兄様……私、兄様の事、一人の男性として愛しています!結婚してください!」

「それは無理」

おのれ。

ま、まぁ、いいでしょう。兄様も今はグゼさん一辺倒ですし。でも、グゼさんにフラれたら、きっと私の元に帰ってくると思いますから!

……完全にライバルに負けを認めてしまってる私って……

問題の三人から愛の告白を受けたグゼさん。返事を迫る三人の男に、彼女……いや、彼はすごく困った顔を見せました。必死でつくる愛想笑いが苦々しいです。

「あ、あの皆さん？……今はやめにしましょう？……今は私、儀式に集中したいので……」

もう完全にタクトを振る手を止めているグゼさん。今は儀式もストップしているようです。しかし、ヴロミコさんもアルムさんも兄様も、引かない。イツキさんも何故か此処では空気を読んで手を止めている。

「いやグゼ。今、聞かせてくれ。お前の返事で、俺はお前のアルマがなくとも……より力強く戦える！」

「抜け駆けは許さない！俺だって、グゼ様！」

「何勝てる気でいるんだお前らは！俺だってここは譲れねぇ！」

兄様、珍しく熱いです！ああ、そんな兄様も……イイ！

遂に（違う意味）で追い詰められたグゼさん。冷や汗を流しながら、グゼさんはごくりと唾を飲み込みました。頬はほんのり赤く、先程までのアルマ酔いも冷めているようです。

「……あの」

暫く口を結んでいたグゼさんが、ゆっくりと口を開く。

グゼさんは果たしてこの三人の誰を選ぶのか！？

「皆さん人間としては好きですけど……私、こう見えても……
そっちの気は無いんです。……ごめんなさい」

見事なまでの玉砕でした。その気まずそうな笑顔と苦々しく柔らかい返答に、三人は口を閉ざし凍りつきました。いや、ある意味当然の結果でしょう。

凍りつくヴロミコさんが、とても気の毒だったので、私は一気に接近して、とんと小突いてあげました。すると今度はヴロミコさんは、そのまま倒れて立ち上がってきませんでした。……男を見ました。安らかにお眠りください。

そして、イツキさんとアルムさんの勝負も、決着が着きそうです。

「……お前の心意気は認める。だから、もう休め」

刀を構え、イツキさんが呟きました。その表情は妙に冷静で、真剣みを帯びていました。先程までの憎悪と焦りに満ちていた眼は何処へやら……これなら負ける気はしませんね。

「……黙れ！例えグゼ様に愛されずとも！俺はグゼ様に一生尽くす！」

「お前の想い、しかと見届けた」

イツキさんは高速で迫り来るアルムさんを前に目を閉じた。それはある種の自殺行為とも言えるかもしれませんでした。しかし、その時の彼女からは、何故か『負ける気配』を感じなかったのです。

「目を瞑ってどういうつもりだ！？」

「……『目に見えるものが全てではない』。……ああ、そうだな。忘れていたよ。……お前はよく言っていたな、兄貴」

その言葉に、わずかにグゼさんは反応したのが分かりました。イツキさんは目を閉じたまま、微弱なアルマを体から伸ばしました。それは薄く、集中して初めて見えるほどのもので……細く長いその『領域』に、アルムさんは勢い良く飛び込みました。

私が初めて倒したテラス、トルメンタ。その大きさの割に、あっさりとオーバーキルしてしまった相手。そして、私はこの世界にお

いて、力量はアルマ量に基づくと学びました。アルマ量は即ちその強度ととも言えるでしょう。

イツキさんはアルマの触手による『アルマ触覚』とでも言いましょうか？アルマにアルマで触れる事で、即座にそのアルマ量と位置取り確認。人体に漂うアルマ量の薄い部分、目に見えない『急所』目掛けてその刀を振り抜きました。私もそこに打ち込んだのを見て、初めて理解できるほどの微細な隙間。其処に正確に打ち込まれた一撃は、タン！と一つ音を立てて、アルムさんの動きを止めました。

「峰打ちだ。その心意気に免じて……斬りはしない」

「が……グゼ……様」

アルムさんは、そのまま膝から崩れ落ち、その体内に蓄積されていたグゼさんのアルマは霧散しました。

とても落ち着いた空気を纏い、静かに刀を収めたイツキさん。何か表情が違って見えるその心中で何が起こったのか？私には知る由もありませんでした。

これで、二人、グゼさんへの道を阻む障害は沈みました。残るはグゼさん。そして、兄様の出番です！

「……失敗しちゃいました。やっぱり私、酔っていたみたいですね。嘘でも愛してる、と言った方が良かったんでしょうか？まさか、こんな精神的ダメージで、私のアルマを貸していたヴロミコと

アルムさんが倒れてしまうとは思いませんでしたよ」
「……嘘なんかで、こいつらは変わらない。どちらにしてもこいつらは負けていた。例えお前に愛されずとも、こいつらはお前の為に力を尽くして戦っている」

グゼさんの溜め息混じりの言葉に、イツキさんは鋭い視線と共に言葉を返した。その言葉にグゼさんは目を丸くし、首を傾ける。

「あれ？利用されてる、と喚かないのですね？……まぁ、いいですよ。済ちゃんとは直接、力比べをしたかったですし……アキカさんもウスハさんもアルマ残量が酷いですし。一対一で、ちょうど平等（フェア）ですね」

タクトをぱくりと口に加えて、ニッコリと笑い首を傾けるグゼさん。両の手を開放した、それは戦闘開始の合図でしょうか？しかも、彼女……あ、彼は私のアルマ残量を見抜いていました。アルマを見る技術を持ち合わせている……しかも治癒術、『アルマの移動』というアルマコントロールの極地のような芸当を操るその力、そして国中から集めた膨大な量のアルマ、その総合的な戦闘能力は計り知れません。
恐らくはイツキさんの語る、『剣も持てないか弱い少女（少年だけど）』という姿は、過去のものでしょう。

しかし、グゼさんは一つだけ計り違えている。

兄様は、アルマ量で割り切れるような器ではないのです！

失恋のショックで凍りつく兄様を一旦励ますために、私は兄様に

向き直りました。

そして私は兄様に歩み寄り、凍りつくその肩を抱きしめ、囁きました。

「兄様。大丈夫ですよ。私が居ますから。そんなに落ち込まないで下さい。……兄妹とか関係ありません！さっきのヴロミコさんの言葉で私、目覚めました！……例え兄様が全人類からフラれても、私がお嫁さんになりますから……！」

ついでに愛の告白です！傷心につけこむのは気が引けましたが、関係ありません。だって、私は兄様を愛しているのだから！

兄様の硬直した体は次第に解れて、兄様は私の肩に手を掛け、突き放して真剣な表情で言いました。

「お前はない」

ベコォッ！

心地よい音と共に、私のハイキックで頭をガクン！と傾けた兄様が、ゴロゴロドタドタと騒々しい音を立てながら、地面にうつ伏せに沈みました。悲鳴すら上げませんでした。

ふう。これで一仕事完了ですね！

「な、何やってるんだお前！？」

イツキさんがすごくビックリしています。はて、どうしたのでしょう？

「い、いくらフラれたからって其処までしてすることはないだろう！？凄い音がしたぞ！？」

「ア、アキカさん……流石に今のは……ウスハさん、私が治療しましょうか……？」

酔いが冷めたみたいな顔をして、グゼさんが顔を引き攣らせています。はて、どうしたのでしょう？

二人とも何を言っているのかさっぱりです。

「大丈夫ですよ」

「何で！？」

イツキさんがあまりにも興奮して叫ぶので、私は胸を張ってお答

えしました。

「だって兄様を愛していますから！」

何言ってるんだこいつ、みたいな目で見てくる才羽兄妹。もう、一体なんなんでしょう？

取り敢えず私は一仕事を終え、ふうと息をつきました。

残り時間……まあ僅かでしょう。途中で儀式の中断があったとしても。

さて、あとは兄様の出番。

兄様の、最高に格好いい『取って置き』にお任せするだけですね♪

うつ伏せ状態からぴくりと動く兄様に、私はぞくりと懐かしい感覚を味わいながら、鳥肌を立てて興奮を覚えました。

グゼさん、あなたの本心を、兄様の暗中無心拳、『第二段階』で試させていただきます。

ＥＰ１６：　だって兄様を愛していますから！（後書き）

明華、突然の凶行！？そして、グゼとの直接対決！ノトスの命運をかけた最後の戦い、グゼが遂にその隠した力を見せつける！？グゼとイツキ、才羽兄妹の間に変化？そしてグゼの本心とは？薄葉はどうなるのか？ノトス編クライマックス、「そんなに優しいあなただから」に続く！

色々と申し訳ない突然のトンデモ展開……ヴロミコはグゼにベタ惚れしている人でした。その過去を描く予定はありませんが、ある意味熱い人なのです。そして、ノーマルの筈の薄葉も覚悟の告白、そして失恋。グゼさんは一応見た目は女の子ですが、別にニューハーフという訳ではないのです。……その真相が分かるのは、次回辺りかと思います。

ヴロミコの煮え滾る愛が、色々とこの場の空気を変えちゃった、そんな感じのお話です。

あと、明華は突然気が狂った訳でも、怒りに任せて薄葉をぶっ飛ばしたわけでもありませんのでご安心を……ｗ　いや、後者は少しあるかもしれませんがｗ

波乱の展開ですが、次回も是非ともよろしくお願いします！

ＥＰ１７：　そんなに優しいあなただから（前書き）

視点：才羽済（サイバイツキ）

ＥＰ１７：　そんなに優しいあなただから

アキカが突然ウスハを蹴り飛ばした。ウスハは物凄い音と共に首を傾け、地面に糸の切れた人形のように転がると、うつ伏せのまま動かなくなった。

私も多少、人の死に立ち会った事があったが、それでも軽く引いた。

アキカは兄であるウスハに恋心を抱いていた。そして、思い切っての告白。しかし、それを拒否され逆上、兄を殺害するに至った。

「いや、殺してないですよ？」

何故か平然と、何事もなかったかのようにニコッと笑うアキカ。こいつは怖い女だ。

しかし、実際私はウスハの凄さというものを見ていない。アニードの話から聞いた程度だが……いまいち信用ならない。何より今、転がって動かない様を見ると、とてもじゃないが戦力とは数えられないだろう。

そしてアキカは既にガス欠。アルマも殆ど残っていないだろう。

つまり、私一人で救世を相手にする必要があるということだ。

タクトをくわえた救世は、器用にもその状態から言葉を発する。

「ウスハさんは退場してしまいましたし……アキカさんもアルマ不足。これなら一対一で戦えますね、済ちゃん！」
「……随分と好戦的になったな」
「ええ。ずっと、ずっと……済ちゃんとは手合わせしたいと思っていましたから！」

救世が本当に嬉しそうに笑う。何時ぶりだろうか、こいつの此処まで楽しそうな笑顔を見るのは。
何故、私と手合わせしたいと思っていたのか？見捨てたことに対する復讐？いや、違う。

私はヴロミコというテラスの、救世に対する想いを聞いたとき、昔の事を少しだけ思い出した。

救世がアルマを流動させながら、その場で軽くとんとんと小さく飛び跳ねた。軽いステップ。準備運動のようだ。五回のステップを終えて、救世は笑顔を私に向けると、その目を一瞬すっと細めた。
私の目には、優しさが瞳から消え去ったように映った。

「行きます」

丁寧に攻撃の宣言を行い、救世は一瞬で短い歩幅で私の目の前まで駆けてくる。速い！

「私も付術、覚えたんですよ！」

咄嗟に刀を構え、攻撃に備えたが、救世はにっこりと目の前で笑っただけで手を出して来なかった。むしろ無防備に腕を後ろに組んでさえいた。

「……どういうつもりだッ！」

私は刀の峰を、救世目掛けて打ち付けようとした。すると、救世はすっと手を添え、それを受け止める。……手は後ろに組んでいた筈じゃなかったのか？

「峰打ちとか、そういう気遣いは無用ですよ？どうせ私は斬れませんから！……ほら、殺してみてください。そうやって本気で来ないと……私も力を見せられないじゃないですか？」

救世は刀をぱっと離して、足踏みの様子さえ見せずに、後ろに滑るように後退する。そして、口に銜えたタクトを右手で摘み、ひらひらと泳がせた。

「ほらほら。早くしないとレークス様、戻ってきませんよ？救うんじゃないんですか？」

「くっ……！そんな軽い挑発……！」

私は距離を詰める。私の持ちうる、トップスピードで。その速さに、付いて来られる者など、居ないはずだった。

しかし、救世はタクトを突き出す。私の目の前に。そう、文字通り。目を刺すように。

「……！」

刀をリーチ、それよりも圧倒的に短いリーチのタクトが、目の前に迫る。私はギリギリで反応し、より強い力を込めて地面を逆側に向けて蹴る。そして、何とか目を狙うタクトの前で停止し、急いで飛び退いた。

此方は刀のリーチに合わせて攻撃を考えていた。だから、私が近付くとき、タクトに突っ込むような状況が起こる筈がない。其処まで接近するつもりはなかった。

救世は私の動きに合わせ、目にも止まらぬ速度で僅かに前進したのである。私の距離感を狂わせるほど、自然に。

そして、それを意識したときには、私の背中は王の間の壁にぶつかっていた。救世との距離を十分に取ろうとはしたが、此処まで後退する筈はない。

「凄い勢いで逃げますね？」

とん、と私の額にタクトを当てて、救世が首を傾け微笑んだ。歩く素振りも走る素振りも見せず、タクトを突き出す直立姿勢のままにも関わらず、その姿は私の目の前にあった。その距離が縮まったことさえ気付けなかった。

今更になって、その異常な現象に身震いする。余りにも圧倒的。絶望すら忘れる程に理不尽。

「どうしました？……そんな、化け物でも見るみたいな目で……お兄ちゃん、傷つくなぁ」

その不気味な笑顔、私の体は反射的に動いていた。軽い挑発を受けても、貫こうとしていた峰打ちを咄嗟にやめ、私は刃を救世に向

けて、その近接距離から私は反撃に移ろうとしていた。
しかし、手は動かない。その手首を、ぐっと握られ私の攻撃は制される。

「ぐっ……！」

「そんな怯えた鼠の噛み付きみたいな攻撃ではなくて……もっと凛々しく剣を振ってもらえませんか？」

つん、と額をタクトで突かれる。ほんの少し痛い程度。血も流れない、可愛い程度のちょっかい。しかし、それは今まで向けられたどんな剣よりも恐ろしかった。
救世はぱっと手首を解放し、そのタクトの刺激は額からすっと引く。そして気づけばその距離は、再び刀のリーチ外まで離れている。

「どうしたんですか？私を殺すと意気込んでいたじゃないですか？」

「……く！」

動きがまるで目で捉えられない。だったら、アルマの感覚で捉えるまで！私はアルマの感覚を刀のリーチより僅かに長く伸ばす。広範囲に感覚を張り巡らせれば、接近は察知できるはず。そしてそこから付術で高速化した居合を当てればいい！

刀を構えた私は、鼻の先の救世と視線を合わせ、救世の動きに備えた。

……え？鼻の先？

「どうしました？アルマを広げて……あ、もしかして、アルマの触

覚で私を捉えようとしてました?ごめんなさい。余りにも邪魔だったんで……」

救世は私の目の前で、その掌に乗せた光の球を見せびらかした。それは明らかに、私が伸ばした感知用のアルマだった。

「ちぎって丸めちゃいましたよ」

ぐしゃりと救世は私のアルマを握り潰した。アルマを物質のように扱う?なんだそのデタラメなアルマコントロールは……!私は抑えきれない寒気を振り払うように、刀を振る。救世の言うとおり、怯えた鼠のように。

「やめてくださいって言いましたよね?怯えて剣を振り回すの」

私の刀、魔具『パラドスィ』は、救世に指でつままれた。両の手を添え、力を込めても、人差し指と中指でつままれた刀はぴくりとも動かない。

パキン!

その軽い音と共に、私の両腕はようやく動いた。

「怪我しますよ。危ないので……刃物は没収ですね」

楽々と、救世の指でへし折られて。刀の折れる音と共に、想像以上の化け物となった救世を前に、私の心が折れる音がした。

「……もう、いいです。ゆっくりと休んでいて下さい」

救世のタクトがとんと私の肩を叩く。その瞬間に、体の力がふわりと抜ける。まるで気力を全て吸い取られたような虚脱感。それと共に私の足は立つことを拒み、体は地面にへたりと落ちた。

「『クレフティス』。済ちゃんには、もう動くだけのアルマは残っていませんよ。私が美味しくいただきましたから」

ちらりと舌を出し、救世はくすくすと笑った。アルマを奪われた？これが救世の言っていた治癒術の力？

動かない体。震える体。座り込み、立てない私に救世は顔を寄せて、優しく囁いた。

「……ね？お兄ちゃん、強くなったでしょ？……これからは、済ちゃんの事、私が護ってあげるから」

「救世……！やっぱり、お前は……！」

その言葉に、気付きかけていた『それ』が確信に変わる。

救世は変わってなどいなかった。中学に入り、女らしく姿を変えていったあの時も、レークスに捨てられたあの時も、エクスィレオスィを立ち上げ反逆者の烙印を押された時も……全く、変わらなかった。

救世を見る私の目が変わっていただけだったのだ。

「救世……兄貴……頼むから……止めてくれ……！レークスを……返して……！」

情けない懇願。今更何を言っているのだろうか、そんな風に自分を嫌悪してしまう程の身勝手な甘え。救世なら、私の言葉を聞いてくれる、そんな妄想。

救世は優しく微笑み、私の頬を伝う涙を指で拭った。

「……済ちゃんからお願い事をされたのは、いつ以来かな？……嬉しいな。でもね、今は聞けないよ？」

「ゴメン……！私が悪かったから……！」

「済ちゃんがどうして謝るの？済ちゃんは何も悪くない。レークス様の事なら心配しないで。……必ずいいようにしますから」

笑顔。笑顔。笑顔。張り付いた仮面のようなその笑顔は、私の顔から離れていった。救世はゆっくりと立ち上がり、私からその視線を離す。

……兄貴……！

「……どうして、ウスハさんは、立ち上がっているんですか？」

救世の間の抜けた声に、私も気付き視線を向ける。其処に立つの

はあれ程激しく倒れた筈のウスハの姿。
静かに、声も出さずに、頭を垂れる姿からはまるで人形のようだった。

ウスハの頭が徐々に持ち上がる。

……その顔を見て、救世の顔が明らかに引きつった。そして、私も目を見開いた。

ウスハはぎょろりと白目を剥いていた。

怖い。いや、それは白目を剥いて立っている男が怖いとか、そういう意味じゃなく。
私は、漠然と其処に立つ『何か』に恐怖を感じた。

触れてはいけない。触れてはいけない。危険。危険。

ウスハはゆらりと一歩を踏み出した。私の体が震える。

ウスハはもう一歩を踏み出した。救世の眉がぴくりと動く。

何が起こっている?さっきまで気絶していた筈のウスハが、何故今立っている?そして今、ウスハに対して私はどうして恐怖を抱いている?

「あ、あはは……!ウスハさん、それ、なんですか?もしかして、

アニードさん達を倒した時みたいに戦うんですか？……いいですよ。受けて立ちましょう。一国分のアルマ、それによる付術……それにあなたは付いてこれますか？」

今の救世と今の私、力で劣っているのはどちらかと言われれば、悔しいが私が圧倒的に劣るだろう。しかし、戦闘の経験では私も負ける気はしない。危険と向き合ってきた、直感と言うべきか。それが告げている。

そいつに手を出してはいけない、と。

救世は恐らく気付いていない。目の前にいる男の危険性を。

私は、振り絞るように、救世に声を掛けようとしたが、既に遅かった。

救世の俊足は、弱った私の目には捉えられない。

気付いた時にはタクトを握る救世の伸ばした細腕は、ウスハの手にぐっと掴まれていた。

「……！」

ウスハの立っていた位置で、救世の腕がウスハに掴まれているということは、恐らくは仕掛けた救世をウスハが捕らえたのだろう。

救世は顔を歪ませ、その腕を振りほどこうと、私でも感じ取れるほどに膨大なアルマを腕に集中し、その腕を引き抜こうとする。

「……ど、どうして！？……離れない……！」

しかし、ウスハの腕は逃がさない。人間からはかけ離れた怪力を誇る付術強化を受けた腕力を、ウスハは軽く握って離さない。何故、動かない？大したアルマも感じないのに。

ウスハの額に救世が手を伸ばす。

その瞬間に、救世の体が一瞬で遥か後方に移動する。

救世はどうやってあの拘束から脱出した？私は抱いたその疑問は的外れだったと、救世の表情を見て理解する。

救世はウスハの拘束から解放され、距離を取れたにも関わらず、きょとんとした表情を浮かべていた。対するウスハは、静かにその腕を前に伸ばしている。

まさか、救世が距離を取ったのではなく、ウスハに距離を取らされた？ウスハはあそこまで救世を飛ばした、とでもいうのか？

救世も自身の身に起こったことを理解してか、どっと冷や汗を流す。

「なんですかそれは……！」

「兄様の『暗中無心拳』、その第二段階ですよ」

得意げに解説を始めたのはアキカ。惚れ惚れとした表情で、その目は白目を剥いて動かない不気味な男を捉えていた。

「兄様の暗中無心拳は、『相手の殺意や敵意に反応して、無意識下で反撃する』……いわば無意識の暗殺拳」

あんちゅうむしんけん？一体何を言っているのか？ウスハがその

拳法を扱っているとでもいうのか？……ただの拳法で、最強クラスのの付術の動きについていけるとでもいうのか？

「しかし、無意識カウンターといっても……やはり開始時の意識がはっきりしていると、理性で少しだけ制限がかかってしまいます。人を傷つける抵抗、殺める戸惑い、その他本人の良心が、少しだけ無意識モードへの突入とその時の動きを鈍らせるのです。一時的に記憶も理性も吹っ飛ぶように見えても、持つのところ僅かに残る理性がその性能を抑え込んでいます。……そこで、兄様にはその『理性』を捨て去って貰いました」

理性を捨て去る……アキカはにっこりと笑って、ウスハを指さした。

「今の兄様は、気絶している……いえ、眠っていると言った方がいいでしょうか？兄様は普通の人間が気絶する程度の衝撃を与えると、眠りに落ちてしまうのです。体が丈夫なので、普通の人間が気絶する程度の衝撃じゃ気絶どころかビクともしないんですけどね。あれは反射的に眠っているだけで、気絶とは言えないでしょう」

眠っている。眠っている？今、あそこに立って、救世の一撃を受け止めたあれが？

「暗中無心拳第二段階、『スリープモード』。本気の兄様は……寝ながら戦うのです！」

アキカのぐっと拳を握り締めた熱い解説。しかし、にわかには信じがたい。眠りながら戦う？そんな事ができるのか？そして、それ

になんの意味がある？

「寝ながら戦う？……そんな話、ある訳……！」

救世は言いかけて、動きを止めた。

距離はあった。しかし、一瞬で、付術で動体視力までも強化している救世ですら捉えられない速さ……いや、速さなのか？

見えていないからとても説明はできない……理解の遥か向こう側にあるその『移動』は、ウスハの体を救世の目の前にまで運んでいた。威圧するようにその白目が目の前に迫り、救世は口をぱくぱくさせる。

「気を付けて下さい……今の兄様に、少しでも敵意や殺意を向けたら……直ぐに気取られますよ？……第一段階『無意識モード』では妥協されている小さな感情でさえ、取り零すことなく捉えますから」

「くぅ……！」

救世は目を細め、勢い良く後ろに向かって加速した。そして距離を取り、そのタクトを勢い良く振り乱す。口はブツブツと呪文を唱え、そのアルマを激しく流動させる。何かの魔法を発動させるつもりだ！

「『アンベ』」

またも一瞬。コマ落ちしたのかのように、場面は既に切り替わっていた。王の間に聳える大樹。救世は其処に押し付けられていた。口を左手で封じられ、その左手に握るタクトは、いつの間にやらへし折られている。

ウスハは完全に救世の魔法の発動を無効化していた。

「んーーー！」

救世が目に涙を溜めながら、何かを唸る。しかし、塞がれた口からは言葉は出ない。何が起こっているのか、全く理解が及ばない。

救世は必死で足掻きながらも、その右手をウスハの脇腹に添えようとする。

しかし、それすらも許さないウスハ。気付けばその右手は、救世の口を塞いでいた左手で押さえつけられている。しかし口は解放された救世は、言葉を発する事が許される。

「う……う……！何なんですか……！あなたは……一体……！なんで……ことごとく……私の行動を見抜けるのですか……！」

「グゼさん。兄様は殺意や敵意、攻撃の意思を正確に読み取ります。今では軽く背中をつつくつもりでも、その腕を掴まれてしまうでしょう。そして、その敵意が強ければ強いほどに……兄様が施す制裁も強くなる」

敵意が強ければ強いほどに、施す制裁が強くなる。それはつまり、殺す気でかかれば、殺す気で返してくるということか？

そこで気付いた。

ならば何故、救世は今も生きているのか？

「……いい加減に……してください……！そんな筈、ある訳ないじゃないですか……！ノトスの力を集約した私が……アルマも扱えないただの人に……！」

救世はその目に涙を溜めていた。目の前の化け物、それを前にして、その体はがたがたと震えていた。

救世は唇を噛み締め、そのタクトを手放した左手を僅かに動かす。しかし、気付いた時には既に封じ込められている。

「無駄ですよ、救世さん。既に兄様に、あなたの魔具は折られました。この時点で、あなたの野望は終わっています。未だに引かないアルマを見る限り……アルマ共有の治癒術の媒体はその大樹のようですけど……付術による力づくでも逃れられない、魔法をサポートする魔具もない、治癒術を使おうにも兄様は危害を加えられる行動を全て封じ込める……膨大なアルマを活かす手段もない今……もう、あなたは負けています」

魔具のタクトも手折られた。力づくでも敵わない。そもそも動かしてすら貰えない。救世は誰の目から見ても、完全に敗れていた。静かに、少しの間に、呆気なく。

「ううう……ううう……！」

救世の嗚咽が花に塗れた王の間に響きわたる。完全に制圧された救世の姿は、鳴き声は、表情はとても痛々しかった。

「……あと、少しだったのに……あと少しで……あと少しで……！そう、まだ。まだ。まだです……！まだ、終わらせません……！最後まで、どんな手段を用いても……！」

「もう止めましょうよ、グゼさん」

アキカの姿はいつの間にか、救世を拘束するウスハの隣にあった。その少し悲しげな目が、救世を捉える。

「変な強がりも、変な悪役のフリももう止めましょう？あなたの本当の目的は、私には分かりませんけど……似合わない事をやって、一番辛いのはグゼさんじゃないですか」

「強がり……？悪役のフリ……？何を言っているのですか？……私は大義の為に……！強がりなんかじゃありません！私はなんとしてでも……なんとしてでも……！」

「知っていますか？兄様の前では、嘘なんてつけないんですよ？」

その言葉の意味が、今の私には理解できた。

ウスハは相手の殺意や敵意に反応して、それと同等の制裁を返す。殺す気で掛かれば、殺しに掛かってくる……いわば鏡のようなもの。

ならば、何故、救世はそんな男と対峙して、今こうして何事も無く生きているのか？タクトを折られ、拘束される。どうして傷一つ負わずに、動きだけを封じられているのか？

「兄様は、やられるであろうことを先に返す。殺そうとされれば殺しに掛かるし、傷つけようとすれば、傷つけにかかる」
「そ、それがどうしたというのですか？それがどうして嘘をつけない事になるのですか！？」

声を荒らげ、もがく救世。しかし、その行動に『敵意』がないことは明らかだった。

「あなたはどうして、命を奪われるどころか……傷つけさえもされていないのですか？どうしてあなたは、兄様にこうして押さえつけられているだけなのですか？」
「……！」

救世の表情が明らかに変わった。動きを止め、口を閉ざし、視線を泳がせる。

「本当は、誰も傷付けたくないのではないですか？恵まれている人に、痛みを強いるつもりなんてないのではないですか？王様……レークスさんを、犠牲にするつもりなんてないのではないですか？」
「違います……私は……」

言葉を濁した救世の体を、ウスハはすっと解放した。支えを失い、大樹にもたれ掛かるようにへたり込む救世は、力なく地面を見つめている。全く体を動かすことなく、脱力している。ウスハが今、完全に救世を解放したのは、恐らくは救世に敵意が欠片もなくなった事を示しているのだろう。

そして、今までスリープモードのウスハが執拗に救世を傷付けずに拘束し続けてきたのは……それは救世が、ウスハ相手に動きを封じ込めることしか考えていなかったからなのではないか。

「イツキさんと戦っていた時、刀を恐怖で振るったイツキさんに、あなたは言いましたよね？『怯えた鼠の噛み付き』、と。普通は鼠も……弱い存在も、追い詰められたら強者に噛み付くんですよ」

救世の言葉を思い返す。臆病な私を思い返す。

「でも、あなたはあそこまで兄様に迫られながら……傷一つ負っていない。圧倒的な化け物を前にしても、あなたは噛み付かなかった。あくまで拘束にこだわり続けた。だから兄様は、あなたを押さえつけつことしかしなかった」

私がもし、あれに迫られていたら……反射的に刀を抜いているだろう。恐ろしい未知の存在を前にしたら、牙をむいてしまうだろう。

しかし、救世にはできなかった。いや、しようともしなかった。

「そんなに追い詰められても、他人を傷付ける事が出来ないのに、どうして復讐で人一人を消すことが出来るのですか？どうして恵まれてる人々に、痛みを与ることができるのですか？」

最早、救世は反論の一つもしなかった。力なく、虚ろな表情で、床を見つめ涙を流していた。

「今の兄様を前にして……そうして傷一つ負わず、痛みの一つもなく、そうして解放されているのが何故だか分かりますか？」

眠るウスハには本質が見えていた。

妹の私でも、気付けなかった、忘れかけていた、救世の本質。

あいつを慕う、真っ直ぐで一途な男の目が語っていた、何の濁りもない感情。

どうしてそれを見るまで、私は忘れてしまっていたのか？

「危険な相手でも、自分に害を与えられようとも、傷さえ付けず、痛みさえ与えない……そんなに優しいあなただから、兄様はあなたをこうして解放しているんです」

救世は、涙を零しながら、ぽつりと呟いた。

「優しくなんて……ないですよ……レークス様も、済ちゃんも、貧しさに苦しむ人々も、救うことのできない私なんて……」

レークスを、私を、救う？

その言葉は、意味こそわからなかったものの、私でも疑いようのない切実さが篭っていた。

「話して、貰えますか？あなたの本当の目的を。そして、あなたの本当の気持ちを」

アキカの優しい声が、そっと救世に降りかかる。

そして救世は諦めたように、その口をゆっくりと開いた。

ＥＰ１７：　そんなに優しいあなただから（後書き）

遂にグゼの目的、そして過去が語られる？
次回、「献身の天使」に続く！

薄葉、眠りながら戦う！の巻。……最早、最強の化け物を飼い慣らす、ビーストテイマー明華が主人公みたいになっている件。まさかの薄葉、無言。見せ場なのに……（汗）
兄を上手く使いこなして（？）、明華はグゼの本心を見抜く！嘘発見器、薄葉！……この章では散々な薄葉ですが、実は彼が本当に活躍するのは……＾＾；
と、ノトス編も残すところあと僅か。このままラストスパートです！

……ところで一つ、読者の方にご相談が。
実はこの作品の主題、「俺は凡夫と言っておろうに！」、前々から少し変えたいと思っていたのです。というのも、実はこのタイトル、一章部分しか指してないんです。二章とか三章とかになると……あんまりタイトル関係ないんですよね。タイトルは悩んだ末に勢いで決めてしまった私の大ポカです。そして、あらすじも一章部分相当……これだとパッと見分かりにくいですよね……？

そこで、一度タイトルあらすじを変えてみたいと思っているのですが、どうでしょう？「俺は凡夫と言っておろうに！」というフレーズは一章のサブタイトルに持ってくるなどして使いますが……総括したタイトルやあらすじは、もっと内容に即した、分かりやすいものにしようかな～と思うのです。

しかし、突然変えたら分かりにくくないか？そう思いまして、読者の皆様にお尋ねしたいのです。

此処でメインタイトルとあらすじを変えてもよろしいでしょうか？

プロットからタイトルやあらすじを考えたので、プロットは出来ていて、内容をタイトルにぴったり沿わせる事は少しキツイ……なので、最初に勢いで決めてしまった（私が悪いんですが）メインタイトルとあらすじを変えて、このわかりにくさを改善したいのです。

勿論、この最新話まで目を通していらっしゃらない方も多いかと思いますので、念の為に、あらすじにも「タイトルとあらすじの変更」の旨を記載するつもりです。

それでも、突然変わったら混乱する！という方が多ければ、この点は妥協して進めて行こうかな、と思います。

是非とも、皆様方のご意見をお聞かせ願えませんでしょうか？

本来なら自分で判断すべき事なのでしょうが、読んでくださる方も増えましたのでどうしても不安……情けない話です。

感想を促す……とかそういうつもりはありませんので、メッセージ、もしくは活動報告でもその話を出しますのでそのコメントなどでも、意見していただけると幸いです。

気が向きましたら、ご協力をお願い申し上げます。

お手数かけて、誠に申し訳ありません……

ＥＰ１８：　献身の天使（前書き）

視点：才羽救世（サイバグゼ）

Ｅｐ１８：　献身の天使

私は間違って男に生まれてきた。

私の目で見ても、鏡に映る自分は男ではないようだった。

そんな「私」を、当時の「僕」は嫌だと思った。

そしてそれは自分勝手なコトなのだと、私は中学生になって初めて知った。

―――

私は物心ついたときから、自分の容姿が受け入れられなかった。

私は男。男の子。だけど皆は私を男と思い込む。鏡を見た私も、それが男とは思えなかった。

両親は女の子っぽい服を買ってくれたし（勿論スカートまでは履かされませんでしたよ？……履かされませんでしたよ？）、まるで着せ替え人形のように可愛がられました。

当時の私は両親の愛情を受け入れるべき事を理解していました。

女の子として扱われることが嫌いだったにも関わらず。

男らしくない男、そんな私が嫌いで……幼稚園の時から女の子と友達から勘違いされ、小学校の時には告白を受ける。それを良く思わない当時の私。それでも笑ってやり過ごす……それはとても苦痛な日々で、私はいつもいじけていました。

そんな私には、とても格好いい妹がいました。才羽済（サイバイツキ）、その時から私よりも背が高くて、凛々しくて、とても強い女の子です。周りの人、男の子からも女の子からも頼りにされていて、芯の強い立派な子でした。

済ちゃんは昔から弱っちい私をいつも守ってくれました。苦しい時も、困った時も、黙って私を助けてくれました。両親からも言われていました。「救世を助けて上げてね」と。立場が完全に逆。これでは私が弟みたいです（妹とは言わせません）。それでも、私は済ちゃんが助けてくれて、とても嬉しかったし、いつからかそれに依存していました。それが済ちゃんを苦しめているとは知らずに。

男の子としての意地を張りたいくせに、意地を張るだけの度胸も力もない。私は本当にちっぽけな人間です。そして、身の丈に合わない背伸びが、どれだけ馬鹿なことだったのかと、私は中学生になって、初めて知ったのです。

「お前、女みたいなんだから髪短かったらおかしいだろ」

中学入学してからすぐ、クラスの男の子に言われました。どうして女みたいだと髪が短いとおかしいのでしょうか?私は短すぎるのが嫌いでしたので、男の子にしては少し長いくらいでした。しかし、みんながそれを望むので、私は髪を切ることをやめました。

「お前、女みたいなんだから男みたいな態度とるなよ」

髪が少し伸び始めた時、クラスの男の子に言われました。どうして男なのに、女みたいだからって男らしくしちゃいけないのでしょうか?しかし、みんながそれを期待するので、私は男の子らしく振舞うのをやめました。

「お前、女みたいなんだから自分を『僕』っていったらおかしいだろ」

大分振る舞いに慣れた頃、クラスの男の子に言われました。どうして女みたいだったら『僕』と名乗ってはいけないのでしょうか?分かりませんでしたが、みんなが言うので「僕」は「私」になりました。

そこで私は気付いたのです。

私が男の子らしくしていて、誰が喜ぶのでしょうか?誰がそれを望むのでしょうか?それは私一人のワガママなのではないか、と。

私が女の子らしくなると、両親はとても喜びました。私が女の子らしく振舞うと、友達は笑ってくれました。

人が喜び笑ってくれる。私がこうあることで、人が幸せになれるのならば、私はこうあるべきなのではないか、そう思うようになったのです。

勿論、女子の制服を着ろ、というのは学校の方の問題で無理でした。しかし、少なくとも出来る範囲で、私は「望まれる私」でいようと決めたのです。

それで人を幸せにできるのなら、「救世（グゼ）」なんていう弱くて小さな私には不釣合な名前にも、向かい合えるのかな……そう思いました。

しかし、万人に受け入れられる私、というのも中々に難しいもので、望まれるままに振舞う私に、不満を持っている子もいました。

済ちゃんです。

私は相変わらず弱いままでした。望まれるままに。そしてそれは済ちゃんの兄として、立派な男になる事とは、まるで正反対のことでした。

妹に、いつも助けられて、妹を、全く助けられない。そんな兄が許されるはずもなく……私はせめて済ちゃんの前では男らしく頼れる人間になろうと努力しましたが……いえ、努力というほどのことは出来ていないでしょう。私は結局、済ちゃんが私に呆れてしまうまで、強くなれなかったのです。

遂に済ちゃんを怒らせ、私は必死にその手を握りました。情けなく、縋り付くように。

そしてその時、私達は魔法陣に囲まれたのです。

球界テッラ、異世界へと通じるその扉に。

一一一一

私達は、伝承に残る天使として呼び出されました。そして、国の統治のためにその力を貸して欲しいと、私達を呼び出した王様、レークス様は言うのです。

レークス様は、済ちゃんと同い年位の……とても王様とは思えない若さでした。十四歳、その若さで王位につけるものなのか、と驚いたものです。

レークス様はとても悩んでいたそうです。若くして王位についた彼は、その若さ故に、有力な家臣から軽んじられていたそうです。

それ以外にも、彼をよく知らない国の人間からは、青臭い若造だと侮られていました。

だからこそ、彼は天使の儀式を見つけ出し、その力を振りかざし、自分を侮る者を見返してやりたいと思ったそうです。

天使は喚び出されて、この世界にて成長する。世界を救うほどの力を得るほどに。王様は、ノトスに伝わる優れた技術の教育を提供し、私達に強い力を得るように求めました。そして、レークス様の力をノトス中に広めて欲しい、そう望みました。

済ちゃんはすぐに頷きました。私も合わせて頷きました。

しかし、私にはレークス様は、天使の力で自分を誇示する必要などないように思えました。

自分自身で天使の儀式を研究し、遂にはそれを完成させる根気と才能……それ程のものを持っているのに、その『若さ』という分かりやすいステータスに踊らされる……何だか、見た目に踊らされる私と似ているようで、心が痛みました。私は中身がないので、まるで違いますが。

私はレークス様の為に、何が出来るかを考えました。

しかし、メキメキと力をつける済ちゃんとは違い、私には何の才能もありませんでした。剣も握れない、魔法もうまく使えない、アルマというものの仕組みも感覚も分からない……次第に私を見るレークス様の目が冷たくなっていくのを感じました。レークス様に信用されている私と済ちゃんの教育係の方も、そして済ちゃんも、私に心底呆れ果てたようでした。

それでもいい。何か、何か私に出来ることを。私は精一杯考え、自分なりに様々な文献を読みあさり、何か一つでもできることを探しました。

しかし、私には何もできません。
遂にレークス様は、私に愛想をつかしました。

役に立たないものは要らない。必要のないものは要らない。出て行け。

仕方ありません。何故なら私は穀潰し。働きもしないのに、恵みを受けるのは間違っているでしょう。済ちゃんとお別れするのは寂しかったですが、これ以上此処に私の居場所がないことは分かっていました。

外の世界を見てこよう。この広い城の外の、もっと広い世界を。
そして其処から見つけ出しましょう。レークス様を、救える方法を。
そんな決心を固めて、最後のお情けのお金をありがたく受け取り、
私は一人、異世界の大地に踏み出したのです。

……そして、ようやく見つけることができました。

昔に理解し、ずっと分かっていたこと。

私には、望まれるままに身を捧げることしかできないということ
を。

さ迷い暫く経ってのことでした。

道端に、枯れかけた花を見つけました。
私は花に、手で組み上げた水をあげようとしました。
元気になぁれ。元気になぁれ。
想いを込めて、上げた水。それは枯れかけた花を、一瞬で蘇らせ
たのです。

「……あなた、それは……治癒術？まさか、ノトスの地でその魔導
を見れるなんて……」

寂れた街、人々の心も荒みきった街で、綺麗に咲く花をしゃがん
で見つめる私に、人の影がかかりました。
それは綺麗な女性でした。銀色の髪を垂らし、金色の瞳を輝かせ

る、とても綺麗な宝石のような女性。

「治癒術……これはそういうのですか？」

「まさか、あなた知らないで？……凄いわ。これは普通の人間にはとてもできない魔導なのに……」

女性はにっこりと笑って、私に手を差し伸べてくれました。久しく人に手を差し伸べてもらいました。

「あなた、少し私についてこない？あなたの才能、私が開花させてあげる」

私は手を取りました。結局私は人に頼る生き方しかできないのかもしれません。

「それに……あなたの『悩み』の助けにもなれると思うのだけれど」

私はかなり思い詰めていたようです。初めて出会った女性にも、その悩みを見抜かれるほどに。

「私はアリスィダ。呼びにくかったらアリスでいいわ。あなたと同じ、治癒術使いよ」

「わ、私は才羽救世……救世と申します……」

「グゼ、ね。いい名前。素敵じゃないの。……さ、おいで」

アリスィダ、治癒術使いである彼女は、世界中を旅する冒険者でした。私は彼女から、簡単な治癒術の知識を教わり、彼女のお古の

魔導書を貰いました。

アリスに治癒術を教わって一ヶ月。花に水を与える感覚、アルマを他人に受け渡す感覚を理解して、私は初めてアルマの存在をこの身に感じ、治癒術の扱いを、アルマコントロールの感覚を覚えました。

アリスは私の相談にも乗ってくれました。レークス様のお役に立ちたい。困っているレークス様を助けたい。そして、自分の力をもっと何かに役立てたい。

「だったら面白い治癒術があるわ。……それはとても遠い道のりで、あなたはとても苦しい思いをするものだけれど……それさえ成せれば、レークスって王様も、もしかしたら救えるかもしれないわね」

アリスは私に教えてくれました。国一つを動かす程の大規模治癒術。

「その名も『エクスィレオスィ』。未だに誰も完成させていない、究極の治癒術。あなた、それを完成させてみる気はない？」

その治癒術は、レークス様も、この国ノトスの人間も、そしてずっと苦しめていた済ちゃんをも、救い出せる希望の光でした。

その伝説の治癒術の概要を聞いた私は、遂にひとつの方法を見出しました。そして、私に多くを教えて旅に戻るアリスと別れ、私は

ノトスでその治癒術を動かすため、ノトス中を旅することにしたのです。

僅か間、私に治癒術の基礎を叩き込んでくれたアリスは、別れ際に言いました。

「絶対にエクスィレオスィを完成させるのよ？……その時は私もノトスまで見に来るからね？」

アリスはにっこり笑うと、旅仲間と共に去っていきました。そして私のエクスィレオスィは、動き出したのです。

一一一一

エクスィレオスィ、その本当の最終地点は『神の創造』。治癒術により膨大なアルマを集約し、人一人を『神』と呼ばれる程の存在にまで昇華させる事。

治癒術により作り出した大樹、『世界樹』をアンテナに、私の治癒術により『花』を植えつけた者のアルマを共有させる。世界樹は

通常の根に加えて、地中にアルマの根を広く張り巡らせるという特性を持ちます。その特性を利用し、ノトス中にその根を伸ばし、世界樹が最も望む、成長に使ったアルマ、つまり私のアルマを求めさせる。

そしてその根は、私が治癒術を施した生命の中の、私の残留アルマを求めて、その生命に根を繋げる。

世界全体にそのアルマ根を伸ばす世界樹にとって、私程度が用意した未熟なものでも、ノトス一国の私のアルマ残留者を網羅する事は容易です。こうして、巨大なアルマリンクが完成します。あとは世界樹をコントローラー変わりにアルマリンクのアルマをコントロールすれば、それを自由に移動させる事が可能になるのです。

そうして世界樹にノトス中の人々のアルマを集約し、それを一個体に定着させる。

こうして『神』を創り出す、それが伝説の治癒術『エクスィレオスィ』なのです。

一一一一

魔具も折られ、エクスィレオスィも未完成に終わった私に、今更その嘘だらけの計画を隠す理由はありませんでした。一頻り、エクスィレオスィとは何かを語った私に、アキカさんは尋ねました。

「……それであなた自身が神になろうと？」
「……ええ。そうです」
「嘘はやめてくださいよ」
すぐに否定されました。あはは、もう彼女には嘘をつけそうにありません。
「確かに。私は神になるなんておこがましいこと、考えた事もありませんよ。そうです。私の唯一の目的は……レークス様を神にすることです」
「レークスを……？」
そう。私はレークス様を神にするために、このエクスィレオスィを動かした。弱い立場の者達の、強い立場の人間に対する嫉妬や恨みを利用する嘘をついて。
「レークス様は、ずっと若い自分が軽く見られる事に苦しんでらっしゃいました。それは、たとえ強い部下を持っても解放される苦しみじゃありません。いずれはその部下さえも、自分を軽んず敵だと思えてきてしまう。だから、その苦しみから解き放たれるには、レークス様自身が、誰からも認められるほどに大きく強くなるのが一番なんです」
自分でも嫌になる、私自身の体験談。私を守ってくれる優秀で優しい妹、済ちゃんを嫌いになったこともある、愚かで醜い私の経験談。それは口には出しませんでしたが。
「そして、これは希望的観測にしか過ぎませんでしたが……レークス様は今、その苦しみのせいで、近くにいる強い人間にしか目が向

かなくなっている。だから、弱い人間を思いやる余裕がない。でも、もしも、心に余裕が出来たのなら、レークス様は、弱い立場の人間にも目を向けて下さるのでは……と思ったんですよ」

「自分を捨てた、勝手で酷い王様なのに？」

アキカさんの言葉には、強い怒気が含まれていました。ああ、アキカさんも怒るんですね。なんででしょう？エクスィレオスィの仲間になってくれた人達も、テラスの皆も、怒っていましたね。よく分かりません。

「勝手じゃないですよ。それにレークス様は、賢いですが弱っちい方ですから。弱い人間に、弱い人間の心が理解できないハズがないじゃないですか」

そう。賢い方なのです。盲目的にならなければ、恵まれない人々が居ることも、その人達の為に何かをすべきだということも、理解できる方のはずなのです。

「保険をかけてある、でしょう？そしてそれを口に出せないのは……」

「……なんで分かってしまうんですか。もう、分かりましたよ」

はぁ、アキカさんはなんでもお見通しみたいです。ウスハさんでなくても、アキカさんも十分に嘘を見抜けるのではないでしょうか？

やだなぁ。済ちゃんに怒られるかも……エクスィレオスィの皆にも。

「……ええ。レークス様を、手放しに神にするつもりは毛頭ありませんでした。ちょっと、意地悪な事を言うと、レークス様って結構周りが見えない方でしたので、もしもその力を使い間違えたら困り

ますので……私自身が、そのアルマを制御する魔具となるつもりでした」

済ちゃんが目を大きく開きました。

「魔具になる……？それは一体どういうことだ……？」

「死ぬ、ってことじゃないですか？グゼさん」

「な……！？」

済ちゃんが唖然としていました。

「やだなぁ、アキカさん。死にはしませんよ。ただ体は失って、ただのアルマを制御する魔具、アルマの塊として、レークス様の中で生き続ける事になるだけです」

「そんなもの……死んでいるのと同じじゃないのか！？」

「……ええ。そうかもしれませんね」

膨大なアルマ。それをコントロールするのは、普通の人間には不可能でしょう。それこそ、アルマコントロールのアの字も知らないレークス様には到底。だからこそ、その制御を支える存在が必要。しかし、それがレークス様以外の者であっては、レークス様は救われることはない。

「私がレークス様の腕としてアルマを操れば、レークス様が思うがままに力を操る事ができますし、間違った方向を修正することも出来るでしょう。せめて、弱い立場にある人間に、十分な救いを与える事はお願いするつもりでしたよ」

やっぱり済ちゃんは怖い顔をしていました。

どうしても、それが理解できませんでした。

エクスィレオスィの皆も、命を捧げて人を救う時、とても怖い顔をしました。どうしてでしょう?私は間違った事などしていないはず。

「……私のような力無き人間が、人を本当に救うには、命を捧げる他方法なんてないじゃないですか?」

治癒術は、私が人を救うための唯一の手段。

弱い私はアルマを人に捧げる事しかできない。私は恵まれなくとも構わない。ただ人が望むがまま私を使うだけ。

献身。それが私の、私が唯一出来る救世なのだから。

「レークス様が強くなれば、済ちゃんが危ない目に遭うこともありません。私がレークス様の腕となって、済ちゃんも護るはずだったんですけど……あはは、失敗しちゃいましたね?」

そう、失敗した。全て、失敗。

レークス様に膨大なアルマを受け入れさせるための馴らし時間も稼げなかった。そして、私をレークス様のアルマ制御装置として組み込む治癒術を記録した魔具も折られた。長い年月を掛けたその記録を、今から取り戻すのは困難でしょう。折角、時間稼ぎに多くの同志が協力してくれたのに……いえ、嘘をついて利用させて貰ったのに。アキカさんとウスハさんを、此処に至るための踏み台にしたのに。その償いさえ、計画が止まってしまってはできない。

私は何も成せなかった。

世界樹に手を添え、内在する膨大なアルマを送り返す。私の治癒の性質を加えて。

「救世、何を……？」

「同志達に、アルマをお借りした人達に借りたものをお返しします。そして怪我をしている同志の治療を」

「遠隔で治療まで出来るんですか？」

「ええ。アルマさえ送れれば」

今回の時間稼ぎで、多くの同志が負傷しました。中には死に至りかねない程の重症を負うものも……本当に、私は酷い事を……

余すことなく治療を施します。それしか、私にできる事はないから……

「……同志達には、いざという時は此処から離れる様に指示が行き届いている筈です。……あとはレークス様を解放するのみですね」

そして、レークス様を解放した後は……

世界樹に添えた手に私の僅かなアルマを捧げる。すると幹はメキメキと音を立てながら開き、中から人一人を吐き出す。

「レークス！」

済ちゃんがへたり込んだまま、声を上げる。世界樹から解放されたレークス様は息を切らしながら、私を鋭く睨む。

「グゼ……よくもやってくれたな……！」

強い怒り。当然でしょう。私のレークス様に対する無礼は、恐らくレークス様に神の力を献上しても、許されないもの。だからこそ、私はその力の制御のためだけでなく、同志達への償いの意味も含めて、その無礼にお詫びする為にこの命を捧げるつもりでした。

「申し訳ありません、レークス様。覚悟は出来ております。私の処分はなんなりと……」

「当然だ。折角此方が貴様の力を認めてやろうと言っていたのに、私に牙を剥くとはな……！伝承の天使、反逆の重さを思い知らせる見せしめとしては、中々に良い肩書きじゃあないか」

「ええ。首都に居るテラスも退却させます。全て、レークス様のお力という事にすれば、あなたを侮る目も変わるでしょう。しかし、どうか……私の同志達だけにはお慈悲を……彼等は私が騙して操っていただけですので」

「……フン。お前さえ晒し者に出来れば構わんさ……！楽には死なせん。覚悟しておけ……！」

覚悟は出来ている。

私の命が、何かの役に立てるのなら、私は喜んで捧げましょう。

私の命で、全てが償えるのなら、私は謹んで差し上げましょう。

そう、覚悟は出来ていたのに。

「レークス。待ってくれ……」

済ちゃんは、私にアルマを奪われ、満足に動けないはずなのに、立ち上がり歩み寄ってきた。

「なんだイツキ？言っておくが、お前がこいつの処刑を請け負いたい、という頼みは聞けないぞ？こいつは私の手で直々に……」

「違う」

「……じゃあ、なんだというのだ？」

覚悟はできていた。

なのに、済ちゃんは、昔のように、また私を助けようとしてくれました。

「救世を……許してやってくれ」

「何……？」

私は驚きました。レークス様は怪訝な表情を浮かべていました。

済ちゃんは、私とレークス様の間によろめきながら立ち、膝をつき頭を垂らしました。

「……確かに救世は、馬鹿な事をした。だが、それはレークスの為でもあったんだ。こいつは復讐や私怨で動くような奴じゃない。

他人を陥れる事を目的に、嘘をつく奴じゃない。いつでも人の事ばかり、自分の事を全く顧みない、馬鹿で優しいだけの奴だったんだ」

「……今更になって兄妹の情が湧いたか？……あれ程に、反逆者としてグゼを憎み、殺そうとしていた癖に」

「私は……何も見えていなかった！……昔から、こいつは変わってなど居なかったのに！勝手に嫉妬し恨みを抱き、こいつが変わったと決めつけていただけだったんだ！」

済ちゃんが何を言っているのかは分かりませんでした。

「こいつは雨の日に、自分の傘を貸してびしょ濡れになって帰ってくるような奴なんだ！こいつは教科書を忘れた友達に、教科書を貸して授業が分からなくなってしまうような奴なんだ！こいつは告白してきた男が可哀想になって、ＯＫの返事を返してしまうような奴なんだ！」

……済ちゃん、最後のは止めてください。そればかりは忘れたい事ですし、相手の為にならないと反省したことでもあるんですから……私の治癒術でも治せない傷口を抉るのは止めてください……

「それがどうした！」

「こいつが動くのには、いつも他人の為という理由があった！女らしくなっていったのも、きっと誰かの為だった！薄々は気付いていたのに、私はそれから目を背けていた！……思い出したよ、あいつを見て。こいつがいつも好かれる時は、見た目だけでなく、いつもその優しさを見られている事を。だから、入れ込む奴が居る！一度玉砕したとしても、こいつが男と分かっていても！」

「それと私に対する反逆に！なんの関係があるというのだ！？」

「だから、今回の件はレークス、ノトスの者達、そして……私の為に……！」

「黙れ！聞きたくもないわ、そのような世迷言！お前も今更唆されたのか！？あいつに唆されるなと、進言したのはお前だろうが！？」
「違う！頼むから……話を聞いてくれ！レークス！」
「いい加減にしろ！」

レークス様の顔が、みるみる内に歪んでいく。もうこれ以上は庇ってもらわなくてもいい。これ以上庇われたら、死にたくないと思ってしまう。済ちゃんと別れたくないと思ってしまう。「もうやめて」、済ちゃんの服をつかみ、そう言おうとした時、レークス様は冷たい目で済ちゃんを睨みつけ、言い放ちました。

「……お前も私を裏切るのか。だったらお前も一緒に死ね！役に立たない道具などに、もう用などないわ！」

済ちゃんは顔を上げ、レークス様を見上げました。その表情は見えませんでしたが、その悲哀の感情は、ひしひしと伝わってきました。

レークス様を愛している。そう言った済ちゃん。居場所をくれた恩人だと、レークス様を慕っていた済ちゃん。そして、今まで努力して、必死に尽くしてきた済ちゃん。たとえその手を汚そうとも、たとえ傷つこうとも、ずっと戦ってきた済ちゃん。

それを道具呼ばわり？役立たず呼ばわり？

勝手なのは分かっていた。私にレークス様に意見する権利も資格も価値もない事は分かっていた。

でも、私は、その言葉にだけは黙っている事は出来なかった。

「……撤回してください」

「……何？……ぐっ！？」

私は気付けば初めて自分から暴力に訴えかけていました。一番嫌いな手段に頼っていました。やっぱり私は愚かなようです。

付術による身体能力強化。治癒術の微細なアルマコントロールのついでに身に付けた、未熟な私の技術と、本来なら少ない私のアルマ量でも、その体は楽に持ち上げられました。

レークス様の胸倉を掴み、気付けば私はその体を持ち上げ、睨みつけていました。

「撤回してください。私は何をされようと、何と罵られようと、何と想いを否定されようと構わない。だけど、あなたを想う済ちゃんを……道具と侮る事は許さない……！」

「救世……止めてくれ……！いいんだ、私の事は……今度こそ、取り返しがつかなく……なるから……！」

済ちゃんの頼みでも、済ちゃんの優しさでも、その頼みは聞けなかった。

大切な妹を、そんな風に扱われて、黙っていられる兄が居るものか……！

「……撤回してください。それとも、強く言わなきゃ分からないですか？……撤回しろ……！そして、二度と済ちゃんにそんな事は言わないと誓え……！一人のあなたを想う人間として、ちゃんと済ちゃんを見ろ……！」

済ちゃんは泣いていた。当然だ。好きな人に、道具と呼ばれた。済ちゃんだって女の子なのだ。どれ程強くても、女の子なのだ。

私は引かない。初めて、兄として、済ちゃんの為に怒る。今更だけど、絶対にこれだけは譲れない。

しかし、私の想いは、済ちゃんの想いは、レークス様には届かなかった。

「道具を道具と呼んで何が悪い！？お前らは私が喚び出した、ノトス統一の為の道具に過ぎないのだ！手入れも十分してやった！大切に扱ってやった！だから私に尽くして当然だろう！？それで役に立たないならば、使えない道具なのならば捨てて当然！また新しい道具を用意するだけだ！」

私は初めて人を殺したいと思いました。そして、無意識の内に、その手に付術でアルマを纏い、槍のように固めた指先で、その憎たらしい言葉を吐く口を抉ってやろうとしていました。

「ごめんなさい済ちゃん。私、あなたが好きな相手を許せません。……恨んでください」

「救世っ！お前が手を汚すことなんてない！もう……いいから！……やめてくれ、兄貴！」

メキッ！

「ぐ……げ……！？」

私は唖然としました。済ちゃんもぽかんとしていました。

私が掴んでいたレークスの体は、横方向にぶっ飛んで、世界樹にめり込んでいました。

どうやらその衝撃に驚き、私は無意識に手を放してしまっていたようです。

私の前には足を高々と上げた、アキカさんが立っていました。

その足が、レークスの顔をひしゃげるほどに強く蹴りつけているのを、私は付術なしでもこの目で捉える事ができました。

アキカさんは、にっこりと屈託のない笑顔で私の顔を見て、首を傾けました。

「……ムカついたので蹴っちゃいました♪グゼさんの手に掛けるなんて勿体ない！ここは私が……ちょっと、教育的指導をしてきますね？」

アキカさんは、世界樹にめり込んだレークスを引き剥がすと、ずるずると首根っこを掴みながら引き摺り、王の間の入口まで連れていきました。

「……絶対に、覗かないで下さいね？」

そう言って、にっこりと影のかかった笑顔を浮かべたアキカさん。

何故か私は、その笑顔にスカッとし、

そして何故か、その笑顔に、私はどきりと不思議な胸のときめきを感じました。

唖然とする済ちゃん。

それを気遣う事も忘れて、私はぽかんとその凛々しい後ろ姿に見惚れていました。

……数秒後、城内に物凄い悲鳴が響き渡りましたが、そこで何が起こっているのか、それを確認する勇気は私達にはありませんでした。

Ｅｐ１８：　献身の天使（後書き）

次回、ノトス編最終回！ノトスの伝承、其処に帰るヒントはあるのか？

↑ここらへんに薄葉

薄葉なら私の隣で立って寝てますよ？……寝てるから、喋らないんですよ。仕方ないんですよ。影が薄いどころか、存在がないかのように扱われる薄葉ですが、その内活躍する場面が来る筈ですので……今は充電期間なのです。

レークスさんは、とても嫌な人なので、ちょっとぶっ飛んでもらいました♪

後悔も同情もしていない（、・∀・′）

そして救世に立ったのは、まだフラグとは限りませんよ？ほら、恐怖で心臓が高鳴ったのかもしれませんし……（＾＾；

そして次回、ようやくノトス編最終話です！果たして天使の伝承に、帰るヒントは見つかるのか！？

……いや、このまま終わったら薄葉は本当になんだったんだって事になっちゃいますから……ねぇ？ｗ

という訳でノトス編クライマックスへ！

ＥＰ１９：　失恋の憂さ晴らしだ！（前書き）

視点：杏樹兄妹

Ｅｐ１９：　失恋の憂さ晴らしだ！

視点：杏樹薄葉（アンジュウスハ）

俺は夢を見ていた。

多分、夢だと思う。俺は今、受験真っ只中の高三の筈だ。……
…俺は何をやっているんだ？

俺は小学五年生だった。

俺を、怪しい壺を売る人みたいな勧誘で、暗中無心拳の道へと引き込んだ男、山田さん。

ある日、その家を訪ねた俺に、山田さんは俺が幼稚園児の頃からずっと放送を続けているアニメ「ぶっとべ！どらまるくん！」のビデオを見ながら、言った。

「薄葉君。普通、とはどういう事でしょう？」
「……普通は普通でしょう。それより、なんでどらまるくん見てるんですか？」
「借りてきたんですよ。レンタルショップで」

なんでどらまるくんなんだ？そう思いつつも、俺は山田さんの隣に座り、久しぶりにどらまるくんのアニメを見た。いや、久しぶりと言っても、小学生前半には見ていたのだが。

「どらまるくん、可愛いですよね」

「えええ？そうですか？変だと思いますけど」

丸い体に首はなく、猫耳が生え、体に顔が描かれている。丸い目にデカい口、そこに長い人のような手足が生えている未来の戦闘ロボット。未来からやってきて、悪い人間をその人並みに長い手足でボッコボコにするのだ。子供向けアニメなのかこれ？

正直可愛くはない。怖いくらいだ。山田さんのセンスを疑う。

「君は今、私のセンスを疑いましたよね？」

「はい。暗中無心拳という自作拳法の時点でセンスを疑っています」

「……そうかい」

何かを悟ったような表情で、「野郎、その腕をへし折ってやる！」と叫びながら悪人をぶっ飛ばすどらまるくんを見ながら、山田さんはくすりと笑った。

「君はまだ、分かっていないようですね」

「山田さんの思考なら分からないでいいです」

「あ、何見てるんですかー？」

そのとき、丁度明華が部屋に入ってきた。俺と明華は、基本的に山田さん宅に自由に出入りすることを許されていたのだ。修行（大体精神統一、たまに謎の踊り）に来ないと、山田さんが泣いてしまうので、暇だった俺は大体週三位のペースで訪れ、それに明華も付いてきていた。

全く、面倒くさい大人である。だって寂しいんですもん、が口癖だ。

「あ、どらまるくんですね！かわいい～！」

「ほら、薄葉君。明華ちゃんは可愛いと言ってるでしょう？」

「いやいや。こんなの可愛くないって。これが可愛いって普通じゃないだろ」

その言葉を聞いて、山田さんはふふんと笑った。

「普通、か。君にとっての普通は、本当に普通なのかな？」

「え？」

どや顔で言う山田さんに、多少腹が立った。

「君にとって、普通とは何か？それが見いだせない限り、君は本当の意味で、暗中無心拳をマスターしたことにはならないですよ？」

いや……マスターしたくもないんだが。

次第にぼんやりと風景が薄れていく。

そして次第に色濃くなっていく記憶……

そう言えば、俺……告は……

――

「うおわあああああ！？」

俺は飛び起きた。嫌な汗が頬を伝う。

嫌な、嫌な悪夢を見た。

とても綺麗な、どう見たって女性な人、グゼさん。その人が実は男だったのに、俺が告白してしまうという悪夢を。

俺はノーマルだ。そんな特殊な趣味は持っていないというのに！

何故、夢の中の俺は、男に告白したのだろうか？……勢い？……悪夢だ……！

「目、覚めました？もうお昼ですよ？」

「ん？ようやく？……ああ、そう言えば俺はいつから寝てたんだっけか？」

「昨日の夕方頃ですかね？」
「え？寝過ぎ……俺、何してたんだっけ？」

ベッドから身を起こし、横に座っている明華の顔を見る。そして、記憶を整理する。俺は確か……

「グゼさんに告白して、フラれたショックで気絶したんじゃないですかー」

夢じゃなかったーーーっ！

あれ？いや、確かに告白をした……でも、それでショックで気絶？何か違わないか？何か、そのあとで重要な事実が……

「そういえば、お前……」
「あ、誰か来たみたいですよー」

何か誤魔化されている気がするのは気のせいだろうか？何か記憶を丸ごと刈り取られているような感覚が……
明華がノックのあったドアを開く。するとそこには二人の人影が。

「失礼する」

入ってきたのは見覚えのある……あ。

「あ！グゼさんに最初に告白した……ブラミコ！」
「ヴロミコだッ！それに告白の事はもう言うな！」
「ヴロミコ君、傷心気味なんでね～。ちょっと忘れさせて上げて下

さいな」

そう、ヴロミコだ。突然あの場で告白しだした全ての元凶だ。そして、その後ろにはニコニコ微笑む見たことのない男。

「ヴロミコさん、それと……其方の方は？」

「ああ、エクスィレオスィの人間組の代表、リエンだ。今回はエクスィレオスィの代表として、テラス組の代表である俺と、リエンで礼を言いに来た」

「え？礼？なんのですか？」

「それは勿論、グゼさんの護衛に努めて下さった事ですよ～！グゼさんの身に何事も起こらなかったのは、キミ達の御陰です！」

にこやかに手を合わせるリエン。俺達のお陰？……っていうか、一体何がどうなったんだ？俺が寝てたって……その間に何があった？確か……あの時は……ん？

確か、グゼさんが凄い強い力を手に入れて……イツキだっけか？あいつを楽に倒したんだ。そして、俺は……俺は？

俺は何もしていないだろう。やっぱり明華が何か隠し球をもっていて、それであの状況を変えたのか？

「兄様？どうかしましたか？怖い顔をして……もしかして、まだ何処か痛みます？」

「痛む？……いや、別に痛むって……そういうわけじゃ……」

「あ、もし具合が悪いのなら、私共もぱぱっと済ませちゃいますね～！大したお礼もできませんが……あなた方が求めている情報……例えば、『天使』について、少しばかり聴きたくありませんか？」

「え？それは……」

「ああ、アルムから事情は聞いていますから。私もエクスィレオスィの活動に協力しながら、各国を回ってきた身ですので……少しばかり情報を持っているのです。これでお礼の全てとは言いませんが、是非お耳に入れておきたくて」

リエンのいう情報に、明華は興味を示し、食らいつく。

俺はその言葉を耳に入れる事なく、ただぼんやりと自分の掌を見る。

何故か残る、記憶と結びつかない無数の感覚に、違和感を感じながら。

俺は一体、何をしていた？

――

視点：杏樹明華（アンジュアキカ）

ノトス城には、今も巨大な世界樹が根付いていた。崩落した城、その姿からは予想もつかないほどに、首都パラディソスの被害は軽度だった。

住民に死傷者なし。テラスの大群や一部エクスィレオスィ団員と交戦した騎士団や兵士にも死傷者なし。

只でさえ、住民や騎士団を威圧するように構えているだけだったエクスィレオスィは、向かってきた相手にしか反撃をしなかったそうで、其処にもグゼさんの意志が根付いていたようでした。

しかし、それだけではエクスィレオスィ側にも、ノトス側にも被害が出ている筈でしょう。しかし、それをたった一勢力で制圧した組織、その力でパラディソスでの戦闘は、恐ろしいほどに静かに収められたそうです。

『セルセラコミュニティ』。両陣営からの依頼を受けて、まるで舞台で演劇でも演じるように、首都で踊った道化達。

結局は、彼等の勢力により両陣営は鎮圧され、この大胆な反逆は静かに幕を降ろしたそうです。

コミュニティ側から、エクスィレオスィの団員の引き取りの要請があったそうで、エクスィレオスィのメンバーもまさかのお咎めなし。

コミュニティ側の主張は、反逆の内容、そして被害が最小限に抑えられ、最悪の事態を回避できた事に酌量の余地ありとのこと。そして、有力な人材の多い組織であり、人類に協力的なテラスという財産を処分するのは惜しいとの事。

結局彼等はコミュニティに属し、今後は世界中にて奉仕活動に務める事になるそうです。

エクスィレオスィ人間代表リエンさんによると、メンバーはその決定に反対もせず、素直に受け入れたとか。元々、グゼさんの志の元に集った彼等は、人助けに対する意識が強いようです。

テラス代表ヴロミコさんによれば、テラス達も反対意見は出なかったとか。居場所のないテラス達にとって、むしろ居場所を与えられる事は良いことだったようです。勿論、人間との待遇の差はないと、約束されたとも言ってました。働く者を優遇する、とのことです。

結局は、この反乱で上手いこと立ち回り、美味しい思いをしたのは、貧しい人々でも豊かな人々でもなく、多額の報酬や有力な新メンバーを手に入れたコミュニティだったようです。なんというか……侮れない人達ですね。

さて、そんなこんなで結局はグゼさんの企んだ『エクスィレオスィ』は失敗に終わり……ノトス史上に残ってもおかしくはないその騒ぎは、王城に大きな爪痕を残しただけで終わりました。しかし、彼女……いや、彼に協力したメンバーは、隠していた計画の全容を知っても咎めなかったとか。そもそも、彼等がグゼさんに協力していたのは、何も自分たちの為ではなく……恩人のグゼさんに対する恩返しの意味合いが強かったようです。

王様は、城の破壊については文句はないそうですよー。あと、ノトスの僻地の村や街にも意識を回すように努めるそうですー。へー。どんな心変わりでしょうねー。全く見当もツカナイヤー。

……と、ノトスの騒動は、こんな風に呆気なく幕を閉じたそうで。裏では色々とゴタゴタがあったそうですが、結局は落ち着く方向に向かっていくようです。

一週間近く、ノトスのパラディソスにて身を潜めていた私の見てきたものはこれだけ。一週間でここまで事が動くとは、思ってもみませんでした。

そして、問題はこれだけではない。そう、『天使の伝承』。

まず、王様、レークスさんから聞いた話によると、ノトスに伝わる伝承は少しアナトリのものと違っていました。

降臨するのは黒髪の天使。天使は成長し、強くなる。以下略。

はい。与えられた新情報は「天使は黒髪」というものだけです。

やはり、アナトリの伝承はかなり分かりやすく、情報が揃っていたのでしょう。ノトスの情報はかなり欠落のあるものでした。

しかし、この国で、グゼさんとイツキさんという二人の天使と出会い、私の中ではある一つの仮定が生まれていました。まぁ、それは後程……

それよりも気になる情報は、リエンさんから貰った、新たな天使に関する情報でした。

ノトスの隣国、主要国の一つ『ズィスィ』……何と其処にも『天使』と呼ばれる者が居るとか……

天使の儀式は、あちらこちらで行われているようです。情報を得るチャンスが増えてきたのは当然嬉しいことですが、一方で疑問も持ち上がってきます。しかし、それは今考える事でもないでしょう。なんだかそればっかりです。でも、確証の得られないことばかりなので……

取り敢えず、帰る方法も見つからなかった私達の次なる目的地は……ズィスィに決まりました！

ズィスィは何と、魔導の一つ、『器術』の盛んな国だそうです！これは私としても楽しみなところ！何せ器術の魔導書は、中々見つからないものでしたので！

私は今、新しい魔導の可能性に胸を躍らせながら、セルセラコミュニティ、パラディソス支部で、ズィスィのパンフレットを眺めながら、新しい旅先を調べていました。

「ありあり、アキカちゃん。ズィスィに旅行かに？」

奇妙な口調で、聞き覚えのある声色で、私に後ろから話しかけてきたのは、穴一つない無地の白い仮面を付けた奇怪な女性。忘れようのない女性に、私は思わず驚きの声をあげました。

「ジアミエンさん！？なんでパラディソス支部に！？」

「いやいや。何処にでも居るに決まってるっしょ？窓口係兼情報管理係兼案内係なんだし～！もしかして、寝ぼけてるぅ？」

「……あはは」

苦笑いするしかありません。この人、不思議すぎます。

「いやぁ～、ズィスィは良い所よん？ノトスやアナトリみたいに色々と荒れてないのね、結構。鉱山も多いから魔具の生産も盛んで、幅広い魔導研究も奥深いし、そしてロマン溢れる器術テクノロジーは、ロボットマニア垂涎モノ！そして、神が降り立ったと言われる伝説の塔、『デア・ピルゴス』のてっぺんからの眺めは是非とも生涯一度は見ておきたい絶景！……あ。今は登れないかぁ。あ、ちなみになんでデア・ピルゴスに登れないかを聞きたければ、情報料プリーズ♪」

つらつらとズィスィの観光情報を並べ立てた挙句、情報料とかせびってきたジアミエンさん。この人、何かやりにくい。本当にやりにくい。

「あ、そう言えばデア・ピルゴスのてっぺんでとあるおまじないをすると、恋の願いが叶うという言い伝えが……」
「買いましょう！」
「毎度ありっ♪」

いや、別におまじないとかに興味があるわけじゃないですよ？ただ、神の降り立った塔、って言うから天使の伝承に関する情報があるんじゃないかな～、と思ったからですよ？
ジアミエンさんに耳打ちされた金額を手渡すと、彼女は白い仮面をぐっと近付けて、「くすくす」と囁きました。

「……デア・ピルゴスは今、『堕天使』を名乗る黒髪の化け物に支配されているんだよ」

堕天使？……黒髪？……もしかして、それって……

「堕天使は、腕が十本あって、頭からは二本の角が生えている。そして、目は一つしかなくて、恐ろしい力を自らの右腕に封印しているらしいですよ。怖いよね～？そいつがいるせいで、塔には今、誰も入れないんだってさ～。しかも、立ち入り禁止の立て札を無視して入った者は……生きては帰れないんだとさ」

いや……そんな化け物が、私達と同じ、この世界に呼び出された伝承の天使の筈はないですよね……まぁ、それでも塔に巣食う迷惑な化け物は、いずれは倒さなくてはなりませんけどね！……そして、兄様と……うっしし……！

「……勿論、行くよね？」

ちょっとした考え事をしていると、不意に真面目なトーンで尋ねるジアミエンさん。その声色に、不気味なものを感じつつも、笑顔で言葉を返しました。

「はい！」

「そう。なら良かった。ああ、おまじないは塔の近くの案内板に詳しい手順が書いてあるから！」

再び声色が戻る。「ひっひ」と奇妙な笑い声を漏らして、ジアミエンさんは情報掲示板に、数枚の紙を貼り付け、ぽんと私の肩を叩く。

そして、耳元で静かに囁いた。

「これは伝言なんだけど。治癒術使いの坊やにお願いねん？……『アリスィダからのメッセージ、エクスィレオスィ惜しかったわね。でも、大義は成せたでしょう？おめでとう』」

「……え？」

その言葉の意味を察するより前に、ジアミエンさんはすたすたと歩き去ってしまった。そして、遅れてようやく理解を示す私は、嫌なものを感じずには居られませんでした。

「セルセラコミュニティ……ちょっと、気味の悪い組織ですね」

今回のノトスの騒乱。それからも奇妙な臭いを感じつつ、私はコミュニティを後にしました。

宿で休む兄様に、果物でも買って帰りましょう。沸き立つ不安を「大丈夫」と一言でかき消して、私は再びズィスィへと想いを馳せました。

一一一一

視点：杏樹薄葉（アンジュウスハ）

ノトスの首都、パラディソスでの滞在期間は二週間にも及んだ。

明華曰く、「暫くノトスの動きをみたい」との事。

今回は、国を動かしてしまうほどの事件の首謀者と親しくなってしまった事もあり、ゆっくりとその様子を観察したかったそうだ。

しかもなにやら王様とやらに余計な口出しをしたようで……その後の動きも気になるのだとか。おいおい、いきなり兵隊がやってきて、「反逆罪だ！逮捕する！」とか言われないよな？……まぁ、そしたら明華が全部なぎ倒すのだろうが。

俺も長く眠った後の奇妙な感覚が気になったものの、普通に過ごせていた。

まぁ、明華の観光や買い物に引っ張り回されるのは疲れるが、別に俺だって観光を楽しめないほどつまらない人間でもなく、理解不能の魔導関連以外なら、意外と面白いものも見れたと思う。

そして遂に、明華はノトスの動きに安心出来たようで、俺に出発を切り出した。

「レークス……王様も大分反省したみたいですし、グゼさんもイツキさんに関しても問題がなくなりました。もう、出発してもいい頃でしょう」

まぁ、いつまでも留まっても居られないのは分かっている。天使の伝承とやらから、帰る方法を探さなきゃいけないからな。

それに、失恋のショックを忘れるために、此処から離れたくもある。いや、あれは勢いだったのだが。だから別に振られたってショックじゃないのだが。グゼさん男だし。グゼさん男だし……

涙が出そうになるので、もう考えるのをやめる。

「さ、準備をして、今日中に発ちましょう。ズィスィはとてもいい

国だそうですよ～！遊べる場所もたくさん！観光地もたくさん！面白い魔導もたくさん！天使の伝承探しついでに、楽しんでいきましょう！」

なんか、明華が妙に俺を励まそうとしている気がする。傷心気味の俺を、気遣ってくれているのだろうか？

……なんか初めて明華の気遣いを嬉しく思えた気がする。

「よっしゃあ！行くぞ！失恋の憂さ晴らしだ！思い切り遊んでやらぁ！」

「え？まだ引き摺ってたんですか？」

……気遣いなど気のせいだった。

――

俺達は、パラディソスを出て、一路、ズィスィへ向かう。

ノトスを抜けるのにも時間が掛かるが、明華の空を飛ぶ魔法ならすぐらしい。

まぁ、この場合は俺が再びお姫様抱っこをされることになるのだが……

パラディソスの門を潜り、俺達はズィスィへと向かう、ワスィ平原側へと出る。此処を越えて、なんとか湿原やら色々越えていくと、ズィスィへとたどり着けるという。

「さぁ、兄様！抱っこを！さぁ！さぁ！」

荷物を背負い、手をワキワキしながら目をギラつかせる妹が怖い。荷物持ちまで任せてしまい、しかもお姫様抱っこという醜態を晒す兄……それが情けないとかいうよりも、俺の身が危ない気がする……！

「さぁ、さぁ」と俺に迫る明華に、俺が屈しかけたそのとき、意外な助け舟が現れた。

「ブオオオオオオ！」

雄叫びを上げながら、猛スピードで突進してくる巨大な馬？……いや、化け物！黒い鎧を身に纏うその巨体が、こっちにすごい勢い

で迫ってくる！

「おわあああああ！？」

「な……！？こんなところにテラスが！？」

明華が驚き声を上げる。そして、すかさず魔法を使おうと構えたその時。

「ちょ、ちょっと待ってください！」

化け物から声が聞こえた。

化け物は、ドスドスと足を踏み鳴らしながら、俺と明華の前で停まる。

その聞き覚えのある声、その見覚えのある主は、にっこりと微笑んで、化け物の上から顔をのぞかせた。

「暫くぶりですアキカさん、ウスハさん！」

「グ、グゼさん！？」

化け物に乗っていたのは、グゼさんだった。これには流石に明華も驚きを隠せなかったようで……

「グゼさんどうしたんですか!?確か、コミュニティで特別治癒術士として特別な仕事を与えられるんじゃ……!?忙しくないんですか!?」

特別治癒術士として特別な仕事?なんだそれ?

「ええ。特別治癒術士として、世界各国を廻っての奉仕活動を命じられてしまいましたよ……反逆の罪を償うには、大分時間が掛かりそうです」

溜め息混じりにグゼさんは呟く。そうか、反逆の罰で、何か仕事が与えられていると言うことか。……それにしてはやけに嬉しそうな顔をしているのが気になるが。

グゼさんは、何故か照れ照れしながら視線を泳がせた。クソっ……!男とは分かっているけど……!分かっているけど……!

「それで、私達、これからズィスィ方面から各地のコミュニティを回ることになっているんですけど……」

「……達?」

明華が疑問の声を上げる。すると、化け物の背中から、もう一つの人影。そちらも見慣れたものだった。

「イツキさん!?なんで、グゼさんと一緒に!?」

イツキは、頬を赤く染めて、何故か照れ照れしながら視線を泳が

せた。あれ？意外と素振りは似ているのな？

「べ、別に……救世が心配で付いてきたとかじゃないからな！……レークスの馬鹿に、呆れたから家出してきただけだからな！惚れた男に失望した……失恋の憂さ晴らしだ！」

ツ、ツンデレ？いや、ツンデレなのかよく分からない！

しかし、失恋の辛さは分かる。分かるぞ……！

「あはは！兄妹仲良くしてくださいね！」

「ふ、ふん！」

明華の声に、イツキは顔を逸らした。この人、素直じゃないんだなぁ……と一目見れば分かった。

「じゃ、私達はこれで！さぁ、兄様！抱っこを！」

「ちょ、ちょっと待ってください！」

再びケダモノモードに突入した明華を、グゼさんが止める。

何故か常に頬を赤くし、目を逸らしながら、もじもじとしている。あれ？この反応、もしかして……

ちらちらと明華に向く視線を見て、俺はとてつもなく嫌な予感を覚えた。

「あ、アキカさんも、長距離を荷物を持って、それなりの規模の魔法を使って移動すると疲れますよね？」
「……う～ん、それなりに疲れますね」
「そ、そうですよね！そ、そこでですね……お互いズィスィが目的地という事もありますし……そして、何より同じ天使のよしみですし……」

意を決したように、グゼさんは言葉を吐き出した。

「私達も同行させて貰えないでしょうかっ……？」

「へ？」

明華が間の抜けた声を漏らした。

「あ、あの……私達を運んでくれるこのベゲモートさんは、人が百人乗っても大丈夫！って位に力強い方なんですよ～！それで、ベゲモートさんも、アキカさんとウスハさんを乗せていってもいいって言ってくれてますから……」
「オウ、ノッテケ！俺ハ速イゾ！力強イゾ！」

ベゲモートさん、喋れるんかい！

それにしてもこれは……

「アキカさんも、これなら荷物を持たなくて済みますし、移動のアルマも体力も使いませんよね？……一緒に、行きませんか？」

「ええ、それは助かります！是非、お言葉に甘えて！」

明華は勢い良く了承した。

いや待て。俺の予測だけど、これってもしかして……

「は、はい！べ、ベゲモートさん！体降ろして下さい！」

「任セロ、グゼ様！俺、体降ロス！俺ハ体ヲ降ロセルゾ！」

ベゲモートさんが鼻息荒く体を降ろす。そして、グゼさんは、体を乗り出して、明華に手を伸ばした。

「ど、どうぞ！」

「あ、はい！ありがとうございます！」

ぐいっと明華を引き上げるグゼさん。その手が触れ合った途端に、グゼさんの顔が茹でタコのように赤くなったのを、俺を見逃さなかった。

……明華にグゼさん持ってかれたッ！？

「こ、これからよろしくお願いしますね？……ア、アキカさん！……あと、ウスハさん」
「はい！よろしくお願いします！」
あと！？
俺の傷口が滅茶苦茶に抉られる……！
畜生！別にいいもんね！グゼさんどうせ男だし！俺は別にいいもんね！
「ウスハ」
「……ん？」
俺に向けて、手が差し伸べられる。
その主は、黒い髪を肩ほどまで伸ばし、鋭い目付きを憂いに満ちさせた男みたいな女。イツキの伸ばした手を俺が握ると、イツキはぐいとベゲモートさんの背中に俺を引っ張り上げた。やっぱり力強いな……
「……ウスハ。気に病むな」
「え？」

「……失恋した者同士、分かることもあるさ」
「イ、イツキ……？」
フッ、と笑って、イツキは俺を横目で視線を合わせる。
「よろしくウスハ。……我が同志」
「イ……イツキの兄貴！」
「姉御だッ！……いや、姉御もやめろ！イツキでいい！」
俺は、イツキと目で語り合った。
互いに恋に敗れた傷心ボーイとして。……あ、傷心ボーイとガールとして。
ぐっと堅い握手を交わし、俺とイツキは謎の親近感で結びついた。
「「よろしく、同志よ」」
……悲しい二人の、傷の舐め合いである。
「それじゃあ、早速行きましょう！ベゲモートさん、お願いします！目指すはズィスィです！」

「ブオオオオオオ！」

ベゲモートさんの雄叫び！そして、その巨体は走り出す！

こうして、新たに二人の奇妙な兄妹天使を加えて、新たな人間模様を作りながら、俺達の旅は続く。

Ｅｐ１９：　失恋の憂さ晴らしだ！（後書き）

これにてノトス編完結！新たに仲間の天使を加えて、いざ新天地ズィスィへ！そこで待ち受けるものとは？そして、複雑な天使御一行の人間関係は？次回、新章、ズィスィ編に突入！

これにてノトス編は終了です！次回からは新たな国、ズィスィでの伝承探しの旅が始まります！
仲間が増えました～！性別迷子兄貴、救世とツンデレ兄貴女子、済が加入！少しだけ旅が賑やかになっていきます！
今まで見えなかった二人の天使の新たな一面も見せつつ……そろそろ薄葉さんに出番が回ってきます！

色々と怪しい雰囲気も交えながら、カオスな人間関係を築きながら、ズィスィ編へと続きます！

ＥＰ２０：　魔女の森フェガロフォス（前書き）

視点：杏樹兄妹

ＥＰ２０：　魔女の森フェガロフォス

視点：杏樹薄葉（アンジュウスハ）

ベゲモートさんの足は早く、かなりのハイペースで俺達はズィスィの国境を越えた。ズィスィに入ってすぐに見えてきた道、『カサロライン』。それは綺麗に整地された街道で、どうやらそのカサロラインはズィスィ中に張り巡らされているらしい。アナトリやノトスとはまた違い、隅々まで手の行き届いた国らしい。

明華によると、ズィスィ、アナトリ、ノトス、そしてヴォラスという四つの有力な国が、今はこの大陸に存在しているという。その中で、最も小さな国土であるズィスィは、その小ささを補うかのように、様々な技術の育った国だそうで。その技術に加え、小さいだけあって国の隅々までその管理の手が行き届いているという。

テラスの危険がある地域も、一部の危険指定区域や保護区域ぐらいだとか。どんなに小さな集落でも、カサロラインにより繋がり、防衛のシステムが組み上がっているという……実にのどかで平和な国だ。

カサロラインですれ違う人などと挨拶を交わし（初見では向こうもベゲモートさんにビビるが）、そののどかな風景を眺めていると心が安らぐようだった。

「はぁ～、のどかだなぁ～」
「ですね兄様」
「……いやぁ、ノトスとは大違いだな。此処まで違うものなのか」
「全くですね。ノトスにも変わってもらいたいものです」

ベゲモートさんもすっかりスピードを落とし、ゆっくりと進む。
その背中で、俺達全員ほのぼのとそれぞれの感想を呟いた。
そして、陽気に誘われて、うとうとし始めた時。救世さんが声を上げる。

「あ、オニロが見えてきました」
「オニロ？」
「あ、すみません。私、最初にオニロのコミュニティに顔を出すよう言われていまして……」

私用ですけど……と申し訳なさそうに頭を下げる救世さん。

救世さんに与えられたセルセラコミュニティ特別治癒術士としての仕事は、簡単に言うと、『各地での治癒術士活動』だという。
要は、世界的に見ても貴重な治癒術という才能を欲する各地を周り、そこで必要な仕事をこなすというものだ。

「まずはオニロ。その後、更に次の行き先を指定されて……其方でまた活動。そしてまた次の目的地を告げられて……といった感じで、各地を回らなければならないんです」
「へぇ。大変だなぁ」
「それでも、きちんと仕事さえこなせば、ある程度好きな風には回らせていただけるそうなので……緊急時には、エクスィレオスィの仲間だったテラスの皆さんをお手伝いに派遣してくださるそうですし。……だ、だからお二人の旅をお邪魔するつもりは……」

「邪魔なんてとんでもないですよ。私達だってこれといった目的もありませんし。むしろ、救世さんのお手伝いをしたいくらいですから！」

「……明華さん……！」

救世さんが目をキラキラさせている。

「……ウスハ。あっちに、綺麗な鳥が飛んでいるぞ」

「やめてくれイツキ。変な気を遣うの止めてくれ。別に自然に目を逸らさせんでもいいです」

救世さんは完全に明華に惚れているようだ。事ある旅にうっとりと明華を見つめる。その度にイツキが謎の気遣いを見せてくる。イツキの優しさは分かるのだが、その同情がとても痛い。

別に俺、気にしてないからね？本当に俺、気にしてないからね？

……まぁ、とにかく俺達はベゲモートさんにオニロ前で停ってもらって、遂にズィスィの地に足を着いたのである。

ちなみに、ベゲモートさんはでかすぎるので街などに入る時にはお留守番である。好物の大根を買って戻ると救世さんが言うと、嬉しそうに鼻息を荒くしていた。大根が好きなのか……

オニロは煉瓦作りの建物の並ぶ街。売りは簡単な魔法を込めた、不思議なマジックアクセサリーだそうだ。近くにある森、フェガロフォスで採れるアルマの篭った石から作られるズィスィでも有名な名物だという。

「私はコミュニティに顔を出して、仕事内容を聞いてきますので、皆さんはオニロの街を見て周ってはどうでしょう？」

救世さんの提案。しかし、俺としては別段そういうアクセサリとかには興味はなかったし、明華が「私もコミュニティに行きますよ」と言い出したので、俺も付いていく事にした。イツキも一緒に行くという。

結局、俺達はそのまま四人揃ってコミュニティに向かった。

「いらっしゃ～い！」

「……何であんたが此処に居るんだ？」

俺の口から思わず漏れた言葉の理由。それは聞き覚えのある声、

見覚えのある奇妙な姿、白いのっぺらぼう仮面を付けた女……

以前、セルセラコミュニティの他の支部で見た、窓口係、ジアミエン。

「何でって……私、セルセラコミュニティ窓口係兼情報管理係兼案内係の可憐な乙女、ジアミエンさんだよ？窓口係が窓口にいないっておかしいやないけ？」

「……やないけ？」

「……兄様。この人、そういう感じの人なんです」

「そうそう！どこにでもいるジアミエンさん！だから最初に言ったよね？『今後ともよろしく』って！」

なんだこの人……怖っ！……まぁ、どうせ声もそっくりな白い仮面を付けただけの人だろう。それか、俺達を付け回しているだけだったり……それはそれで怖っ！

「くっくっく」と笑うジアミエンは、その顔を救世さんに向けた。まぁ、目は見えないから視線を向けたのかは分からないが。

「あ、伝言聞いてくれた？」

「はい。明華さんから聞きました」

「ごめんね～？本当は直接伝えたかったんだけどねぇ……私もあの騒ぎでてんてこ舞いだったのよ～」

「いいえ。ありがとうございます。アリスが本当に来ていたとは思いませんでしたから。……それにしても、アリスはコミュニティと何か関係があるのですか？」

「……あー。知らない？アリスィダもコミュニティの特別治癒術士なのよ～」

「え？そうだったんですか！？」

「あっはは！まぁ、その内会えるでしょうに。今は、あなたに振られた仕事の説明よん♪」

何かよく分からないが、ジアミエンと救世さんは会話を交わして、早速仕事の話に取り掛かる。それにしても、アリスって誰だ？アリスィダ？……まぁ、救世さんの知り合い、かな？

ジアミエンは、すっと一枚の紙切れを取り出して、「にやり」と笑う。

「此処でのお仕事は一つ。この近くにある森、フェガロフォスの主と呼ばれる木、『ケンズ』を治療してきて貰いたいのよね。こんな木なんだけど」

差し出された紙切れには、一本の変わった木が描かれている。細かく描き込まれたその葉は、何故か綺麗に全て星形。

「見て分かる通りに、葉っぱは全部星形。そして、その幹は金色に輝いてるの。どう？見れば分かるっぽくない？」

確かにひと目で分かるな。なんて不思議植物だ。

「しかし、その木を治療するというのは……？」

ケンズの絵を見ながら、救世さんが尋ねる。

「ケンズはこのオニロの名産、マジックアクセサリーの原料である石にアルマを満たしてるのよね。フェガロフォス全体に、吐き出す特殊アルマを満たす。……まさに、フェガロフォスの主って訳ね。そして、そのケンズのアルマを石が吸って、マジックアクセサリー

の原料になるんだけど……」
「ケンズに異常があって、原料が取れない？」
「イエス！物わかりがよくて助かるわ～！お給料、上乗せしたげる！」
「い、いえ。いいですよ」
遠慮して首を振る救世さん。しかし、ジアミエンは「ふぅ」と溜め息をつき、首を横に振った。
「いやいや。違うっての。此処は素直に『ありがとうございます！』とでも言ってもらわにゃ。……ちょいと事情があんのよ」
「事情……？」
ジアミエンは「きょろきょろ」と辺りを見渡す。そして他に誰も居ないことを確認する『フリ』をすると、ぐっと窓口から身を乗り出して、「ひそひそ」と呟いた後、普通に大きな声で喋り出した。
「フェガロフォスは通称『魔女の森』と呼ばれる森でね？……噂って事になってるけど、『魔女』と呼ばれる気味悪い女が出んのよ」
魔女……？気味悪いジアミエンが気味悪いというくらいだ。相当に気味悪いのだろう。
「ジアミエンさんが気味悪いっていう位だから、相当に気味悪いんですね」
明華と思考が被った！何かやだ！
「そうなのよん！気味の悪い私が気味悪いと思うほどの……って、コラ！なんでやねんっ！失礼やないかっ！ってか、ノリツッコミさ

せんなやっ！」

それにしてもこの気味悪い女、ノリノリである。

「……私は真面目に話をしてるの。キリッ」

「嘘つけ！」

もうやだこの人。

「……まぁね？この依頼、ケンズの治療って言い方だと依頼内容が軽すぎんのよ。どういうつもりでこんな依頼を出したのか知らないけど。私としては正当な報酬を払わないってのは、危険に飛び込んでくあんた達には申し訳ないと思ってね？」

「危険、なんですか？」

ジアミエンは「にやり」と笑う。本当に何を考えているのか分からないその人は、こくりと頷き、「くくっ」と笑った。

「危険、だね。魔女に出会ったら生きては森から帰れないと思っていいよ。本当なら魔女は森で静かに暮らしてるって言うけど……最近、どうも気が立ってるようでね？森をさまよってるらしい。出会って帰れなくなったのも少なくないんだよね～、ウチの討伐メンバーもやられてるし」

「コミュニティに討伐依頼も出ていて、それでまだ倒せていないと？……コミュニティは人材にでも困っているのですか？」

明華が怪訝な表情で言う。すると、ジアミエンは「ありゃあ」と呆れたように一言。

「アキカちゃんは手厳しいねぇ？でも、侮って貰っちゃ困るのね。

ウチもそれなりの高ランク依頼として申請してるのよ。それなりのメンバーを向かわせたの。それでも結果は見るも無残。……力自慢だけじゃ、足元掬われるよ？わたしゃ忠告してんのよ」

その時、少しだけジアミエンの声色が変わった。威圧的で、強いトーンへと。それは今までふざけていた女から一転して、たちまち真面目な色を含んだ。

「魔女には遭わないよう気を付ける事ね。それとあいつ、どうやら奇妙な魔法を使うようだから……『迷子』にならないよう気を付けてね？」

明華でさえも、ごくりと息を呑む重い空気。救世さんもイツキも、同様に緊張した面持ちで話に耳を傾けていた。普通な俺に至っては、もう膝が震えるレベルである。

魔女ってなんだよ、怖っ……できれば確かに遭いたくないな。

まぁ、明華やらイツキならぶっ飛ばすんだろうが。

全員が黙り込むと、ジアミエンはころっと声色を変えて「きゃはっ♪」と笑う。

「んじゃ、健闘を祈るよん♪治療が終わったら、ケンズの葉を一枚持ち帰ってね～♪それしないと治療できたか確認できないから♪」

人の不安を煽っておいて……

やはりこの人、掴み所がない。

一一一一

オニロの、ベゲモートさんが待っている側の逆側、其処には鬱蒼と木々が生い茂る暗く不気味な森。まだ昼間にも関わらず、その森には深い闇が佇んでいた。

通称『魔女の森』……フェガロフォスは、その口を開いて俺達を待ち受けていた。

「それにしても……あの女、相変わらず不気味だな」
「あれ？済ちゃん、ジアミエンさんと面識ありましたっけ？」
「……お前に同行するようにと、私も一度コミュニティ登録であいつと会ったからな。それにしても……何で、パラディソス支部にいたあいつが、此処にも居るんだ？」
「そういうものなんだそうです。それ、触れない方がいいですよ」

暗い森の中を、明華が先頭に立ち、その手に灯す光を頼りに進んでいく。ザッザッ、と足元に落ちた葉が嫌な音を立てる。
明華の言葉に、その後ろを歩く救世さんが首を傾げた。

「触れない方がいい？」

それに明華は溜め息混じりに答える。

「多分、はぐらかされますよ。面倒な話に巻き込まれるのがオチだと思います。あの人、飄々としてて私、ちょっと苦手なんですよ」

「明華さんでも苦手な方が居るんですね……」

救世さんがへぇと驚いたように明華の背中見つめている。いや、ずっとだが。ずっと明華を見つめているのだが。

「ウスハ。あそこに変わったキノコが生えているぞ」

「イツキ。それはもう止めてくれ」

相変わらずの雑なフォローである。いや、傷口を抉っていると言っても過言ではないレベルである。だが、本人はフォローしているつもりなのである。多分、アホの子である。普通に年上だが。

「それにしても……魔女ってどんな人なんでしょうね?」

「テラスじゃないのか?」

明華の独り言のような呟きに、イツキが答える。すると、明華はう〜んと唸り、首を傾げる。

「いやぁ……ジアミエンさんは『女』とは言ってましたけど、『テラス』とは言ってなかったんですよね」

「いや、それは偶々そうだっただけじゃないか?それにジアミエンが魔女の正体を知っている訳ではないだろう?」

イツキの解釈に、明華は「そうですね」と呟いた。そしてその後も何かをぶつぶつと呟く明華。明華がこういう状態の時は、大概困

った事が起きる。こいつ、ステータス優秀なだけでなく、勘とかそういうものにも優れている。こいつの『嫌な予感』は大概当たるのだ。

「嫌な予感がしますね」

……ほぼ、何かがこの森で起こるのは確定だろう。

明華の嫌な予感予言によって、更にこの森が不気味に見えてくる。だんだんと暗くなって行ってないか、此処？

「皆さん大丈夫ですか？ちゃんと付いてきていますか？」

明華の声。前方にはうっすらと光が灯っている。しっかりと其処には明華の後ろ姿が映っていた。悔しいが、相変わらず頼もしい背中である。

そして、その後ろには救世さんが続いているのが僅かに当たる光で分かる。

「魔女に気を付けろ」、そのジアミエンの忠告に従い、明かりは最小限に抑えているので、イツキの姿は確認しづらい。目の前に気配は感じるので、居るには居ると分かるのだが。

何故だか不安になる。目の前に、三人の姿が見えているのに。

何処かで俺の本能が、危険信号を察知している。

「私は大丈夫ですよ明華さん」
「私も大丈夫だ」
「俺も大丈夫」

言葉が繋がる。大丈夫、皆の声だ。

そう。不安なんて何もない。
明華は化け物じみた妹だ。イツキも化け物じみた強さだ。救世さんも凄い力を持っていた。

そう。不安要素は俺だけ。この三人さえ居れば大丈夫なんだ。

大丈夫、大丈夫と、俺は明華のように自分に言い聞かせる。

不安なんて何もない。

一一一一

視点：杏樹明華（アンジュアキカ）

薄暗い森の中、魔女に見つからないようにと最小限の明かりで道を照らしながら、私達は道を進む。特殊なアルマを放出するという、不思議な木、ケンズを探し求めて。

ケンズは何やら弱っているそうで、放出するアルマ量がかなり少なくなっているそうです。しかし、それでも微量ならアルマは発せられているようです。そして、その弱々しいアルマの感知は、私でなく救世さんの方が長けているようです。

「……この森全体から感じるものと、同様のアルマを感じますね。大分、弱っているようです。これが……ケンズの木でしょう」

救世さんの方向案内を受けながら、道を照らし私達は進む。ケンズの木まで、一直線に。

ざっ、ざっ、ざっ、と足音が響く。次第に大きな石が転がるようになってきました。

「足元、気を付けてください。暗いのでつまずかないように！」

「あ、はい。気を付け……ひゃあ！？」

「救世さん！？」

言ったそばから救世さんは女の子みたいな悲鳴を上げて、よろめいた。思わず慌てて振り向いてその体を支える私。

「あ、あのう……あ、ありがとうございます……」

「もう……気を付けて下さいね？」

「は、はい……ごめんなさい……！」

頬を赤くして、救世さんがしゅんと視線を逸らす。

……くっそう、あざとい……！私には思いつかない芸当です……！流石は私のライバルです……！悔しいですが、しかし！……兄様の心を奪う為、そのテクニック、存分に盗ませていただきます！

私は身近な最大のライバルから、テクニックを学びつつ、その身を起こす手伝いをしました。

「ウスハ。あそこに奇妙なキノコがあるぞ」

そして、何故か事あるたびに、兄様に声を掛けるイツキさん。何故かすごくよく兄様とお喋りをしています。仲良さそうに、楽しそうに。

……ハッ！まさか、イツキさんも強敵！？しかも、この積極性……もしや、イツキさんは……！

私はごくりと唾を呑む。なるほど、ライバルは一人じゃないという訳ですね！

それにしても恐るべし、才羽兄妹……！

私は仲間になった好敵手（ライバル）に、改めて驚異と畏敬の念を抱きました。仲間になっても油断大敵！私は負ける気なんて更々ありませんから！それにしてもハーレムを建設しつつある兄様……イイ！

救世さんの身を起こさせ、手を引きながら危ない道を支えて進む。救世さん、結構おっちょこちょいに見えるので、危ないでしょうと思い、常に支える事にしました。まぁ、何故頬を赤くしているのかは分かりませんでしたが……それより、その間に常に兄様に話しかけているイツキさんが気になるところ。さっきからキノコの発見報告ばかりです。

ハッ！兄様の（自主規ｒｙ

「あ、も、もももうすぐ着きますっ！」

吃（ども）る救世さんの到着宣言。……危ない危ない。危ない妄想に踏み込んでしまうところでした。流石の私でも、これはいかんです。鼻から赤い情熱が吹き出すところでした。

救世さんは慌てて私の手を振り解き、ササッと後退して、イツキさんの後ろに隠れてしまいました。

……どうしたんでしょうか？まさか、変な妄想をしているところがバレたのでしょうか？

ちょっと冷や汗が流れてきた所で、そんな焦りをかき消すように、目の前にはキラキラと暗闇の中でも光る、黄金の輝きが飛び込んできました。

僅かに上から差し込む光、それを受けて悠然と輝く黄金の木。星のように煌めく無数の葉。

「綺麗……」

フェガロフォスの主、ケンズ。息を呑む程の美しさでした。

救世さんは、ケンズに近付きその手を幹に当てました。そして、じっとその様子を眺めて、何やら考え途中のようです。

「……これは……大したことはないですね。慣れないアルマを取り込んで少しだけ弱っているだけみたいです。それを取り除けばすぐに治ります」

「慣れないアルマを？」

「はい。生物の持つアルマはそれぞれ特性がありますので、時にあるアルマはある生物にとっての毒となることがあるんです。簡単にいえばケンズは毒を取り込んでしまってる、ということですね」

「毒……ですか」

救世さんは、その手からアルマを流し込み、ケンズに治癒術を施します。すると、ケンズはざわざわと音を立てて、葉を揺らしました。

そして、ただでさえ眩しかったケンズは、みるみる内にその輝きを増し、その光が暗い森、フェガロフォスを照らします。

「おお、明るくなった。これは一体？」

「元々、ケンズのアルマでこの森は明るかったんでしょう。でも、そのアルマ供給がしばらく止まっていた。だから此処までの道は暗かったんだと思います。今、毒のアルマを取り除いて、活動促進の治療を施しました。とはいえ、ここまでの早さでアルマを森に張り巡らせるなんて……ケンズはかなり凄いですね」

感心したように、救世さんはケンズの幹をなでる。とりあえず、コレで一安心のようです。

……とはいきません。

「……その毒のアルマ、一体何処から取り込んだのでしょう？」

「……そうなんですよね」

救世さんも気付いているようで、少しだけ暗い表情で呟きました。

「その原因が分からない限り、治してもまた……という可能性は残りますね」

そう。原因を取り除かない限り、真にケンズを治したとは言えない。しかし、原因は薄々と分かってはいます。

「魔女、ですかね？」

「……そうなのか？」

魔女。この森に潜むと言われる危険な存在。

しかし、恐らくですが、その魔女がこの森に姿を現すようになったのは、つい最近のことでしょう。

根拠はまず一つ、オニロの名物マジックアクセサリーの原料がこの森で採られていること。

危険な魔女の出る森に、わざわざ好き好んで入っていく物好きが、そう多いとは思えません。恐らくは以前はそんな危険のない森だったのでしょう。事実、此処は保護区域に指定はされているものの、危険という情報は示されていませんでした。

そして、ケンズの不調。これは救世さんの治療で分かった通り、紛れもない事実。この突然の不調と、最近現れた可能性の高い魔女の噂……これは結びつく可能性が十分にあるのでは？

「……その可能性は十分にありますね。通常、生物は自然にアルマを吸収してしまうことは有り得ません。……アルマを受け渡す……治癒術の心得がある者が、アルマを注入した、と考えるのが普通かと思います」

治癒術士の有り難い見解もいただいて、やはりそれが避けられないことであるのは理解できてきました。

「……救世さんも、イツキさんも、兄様も、葉っぱを持ち帰っておしまい！……なんてつもり、ありませんよね？」

「はい。……これは依頼云々ではなく、この森全体の生命に関わる問題ですので。オニロの人々も困るでしょう」

「……私も賛成だ。犯人が本当に魔女なのか、それは分からんが、確実に『犯人』はいるんだろう？だったら少し、懲らしめてやったほうがいい」

「済ちゃんは腕試ししたくてウズウズしてるだけでしょう？」

「よし！じゃあ満場一致で、犯人探し、魔女探し決定です！」

……あれ？

ここで私は違和感に気付きました。

何がおかしい？

そう、いつもなら聞こえてくるはず。「満場じゃねーよ！俺何も言ってないから！」みたいな声が聞こえてくる筈でした。

いえ、そもそもその声は、いつから聞いていないのでしょう？

「……兄様？」

私は、視界に入る救世さんとイツキさん、そして何もない空間を見つめ、呟きました。そして、それと同時に二人もその異変に気付いたようです。

其処には兄様の姿はありませんでした。

そして今更、辺りに漂う不気味なアルマの存在に私達は気付きま

した。

綺麗に浄化された空気の中に漂う違和感。

私達は、最初からそのアルマの中に居たのです。ケンズが一時的に回復し、その違和感が顕著になって、私達はようやく気付いたのです。

「魔法……！何かの結界……！」

それは幻想。中の者の感覚を狂わせる結界。

私達は、まんまと何者かによる幻想に騙され、分断されていたようです。

私達は、完全に兄様と離れ離れになってしまいました。

ＥＰ２０：　魔女の森フェガロフォス（後書き）

ズィスィに入って早々に、思わぬ事態に巻き込まれる一行。魔女の森にて孤立した、薄葉の身に何が待ち受ける?そして、フェガロフォスに潜む、魔女の正体とは?

次回、「黒髪の魔女」へ続く!

ズィスィ編突入です!そしていきなりの急展開でございます。このまま薄葉はフェードアウトです!……嘘です!むしろ一人だから目立つはず!目立つはず……目立つ……?

いきなり次回予告にあからさまなワードが入っている件はスルーでお願い致しますw　それは全て幻ですw

Ｅｐ２１：　黒髪の魔女（前書き）

視点：杏樹薄葉（アンジュウスハ）

Ｅｐ２１：　黒髪の魔女

周囲が急激に明るい光に包まれる。辺りを包む暗闇が、突然晴れ渡った。

そして俺は、一人、鬱蒼と生い茂る木々の中心で立ち尽くしている事に気付く。

「……は？」

確かに今まで、一緒に歩いていた明華、救世さん、イツキの声が聞こえていた筈だ。明華が灯す魔法の光も見えていた。それに浮かび上がる人影も見えていた。

なのに、不思議な光が暗闇を追い払ったその途端、その仲間達の居た証さえも、光は消し去っていった。

誰も居ない。静かな森の中、居るのはただ俺一人。

「どういうことだよ……」

人間、本当に訳の分からない事が起きると、意外と落ち着いて冷静にいられるようになるものなのか？いや、こんな訳の分からない世界に呼び寄せられて少し経ち、俺も大分不思議現象に慣れてきたということか？

周囲を見渡す。木しかない。あ、キノコもあるぞ。やたらとイツ

キが報告してきたキノコがあるぞ。

……此処で待っていてもなぁ。いや、でも変に動くのは危険か？取り敢えずまっすぐに進めば森の外には出られるんじゃないかな？

「大丈夫。俺は普通だ。普通はそうそうレアなトラブルには巻き込まれない。魔女が出てくるなら、あいつの方にだろ……大丈夫、大丈夫」

殆ど自分への言い聞かせである。

しかし正直怖いが、鳥がピーピー鳴き、陽光差し込む今の明るい森に、其処までの緊張感は感じられなかった。

そう。大丈夫だ。何も問題なんてない。

ガサッ！

隣の茂みから、何かが出てくるような音。いや、何かが出てきたようだ。おや？明華かな？救世さんかな？イツキかな？まさか、魔女じゃないよね？……それとも熊でも出てきたかな？あはは、まっさか～！

「……ギギ」

凄くでっかい大男が出てきました。

体が岩で出来ていて、俺の二倍近い大きさがあります。あれだ。何かこんなのゲームで見た事あるぞ～？

「……ゴーレム、的な？」

「ギギギ……」

……逃げるしかねぇ！

目を合せながら、僅かに後ろに後ずさる。そ～っと、そ～っと、茂みに潜り込めたらそのままダッシュだ……！幸い、ゴーレムさんはこちらをじっと見ている。仲間になりたそうではない。よし、これならいきなり飛びかかってくる事はなさそうだぞ！

そうだ。ゆっくりと後ろに下がって……

分かるだろうか？階段を足元を見ないで上がっている時に、もう

階段ないだろうとタカをくくって一歩を踏み出した時にもう一段あったときの感覚。いや、ちょっと違うな。下りの階段、存在に気付かなかったが、実はそこにあったときの感覚。膝からガクンと落ちる感覚。

それに気づいた時にはもう遅い。

「あ」

ノールッキングバックステップ、ゴートゥーヘル……イエス……！何を言っているのかよく分からないと思うが、聞いてくれ。後ろを見ずに、後ろに歩いていったら、俺はそのままゴートゥーヘル……

後ろに地面がなかった。足ががくんと下に落ち、体が後ろによろめく。

あ、死んだわ。

ふわりと体が浮く、嫌な感覚が時間の流れを遅く感じさせる。遊園地のあのグルグル回る船みたいな奴に明華に無理矢理乗せられたのを思い出す。

ああ、ロクな人生じゃなかったなあ。

……走馬灯。あ、振り返るほどのことはなかった。

落ちる。落ちる。落ちる。背中打つ。あれ？地面が意外に近い？

……っていうか、体が転がって……

ゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロ！

「んふぅ！？」

坂道をボールのように転がって、そのままの勢いで平らな地面に出た後も転がり続けた俺は、最終的に仰向けで地面に倒れた。

何が起こったというのだ？微妙に痛い体を起こし、前を見る。そこには坂。その上には先程まで見えていた木々。

「……あそこから転げ落ちたのか？」

どうやら坂道から足を踏み外したようだ。そして転げ落ちたその先は、木に囲まれていない花畑？もしかして、あの森から出てしまったのか？

状況は分からないが、兎に角……

「生きてて良かったーーーーッ！」

心の底からの雄叫び。ゴーレムも追って来ない。俺は生還したのだ！死ぬかと思った！ダメかと思った！

「……って、俺は一人で何をしているのだろうか？」

一人で勝手に慌てて、緊張して、坂道を転げ落ちて、一人で叫ぶ……寂しい。

完全に迷子だ。本当にこれからどうするべきか？あいつらを探すか？それとも、一旦街に戻るか？いや、そもそも道分からないし……

もう嫌だ……最近、相当ついてないぞ。いや、普通ならここからプラマイ０の良いことが起きるはずだ。あいつらに合流できるか、それとも偶然人のいる場所を見つけるとか、この圧倒的ピンチ（迷子）を打開できる何かが！

「お兄ちゃん、どうしたの？」

そう思っていた矢先に早速キタ！俺は突然掛けられた声に、嬉々として振り向いた。

「もしかして、あそこから転がってきたの？怪我してない？」

そこに居たのは小さな女の子だった。紫基調のドレスっぽいひらひらした服に、腕にぶら下げた花のはみ出るバスケット。クリーム色のウェーブの掛かった髪を垂らし、紫っぽい色の瞳、人形みたいだ。

「ああ、大丈夫。君は？此処は何処？」

「わたし、ミュゲだよ！此処ミュゲの秘密の場所なの」

「秘密の場所？」

「うん！フェガロフォスはね、最近悪いオバケのせいで真っ暗なんだけど、此処だけは明るくて、とらちゃんの部品がいっぱい採れるの！」

ミュゲと名乗るその少女は、少し幼げな口調で楽しそうに喋る。その情報から、取り敢えず此処はまだフェガロフォスなのだということ、そして此処は比較的安全な場所らしいということは分かった。さらに、こんな子供が出向いている位である。恐らく此処はフェガロフォスの森から、簡単に出入りできる場所なのだろう。

……まぁ、とらちゃんとか部品とか、よく分からない単語があったが、それはまぁよしとしよう。

「お兄ちゃんはだぁれ？」

「俺は、杏樹薄葉って言うんだ」

「ウスハ？ウスハー！ウスハはどうしてフェガロフォスに入ってたの？お姉ちゃんが今のフェガロフォスには入っちゃダメって言って

たよー？」
「まぁ、色々とな。そう言うミュゲはどうして入ってるんだ？」
「う～ん。とらちゃん、今調子が悪いから、治すために必要なものを採りに来たの……お姉ちゃんには内緒だよ？」
「はは、いや、俺はミュゲのお姉ちゃん知らないしなぁ」

子供は中々に可愛いものである。そこ、俺がロリコンな訳じゃあないぞ？そういう事を意識する奴がロリコンなのだ。俺は素直に子供は可愛いものだと思ってる。素直で純粋な子供は、見ていて和むよなぁ……和む場面でもないが。

「……」
「……ん？どうした？俺の顔に何かついてるか？」

と、思っていたら急に俺の顔を凝視してくるミュゲ。何事？

「ウスハ、お姉ちゃんに似てるー！髪もおめめもまっくろ～！」
「……なに？」

黒髪に黒眼……？

明華の話していた天使の伝承を思い出す。

――天使は黒髪黒眼

まさか、それって……？

しかし、ミュゲの姉なのに、天使なのか？ミュゲはどう見たって黒髪黒眼じゃないし……ただの偶然か？

「ミュゲ。俺、この森の出口が分からないんだけど……出口わかるか？」
「うん！秘密の道を通ればすぐにミュゲの村だよ！」
「村？」
「うん！カーゼブ村！よその人はね、『魔女の村』って呼んでるのー！」

……ホワッツ？

今、ミュゲ、なんて言った？

「な、なんの村って？」
「魔女の村ー！あのね、お姉ちゃんがね、そう呼ばれてるからなんだって！凄いでしょー？」

……オウフ。こいつぁとんでもないモン掴んじまったぜ。いきなり、『魔女』と来た。やばいぜ、やばいぜ、非常にやばいぜ。ある意味一番危険な場所に足を突っ込んじまったぜ……

「そうなのかすごいなーじゃあおれはこれでしつれいさせていただきますよ」
「連れてったげる！」
「い、いえ、いいですよ。俺、一人で帰りますんで」
「行こー！」

……オウフ。話を聞いてもらえませんぜ。このままでは食われてしまう（カニバリズム的な意味で）。手掴んでめっちゃ引っ張られとる。おのれ、魔女。こんな無邪気な子供を送り込むとは……狡猾

……！だれか助けて！

「待て！」

助けがキター！これで魔女の魔の手から逃れられる！その凛々しい立ち姿に、俺は感動した。

……二足歩行のデカい虎の化け物です。どうみても助け舟ではありません。本当にありがとうございました。

「我が名はティグリス！この森の支配者、魔女のサギニ様の右腕なるぞ！」

あれ？魔女？それってミュゲのお姉ちゃんじゃないのか？

……まさか、俺、誘拐犯と間違えられてる？

「誤解だ！俺はロリコンじゃない！誘拐するつもりは全くないんだ！むしろ俺が誘拐されそうなんだ！」

「い、いきなり何を言い出すんだ!?お、お前……まさか、その子供を?」

あれ?違うの?もしかして、ミュゲとお知り合いでない?じゃあ、こいつの言ってる魔女ってなんだ?

……いや、その前に誤解を解かねば。

……俺、大分慣れたなぁ。二足歩行の虎の化け物相手に無実の証明を考える位になってる。

「違うんだ。少し落ち着け。俺は偶々この子と知り合った。そして、この子に森の出口を教えてもらおうとしていた。やましい事なんて一つもない。オーケー?」

「オーケー……びっくりしたぞ。こんな森の中に小さな女の子を誘い込む変態かと思った」

「ひどい勘違いだよ、全く!HAHA!」

「これなら心置きなく食える」

「そうそう、そんな変態さんじゃないから不味くない……え?」

……今、食うと仰いましたか?

「食う?」

「ああ、食う」

……ピンチだこれ。

さっきからピンチだこれ！さっきからロクでもねぇ！

「ウ、ウスハ……！」

ミュゲが俺にしがみついて震えている。

……くっそう！俺がなんとかするしかないじゃないか！放っておけないだろうが、こんな子供を！なんとかミュゲを連れて逃げないと……！しかし、どうやって？あの坂の上のゴーレムさんが落ちてきたりとかしないか？

……そんなラッキーある訳ないよね！

「逃げられると思うな……俺の足は馬より速い！」

馬より速くなくても追いつかれるよ多分！俺は平均程度の足の速さだぞ！こんな見るからに化け物化け物してる奴から子供一人連れて逃げられるわけないだろ！

ああ、死にたくない。死にたくない。

だが、こんな子供を危ない目に合わせられないなぁ……

「いいか、ミュゲ。俺が行けと言ったら速くお前の村まで逃げろ」
「……ウスハぁ……怖いよぉ」
「大丈夫。俺が何とか止めるから」
俺はミュゲの頭にぽんと手を乗せて笑う。その小さな女の子を安心させる為に。
俺は凡夫と言っておろうに……だのに、明華やら何やら、やたらと体を張る奴が一緒に居たせいで……こうするのが普通みたいになっちまったじゃねぇか。普通は自分の命が一番大切に決まってんのに。
ポケットに手を突っ込み、使えるものがないか探す。
そして、ジリジリと迫り来る虎を睨み、ゴクリと息を呑む。震える体は抑えつけ、タイミングをはかる。
ティグリスが身を低くした。俺はその瞬間に、前に出る。
「ミュゲ、行け！」

ポケットからこの世界の硬貨を取り出し、虎目掛けて投げつける！銭投げ攻撃だコラァ！

虎は少し驚いたようだった。しかし、大した隙が生まれるはずもない。

だが、少しで十分。俺は勢い良く二足歩行の虎に飛びついた。

「うおらあああああ！」

「小癪な！」

ティグリスの雄叫びと共に、その鋭い爪のついた腕が降り下ろされる。

――――――それと同時に、俺の意識は途絶えた

―――

ミュゲは上手く逃げただろうか？少しでも気を逸らせてたらいいなぁ。あれ？俺はどうなった？死んだのか？そりゃあ、あんな化け物に一発殴られたら、一瞬で終わりだろうよ。此処にはいつも助けてくれる明華もいない。傷を癒してくれる救世さんも、何だかんだで強いイツキもいない。

俺に助かる要素など、残っていない。

ああ、ついてねぇ。全然、ついてねぇ。人生ってのは、良いこと悪いことでプラマイ０なんじゃないのか？そこはせめて普通でいろよ……ああ、俺の人生最後の瞬間、散々じゃねぇか。

兄様は本当は凄いんです！

凄くないっての。何も成せずにおしまいだ明華め。

よりによって、最期に思い出すのがあいつの下らない言葉って……

本当に意味が分からねぇ。

「ウスハ……すごーい！」

……ミュゲ？何を騒いで……ってか逃げてないじゃんか！あれ？声が聞こえてる？俺、もしかして生きてる？

ぼんやりと霞む風景が次第に見えてくる。あれ？俺、何して……

顔を下ろす。下には涙目で俺に抱きつくミュゲ。俺の顔を潤んだ瞳を輝かせて見上げている。

「ミュゲ？どうしたんだよ一体……」

「ウスハ強ーい！あんな虎さん、なんで魔法も使わないで倒せるのー！？」

「虎？倒す？」

俺はふと視線を動かす。

「……！？」

そこに転がっているのは、さっきまで俺達を食おうとしていた化け物『だったもの』が転がっていた。
俺は思わず目をそらす。

「……おい、冗談だろ。誰だよ。誰がやったんだよ……」
「え？ウスハがやっつけたんだよ？どうしたの？」

俺がやっつけた？馬鹿な。そんな筈ないだろうに。

だって、俺は……

……此処に俺とミュゲ以外に何がいる？

花が咲いている。それだけ。この化け物を、倒すやつが何処にいる？

ミュゲがやった？馬鹿な。

俺がやった？ミュゲもそう言っている。だが、俺はなんの魔法も

使えないし、取り柄もない……

ミュゲが、こんな初対面の、普通の子供が、俺に嘘をつくか？いや、嘘をつく意味はなんだ？

……此処にはいつも知らない間に問題を片付けてくれる明華はいない。

何故か俺を慕い、評価する周りの奴ら……俺がテラスを倒したと、思い込んでいたアナトリの人々。

俺はてっきり明華に洗脳でもされているのだと思っていた。いや、今でも思っている。

だけど、ミュゲは？ミュゲはどうしてそんなことを？

「ウスハ行こ！村に行こ！ウスハに私のとらちゃん見せたげるー！」
「とらちゃん？……虎さんなら今見たが……」
「とらちゃんは可愛いもん！」

ミュゲがグイグイと腕を引っ張る。俺は苦笑いしながら、その腕を引く弱い力に身を任せる。

手に残る微妙な違和感。

頭の中に残る空白。

明華の強い視線。

弱い俺が、一緒にいることになんの違和感も抱いていない才羽兄妹。

ミュゲのヒーローでも見るかのような眩しい瞳。

俺の中で、何かが蠢き始めていた。

――

ガサガサと、道らしくない道を、藪を掻き分けながら進む。成程、秘密の道か。よく見れば、あちこちに赤いリボンで目印がつけてある。どうやら、本当に此処はミュゲだけの秘密の道のようだ。

「なぁ、ミュゲ。お前は服は大丈夫なのか？せっかくのいい服が汚れちまうぞ？」
「いいの！ウスハー！」

やんちゃ盛りと言ったところか。このくらいの時は、昔は明華も可愛かったなぁ……いや、シスコン的な意味じゃなく、妹として、子供として可愛かったということだ。今の変態チックな、押し付けがましい明華が御免なだけだ。そういえば、昔から優秀は優秀だったなぁ。

なぁんて、昔を思い返してどうしたんだろうな、俺？やっぱり色々おかしいぞ。

「ウスハーウスハー！もうつくよ！」
「ん？」

ウスハーウスハーさっきからやたらと名前を呼ぶな……ミュゲはその響きでも気に入ったのか？

それはともかく、どうやらカーゼブ村が見えてきたようだ。僅かに民家が見えている。

ガサリと最後の藪を掻き分け、ミュゲはバスケットを振り回しながら笑顔で声を上げた。

「ただいまー！ウスハー！此処がミュゲの村、カーゼブ村だよー！」

質素な印象の、小さな民家が僅かだけ立ち並ぶ小さな村。木々に囲まれるようにその村、カーゼブ村はひっそりと佇んでいた。

そして、さっきから展開が色々と急である。

すたすたと、その女は、俺からしたら突然此方に歩いてきた。

「お姉ちゃん！」

パチン！

突然だった。

目の前から歩いてきた女は、いきなり駆け寄ってきたミュゼの頬にビンタをかました。ミュゲはこてんと転んでしまう。

お姉ちゃん、ミュゲにそう呼ばれた女は、気だるそうな目を地面にへたり込むミュゼに落として、静かに、それでも良く通る声を発した。

「……ミュゲ。あんた、フェガロフォスに行ってたでしょ？」
「……うぅ……ごめんなさい……！うえぇぇ……！」

ミュゲが泣き出す。これは随分と厳しい姉ちゃんだ。しかし、その姉ちゃんは、すぐさま地面にへたり込むミュゼを抱き寄せ、その目をすっと細めた。

「馬鹿……心配かけんじゃないよ。こんなに汚して……森を荒らしてる奴をシメるまでは森には入るなって言ったでしょ？」
「だってぇ……とらちゃんがぁ……！」
「……とらの修理なら、あたしに言えっていってんのに……材料の備蓄はまだあるんだから」

黒いコートに、黒いシャツ、黒いスカートといった全身黒づくめの女。その髪は全身と同じ漆黒。その疲れたような眼も黒く染まっている。

「でも、コラジェムがないって……だから、ミュゲ、採ってきたの。とらちゃんの分と、お姉ちゃんの分……ほら！」

ミュゲがバスケットから小さな石を取り出す。きらりと光る赤い綺麗な石だ。

「あんた……コラジェムなんて何処で……！どこかの馬鹿のおかげで今じゃ滅多に見つからないってのに……」
「えへへ……秘密だよ！これでお姉ちゃん……お願いされてた魔具（ヴィヴロス）、作れるよね？」
「ミュゲ……ったく、あんたって子は……ごめんね、叩いて」
「いいの！ミュゲが悪いことしたんだもん！」

ミュゲの頭をお姉ちゃんとやらが優しく撫でる。厳しそうだがいい姉のようだ。

姉の目が俺の方を向く。

すると、その目は予想外の色を帯びた。

「……あんた、その髪と眼」

それは強い怒り、だろうか？その気だるそうにうっすら開いた眼が、たちまち鋭く尖る。

「あ、俺は……」

「出てけ。もしくは死ね」

……俺はこの少しの間に、人生の波乱万丈を全て味わった気がする。

初対面の相手に、いきなり「死ね」と言われた。

「お姉ちゃん？」

「ミュゲ、家に戻ってな。……あたしはこいつに用がある」
「あ、あの～、俺、何かしましたか？」
ミュゲの姉の口元が忌々しげに歪む。怖い。
「白々しいね。……内臓ぶちまけて死ね！この蛆虫豚！」
「えええええ……？」
俺もショックである。ひどい罵られようである。
「お姉ちゃん！」
「ミュゲ、戻れって言ってんだよ！……おい、黒蛆虫ぃ。顔貸せ」
「は、はい……」
俺が返事をして、近寄ろうとする間もなく、姉はつかつかと俺に歩み寄る。そして、ぐっとその鋭い目を俺に寄せ、ガンを飛ばしてきた。
「……勘違いしてんじゃないよ？伝承の天使が、必ず協力してくれるなんて思い上がんなってんだ。あたしは、協力する気はない。……薄汚く死ね、このクソゴミムシ」
「えええええ？俺、別に天使が云々とかそういうつもりじゃ……」
ガチャリ……

俺の口に何かが突っ込まれました。

どう見ても拳銃です。本当にありがとうございました。

「んがーーーーーッ！？」

「醜く泣けよ、この薄汚れノミ野郎。それで帰って身内にでも慰めてもらうこったね」

「お姉ちゃんやめて！」

ミュゲがお姉さまに飛びつく。

「やめろミュゲ！こいつは縛って森に捨てる！」

何恐ろしい事言ってんだこの人！？

「ウスハはミュゲをテラスから護ってくれたのっ！ウスハ苛めちゃダメーっ！」

「何ィ？……何？」

ちょっとお姉さまの表情が緩くなった。

「ウスハにイジワルするなら、ミュゲ、お姉ちゃん大っきらいになるよ！」

「……ごめん。お姉ちゃんが悪かった。……ウスゲ。悪かった」

「ウスゲじゃねぇよ！薄葉だよ！」

「あァッ！？」

「調子こいてスンマセン！」

「お姉ちゃん！」
「ご、ごめん……と、取り敢えずうちに来い。話はそれからだ」
めっちゃ怖いお姉さま、魔女さんに招かれて、俺は恐る恐る魔女の村、カーゼブに足を踏み入れる。
……俺は一体どうなってしまうというのだ？……助けて皆ぁ……！

一一一一

村一番の大きさだろうか？少し小さめだが、比較的大きいその家に、俺は招かれた。
全身黒づくめ、長い黒髪をポニーテールに纏めた、凄く冷たい目をしたそのお姉さまは、机を挟んで俺と向かい合い、渋々挨拶を始めた。ちなみに、ミュゲは俺の隣で張り付いている。
「あたしはアヤメ。……言わずとも、その冴えなさそうな頭で十分分かるでしょ？」

「……天使でございますか？」
「まずは名乗れよ蛆虫野郎」
「杏樹薄葉でございます」
「そう、あたしは伝承でいうところの天使だ」

なにこの人めっちゃ怖い。結構綺麗だけど俺、この人めっちゃ怖い。

「あんた、本当にミュゲを助けてくれたの？」
「本当だよ！ウスハねぇ、すっごいんだよ！虎さんみたいなテラスをね、ばちーん！ぴしゃーん！うねうねー！って、やっつけちゃったの！」

うねうねー！ってなんだ……ばちーん！びしゃーん！はともかく、うねうねー！ってなんだ、気持ち悪いな。

「……その件については礼を言うよ。ありがと」
「は、はぁ……」

急にデレた？

「だが、あたしはあんたに協力するつもりはないから……」
「いや、その協力ってなんなんですか？俺はただ、フェガロフォスで迷ったところを偶然出会ったミュゲに案内してもらって……」
「本当だよ！ウスハね、ごろごろー！って転がってきたの！」

アヤメさんは凄く怪訝な表情を見せた。

「あんた……もしかして、それ本気？」
「本気ですって！本気と書いてマジですって！」

「……何それ？……ったく、焦らすんじゃないよ全く。なんだ、ただの馬鹿か。伝承なんて当てにならないもんだね」

アヤメさん、焦ってたん？……とてもそうは見えなかったが。

「伝承って……どういうことですか？」

「……言うかよ、迷子の坊っちゃんが」

なぜ、アヤメさんは俺をそこまで敵視したのか？そして、アヤメさんは何故、伝承に口を噤むのか？

なにやら深い事情がありそうだ。

「命だけは助けてやる。しばらく此処で休んでいってもいい。だが、もしも此処から離れた後で、あたしの事を口外してみろ？……そのパッとしない顔を穴だらけにして個性的にしてやる」

「い、言いませんよ！絶対に言いません！」

「だったら、ゆっくりしていきな。茶ぐらい出してやるよ」

「はい。ちょっとゆっくりしたらすぐ行きますんで！」

雑巾の絞り汁でも出されそうな雰囲気である。

……だが良かった～。アヤメさんも何とか落ち着いてくれたみたいだし……あとは何とかして明華達と合流できれば……！俺は絶体絶命の状況下で、何とか生き残ったぞーーーー！

「え～～～！ウスハ行っちゃヤダ！ミュゲ、ウスハのお嫁さんになるからずっといてー！」

お、お嫁さん？……そんなの言われたの、小学生の時の明華以来だな。いやぁ……懐かれちゃったなぁ……幼女に興味はないけれど、なかなかに照れくさくて嬉しいもんだなぁ……

「ウスゲ……表に出ろ」

般若がおる。俺の目の前に般若（アヤメ姐さん）がおる。あと、ウスゲじゃないです。

「ミュゲを誑かすゴミムシには……惨たらしい死を……！」

明華……俺、生き残れないかもしれないわ。

Ｅｐ２１：　黒髪の魔女（後書き）

フェガロフォスで出会った少女、ミュゲ。そして、その姉という黒髪の魔女、アヤメ。天使の伝承について何かを知る彼女は何故非協力的なのか？魔女の村カーゼブにて、薄葉は何を見出すか？
一方、薄葉とはぐれた明華達は……？

二回連続まさかの薄葉視点……！？いいえ、予定調和ですｗ　黒髪の魔女、いかにもなタイトル通り、黒髪の天使らしいアヤメさんですｗ　口汚い荒れ気味な女性でございますｗ　そして、薄葉になついてしまったミュゲちゃん。アヤメさんとミュゲちゃんの関係にもご注目？
次回は明華達側の動きもお送りしつつ、引き続き薄葉の方でも物語が並行して動きます。そう、今回の章は二つの道があるのです。

ＥＰ２２：　魔女としゅぎょーと堕天使と（前書き）

視点：複数

今回は視点入り乱れる混乱回。それぞれ全く別の場面でございます。

ＥＰ２２：　魔女としゅぎょーと堕天使と

視点：？？？

とぅっとぅっとぅるりら、とぅっとぅとぅるりら、ららららっらー

「レイラ、止めたほうがいいよ。歌なんて歌ってたら、テラスに見つかっちゃうって」

気持ちよく歌っている私に隣を歩く愚図は言う。あぁん、もうやんなっちゃう。どうして、この愚図はいつまで経っても分からないのかしら？

「素敵じゃない。テラスに襲われる薄幸の美少女、『キャー！タスケテー！』悲鳴虚しく隣には役立たずの愚図が一人。助けもない中、少女は泣き喚きながらその薄汚れた手に侵されて行くのです……堪らないわぁ……！」

「……レイラ、本当にもう止めようよ」

いつも私に文句ばかり。テラス一匹まともにバラせない薄汚い愚図の分際で……ああ、私ったらなんて不幸なのかしら？こんな愚図のお守りをしなきゃいけないなんて……しかも、この愚図が兄。たった少し、早く生まれた程度で兄を名乗られるなんて……屈辱的、不幸、不幸、不幸だわっ！

「もう……本当に、不幸っ……！」
「レイラ。ヨダレ、ヨダレ」
じゅるり。おっといけない。私としたことが。
「……おほん。あんた、目的見失ってんじゃないわよ。私達のこなすべき仕事は『森のテラスの殲滅』。出てきてくれたら万々歳じゃない」
「僕は遭遇にも十分な準備が必要だって言ってるんだ。相手に先手を取られるのは美味しくない」
「ほんっと、甘ちゃんねぇ。その程度の事、些細な問題じゃない。先制攻撃で優位に立てるって、それなんのゲーム？」
「不意打ちは怖いだろう？」
「ハッ！服の一枚でも剥がれたいくらいだわ！それさえできない軟弱者ばかりだから退屈なのよ……ハァ、不幸だわ」
そう。私の服一枚剥げない軟弱者ばっかり。とても不幸。この上なく不幸。
なんの為に、こんな世界でのらりくらりと生活していると思っているの？馬鹿なの？死ぬの？
私のイライラがマックスに到達しようとしていたその時、隣の愚図が不意に足を止める。
「レイラ。囲まれてる」
……だから、なんでそれを言っちゃうのよ。折角、イライラして私は気配に気付かなかったのに。たまたま視界にでも入ったのか

しら？全く、相変わらず運だけはいいのね、あなたって。

私はこきりと腕を鳴らす。そして、周囲を取り囲む気配に意識を向けた。

……いち、に、たくさん。

そう、敵はたくさんいる。

「……う～ん。何匹？どのくらいの強さ？」

「僕の勘だと……十匹。強さはＢランク八匹、Ａランク二匹。まずいよ。この辺りのテラスを仕切るボスクラスが出向いてる。やっぱりさっきのＣランクをあんなにグチャグチャにしたから怒ってるんだ。だから僕は……」

「……スイート♪強いのね？そのテラス、強いのね？」

愚図は私を「またか」みたいな目で見てくる。ええ、またよ。

これなら私に傷を付けてくれるかもしれない。私を絶望に震え上がらせてくれるかも知れない。

「ああ、なんて、不幸っ！こんな世界に呼び出され、その次に出た言葉は『我々に尽くせ』っ！こんな世界で私は恐ろしい化け物退治を強要され、奴隷同然の扱いで酷使されるのっ！不幸！不幸！不幸だわっ！そして、今から私は、今までに見たこともない化け物に酷い目に合わされるの！身の痛みに震えながら、私は必死で助けを乞う！殺さないで、殺さないで……しかし、声はすぐに変わるの。殺して、もう殺して……震える乙女を甚振りながら、化け物は笑うの。けらけら笑うの！ああ、なんて可哀想な私！私、可哀想！」

「僕は？」

「あんたは逃げるの。私を見捨てて。双子の兄に捨てられる、ああ、私はなんて可哀想な妹！不幸、不幸、不幸だわっ！」

頬が緩む。自分でも顔が情けなくにやけているのを感じる。その様子を見ながら、テラス達はのそのそと這い出してきた。

「何を笑っている？こちらに気づいたのだろう？」

「それで笑うとは……随分と余裕だな？」

テラス。テラス。テラス！きゃあ、怖い！化け物！

「ご、ごめんなさい。レイラは……この子、ちょっと変わり者なんです」

「ちょっと黙れよ、愚図！空気読みなさいよ！」

この愚図は、私の不幸シチュを平気で邪魔する。なんて可哀想な私。不幸になれるのに、不幸にさせてくれない兄が邪魔する。なんて不幸なの？あれ？私、不幸じゃない。よかった私、不幸だわ。不幸、不幸、不幸、不幸、ツイてないわ……うふ、うふふふふふふふ……！

「……テラスの皆さん。今のうちに此処から逃げたほうがいいですよ。死にたくなければ、ね」

「ふざけるな！死ぬのはお前らの方だ！このサギニ様の森で、我らが同胞に手を掛けた罪、その身を持って償え人間！」

愚図は溜め息混じりに目をふさいだ。

「僕は、忠告したからね」

ああ、なんて愚図。敵を前にして目を閉じるなんて。

こんな愚図に付き纏われて、こんな化け物に囲まれて、私、なんて不幸なの。可哀想な私。不幸、不幸、不幸だわっ！

「な、なんだ……なんだそれは！？」

ひどい。人を『化け物』でも見るような目で見て。私、乙女よ？あなたたちみたいな化け物とは違う乙女よ！？失礼しちゃう！

やっぱり私は不幸だわっ！最ッ高に不幸だわっ！！不幸っ！不幸っっ！！不幸っっっ！！！

「今、私、最ッ高に黒ずんでるッ！？」

私は不幸に身を堕とすの。薄汚れた、灰かぶりのように。

一一一一

視点：杏樹薄葉（アンジュウスハ）

土下座した。これまでにないくらいに見事な土下座を。

「……なんのつもりだ？」

「さっせんっしたー！俺、ミュゲさんに手ぇ出すつもりはありません！勘弁してくだせぇ！命だけは勘弁してくだせぇ！」

「いや、突然地面に這いつくばってどうした？」

「土下座です！これまでにないくらいの土下座です！」

「……まぁ、座れ。いきなり地面に突っ伏されて、正直怖い」

ゆ、許してもらえた……？

「ドゲザー！」

ミュゲまで地面に這いつくばってる。ミュゲ、それ土下座やない。うつぶせや。

「やめろミュゲ。服が汚れる。いや、もう汚れてるか。一回風呂にでも入ってきな。服も出しておいて……着替えは出せる？」

「うん！」

ミュゲはぴょんと立ち上がり、すたすたと何故か俺の方へ。

「ウスハと入る！」

「駄目だよ！？一人で入りなよ！？」

「ウスゲェ……ミュゲ、一人で入ってきな」

「……はぁい」

「やっぱり行かないで！俺、一人にされたら殺されちゃう！」

「大丈夫、殺しはしない」

「殺し……『は』？」

「行ってきまーす！ウスハ、後で遊ぼー！」

「うん。五体満足だったらね……」

「いってらっしゃい。さて、ウスゲ。あたしとゆっくりお話しようか？」

「……イエス、マム」

やべぇ、やべぇよ……ミュゲ行っちゃったよ。俺、殺される……もう駄目だ。おしまいだぁ……

とてとてと駆けていく小さい後ろ姿を見送り、俺は気まずい状況下で魔女、アヤメさんと一対一で向き合う。

静かな空間に取り残され、俺は必死で逃れる道を見つけ出そうとした。

「あ、アヤメさんって天使なんですよね？」

「そうだけど。だが、あんたらに協力する気は……」

「い、いや、そんなつもりでなくて！ミュゲは妹なんですか？」
「……妹、か。血は繋がって居ないけど、そういうことになるかもね」
おや、地雷踏んだか？やべぇ……
しかし、思いの外柔らかい表情で、アヤメさんは語る。
「だから、ミュゲだけは本当に危険に巻き込まないで。あの子は天使の伝承とはなんの関係もないし、今は身寄りも居ないの。だからあたしはどうしても此処から離れる訳にはいかない。たとえ、それが天使の伝承の運命に強制される事であってもね」
「……そうなんですか」
俺は深くは聞かない事にした。それなりの事情があるようだ。いや、そもそも俺はたまたま迷子になってここに迷い込んだだけだ。最初から天使といえどアヤメさんを引き込むつもりはなかった。
「帰りたい、とか思わないんですか？」
「……どうだかね」
まあ、分かる。ミュゲの事があったら、帰る気にもなれないのだろう。どんな事情があってアヤメさんが此処に居るのかも分からないが、見ればすぐにでも分かる事もある。
「ミュゲと仲良いんですね」
「……そうかな？……まぁ、ちっちゃい頃から面倒見てるからな。かれこれ十年位だろうか？」
「そんなに長いこと居るんですか！？」

驚いた。救世さんとイツキは確か六年だったか？この人はもっと前からこの世界にいたのか。そりゃあ……離れられないだろうなぁ。

そして、抱く不安。俺達、本当に元の世界に帰れるのだろうか？

「……まぁ、この話はもういい。取り敢えず、ミュゲを助けてくれた事には礼を言う。ありがとう」

「え？ああ、はい……ど、どういたしまして」

いまいち覚えていないが、取り敢えず受け取っておく。急に空気が緩くなったなこの人。てっきりお前がミュゲを助けたなんて嘘だろうとでも言われるかと思った。いや、未だに俺は嘘だと思いたいのだが。

「ミュゲと後で遊んでやってよ。あの子、この村だと年が近い友達とか居ないからさ。その後帰るんだったら、カサロラインまでなら送ってあげるよ。街とかだとあたし、ちょっと都合が悪いんだわ」

「はい。それで大丈夫です」

何故、この人が魔女と呼ばれ恐れられているのか、俺にはどうしても理解が出来なかった。少し怖いけど、この人、本当はいい人なんじゃなかろうか？

そして何か感じる違和感。俺自身の内にある何か。そしてアヤメさんから感じる何か。

明華からふと聞いた堕天使の噂も気になる。ズィスィの天使、其処には何か大きな秘密があるのではないか？

「お茶出してくるから。しばらく休んでな」

席を立つアヤメさん。俺はアヤメさんが机に置いていった銃のような何かを睨み、思索する。

―――

俺がアヤメさんの家の棚に並べられた杖や指輪と眺めていると、ギギ、と聞き覚えのある音を立てながら、巨大な大男が俺の横に立った。

「……はい？」

体が岩で出来ている。謎の大男、森で出会ったゴーレムさんだ。

「ギギ」

ゴーレムさんは俺の前にお茶を器用に差し出した。

「ど、どうも」

「ギギ」

ゴーレムさんはそのまま家の奥へと歩いていった。入れ違いに奥に行っていたアヤメさんが戻ってくる。

「い、今のなんすか!?」

「ああ。あたしの作った『ゴロゴロ君』。器術を使った自立起動型の魔具だよ」

器術、その言葉に首を傾げる俺に、アヤメさんは嫌な表情一つせずに、持ってきたカップに口を付けながら語った。

「器術ってのは簡単に言うと『アルマを入れる器を作る』魔導だよ」

「それでどうしてあんなのが作れるんですか？」

「理論は簡単。生物はアルマを秘めている。なら生物を成すものはアルマなんじゃないのか？だからアルマを与えれば、それは生命に成りうるのでは？そういう考えから『自立起動魔具』の概念は生まれたの」

凄い理論だな。多少強引な気もするが、それで本当に生命を作り出せるとは。

「ま、正確には器術だけで作れるものじゃないけどね？でも、アルマを溜め込む器を作る器術ってのは、聞こえの割には応用範囲が広いわけ」

「治癒術とかみたいにですか？」

「おお、治癒術知ってんの？あれも実は応用範囲広いって聞いたね」

アヤメさんは軽く笑みを浮かべる。あれだろうか？救世さんみたいに自分の得意分野を語るのは好きなのだろうか？

「器術は例えば……アルマ情報を組み込んだ器を搭載した自立起動魔具だったり、空気中のアルマを変換して使用可能な状態に還元する魔具だったり、固定の魔法の条件無視して発動する魔具だったり……まぁ、結構便利なの。あたしのこいつも結構スグレモノよ？」

アヤメ先生が手元の銃を見せびらかした。

「これには炎系統の魔法と、雷系統の魔法、あとついでに氷系統の魔法を記録したアルマの器が搭載されてるの。それは呪文もナシに引き金を引くだけで発動されるってワケ」

「じゃあ俺でも魔法が使えるんですか？」

「そ。魔法を使えない人間に、魔法を実現させる手伝いをするのも器術ってワケよ。……あんた、魔法使えないのね」

「あはは……」

器術、すげぇなぁ。全く理解できんかったが。俺でも魔法が使えるかもしれないのかぁ。興味深いな。

「……おや。こりゃミュゲが準備を終えたようだね。ウスハ……表に出て」

「え？締められるんすか、俺！？」

「いや違うよ。……あいつ、暴れる気満々みたいだから。家に被害が出んの困るんだわ。ミュゲを怒るのも嫌だしね」

俺は一体、ミュゲと何をして遊ぶんだ……？あの小さいのが暴れて、家に被害がでる？まぁ、多少ものが壊れる程度だよな？

……外でのしのしと凄い音がしているのは気のせいだろうか？

俺は渋々表に出る。アヤメさんも何故かくすくすと意地悪そうな笑みを浮かべながら後に続く。

外には既にミュゲが待ち構えていた。なにやら奇妙な大きなボールに乗って。風呂上がりのようで湯気が立っていて、髪が湿り気味である。服も変えている。

「ウスハー！遊ぼー！」

「おうおう、いいぞ。でも、あんまり暴れて汗かいたら、またお風呂入んなきゃいけなくなるぞ？」

「だいじょぶ！ミュゲは暴れないよ！」

おお、そうか。それは良かった。

「とらちゃん、へんしん！」

ミュゲは元気に腕を伸ばして、高らかに謎の号令をかけた。

すると、ミュゲの座る大きなボールがぼぼぼぼぼぼと震え出す。

そしてまずは下から二本の細い何かが飛び出した。

にゅーん！

二本の……足？ボールから足が生えた！？

にゅーん！

次は二本の腕！？ボールから手足が生えた！細長くて気持ち悪い！しかも、何か屈伸を始めている！ストレッチか？ストレッチなのか！？

上では楽しそうにミュゲが鼻歌混じりに首を振っている。危ないよ。そんなところに乗ってちゃ。

丸いボールが四肢を伸ばし、軽く腕を回す。その上で、ミュゲはぐっとその丸い体から飛び出た突起にしがみつき、にっこりと俺に笑いかけた。

「ウスハー！」

「ミュゲ……なんだそ」

一瞬の衝撃。

俺はぶっ飛んだ。

「うぼろあッ！？」

俺の腹に何かがめり込む。地面を激しく転がった俺は、涙目で顔を上げると、ようやくその衝撃の正体を理解した。

右腕を前に伸ばし、奇妙なポーズを決めているミュゲの乗る謎物質。それは俺の居た位置に居た。

……殴られた！？

なんで！？なんで俺、殴られたの！？

俺はゲホゲホと咳込む。痛ぇ、めっちゃ痛ぇ！

そして、俺はミュゲの無邪気な笑顔とその言葉から、何故俺が殴られたかの理由を知る。

「ウスハー！しゅぎょーしよ！とらちゃんのしゅぎょー！けーこつ

けて！けーこ！」

しゅぎょー？修行？稽古？

……まさか、遊びって、あの化け物と稽古……戦えと？……ってか、とらちゃんってあれ！？

「ウスハ。たっぷり遊んでやってよ。とらちゃんの稽古、付けてやってね？」

アヤメさん、ニヤニヤしてると思ったらあんたまさか……！？

「気を付けなよ？ついこの間、この村に迷い込んだどこかの戦士さんも……ミュゲに懐かれて稽古したんだわ。……まぁ、治療はしてやったけどさ」

それって、ミュゲのとらちゃんにボコボコにされたということですか？

「ミュゲにさ、天使の伝承の天使が化け物を倒す部分を聞かせたらさ、『ミュゲも修行して強くなる』って言い出すようになってね？あたしも相手するの疲れるんだわ。頼むね、未来の旦那さん？」

「むしゃしゅぎょー！ひゃくにんぬきー！」

危険な生物、とらちゃんが腕を振り回し、奇妙な構えを取る。がくんがくんと体を揺らし、構えとも取れない構えを取る。

それを見て、俺は昔から馴染みのある、とあるおじさんを思い出した。

「……暗中無心拳？」

「ウスハのマネー！うねうねー！」

その構えは、間違いなく俺の知る構えだった。

そして、とらちゃんは動き出す。

うねうねうねうねうねうねうねうねうねうねうねうねうねうね！

何か体をガクンガクンと揺さぶりながら、うねるようにこちらへ向かってくるとらちゃん！

どこが俺の真似！？そんな動き知らねーぞ！？気持ち悪っ！

楽しそうに無邪気に笑いながらミュゲが体をがくんがくんと揺らしている。迫り来る脅威を前に、俺は一つの疑問を抱いた。

俺の真似？……俺、ミュゲに暗中無心拳の構え、見せたっけか？

俺の知るおじさんが考えた、最強（笑）の拳法、暗中無心拳。

しかし、俺の思考は、すぐにミュゲとの危険な稽古によって遮られた。

――

視点：才羽済（サイバイツキ）

今、私達はオニロのセルセラコミュニティまで戻ってきている。
薄葉とはまだ合流していない。
私達は、一旦仕事を終え、此処に戻ってきたのだ。

アキカは本当に手際の良い女だった。

救世の治癒術により、森中にアルマを張り巡らせるケンズの特性を利用した森の探知を提案し、それにより森の中にウスハが居ない事を確認させる。薄葉は森からでたのだろうと判断したアキカは、森の周りにはカサロラインが張り巡らされていることから、ウスハでも街への帰り道はわかるだろうと踏み、次はケンズを侵した犯人を探らせる。

人一倍アルマのコントロールとアルマの知覚に長けた救世は、直ぐ様ケンズに毒のアルマを吹き込んだ犯人を探知。その隠れ家である森の洞窟を探し出す。

あとは流れるような作業。

洞窟へ急いだアキカ。そのあとに続いた私達。

洞窟を見つけたアキカは、するりとその中に潜り込むと、複数居るテラス達を楽々とねじ伏せ、直ぐに奥に潜むテラスのボスの元にたどり着いた。

怯え、降参するテラスのボス。フェガロフォスに最近侵入したという少女のようなテラス、サギニ。サギニは頭を下げ、森から立ち去ることを約束し、見逃される事となる。

なにやらサギニは、最近この森の資源を独り占めにしようとフェガロフォスに入ったようで、『幻術』と言われる魔導の一種で人間を惑わし、森の中に閉じ込めていたとか。そして、幻術の作用の邪魔をする、ケンズの木を病ませていたのだという。

そして、家来のテラス達を森中に散らせ、邪魔な人間を襲わせていたとか。

見逃すのはどうかと思ったが、アキカは笑顔で言った。

「次やったら、許しませんから♪」

ああ、これは怖い。後ろで死神が「次やったら殺す」と言っている。怖い。

アキカは随分と気負っていたらしい。兄であるウスハを見失ってしまった事を。

自分だけは、自分だけは兄様を見失ってはいけなかったのに……そうやって、ずっと辛そうな顔をしていた。

仕方ないことだ。幻術という魔導に掛かって、ウスハに対する意識を惑わされていたのだから。しかし、アキカは、それでも自分が許せないようだった。

私は「私なんてずっとウスハに話しかけてたのに気付かなかった。キノコばっかり見ていたよ」とフォローを入れた。

「え？ええ、は、はい。そうですか」

物凄く微妙な表情をされた。何がいけなかったのだろうか？

「済ちゃん、フォローが……いえ、なんでもないです」

救世に微妙な笑顔を贈られた。なに？その残念そうな顔。誠に遺憾である。

そんな感じでアキカはとても焦っていた。早く兄様に会わなければと。

そんなアキカの表情が、さらに険しくなったのはコミュニティに戻ってからだった。

「薄葉っち？帰ってないよ～」

薄葉は、オニロに戻ってきていなかったのである。

「そんな……兄様は何処に居るんですか！？」

アキカはコミュニティの窓口係、その白面の女、ジアミエンに迫った。

この女が知るはずなんてない。そのはずなのに……

「それは教えられないなぁ♪だって、それはとってもとっても高額な、国家レベルの情報だもの♪」

ジアミエンは、唇を震わせるアキカに「にこり」と笑って囁いた。

「これは物語の真相に迫る情報。それを手順をすっ飛ばして、いき

なり得られるなんて都合のいい話、あるはずないと思わない？私は小説を後ろから読む奴、嫌いなの。どうしようもなくね」

物語の真相？それが何を意味しているのかは分からない。

だが、この女からひしひしと伝わってくるこの気配は、何かを楽しんでいるような狂気じみたものだった。

それは果たして、人を偏った目でしか見れない私の目が悪いのだろうか？救世を勝手に恨んでいたあの時のように、私にはどうしてもこの女、ジアミエンが裏で何かを企んでいるようにしか思えなかった。

「……教えてください。なんでもしますから。兄様の居場所、教えてください……！」

アキカは相当切羽詰っているようだ。兄の事となると、ここまで脆いのか？私は見ていて心配になった。

しかし、ジアミエンは「くすくす」と笑いながら言う。

「やだ♪……それより、依頼達成の証のケンズの葉と、カードだして～。特別に、君たち三人にポイントと報酬をあげるから♪」

アキカが動き出す前に、私の体は動いていた。それは救世も同じようだった。

私は、新しく用意した適当に見繕った刀型の名前もない魔具を、救世も杖型の魔具を、その白面の女の前に突きつける。

アキカの弱々しい顔は、もう見ていられなかった。

「……あれ？イツキちゃんはともかく……救世っちまで手が出ちゃうタイプだとは思わなかったなぁ」

ジアミエンは「ウェヒヒ」と笑う。そして、その手を一度上げ、くいと下に降ろす。すると、私達の背後でがたりと音がした。どうやら、ジアミエンの用心棒が動こうとしたのを収めたらしい。

「なんでもしますから、教えていただけませんか？本当に困ってるんですよ」

救世が笑顔で尋ねる。

「……脅迫？おお、こわいこわい。ええ、ええ、分かりましたよ。ただ、下手な情報を出しても私が殺されちゃうんで、とっても遠まわしな情報で勘弁して貰えませんかね？」

余裕を漂わせる声。あくまで焦りはないってか。私は刀をジアミエンの仮面に当てる。

「私は気が短くてな。あまり人を小馬鹿にした態度を取ると……」

「イツキさん！やめてください！大丈夫ですから！」

アキカに止められ、私は仮面から刀を引く。ジアミエンは僅かに出来た擦れた傷を撫で、「くすくす」と笑う。

「くすくす。アキカちゃん、交渉はもっと強気にこなくては。そんな引け腰じゃ、相手に余裕こかれて当然だよ？……あぁん、もうそんな泣きそうな顔しないで！ちょっと意地悪したくなっちゃっただけよう！」

「けらけらけら」、愉快に笑うジアミエン。人の心情を察しない奴。

「覚えてる？堕天使。伝説の塔、『デア・ピルゴス』に根付く化け物の事」

くるりと指をまわし、ジアミエンはぴらりと一枚の紙を机に落とす。手品？

「『堕天使討伐』。その依頼、受けてくれるのならば、薄葉っちの居場所の情報、教えたげる。いえ、違うかな？……『分かるかも』、そう言ったほうが良さげかにぃ？」

蟹？

「何でもしてくれるって、言ったよね？」

その甘く囁くような毒々しい言葉に、アキカは直ぐ様頷いた。

「はい！それで、兄様の行方が分かるのなら！」

私は一抹の不安を覚えた。

アキカは真っ直ぐである。そしてとても強い。私や救世なんかよりも、ずっと。その強さが、真っ直ぐさを支えているような気がする。その真っ直ぐさは、全てウスハに向けられているのだろうが。

だから人の悪意をまっすぐに受け止めても、アキカは強さでねじ伏せる。ものともせずに突き進む。

しかし、もしも、アキカの強さでもねじ伏せられない、どうしようもない『捻れ』と出会ったとき、途方もない悪意と出会ったとき、アキカはどうなってしまうのか？

私が弱く、ひねくれているからだろうか？

何かに、騙され、欺かれ、誘導されているような気がしているのは？

それはウスハが消えることも含めて、あらゆることが操られているのではないか、そう思えて仕方がないのは私だけだろうか？

稚拙な陰謀論。救世の時にも私が抱いた妄想。

胸騒ぎがする。

私は刀を鞘に収め、唇を噛み締める。

「……私も、助けにならないとな」

不安を感じるからこそ、何かがあった時には私が何とかしよう。アキカに劣ることは分かっている。その上で、アキカにできないことができる救世とは違い、特別なことはできない。

なにか、私にできること。

「きっと見つかるよ」

甘い蜜を流し込むように、ジアミエンのか細い声が耳に届く。離れているのに耳元で囁くかのようなその声は、ほかの二人には届いていないようだった。

「……ああ、お前の化けの皮は剥いでやる」

「楽しみにしてるね？」

決意を胸に。不安を胸に。私達は一路、堕天使の塔『デア・ピルゴス』を目指す。

ＥＰ２２：　魔女としゅぎょーと堕天使と（後書き）

ズィスィの裏で蠢く怪しい動き。明華達は堕天使の塔を目指し、薄葉は魔女の村にて危険な子守に挑む？

次回、「デア・ピルゴス」に続く！

今回、かなり視点入り乱れての混乱回、お許しください！ぽんぽん進んでおりまする。

今回は未登場の方の視点も混じっております。はい。とてもヤバそうな方ですね。はい。ヤバい方です。本当にありが（ｒｙ

薄葉は相変わらずのトラブルに巻き込まれております。

そして、済視点がトントン拍子なのは、済がとてもさっぱりとした正確だからです。彼女はさらっと説明してしまう人なのです。……にしても早すぎますかねｗ

明らかに怪しい人は犯人じゃないんですよ！……いえ、独り事でございますｗ

だ、だ、堕天使～♪

EP23：　デア・ピルゴス（前書き）

今回から視点描写を変更しました。視点：〇〇という表記をなしにしました。

EP23：　デア・ピルゴス

――デア・ピルゴスの頂上にて

どれ程の時が経ったであろうか？

この暗い塔の中では太陽が沈む様すら拝めぬ。

我に染み込む光は、ほんの僅か。

光など要らぬと吠えられる程、我は強くはなっていなかったらしい。

ああ、愛しい我が光。

闇の中にて、我は待つぞ。

いつか貴様と共に歩めるその日まで。

「何語っちゃってんですか、ハランさん」

「語っているのではない……語りかけられているのだ……」

「……そうですか」

思えば大分時が経った。今、何故そんな想いに沈むのか、我にはまるで分からない。

囁いている、我に、何かが……感じる、感じるぞ。運命の天秤の傾きを。

そうか。運命の賽は神の手を離れたのだな。

「ハランさん。冷蔵庫にあった俺のプリン知りません？」

「残念だったな。我だよ！」

「また人のおやつ勝手に食ったんですか！？」

「運命だよ」

そう、全ては運命。だが、我は運命になど流されぬ……我は堕天使、天に背く者。我は我の歩むべき道を切り開くのだ！

「切り開くのだ！じゃないですよ！俺のプリン！」

「運命だよ」

「運命などに流されぬって！さっき運命などに流されぬって！」

「くっ……！我が右腕が……！闇と光の力の融合した、我が右腕に封印されし最強の魔法、『シャイニングパーフェクトダークネス』が唸っている……！早く買出しに行くのだ！早く此処から離れなければ、貴様も巻き込むことになるぞ！メントル！さぁ、裏口から出ていくのだ！」

「……ちっ。分かりましたよ。ったく。買出しに行ってくりゃいいんでしょ！面倒くさい人だなぁ。あの方の命令でなきゃ付き合いきれませんよ」

メントルは愚痴りながら裏口の扉を開いて、部屋から離れる。

それを確認して、俺はようやく椅子に腰を深々と沈みこませた。

「……フン。全く……空気の読めない連中の多いことだ」

ぐっと包帯の巻きつけた右腕を握り締め、唾を呑む。鼓動が高鳴る。これは高揚？いや、違う。

塔の前に仕掛けた監視用の目。左目に巻きつけた包帯の下に隠したモニター代わりのメモリア石のパネルに映し出される目の捉えた三つの人影。

黒髪。黒眼。間違いあるまい。『伝承の天使』。

恐らく、奴等は相当の手練。今回ばかりは、俺自身の元にまで辿り着かれるやもしれぬ。例え、起動させてから誰一人此処まで通して居ない鉄壁の塔『デア・ピルゴス』をもってしても、三人全員は阻めぬかもな。

その時は……あらゆる手段を持って俺が潰そう。

長年積み上げてきた、俺の『力』の結晶で。

見ていろ、アイリス。待っていろ、鈴蘭。世話を掛けたな、メントル。気遣い感謝する、フラル。

運命など、否定する。此処で、捩じ伏せる。

「全ては、俺達の為に」

震える手を押さえつけ、口元にマスクをつけながら、俺は一人乾いた笑みを浮かべる。これは武者震い？いや、違う。

歓喜と恐怖、二つが入り交じった、あいつらには到底理解の出来ない感情だ。

一一一一

私達は、ベゲモートの背中を借りて、高く聳えるその塔、『デア・ピルゴス』を訪れた。カサロラインから少し外れた位置に聳える、

決してたどり着くことが不可能ではないその塔。その周囲には囲いがしてあり、立入禁止の旨を伝える立て札が。

その囲いの内にある、十三階建てのその塔の起源が書かれた立て札や、そこに纏わる伝説、恋のおまじないなどが書かれた看板の張り紙が、虚しく佇んでいる。

『堕天使』。そう名乗る存在が支配すると言われる廃れた塔を見上げて、アキカと救世、そして私は息を呑む。

噂では、冗談のような化け物だった『堕天使』。噂通りの化け物が、本当に居るとは思えない。

「気を引き締めて行きましょう。相手は腕が十本の化け物です。右腕には十分な注意を！」

「はい！」

……いやいや。アキカは真面目に何を言っているのだろうか？救世もなんで真面目に返事をしているのだろうか？

どう考えたって、その噂を聞く限りは残念な結果しか期待できないというのに……え？まさか、本気で信じてる？

「済ちゃん、どうしたんですか？不思議な顔をして」

「まさか、イツキさん、もう堕天使の希薄に気圧されているんですか！？」

「いやいやいや……あの噂はデマだろう。どう考えたってアレな……」

「済ちゃん……人を信じられなくなったらおしまいですよ？」

救世……何故、私をそんな可哀想なものを見るような目で見る……？それに人を信じられなくなったらって、思いっきり嘘をついて大騒ぎを起こした奴が言うか！？

……何かすごく嫌な予感がする。

「早速、入りましょう」

アキカが囲いを飛び越え、中に入る。それに続いて救世が、そして遅れて私も入る。塔の入口は重々しい鉄扉。開けるのに、大分一苦労しそうなものである。まぁ、付術の使える者からすれば、軽いものだが。元観光地の割には随分と不便そうな扉。恐らくはこれはずっと開放されていたのではなかろうか？今では堕天使が閉ざした最初の関門といったところか。

ダン！

アキカのひと押しで、音を立てて扉が開く。

中は円形に広がる部屋。奥には円形の部屋の壁を沿うように階段が伸びている。石で埋めつくされた重々しいその空間に、私達は足を踏み入れる。

『ハァーーーッハッハッハァッ！！よく来たなッ！伝承の天使達よッ！』

その時、塔の中に大きな声が響きわたる。男の声だ。

「誰だ！？」

『誰だ？ハァーーハッハッハァ！それも知らずに天を貫くデア・ピルゴスに足を踏み入れようとはァ……愚かなり冒険者共ォ！我だ！』

……？

沈黙、約十秒。

『神に背きし闇と光を操る混沌と黄金の堕天使、ハラン様だッ！！』

こいつ、絶対に面倒臭い奴だ！私は確信した。溜めすぎだろう、面倒臭い！

「闇と光を操る……？一体、どんな力を！？」

「黄金というのも気になります……」

アキカと救世が真に受けているのが余計にタチが悪い。冗談だと言って欲しい。

『女三人でピクニックか？天使といえど、此処はそんなに甘い場所じゃないぞ？』

あ、女三人って言ってくれた。私も女に最初からカウントされてる。ちょっと嬉しいかも……救世が凄く悲しそうな目をしているが。

「堕天使！私達はあなたを倒しに来ました！」

『結構！だが、我が玉座に辿り着けるかな？デア・ピルゴスは試練の塔！あらゆる障害が、堕天使の領域を冒す愚かな人間や神の犬である天使共を阻み……誘うのだ……天とは掛け離れた……地獄へと……あと、我が名はハラン！堕天使ハラン！』

「堕天使！私達は屈しません！兄様と、巡り会えるその時まで！」

『そうか……貴様らにも譲れぬものがあるのか……だがこの堕天使？ハラン”ッ！！にも譲れぬものがある……情になど、流されぬぞッ！！』

「勿論そんな期待はしていませんよ、堕天使！」

アキカ……多分、堕天使は「ハラン」って名前で呼んでもらいたいんだと思う。放送から「ぐぬぬ」って声が漏れてるし。「堕天使！」はやめて上げてもいいと思う。

……にしても、堕天使ハラン……あまり恐ろしそうじゃないな。これは案外簡単に倒せるんじゃないのか？

「さぁ、行きましょう！救世さん！イツキさん！」
「はい！」
「……ああ」

アキカと救世が駆け出すのを見て、私も少し遅れて駆け出す。

『ちなみにその部屋は「奈落への道標（ミチシルベ）」と呼ばれる部屋だ！あちこちに、奈落へと侵入者を引きずり込む穴が隠してあるのだッ！』

つまりは落とし穴があるという事か？

「そんな罠には掛かりませんよ！」
「ああ、足元が落ちる前に駆け抜ければいい話だッ！」

アキカが付術で加速したのを追い、私も加速する。どうやらこの塔、罠が仕掛けられたトラップタワーらしい。

しかし、落とし穴なんて陳腐なトラップで……

がこん。

「きゃあああああああああ！」

……え？

私はにわかには信じがたい声を聞いて、足を止めてちらりと横を見た。

穴が空いている。

「救世ーーーーーーーーーッ！？」

救世……！

救世……！

救世……！

可愛い悲鳴上げやがって……！

「アキカ！救世が落ちた！」

「ええっ！？今の可愛い悲鳴、救世さんですか！？きゃあって！てっきりイツキさんかと」

「私は多分『ぬおお』とか言うと思う……悔しいが！」

「私も『きゃあ』と言う自信はないですね……さすが救世さん。あざとい……！」

私達は落とし穴を恨めしそうに眺めた。合掌。

『……え？ちょ……本気で一人掛かったのか？お前達、その黒髪、天使だろう？』

堕天使もびっくりしている。私もびっくりした。

まさか、救世がドジっ娘属性に目覚めようとは。あ、ドジっ子か。どちらでもいいが。

『ハ、ハ、ハァーーーーッハッハッハァッ！！そ、そんなことで我の元に辿り着けるつもりだったか？これでは貴様らも我が究極の力を見ることなく朽ち果てそうだなッ！』

まさか、救世が第一階層で落ちるとは……いや、まさかという程に高評価を持っていた訳ではないが。

これで後で救世を回収しなきゃいけないという手間が増えたわけだ。図らずとも救いを待つお姫様ポジションに落ち着いてしまう兄……妹としてはとても悔しいところである。

いや、そんなことを言っている場合でもないのだが……

「とにかくだ、慎重に進もう。恐らくはあののっぺらぼうの言う通り、この塔を攻略することでウスハに出会えるようになっているのだろう。あいつはそういう事を企んでるような奴だ」
「……救世さんも心配ですが、それも堕天使をとっちめれば何とかなるでしょう。治癒術もあるでしょうから、怪我なんかは心配ないでしょうし。……今は流れに身を任せるしかないですよね」

自らに言い聞かせるように、アキカが呟く。

大丈夫、大丈夫、それはアキカが好む言葉。
いつでも周りを安心させるように、自分自身を奮い立たせるように吐く言葉。
それはアキカの口から出なかった。

「行きましょう」

流れに身を任せる。それは今までのアキカには普通の事なのだろう。アナトリで、勢い任せに国を取り戻した事は聞いた。ノトスで、勢い任せに救世と止めたのは目の当たりにした。

しかし、本当に流されたままでいいのだろうか？そんな不安を抱くのは、私だけなのか？

「ああ」

それでも私は前に進む。考えるだけの頭が足りないからだ。

落とし穴を何度か開けても、私達はそれを飛び越え、時に淵に掴まりながら、難なく第一階層を突破する。

一一一一

第二階層。其処は第一階層から突然ぐんと広くなる。

「外から見たらこんなに広いようには見えなかったが……それに一階と比べて随分と形と広さが違うな」

「多分、魔法か何かでしょう。伝説の塔、そのくらいの仕掛けがあっても不思議ではありません」

こんな奇妙な、しかもアキカも理解しかねる魔法を操る……いや、もしかしたら塔自体に施されていた魔法かもしれないが、何にせよそういったものを所持する堕天使……それなりに危険な相手と考えてもいいのだろうか？

『ハァーーーッハッハッハ！第一階層、突破おめでとう！お仲間は残念ながら一人脱落したようだがな！』

響く鬱陶しい声。放送か？そんな技術がこの世界にあるのか？それともこれも魔法なのか？

『次の関門は「幻想のエデン」！幻術により、方向が狂わされたこのフロアを突破できるか！？』

「幻術、ですか……」

アキカはぼそりと呟いた。

ドッ！！

轟音。それと同時に、一瞬の光。

それだけで、私達の目の前に広がる広い部屋は、ひび割れ崩れかけていた。塔の壁を貫くように、大穴がぽっかりと口を開く。

私は言葉を発せなかった。

「私、その幻術っていうの、大嫌いなんですよ」

アキカは手を前に翳し、呟いた。その笑顔の仮面を外して。

こいつだけは怒らせてはいけない。

それを理解させるのに十分な、凍りつくような表情だった。

響きわたる筈の堕天使の声も凍りついている。幻術を発動させていた要が、強引に破壊され、第二階層は機能を停止させる。

「さ、行きましょうかイツキさん。兄様が待ってます」

アキカは再び笑顔の仮面を被り直す。

「早く……謝らなきゃ」

アキカを突き動かすもの、それが全てその一言に集約されていた。

一一一一

第三階層。待ち受けるのは奇妙な化け物。ギチギチと音を立てながら動く、ロボットのようなもの。

『……第三階層「鬼の間」。自立起動型魔具「オーガ」はそう簡単に倒せるものではないぞ！』

樽のように太い腕を振り上げ、言われてみれば鬼にも見える二本の角（アンテナ？）を生やした不格好なロボット。

それは突如、私達に飛びかかってきた。

「速い！？」

刀を構える隙すら与えぬ一瞬の、たった一回の跳躍。反応の遅れた私をフォローするように、アキカが間に割り入った。

ガッ！

その太い腕を受け止め、アキカが反撃の拳をオーガの寸胴な体に叩き込む。ぎしりと音を立てて、オーガは後退。それはかなり強烈な衝撃音を響かせるが、オーガはぎちりと首を傾け、まるで堪えていないようだった。相当に頑丈なようだ。

「アキカ！すまない！」

私は刀を抜き、付術により力を込める。硬質化し切れ味を増した刀を、脚力強化と腕力強化により、一気に接近し、オーガ目掛けて振り抜く。

ギン！と金属音を立てながら、私の刀が受け止められる。

「これは……付術！？」

アルマを纏わせ性質を与える魔導。このロボットから、付術による硬質化の力を感じ取る。

ギン！ギン！ギン！と連続で金属がぶつかり合う音が響く。私の剣撃、オーガの拳撃が絶え間なく衝突する。

こいつ……強い……！

全十三階層、十二階層は罠の仕込まれた階層なのだろう。そして最上階、十三階層には恐らくは堕天使ハランが潜むはず。つまりまだ五分の一にも満たないこの地点、私はまだまだ力は念の為に温存しておくべきだと考えていた。そして、ふざけた堕天使の態度に、少し楽観的になっていたようだ。

しかし、それは大きな過ち。

堕天使の罠は、想像以上に過酷。これまでに人を通さず生かして帰さないデア・ピルゴス。容易な試練が待ち受けている筈もなかった。

途端に救世の身が心配になる。もっと心配してやるべきだったか。

こいつはただの中二病ギャグキャラじゃない。意外な強敵なのだ。

「……温存、流石にその余裕はないか……！」

そう。アキカは今、余裕がない。兄、ウスハに対する強い想いが暴走している。

せめて、その暴走で何か過ちを起こさないように、私が支えるしかない……

私は私なりにできる事を決意し、刀に力を込める。

かつての魔具は救世に折られた（おのれ）が、今の魔具でも、付術を扱う私には十分。魔法縛り結構。元より剣の道こそ我が宿命！

片手持ちにしていた刀をぐっと両手で握り込む。

「片手で斬れないのなら、両手で斬る。これで私の力は二倍だ」

『ハァーーーッハッハッハァッ！！そんなジョークみたいな単純計算で……』

笑えないだろう？まぁ、多少ジョークは交えたが。

そもそも、私の『戦うイメージ』は、剣道のもの。

片手で握るのは此方での剣術のイメージ。

元々、こっちの方が根が深いのだ。

足捌きは覚えている。此方に来てからも、鍛錬を怠った事はない。竹刀よりもずっと重い刀にも慣れ、既に感覚は同期している。滑らせるように足を動かし、相手の反応を待たずに右足を持ち上げる。

ダン！と地面を踏み付ける、それと同時に刀はオーガの頭にめり込む。

「面ッ！」

声により、より力が強まる感覚。そして、そのまま後ろに下がる。刀をそのまま降ろす必要などない。

刀を通さずとも、その一撃はその硬質な体を斬撃として突き抜ける。ロボットは頭から股二かけて、薄く線を浮かび上がらせ……

ガシャン！

まっぷたつに崩れ落ちる。

「『滝』」

イメージ通り。ちなみに、技名は最近徹夜で考えたものである。本当は「面！」じゃなくて「滝！」と言いたいが、ちょっと慣れは抜けない。だが後から言っても十分に格好いいだろう。どうだ？

「……どうだ？私も中々だろう？もっと頼ってもいいんだぞ？」

刀を背に担ぎ、私はアキカを振り返った。アキカは少しだけ、驚いた表情を浮かべて、少し遅れてにっと笑った。

「……なんでそんな技を隠してたんですか？」

……言えるか。レークスから与えられた剣術を、どうしても使いたかったなんて。思い出したくないことを思い出してしまった。

この技の解禁は、そんな思い出との決別だ。

「ふん。力の差があり過ぎたら、いい試合などできないだろう？ハンデだよ」

ちょっと強がってみる。「あの時、お前に負けたのは、本気じゃなかったからだ」と。

するとアキカはくすりと笑った。

「じゃ、今度は私とも本気で試合をしてくださいね？」
「望む所」

少しは気が解れたのだろうか？張り詰めていた空気が少し和らぐ。

「……頼りにしても、いいですか？」

今度のセリフは私も少し呆気に取られた。

「当たり前だ。私は頼りになる女だからな」

少し、アキカに認めてもらえたようで嬉しかった。

……まさか、私のフォローの意図が見抜かれたのか？それでこんな反応を返されたとしたのだったら、ちょっと悔しい。手放しで喜んでいいものか？

まぁ、アキカの顔に少しだけ余裕が戻ったのなら、私はそれでいいのだが。

「済さん、行きましょう！こんな姑息な罠なんて、私達の前にはゴミクズ同然！妹同盟の力で、愛すべき兄様達を救い出すのです！」
「いや、私は救世に其処まで愛情というものは……」
「いいから行きますよ！ほら！」

私はブラコンじゃないが……まぁ、いいだろう。

「ああ、とっとと片付けて、あのドジっ娘をからかってやるか！私が先に行くぞ、明華！」

「いいえ私が先に！」

私達は競うように階段を駆け上がる。

少しだけ、明華との距離が縮まったような気がした。

……後で救世の奴にもフォロー入れとこう。何か、兄の初恋の人を奪ってしまったようで申し訳ない。

一一一一

そこから私達の快進撃は始まる。

第四階層、『地獄迷宮ヘルゲートラビリンス（ダサイ）』。塔の一階層を丸々迷宮に作り変えた階層だ。

通路のあちこちに仕掛けられたトラップ。複雑に入り組んだ迷宮。

私と明華は二人で壁を蹴破りながら、階段へ。

第四階層突破！

第五階層、『堕天使の塔には血の雨漏りが降る』では、壁面に仕込まれた矢の一斉掃射。そして、徐々に迫り来る釣天井。

私は刀を一振りし、矢ごと纏めてその鎌風で発射口を両断。明華は魔法で生み出す光の盾で、迫る天井を押し戻す。

そして、一気に駆け抜けて、階段へ。

第五階層突破！

第六階層『恐怖の化身ハランカイザーZ』。十本腕の巨大ロボットが立ち塞がる！

左右五本ずつの腕を、私達は分担する。

右の五本、初撃の槍を刀でいなし、一番下の拳を握る腕を切り落とす。其処から槍を両断し、密着距離で槌、剣、銃を使えずにあたふたと腕を躍らせるハランカイザーZの胴に刀を通す。

左側では、全ての攻撃を鮮やかに受け流した明華が、奪い取った斧を私が刀を打ち込んだ高さに合わせてぶち込んでいた。

両サイドからの斬撃で、ハランカイザーは胴からぽきりと折れて、地面に沈む。

私は明華とハイタッチを交わし、更に階段を駆け上がる。

第六階層突破！

次第に、堕天使の声が震え上がっていく。

第七階層『魔界の地獄逝き底なし沼』。どろりと不気味な色をした液体が張り巡らされた階層。

明華が浮遊魔法で私を運び、沼から伸びる手を私が撃墜する。

難なく沼を渡りきり、階段へ。

第七階層突破！

第八階層『ダークネスディスティニーヘルドラゴンマスターＶＨＸ』。突破。

第九階層『アニマルパラダイス』。
可愛い猫や、可愛い犬がいっぱいいた。

私はヨークシャーテリアが大好きだ。ちっちゃくて可愛い。ずっと撫で撫でしていたい。あと猫はなんといってもスコティッシュフォールド！折れ曲がった耳がチャーミング！ころっとしててもう可愛い！
撫で撫ですると、とっても幸せな気持ちになる。わんちゃんねこちゃんも私に撫でられてとても幸せそうだった。ははは、こやつめ。

ここが一番恐ろしい階層だった。

私は泣く泣く明華に首根っこを掴まれて、次の階層に引き摺られていった。明華の馬鹿地力に抗えるはずもなく、私はみょんちゃんとコロ助と別れることになってしまった。

第九階層突破……

第十階層『グレートミキサー～星雲大回転～』。回転床が激しく周り、巨大なコマが駆け回る階層だ。

傷心の私は、回転床ごとコマをぶった斬った。

第十階層突破ァ！

第十一階層、『準備中』。突破！

そして、第十二階層。

其処には何もなかった。

中央にある大きなサークル。魔法陣のようなそのサークルだけが、印象的に佇んでいる。しかしそれは床の模様でしかなく、特別なものは何もない。十三階に至る階段さえも。

「どういうことだ？これ以上、上には上がれないのか？」

「いえ。恐らくはこの魔法陣ですね。少しだけ本で読みました。転送魔法、つまりはワープの魔法ですね。恐らくはこの魔法を起動させれば、最上階に到れるのでしょう」

成程。この魔法を解き明かすのが最後の試練か。

思えば今まで、様々な技能が必要な試練があった。

これほどの試練、確かに並大抵の人間には突破できないだろう。

それを突破してしまう、明華には感服である。やはりこいつは天才だ。私は本当に役に立てたのだろうか？

「済さん、ありがとうございます」

すると、私の表情をのぞき込んで、明華は微笑んだ。

「済さんの雑なフォローで、ちょっとだけ気が楽になりました。心配かけて、ごめんなさい。私なんかを、心配してくれる人が居るなんて、ちょっとだけ嬉しかったです」

ざ、雑なフォロー……？そんなに雑だったか……？

「い、いや。心配して当然だろう？仲間なんだからなっ！」

「……はい。ありがとうございます」

何がそんなに嬉しいのか？心配されることの、どこが？私の雑らしいフォローで明華は本当に気が晴れたのか？

よく分からなかったが、私はむぅと声を漏らして、（救世ならもっと可愛く声を漏らせるのだろうが。どうせ私は可愛い声出せませんよ）明華の肩に手を添えた。

「敬語はナシだ！私は堅苦しいのが好きじゃない！」

前々から明華の他人行儀な言葉使いは気になっていた。いや、本当は他人行儀でもないんだろうが、私は敬語とか嫌いである。目上には流石に私も気を遣うが、年下から敬語を使われるとこそばゆい。

「呼ぶ時は済！礼はありがとう！ですますは禁止だ！私を仲間と思ってくれるのなら、それが条件だ！」

「フォローが雑ですね……でも、ありがとう。済」

差し出された明華の手を握り返す。救世の時の勢いで、今までなあなあに付き合ってきた明華と、初めてきっちりと握手を交わした。

これで、私も明華の、ウスハの仲間となれたのだろうか？

初めて明華と戦った時から、私は……

いや、今は余計なことは考えるな。

必ず、帰ろう。元の世界へ。そうとだけ、誓う。

大した心変わりだと、私も自分が滑稽に思えてくる。

「じゃあ、起動させるね」

魔法陣の中央に立ち、私達は目を合わせて頷く。

「ああ、いつでもいいぞ」

「じゃあ、堕天使の元へ……」

卓越した魔法の技術。それにより明華が最後の関門をこじ開ける。

光に包まれた私達。

光が晴れたその先には、玉座に鎮座する男が待ち構えていた。

「……想像以上だ。褒めて遣わすぞ、天使共」

その声、間違いなく堕天使ハラン。

「だが漆黒の太陽は我に微笑んでいる……此処が貴様らの運命の終着駅だ……！……ブラックディスティニーターミナル」

デア・ピルゴスの頂上にて、私と明華、堕天使との戦闘が幕を開く。

ＥＰ２３：　デア・ピルゴス（後書き）

明華と済は、堕天使ハランと対峙する。二人の前に立ちはだかる、謎の男ハランその実力は？そしてデア・ピルゴスに不穏な影？

次回「天使の塔」に続く！

今回から、視点：〇〇という表記をなくして見ました。どれが誰の視点か分かりましたでしょうか？これまでの話の修正などもいずれはやる予定ですが、取り敢えずはこれからの話でだけ変更していきたいなと思っております。いいなと思ったご意見などは積極的に参考にさせていただきます。

今回は丸々、明華サイドのお話。デア・ピルゴスをサクサク攻略していきました。済は少し鈍い子なので、明華の本当の心情までは察せておりません。いつの間にかフォローキャラになっておりますねｗ堕天使ハランさん登場！その闇と光の力に恐怖しろ！次回、早速その実力が明らかに？

……救世は囚われのお姫様……いえ、王子様。二人の妹同盟に、救い出されちゃうのかな？救世は基本、治癒術以外はドン臭いのです。

ＥＰ２４：　天使の塔（前書き）

引き続き、明華サイドのお話です。薄葉の登場は、次回以降です！

ＥＰ２４：　天使の塔

右半身は白、左半身は黒、体に張り付くようなコートは襟が鋭く立ち上がっている。ポケットに手を突っ込み、左目を覆うようにぐるぐる巻きにされた薄汚れた包帯。十字架のペンダントをぶら下げた、その色々と強烈な男は、包帯に包まれた両手を翳す。

そして、その黒髪と黒い右瞳。伝承の天使に赦された、伝説の証。

「我が名はハラン。堕天使ハラン！天より舞い降りし天使にして、神に背く暗黒の支配者！」

左手を開いて手の甲をこちらに向けて顔の前に。右手は左の肘に当てての大股開き。なんだそのポーズは。

「暗黒を支配し、元より光から生まれた存在である我は、神から奪った無数の神器の力を操り、人間など足元にも及ばぬ、さらには天使さえも圧倒する力を得た！我が左腕、ダークネスアルティメットパーフェクトダークネスゴッドブレイクハンドは、その強力な禁忌の闇の力によって、触れた相手の体の中の魂を暴発させる！そう、つまり触れただけで相手は死ぬ！」

なんだ。その某ひとつぶ３００メートルのキャラメルの箱に書かれてる人みたいなポーズは。しかもなんだそのダークネスが二回被ってる変な左腕は。

「な、なんて恐ろしい左腕……済、左腕には気を付けて……！」

「……明華、お前、それ本気で言ってるのか？」

明華、これはあれだ。多分、ただのすごく痛い人だ。私は知っている。

「ほほう、そっちの女。我が左腕、ダークネスアルティメットパーフェクトダークネスゴットブレイクダークネスブレイクハンドの力を疑っているな？よかろう。だったら見せてやろう……真の絶望という名の……絶望を！」

「あれ？ダークネスアルティメットパーフェクトダークネスゴッドブレイクハンドじゃなかったんですか？」

「え？そうだが？」

「でもあなた今、ダークネスアルティメットパーフェクトダークネスゴットブレイクダークネスブレイクハンドって……」

「そう言っただろう？」

「あれ？でも本当はダークネスアルティメットパーフェクトダークネスゴッドブレイクハンドなんじゃ……？」

「お前はさっきから何を言っている？シャドーにとり憑かれたのか？」

「あれ？」

「お前ら、もう黙れ！」

こいつ、凄く面倒臭い奴だ！付き合ってたら日が暮れるタイプの！こんなのに構っている暇はない！とっととケリを着ける！

私は両の手で刀を握り、堕天使ハランを睨む。ハランはフンと鼻で笑うと、その左腕を前に翳した。

「来る気か？いいだろう。我が左腕の力、見せてやるッ！！」

左腕一本で何をするつもりかは分からないが……触れただけで殺すはハッタリだと思っていいだろう。何かしらの攻撃を仕掛けるつもりなのだろうが、こいつの言葉をまともに受け取って惑わされたら面倒だ！

私は付術により加速し、ハラン目掛けて突進する。その視線の動きから、奴が私のスピードを完全には捉えきれていない事を把握した。こいつ、そこまで大した相手じゃ……

「喰らえ……ブレイジングフレイムアースクラッシュファイアッ！！」

左腕をバン！とハランは地面に叩きつける。呪文の詠唱もなしに、意味の分からない技名を叫んで何をするつもりかは知らないが……

ゴウ！

奴の動きに気を取られたその瞬間、私の足元から突如強い熱が吹き上がる。地面から吹き出すのは炎。咄嗟に身を躱すが、その熱が僅かに私の肌を掠める。

「熱っ……！」

「済っ！」

幸い、炎の規模はそれほどでもなかった。しかし、思わぬ一撃に私も僅かながらダメージを負う。

まさか、呪文の詠唱もなしに、しかもあんな離れた位置から突然炎を発生させるなんて……そんな魔法、聞いたこともないぞ……！

「済、無闇に突っ込んじゃ駄目。あの左腕の危険性は分かってたでしょ！？」

「……いや、明華。それはちょっと違うんだが……確かに少し迂闊だった。すまない」

迂闊だった。相手も一応は堕天使。天使を名乗る者。しかも此処までの関門の中には、相当な戦力を持つロボットもあった。単純にそれを操る者と考えれば、それ以上の力を有していると考えるのが普通だろう。

「ハァーーーーッハッハッハァ！！よく躱したなぁッ！我が焦熱地獄、ブレイジングフレイムアースクラッシュファイアを！この技は、地獄に住まう魔獣、マグマドラゴンと契約を結び、地獄の炎を呼び出すという……」

話がいちいち長い……！面倒臭い……！

「明華、さっきの魔法、なんだか分かるか？」

「私も知らない……堕天使から、全くアルマの動きを感じ取れなかったの。きっとあれは既存の魔法じゃないと思う」

あいつオリジナルの魔法ということか？未だに長々とブレイジング何とかの解説を続けるふざけたポーズのハランを睨み、呼吸を整える。

しかし、こいつには妙な違和感を感じる。

「……そして、世界を焦土と化した大地を鎮めた英霊の力が、今は我に宿ったというわけだ！どうだ、我が力、これで思い知ったろう？」

「なんてことでしょう……そんな力が本当に……！」

明華は相変わらず間に受けている。しかし、私にはどうにもその言葉が胡散臭くしか聞こえない。いや、それ以上に、この言葉が気を散らせる。

「これで驚いて貰っては困るな！我が力は、こんなものではないぞ！！」

この言葉がいい加減鬱陶しくなってきた私は、一瞬、ほんの一瞬だけ、その言葉から耳を逸らす。

チャリン

そして私は、そのほんの一瞬の音を聞き取った。

「私だって負けるわけにはいきません！あなたの闇の力を、必ず乗り切ってみせる！」

「闇だけが、我の力と思うなよッ！！」

繰り返し取られる意味の分からないポーズ。それに合わせて、ハランが左手を再び地面に叩きつける。それに反応するように、明華が駆け出し、呪文を唱える。

しかし、明華の高速詠唱であっても間に合わないスピードで、突如としてアルマの反応が明華を取り囲むように浮かび上がる！

「自然よ精霊よ我が元に集いて舞い踊れ！エレメンタルフォースブラッディクロスッ！」

炎が燃え上がり、風が渦巻き、雷が轟き、氷柱が飛び出す。明華目掛けて、四方から全く別種類の魔法が襲いかかる！

「な！？」

詠唱もなしに、四種類もの魔法を起動させたハランに、明華も驚きを隠せないようだった。そのスピードに対応できず、詠唱を中断し、付術によりガードを固める。私も咄嗟に飛び出し、私が出来るサポートに取り掛かる。

氷柱を砕き、風は逆らうように剣の風圧でかき消し、炎を風の勢いで吹き飛ばし、雷を刀で受ける。それをイメージし加速するが、対処が間に合うのは氷柱と炎。明華の後ろから迫る氷柱を対処し、

その側に飛び込んで、炎を何とかかき消した後、雷を肩代わりする。

ジジ、と身を焦がすような熱さ。防ぎきれない風が、僅かに明華の腕に傷を付ける。

私も明華も、僅かに顔を歪めたが、それは大したダメージではなかった。しかし、まんまとハランの攻撃を受けてしまったのは事実。

「ほう。今のを防ぐか……だが、まだまだだッ！堕天使ハランの無限の魔導は６６６通りまであるぞッ！」

ハランが再びポーズを取る。左腕を高々と掲げ、右手を腰に当て、くいっと腰を持ち上げる。

「神羅万象を抱き、廻る世界で罪を償えッ！神に代わり下される鉄槌ッ！イリーガルゴッドハンズ！」

カチリ。

私は次から、奴の言葉とポーズに意識を向けないことにした。集中するのは、その背後に隠れるように響く小さな音。

ギギギ。軋むような音を立てながら、広間の隅々から人間の手が飛来する。拳を握った無数のロケットパンチだ。

「済！来た！」

「……」

私が睨むのは、ハランの表情。その顔は、対抗しようと動き出す明華を捉えて、狂喜の色に歪んでいた。

私は咄嗟に声を上げる。

「止めるな明華！」

私はぐっとその細い体を腕に抱えて跳躍する。そして、その飛び交う拳の間をすり抜け、明華を地面に放った。床を滑り、驚いた様子で、しかしそれでもすぐに体勢を立て直す明華。私は、体の全面に硬質化の付術を纏わせ、方向転換し向かい来る拳に刀を向ける。

数は九。その全てを、加速させた刀のひと振りで、ほぼ同時に撃墜する。

鋼鉄の拳。しかし付術により強化した刀と力は、それを豆腐のごとく両断する。しかし、問題はそこになかった。

「爆ぜろッ！」

ハランは狙っていたのだ。その拳が、撃ち落とされる、もしくは迎撃されることを。接触時に、拳から伝わるアルマの暴発。その九つの拳は、明華を守るように立ち塞がる私の前で爆発した。

ボッ！

それは小さな爆発。しかし、爆発により飛び散る金属片が飛び散り周囲に散乱する。その勢いある金属片攻撃が、付術で硬質化した私の体に突き刺さる。ガードは固めていたので、体に食い込むことはない。しかし、確かな痛みがその身に走る。

「ぐっ……！」

「済っ！！」

何とか油断しきっていた明華を襲う金属片は受け止めた。しかし、思いの外全身を守りきるイメージは難しく、僅かに付術によるアルマコントロールが行き届かなかった部分に傷を負う。

しかし、倒れる程のダメージではない……！

私が僅かに血を流す光景を目の当たりにし、声を上げる明華に構わず、私は短期決戦に移行しようと、付術の加速に意識を向ける。

しかし、それさえも手遅れ。

ちくりと背中に痛みが走る。

「見えざる封印の槍ッ！サンダーボルトクリアランスッ！」

油断した。油断しきっていた。こいつの特性は、こいつの性質は、全て理解した筈だったのに……！付術の意識を攻撃に回してしまった……ガードを忘れて、こいつの不意打ちを意識から外して……！

手足が突如、びりびりと痺れ始める。何故？理由は分かっている。背中を刺した感覚が原因だ。痺れ薬のようなものか？体を麻痺させる針？

駄目だ。考えても、体が動かなくなってきた。

どさりと、私は支えもないままに、その体をうつぶせに地面に横たえた。体を痙攣させ、手足を伸ばしたまま動けない。

「済っ！……くっ、堕天使……何をして……！」

駄目だ。明華。惑わされるな。そいつの挙動に。

気を高揚させ、付術を展開し、再びハランに攻撃を仕掛けようとする明華は、未だに気付いていない。伝えなきゃ。伝えなきゃ。でも、表情すら変えることを許されない。唇が震える。

「そいつはもう動けない。我が誇る裁きの雷。魂を束縛する拘束の槍、サンダーボルトクリアランスを突き立てた。見えない槍が、今、そこの女を拘束している！」

大げさなポージング、その挙動。それは全て、『本命』から相手の意識を逸らすためのフェイク。わざと声を大きく上げ、意味の分からない単語の羅列を叫ぶ。その異質な容姿も、全てが奴のトラップ。

「済を……離せッ！！」

そう。奴は確かに此処の階層に至るまで、付術を操る人形や、人を惑わす幻術、奇怪な魔法を披露してみせた。

私達はその万能性に着目すべきではなかった。

結局、此処まで至る間に見せつけられたのは、奴の『トラップ』であったことを意識すべきだったのだ。

「断る！天を包む結界よ、恵みを齎すカーテンよ、裁きを下す暗黒よ、この場に究極の恐怖を生み出したまえッ！究極魔法、ダークネスクラウドイリュージョンッ！」

手を回し、奇妙な挙動を見せるハラン。明華はその挙動に警戒を強める。詠唱をしていないのは、相手の動作に合わせて的確な対処を考えているからだろう。

それでは駄目だ……！

「ハァッ！！」

ハランが地面を強く踏み付ける！するとそこから吹き出したのは、周囲を覆い尽くすような白い煙。

「え、煙幕！？」

明華が一瞬、全くの予想外の攻撃に驚く。しかし、ただの目晦ましだ、と正面に構えるハランの姿を確認せずに、その気配を頼りに拳を振るう。

ぐっと明華の体が浮かび上がった。

そして、その体は、勢い余ってゴロゴロと床を転がる。短い悲鳴を上げる明華、それは本人にとっても予想外の事だったのだろう。

僅かにその動きにより起こった空気の流れで、白い煙幕が浮かび上がる。

足元に仕掛けられたのはピンと貼られたロープ。明華は、付術による加速状態のまま、あれに足を引っ掛けて、勢い良く転倒したのだ。

煙幕は目晦まし。その足元に『最初から』仕掛けられていた、ロープを隠し、そのスピードを逆手に取るための布石。

明華はかなりのスピードで地面に叩きつけられた。あの明華が、思わず呻き声を上げるほどの衝撃。それは、ハランの予想外の魔法に警戒した故に、完全に不意を打たれたために受けたダメージ。

「う……ぐ……っ！」

明華が顔を顰めながらもゆっくりと立ち上がる。しかし、そのとき、晴れてきた白煙の中、明華に状況の把握をさせないかのように、息をつく間も与えないように、包帯を巻きつけた右腕を抱えながらハランは演技じみた叫びを上げる。

「お、おおおおおおおおおおおお！我が右腕が唸っている！？天使を殺せと叫んでいる！？お、おおおお、右腕に封印した、我が最強にして最悪にして、天界を転覆させるとして禁忌の術と恐れられた、伝説の大魔導、『シャイニングパーフェクトダークネス』が暴れているッ！！抑えきれぬこの衝動！ついに解放する時が来たのか……！？天使共！死にたくなければここから逃げるんだな！我でも制御できぬ最強の力が、今、目覚めようとしているッ！！」

明華……耳を貸すな……！そいつの言動は全てハッタリだ……！
こいつは最初から

『この部屋にあらかじめ用意されたトラップを、上手く利用しているだけ』……！

そして、その『取って置き』の『フリ』をしている右腕は、ただのフェイク！

「……済を置いて逃げられるか！……それに、最強の魔導ですか……是非とも見せて貰いたいな……！きちんと破って、私のものにしてやるから……！」

駄目だ。駄目だ……！

「強がりを……本当に知らんぞッ！！うおおおおおお！目覚めるッ！目覚めるぞッ！我が最強魔導、『シャイニングパーフェクトダークネス』がッ！！……其処まで見たいのなら、『刮目して』見るがいい……貴様如きには、見抜くこともできまいからなッ！」

その言葉は、『その魔法に視線を向けさせる』為の撒き餌。ハランの戦闘を理解した途端に、それが手に取るように分かる。
見ちゃいけない。恐らくはその魔法は……！

明華はアルマをその目に集中させる。それは目の保護ではない。
視力の強化。見抜くこともできないかもしれない強力な、得体の知れぬ魔法を見抜くための『よく見える目』。

やめろ……それは……！

「暴発するぞ！『シャイニングパーフェクトダークネス』ッ！！！」

明華はその魔法にいつでも対応できるように、強力な視力で、付術による回避を意識しながら右腕に集中した。

包帯がするりと解け、そこから放たれたのは……

カッ！！！！！

強烈な『閃光』。まさかの閃光弾。

その普通に目を合わせるだけでも視界を防ぐ強力な光は、それを凝視する明華の目には、どれ程の威力になったのだろうか？

「あああああああッ！」

目を抑え、悲鳴を上げる明華。それに追い打ちを掛けるように、ハランは懐に忍ばせていたボールを取り出す。

「これで終わりだ。『ヘルビーストデスハウリングマークツー』」

静かに、囁くようにハランはボールを放った後、きゅっと耳に何かを詰めた。

明華はやはり優秀で、涙滲む目をうっすらと開きながら、なおも立ち上がる。そして、その囁くようなハランの声に耳を傾け……

パァンッッ！！！！！

その傾けた耳元で、その黒いボールは強烈な、私が受け止めた拳の爆音とは比にならない規模の爆音を響かせた。爆風も爆炎も巻き起こらない、『音』だけの爆弾。

離れている私でさえも、耳に痛みを、体に衝撃を感じるそれを間近で受けた明華は、ふらりとよろめきそのまま地面に倒れた。

まだ、動きはする。まだ立ち上がろうとする。しかし、ふらふらとよろめき立てない明華。それ目掛けて、ハランは次こそ止めと言わんばかりに、床に仕込まれたスイッチを踏みつけた。

ばさりと奇妙な網が放たれ、明華の上に覆いかぶさる。それはピッタリとその体を押さえつけるように、わずかな動きさえも封じ込める。

「もう動けまい。それは吸着網と呼ばれるマジックグッズだ。捕らえた対象にまとわりつき、動きを封じる。引く力にも強いその網は、素手では決して引きちぎれず、切って逃れるしかない代物だ」

「あ……う……」

ハランは次に、私の側に歩み寄る。そして、私の側に転がる刀を奪い取り、私の傍の床をぐっと踏みつけた。すると、明華を封じた網と、同じ網が私の上にも覆い被さる。

「お前は体が痺れて動けないだろうが……保険だ」

ハランはまるで別人のようだった。冷酷な視線を私に落とし、首元のペンダントを弄りながら、にやりと笑う。

「は、はは……ハァーーーッハッハッハァッ!!見たかッ!?こ

れが俺の力だッ！！お前ら天使も、遂に、遂に……！！証明したぞッ！貴様ら天使にも！俺の力が通用することを！！」

口調が変わる。これが、この男、堕天使ハランの本当の顔。

ハランはその右目を見開き、私と明華を見下しながら、高らかに笑う。

「ハァーーッハッハッハァッ！！『オラクル』の回し者めッ！愚かに命令に従い、その自分勝手な力を振るう天使共めッ！見たかッ！貴様らを潰した今ッ！次は此方が動く番だッ！オラクルを潰しッ！俺達は平穏を取り戻すッ！」

体は未だに動かない。しかし、ようやく声だけは、出せるようになった私はその言葉に疑問の意を示した。

「オラ……クル……？」

私の疑問の意、それをハランは聞き取ったようだった。

「……何？……お前……何を聞いている……？」

ハランの表情に、次第に焦燥の色が浮かぶ。

「馬鹿なっ……！貴様ら、まさか……オラクルとは関係の無い、天使なのか……!?」

「なん……だ……その……オラクルと……いうのは……？」

ハランの表情は一気に絶望の色に染まる。

「馬鹿な……じゃあ……これは全くの……！」

「何話してるのかしら？オラクルの天使って……それ、私達の事でしょう？」

それはとても冷たく、怖い声だった。

そして、それは一瞬で、ハランの表情を凍りつかせる。

「まさか……貴様……！」

「何？その化け物でも見るみたいな目は？失礼しちゃう。乙女に向かって……！」

「レイラ、余計なおしゃべりはやめよう。この部屋、相当な数の罠が仕掛けてあるよ。手早く、安全に仕事を終えないと」
「……ああん、もううるさいわ！別にどうでもいいじゃない！」

いつの間にか、その二人はそこに居た。

一人は薄汚れた水色のワンピースに身を包み、腰あたりまで伸ばした黒髪を靡かせ、怪しくその黒い瞳を輝かせる少女。
もう一人は……黒髪黒目、何処かその少女と似た印象を与える、何処かの高校のブレザー制服姿の少年。

全く気配も感じさせず、なんの脈絡もなく現れたその二人に、ハランが向けるのは怯えた視線。

いや、今更気付いた。少しだけ、弱くはあったものの、その目は私達が此処に来た時にも向けられていたものだ。ハランの目は、最初から恐怖を強く秘めていたのだ。そして、それは此処にきて、隠すことなくむき出しになる。

「……あら？愚図。なんでか黒髪が三人も居るのだけれど？」
「あれ？依頼だと確か……堕天使とかいう人を一人、連れてくる、もしくは倒しちゃえばよかったんだよね？確か、堕天使の妹はどこかの村に居るそうだから……一人じゃないとおかしいよ」

妹。その言葉を聞いた途端に、ハランは地面をダン！と踏み鳴らした。すると、周囲から矢が飛び出し、二人の黒髪の少年少女に襲いかかる。

パキパキッ！

数本の矢は、全て少女に命中する。そして、虚しくへし折れた。

「な……！？」

「あれ？今、蚊に刺されたかも？」

「レイラ、矢が当たってたよ。いくら効かないからって……周りには気を付けなよ？」

「うるっさいッ！！別にいいでしょ！？あんたみたいな愚図と違って、こっちは大丈夫なのよ！」

ギャーギャーと少女に怒鳴り散らされ、少年は頭を低くする。そして、すっかり口を結んでしまった。

「なんなんだ……お前達は……！」

私は声を振り絞り、その異様な二人を睨みつける。すると、少女はにこやかにこちらを見下した。

「はぁ～い、ご機嫌麗しゅう！私、月島麗羅（ツキシマレイラ）！伝承の天使の妹よ♪」

「僕は月島流河（ツキシマルカ）と申します。今日は僕達、『オラクル』から正式な依頼を受けて、此処に参りました」

軽い感じの女レイラに、礼儀正しさを感じさせる男ルカ。『オラクル』の使いを名乗る二人の伝承の天使らしき兄妹は、その異質な空気を纏いながらデア・ピルゴス最上階の空気を支配する。

ルカはともかく、レイラからは、私でもその『異質さ』が感じ取れた。見た目は普通。しかし、何か恐ろしいものを漂わせている。そんな印象を与える少女。

レイラはぐるりとその場に居る三人の天使を見渡す。

「う～ん。伝承の天使の兄、だよねぇ？だったら、其処で立ってるボンクラかぁ……そこで転がってるイケメン君？」

「私は……女だ」

「えええええ！？勿体な～い！あなた、不幸ねぇ。そんなに男前な顔を持って、女の子だなんて。羨ましいわぁ……」

「レイラ、ヨダレ」

「じゅるり……ま、其処まで不幸でもないかしら？女の子としても可愛い顔に見えるしねぇ……やっぱり不細工な私のほうがずぅっと不幸よね♪」

不細工？そうは見えないが……

レイラは比較的整った顔立ちに見える。化粧を全くしていないにも関わらず、きめ細かくつるりとした肌。整った目鼻筋。明らかに容姿では不自由を感じていないような顔だ。

嫌味か？

いや、今はそんなことはどうでもいい。一体この状況はなんなのか？もしかしたら、これはかなりまずい状況じゃないのか？私は未

だに起こせない体を奮い立たせようと力を込め続ける。

「レイラ。早く済ませよう。堕天使を連れてこい、だからこの人を連れていけばいいんだよね？」

堕天使を連れていく。それがこいつらの目的？そもそもオラクルとはなんなのか？堕天使になんの用があるというのか？わからない。何も。

そして、これは堕天使だけの問題なのだろうか？

私の不安は、思わぬ形で的中する。

レイラは冷めた表情で、凍りつくハランを見つめる。

「……こいつ、とっても、とってもクズの臭いがするわ。私、クズは大っ嫌いなのよねぇ？」

「レイラ。これ、仕事だから。契約守らないとご飯食べていけないよ？」

「いいじゃない！飢えに苦しみ、街をさまよう哀れな少女！なにかめぐんでください……掠れた声で物乞いする私に、人々は石を投げつけるの！飢えて、身も心も凍りついてしまった私……ああ、なんて可哀想！不幸、不幸、不幸だわっ！！」

「石なんてぶつけられてもレイラはなんともないでしょ」

「……黙れ、愚図」

この女、気持ち悪い……なんなんだ？さっきからやたらと不幸不幸と……

「あ、ごめんなさい。レイラは強烈な不幸フェチでして……自分を痛めつけるのが大好きな、マゾヒストなんです」

「マゾじゃないわよ！誰だって、不幸なシンデレラには憧れるものでしょ？人は不幸の中でこそ、最高に輝くのよ！」

「……レイラ」

「なによ、その可哀想な子を見るみたいな目……興奮するじゃないッ！！」

またきついのが出てきたな……不幸フェチってなんなんだ？

変態妹と苦労人の兄、その二人の伝承の天使を、私は少し見くびっていた。

それをすぐに、私は思い知らされる。

それは、不幸フェチの変態、レイラの一言から始まった。

「ま、とにかくこんなクズを持って帰らなくてもいいんじゃない？」

「え？なんで？駄目だよ！」

突如現れた伝承の天使、その突然の思いつきが、私達が巻き込まれる、ズィスィの悪夢の始まりだった。

「こんなクズよりも、もっといいものが落ちてるじゃないの」

レイラはにっこりと微笑み、それをゆっくりと指さした。

ＥＰ２４：　天使の塔（後書き）

堕天使ハランの手により、惑わされながら敗北を喫する明華と済。
そんな彼女達の元に現れた新たなる伝承の天使。ハランの秘めたる秘密とは？そして、天使レイラの意外な動きが、ズィスィに根付く深い闇を掘り起こす？

色々と急展開。此処からが、本当の三章ズィスィ編のスタートです。
それは薄葉の魔女との遭遇、そして明華の初めての敗北から始まります。新たな伝承の天使、レイラとルカの登場により、天使の伝承が大きく動いていくことでしょう。鍵を握るのは堕天使ハラン？
急展開続くズィスィ編、お楽しみいただければ光栄です。

ＥＰ２５：　天使、羽撃く（前書き）

薄葉サイドになります。

EP25：天使、羽撃く

昔を少し思い出していた。

ゆっくりと体を動かし、山田さんの教える構えを真似する。

本当にこんな動きに意味があるのか、と思い始めた頃だったか。

山田さんの奇妙な動きを真似する俺を、明華は楽しそうに見ていた。

いつからだろうか？あいつが楽しそうにその光景を眺めていたのは。

――――

はっとして、地面にダイブする。

俺の頭上を、長く伸びる腕が通る。ブオンと風の音が響き、俺の背筋を凍りつかせる。

「や、やめろって！ミュゲ！洒落になってないぞ！」

「シャレ？なにそれ？」

「うわお！」

首を傾げるミュゲの下で、謎の生物とらちゃんが拳を振るう。

とらちゃんの動きは相当に速かった。うねうねと気味の悪い動きをしながら、その拳を薙ぎ払うように振るう。しかし、その振り回すような大振りな動作は、俺が転げまわるように逃げ回るだけで意外と回避できる。

とはいえ全てを避けきるのは流石に困難で……

「えーい！」

「うごっ！？」

腹に再び突き刺さるとらちゃんのしなるパンチ。地味に痛い。超痛い。

デカい動物のじゃれ合いは洒落にならない、という意味がよく分かる。無邪気な子供のお遊びでも、下手したら死んでまう……！

「ウスハー！けいこしよーよー！」

クリーム色の髪を揺らしながら、とらちゃんの頭をゆさゆさ揺さぶるミュゲ。いやいや、冗談じゃないって。なんでそんな化け物と

遊ばなきゃいけないんだって。大体そのとらちゃんってなんだよ！

「あんた……弱いねぇ。少しくらいは反撃したら？」

「無理ですって！そもそもとらちゃんってなんなんですか！」

「ミュゲの作った自立起動型魔具。あたしも初めて見たときは正直びっくりしたけどね。だって、この子、あたしの作業を小さい頃から見てきて、見よう見まねで完成させちゃうんだもん」

「なにこの子怖い！」

「それー！」

ミュゲの掛け声と共に、とらちゃんが地面を蹴り上げて、高く跳ね上がる！片足をつり上げ、その踵（踵なのか？）を振り下ろすように、そのまま落下する。

俺はジャンプし緊急回避。ズドン！と短い音と共に、地面がベコリと窪みをつくる。そこから広がるヒビを見て、ぞわり背筋を嫌な感覚が走る。

「死ぬ！殺される！ちょっとミュゲ！落ち着け！もっと面白い遊びをしてやるから！」

「え～？ウスハのうねうねもう一回見たいのにー！」

「うねうねってだから何だよ……！？」

「うりゃりゃー！」

既に周囲には家の前で座ってにやにやとその様子を眺めるアヤメさんしか居ない。周りの人々は、「またミュゲが暴れてる！」と叫びながら逃げ出してしまった。日常茶飯事か！

ミュゲの言う『ウスハのうねうね』。その気味の悪いガクガク震えるような動きでとらちゃんが踊る。起動の構えこそ、暗中無心拳そっくりだったが……

……そこで、一つ、気付く。

とらちゃんがうねうね動きながら振るう手刀、それが偶々目に入る。そして、それは見覚えのある動作だった。

そう。暗中無心拳。その動作の一つ。

気のせいか？しかし、最初の独特の構えは、偶然作られるものなのか？

見覚えのある手刀を何とか横に飛び退き躱し、地面に転がりながら、追撃に目をやる。

その微妙に遅い突きも。

一発腹にもらう。痛い。しかし、歯を食いしばり、なおもその動作に睨みを利かせる。

その足を振り回すだけのような蹴りも。

何とかその鞭のひと振りのような足を後ろに倒れ込むように躱す。

突き飛ばすように伸ばす両の手も。

立ち上がろうとしたところに、顔面を押しつぶすように、地面に叩きつけられる。

そこから追い打ちをかけるように飛び上がり踵を振り下ろす動作も。

横に転がり、何とかその一撃を避ける。

奇妙な動きが入り雑じり、奇怪で不気味な動きに見えるが、その動作のパーツ一つ一つが、俺が山田さんから習った「わたしがかんがえたさいきょうのぶじゅつ」、暗中無心拳に酷似する。

それが理解できたとたんに、立ち上がりざまに飛んできた裏拳の、軌道が頭の中に浮かび上がる。

体勢を前に崩し、前進するようにとらちゃんの懐に飛び込む。

「あれ？」

とらちゃんの上のミュゲがきょろきょろと周囲を見渡す。どうやらとらちゃんの動きを操っているのはミュゲのようだ。ミュゲの死角であるとらちゃんの股下を転がるようにくぐり抜け、俺はとらちゃんの背後に立つ。

そう。間違いない。これは暗中無心拳の動作の単純な複合だ。使い物にならない筈の、ふざけた鈍い動作がパズルのように組み合わさっている。

とらちゃんを操るのはミュゲ。ミュゲが語る「ウスハのうねうね」。そして、そこから見える暗中無心拳の動作。

此処まで来たら、俺でも分かる。

俺は、知らない間に暗中無心拳を使っていた。

そう考えるほかないだろう。

俺の中にはもう一人の俺が眠っていて、それが俺の知らない間に目を覚まし、俺の代わりに戦っていたんだぜ！

まさか、こんな少年誌の主人公みたいな設定が、普通な凡夫の俺にあるとでも？

「冗談きついぜ全く……」

だったら、明華が惚れ込んでいた俺というのは、もう一人の俺？

いやいや、まさか、そんなはず……

そうだ。暗中無心拳を教わってたのは俺だろうが。俺以外に誰が

使う？

『私の暗中無心拳、引き継げるのは君一人ですよ』

山田さんの言葉を思い出す。そう、思い出す。

思い出せ。思い出せ。

俺の中で何かが騒ぐ。もう一人の俺とかいうものじゃない。記憶の奥底で眠っている何かが。

思い出せ。思い出せ。

『もしも、君が何か自分の中にある違和感に気付いたとき、是非とも思い出して欲しい』

そうだ。山田さんは言っていた。いつか君の中で暗中無心に違和感が生じる。その時は思い出して欲しい。

何を？

『怖がるんだ。強がらなくていい。殴られれば誰でも痛いし、傷付けられるのは誰でも怖い』

とらちゃんがぐるんとこちらを振り向く。ミュゲが楽しそうに笑っている。

遊んでいる気分なのだろうが冗談ではない。こっちは命懸けだっつーの。

あのとらちゃんとかいう化け物が怖い。そう、怖い。

『それが普通。普通であることが、一番素晴らしいことなんです』

普通。山田さんは常々言っていた。普通であれ、と。

その先だ。その先に何かもっと重要な事を言っていた筈だ。

『君のような可愛い妹がいる人間は、本気で死ねばいいと思ってる』

あれれ～、ヤマダサーン？

『いいなぁ。妹とかいいなぁ』

おっかしいぞ～？

『いいかい？私はノーマルだ。ロリコンじゃない。だが、私は子供でもいいと思っている』

何故、急にこんなに変なことばっかり思い出してくるのかな？俺、もしかしてヤバい人とずっと付き合ってたりした？

『お兄さん。妹さんを僕に下さい』

絶対にヤバイ人だあの人。ノーマルなんかじゃない変態さんだ。

『明華ちゃんの言うことは、ちゃんと信じてあげなきゃ駄目ですよ？』

あのおっさん、明華を狙ってやがったのか？やべぇ、やべぇよ……

……いや？違う。

やたらとあのおっさんは、明華の事を話していた……

『明華ちゃんの言うことは、ちゃんと信じてあげなきゃ駄目ですよ？』

その言葉がやたらと耳に響く。

言うこと？

『兄様は本当は凄いんです！』

頬りに言われたあの言葉。嫌味にしか聞こえなかったその言葉。

あいつは、明華は何を見ていたのか？

「……知るかっての、ったく」

今になって何ができるとも思わないが……俺は、「いっけ～！」と無邪気にはしゃぐミュゲを前に、じっと迫る拳を見つめ、自らの中にある何かを思い出そうとしてみた。

これで嘘だったら、一生恨むぞ明華……！

一一一一

「元気にしてますかね～、明華ちゃんと薄葉君」

男は卓袱台の上の湯呑に手を伸ばし、ずずと中身のコーヒーを啜ると、ふぅと一息深く息をはいた。

男の愛弟子と、その可愛い妹が、行方不明になったという話は大分前の話である。しかし、男は全くと言っていいほど心配などしていなかった。

明華という可愛らしい少女が、とても優れた人間であることは彼でも知っていた。そして、その兄は、自分が手塩に掛けて育て上げた最高の逸材。それなりに物事を普通に捉えるその男は、普通に自分が強い事も知っていた。そして、自分が育てた弟子が、自分以上の存在であることも知っていた。

「なんだか今日あたり、薄葉君がちょこっと強くなる、そんな気がするんですが……明華ちゃんの言葉、ちゃんと信じてあげたんでしょうか？」

男はあくまで呑気である。そして普通に勘がいい。

「あ、茶柱……いや、これコーヒー……何が浮いてるんでしょうか？」

そして男はすっかり弟子とその妹の事を忘れてしまった。

「……縁起がいいですねぇ……いや、これゴミだ。うわぁ……」

普通のおっさんの、どうでもいい日常である。

――

俺は目の前に迫る拳を、反射的に手で遮ろうとした。するりと自然に腕が動く。その腕は、軽やかにその長い腕を振り払い、後ろへと受け流す。

体が勝手に動いてる？

そしてその動きは、俺もよく知る暗中無心拳、防御の型その壱。

「……暗中無心『ゴキブリ払い』」

「なんだそれ！？」

アヤメさんに突っ込まれた。いや、俺だって分からないのである。だって山田さんが「この技はゴキブリが目の前に飛んできたのを追い払うように必死で手を振る防御技なんですよ！」と言っていたからである。

「ウスハすごーい！」

とらちゃんが崩したバランスを立て直し、こちらを振り向き両腕を上げる。その上で、同じように両腕を上げて、ミュゲはきゃっきゃと楽しそうに笑った。

「あんちゅーむしんごきぶりはらいたー！」

とらちゃんがぶんぶんと目の前で手を振り回す。やっぱり遊んでるんだな～。でも、その遊びで殺されかけるのはどうかと思う。

これで満足しただろうか？そう思ってほっと俺は一息……

「ごきぶりはらいたー！」

と思った馬鹿だった！手を振り回しながらミュゲの操るとらちゃんが駆けてくる！

「そういう使い方じゃないって！」

「しにさらせわれー！」

死に晒せ我ェ！？なんて恐ろしい言葉を吐いてるんですかこの子！アヤメさんの悪い影響が！？

「だぁれが悪い影響だって？」
「ごめんなさい！二対一とかマジ勘弁！」

とらちゃんの振り回す腕。そんな薙ぎ払うような動きには、『ゴキブリ払い』は使えない！頭が飛ばされる！

こんなときは……？

咄嗟の思いつきで体を前に倒す。

なんだ？体が覚えてる？

地面に這い蹲るように、腰だけを上げたとてつもなく情けない格好で、俺はその攻撃をするりと躱す。

教えは「深々と頭を垂れて、相手に誠意を見せるように！」

「暗中無心『渾身土下座』！」
「ドゲザー！」

からの……！

「『芋虫スライド』ォッ！！」

教えは「腰を伸ばす勢いで、芋虫のように体をうねらせて！」

曲がった腰を伸ばすように、足で思い切り地面を蹴る！そして地面をピンと背筋を伸ばした状態でのスライドダッシュ！まさに、人間魚雷！

……あれ？俺、こんなに脚力強かったっけ？

ゴォォォォォンッ！！

思いの外加速した人間魚雷が、とらちゃんの左足に直撃する！予想外の頭突き特攻である！

俺の頭頂部から体に向けて衝撃が走る！

「痛えええええええええッ！！」

鉄のように硬いぞこの足！頭がッ！頭がぁぁぁぁぁッ！！

頭を抱え転げまわる俺。その目の前で、意外な声が響く。

「あわ、あわわわわわっ！」

ミュゲが慌てふためく声。片足をガクつかせ、とらちゃんがよろよろとよろめいている！え？今ので？

……俺の頭突きＳＵＧＥＥＥＥＥ！

俺はすかさず立ち上がる！頭がめっちゃ痛い！だが、今がとらちゃんを封じ込めるチャンスだ！

「うおらあああ！」

急げ！急げ！相手を押し倒す技！相手を押し倒す技！そんなのあったっけ？あわわわわ！もうなんでもいいや！なるようになりやがれぇぇぇ！

右足一本でよろめくとらちゃんの右足に、俺は腕を振りかぶり……

「『なんでやねん掌』おおおおおおッ！！」

教えは「お笑いのツッコミのように腕を手の甲を向けて思い切り振り抜くんです！」

なんでこの技をチョイスした、俺！？まさに自分になんでやねん掌！

しかし、俺の全力で振り抜いたなんでやねん掌……平手の裏拳は、メキメキと音を立てて、想像以上の力を見せる。

固い足に俺の手の甲が当たる！絶対痛いだろこれ！そう思っていた俺の手の甲は、するりと足の棒をすり抜けた。

あれ？外した？

しかし、とらちゃんの体はよろりとよろめき傾き出す。

なんでやねん掌の当たった足を俺は見た。

まるで達磨落としのように、その足はぴったり手の甲の幅分だけくり抜かれていた。足はそこからへし折れていた。

カーン！という音。釣られて見れば、壁面にぶつかり、からんからんと床に落ちる金属片。とらちゃんの足から欠落した一部分。

なんでやねん掌が……金属をぶち抜いた……だと……！？

師匠……これ……！

ツッコミに使ったら、人、死にますやん……！

ガッシャーーーンッ!!

とらちゃんが大転倒する!俺は、この危機を、切り抜けたのか…
…!?

……あれ?そういえばとらちゃんの上に、ミュゲ乗ってなかったか?

アヤメさんも唖然としている。俺の血の気がさーっと引いた。

「ミュ、ミュゲぇぇぇぇぇッ!?」
「ミュゲッ!大丈夫!?」

俺は慌てて倒れたとらちゃんの向こうに居るミュゲに駆け寄る。
アヤメさんも慌てて駆けてくる。

地面にうつぶせに横たわるミュゲ。背筋が凍りついた。

「ウスハー！」

と思ったら勢い良く飛び上がり、俺に飛びついてくるミュゲ！

「うお！びっくりした！ってミュゲ！お前、怪我ないか！？」

「ないよ！」

一応、小さい体を遠ざける。服はドロドロ、顔もドロドロだが、怪我は特段無いみたいだ。ほっと一息ついて、俺が胸をなで下ろすと、ミュゲは再び俺に飛びつく。

「やっぱりウスハ強ーい！とらちゃんが負けちゃった！とらちゃん今まで負けたことないのに！」

負けたことないって……というか、あんな化け物を、俺が本当に倒したのか？手の甲にじわりと残る僅かな感覚。俺は自分のその手をじっと見つめる。

あんな力が出るなんて……信じられなかった。

ぐっと手を握り、俺はなんとも言えない感情に浸る。

俺でも、戦えるのか？何かが、出来るのか？

『兄様なら大丈夫です！』

そして、思い出す明華の言葉。

あいつが言っていた事は本当だった……のか？俺は今までも、知らないうちにこうして敵を？

目を輝かせて俺を見る、明華の姿を思い出す。

それと同時に、俺が全てを拒むように突き放した時の、あいつの少し寂しげな表情を思い出す。

「ウスハ大好き！だって格好いいんだもん！」

ぎゅっと抱きついてくる、ミュゲ。その眩しい笑顔を見下ろす。羨望の眼差しが明華とかぶる。

俺が、格好いい？

勝手な劣等感で、あいつの言葉を無視し続けてきた。勝手な思い込みで、あいつを嫌ってきた。あいつがどんな妹なのか、分かっていた筈なのに、目を逸らしてきた。

あいつはずっと、劣等感を抱いていた俺を励ましてきたのに。周りから冷たい目で見られても、俺の凄さをずっと訴え続けてきたのに。

あいつは知ってたんだ。俺の本当の事。だから、俺を慕ってたんだ。

そして俺がそれに気付かず、それを勝手に嫌味ととって、俺があいつを嫌っていても、あいつはめげずに俺に訴えかけてくれたんだ。

『兄様は本当は凄いんです！』

心からの言葉だと、俺には分かっていた筈なのに。どうしても信じられなかった。

あいつが俺が知らない間に戦っていると教えてくれていたら？どうせ俺は鼻で笑って否定していた。

何処が格好いいんだよ……劣等感？違う。勝手に捻くれて、自分を貶めていたのは俺じゃないか。

あいつはあんなに俺を信じてくれていたのに。

「ウスハ？どうしたの？」

「……いや。なんでもない」

謝らないと。

俺が特別何かができる人間だとは思わない。明華に大きく劣るダメ兄貴だとはわかってる。

でも、明華が凄いと言ってくれた俺は確かにいて。その言葉を嘘だと決めつけて。勝手に嫌味と受け取っていた馬鹿な俺は、そんなあいつの憧れる俺ではないけれど。

せめて謝らないと。あいつの想いを否定してきた事を。遠ざけてきた事を。

「何？急に凛々しい顔しちゃって？……言っとくけど、あたしはミュゲとの結婚は認めないよ？」

「アヤメさん。俺、ちょっと戻りますわ。カサロラインへの出方、教えてもらえます？」

「え？あ、ああ。それはいいけど……あんた一体どうした？あたしを連れていかなくてもいいのか？」

そりゃあ、なぁ……いくら自分の持ってる力が見え隠れしてきたところで、突然自信がつくわけないでしょうに。今だってまだ手が震えてるぞ。それに化け物見つけてビビらず飛びかかれるほどに、勇気がついたとも思えない。

「これは俺の問題ですから」

だけど、あいつの信じてくれている俺は確かにいた訳で。言葉で謝るだけじゃあ、きっとそれは許されないんだ。

少しでも、あいつの想う兄に近付く。

だから、せめて、あいつを少しは助けられるくらいの、あいつの賞賛に負けないくらいの、兄らしい兄にくらいはならないと。

あいつがこっちにきてから、ずっと必死に頑張ってきた事は知っていた。無理して人より多く自分の身を削っていた事も知っていた。

あいつだからそれは楽？そんなことはない。

無理する奴なんだ。昔から。強がって、強がって、いつでも、いつでも。俺は知っている。

そういえば、あの時からだったっけ？あいつが俺に、羨望の目を向け出したのは……

「え～～～！ウスハー！行っちゃうの！？やだ！」
「ごめんなミュゲ。俺、やらなきゃいけないことがあるんだ」

重なる。昔の明華と。

「じゃあミュゲも一緒に行く！はねむーん！二人で結婚式をあげるの！」
「ははは……いや、それはちょっとなぁ……」

俺はしがみつくミュゲを離し、ぽんと頭を撫でてやる。

「また来るからさ。我慢だ我慢。それまでいい子に大人しくしてたら……また遊んでやるから」
「う～～～……」

不満そうに、少し涙目でミュゲは口を尖らせた。そのクリーム色の髪の毛を、わしわしと俺は掻き回す。すると、ミュゲはむすっとした表情で、ぼそりと呟いた。

「……絶対また来てね？」
「おう。今度は俺の友達も連れてきてやらぁ！」
「ウスハの友達？」
「滅茶苦茶強いぞー！」
「めちゃくちゃ！？めちゃくちゃー！」

ミュゲが両腕を上げて、声を上げる。どうやら、これ以上駄々を捏ねることはなさそうだ。

俺とミュゲの様子に、アヤメさんは特別嫌悪の視線を送ることなく、むしろ微笑ましそうな表情で、その黒髪を揺らす。

「……全く。伝承の天使ねぇ……随分と、噂と違うじゃない」
「え？アヤメさん？何か？」
「いや。なんでも。……今すぐ出る気なの？」
「出来るだけ急ぎたいんです。心配かけられないから……」
「分かったよ。すぐに案内してやるさ。……また来なよ。その友達やら、妹も連れてさ」
「はい！……あれ？俺、妹いるって言いましたっけ？」

俺はふと抱いた疑問をアヤメさんに投げかけた。

その時、優しく微笑むアヤメさんのその後ろに、空から黒い何かが舞い降りた。

俺は何が起きたのか、全く理解が出来なかった。

「……見っけ♪」

ぐるりと、アヤメさんの腕を押さえつけるように、細長い何かが腕ごとその体に巻き付く！

「な……！？」

「黒髪、黒目の女……オッケー♪パーペキ♪これで任務カンリョー！」

驚き、表情を凍りつかせるアヤメさん。その体に巻き付くのは黒い髪の毛。

髪の毛でその体をぐいと持ち上げ、その女は不気味に微笑んだ。

「あれ？黒髪がもう一匹いるぅ？なんでぇ？」

「きっとあれだな。レイラさんが連れ帰ったっていう天使の女の子がいたじゃん？その子の兄貴なんじゃねーの？」

「ありま♪でも、任務はこっちの堕天使の妹で十分っしょ♪」

「だな。あっちの黒髪、まるで強いアルマを感じねーし。構うだけ

むだっしょ」

黒い足元まであろうかという長髪。そして、背中からは巨大な黒い翼を生やした、ラフな格好の女の子。

その後ろから、一人の男が顔をのぞかせる。黒髪をつんつんと逆立て、鋭い視線をこちらに向ける、鼻ピアスの男。

その異質な二人を前にして、俺はしかしこいつらの発した『天使の女の子』という言葉に引っかかった。

「なんだお前らは!?天使の女の子ってなんの……」

「あー、面倒臭ぇ。雑魚相手じゃ俺、燃えねーわ。とっとと帰ろうぜ、櫛子」

「だね♪遅れたらレイラさんに殺されちゃうし♪」

「ぐっ……離して……！」

「うるさいなぁ。黙って♪」

「きゃ……！」

ぎしりと音を立てて、上空に吊り上げられたアヤメさんの体が、クシコという女の子の体に締め付けられる。顔を顰めて、アヤメさんは悲鳴を上げる。

「お姉ちゃん！」

「アヤメさん！くそっ……お前ら……！」

「だから、お前にゃ用無しだっつってんだろーが！」

鼻ピアスの男が腕を振るう。軽くその口が動くのが見えた。

それと同時に強烈な風が、俺とミュゲを地面に転がす。

「さ、帰ろ兄貴♪今度はレイラさんに綺麗で鋭い爪を付けてもらう

の♪」
「お前、もっと化け物になる気かよ?」
「うん♪最終的には魔王を名乗って、この世界の半分を手に入れるくらいになるの♪」
「ゲームのやりすぎだ」
「じゃ、飛ぶよ♪」

クシコが背中の黒い翼をはためかせ、空に浮かび上がる。それにしがみついて、男の体も浮かび上がる。勿論、髪の毛で拘束したアヤメさんも連れたまま。

「お姉ちゃん!お姉ちゃん!」

ミュゲが泣きながら悲痛な叫び声を上げる。それを見下ろして、クシコはにっこりと邪悪な笑を浮かべた。

「あなたのお姉ちゃん……ちょっと奴隷としてもらってくから♪一生返してあーげない♪」
「てめぇ!!」
「アデュー♪雑魚天使♪可愛いお嬢ちゃん♪命だけは見逃してやること、感謝してね♪」

ゴウ!

強烈な暴風が吹き荒れ、俺とミュゲの目を晦ます。

そして、俺達が目を開いた時、アヤメさんの姿も、二人の黒髪の兄妹の姿も、綺麗さっぱり消え去っていた。

なんなんだよ……これは一体……！

「なんなんだよ……！」

「教えて欲しい？」

地面を叩き、突然の出来事に叫ぶ事しかできなかった事を悔やむ俺に降り掛かる一つの声。聞き覚えのあるその声の主は、俺の後ろで赤いスコップを担ぎ、「にやり」と笑っていた。

「何で……お前が……？」

「そりゃ、カーゼブ村のコミュニティの窓口係だからね、私」

何故か黄色いチャイナドレスを着こなす、白面の女、ジアミエン。赤いスコップで肩をポンポンと叩きながら、灰色の髪を団子状に結ったジアミエンは首を傾げる。

「あれがなんなのか教えて欲しいかって聞いてんの」

「分かるのか……！？」

「当然♪なんたってセルセラコミュニティの情報管理係だからね、私♪」

怪しい女だ。だが、俺は迷わず頭を下げる。

うっすらと感じていた、嫌な予感を察知して。

「頼む……教えてくれ……！何でもする……必ず報酬は払う……だから……」

「……薄葉っち、何か変わった？ちょこっと男前になってんじゃない？濡れるわ……」

ジアミエンはクスクスと笑う。

「……格好いい王子様が、囚われの姫君を助け出すストーリー、私、嫌いじゃないわ」

ジアミエンはするりと懐から紙切れを取り出し、ぴらりと俺の前に落とす。俺はそれを手に取り、目を通す。

「情報料の代わりにその依頼を受けてもらうわよん？」

「いや、だから後で依頼の報酬は……今は急いで……！」

「依頼内容は、反国家宗教団体『オラクル』に捕らえられた天使……」

「明華の救出」

ジアミエンの言葉に俺は口を結ぶ。

俺は呆気にとられた。

明華が、捕まっている？

「信じられないでしょうねぇ。正直、私も信じられないのよ」

ジアミエンが、ぽりぽりと仮面を掻きながら、気まずそうに呟く。

「私の責任でもあるのよねぇ。明華ちゃんと救世っち、済ちゃんの実力を買って、勝手に堕天使討伐の任務を依頼しちゃったのよん。だって、まさか、堕天使との交戦中にオラクルの邪魔が入るとは思わなかったし……」

「本当に、明華が……！？」

「ええ。救世っちと済ちゃんは無事みたいだけど……明華ちゃんはオラクルに目を付けられたみたいねぇ。そりゃ、あんだけ上質なアルマと可愛らしさをもってりゃねぇ……」

そんな、明華が？俺は、謝らなきゃいけないのに？なんで……なんで……！

「ほら、薄葉っち！あんたがしゃんとしないでどうすんの！」

ジアミエンの喝で、俺ははっとする。

「見てたわよん。薄葉っちがドンパチやってたのも、魔女ちゃんが連れてかれたのも。魔女ちゃんを連れてってたの、あれ、オラクルの使いよ？」

明華だけじゃなくて、アヤメさんも？

「どう？あんたに関わりある人、二人も連れてかれちゃったけど…あんた、ずっと悔しがって地面を叩いてるつもり？」

ミュゲは泣いている。唯一の身寄りであるアヤメさんが連れてかれたのだ。当然だ。アヤメさんを放って置ける訳がない。

明華にも、俺は会わなきゃいけないんだぞ？会って謝らなきゃ…！

答えは決まってる。

「この依頼、受ける。オラクルだかなんだか知らないけど、ぶっ潰してやる……！」

ジアミエンは「にやり」と笑う。

「いいね。それでこそ男の子♪」

パチン！とジアミエンは指を鳴らす。すると空から巨大な鳥が舞い降りる。その背中には、フード付きのローブを来た、一人の大男。

「今回の依頼主はズィスィ王……つまり国家規模の依頼なワケ♪今回ばかりは私も、コミュニティの精鋭も出向くわよん♪これは特Ａ級のビッグクエスト！」

「特Ａ？それって俺でも……？」

「勿論。私の権限で参加させたげるわよん♪……明華ちゃんにとっての王子様は、薄葉っちなんだからさ♪」

「王子なんて柄じゃないですよ」

「謙虚ねぇ。頼りにしてるわ天使さん♪」

ジアミエンの差し出した手、俺はそれを固く握る。

そして、俺は涙に濡れた目を擦るミュゲに歩み寄り、そっと頭を撫でてやった。

「大丈夫だ。お前のお姉ちゃんは、絶対に取り戻してきてやるから」

「……ウスハぁ……」

俺はミュゲに背を向ける。

そして、巨大な鳥に乗り、俺に手を差しのべるジアミエンの手を取った。

「随分と格好良くなっちゃって♪……これは明華ちゃん、見たら卒倒しちゃうんじゃない？」
「茶化さないでくださいよ」

巨大な鳥は羽ばたきを始める。

俺はたった一言、妹に謝罪の言葉を贈るために。

可愛い妹分の、大切なものを取り返すために。

初めて、自らの意志で、戦場に赴く。

ＥＰ２５：　天使、羽撃く（後書き）

ほんの少しの、たった一言謝りたいという小さな願いを秘めて。ミュゲの大切なものを取り戻すという使命を秘めて。普通の天使が初めて戦場に赴く。謎多き敵、オラクルとは？そして、ついに目覚めた薄葉の戦いの行方は？

遂に薄葉が僅かな覚醒！でも実は普段の無意識モードやスリープモードよりかは弱かったり……でも、確実に自分の意思で戦う事になるのです。本当の意味での覚醒とは言えませんが、確かな進歩でございます。

そして、謎の敵、オラクルとの決戦へ？

囚われの明華、アヤメを薄葉は救い出せるのか？

波乱続く展開でございます。

急展開ばかりで申し訳ない……ｗ

Ｅｐ２６：　天使集結（前書き）

今回は二つのサイドから

EP26：天使集結

『オラクル』。

ズィスィに伝わる全てを統べる神、カウンを信仰する宗教団体。

近年、ズィスィに誇る魔導技術の有効利用を謳っている。それはつまり、カウンの名に従った、世界の統一。

ズィスィの技術の軍事利用を嫌う現在の王の思想を非難し、影で活動しているという。

そんな感じの解説をジアミエンから受けて、俺はふむと頷いた。

「それと明華とアヤメさんが攫われた事となんの関係が？」

「薄葉っちの鈍チン！要は『伝承の天使の軍事利用』が目的って事よん♪」

救世さんの一件で、コミュニティに加入したメンバー、人員輸送用テラスの巨大な鳥パパガロスさんの背中の上で、俺はジアミエンから今回の依頼の詳細と、敵となる団体、オラクルの話を聞く。

今までは俺は何もできないと勝手に決めつけ、ロクに事情の理解をしようとしていなかったが、今回は違う。俺が大きくその問題に関わる関係者なのだ。自覚が変わると、大分意識も変わってくるものだ。

「あいつらは『天使の伝承』を知っている。そして、既に多数の天使を未完成の召喚術で呼び寄せてる。薄葉っちが見たアレも天使。分かる？」
「ああ。髪が黒かったからな」
黒髪の天使、クシコと鼻ピアスを思い出す。
「内通者の情報によると、オラクル内に居る戦力となる伝承の天使はおよそ二十人」
「二十！？それ、大丈夫なのか！？」
「だいじょぶだいじょぶー♪こっちにゃ、コミュニティ本部の精鋭が三人も居るんだから！それに、あくまで『未完成の技術』。完璧な儀式で呼び出された明華ちゃんと薄葉っちとはクオリティが違うわよん♪プラス、十分な学習期間を経てないのがほっとんど！つまり、ほんの一握りにだけ気をつければオッケー♪」
コミュニティ本部の精鋭の三人とは、今、パパロガスさんに乗っている、俺、ジエミエン、ミュゲの三人以外の三人の事だろう。
黒いフード付きのローブで殆ど顔を隠している剣士っぽいおっさん。顔を伏せて、こっくりこっくりしている。寝てるのか？
長い銀髪を垂らした、眼鏡の似合うお姉さん。目を合わせたら、にこやかにこっちに手を振ってくる。非常にグラマラスでもある。いいなぁ。
頭に三角形の……なんだ？赤いコーンみたいなのを被ってる人。肩には身の丈以上もあるような巨大な斧のような武器を背負っている。心無しか体もその武器も血に濡れているように見える。怖い。
「……一握りってのは？」
「薄葉っちの見た二人の天使、天野櫛子（アマノクシコ）と天野鼻ピアスの天野兄妹」

鼻ピアス!?本名は!?可哀想すぎるだろ、天野鼻ピアス!

「そして、何よりも危険な、ズィスィの強力な技術を保持するオラクルの中で、群を抜いて危険な天使……月島麗羅（ツキシマレイラ）。……あとそのおまけの流河（ルカ）の月島兄妹」

おまけって……ルカって奴可哀想だろ……何でどっちかが必ず可哀想なんだよ。

「特に月島兄妹の……妹のレイラの方にはいい噂を聞かないのよねん」

「……取り敢えず、そいつらがヤバイんだろ?」

「ええ。そうねぇ。ま、他にも保持する武力は一国家並だろうから全部が全部危険なんだけどもさぁ」

国家……やべぇ、ちょっと怖くなってきたぞう。

「だいじょぶだいじょぶ!ビビんなっての!薄葉っち、さっきまでの男らしさは何処行ったの!ズィスィからも戦力は出されるからさ!薄葉っちは、明華ちゃんとアヤメちゃんの救出に集中しなって!」

「お、あ、はい……」

「それに誤解の無いよう言っておくけど……」

「にやり」とジアミエンの不敵な笑み。

「ウチの精鋭のこの三人で、一国程度の武力は犠牲もなく落とせるからね?心配なんて必要ないのよん♪」

「マジですか……」

冗談だと思いたいな。怖すぎるだろセルセラコミュニティ……

「だからオラクルとの交戦よりも……問題は薄葉っち、あんたの方の明華ちゃんよん」

「明華が……？」

ジアミエンは「キリッ」と、仮面で表情が伺えないなりにその真面目さをアピールする。ふざけているようだが、至って本人は真面目のようだ。そしてその内容は本当に真面目なものだった。

「さっき言ったよね？『天使の軍事利用』について」

「ええ」

「……いくら何でも自我を持つ兵器を大量に持つのって、理性的じゃないと思わない？反乱でも起こされたらどうすんだって話よ」

言いたいことは分かった。天使の召喚、そして天使の使役、強い力を手に入れるであろうで天使は強力な武器である。しかし、天使には自我がある。自分の意思がある。それが必ず召喚主の言うことを聞くとは限らない。

ならば、オラクルはそれほど多くの天使をどうやって従えるのか？しかも、明華やアヤメさんを無理矢理連れ去り、どうやって従えるつもりなのか？

「天使を支配する技術を持ってんのよ」

体が震えた。ジアミエンは肩に担ぐ赤いスコップを俺に向けて「にやり」と笑う。

「すぐにそれが有効にならないことは分かってる。それに明華ちゃんはクオリティ高いからねぇ。恐らくはそう簡単には敵の手には落ちないでしょうけども……急がなきゃ、あなた、一番敵に回しちゃいけない相手と戦わなきゃいけなくなるよ？」

明華が敵に……？冗談じゃない。

「そうなる前に助ければいいんでしょう？」

「そのとおり。さすがにアレを相手にすると、ウチの精鋭がいても被害が計り知れない事になるかんね。つまりは薄葉っちは一番重要な役割を担ってんのよ」

一番重要……

「最悪、明華ちゃん救出の為にあなたには天使を相手にしてもらうかも知んないからね。それがもしもレイラだったりしたら……ちょこっとそれは大変かもしれない事、覚えといてね？」

ゴクリと唾を飲む。このジアミエンという怪しい女の人は、どこか胡散臭さこそあるものの、言葉に重みを持っていた。普段からおちゃらけた態度だからこそ、真面目に話すときには重みをますということだろうか？

俺は強く頷き、決心を固める。

「アキカってだあれ？ウスハ、浮気したらいけないんだ！」
「いやいや妹だよ。それに浮気もなにも俺には彼女とか……」
「お嫁さんが居るでしょー！むうー！でも、妹でよかったー！」

いやいや。嫁なんていないよ？お付き合いしたことすらないんだよ？冗談きついぜまったく……

……ん？

俺は隣で腕にしがみつくものを見た。

パパロガスさんの背中には、俺とジアミエン、そして精鋭三名にミュゲが乗っている。じゃあ、俺の右腕にしがみついているこいつは誰だ……？

ああそうだ。ミュゲだ。なんだ。何もおかしいことなんか……

「う、うわあああああああああ！ミュ、ミュミュミュミュ、ミュゲ！？何でおるん！？」

置いてきたはずの、留守番させてた筈の、クリーム色のウェーブヘアーがそこに居た。その手にボールを抱えて、俺の右腕に左手を組んできている。

ミュゲはにっこりと笑って、きっと目を光らせると、俺から手を離し、どんと胸を叩いた。

「お姉ちゃん助ける！」
「駄目だ！危ないだろ！」
「大丈夫だよ！ちゃんととらちゃん連れてきたから！」

ぐいっと抱えていたボールを俺に突き出すミュゲ。

「……これ、とらちゃん？」
「うん！」
「ちっちゃくなれんの？」

ミュゲは力強く「うん！」と頷いた。

「とらちゃんは、ズィスィで見つかった特殊鉱石、スティヒオから作られてるの！スティヒオは、そのサイズをアルマ操作によって自由に変換できる便利な素材なんだよ！四次元物質とも呼ばれて、巨大収納物質として注目されてるの！それでもやっぱり質量までは変化できないからすっごく重いんだけど、それは重力操作系魔法を入れた器術デバイスを搭載して、すっごく軽くなるように調整したんだよ！だからこうやってちっちゃくして持ち運びが出来るの！それにさっきウスハが足を壊しちゃったけど、炎の錬成系魔法を記録し

た器術デバイスを組み込んだから自動再生できるんだ！フェガロフォスで採ってきたコラジェムから作ったんだよ！ウスハに見せた通りにとらちゃんとっても強かったでしょ？でも、あれはまだまだ格闘性能しか発揮してなかったんだ！本当はもっと便利な器術デバイスを大量にスティヒオに収納してるから、とらちゃんはもっと強いんだよ！例えば……」

「ちょ、ちょちょちょちょちょ！ちょっと！日本語でおｋ！」

「え？ニホンゴってなぁに？」

今この子何を言っていたんですか？滅茶苦茶流暢に喋ったよ？なんなの？何でこの世界の人は自分の専門分野のこととなるとやたらと流暢に喋るの？やだ怖い。

「要は『とらちゃん、めっちゃ強い、だから大丈夫』ってことだよね～？ミュゲちゃん？」

「そだよ！」

「オ、オーケー……把握した」

とらちゃんはめっちゃすごいらしい。把握。

「それにしても驚いたわ～。あの魔女さんの妹ちゃんだけあるのかしらねぇ？すっごいわ。にわか者の私でも凄いの分かるわ。スティヒオなんて新物質、良く知ってるわね～」

「うん！お姉ちゃんが読んでた研究所覗いた！それで、イリアコフォス鉱山まで取りに行ったの！」

「あらま、あのテラスの巣窟に？すっごいわ～」

ミュゲ、実はめっちゃ凄いんじゃね？

「だからミュゲ、大丈夫！お姉ちゃん助けるよ！あの牛みたいなウ

ニの人とひじきみたいな人、ぶっ飛ばすの！いねやこらー！」

往ねやコラて……アヤメさんの悪影響が絶対出てる……純粋なミュゲが将来荒くれ者になると思うと……胸が痛くなるな。

「薄葉っち。今の話聞いてて分かったっしょ？多分、ミュゲちゃんめっちゃ強いんじゃな～い？イリアコフォスってもあなたにゃ分からんでしょうけども、あそこ切り抜けるのは一流の魔導士でもきっついわよん？」

ジアミエンの「ニヤニヤ」という笑い。

いや、そりゃミュゲが操るとらちゃんのヤバさは俺も身をもって知っているのだが……それにあれ以上の装備を持っているとなると……怖ッ！何でこんな幼子がそんな兵器持ってるんだよ！怖ッ！世も末だな！

……だからというわけじゃないが。

ミュゲもアヤメさんが心配で仕方がないのだろう。唯一の肉親だというアヤメさんが連れ去られたのだ。必要な材料が足りないからといって姉のため、とらちゃんの為に、一人で危険な森に踏み入るような子だ。黙ってなど居られなかったのだろう。

……弱っちいなりに何かしたいという気持ちは分かる。今まさに俺がその状況にいるのだから。

「……はぁ。どうせ言うこと聞かないんだろ？勝手についてきやがって……」

「お願いウスハ！ミュゲも連れてって……！どうしても、お姉ちゃんを助けたいの……絶対に邪魔しないから！お願い！」

「もう付いてきてんだろ……ああ、もう分かったよ」

俺はジアミエンの顔を伺う。白い仮面がコクりと頷く。

「私としては猫の手も借りたいとこだしね♪それに、あの講釈を聞く限り、ここまでの器術士、そうはいないからねぇ……実力次第でコミュニティにお誘いするって手もありかもね♪」

「……やめてくれ。一応子供なんだから」

「子供じゃないもん！ウスハのお嫁さんだもん！」

「あらあら可愛い奥さんですこと。薄葉っちすみに置けないねぇ？」

「ヤメロッテ！」

俺はミュゲの頭を軽く撫でて、少し強い口調で注意する。

「いいか。絶対に変な事するなよ？大人しくしてろな？俺の後ろにちゃんと隠れてること、いいな？」

「うん！いっぱいやっつける！」

「聞いてないし！」

元気に手を上げるミュゲを見て、銀髪お姉さんはくすくす笑い、ジアミエンは「ゲラゲラ」と笑った。

「大丈夫だよ薄葉っち！ミュゲちゃん、多分自分の身くらい守れるって！それに、もしもの時はウチのメンバーも面倒見るからさ。薄葉っちは思う存分戦いなよ」

「……ありがとうございます」

「面倒なんてかけないよ！ミュゲととらちゃん、強いから！」

不安も隠しきれないが、ほんの少しだが緊張が緩む感覚の方が強

かった。意気込み姉を救いに行く幼い少女を見て、俺はもっと頑張らねばと意識を強めた。

――

私はようやく動くようになった掌を見つめ、顔をしかめた。頭がぼーっとする、しかし、今の状況は分かっている。

「明華……」

伝説の塔、デア・ピルゴスの最上階。其処に残るのは、天井に大きく空いた穴と、玉座に着く堕天使ハラン、そして網を外され情けなくへたり込む私だった。

明華の姿はない。

動けない私の前で、明華は攫われた。

あの『化け物』によって。

ハランは無気力に天井の大穴を見上げ、虚ろな表情をつくる。するりとその左目にかかる包帯を外したその目には、薄い石の板が入っていた。それを外したハランは、ぽとりと地面に落とし、ぐしゃりと足で踏み付ける。石は粉々に砕けてしまった。

先程までの騒がしくしゃべり続けていた男の姿は其処にはなく、あれが本当に私達の油断を誘うための演技だったということが容易に理解できた。

「……あいつらは……いや、あいつはなんなんだ?」

私はハランに尋ねる。無気力にハランは返す。

「知ってどうする?」

「決まってる……明華を助けに行く……!」

「やめておけ。俺如きに負けているようだったら、無駄死にするだけだぞ」

乾いた笑みを浮かべたハランの視線を私を射抜く。

「それがどうした! なんとしてでも私は明華を……」

「放って置けばいいだろう? お前はあいつらが現れて、あいつが連れ去られたから命拾いしたんだぞ?……本来なら俺が処分していたか、あの化け物に殺されていたかのどちらかだった」

「……なら、何故私を処分しなかった?」

「目的は果たしたからだ」

目的? 今までのあの遣り取りで、こいつが成した事などあっただ

ろうか？私はハランの無気力に濁る瞳を睨んだ。
ハランはふんと鼻で笑い、私から視線をそらす。

「……俺はあいつらのターゲットだった。俺が此処を拠点に生きてきたのは、全てあいつらの手から逃れる為だ。本来のプランからは大きく外れたが……結果オーライ。あいつが代わりに捕まってくれた御陰で……俺は晴れて自由の身というわけだ」
「明華はお前の代わりに捕まったのか……！」

ハランにまだ軽くふらつく足取りで歩み寄る。口を醜く歪めたその男は、言葉を発しなかった。挑発的に笑い、そのまま深く椅子に腰を沈める。

「……私はお前を倒すという依頼を受けてきた。つまりはお前を倒す理由がある。……吐け。あいつらの事を全て。吐かなければ……」
「ハハ。冗談はよせ。お前はあれ程無様に負けて、未だに勝てるつもりでいるのか？」

ぐっと口を結ぶ。僅かに戻ってきた感覚で、その指をハランの首に絡ませる。ハランは抵抗一つしなかった。ただ、虚ろな目で口だけを歪ませ笑うのみ。

「あいつを助けに行けば、お前は必ず死ぬことになる。何故なら、あいつらは俺以上に強大で容赦がないからだ。お前もあの化け物を見ただろう？」

ハランの首に掛けた指が緩む。僅かに指先が震える。思い出してしまう。

あのおぞましいまでの化け物を。

「ほら震えている。お前はどうして怯えているのに立ち向かう？見捨てろ。一番大切なのは自分自身だろう？」

男の口調は次第に強くなっていく。

「反論してみろ。お前は自分の命が一番大切なのだろう？恥じることじゃない。それは生物の本能だ。あいつを見捨てても、誰もお前を咎めない」

その時、不意にゴウンと奇妙な音が響く。ハランの後ろに光が溢れ、其処から一人の男が姿を表す。緑色の短い髪を揺らし、息を切らしながら、男は天井の大穴を見上げた。私は咄嗟にハランの首から手を離す。

「ハランさん……何があったんですか……？」

「オラクルの天使に襲撃された。俺の代わりに、違う天使を連れていった。どうやら俺よりも優れた天使に気付き、そっちで満足したらしい」

「ご無事で良かった……でも、あまり状況はよろしくないです」

ハランの仲間だろうか？緑髪の男は息を整えながら、平静を必死に保っていた。

「アヤメさんが……オラクルの連中に捉えられました」

「……アヤメが……？」

アヤメ。その名前が何なのか、私には少しだけ予想がついた。

何処かの村に妹がいる。

あの二人の黒髪の天使が話していたハランの情報。恐らく、アヤメはハランの妹なのだろう。ハランは明らかに動揺した表情を浮かべた。しかし、すぐに平静を保ち、ハランは玉座から腰を上げ、緑髪の男を振り向く。

「……で、王は動けるのか？」

「はい。オラクルが動きを見せた証拠は掴みました。これで正式にオラクルに攻め入る事ができる筈です」

「そうか……」

「ハランさんも行きましょう！アヤメさんを救出して、オラクルを潰せば……」

「断る」

男の呼び掛けに、ハランはたった一言だけ言葉を返した。

「ちょ、ちょっとハランさん何言ってるんですか！？アヤメさんが捕まったんですよ？それを放っておけるわけ……」

「放って置けるさ。俺も命が惜しいからな。あいつとはそういう約束をしていた。『どちらかが捕まった時、残った方は後を追わない。自由に平穏に生きていく』、と。だから、俺達は遠く離れたんだ」

「で、でも……！」

「妹なんじゃないのか？」

私の口から言葉が零れた。ハランはこちらを冷めた目で睨む。

「……それがどうした？」

「どうしてそんなにあっさりと見捨てられる！？お前は兄じゃないのか！？」

「だからどうしてそれがアヤメを助ける理由になるのだ？」

フン、と鼻で笑ってハランは椅子に腰を降ろす。

「所詮は他人。俺の知ったことではない。俺はこれから自由に生きる。こんな世界に呼び出してくれたクソッタレ共に別れを告げて、平穏に身を置くんだ。アヤメには感謝してるよ。『俺の犠牲になってくれてありがとう』、とな」

「貴様……それでも」

「気取るな偽善者」

ハランはぴしゃりと言い放つ。冷酷に、平然と、当然のように。

「兄だから妹を助ける？綺麗事を言うな。そんな事が出来るのは、強い兄だけだ。仲間だから助ける？そんなのは強い人間だから言える事だ。誰もが皆、人を助けるために戦えると思うなよ！？」

途中で突然ハランが声を荒らげる。

「お前らみたいな選ばれた天使は、優れた才能を持つ人間は、『誰かの為』と平気で語れるのだろうな？だがな、この世はそんな強い人間ばかりじゃない！自分の事で精一杯の弱い人間が殆どなんだよ！貴様らの理想論を、そんな人間に押し付けるな！」

それは自嘲の笑み。自らを弱いと罵る痛々しい笑み。ハランの分厚い包帯の下には、弱々しい本当の顔が隠れていた。

「虚勢を張って何が悪い！？他人を犠牲に生き残って何が悪い！？それを非難する権利がお前らにあるのか！？弱者はそうでもしなければ、生き残れないんだよ！虫酸が走るんだ、この偽善者共が……！お前らのような余裕ある天使が、ヘラヘラと人助けになんぞ興じるから！俺達のような力のない天使が！当然のように呼び出され、利用されるんだ！きっと助けてくれるんだろうなんて勝手な妄想吹きかけられてな！迷惑なんだよ、お前らの勝手な自己満足が……どれ程に俺達を苦しめているのか分かるか！？」

ハランの言葉には、あの時のような虚構に満ちた色はない。それがハランという堕天使の、真実の言葉。

「消えろ偽善者！勝手に人助けでも何でもやっていろ！俺には関係ない！人を助けられるのは、強い人間だけなんだよ！ほら、行けよ。此処のメントルがお前のお仲間の居場所を知ってるはずだ。お前が本当にお仲間を助けられるか試してみろ！」

私に、本当に明華が助けられるのか？明華の方がずっと強いのに。あいつなら自分でも帰ってこれるんじゃないのか？本当に私が行く意味はあるのか？

偽善者。その言葉に僅かに心が揺らぐ。

私が明華を助けたいという気持ちは、本物の筈だ。

なのに、どうしてこうも心が揺さぶられるのか。

それは私が弱いから。

私の表情が僅かに崩れるのを見て、ハランは嫌味ったらしく微笑んだ。

「結局、お前らに、弱者の感情が理解できるのか？」

無力、恨めしさ、挫折、屈折、分かる。分かるからこそ言葉を返せない。

私は本当に、明華の元に向かうべきなのか？

迷惑なんじゃないか。邪魔なんじゃないか。私に助けられる必要があるのか。明華なら大丈夫なんじゃないのか。これは私の自己満足なんじゃないか。

そもそもどうして私は明華を助けたいのか？

私をこの世界に招いたレークスの事を思い出す。

私はレークスを愛していた。だから愛して欲しくて彼に尽くした。

でも結局私はただの道具で、使えなくなった道具はいらないと罵られた。

その途端に私の愛は、彼に捧げた忠誠は冷めてしまった。

彼を愛して、彼を救いたいと本当に思っていたのなら。

私は最後にレークスを蹴った、明華に掴みかかっていたのではないか？

結局私は、見返りを求めていただけで、本当にレークスに尽くしていなかったのではないか？

私の居場所をくれた人だと綺麗事を吐いて、必ず守ると息巻いて、結局は見返りがなくなると思った途端に冷めたあの感情は、全て偽りの善意だったのではないか。

偽善者、偽善者、偽善者……自己満足、自己満足、自己満足

「消えろ。この偽善者」

胸が苦しくなる。私は、本当に偽善者なのか？今、明華に向けている善意も嘘なんじゃないか？ただの、自分をきれいに見せたいだ

けの自己満足なんじゃないのか？

余裕がなくなった途端に、自分を疑う自分が憎い。何を信じればいいのか？

そして、その疑問が口からこぼれ落ちる。

「私は偽善者？」

私は弱い。だから、偽善者にすらなりきれない。だから、そんな言葉が出る。私はもう考える事をやめたかった。放棄しかけた。

その時だった。

ガシャーンッ！！

地面をぶち破り、巨大な何かが私の背後からせり上がる！

「んな！？」
「な、何事だ！？」

私も、ハランも驚愕した。飛び出したのは巨大なムカデの化け物。

その上に毅然とした表情で跨る、可憐な少女……いや、私の兄貴が、高らかに声を上げた。

「お待たせしました！」

待ってねーよ……！

勇ましく登場した救世に、心の中で私は突っ込んだ。

すっかり忘れてたよ。というか空気を読め……！お前、最初に落とし穴に落ちてから、ずっと何してた……！それにそのムカデはなんだ。よくよく見たら気持ち悪い……！

「話は全て聞かせて貰いました！」

「聞いてたのか！？」
「下の階に大音量で響いてましたよ？」
「あ、マイク切り忘れてたか」

ハランがぶらりと椅子の手すりに掛けてあったマスクを持ち上げる。その内側には、確かにマイクのようなものがついていた。

「さぁ、行きましょう！明華さんを救いに行くんです！それと、ハランさん！あなたの妹さんも！」
「いきなり出てきて何を言い出すんだこの女！？」
「こいつ女じゃない。男だぞ」
「え？いや……え？」
「済ちゃん！今は話がややこしくなるから後！さ、皆さんムカデ丸さんに乗って下さい！あと、メントルさんでしたっけ？道案内よろしくお願いできます？」

ちょっと自分で「話がややこしくなるから」とか言ってるのを聞くと、ちょっと兄貴が可哀想になる……それどころじゃないんだが。ところでなんだこのムカデ丸さんって！

「俺は行かないと言っている！行くなら勝手に行け、この偽善者！」

ハランが怒鳴る。

「偽善者結構！言われ慣れてます！」

救世が怒鳴る。
ハランが怯んだ。

「私の偽善で人が助かるのなら、それって素敵じゃないですか！何

をグチグチ女々しい事を！」

救世に女々しいと言われている。これは相当悔しいぞ。ハランは衝撃を受けているようだった。

「き、綺麗事を！」

「妹さんを助けたくないんですか！見捨ててもいいんですか！私、別に綺麗な事言ってませんけど！」

そうだ。救世はこういうことには真っ直ぐだった。他人の喜ぶように自分を曲げるが、そうと決めたら曲がらない。正しいと信じたら曲がらない奴なのだ。

「私は明華さんを助けたい！以上！綺麗だとも思いません！私のワガママです！何か文句でも！？」

「い、いや……別に文句はないのだが……」

「なら、ライドオン！」

「だから俺を巻き込むなと……！」

「妹さん、大事じゃないんですか？」

「……大事じゃない……！」

「よし、済ちゃん。その人抱えて乗ってください！あとメントルさんも！」

「なんでそうなる！？」

大方ハランの言うことに私も同意である。

「何でって……私がそうしたほうがいいと思っているからですよ！」
「そんな勝手な！」
「ええ。勝手ですよ！私の善意の犠牲となれ！」
「何を言ってるんだお前！？」
「自分が他人を犠牲にしてでもって言ったんじゃないですか！？犠牲を正当化したのはあなた！だから私はあなたを犠牲にする！」
「滅茶苦茶だッ！？」
「滅茶苦茶ですよ！」

……救世の考えは良く分からない。だけど、私は……

初めて兄貴を本気で頼りにした。

「な……やめろ……！離せ！」
「黙って乗れ」
「あ、俺も行きます！」

私がハランを抱えてムカデ丸君に飛び乗る。続いてメントルがムカデ丸によじ登る。

「さぁ、皆さん乗りましたね？それでは、ムカデ丸君……ゴーですッ！」

ガコォォンッ！と音を立てて、ムカデ丸君がデア・ピルゴスの壁をぶち破る！そして、壁を這うように急降下を始めた！

「うわあああ！やめろって！」

ハランの悲鳴。

私はハランを放り投げ、ムカデの背に転がす。さすがにハランも必死でしがみつく。

私は救世に真意を問う。

「救世。一体どういうつもりだ？」

私の質問に、救世は笑顔で単純明快な答えを出した。

「妹さん、きっとハランさんが助けに来たら喜ぶじゃないですか！それにハランさんも妹さんが助かったほうが嬉しいに決まってます！」

……本当に、迷いのない奴だ。

「済ちゃんも明華さんを助けたいでしょ？」

「あ、ああ……だけど、本当に私なんかが……必要なのだろうか？明華なら、一人でも……」

「だから！私が助けたいんです！」

救世はにっと笑って見せる。

「大丈夫ですよ。済ちゃんが至らない部分はお兄ちゃんが補ってあげますから」

私は苦笑した。

見透かされてるのだろうか？全く、不思議な兄貴である。

「それに、誰も泣かせたりしませんよ！私が全部治してあげます！ハランさんが妹さんを助ける時に怪我しても大丈夫！妹さんに心配はかけません！」

「何故、俺が怪我する前提で！？」

一人の献身バカが、少しだけ私の気持ちを和らげる。そして、ハランの表情をも作り替える。

「そして何より……明華さんに格好いいところを見せてあげます！」

「お前、それが最大の目的か！？」

オオオオオオオオオオン！

激しい唸りを上げて、デア・ピルゴスの壁をぶち破り、無数の巨大な虫がムカデ丸君に続く。

「あ、あれはなんだ！？」

「地下で怪我してたので、皆さん治してあげたら仲良くなっちゃいました！皆さん協力して下さるそうですよ！」

「もう、なんなんだお前はッ！」

救世がニヒルな笑みを浮かべる。

私は気付いた。

こいつ、酔ってる！？

「さぁ、行きますよ。全てを救いにッ！」

混乱率いて、酔いどれ救世が突き進む。

それは偶然か、それとも必然か。

運命に導かれるように、ズィスィに居るすべての天使がオラクルの拠点に集おうとしていた。

Ｅｐ２６：　天使集結（後書き）

オラクルの拠点に、ズィスィの全ての天使が集う！其処に待ち受けるものは何か？次回、オラクルの拠点に突入！そして、対決へ！

今回は戦闘に突入する前の繋ぎ回。救世さん、戦線復帰ですｗ　落とし穴に落ちた後の救世に、何があったのかは後々わかります……ｗそして無理矢理引っ張られてきたハランも参戦？天使入り乱れる大乱闘の始まりです！
繋ぎにしては多少（相当？）カオスですがご勘弁ｗ

次回、ついにオラクルとの戦いに突入です！

Ｅｐ２７：　開戦、波乱（前書き）

視点がかなりばらつきますのでご注意を。加えて視点不定の第三者視点もありますので……

EP27：開戦、波乱

ぞくり、と初めて背筋に悪寒が走った。

何か、来る。

その時、私は思わず笑みを浮かべてしまった。

「……レイラ？どうした？」

「うっふふ……！何でもないですわ」

あえて言わない。

だって、折角の楽しみですもの。折角、私を傷つけてくれそうな化け物が迫って来ているんですもの。

何が来ているかって？何で分かるのかって？

本能で分かるの。途轍もなく危険で、途轍もなく理不尽な存在が、今まさに敵意を向けて此処に迫ってる。

その危険性を周りの誰にも悟られたくはない。囲んで倒せ！なんて事になったら、私が痛い目見れないじゃないの。

「あなたは私を不幸にしてくれるの？」
「何をブツブツ話している……」

薄暗い地下牢、その牢に閉じ込めた天使を品定めするような支線で見つめる下衆で愚図なイマイチ教主様が強気の口調で私に言う。はぁ、不幸。こんな下衆の下で働くなんて……なんて可哀想な私……じゅるり。

「いえ、何でもないと言っているでしょう？」
「そうか。……それにしてもでかした。あの裏切り者以上の逸材だ、これは」

『私があげた眼』でその可愛い子猫ちゃんを見て、その力を理解した教主様は震える笑顔で歓喜した。そりゃあね。この子、下手したら私も食ってくれちゃうかもしれないもの。でも、この子じゃ足りない。今、此処に迫り来る危険が欲しい。

「……『首輪』はまだ付けられないのか？」
「は、イエレアス様。何分、アルマ量も多く、抵抗も激しく……」

手下その一が解説する。へぇ、粘るのねぇ。やっぱり凄い子みたい。

「ふん。どうせその内弱りきって降伏せざるを得ないものを……おい貴様。無駄な抵抗はやめて、素直に従ったらどうだ？そうすれば道具としてではなく、優秀な手駒として丁重に扱ってやるぞ？」

教主様のアリガターイお言葉に、子猫ちゃんは強い視線を送って

悪態をつく。

「お断りですよ。あなたみたいな小物っぽい人に従う事自体が死亡フラグですから」

「あっは♪」

「……生意気な小娘だ。その内後悔させてやる……！」

この教主様がフラグとか言われて理解を示せる筈もなかったけど、私の笑いに、自分が小馬鹿にされた事を理解したようね。全く、この子の言うとおり。こんな小物っぽい悪党に従ってちゃ、死亡フラグ立ちっぱなしよねぇ。

ま、私はその死亡フラグに巻き込まれたくてこんな小物に付き合ってるのだけれど。

「……レイラ、ルカ。この小娘の洗脳の手助けを。徹底的に弱らせろ」

「あ～い」

「レイラ、返事はちゃんとしないと」

チッ……うっさいのよ。

ま、そんな事をしている場合でもなさそうなんだけどね。

いち早くその異変に気付いたのは、そういったものに敏感なルカ。

「……あ。教主さん。何か来ました」

「何？」

ゴォンッ！！

強烈な轟音と共に、私達の立つ地面が揺れる。教主様とルカがどん臭くすっ転んだ。

驚き周囲を見渡す教主様と手下その一、転んだ腰を摩りながら立ち上がるルカ、牢屋で後ろ手を鎖で拘束されたまま驚きの表情を見せる子猫ちゃん、私だけが動じずに其処に立つ。ああ、こんな時に慌てられないなんて……私だけ仲間ハズレ、ああ可哀想。

「な、何事だ！？」

「イエレアス様！敵襲です！巨大な虫型テラスの群れが地上施設に攻撃を仕掛けています！」

「テラスだと！？」

「そして、数名の侵入者が！現在、地上施設にて一般兵と交戦中！その中には数名……黒髪の人物が確認できました！」

「く、黒髪！？馬鹿な……それはまさか」

「あらま。あの天使達……この子を取り戻しに来ちゃったのね」

「どういうことだレイラ！？」

教主様大慌て。こんな上司を持つ私ったら本当不幸。

「ああ、この子攫ってきた時に、堕天使と一人他にも天使が居たん

ですよ～」
「何!?堕天使は処分したのでは……」
「ごめんなさ～い。脅威とは思えなかったんでぇ～、天使共々放置しちゃいました。多分、この子取り戻しに、殴り込み仕掛けて来たんですね。あっはは！」
「……ちっ！……レイラ、ルカ、お前達は此処で娘の監視だ！この娘が目的というのなら、此処に来た奴は一人残さず処分しろ！」
「あいあいさ～」
「レイラ！返事は……」

ルカの説教を軽く聞き流し、その場を去る教主様に手を振りながら軽く見送る。そして、姿が見えなくなった所で溜め息。

「……ハァ～ッ。愚図、あんたこの子見張ってなさいよ」
「え?僕一人で?敵がきたらどうするの！」
「ちょっとの間よ。別に『あいつ』が来るまでには戻ってくるわ」
「あ、あいつ?」
「『化け物』よ」

ルカは少し引き攣った表情を作り、口を結んだ。そう、あいつはまだ来ない。あいつはまだ離れている。今潜り込んだ奴等はただの雑魚。本命はほんの少しだけ遅れてやってくる。私にはわかる。

だからそれまで……こっちも悲劇的な舞台を彩らないと、ね?

「んじゃ、よろしく～♪」
「ちょ……レイラ！待ってよ！」

私は灰かぶり、この物語の悲劇的な主人公。
だからそれに相応しいステージを用意するの。

――

俺達を運ぶパパガロスさん。オラクルの拠点であるという既に廃棄されたという研究施設が見えてきた時、その異変は一目で見て取れた。

巨大な虫の大群が研究施設を取り囲み、攻撃している。

この光景には見覚えがあった。何となくだが、明華が攫われたという今の状況、それと見覚えのあるその光景から、俺にはその犯人が何となくだが理解できた。

「救世さん……また、手下増やしたのか？」

恐ろしい人である。何であんなに人外を虜にするのか？あの人、ある意味魔女だ。魔性の女だ。いや、男だけど。

そして外には救世さんの姿は見えない。イツキ共々、既にあの中に入り込んだのだろうか？

「救世っち派手にやるねぇ。それにしてもまたコミュニティに使える人材……いや、虫材が増えるわねん♪」

「あんた何でもありか？」

ジアミエンもその犯人が救世さんだと察しているようだ。その上で新しいメンバーの追加に嬉々として踊っている。訳の分からない人である。

「さてと。私らも行きますか！……でも、あの虫達、完全に入口塞いじゃってるわねぇ。いや、そもそも入口から突撃なんてナンセンスな事するつもりはないけどね♪」

ジアミエンは赤いスコップを担ぎ、立ち上がる。それに従うように三人のコミュニティの精鋭も立つ。パパガロスさんはオラクル研究施設の傍に来ても高度を下げる事はない。あれ？通り過ぎちゃうよ？

「トンガリ！ミュゲちゃんをよろしく！」

トンガリ？ああ、あの三角コーンを被った人か。トンガリって……

トンガリさんはミュゲをひょいと片手で抱える。もう片方の手には巨大な斧。なんちゅう怪力っすかこの人。

俺がイマイチ状況を理解できずにいると、不意にジアミエンが俺の腕を掴む。

「ん？」
「じゃ、飛ぶよー」
え？飛ぶ？
え？
ジアミエンは俺の腕を引っ張り跳躍した。ふわりと体が浮かび上がる感覚。
「う、うわあああああああああ！」
体を風が叩く。ビョオオ、と凄い音が耳を裂く。
こいつ、飛び降りよったッ！？空中で、「にやり」とジアミエンが笑う。
「きちんと着地してね～♪」
「出来るかッ！！死ぬッ！死ぬッ！死んでしまうッ！」
あ、これ死ぬわ。志半ばにして死ぬわ。
俺、こんな高さから着地出来るほど化け物じゃないわ。

「……なぁ～んて、冗談よん♪」

くるりと空中で赤いスコップを回し、ジアミエンはそれを下に突き立てる。そしてボソボソと白い仮面の下で呟くと、「にやり」と笑って俺よりも早く地面に急降下していった。

「『サンドウィッチ』♪」

スコップが研究施設の天井に接する。すると、天井は一瞬で砂のように崩れさり、砂埃を上げる。俺はその後に続くように転落した。

あれ？地面が柔らかい？

気付けば砂埃は晴れ、俺とコミュニティの精鋭、ミュゲは見事に研究施設の内部に潜入していた。天井に穴が開き、地面からサラサラと砂が舞い上がる。それ以外に特段何もないので何が起こったのかは分からないが、取り敢えずは転落死というオチにはならずに済んだようだ。

「侵入者だ！」

キョロキョロと周囲を見渡す俺達を、研究施設内の白い怪しいローブを着込んだ男達が取り囲む。

「さぁ～て、此処からが本番よん♪トンガリはミュゲちゃんと薄葉っちの案内と護衛を宜しく～♪エッちゃんアリちゃんは私と一緒にお掃除しましょ♪」

トンガリさんが斧を片手にこくりと頷く。その左腕には未だにミュゲを抱えている。ミュゲはばたばたと足をばたつかせてニコニコしている。楽しそうで何よりです。

トンガリさんが此方を見た。見たんだと思う。だってこの人、三角コーン被ってて顔見えないんだもの。

来い、ということだろうか？

「じゃ、頑張ってねん王子様♪無駄な体力削がないように、雑魚はトンガリが処理してくれるからさ。余計なのもこっちが全部処理するから安心してお姫様の元まで駆け付けたげてねん♪」

「ありがとうございます！」

俺はのしのしと走るトンガリさんの後に続く。ジアミエンとエッちゃんとアッちゃん（誰？）は俺達とは逆の方向を向き、迫り来る白衣達を迎え撃つ。

俺達の進む先にも無数の白衣。俺の前を走るトンガリさんは、斧を片手で操り、声を上げる。

「それでは行くニャン♪続け薄葉っち！てめぇら全員皆殺し♪『インッテルッフィケレッ』！」

まさかの女声！？声が可愛い！

片手で身の丈程の斧を叩き降ろすトンガリさん（女声）。そのひ

と振りで走り抜けるのは赤い光。それは立ち塞がる白衣達を一瞬で吹き飛ばし、地面に転がした。
皆殺しとか言ってたけど、死んでないよね？

「薄葉っち！さあ早く！」
「お、おう！」
「すごーい！トンガリつよーい！」

はしゃぐミュゲを抱えるトンガリさんが、前方にある階段を駆け降りる。俺もその後に続いていった。

あれ？俺いらなくね？

そんな不安を抱き始めたその時、トンガリさんはジアミエンのように口で「ニャハハ」と笑うと顔を此方に傾け、その可愛らしい声を上げた。

「ま、天使の所までは私が護ってあげるけど、天使が出てきちゃ私の手には負えないから！その時は頼りにしてるニャン♪薄葉っち♪」

「頼りにしている」、そんな言葉をまともに受け取ったのは初めてだった。いや、ずっと貰っていたのかもしれない。俺がただ、拒み続けてきただけで。
俺は初めてこの言葉を受け取って、これ程に強いトンガリさんが俺を頼るということの意味を重く受け止め、更なる決心を胸に刻む。これが明華の背負っていたものなのか、と俺は拳をぎゅっと握った。

「はい！」

声を出さなきゃその気持ちが縮んでしまいそうで、トンガリさん

への返事に乗せて俺は気合を入れ直す。

オラクル研究施設二階、俺達は階段を駆け降り、敵の巣窟に突入する。

――

「ほらほら退いて下さい！食べちゃいますよ～！あはははは！」

救世は確実にアルマ酔いしている。デア・ピルゴスの地下で何かがあったようで、大量のアルマを取り込んでいるようだ。あの時のテンションハイな救世の復活である。

さらには治癒術によるアルマ強奪により、通りすがりざまに凄まじいスピードで白衣の敵のアルマを動けなくなる程度に奪っていく。敵を怪我させる事なく、楽々と無力化しながら次第にアルマを増幅させる。

「おい、あの女怖いぞ……しかも滅茶苦茶強くないか？」

「男だ」
「……凄いですね。こりゃ一人で制圧も出来ちゃうんじゃないですか？」

渋々走るハランが軽くドン引きしながら、ハランの子分？のメントルが賞賛の眼差しを送りながら驚愕する。
確かに今の救世なら軽く制圧しそうで怖い。アルマをどんどん吸収して強くなっていくし、止まることはまずないだろう。

……私、本当に必要なのか？

なんだかまた自己嫌悪に陥りそうになった時、救世は前方の敵が居ない事を確認すると、此方を振り向きスピードを落とした。

「済ちゃん。実はちょっとした話があるんです」
「……なんだ？」

救世はとろんとした酔った表情で囁く。

「今は大した相手も居ないので、消費が少ない……というよりもより力を増やせる私が対応をしてますが……もしも、伝承の天使が出てきたら、ちょっと勝手が違ってきますよね？私、正直勝てる自信ないですよ」
「何を言ってる……あの時は私に楽々と勝ったくせに……」
「あの時は力の桁が違いましたから。今回は良くてもあの時の１％にも満たないですよ。だから、囁やかな小細工しかできない私では、勝つ自信がちょこっとないんですよね。済ちゃんの怯えてる天使がどの程度なのかも私は確認していませんし」
「……怯えてない」
「怯えてますよ～。お兄ちゃんには全てお見通しですよ～だ」

……お見通しなのは分かった。だが、その悪酔いした時の絡みはやめろ。……こいつと酒は飲みたくないな。

「だから、もしもの時は、私に妙案があるんです！」

「……妙案？」

周囲に敵が居ないからか、足を止める救世。私はそれに合わせて足を止め、ちょいちょいと手招きする救世に耳を近づけた。

そして、その珍妙奇怪な妙案が私の耳を通った。

「……え？」

「ずっと頼りにしてますよ、済ちゃん♪」

再び救世が機嫌良く歩を進め出す。私は唖然としていたが、酔いながらも臆病な私から、卑屈な私まで、全てを見抜く兄貴の後ろ姿を見て、改めて敵わないなと感じさせられた。

「何を話していた？」と後ろで息を切らしながら尋ねるハランを無視して、私はその背中を追う。

「救世、向こうに下へ降りる階段が見えるが……」

「じゃあ、下に行きましょう！牢屋は地下にあると相場は決まっていますから！」
「適当だな！……まぁ、間違いなら隅から隅まで探すだけだ！」

オラクル研究施設一階、地下一階へと潜る階段を目前にして、私達の前に奇妙な相手が姿を現す。

「……何か変な方々が出てきましたよ？」

人間。しかし、その体からは翼や尾が生えていたり、人間の体には不似合いな巨大な腕や獣の足などを持ってる。

「テラスか？しかし、なぜオラクルの連中が……」
「いえ、あの方達はテラスではないようですよ……」

救世が怪訝な表情で足を止める。テラスじゃない？それなら、奴等は一体なんだと言うのか？

「体は人間です。でも……あの異形のパーツはテラスのものですね」
「人間とテラスの融合体？」
「分かりませんが……言えることがただ一つあります」

異形の怪物、それを前にして、救世はにやりと不敵な笑みを浮かべる。

あ、さっきからアルマを吸収してたから、もしかして余計に悪酔

いしてるのか？

「例え何であっても！今の私は止められないと言うことですよ！えへへへへ～～～！」

駄目だこいつ、早くなんとかしないと……

―――

オラクル研究施設。カサロラインから外れたイダニコ砂漠に佇むその施設は、かつては魔導研究の行われていた場所である。今ではオラクルの拠点となったこの二階建ての施設は、今では地下四階にまで拡張され、違法であったり極秘であったりする研究は、地下深くで行われている。

警備レベルも下層に向かうにつれて厳重になる。

地上施設には通常のオラクルの信者や研究員が配備。戦力的には

一人一人が大体一国の有する平均的な兵士一人程度のもの。それでも十分な戦力である。

地下施設には研究により生み出された戦力。

地下一階には新型魔導などの最新技術を取り入れた、特殊兵。此処から並の兵士では束になっても敵わないレベルにまで跳ね上がる。特にこの施設内に置いては、軍隊が攻め込んできても此処だけで封じ込められるであろう。

さらに下に行けばより危険な研究成果が待ち受ける。

地下二階にて、簡易召喚術という最新技術により召喚された伝承の天使軍団が網を張る。

未だに教育が行き届いていない事、正規の召喚術に比べてクオリティに安定性がないことから、まだ十分な戦力にまで育っていない者も居るものの、最新魔導を取り入れ、天才的に使いこなす一部はまさに圧巻の一言。地下一階の特殊兵とは比べ物にならない。

そして地下三階。此処にはオラクルの幹部が潜む。此処がオラクルの中枢が集う最重要フロアとなる。

伝承の天使、レイラを筆頭とし、その戦力は絶大。出来損ないの伝承の天使とは格が違う。

地下四階は収容施設。研究過程で生み出した危険な生物や、オラクルに忠誠を誓わせる過程にある伝承の天使、そして天使レイラが生み出した『例の化け物』の中でも制御の効かないモノを監禁するなどしている。

特殊な封印技術で、収容するものの力やアルマの動きを押さえつけるこの施設からは、逃れられるものは居ないという。

しかし、この情報は、この時から全く機能しなくなる。

オラクルの不正を暴き出さんとするズィスィの戦力、オラクルが捉えた天使を奪還せんとする天使の勢力、ズィスィの依頼を受けてオラクル制圧に手を貸すセルセラコミュニティ、その強力な三勢力は見事に地上施設の制圧に成功する。

その時点で、彼等は大分優勢に立ったと言える。

しかし、たった一人の天使の手により、戦況と施設内の構造は大きく変化する事となった。

「あっはは♪あんまり群れて動かれたり、好き勝手に暴れられたり、間違って複数人が地下四階にでも降りてこられたら困るのよね……！困るのは別に構わないけど、それじゃ不幸になれないじゃない♪」

伝承の天使、不幸ジャンキーの月島麗羅（ツキシマレイラ）。

彼女の行動は、彼女の属するオラクルも、対抗勢力も度外視した、自分の為の行動。

まずは彼女は自らの手で生み出した、『例の化け物』を収容施設から解放。

さらに、施設内の戦力に、独自に彼女の力を用いて、『例の化け物』を増殖させる。これにより、オラクル側はレイラが手綱を握る

ものの、強大な戦力を追加する事になる。

さらに彼女は、手元に繋いだある少女を、禍々しい笑顔で見下ろし、操る。

「サギニちゃん。早速始めて貰えるかな？」

魔女の森、フェガロフォスにて、彼女が捉えた少女の姿をしたテラス、サギニ。

その森一つを歪める強力な幻術を用いて、彼女はオラクル研究施設内を、目には見えない迷宮へと変貌させる。

気付かぬ内に戦力を分散させ、思う方向には進めない、迷いと孤立の迷宮。

「絶対に、『余計な人間』は地下四階には入れない事。そして、今ある戦力は極力分散させる事。いいかな？サギニちゃん？」

鎖と首輪に繋がれて、サギニはこくこくと大粒の涙を流しながら頷いた。

「その仕事さえしてくれていれば、その間は命を見逃してあげるね？」

仕事を止めたら？いや、仕事が終わったら？

恐怖がサギニの身を震わせる。しかし、逆らうことすら許されない。

「あなたを捕まえてきて、本当に良かったわ♪精一杯、長生きすることね？……あっはは！」

サギニはせめて、この仕事を全うしようと、なんとか生き延びようと力をまき散らす。

レイラの思うがままに、オラクル研究施設は完全に変容し、戦況を大きく作り替える。

一一一一

伝承の天使、天野兄妹がその異変に気付いたのは、伝承の天使誘拐の任務を終えて、オラクル研究施設に帰還した後の事だった。

敵襲である。

その情報が施設内を駆け巡り、天野兄妹はひとまず地下三階にて

教主イエレアスの指示を仰ごうとする。

混乱の中、ゆっくりと、やっとの思いで進む二人は、報告に向かう途中の地下二階にて、更なる異変に気付いた。

「兄貴。私達、確か地下二階にまで降りてきたよね？」
「ああ？そうだけどそれがどうした？」

足元まで伸びる長い黒髪がチャームポイント、さらに黒い翼を生やしたその女、天野櫛子（アマノクシコ）は、黒い髪で巻き取った誘拐相手アヤメを黒髪の動きだけで持ち上げながら、隣を歩く兄、黒髪をつんつん逆立てた鼻ピアスの男、天野哲哉（アマノテツヤ）に疑問を投げかけた。

「……何で、地下一階にある筈の『器術研究室』が此処にあるわけ？」

哲哉はへんと笑い、呆れ顔で妹をじっとり睨んだ。

「じゃあ、俺達が勘違いしてたんだろうよ。いちいちうるせえよ」

櫛子は依然としてぽかんとした表情を浮かべながら、前方を指す。

「じゃあ、何で……地下二階にある筈の『資料室』が此処にあるの？」

目の前にある扉を睨んで、次こそ哲哉は表情を変える。

「おいおい……なんだこりゃ。これも敵さんの嫌がらせか？」
「やっぱり何か変だって、兄貴！」
「……ったく、折角報告にいかなきゃならねぇって時に」

哲哉が苛立ち頭を掻いたその時、『資料室』と『器術研究室』の扉が同時に開いた。

バンッ！

「薄葉っち何処に行ったニャン！？あれ？さっきと出てきた場所が違う？」
「ウスハー！どこー？」

「くっそう！お前ら足早すぎるわ！俺を置いて行くな！……ってあれ？」
「ハランさん、何か此処、さっきも通ったような気がするんですけど。あっちの器術研究室の看板確かさっき見たと思うんですが……」

天野兄妹は、ぽかんとその二組の侵入者を交互に見つめる。

見つめられる侵入者も、兄妹に捕縛された黒髪の魔女も、気付く。

「ミュゲ!?ハラン!?どうして此処に!?」

「え?」

声を上げたのはアヤメ。惚けた声を漏らしたのは、ハラン。

アヤメは声を荒らげて、ハランとミュゲを交互に睨んだ。

「どうして来た!?此処は危険なんだぞ!?ハラン、お前には確か決してどちらかが捕まっても来るなと約束したよな……!?なぜ……来た……!」

荒らげた声は、次第に弱々しく萎んでいき、遂には悲痛に響く声となる。目を潤ませて、アヤメは宙吊りのまま、視線を地面に落とした。

ハランに返す言葉はない。彼はただただ唖然としていた。

「ハランさん?」

ハランの従者、メントルがその異変に気付く。ハランの視線はアヤメには向いて居なかった。

「お姉ちゃんを返せ!牛おじさんとひじきおばさん!」

「ひ、ひじきおばさん……!?」

「牛おじさん?……そりゃ、俺の事かよ餓鬼ぃ?」

「ミュゲ!やめろ!そいつらを挑発するな!」

「ミュゲちゃんやめるニャン!あいつら伝承の天使!薄葉っちがい

ない状態で、とんでもないのに出会っちまったニャン！」

ミュゲはキッと天野兄妹を睨み、暴れてトンガリの腕から逃れる。そして、地面にぺたりと着地し、抱えたボールを前に突き出した。

「お姉ちゃんを返さなかったら、ぼっこぼこのぎったんぎったんにしてぶっ飛ばしてやるっ！」

「ミュゲ！」

「はは……おい、聞いたかよ？こんな餓鬼が、伝承の天使を取り戻しに来た救世主サマだとよ！俺達をぶっ飛ばす？おもしれえギャグだわ！ははははは！」

「可愛い～♪でも後ろにいる化け物怖っ！」

天野兄妹が楽しげにケラケラ笑う。

ミュゲはぷーっと頬を膨らませて、ボールを地面に落とす。

「もう怒った！やっつけるからね、ひじきおばさんに牛おじさん！」

「やめろ！頼むから、ミュゲには手を出さないで！私は何でも言うことを聞くから！ミュゲ！あんたもやめて！」

アヤメの必死の叫びに、天野兄妹は残忍な笑みを浮かべて返答する。

「……俺、生意気な餓鬼、大嫌いなんだわ。見てるとぶっ殺したくなるんだよな～。この世界なら殺しても許されるかな？」

「ひじきってやっぱり私？……自慢の髪の毛馬鹿にされてるの？腹立つ～♪しかも、おばさん？傷つくわ～♪私、まだ二十歳にもなってないのに♪ピチピチの女子高生なのに♪……オシオキしちゃう？」

「やめて！」

二人の残酷な天使が笑顔で小さな少女に迫る。涙を流しながら叫ぶアヤメに耳も貸さずに、二人はその手を伸ばそうとする。

「これはまずいニャン……！」

斧を構え、前に出ようとするトンガリ。しかし、それより前に、動いた影があった。

コツン。

それは、アヤメを拘束する、櫛子の後頭部にあたった。ころんと転がる丸い小さなボール。櫛子は苛立ちを顔に浮かべて、そのボールの持ち主を笑顔で睨む。

「……ねぇ。今、何で私にボールぶつけたの？」

男は引き攣った笑みを浮かべて、ボールを投げた体勢のまま震えていた。今にも泣き出しそうなみっともない顔で、男は震える唇を動かす。

「ハ、ハ、ハァーーーーッハッハッハァッ！！き、貴様ら、子供に構ってこの堕天使ハランから目を離しても……い、いいのかッ！？わ、我に背を向けた途端に、我が右腕の『シャイニングパーフェクトダークネス』が貴様らを吹き飛ばすぞッ！？」

震えていた。所々で詰まっていた。そんな情けない虚勢を張る男に向けて、長い黒髪をうねらせる女は、笑顔で言葉を投げかけた。

「……ウザッ♪裏切り者の、臆病なポンコツ天使が、誰に、楯突いてんだよッ!?あァッ!?」

櫛子の豹変。ハランは一歩後ろに引いたが、無理矢理作った嫌味な笑顔を返し、冷や汗びっしょりでそのみっともないポーズを決めた。

絶対に、戦わぬと決めたのに……畜生……！

ハランが何を思い、そんな見え見えの虚勢を張るのか、背後に立つ、彼の根本にあるものを知らない従者は理解できなかった。

しかし、その臆病で嘘つきで卑怯な弱虫天使は、何かに突き動かされるように、叫びを上げる。

「だ、誰に、だと?と、当然貴様だ、愚かな犬よッ……！我が名は堕天使ハランッ!天に刃向かう暗黒天使だ!ポンコツは……貴様の方だろうがッ!!」

「……兄貴。私、こいつ殺すわ。そっちのオチビは兄貴が遊ぶんでしょ?」

「おお。……ま、終わったら手ぇ貸せや。鬱陶しそうなのも一匹い

るしな」

畜生、畜生、畜生、畜生……！

ハランは心で叫び続ける。しかし、引かない。

「来いよ、このひじきババアッ！」
「惨たらしくぶち殺してやらぁぁぁぁ！！」

堕天使は、誰にも見えない本心を胸に、迫り来る化け物を前に、一歩前に踏み出した。

ＥＰ２７：　開戦、波乱（後書き）

オラクル研究施設にて遂に戦闘開始！レイラの手により分断された侵入者達はどうなるのか？

堕天使ハランは天使櫛子に立ち向かい、天使哲哉がミュゲに手を伸ばす。泣きわめくアヤメの前で、何かが起こる？

そして、他の面々も、それぞれが敵と対峙する……

オラクル研究施設にて始まる悲劇とは？

遂に戦闘がスタートです！しかも、今回はかなりの多数視点に分断されるので、移り変わりが激しいです……分かりづらかったらごめんなさい！このあとも視点が多いですがご了承を……

ただの厨二病患者がでしゃばって参りました。真の主人公の見せ場はまだまだのようです……申し訳ない。それぞれに見せ場があるので、そうすぐに持ってくる訳にはいかないのです。

しばし、天使達の戦いにお付き合いくださいまし。

Ｅｐ２８：　紗羅葉兄妹（前書き）

まだまだハランさんのターンでございます

Ｅｐ２８：　紗羅葉兄妹

気付けば妹を抱き寄せる俺は、魔法陣の中心で、白装束の不気味な人間達に囲まれていた。

「よく来た天使よ」

一番派手な格好をした男は、腐った笑みを浮かべて俺達を歓迎した。

「お前達には、今日から我等の武力として働いて貰うぞ。まずは教育からだ」

、俺に、そして妹に手を伸ばそうとした男の手下。

その手に握るのは『首輪』。それをどうするつもりだ？

妹が泣き声を上げる。「静かにしろ」と手下が首輪を近づける。

お前ら、何をするつもりだ……！

落ちこぼれで誰からにも馬鹿にされていた臆病者は、生まれて初めて暴力を振るった。

―――

黒い翼を広げて迫り来る、天使という名の化け物を、堕天使ハランは懐から取り出した小さなボールを落として迎え撃つ。勿論、左腕を前に翳し、大袈裟に声を上げながら。

「我が左腕が疼くッ！喰らえ、『エターナルバイパーブラスト』ッ！」

「させないけど♪」

ただでさえ長い櫛子の髪が、更に伸びてハランを襲う。目前まで迫るそれを見て、ハランは足元のボールを踏み潰す。

ボッ！

その爆発音と共に、周囲は白い煙に包まれる。爆発音、そして突然視界を遮る白煙に、櫛子も哲哉も、その他その場にいる全員が怯まされる。

「え、煙幕……！小癪……！」
「チィ……！」

恐らくはすぐに突破される小細工。しかし、ハランは迷うこと無く、震える足を叩き、直ぐ様目の前まで来ていた髪の毛をかいくぐるように前方へ飛び出す。あらかじめ煙が立ち上がる事を予測していたハランだけが、櫛子の、哲哉の位置を理解し、それを躱すように廊下を駆け抜ける。

「うぜぇよ、雑魚がァッ！！」

哲哉が吠え、周囲の煙幕を強烈な風で吹き飛ばす！呪文の詠唱も無しに吹き荒れる風が、哲哉の周囲で目に見える煙という媒介を通して浮かび上がる。白い帯を纏うように立つ哲哉は、目前の状況に目を丸くした。

「おいおい……どういうことだ？……お前、俺とやりたいってか？」
「あれ？」

櫛子は慌てて周囲を見渡す。目の前から消えたハランを探して。そして後ろを向き、ようやくその姿を見つけた。

「ハァーーーッハッハッハァ！お前とやりたいかだと？馬鹿を言えッ！貴様一人じゃ役不足だ！二人纏めて相手をしてやろう！そうでなければ生温すぎるからな！」
「テメェ……！」
「兄貴……やっぱ、こいつ二人でぶっ殺そ♪」

ハランにとって、この二人の天使と対峙したことはある意味では

幸運だったと言えた。デア・ピルゴスで出会ったあの天使、罠や騙しといった類のものが全く通用しないあの天使が目の前にいたら、確実に終わっていただろう。

不意を打つ煙幕、それに怯んだ様を見れば、その天使はハランにとって戦いやすい……否、唯一相手をできる相手だった。

「天使の足元にも及ばぬ弱者よ。下がれ。この二人の天使は、我が邪悪なる力を解放するための生贄にするのだ！」

「ミュゲは弱くないよ！戦えるもん！」

「ひゅー！まさかの黒髪の天使様の登場ニャン！これならもしかしたら天使にも……！」

ハランは冷や汗をダラダラと流しながら、虚勢に満ちた笑みを浮かべる。

堕天使ハランは魔法が使えない。堕天使ハランは付術が使えない。堕天使ハランは器術を使えない。

堕天使ハランは魔導というものに、全くなんの才能も示せない。

彼は伝承の天使としてこの球界テッラに召喚されたにも関わらず、この世界に置ける『力』を何も有して居ないのだ。

そして、それは元いた世界でも同じ。

彼は喧嘩もできなければ、特別何に優れている訳でもなく、むしろ周りから大きく劣る、所謂『落ちこぼれ』と呼ばれる人間だった。

ハランは自らの派手な装飾を施した装いに忍ばせた、幾つかのマジックアクセサリや器術デバイスといった、『インスタント魔法』

の数と種類を確認する。

……チッ！あの天使共を相手にして、大分消費しているな……！

穏やかでない心中で、ハランは舌打ちする。

ハランにとっての武器、それは予め用意された謂わば『インスタント魔法』という道具、出来合いの魔法だけだった。

マジックアクセサリ、器術デバイス、それは共通して器術という『アルマを記録する魔導』を用いた、簡易魔法発動装置といえる。

マジックアクセサリは記録した魔法を一回きりだけ解放する。器術デバイスはアルマを溜め込めば、記録した魔法を発揮する事ができる。どちらも呪文詠唱、魔法の才能もなしに魔法を操れる便利なものである反面、やはり通常の魔法と違いデメリットも存在する。

まずはその殆どが使い捨てに近い性質だということ。

マジックアクセサリは当然一度の使用でゴミとなる。器術デバイスはアルマを放出すれば、再びアルマ充填が終わるまで使用は出来ない。比較的にチャージは容易だが、どうしても時間が掛かるため、器術に精通していない素人が戦闘中などに何度も利用するのは不可能なのだ。

更にその自由度のなさ。記録した魔法を発動するということは、記録した魔法しか使えないということ。つまり、これを使うとなると、限られた魔法しか扱えないのだ。魔法使いが自由に魔法を使い分けられる事を考えると、これはかなりのデメリット。そういった点が、どうしてもそういったインスタント魔法の類が戦場でメインで扱われない理由である。サポート程度に用いるものという認識が

強いのだ。

そして、何よりこの技術が『戦闘』では用いられない理由は、『出力の低さ』にある。

誰にでも使える魔法、それを実現する反面、その制御にはかなりの技術が必要とされ、当然強力なものは制御しきれない。今のところ、簡易魔法しか記録できないのが現状だ。故にこれは日常生活の支援などに用いられるもので、一部を除き、本来は戦闘で積極的に使うものではない。

しかし、ハランにはこれしか扱えない。彼の戦いは常に、オモチャの武器を片手に戦うようなものなのである。

そんな限られた手札の中で、彼が見つけ、貫いてきたその戦法は、『ハッタリとトラップ』という、多くの者から汚いと罵られるものだった。

「貴様らは既に我が術中に落ちたッ！」
「ハァ？何を言って……」
「足元がお留守だぞッ！喰らえ、『グランドファイア』ッ！」

ハランは残された手札の一つ、小型音爆弾マジックアクセサリをするりと袖から落とし、左手に押しつけ、地面に叩きつける！衝撃を受けることで発動する微弱な音爆弾は、バァンッ！と激しい爆音

を響かせる。明華に使った高性能型とは違い、ビックリする程度の音しか立てない、クラッカーと呼ばれる安物だったが、それでもやはり『ビックリする』程度の威力。その大袈裟な動作と、大袈裟なセリフが、その驚かしに「もしかして巨大な魔法を放つのでは」という錯覚を与え、天野兄妹を後退させた。

勢い良く飛び退き、音以外に何も起こらない事を遅れて悟った天野兄妹は、怒りに顔を歪め、声を上げる。

「さっきから舐めてんのかテメェッ！！！」
「舐めてなどいないさ……侮っているのだよッ！」

ハランはにやりと笑みを浮かべる。その挑発さえも、彼の仕掛けたトラップの伏線。天野兄妹は、思わず後退した屈辱に目をつり上げながら、報復に移らんと地面を蹴って、前進しようとする。

しかし、そこには煙幕弾と一緒にハランが落とした、地雷型のマジックアクセサリ。狭い通路で、それを見事に踏みつけた櫛子の足元から、突然火の粉が舞い上がる！

「あちゃちゃッ！」
「櫛子！？」
「足元がお留守と……言っただろうに？」

櫛子が上げた声に反応し、何事かと哲哉が意識を後ろに向ける。すかさずハランはその隙を突き、懐のボールを哲哉目掛けて投げつける！

櫛子の足元から舞い上がった火の粉は、小さな火傷さえ齎さない威嚇程度のもの。それを理解して意識を戻す哲哉はすぐにそれに気

付く。そして、目の前まで迫ったその小さなボールに、度重なる小細工の積み重ねによる苛立ちから、手に宿した風の刃で全力の一撃を叩き込んだ。

「いい加減……ウゼェんだよ、この雑魚がァッ！！」

風の刃は、その小さなボールを接触前に粉砕する。しかし、それさえもハランの想定の範囲内。壊されること前提の破壊起動型マジックアクセサリ。

パンッ！

破壊されたボールは破裂した。その中から、うっすらと霧のようなものを噴射して。

水を仕込んだ霧魔法。それがそのマジックアクセサリに秘められた魔法。

そこにハランが加えたのは、ほんの少しの小細工。

飛散した霧、それが怒りに目を見開いた哲哉の黒い瞳に染み込んだ。

「う、うぐあああああああああああああああッ！！？」

「あ、兄貴っ！？」

絶叫。予想も付かぬその目の痛みに、哲哉は廊下中に響く声を上げた。

「究極魔法、『マジックミストオレンジシャドー』……」

ハランが仕込んだのは柑橘類から取り出したエキス。それが霧として噴射されたのだ。ハランの小学校に通っていた頃の苦い思い出、クラスのガキ大将に吹きかけられた蜜柑の皮の汁から発想を得た、酷い小細工である。櫛子も兄の思わぬ悲鳴に驚き、声を上げる。

そして、その一瞬の隙、哲哉の目の痛みに悶える大きな隙を、ハランは見逃さない。

風の刃がアクセサリを砕くその瞬間から、ハランは既に駆け出していた。その右腕に、本当に宿している『とっておき』を放つために。

彼が愛した、彼を愛した変わり者の女が彼にくれた、最高クラスの器術デバイス。長年溜め込んで、限界量まで蓄えたアルマでも、起動は三回が限度。しかも、その力故、恐らくハランが扱えば一発で右腕がしばらく動かなくなる危険な兵器。しかし、彼はそれを二発撃つ事を決めていた。右腕が確実に壊れ、二度と使えなくなるかもしれない……それでも構わないと拳を構える。

右腕一本くれてやる……！十年間を犠牲にはしない……！たった一つの大切なもの、それくらい、例えクズでも護り通させろ……！

「ハラン……まさか、お前……！」

縛り上げられるアヤメが、息苦しそうに僅かな声を絞り出す。彼女は唯一知っている。ハランの覚悟を。彼女は「やめろ！」と叫びたかった。恐らくハランも無事では済まないその行動。しかし、彼女は叫べなかった。

ハランは言葉を発しない。鬼気迫る表情で、その遅い足で哲哉に迫る。今までの大袈裟な叫びも全て道具。無言で放つ、その一撃こそ彼の本当の最後の切り札。持ちうる手札は殆ど吐き出した。残るは僅かな手札と切り札二枚。

そして狙うは切り札二連コンボ。

目の前に、目を抑え呻く哲哉。その時に丁度櫛子が「兄貴」と声を上げる。そして、遅れてハランに気付く。櫛子はしかし、何かを企むハランを止める速度は有しない。既に手遅れ。ハランはそのまま腕を引き、拳を哲哉の腹目掛けて放たんとした。

喰らえ……ッ！

歯を食いしばり、覚悟を決めたハランの一撃。それは……

「がはっ……！」

さも当然と言わんばかりに、虚しく呆気なく潰された。

「舐めるんじゃねぇよ……この糞が……ッ！」

哲哉は目を抑え、涙の滲む左目で吹っ飛ばして地面に叩きつけたハランを睨んだ。

「俺の開発した魔法『風の鎧』はなぁ、一度発動すりゃあ暫くの間は自由自在に自分を取り巻く風をコントロール出来るんだよ……呪文もいらねぇ。ラグ無しで、直ぐになぁ！」

ハランが胃液吐く。強烈な風に投げ飛ばされ、地面に叩きつけられた衝撃は、貧弱な彼の体に相当なダメージを刻み込んだ。

「纏う風に意識を向けりゃあ空間把握もできる！目潰しなんざ無意味なんだよ……！ひゃはは！残念だったなぁ？また小細工で俺を苛立たせるつもりだったかよ！？そして、俺をストレスで殺そうってかぁ！？どれだけ面倒臭い決着だよ、あァッ！？」

哲哉は目を抑えながら、カツカツとゆっくりとハランに歩み寄る。

「ハランさん！」

「変なおじさん！」

櫛子の遥か後方で、ハランの小声の命令に従い、静観に徹していたメントルが声を上げる。ミュゲが足元に転がるハランに駆け寄る。ハランは朦朧とする意識の中で、垂れ下がるクリーム色の髪を見上げて、その少女の顔を見つめた。

……ああ、失敗だ。俺の人生失敗ばかりだ。

ハランは二度と訪れないであろうチャンスを潰した。残る道具で使えそうなものは、閃光弾に色つき粉末煙幕爆弾、小型音爆弾くらい。あとは弱小な魔法、哲哉の風にかき消される程度の弱小魔法だったり地雷型の道具のみ。隙を作るのに使える道具も、手の内がバレた今はそううまくは機能しまい。

ハランは痛みに耐えながら、必死で声を搾り出した。

「……そこの三角。そこの小娘を連れて……とっとと逃げるの…だな。……ここは俺に任せておけ……」

「何言ってるニャン！死にかけてる人間が！」

「演技だ……奴らの油断を誘う為の……な」

ハランは虚勢の笑みを浮かべる。

「だから邪魔だ……早く、小娘を連れて……行けっ……！」

「……お願い。ミュゲを連れてここから逃げて……！」

縛り上げられたアヤメも声を上げる。トンガリはその二人の言葉に潜む、覚悟を察し、ミュゲに駆け寄った。そして、その手を掴もうとする。その手を振り払ったミュゲは、キッとトンガリを睨んだ。

「やめて！ミュゲが変なおじさんのかわりに戦うよ！お姉ちゃんも、変なおじさんも助けるもん！」

「ミュゲちゃん……大丈夫ニャン。とにかく一緒に……」

「やだ！」

「言うことを聞け小娘ッ！！」

ハランは声を荒らげた。

ミュゲが驚き、次第にその瞳が潤み出す。

……何をやってるんだ、俺？

ハランは、感情的になって、すぐに平静を取り戻し後悔する。怒鳴り、泣かせかけた少女。その悲しい顔を見て、ハランは痛み軋む体を持ち上げ、最後の力で立ち上がった。そして、しゃがんで、泣

きそうな少女ミュゲの頭にぽんと手を乗せる。

「……大丈夫だ。なんたって俺は堕天使なのだから。神にさえ刃向かう、最強の天使なのだぞ？」

ハランは優しく笑った。

「さぁ、行け。……こいつらの死に様は、幼いお前の目には毒だ。大丈夫だ。お前の姉も、俺が必ず助けてやるから……だから……行け」

ミュゲはぽかんとその笑顔を見つめていた。潤んだ瞳をじっと弱々しい堕天使に向ける。

「茶番はもう済んだかよ？誰一人逃がしゃしねぇよ……俺ぁ今、最ッ高にイラついてんだ……！」

「……ったく、空気の読めない牛おじさんだニャン！」

斧を振りかざし、ハランとミュゲを飛び越え、トンガリが前に躍り出る。その斧を風の鎧で受け止める哲哉。

鍔迫り合いのような状況で、トンガリは首を後ろに傾け「にゃはは」と笑った。

「ミュゲちゃん、一人でも逃げられるよニャン？ここは、私が止めとくから、全力で逃げるニャン」

「……あっはは♪茶番茶番♪私も居ること、忘れてなぁい？」

櫛子が動こうとした時、その背後から飛びつく緑色の髪の青年メントル。

「んな……！？」
「……お前こそ、俺が居ること忘れてない？」
「……モブが、私の髪に、触ってんじゃ、ねぇよッ！！」

櫛子にしがみつくメントル。哲哉に斧を叩き込むトンガリ。天野兄妹の動きがそちらに集中する。それを横目に見て、ハランは深く息を吐き、ミュゲに精一杯の虚勢を張った。

「さ、後はこの堕天使ハランに任せておけ」

その優しい笑顔と声に、ミュゲはぽかんと立ち尽くす。

「どうした？堕天使が信じられないか？」

ハランの優しい問いかけに、ミュゲは全く関係のない『答え』をぽつりとつぶやいた。

「……おにい……ちゃん？」

天野兄妹は首を傾げた。事情の『一部』を知る、メントルとトンガリは呆然とした。

事情の全てを知る『当事者達』、ハランとアヤメは、その言葉の意味を理解した時、その唇を震わせた。

一一一一

紗羅葉蘭（サラハハラン）は当時、十五歳だった。

何処にでも居る、駄目で駄目駄目な十五歳である。

十三人の大家族、紗羅葉家。優秀な九の兄弟、その中に居て、彼は唯一の落ちこぼれだった。

成績最低、運動神経ゼロ、人望ゼロ、喧嘩は弱くて小学生にも負ける。仲間は彼を専らパシリとして使い、同級生からは馬鹿で駄目駄目なキモイ奴などというレッテルを貼られ、家族からも弟や妹からも、さらには近所のワルガキにさえも侮られる、ごく普通の落ちこぼれだった。

ああ、俺はクズだ。どうしようもないクズだ。お前らできる人間と一緒にするな。

葉蘭はそれを理解していた。その上でひねくれていた。どうせ誰も俺の気持ちは理解できない。誰もが同じことをできると勘違いしている、お前らなんかには。

葉蘭は嘘をつきながら、他人に媚びながら生きてきた。その腹の底に、歪んだ感情を秘めながら。

それでも彼は口に出さない。弱いから。クズだから。

そんな葉蘭は自分の為だけに生きてきた。他人に尽くすのは自分の身を守るため。必要のないところでは、平気で人を見捨ててきた。蹴落とせるのなら蹴落としてきた。下に立つ彼は、上に登れない彼は、他人を落とすことでしか、自分は勝てない事を知っていた。いや、そうだと信じていた。そんな彼の歪んだ感情が、更に蔑みを生む。

気付けば葉蘭は負の塊のような男になっていた。

そんな落ち目の男にも、たった一つの光があった。

兄弟全員優秀故に、いつも忙しく動いていた。落ちこぼれで高校にも行けなかった彼が、一番下の妹の、世話を押し付けられるのは、半ば当然のように思われていた。

一番下の妹を乗せたベビーカー、それを押しながら散歩するのが

葉蘭の日常。

一歳になるその妹は、そんな葉蘭にとても懐いていた。

子守は面倒だ、最初はそんな事を考えていた葉蘭だったが、楽しそうに自分にじゃれつく妹に、いつしか心を揺さぶられていた。

みんなが俺を遠ざける。だけど、妹は俺をいつも追い掛け回した。

みんなが俺を見下す。だけど、妹は俺を見上げてくれた。

みんなが俺を冷めた目で睨む。だけど、妹は笑顔を向けてくれた。

「よしよし鈴蘭。お前は本当に可愛いなぁ」

葉蘭にとって、妹、紗羅葉鈴蘭（サラハスズラン）だけが、宝物とも言えるとても大切な人だった。

そんな彼が、妹が、それに巻き込まれたのは何かの間違いだったのだろう。葉蘭は今でもそう思う。

妹を抱っこして、近所の公園にまで散歩に出ていた紗羅葉葉蘭。

そんな彼と妹を、突然その魔法陣は囲い込んだ。

「え？」

それは葉蘭が馬鹿だからではなく、恐らく優秀な彼の兄弟でも理解はできなかっただろう。彼はきょとんとした表情で、気付けば白い装束の男達に囲まれていた。

「よく来た天使よ」

一番派手な格好をした男は、腐った笑みを浮かべて葉蘭達を歓迎した。

「お前達には、今日から我等の武力として働いて貰うぞ。まずは教育からだ」

葉蘭に、そして幼い妹に、手を伸ばそうとした男達に、状況の理解すら出来ていない葉蘭は、本能的に、生まれて初めて牙をむいた。

その場に落ちていた鉄の杖。妹を片手で抱き、それを即座に拾い上げ、葉蘭は近寄る男の頭を殴りつけた。

男は地面にどさりと倒れる。

周囲の男が声を上げた。彼らにとっては、伝承の天使が牙を剥いた、その事実は相当な恐怖であり、想定していた最悪の事態だった

のだろう。

葉蘭は頭をフル回転させ、鉄の杖を振り回しながら全力で駆けた。狙ったのは一番偉そうな男。男を一発で叩き伏せ、混乱する男達の間をすり抜けて葉蘭は駆ける

リーダーを潰され、子分はあわてふためいていた。

葉蘭は駆ける。ひたすら逃げる。彼はとても運が良かった。妹一人を抱き抱え、彼は見事にその組織、オラクルからの逃走を成功させる。彼の人生で、数少ない自分自身の手による勝利だった。

見ず知らずの世界に投げ出され、葉蘭はひたすらに逃げ続けた。当時のオラクルの本拠地、フェガロフォスの森を死に物狂い駆け回る。

全ては大切な妹を守るため。たった一つの宝を守るため。

雨が振り出し、葉蘭は眠り始めた妹を庇うように抱きしめ、偶然見つけた大きな木の下で、雨を凌いだ。寒さから妹を守るように、震える体を丸めて、彼は全く理解の及ばない世界を見渡す。

そんな彼の目の前に、金色のポニーテールを煌めかせる魔女が、傘をさしながら現れたのは、葉蘭の運が招いた運命か。

ケンズの木、その葉を収集しようと訪れたのは、当時十五歳、奇しくも葉蘭と同い年の、フェガロフォス近くの隠れ里に住まう魔女の元で器術修行をしながら暮らしていた少女、アイリス。

「……綺麗な黒い髪」

「え？」

葉蘭は、初めて一目惚れされるという、貴重な経験をすることとなるが、それを葉蘭は今だに知らない。

少女、アイリスに導かれるまま、葉蘭と鈴蘭は魔女の村へと連れ込まれた。

アイリスに導かれたその家には、魔女と呼ばれる老婆のオルタンシアと、魔女に魔具を注文していたその国ズィスィの当時は王子であった現ズィスィ王、フラルが居た。

王子フラル。彼との出会いも、葉蘭がこちらの世界に訪れ恵まれた、最初の奇跡と言える強運が招いた偶然だった。

王子フラルは一目その黒髪を見て、葉蘭を伝承の天使と悟ったらしい。王家に伝わる嘘臭い伝承、それをも熱心に学んでいたフラルだからこそだった。

フラルはその異常を察し、震える葉蘭に優しく力強く語り掛けた。何があったかと。そして、私に出来ることならなんでも力を貸すと。

人を利用する事を知っている葉蘭は、その善意を利用しようとした。いや、当時の波乱にそんな余裕はなかっただろう。彼は藁にもすがる思いで、自分が話せる全ての事を不器用に話し、必死で助けを請う。

妹だけは、助けて欲しい、と。

葉蘭はフラルにこの世界、球界テッラの事、そして天使の伝承について聞かされた。

そして、絶望した。

――――呼び出された天使の兄妹は、いずれ成長し、他の天使達と共に巨大な災厄に立ち向かう運命にある

俺に、鈴蘭に戦えというのか？

冗談じゃない。鈴蘭を、危険な目に合わせられるものか。

白装束の集団。それを話すと、直ぐ様フラルはオラクルの名を出し、事態の深刻さを理解した。

オラクルはいずれ俺達を追ってくるだろう。

鈴蘭だけは、鈴蘭だけは、必ず、必ず、護り通す。

例え、全てを犠牲にしても、例え、俺の身が朽ち果てようとも。

そんな葉蘭の決意に、フラルは、アイリスは力を貸す。

そして、人知れず、ズィスィの天使の伝承に、一つの嘘が刻み込まれた。

オラクルの目を欺くために、仲間を求める他の天使達を騙すために、

葉蘭達は、一人の天使を『作り替えた』。

天使の証である髪と瞳を魔法で変え、身代わりとなる少女の髪と瞳を黒く染め上げる。

当時、自分達を呼び出した主要人物は殺したものと思い込んでいた葉蘭は、天使の身代わりを用意し、欺いたのだ。

愛する妹に、『ミュゲ』、フランス語でいうところの『鈴蘭』という名前を与え、自分に手を貸す優しい少女に、『菖蒲（アヤメ）』、英語で『アイリス』と呼ばれる花の名前を名乗らせて、偽の天使を作り上げた。

自分はデア・ピルゴスという天使の伝承の眠る塔にあえて身を晒し、そこの罠とアヤメとフラルから受け取った無数の魔法道具を用いて、派手に塔の支配者としてのその存在をアピールする。

フラルの家臣を傍に置き、オラクルが天使の伝承を悪用している確たる証拠を引っ張り出す為、堕天使を名乗り、オラクルの動きをズィスィに認識させる為に動き出したのだ。

最悪、自分やアイリス……今のアヤメを身代わりとして、ミュゲ……鈴蘭だけでも、オラクルから、天使達から守り抜く。

それがズィスィの『嘘の天使伝承』の始まり。

そして、三人の嘘つきの、たった一人の少女を護るためだけの、犠牲を伴う幻想の始まり。

ミュゲが、幼かったミュゲが、ハランの事を覚えている筈はない。

ハランもアヤメもそう思っていた。そう信じ込んでいた。

しかし、本物の伝承の天使、ミュゲは確かにその言葉を呟いた。

そして、次は声を大きく上げて、唖然としているハランにぎゅっと抱きついた。

「お兄ちゃん……お兄ちゃんだ……お兄ちゃん！」

ミュゲはわんわんと泣きながら、ハランな胸に顔をうずめる。

「ミュゲね……いっぱい強くなったんだよ！いっぱいお勉強したんだよ！いっぱい大きくなったんだよ！お兄ちゃんがね、ミュゲを見つけてくれるように、いっぱいいっぱい頑張ったんだよ！」

どうしてミュゲが、鈴蘭が、俺なんかを覚えているんだ？

「ミュゲ、まだまだ強くなるよ！まだまだお勉強するよ！まだまだおっきくなるよ！もっともっといい子にするよ！」

俺なんかを、俺なんかを……

「だから……だから……ひとりぼっちにしないでよう！もう……置いてかないでよう！」

うわあああん、とミュゲは大声で泣き出した。ぎゅっと小さい手でハランの服を握り締め、ぐっと体をすり寄せて、ひとりにしないでと声を上げた。

……俺はなんの為に嘘をついてきた？

……俺はなんの為に犠牲を支払ってきた？

……俺は今、なんのためにこの身を捧げようとした？

……鈴蘭を、ミュゲを逃がすため？

違う。

……ミュゲを、鈴蘭を守るため。

此処で一人、こいつを逃すことが、本当にこいつを守ることなのか？

違うだろう……！

ミュゲは俺を覚えていてくれた。一人にして欲しくないといった。俺を、俺を兄と認めてくれる、妹を本当に守るということは、妹を守る兄であることだろうが！

今まで嘘をついてミュゲを守った気になっていた。だったら、せめて、俺は兄であるのだという、妹を守る格好イイ兄であるのだという嘘をつき通す！

体が痛い？それがどうした！此処で嘘もつけないようじゃあ、俺はなにものでもいれないだろうが！

「……フン。何を言っている？さっきから言っているだろう？みんな助けて、みんなで帰ると。誰がお前を一人にするって？」

ミュゲの頭を撫でて立ち上がる。足が震える。しかし、不敵な笑みは忘れない。

「よくぞ思い出したな……我が妹よ。記憶の封印を解いたとなると、相当に強くなったと見える」

立ち上がり、座るミュゲを見下ろす。俺は笑えている筈だ。

ミュゲは涙をごしごし拭いて、歯を見せてにかっと笑う。赤ん坊の時に、俺に見せてくれたように。

「うん！ミュゲ、とっても強くなったの！あんなワルモノ、やっつけられるくらい！」

「フン、そいつはいい……！俺もこれからあの天使共を本気で倒そうと思ったところだ」

逃げろとは言わない。

「それではあいつらを共に倒し、アヤメも連れて、みんなで元いた場所に帰ろうではないか！……ついてこれるか、ミュゲ？」

「うん！お兄ちゃんと一緒なら、絶対に負けないよ！」

ミュゲが置いたボールをぽんと叩く。すると、姿を現したのは、丸い体に細長い手足の伸びた、自立起動魔具。

……はは、俺よりよっぽど強いんじゃないか？

だが、ここは兄として、格好いいところを見せるしかなかろうに！

腕を掲げて叫びを上げる。ダサくてショボいアホのポーズだ。

「ハァーーーーーッハッハッハァッ！！我等、堕天使サラハ兄妹！力を二分していた我等が、今ここに集った！相手は死ぬ！」

「はぁーっはっはぁ！あいてはしぬー！」

ミュゲの魔具も同じポーズを取る。あ、失敗した。妹に変なことを覚えさせてしまった。

「おいおい、マジかよ。まだやる気？いい加減ぶっ壊したいわそのきたねぇ顔！」

「あはは♪そんなに足を震わせてて、なぁーに言っちゃってんの？」

「これは武者震いだ！」

「むしゃぶるいだ！」

正直、体がやばい。もう、あの一発でぼろぼろだ。しかし、最後まで嘘はつきとおす。

「さぁ、始めようか。貴様らをあの世に送り返す、最初で最後の鎮レクイエム

魂歌……俺は遂に完全体、『堕天使ヴァルハラン』へと進化した！」
「ヴァ、ヴァルハラン？」
「ばるはらん！」

俺は強い兄なのだ。そんな最後の嘘が始まる。

Ｅｐ２８：　紗羅葉兄妹（後書き）

嘘つき堕天使ハランと、その本当の妹ミュゲが二人の天使に立ち向かう！ハランは嘘をつき通せるのか？切り札を隠すハランと、本気のミュゲが大暴れ！そして、施設内では、他の戦いもスタートする？

次回、「堕天使ハラン」に続く！

……はい。主人公差し置いて、三話位メインを張っちゃうハランさん。薄葉ごめんね……ｗ　次回で紗羅葉兄妹の戦いは終了です。伏線を一つ上げると、「アヤメさんが土下座を知らない様子だった」事とかですかね。あれはこの世界の文化ではないのです。はい、とっても分かりにくい伏線ですｗ

それと絶対に描写的に把握出来ませんが、一応他にも色々と伏線を張っておきました。それが分かるのは後程……

そろそろ主人公を！と思いますが、最大の見せ場に至るまで、もうちょっと周囲を固める人達にも活躍の機会を……

もう少々お待ちください！

登場人物が増えてきたので、必然的に新しい章の方が長くなるのです……

Ｅｐ２９：　堕天使ハラン（前書き）

まだ続くハランのターン

EP29：堕天使ハラン

「……どうやらもう……私の出番は終わりみたいだニャン♪」

哲哉の風と鍔迫り合いを繰り広げていたトンガリは、斧をブンと振り上げ、哲哉の横をすり抜ける。哲哉も標的を既に切り替えたようで、その動作に一切構わずに見過ごした。そのまま櫛子にしがみつくメントルを捕まえて、軽々と青年を抱えたままトンガリは二人の天使をすり抜ける。二人の天使が塞ぐ廊下、それを抜けたトンガリは、天野兄妹、紗羅葉兄妹、囚われのアヤメを振り向くと、後ろに飛び退きながら手を振るように斧を振り回す。

「んじゃー、伝承の天使同士の戦い、ゆっくり観戦させてもらうかニャン♪さ、メントル君だっけ？……一緒にゆっくり応援しようニャ！」

「……ハランさん……！頑張って下さいよ！負けるなー！」

二人の観客を前に、天使達の戦闘が開幕する。

初めに動いたのはミュゲ。

「とらちゃんいっくよ～！」

自立起動型魔具、とらちゃんの丸い体に跨り、パンとミュゲがそ

の頭に手を当てる！哲哉と櫛子も、少女が伝承の天使である事を分かった今、その挙動に余裕の表情は見せない。ミュゲは当てた両手から、とらちゃんのコントロールを開始する！

「器術デバイスきどー！オチューシャ魔具『イタイノトンデケー』！」

とらちゃんの細長い左腕が引っ込み、代わりににょっきり姿を現す新しい腕。それを見たその場に居る天使達は、ぽかんとその形状が示すものを呟いた。

「……注射器？」

とらちゃんの左腕には巨大な注射器。ギラリと光る針、そのある者には恐ろしいトラウマを植え付ける凶器をとらちゃんはぶおんと勢い良く振りかぶる！

「へっ……ガキ臭い武器だなぁッ！やっぱり天使といえども所詮はガキかぁッ！」

「あ、兄貴、あれは私パスっ！怖い！」

「櫛子、お前ガキかッ！」

「そりゃー！」

ミュゲの無邪気な掛け声と共に、その注射器を……

ハランの背中にぶっ刺した！

「んなッ！？」

「痛いっ！」

流石の哲哉も驚愕の声を上げる。そして、櫛子も目を覆う。「ミュゲ！？」と声を上げて、驚愕するアヤメを見上げて、ミュゲはにっと笑う。

「だいじょーぶ！」

ぢゅうう、と注射器の中身がハランの背中に押し込まれる。それと同時に光を帯びるハランの姿。それを見て、アヤメはその魔具の効力を理解する。そして同時に、器術士として、それの存在の意味するところの重大性を把握した。

「まさか……治癒術を記憶した器術デバイス……！？」

ハランの体を包む光が消えた時、ハランが驚きの表情を浮かべて、後ろを振り向いた。

「痛みが……！？」

「お兄ちゃん、これで痛いの飛んでったよ！これでいっぱい戦えるよね？」

ハランの体から、先ほどの哲哉の一撃で受けたダメージは完全に消え去っていた。ハランは自分の手をグーパーさせて、軽く動く体の感覚を確認する。そして、ミュゲににやりと不敵な笑みを送り、親指を立てた。

「流石は我が妹！これで俺はもう止まらない……ありがとう、ミュ

ゲ！」

「やっちゃえお兄ちゃん！ミュゲもやっちゃう！」

アヤメは驚きを隠しきれなかった。

器術はアルマを蓄える器を作り出す魔導。それの応用技術として、魔法をマテリアルに記録して、器術で蓄えたアルマを使ってその魔法を発動する『器術デバイスシステム』はかなり以前から発見されていた。最近では、より上位の魔法を組み込む研究も進んでいる。

しかし、あくまで使えるものは『魔法』。そして、アルマを蓄える事である程度の『付術』の硬質化などは最近では使用できるとされている。しかしその他の魔導、取り分け『治癒術』の器術デバイスの開発はまだ進んでいない。というのも、他人にアルマを分け与える治癒術のアルマ移動には、未だに謎が多く、アルマを治癒に結びつく形状に変換する手順は解明されていない。さらに、治癒術を用いる相手によってもそれは変わるらしく、まさにそのアルマ操作の解明は難関。『器術士の三大課題』の一つに挙げられる程の難題である。

ミュゲの器術デバイスは、それを見事に体現していた。それはつまり、ミュゲの作り出した器術デバイスは、世界で初というまさに表彰ものの代物だということだ。

「……あはは」

アヤメは苦笑いせざるを得なかった。

「ハンッ！それだけか！そんなクズを治した所で、アルマの無駄遣いだぜ？それも分からねぇとは、所詮ガキだなッ！」

しかし、そんな偉業も知らぬ、本当の愚か者は余裕の笑みを浮かべる。

そんな安い挑発に、ぷくーっと膨れるミュゲの反論を遮るように手を翳し、次はハランが余裕の笑みを浮かべた。

「フン！だったら無駄遣いか試してみるか？口だけ大将ッ！」
「……ああ、試してやろうじゃんか、このハッタリ野郎がァッ！！」

ハランは視線でミュゲにメッセージを送る。

こいつは俺に任せろ、と。

十年近くも離れ離れだった兄のメッセージを、ミュゲはしっかり寸分違わず把握して、笑顔でコクリと頷いた。

その妹の可愛らしい笑顔を見て、ハランはにやりと哲哉に不敵な笑みを送る。

俺の妹を馬鹿にした罰は、その身をもって思い知らせてやる……！

ハランの笑みは、次こそ虚勢ではなかった。それは痛みが引いて思考に余裕が出来た事から、そしてミュゲを守り抜くと決めた強い

決心から覚醒した。
ハッタリが信条の堕天使の、機転と発想で今までデア・ピルゴスの侵入者を撃退してきた悪知恵専門の頭がフル回転を始める！
そしてそれは、残る手札での哲哉の恐るべき魔法『風の鎧』の突破口を見出した。
ハランは早速一枚目の手札を切る。
「喰らえ！『シャイニングパーフェクトダークネスプロトタイプ』！」
「二度も食らうかよ！」
閃光弾型のマジックアクセサリを懐から取り出し放り投げる！デア・ピルゴスでハランが使ったもの程の威力はないが、至近距離で突然破裂すれば暫く視界を奪う程度の威力。しかし、哲哉も轍を踏むような真似はしない。
風の鎧の空間認識があろうとも、目に受けるダメージは極力避けたい哲哉は、その丸いアクセサリを前にして、目を閉じる。風の鎧による空間認識、防御がある故に、ハランの攻撃には動じない。飛んできたマジックアクセサリが破裂するのを空間認識で確認して、哲哉は歪んだ笑みを浮かべた。
「さっきから目潰しばっかり芸がねぇなぁオイ！？これでどうやって俺に勝つんだよォ！？」
「フフ……ハァーーーッハッハッハァッ！！貴様は罠に落ちた！」
「あァ！？」
風の鎧を刃に変えて、反撃に移ろうとした哲哉の前に、ハランは

再び複数個の球体を放り投げていた。また目潰しか？と哲哉が目を閉じようとしたその時、球体は破裂した。

パァンッ！

破裂した球体から、小さな粒子が飛び出した事を哲哉は確認した。それが閃光などの目潰しではない事を、自分の周りに纏う風に、その粒子が乗っかっている事から確認した哲哉は目を開く。

するとそこには空気中を漂う赤い微細な粉末が、視界を遮っている光景が広がっていた。

粒子は哲哉の周囲の風に乗り、ふわふわと色濃く漂っている。それは完全に哲哉の視界を覆い隠していた。

「チッ……！また目隠し……！」

「どうだ？貴様の風の鎧の弱点……それは常に身の周りに風を纏っている故、風に乗る目晦ましは、貴様の周囲から消えず漂い続ける事だ！どうだ！これで常に前が見えまい！ハァーーーーッハッハッハッハッハァッ！！」

ハランの高笑い、それに哲哉は更なる苛立ちを覚えた。

……下らねぇ小細工ばっかり仕込みやがって……！

それでも、その下らない小細工に僅かながら驚異に感じている自

分に、哲哉は吐き気がした。
風の鎧は基本的には哲哉の周囲を取り囲むように回転している。故に、砂埃やこういった粉末、煙などを巻き込んで、自分を包み込んでしまうのは事実。しかし、それは弱点というにはあまりにお粗末なものだった。

なぜなら、ハランを吹き飛ばした時のように、風は思うがままに動かせる。こんな粉、振り払う事など造作もない。

さらに、風による空間認識により、視界が奪われる事に驚異は感じられなかった。

しかし、此処でハランの仕掛けてきた小細工の数々が哲哉の脳裏に過ぎる。

こいつは何か、もっと姑息で汚い手段を繋いでくるかもしれねぇ……！

そんな不安が一度頭を過ぎると、それは一瞬で哲哉の思考を支配した。

風の鎧の空間認知は、身に纏う風を伸ばさなければいけない。故にコントロールしやすい風を削ぐ為、あまり広域に張り巡らせれるものではない。

そして何より、度重なる不意打ちの数々。それが、哲哉に状況把握の重要性を意識させた。

そうなると、人間が最も重点を置く感覚、視覚に頼りたくなるのは人間の性なのであろう。哲哉は風の触覚を伸ばす事よりも、自らの視覚を確保する事を選んだのだ。勿論、視界を遮る粉のみを排除して、ガードと攻撃に使う風は残して。

「兄貴ッ！前ッ！」

櫛子のその注意を、哲哉が聞き取った時には既に遅かった。粉の鎧の覗き窓から顔を覗かせた哲哉の目前には、既にハランの姿が迫っていた。

「んなッ……！？」

「懺悔しろ……貴様の神にッ！」

ハランは右拳を既に構えていた。哲哉は、風の触覚にも引っ掛からなかったハランに、反応が完全に遅れる。

何故……！？何故、こいつは風の触覚を切り抜けて、俺の目の前に迫っている……！？

哲哉の疑問が解決するその前に、ハランの拳は文字通り『加速』する。

「力を借りるぞ、アイリスッ！」

ハランの右腕、その包帯の下に隠された、アヤメの、アイリスの作り出した最高傑作器術デバイス。『付術』の概念を初めて器術に取り込んだアイリスの編み出した、『加速』の性質を放出する高出力加速装置。ハランの右腕は、最高出力で『加速』する。その解放のキーワードが、静かにハランの口から溢れ落ちる。

「『ぶち破れ』」

腕が一発で暫くは動かせなくなる程の、強引な、腕の可動域を無視した超高速のミギストレート。当然、攻撃に用いれば、その拳の接触の反動ダメージも免れない。故に一発限りの、二発以降は腕が二度と動かなくなりかねないまさに諸刃の剣。

今まで、如何なる者にも使わなかった、ハランの、アイリスの取って置きが、風の小窓から顔を覗かせる鼻ピアスの面に突き刺さる！

ボッ！

強烈な加速が音を置き去りにする。振り抜かれ、その顔面に拳が突き刺さってから響いたその音に、さらに遅れてバキッと音が響き、さらに遅れて哲哉は想像だにしなかった自らの今の状況に声を漏らす。

「……は？」

痛みを感じる暇も与えず、風の鎧を纏ったその体が浮かび上がる。

フッ……

風を切る音。目を見開いて静止する櫛子、ひょいと体を横にずらしてそれを躱すトンガリ、その横をすり抜けて、哲哉の体が空を飛んだ。遅れて吹いた風が、櫛子の髪をなびかせる。

ダァァァンッ！

激しい衝突音、資料室の扉がメキメキと軋む音。軋み、凹んだ扉から、ずりずりと滑り落ちて、鼻から血ををたらりと垂らし、乾いた笑みを浮かべる哲哉は、誰にも聞こえない声でぽつりと呟く。

「……あ、っはは……ありえねぇ……」

そのままがくりと首を垂らし、哲哉はその動きを止めた。纏っていた赤い粉を舞い上げる風の鎧が、赤い風の霧散という形で解除を知らせる。強烈な顔面パンチで、廊下の端まで吹き飛ばされて壁に叩きつけられた哲哉は、完全に意識を失った。

「あ……兄貴……？」

驚愕に身を固まらせる櫛子がぽつりとその呆気ない姿に目を触れることなく、呟いた。

ハランは知っている。

勝ったつもりでいる奴が、他人を見下している奴が、鼠みたいな雑魚に噛み付かれた時の驚愕に染まる顔を。

そして、その瞬間を知っていたからこそ、ハランはその一瞬で勝負を賭けに行く。

ハランは知っていた。

今の一撃で、哲哉を倒すことで、櫛子も動きを止めるであろう事を。それは根拠のない経験談。デア・ピルゴスで、自分を狙う無数の強敵を罠とハッタリで蹴散らしてきた、オラクルを罠に掛けようとただただ待ち続けてきた年月は、決して無駄ではなかったのだ。

動きを止める櫛子に、ガタガタと震える右腕を気合で持ち上げながら、右腕から体全体に染み入るように響く痛みを歯を食いしばって噛み殺しながら、ハランは一気に駆け寄った。理想は櫛子が哲哉の方を振り返る事。しかし、唖然と口を開いた櫛子は、確実にその隙を作っていた。

右腕一本、それを捨てても構わない。その覚悟でハランは再び右腕の力を解放せんとする。

しかし、そこで一つ、ハランの当てが外れた。

目の前に居る櫛子は、『人間』のそれではない異形を抱えていた。それは本来なら、人間では反応し得ないそのハランの奇襲に、寸前で対応した。

「……そう上手く行くかよ」

櫛子の翼がばさりと空気を打つ。そして、その異形のうねる髪の毛が、ハランの腕と体に巻きついていた。

哲哉の風の鎧、それと限りなく似た櫛子の髪の毛の鎧は、その質量と効果範囲で、既にハランの接近を把握していた。

黒い翼に黒い魔物のような髪、ハランの誤算は櫛子という妹の天使が、現時点で哲哉よりも圧倒的に厄介な存在であったことだった。

「兄貴程度をぶっ飛ばした位で……私が動揺するとでも!?あははははは♪」

櫛子は大きな笑い声を上げ、一度アヤメの傍にまで引っ張り上げたその髪の毛でハランの体を放り投げる!

「お兄ちゃん!」

ミュゲの操るとらちゃんにキャッチされ、再びの地面への衝突を免れたハランだったが、その表情は硬かった。

今ので決められなかったか……！

ぐっと痛む右腕を抑えながら、「すまん」とミュゲに一言礼を言い、ハランは地面に再び足を着ける。

その姿を見て、櫛子はくすりと笑った。

「……最期に教えて♪どうやって、兄貴の風の鎧を破ったの？」

ハランは、懐にはもう殆ど残っていない手札を確認しながら、櫛子との対話で時間を稼ぎ、何とか櫛子を打ち破る方法を、『最悪の事態』を回避する方法を思索する。

「……簡単な話だ。『風の鎧を躱して近付いた』、ただそれだけ」

「……なにそれ？私はどうやって躱したのかを聞いてるの」

まずは大まかな話をする。そうすれば相手は続く話に興味を持つ。そして、引っ張るように、決め手となるオチを極限まで引っ張る。そういったトークペースを意識しながら、ハランはあれこれ手札を脳内で試す。

「見て、躱した。それだけだ」

「見て？」

足りない。手札が圧倒的に足りない。

「俺の撒いた粉、あれは目晦ましの為に用いたのではない。いや、貴様に対しては、目晦ましといってもいいかもしれないがな」

一撃を叩き込む為に、どうしてもあの髪の毛を突破できない。そして、考えうる『最悪のシチュエーション』を回避する手立てが見つからない。今は話に耳を傾けている櫛子だが、もしも動き出されたらその時は相当にまずい事になる。

「あれは奴の風の鎧を可視化し、その効果範囲を回避する為に用いたものだ」

手札が足りない。だったら、この場にある手札を使うか？しかし、メントルやあのトンガリは離れて観戦しているし……となると、可能性があるのは……

そこまで考えて、ハランは思考を断ち切った。

何を考えている。ミュゲを手札に使おうなどと……そんな事ができるものか。

「あの粉爆弾は僅かな風でも簡単に舞い上がる大量の微細な粉を広範囲に撒き散らし、周囲の視界を奪うものだ。本来なら特殊なマジックレンズで自らの視界を確保しながら使うものだが……あの風の鎧に向けて投げ込めば、風に全てが巻き込まれ、奴の周囲にだけその目晦ましを張り巡らせる事ができる。そして、その後方に構える貴様の此方に対する視界も、それで遮られる訳だ」

考えろ。

「そして、その風の流れで流動しながら舞い上がる粉は、風の鎧の正確な位置まで教えてくれる。あとはそれを掻い潜れば、風の鎧の空間認識も回避しながら、貴様らの視界を掻い潜って、奴の近くま

で接近出来たというわけだ」
「……でも、それだと攻撃する時に兄貴の風の鎧に触れる筈。兄貴は常に全身に鎧を纏ってたのよ？」
「自分の構えた盾で目の前が見えなければ、視界を開く為には盾を退かすのが当然だろう？」

駄目だ。方法は……

ハランの思考が崩れかける。その時、背後から、少女の小さな声が一筋の光となってハランの耳に舞い込んだ。

「大丈夫だよお兄ちゃん……ミュゲも、一緒に戦える。もう、お兄ちゃんに頼るだけのミュゲじゃないから」

折角、嘘をついているのに……俺の妹は見透かしてくるのか。

ハランはクク、と苦笑して、自分の妹を、妹を見る自分の目を信じてみる事にした。

「……頼む」
「……うん！」

僅かな言葉で頷くミュゲ。長く離れていた筈なのに、一緒に居たのはほんの少しの間の筈なのに、その遣り取りは十年以上の付き合

いがある心の通じ合った存在であるかのように簡潔に、確実に取り交わされる。

そして、ハランは最後の切り札を切る。

「……大体分かったわ♪そして、あなたじゃ私を倒せない事もはっきり……」

「お喋りに夢中になって動きを止めるとは無様だなっ！！ハァーーーッハッハッハッハッハァ！さあ、行くぞミュゲ！」

「行っけ～～～～～～～！！」

とらちゃんが、瞬時にその手を伸ばし、ハランの体をがっしり掴む。そしてそのまま掬い投げるように、天井スレスレの高さにまでハランを櫛子目掛けて放り投げる！

「んなっ！？」

櫛子も、アヤメも驚愕した。突然の特攻、空飛ぶハランの人間大砲に。

「堕天使、翔ぶ……喰らえッ！『空中フライングジェットストリーム……」

「馬鹿じゃないの！？」

櫛子は即座に空飛ぶハランに髪の毛を伸ばす。それは楽々ハランを縛り、縛り上げるアヤメの傍にまでその体を引き寄せ捕獲する。

「ぐっ……しまった……！」
「あはは♪馬っ鹿じゃないの！？なに、いきなり血迷っちゃってんのぉ♪そんな単調な攻撃が私を阻めるわけ……」
「……なんてな」

ハランの不敵なその笑みに悪寒が走り、櫛子は見上げた視線を下に降ろした。少女跨る巨大ロボットがうねうねうねうねうねうねと体を振りながら、周囲の壁をバキバキと粉砕しながら迫り来る！

「よそみしちゃうとはぶざまだなっ！あんちゅーむしん『なんでやねんしょー』！」

とらちゃんの腕がぐりんと鞭のようにしなり、そのまま壁を抉るようにガガガガガガガと振り抜かれる！迫るその恐ろしい一撃を、櫛子は顔面蒼白で、硬化させた髪の毛の束でガードする！

ブチブチッ！！

「私の髪っ！？」

硬化した櫛子の髪の防御性能は、一本で刀剣を受け止め、束にすれば例え砲撃であったとしても余裕で受け止める。慌てて張った三百本相当のその束が、一気にギリギリの所まで引きちぎられる！僅か数本、まさに首の皮一枚で繋がったという表現が相応しいギリギリの所で、無数の髪の毛を絡ませたその細長い腕が停止する。ごくりと唾を飲み込んで、櫛子は目の前の少女の姿をした化け物の危険性を理解した。

「ざけんじゃないわよ！？私を殺す気！？」
「まだまだいくよっ！器術デバイスきどー！小型自立起動型詠唱代

理魔具……」
「ま、待ちなさい！」

櫛子は、急に目の色と声のトーンを変えて流暢に喋り出した少女に底知れぬ恐怖を感じ取った。

とてつもなくヤバイのが来る……！

その直感は、まるで彼女が初めてこの世界で、唯一恐ろしいと思える存在、レイラを見たときと同じようなものを感じ取らせた。

限りなくリアルな『死』のイメージ。そして、決して敵わないという圧倒的な『壁』のイメージ。

その彼女のトラウマレベルの感覚が、彼女に最後の手札を切らせた。

「この二人がどうなってもいいの！？その危なっかしいオモチャを捨てなガキンチョ！さもないと、あんたの大切なこの二人の……体をばらばらに引きちぎるわよ！？」

ミュゲはその口をぴたりと止める。

「ずるいよ……！」
「ふん……ずるくなんかないわ！あんたの兄貴のがよっぽどずるいわよ！手元にある道具を使う事の、どこが卑怯なのかしら♪」

想定しうる最悪の事態、それは囚われのアヤメを用いた『人質』。
それだけがハランの懸案事項。

ならばそんな問題を残しながらなぜ、ハランは動いたか？

答えは簡単、ハランはミュゲという切り札のお陰で、既にその攻略方法を見出していたのだ。

櫛子は気付かなかった。自分の頭上で縛り上げる一人の男が、呆気なく捕まるその瞬間に、自分の右腕を逃がしていた事に。そして、櫛子の魔法によるその髪の毛の動かし方に、利き腕を扱う時のような無意識な『とある癖』があることを、ハランに見抜かれていた事に。

「ああまったくだ」

ハランはその右腕を、自分を縛る髪の毛に掛ける、そしてそのままその言葉を口にする。

「『ぶち破れ』」

加速。それによる勢いは、髪の毛を掴んだ腕を大きく動かす。

ブチブチ！

その人一人をぶっ飛ばす凄まじい勢いは、拘束する髪の毛を勢い良く引きちぎる！

「あ！？」

櫛子が思わぬ感触に、視線を上に向けた。拘束を引きちぎり、空中に放り出されているハランの体。

「貴様は髪の毛で、『まずはものを掴む』癖がある！そして、『自分の右上にそれを一旦運ぶ』癖もな！飛びかかれば、きっとお前は俺をアヤメの傍にまで持ち上げて運ぶと踏んでいたぞッ！」

ハランはにやりと嘘の笑みを浮かべながら、軋む右腕をアヤメを拘束する髪の毛に引っ掛ける。そして、そのまま、腕が吹き飛ぶ覚悟を決めて、脂汗をにじませながら再びその言葉を口にする。

「……駄目っ！ハラン！三発目を撃ったら……！」

「俺達を邪魔する全ての壁を……『ぶち破れ』ッ！！」

ハランの渾身の叫びと共に、アヤメに巻き付く髪の毛の拘束がブチブチと引きちぎられる！そして、先に転落していくハランは、右腕をぶらりと垂らしながらも、地面に叩きつけられながらも、直ぐ様その身を足と左腕で動かし、アヤメの体を全身で受け止めた。

「うぐっ……今だ、ミュゲ……ぶちかませッ！！」

「お兄ちゃんなら絶対お姉ちゃんを助けてくれるって分かってたよ

！」

とらちゃんの口らしき穴から、ぽこぽこと小さな蛙が吐き出される。既に地面には数匹の蛙型の自立起動型魔具が降り立ち、歌を歌っている。

自らの拘束を、自らの自慢の髪を続け様に引きちぎられ、人質という武器を失い、視線を長く逸らしていた櫛子は、遅れて目の前に繰り広げられる蛙の合唱の正体を遅れて悟る。

「じゅ、呪文詠唱……！？」

蛙はミュゲの可愛らしい声で歌うように呪文を唱える。九匹の蛙は、別々の呪文の歌を、並行して、バラバラに歌っていた。

人間には実現不可能とされた『複数魔法同時使役』。その夢の領域が、とらちゃんという指揮者の元で、蛙の合唱団という形で広がっていた。

「小型自立起動型詠唱代理魔具『かえるのうた』！それいけとらちゃん！九重詠唱『キューシニイッショー』！」

ゆらりと櫛子を風のケージが捕縛する。光の結晶が風に乗ってケージを彩る。光は加速し、風のケージの中身を覆い隠す。中でゴウゴウと激しい音が響く。次第に中の音が聞こえなくなる。

中で何が起こっているのか？想像すると怖くなるような風と光のケージの沈黙。

そして暫くの沈黙が続き、それを破るようにとらちゃんに跨るミュゲがパンと手を鳴らす。

「これで、とどめっ！」

パァンッ！と風のケージが弾けて、どさりと櫛子が地面に崩れ落ちる。

髪の毛と服のあちこちをちりちりと焦がし、羽をボロボロにしながら、櫛子は涙目で立ち上がることなく、ぶつぶつと呟いていた。

「ごめんなさい……ごめんなさい……マジでごめんなさい……」

櫛子の中に、新たなトラウマが刻み込まれたようだった。

壁にもたれ掛かり気絶する哲哉、地面に這い蹲り戦意喪失する櫛子。オラクルの伝承の天使、天野兄妹は完全に戦闘不能に陥った。

「これにて決着、みたいだニャン♪」

トンガリの一言と同時に、アヤメの体を受け止めた衝撃により悶えるのを我慢していたハランが、深々と息を吐き出した。

「はぁーっ！はぁーっ！」

「……ハラン」

アヤメがハランの左腕に抱き寄せられたままに、小さく声を漏らす。

「……どうして来たの。……私達のどっちかがオラクルに捕らえられた時は、絶対に助けに行かないって約束したのに……ミュゲの安全を守るために、余計なことはしないと約束したのに……しかも、こんなにボロボロになって……！」

横たわるハランの右腕は既に感覚がないほどにだらりと意味なく垂れていた。事前のミュゲの治癒術で、ベストコンディションにまで回復していた体のお陰で、限界の二発を超えた三発目の『加速』を撃てたのはある意味奇跡と言えるだろう。ハランの執念とミュゲの力が、その捨て身の最後の一発を生み出した。

アヤメは震える声で、ぎゅっとハランの服を握る。その体を受け止めるハランには、その体の震えが痛いほどに伝わってきた。怖かったのだろう。元々は大人しく、優しい人間であったアヤメ、アイリスを思い出し、ハランはちょっと気まずくなった。

……というのも、ハランは元々は助けに来るつもりなどなく、約

束通りにミュゲの為だけにアヤメを見捨てるつもりでいたのだ。それを無理矢理暴走気味な伝承の天使に引き連れられて、ここに来てしまっただけなのだ。

いざ、こういう状況になると、ハランの中のアイリスに対する罪悪感はどんよりと影を落とした。

……どうしたものか。ここで正直に言ったら、アイリスを傷付けるんじゃなかろうか？

――ハランは自分が汚い人間である事を承知して、アイリスを傷付けない為の卑怯な嘘をつくことに決めた

「フン、俺は堕天使だぞ？そんな約束など守らんわ……」

正直、上にいつまでも乗られていると息も体も苦しくて仕方がなかったが、ハランはそれを言わなかった。

「……今まで、すまなかった。優しいお前に下らない演技を強要して、ミュゲの為にお前をずっと偽らせてきた。本当は大人しくて優しいお前に強がりまでさせて……本当にすまなかった。そして、ありがとう。……無事でよかった、アイリス」

感謝と無事を安心する言葉は本心ではあった。しかし、僅かに混じえた自分の嘘に嫌気がさす。そんな感情さえ嘘で覆い隠すように、ハランは不敵な飾り物の笑みを浮かべた。

「アヤメで……いいよ。……あなたが、くれた名前だもの。……うぅ」

アヤメのその感情を噛み殺すような辛そうな表情。まるで泣くのを我慢するような表情に、ハランは胸を痛めた。

「はいはいミュゲちゃん、向こうにちょこっと行ってましょうニャン♪ほらほら、メントル君も♪」

「にゃはは」と笑いながら、とらちゃんをボールに戻したミュゲを抱えて、メントルを急かしながらせかせかと廊下を駆け回る三角コーンを被った女、トンガリ。

「え？でも、ハランさんを……」
「メントル君、空気を読むニャン♪」
「メントルくん、くうきをよむにゃん♪」

ミュゲはトンガリの片手運搬が気に入っているようで、楽しそうに足をバタバタさせながらトンガリのモノマネをする。あたふたと空気を読めないメントルを斧の先でツンツンしながら、トンガリは廊下の曲がり角まで、ハランとアヤメ以外のお邪魔虫をはけさせる。

「それではお二方、ごゆっくり～♪気が済んだら、呼んでくださいニャン♪」
「ハランさん！マジ格好よかったっす！見直しました！フラル様の命で嫌々お付き合いしていた自分が恥ずかしいっす！お慕いします！だからもう、プリンの件は水に流しても……」

「空気を読め♪」

斧の柄で、メントルをぶん殴って曲がり角に引っ込めさせ、「にゃり」と笑ってトンガリがミュゲと一緒に引っ込んだ。

……あの変な奴、やってくれるな。

ハランはその気遣いに感謝しつつ、そっとアヤメの頭を左手で撫でた。

「……ミュゲは今は見ていない。怖かったろう？今なら存分に泣いていい。本当にすまなかった」

それはミュゲを預けて、強い姉を演じる事を強いてきた、アヤメに対する謝罪。勿論、ハランもそんな言葉で許してもらえるとも思っていない。ただの自己満足。

アヤメがその謝罪の言葉の意味を理解する事はなかったが、緊張の糸がぷつりと切れたように、アヤメは嘘で塗り固められた魔女の仮面をそっと外した。

「うぅっ……ううぅぅ……！……諦めてたのに……諦めてたと思ってたのに……！あなたが来てくれた時……とっても嬉しかった……喜んじゃった……ミュゲの前では強いお姉ちゃんでいようと思ってたのに……ごめんなさい……」

「謝るな。……お前は鈴蘭を、ミュゲをあんなに立派に育ててくれ

た。守ってくれた……本当に感謝している」

嗚咽を漏らすアヤメは、遂に声をあげて泣き出した。ハランの胸に顔をうずめるアヤメを、ハランは黙って受け止めた。

「怖かった……怖かったよ、ハラン……！……ありがとう……来てくれて……！……やっぱり私……あなたのことが……大好き……！」

「ああ……って、え？」

ハランがその言葉の意味に気付いたのは、数テンポ遅れての事だった。

恋とかそんなものには無縁の堕天使が、初めて女性にドキッとした瞬間であった。

「ニヤニヤ」

そんな様子を「ニヤニヤ」見やるトンガリと、顔を赤くして凝視するメントル、そして無邪気に微笑みながら見つめるミュゲに、ハランが気付いたのは照れ臭くなって顔をアヤメから逸らした瞬間だった。

「き、貴様らぁ！何をみているッ！？」
「え？……やだっ！……うぅ～～～…！……ミュゲッ！」
「うげぇあ！？」
「あ、ごめん！」

顔を真っ赤にしながら、ハランの胸に手をついて身を起こすアヤメ。その体重の掛かったひと押しに、顔が真っ赤なハランは凄い悲鳴を漏らした。

「お熱いですニャアお二人さん……♪妬けちゃうニャン☆」
「やけちゃうにゃん☆」

くすくすと楽しげに笑うトンガリとミュゲ。その横で、茹で蛸のように真っ赤になったメントルが、ばたりとオーバーヒートを起こして地面に沈んだ。

一一一一

こんな時に包帯を常備していると便利である、とハランは感覚のなくなった右腕を包帯ににぶら下げながら思う。

さて、これからどうしたものかと考え始めたハランは、きっと何処かであいつらに毒されたのだなと苦笑する。

「ウスハの所にいこー！」

そんな心境の変わり始めたハランの背中を再び押すように、とらちゃんに搭載された拘束用魔具で、赦なく戦闘不能の天野兄妹を拘束した妹、ミュゲが声を上げる。

「ウスハ？」

聞き慣れない名前に怪訝な表情を見せるハランから、アヤメは色々と気まずそうに目を逸らした。勿論、照れている訳ではない。

「妹のアキカを助けにきたんだって！ミュゲ達も助けてあげよ？」

ハランは少しばかり驚いた。アキカ、その名前には聞き覚えがあ

ったからだ。

……となると、あいつの兄か。まさか、ミュゲと繋がっていたとは……

ハランは今度は不快を示さず、楽しげに、不敵に笑んでいた。

――――天使の伝承、その運命は本物か

「丁度良い……！」

拒んだハランを強引に此処に連れてきてくれた天使。ハランは、その天使に、今では少なからず恩義を感じていた。

「借りたものは必ず返す……それが堕天使……！」

恩義に答える為、コケにしてくれた化け物に、オラクルの連中に借りを返す為、そして何より強い堕天使の兄を演じる為、ハランは再び立ち上がる！

「行くぞミュゲ！もう一暴れだ！」

「うん！」

紗羅葉兄妹に続くように、アヤメもミュゲから受け取った銃型魔

具を片手にくすりと笑う。

「ウスハとハランを会わせるのも色々と不安だしね。私も行くよ。きっちり私も借りを返したいしね」

その様子を「にゃはは」と眺めながら、三角コーンのトンガリも笑う。

「私も薄葉っちの案内の仕事があるしニャン♪きっちりこなさないとジアミエンに怒られちゃうしニャン♪それに、ミュゲちゃんの傍が一番安全そうだしニャア」

最後に緑髪の青年、メントルも声を上げた。

「何処までも付いていきます、ハランさん！」

堕天使ハランは声高々に動き出す！

「ハァーーーッハッハッハッハァ！さぁ、始めるぞ！天への反逆をッ！」

「全く、覚えのあるアルマがあると思ったら……また、あなたでしゅか？」
「救世、もう、お前酔いすぎだ……」

ハランとメントルの二人とはぐれた才羽兄妹は、奇妙な魔法陣の描かれた部屋を訪れていた。
其処は救世がアルマ探知で探し出した場所。その部屋の奥には、二人も見覚えのあるテラスの少女が鎖に繋がれていた。
テラス、サギニは怯えた表情で叫ぶ。

「ひっ！あの時のっ！？こ、殺さないで！違うのっ！脅されてやってるだけなの！」
「いや、殺すって……そんなことしましぇんよ？えへへ」
「救世。いい加減にしろ。そろそろ構えろ」

過剰に吸収したアルマの酔いで、ベロンベロンにふらつく救世がひらひらと手を振る。それを肘で小突いて、済は部屋の中心で、巨大な筆を抱えながら踊る人影を睨む。

「あれれ～？この部屋には誰も、天使さんでも入っちゃダメですと言ったはずですけど～？あ、もしかして、侵入者の方の天使さんですか～？あら、いらっしゃい～♪」

女はのんびりと喋りながら、くるくる踊る。いまいち緊張感の感じられない女である。

「多分、サギニちゃんの幻術を解きに来たんでしょうけど～、私、レイラちゃんにお守りを任されてるんですよ～」

レイラという言葉に済が眉を動かす。そして、僅かに身を震わせた。

「本当ならば、そろそろオラクルでの研究も潮時ですし～、『首輪』のデータも取れましたから～、御暇しようと思ってたんですけど～～うっかり大事な秘密をレイラちゃんに握られちゃって～～言いなりなんですよ～～～～」

「秘密？」

女はにっこり首を傾けて笑う。

「レイラちゃんもこの騒動の終わりには、オラクルを見放すそうですから～～それまでは、私の仕事の邪魔しないでもらえます～？」

「ふざけるな！聞けるかそんなこと！」

「そうですか～、だったら～」

声を荒らげる済に、謎の筆女はにっこりと微笑む。

「精一杯邪魔させていただきますね～？」

謎の女の指を鳴らす合図と共に、ぼふんと突然、十数人もの黒髪

の男女が姿を現す。

「黒髪……伝承の天使……！？」

それは間違いなく伝承の天使。その全てが首に黒い首輪を付けて、虚ろな目をしている。

その不気味な天使達に、救世と済は取り囲まれた。

「それでは実験、スタートです～～～♪」

謎の女の号令と共に、天使達は一斉に才羽兄妹に襲いかかる！

Ｅｐ２９：　堕天使ハラン（後書き）

天野兄妹を打ち倒したハランとミュゲの紗羅葉兄妹。その一方で、無数の天使を従える謎の女との交戦を開始する救世と済の才羽兄妹。オラクルの影で暗躍する、謎の女の正体は？

次回、「オラクルの闇」に続く！

はい、相変わらずのハラン回でございます。これでようやくハランの戦闘はおしまいで、次の場面へと移ります。それでもまだ出てこない主人公を忘れないであげてくださいｗ　でも、確実に出番は迫ってきておりますｗ

今回は詰め込みたい部分まで強引に詰め込んだので、少し長めでございますが、ご了承ください。

ＥＰ３０：　オラクルの闇（前書き）

今回は才羽兄妹サイド。そして……

ＥＰ３０：　オラクルの闇

地下四階の地下収容区画。

今はレイラの仕組んだ幻術の迷宮の影響により、殆どの人間の侵入が阻まれている。

牢屋に閉じ込められた無数の『出来損ない』や『実験生物』は、今や様々な意図の元で外部に駆り出されており、今この区画に、この階層に残るのは、たった二人の天使だけだった。

鎖で腕を封じ込められ、特殊な結界の張られた牢屋で何一つすることを許されない囚われの天使、明華は、格子に額を押し当てて、ぽつりと弱々しく言葉を吐いた。

「兄様……」

デア・ピルゴスで兄に会えると思っていた。兄に謝れると思っていた。しかし、情けなく堕天使に負けて、そして訳の分からぬままにこうして捕まっている。全ての歯車が狂ったような、今までに味わったことのない挫折に、そして何より兄に対する罪悪感から明華は僅かにその目を潤ませた。

「え？どうしたの？大丈夫？」

その様子に気付いた、明華を見張る天使の少年、月島流河（ツキシマルカ）は心配

そうに牢の中を覗き込んだ。

「お兄さんがどうかしたの？」

「……酷い事しちゃったんです。私だけは、やっちゃいけなかった事を。だから、謝らなきゃいけないのに……って」

私はどうして敵にこんな事を話しているのか、と明華は途中で口を噤んだ。

ルカはその言葉を聞き、困ったような表情で微笑むと、格子にもたれかかるように体育座りをする。

「そっかぁ……でも、そんな風に君に想ってもらえるお兄さんは幸せだと思うけどなぁ……」

「そんなことないです……」

「僕だったら幸せかな？僕はそんな風に思われる程の人間じゃないから。あはは、ごめん。愚痴っぽかったかな？」

敵であるはずのその天使は、酷くくたびれた印象を与え、敵意の欠片も感じられない少年だった。まるで、励ますつもりのような、そんな穏やかな言葉を送るルカに明華は自然と視線を向ける。

「きっと、素敵なお兄さんなんだろうね」

「……はい」

「……だったらきっと、そのお兄さんは君を助けに来てくれるよ」

「え？」

ルカはぼんやりと呟く。

「僕には分かるんだ。僕は勘と運だけは、いいからね」

ルカの向けた微笑みの意味を、明華は理解できなかった。

――

丸い風船帽子、その隙間から垂れる薄紫色の髪、顔には目立つ赤縁メガネ、だぼだぼ白衣はだらしなく袖を垂らし、あちこちに染料の汚れがこびりついている。黄色い長靴にも様々な色の汚れを付けて、その汚れの原因であろう、虹色の絵の具を先端に染み込ませた身の丈程の巨大絵筆を躍らせるその女。

千切た無数の首輪、そして地面に沈む無数の黒髪の天使の中心で、これといって焦る様子も動じる様子もなく、笑顔でくるくる踊り続ける。

「あれれ～？やられちゃいました～？しかも、的確に首輪を～？どうして、首輪を狙ったんですか～～～？」

その光景を作り上げた二人の黒髪、才羽兄妹の兄、救世はほわほわとした様子で得意げに声を上げる。

女はだんと地面を蹴る。すると、ぼわんと黒髪の天使達は忽ち姿

を消した。

「全員に共通した首輪、様子のおかしい人達、どう考えてもその首輪が怪しいでしょう！」

「あれま～、やっぱりこの首輪怪しすぎますよね～？これから用いる場合にはデザイン変更と強度調整が必要かもですね～」

女はくるくる回りながらむふぅと奇妙な声を漏らした。

「やはり、その首輪には何かあるのか？まさか、救世の言った事が当たるとは……」

「きっと、あの首輪は天使を制御するためのものなんですよ！呼び出した天使を確実に手先にするための洗脳器具！それを付けた人間は意のままに操られて……」

「ご名答～～～すごいですね～～～」

襲いかかる黒髪の天使達を前に、救世は済に「首輪を狙って」と指示を出した。動きも遅く、特別な魔法も使ってこないその天使達の首輪を狙って攻撃する事は容易だった。そして、首輪を落としたその瞬間に、天使達は糸の切れた人形のように地面に倒れたのだ。

「通称『首輪』。技術大国ズィスィの裏で、太古より伝わる『洗脳魔具』。様々な魔導技術の複合、応用により作られたものです～～。これの発祥はズィスィの度重なる天使降臨の儀式の『失敗』によりまして～～～あ、長々とごめんなさいね～～？これでも一応、研究者でして～～～特に最近では『天使伝承』に大きく携わっているのでつい熱くなっちゃったんですよ～～～」

『天使伝承』、その言葉に済は僅かに眉を動かす。しかし、そんな反応を気にも留めず、女はくるりと回ってようやく踊りを止める

と、帽子を外して一礼した。

「初めまして～～～見事なお手並みでした～～～。『失敗作』が、ああも簡単にやられる所を見ると……あなた方は正規の手順を踏んだ『成功例』という事ですか～。いやはや初めて拝見いたしました～。あ、名乗り遅れましたが私～～～『シェーヌ』と申します～～今はオラクルで『召喚術士』をやらせて貰ってます～～～！絵描きや教師も昔はやってました～～～！よく、『多芸な女だ』と言われる天才さんです～どうかよろしく～♪」

済は少しイラっとした。

「んっん～～～、それより～、『失敗作』は使い切っちゃいましたし～～～、どうしましょうか～～～？これは、私が戦わなきゃいけないんでしょうか～～～？うわ～ん、レイラちゃんひどいです～～～！」

済は直ぐ様駆け出していた。駿足で迫り、握る刀をシェーヌ目掛けて振り抜く。しかし、その速度にふわふわとした感じの女、シェーヌは意外なまでの反応速度を見せる。その巨大絵筆を盾に、その斬撃を受け止める。

鍔迫り合いをしながら、シェーヌはぐにゃりと口を歪ませ笑う。

「……も～～～、不意打ちとか酷いじゃないですか～～～？」

「悪いな。私情に走った。……あまり『失敗作』とか言われると…

…他人事でも腹が立つんでな」

「でも～、『失敗作』は『失敗作』じゃないですか～～～？」

済は再び刀を離し、連続でその攻撃を叩き込む。それをへらへらと笑いながら、シェーヌは筆でガードする。

「本来の『天使の伝承』で呼び出される天使は、一国に一組なのだそうです～～～。いえ、正確には『天使を一組呼び出せる土地の括りがこの大陸における国』、とでも言いましょうか～～～？これは歴史の問題になるのですけれど～～～。大陸を四分する四大国、その一国分のアルマを集約して呼び出すのが『天使』です～～～。そして、この『失敗作』達は～～～不十分なアルマで呼び出した『出来損ない』なのですよ～～～」

「その鬱陶しい口を閉じろ！」

済の怒りに染まりゆく表情を楽しみながら、シェーヌはなおもその口を動かす。

「だって『出来損ない』は『出来損ない』ですもの～～～？力や才能だって、本物とは比べ物にならないですし～～～仮にレイラちゃんのように本物と同等以上の力を手に入れても～～～性格に難がありますし～～～知ってます～？『失敗作』の中には、召喚直後に召喚者を殺しちゃうような扱い辛い子もいるんですよ～～～？だから、ズィスィでは首輪という道具が生まれたのでして～～～」

シェーヌの筆がぐりんとうねる。それが済を刀ごと吹き飛ばし、その距離を開かせた。

「そんな『出来損ない』を～～～『役立たず』を～～～『失敗作』と呼んで何が悪いんですか～～～？」

「黙れ！」

再び駆け出そうとする済の首根っこがぐいと引っ張られる。後ろのめりに後退する済は、キッとその犯人を睨んだ。

「救世ッ！邪魔をするなッ！」

「済ちゃんは煽り耐性がなさすぎるんですよ。少し、落ち着いて下さいって」

救世はにっこりと笑いながら、シェーヌの顔を睨む。目だけは笑っていない。

「天才さんは流石に仰る事が違いますね。感動して酔いも冷めてきましたよ」

「お褒めに預り光栄です～♪」

「あなたが『失敗作』しか呼び出せない程度の『失敗作』だという事がよくわかる、とっても素敵な講釈でした♪」

「……はい？」

シェーヌの笑顔が凍りついた。

「だって、あなたが従えていた天使さん、みんな首輪を付けてましたよね？ということはあなたは『失敗作』しか呼び出せてないんじゃないですか」

「だから～～～、天使は一国に二人までなんですよ～～～？既にずっと以前に天使の呼び出されているズィスィでは、天使を呼び出す環境が整ってないのです～～～だから、それは私の腕とはなんら関係の無い……」

「ああ、よく分かりました。天才といえども、大した事はないということが」

「……分かりませんかね～？お馬鹿さんには～。これは摂理であって～」

「摂理に刃向かえない程度なんですよね？」
「……煽ったって無駄ですよ？」

シェーヌの低い声に、救世は笑顔で返す。

「だったら、摂理に刃向かえる私は……あなたよりずっと天才ですね♪」
「……はいぃ？」

救世が右手をかざして不敵に笑む。

「だって、私なら『死は終着点』という摂理を捻じ曲げられますからね？」
「そんな馬鹿な事……」
「そんなのも分からないですか？お馬鹿さんには」
「……身の程知らずが。デカい口聞きますね～？」

シェーヌは舌打ちする。その様子を見て、救世はやれやれと首を振った。

「もう、皆さん煽り耐性なさすぎですよ……全く。シェーヌさん、言われて嫌な事は言わないほうがいいですよ？私、さっきからあなたが言ってるような事しか言ってませんけど？」
「……天使だからって調子に乗るのはやめてくださいよ～。私、天才ですから天使にだって負けませんよ～？」

明らかにシェーヌはキレていた。救世は済を振り向いて、にっこり悪い笑顔を浮かべる。

「口には口で返さないとですよ？暴力なんてノーセンキューです」

「お前、意外と……アレだな」
「そして、相手が暴力でくるのなら……こっちは優しさで包み込んであげましょう。怪我もさせずに制圧しますよ」
「……だが、あいつは……」
「そうすれば、圧倒的実力差が分かるでしょう？あの天才さんに泥を塗りたくって汚すくらいは許されますよね？」
「……お前、意外とアレだな」

済は思わず苦笑した。気付けば、シェーヌに対する苛立ちもうっすら消えかかり、静かに刀を構えて、済と救世、才羽兄妹は天才召喚術士シェーヌと対峙する。

「あ、別に泥を塗ると言っても、私が泥んこプレイが好きだとかそういう訳ではないですからね？」
「知るか！まだ酔ってるのか！？もう……いいから行くぞ！」

救世のそれは緊張を和らげるための冗談なのだろうか。すっかり気の抜けた済が先陣を切り、走り出す。そしてその後に続く救世。

「うふふ～～～♪お馬鹿さぁん！私がのろのろ話しているだけだと思いましたかぁ～～？」

丸い帽子に手を当てて、シェーヌが口をぼそりと動かす。

「『プロスクリスィ』♪……おいでまし、『マヌス』！」

シェーヌの呪文。それに合わせて地面に敷き詰められた魔法陣の一部がきらりと光る。するとぬるりと地面から、血に塗れた無数の腕が這い出す！

「な……！？」
「これが召喚術で～す！この子は地獄の怨念『マヌス』で～す！生者を恨み、その足を引っ張る手の亡霊～～～♪」
突然のホラーチックな光景に、思わず足を止めかける済に、背後を走る救世は声を上げた。
「大丈夫ですよ済ちゃん。止まらず駆け抜けて！」
その指示に従い、済は落としかけたスピードを上げる。その足を掴もうと伸びる手の亡霊。しかし、救世は鼻歌でも歌うかのように呪文を唱える。
「お馬鹿さん。私が黙って後ろで見ているだけだと思いましたか？アルマの動きはずっと見えていましたよ。……言いましたよね？私は死者でさえも癒しますよ♪……『ウンエントリヒリーベ』！」
救世が放つのは両腕を広げての投げキッス。それと同時に拡散した光が亡霊の腕に降り注ぐ。その光を浴びた腕はとろんととろけるように垂れ下がり、やがてシャキっと起き上がると、ずぶずぶと地面を這いながら、シェーヌ目掛けて走り出した！
「な、何をしたんです～！？」
「癒したのですよ。とっても気持ちよくなる治癒術で……♪どうやら、この子達は私の味方をして下さるようですよ♪」
「そ、そんな馬鹿な事あるわけ……」
「どうやら私の方が魅力的だったみたいですね♪ニヤリ……」
「う、うぜぇぇぇぇぇ！」
シェーヌが思わず本音を漏らす。済も多少同じ事を思ったが、黙

って走る。

「私は『うぜ』ではありません。『ぐぜ』です！」
「ちょっとお前黙れ！」

流石に済も声を上げる。そして、そのままの勢いでシェーヌに突撃する。迫る済にその巨大絵筆型魔具で対抗しようとするシェーヌだが、先程までとは勝手が違った。

ぎゅっと足を掴む亡霊の手。自分が召喚したはずの手下。それが今では完全に寝返り、自分の足を拘束する。
召喚術を操り、無数の手下を従える戦闘を得意とするシェーヌにとって、救世の存在は想像外の天敵であった。

「チッ……！」

舌打ちと共に、シェーヌは足元をまずは絵筆で薙ぎ払う。それは絡みつく手を振り解くものではなく、足元の魔方陣を消去するためのもの。絵筆型魔具『フロマ』に記録された魔法『マジックインキ』で床の色に魔方陣を塗りつぶす。するとたちまち姿を消すマヌス。そして直ぐ様、済の剣撃を受け止める！

「ぎぃっ……！」
「はぁッ！」

済が次は完全に押し勝つ。振り抜いた刀が、今度はシェーヌを後退させた。フロマのマジックインキは、アルマを込める事で色の変わる魔法の塗料。それにアルマの意識を向けたシェーヌの付術は、明らかにクオリティが落ちていた。

「あっはは～～～！やりますねぇ～～～！でも、私は『多芸な女』！召喚術を封じたところで、私を破ったつもりにならないで下さいね～～～～！」

「『多芸は無芸』、私達の世界には、そういう言葉があるのだが…お前は知っているか？」

「専門外ですので～！」

「……やっぱり、天才といえど大した事はないんだな」

「……だ～か～ら～……馬鹿にすんなってぇの！」

鼻で笑って、済が追う。それに対抗するように、シェーヌは筆を頭上で振り回す！かなりの大きさの筆を振り回すその力が、やはり弱くはないことを理解させるかのように。

済はしかし、そのまま馬鹿正直には突っ込まなかった。

辺りに敷き詰められた無数の魔法陣。それら全てに意識を張り巡らせ、済は部屋の片隅にある一つの魔法陣に僅かに光が点るのを確認する。そして、刀をそのまま単純に振る『ふり』をして、フェイントを掛けて後ろに飛び退く！

「『プロスクリスィ』」

瞬間、済がこのまま走っていったらたどり着いていたであろう位置に、横から炎が走り抜ける！

「あ！？」

シェーヌは不意打ちを外し、直ぐ様驚愕した。

済の中で、見事に打ち負かされた経験が活きる。デア・ピルゴス、

その罠の方が、もっと姑息で鬱陶しかった。済はあの鬱陶しい堕天使に僅かに感謝しながら再び方向転換をして突き進む！炎が目晦ましとなり、その炎を解除したシェーヌは、次の瞬間に飛びついてくる済に気付く。

「きぃぃぃぃッ！！」

「貴様、やっぱり罠の才能もないな」

済の刀が次こそ、そのだぼだぼの白衣に届く。シェーヌの歪んだ表情が、確実にその劣勢を示している……そう思われた。

しかし、シェーヌはその腕で、ガキン、と済の刀を受け止めた。

「……ざ～んねんでしたぁ～♪私、劇団でも主演はってたんですよ～♪」

刀を受け止めたシェーヌの筆の薙ぎ払い。それは済の刀を弾き、その体をも吹き飛ばす！

「うぐっ……！」

「済ちゃん！」

吹っ飛ばされ宙を舞う、済の体を救世が受け止める。

「天使と言っても所詮はその程度～ッ！召喚術に魔法、器術に付術！その他あらゆる事をそつなくこなす、天才には勝てないんですよ～～～！」

シェーヌは白衣の袖をまくり上げ、その腕に巻き付く大量の鎖を

見せつける。

「鎖鎧型魔具『コヘンチュ』。近年発見されたという器術と付術の複合技術を用いた、永続的付術強化を施した鉄壁の鎧です～～～♪私達だけの、特別な魔具ですよ～♪これればかりは、並の攻撃じゃ打ち破れないです～～～！」

救世に受け止められた済は欠けた刀に視線を落とし、歯噛みする。

こんなナマクラじゃなければ……！

かつて救世に砕かれた一振りの刀型魔具。それに大きく魔法記憶性能も付術浸透度も刀としての性能も劣る魔具では、やはり上手く扱えない。そうして武器のせいにしかけて、済は再び悔しくなる。

どうしてこうも私は弱いのか……！

目の前で高笑いする傲慢女にすら、天使でもない相手にすら劣っている。これで私はどうやって……

「はいはい。ネガティブモードはもうおしまいです」

そんな思考を断ち切るように、済の体を支える救世が、済の頬をぺちぺち叩く。

「丁度良い機会です。『アレ』、行ってみましょっか？」

済はその一言に、これ以上はないといった程に怪訝な表情を浮かべる。

「……本気か？」
「本気です。本気とかいてマジです」
「……冗談だろう？」
「マジです」

救世は凄くいい女神のような表情で囁いた。

「私も、済ちゃんも、一人一人の力は大きく明華さんや薄葉さんには劣るでしょう……でも、私達には、誰にも負けない絆がある！」
「……少し前まで不仲だったような気がするんだが」
「一人でダメなら二人で頑張りましょう！私と済ちゃんの力を合わせれば、それは百にも二百にもなる！」
「熱くなるな救世。少し、落ち着いて考えろ。協力は分かる。だが、『アレ』は……」
「さぁ、『合体』です、済ちゃん！」
「……く、くっそう！本当に大丈夫なんだな！？」

済はヤケクソ気味に立ち上がる。

そうだ。きっと救世は私を励ますためにやっているんだ。あと酔っているから多少変なノリになっているだけなんだ。そうに決まっている。

済は、「さぁ！さぁ！」と背中をぺしぺし叩く救世を横目で見ながら、意を決したように、ぐっと力を入れる！

「うおおおお！」

勇ましい雄叫び！それと共に済と救世が見せた行動は……

「そ、それはなんですか……！？」

シェーヌは初めて演技抜きで驚愕した。そんなシェーヌににやりと不敵な笑みを送り、少し高い視点から、救世は高らかに声を上げる。

「これが……私達の……『最強形態』です！」

最強形態……真っ赤な顔で直立する済の背中に、肩に手を掛けおぶさるようにしがみつく救世は、得意げに宣言した。

「ふ、ふざけているんですか～？あなた、そっちの妹の方、さっきからふざけているんですか～？」
「済ちゃんは真面目な子です！」
「救世……多分、お前の事を言われている」

救世をおんぶした済が、もう恥ずかしくて仕方がなさそうな表情で呟いた。

これが救世の提案した、才羽兄弟の切り札である。

「それじゃ、打ち合わせ通りに行きますよ……済ちゃん！」
「もうどうにでもなれ！」
済はがむしゃらに走り出す！
たん、と地面の一蹴りが、いつもよりも高く、速く済の体を動かした。
「速いっ……！？」
シェーヌが目を見開き、迫り来るふざけた二人組を迎え撃つ。
そして、地面を蹴り上げた済でさえも、驚きに染まった表情を浮かべた。
「な……！？」
「ほら、言ったでしょう？どうです？」
済は今まで以上に軽やかで力溢れる体に驚きを隠せない。体の隅々まで行き渡るアルマの感覚、それは満ち溢れるように体の力をぐんぐんと強めていく。地面を蹴る足に、欠けた刀を握る手に、欲しい力が的確に伝わっているのを感じる。
救世の提案はこうであった。

救世はアルマコントロールに関してはエキスパートである。故に治癒術や付術といった、アルマを操る術に長ける。しかし、基本的に温厚な性格だった故に、戦闘経験は恐ろしく浅い。

それに対し、済は救世にコントロールに関しては及ばないものの、長年の実戦経験がある。それこそ、この世界に来て間もない明華以上に。それに加えて、一朝一夕では身につかない、鍛えてきた技がある。

そこで、救世は戦闘の役割を分担する事を考えたのだ。

救世はアルマコントロールに集中し、済は戦闘に集中する。アルマコントロールも、戦闘の立ち回りも、本来なら片手間でできる程に簡単なものではない。そこで二人が得意分野を分担することで、その精度を格段に高めようというのが狙いである。

各々が長所で力を補い合う。それが才羽兄妹の選んだ戦い方。おんぶという酷く不格好な姿がネックではあったが。

この戦闘法は、思わぬ力を見せつける。

済は、救世にアルマコントロールの全てを委ねて、初めて自分が今までどれ程、そのコントロールに意識を割きすぎていたかを痛感した。それの意識を解除することで、驚くほどに戦闘の視野が広がる。

救世は、コントロールだけに集中する事が、どれ程楽かを思い知る。自分自身が付術で動く時は、身のこなしなどにも意識を割いていた。しかし、それだけに意識を向けて、初めて今まで自分のコントロールがまだまだ未熟であった事を理解する。より正確に、より

繊細に、体の各部にアルマを割り振る。対象の体を客観視できるという事も相当に大きい。

更には、二人でアルマを共有すれば、単純に相当量のアルマを扱う戦闘が可能になる。

集中。それにより、二人の役割は極意の域にまで達する。

その証拠に、先程までは顔を赤くしていた済も、ノリノリで騒いでいた救世も、シェーヌの目前にまで達した時には、既に真剣な鬼気迫る表情を作っていた。

今、才羽兄妹は、互いに全てを委ねて、重なり合う。

それは互いの長所を羨み、互いに短所を見つめてきた、救世と済だからこそ噛み合った歯車。

「くっ……！」

シェーヌがおんぶ状態で迫る二人目掛けて筆を振る。しかし、それはするりと躱され、すかさず済の欠けた刀が振り抜かれる。

そんなナマクラでこのコヘンチュが……

そんな余裕の言葉を吐かずに、シェーヌはがはっと息を吐いた。脇腹に当てられた刀が、まるで鎧を突き抜けるかのような強烈な衝撃を体に伝える。

「がはっ……！」

無言ですり抜けるように打ち込んだ一撃の後、直ぐ様、済は切り返す。速い。しかも、目で追えない。

まるで視線から外れるように、救世を背負う済の体は、浮き沈みするように常に上下左右に揺れ動く。

済にはシェーヌの視線が見えていた。今までの戦闘経験と、救世に強化された目によって。

不可視の連撃が、次々とシェーヌの体力を削り取る。打ち込まれる一撃を、何故か鉄壁の鎧コヘンチェは防げない。

救世が強化した刀は、何よりも固く重かった。済の打ち込む刀は、何よりも正確にその力を伝えていた。

掠めるように走り回るその高速移動に振り回されながら、シェーヌはしかし屈しなかった。

「ぐっ……なら、これでどうですかっ……！？『プロスクリスィ』！」

シェーヌが意識を向けたのは、周囲に仕込んだ魔法陣の一つ。雷を召喚する変則召喚術。それにより、自分の周囲に広がるように、守る対象であるサギニに気も留めずに、シェーヌは超広範囲の雷撃を放つ！

しかし、救世と済は焦らない。

救世は済のアルマコントロールにのみ集中していた。だからそれには目もくれない。

済はその雷の発生前、シェーヌの詠唱を視認し、真っ先にサギニ

の前に回り込んだ。素早く動く自分に攻撃を当てるのなら、広範囲の攻撃だろう。咄嗟の判断と、勘が済の体を動かす。

そして雷撃。済は迫り来る雷の、動きと形を鋭く睨んだ。まるでスローモーションであるかのように、その雷撃はゆっくりと動いて見えた。

明華との戦闘を思いだす。あの時は、雷を捌ききれなかったな。

しかし、今の済なら、いや、今の済と救世ならば、恐らく千の雷でさえも造作なく打ち落とせるだろう。

済はフッと刀を振り抜いた。それは雷の形を崩し、済と救世、そしてサギニに届く事なく消滅させられる。

「雷を……斬っ……!?」

シェーヌは声を発しかけたが、それさえも遅い。雷を捌いた済は、隙さえ与えずシェーヌの口に刀を入れていた。下に冷たい刃を当てられ、シェーヌはごくりと息を飲む。開いた口を動かせない。これでは召喚術も魔法も使えない。何より、その理解不能な一瞬の動きと危機的状況に、シェーヌは思わず腰を抜かした。勿論、その動きさえも見切ったように、済は刀をシェーヌから離さない。

「あ……あが……！」

目に涙を浮かべながら、シェーヌが声を発する。演技ではなく、本心で。

済はそれさえも見抜いたように、シェーヌの声にならない言葉を聞いて、戦意を失った女の口から刀を離し、それを勢い良く地面目

掛けて再び振り抜く！

ザンッ！

止めの一撃。そう言わんばかりのひと振りは、シェーヌの足元を深く切り裂いた。すると、周囲に記されていた、無数の魔法陣は忽ち消えてなくなった。

「そ、そんな……私と魔法陣のリンクを切断した……アルマのパイプラインなのに……！あなたは形のないアルマさえも……斬れるというの……！？」

済は刀を鞘に納める。あらゆる危険を排除した事を、全感覚で確認し終えて。

救世も済の緊張が解けたのを確認し、済の肩に必死でしがみついていた腕を解いてするりと地面に滑り落ちる。

そして、まるで今まで疲れを忘れていたかのように、済と救世は同時に息を吐き出し、どっと汗を零した。

「はぁっ……はぁっ……な、何か凄い動きが出来たような気がしたんだが……？」

「はぁぅ……頭が痛いです……此処まで集中してアルマ操作したの初めてです……！」

息絶え絶えの才羽兄妹は、顔を地面に向けたまま、腕を上げてハイタッチした。

シェーヌはそんな二人を震えながら見つめ、ぼそりと呟いた。

「ば、ばけもの……！」

彼女が、レイラ以来、初めて他者に向けた言葉を。

そして、直ぐ様その顔を歓喜の色に染めて呟く。彼女が今まで、他人に一度も向けた事のなかった言葉を。

「う、う～～～～～～、マーベラスッ……！これが、本物の天使っ……！」

ある意味、天才的なポジティブさだった。

息を整えた済が、サギニの方をぎろりと睨む。そして、静かに命令する。

「……さぁ、この施設にかけた幻術、解いて貰おうか」

レイラの力の片鱗しか見ていないサギニにとって、救世と済はより恐ろしい存在に映ったのだろう。

そして、それ以上に、シェーヌの無差別攻撃から、自分を庇った済の姿が……

サギニは頬を赤くして、涙を浮かべた笑顔で答えた。

「も、もちろんですわ！お兄様！」

済としては、幻術はサギニが死んでも解けるのか？それが心配で、という打算的な考えで守ったのだが、サギニがそれを知る由もなく、済がサギニが何を思うのか知る由もなく、疲れはてた済は、ぼそりと「お兄様……？」と疑問の声を漏らす。

才羽兄妹の手によって、サギニの幻術の迷宮は崩れ去った。

これにより、状況は再び一転する。

「兄様が、助けに……？……そんなはず、ないじゃないですか……」

明華は力なく呟いた。

明華は兄を慕っている。しかし、今ここに来てくれるはずがない事を理解していた。兄がそういうヒーローではないことを。

そんな、沈む明華に、ルカは優しく微笑みかけた。

「そんなことないよ。だって、君はお兄さんを想っているんだろう？素敵だと思っているんだろう？だったらさ、僕の思う『素敵な兄』っていうのは、きっと君を助けに来てくれる兄だと思うんだ。あはは、ごめんね。言ってる事、分からないよね？」

ルカはぽりぽり頭を掻いて、苦笑する。

「だからね、え～～っと……『君を格好よく助けに来る、素敵なお兄さん』、それを僕は見てみたい。それは僕には真似できないことだから」

「……見てみたい？」

ルカは苦しそうに声を出す。負い目を感じているように、自分を蔑むように。

「……僕だって分かってる。間違った事に加担してるって。君みたいな子を、奴隷にしてやろうなんて奴が、正しいなんて思ってない

よ。だから、いわば僕らは『悪』だ」

しかし、ルカは絞り出す。少しだけ、希望を見出すような声を。

「でも、強大すぎる悪だ。おそらくは、誰にも止められない程に。でもさ、やっぱり僕が見たいのは、みんなが見たいのは、正義が悪をくじくハッピーエンドなんだよね……」

ルカは立ち上がる。そして、牢の前の広い通路、その先に視線を送る。

「だから、囚われの妹を助けに来る兄なんて……最高に心踊るじゃないか。ヒーローに憧れない人間なんていない。そうでしょ？」

明華はかつんと響く一つの足音を聞いた。

「だから、僕は見たいんだ」

足音が近づいてくる。その足音の主に気付かれないほど小さな声で、ルカは明華に囁く。

「それと、僕は運がいいから……僕が見たいと思ったら、きっとそれは叶うと思うよ？」

悪戯っぽく笑って、ルカは足音の主に視線を送る。そして、その主に語りかけた。

「……君、何しにきたのかな？もしかして、この子を助けに来たとか？」

ルカが明華を親指で指差す。ルカの目の前まで迫った足音の主は、その視線を傾けた。

明華の視線にもその影が映り、影も明華をその目に映す。

「ああ、そいつは俺の妹なんでな。返してもらいにきた」

明華の目に涙が滲む。ぱっとしないヒーローに、来ないと思っていたヒーローの登場に、明華は大きな声を上げた。

「兄様っ……！！」

ルカはくすりと微笑して、現れた素敵な兄、思い描くヒーロー、薄葉と対峙する。

「ふふ……！返して欲しかったら、僕を倒してみなよ。返してくださいの一言で、お姫様を返してもらっちゃ、ヒーローの格好がつかないじゃないか」

ルカなりの、気取った演出であった。勝つ気などない。返さない気などない。兄を慕う妹と、妹を助けにきた兄。そんなシチュエーションを飾り立ててあげよう。そして兄妹仲直りでハッピーエンドだ。

ルカは自分が決して見れないハッピーエンドを二人の兄妹に重ね合わせた。

しかし、ハッピーエンドを許さない、ルカを取り込む深い闇が、その背後で渦巻いていた。

「ルカ……あなた、間違ってるわ……あなたの運が良かったんじゃない。……『私が誘い込んだ』のよ」

ルカの表情が凍りつく。

その背後で、まるで血で染め上げたような赤いドレスを纏った、長い黒髪を垂らす少女が立っていた。

「はじめまして王子様。私は月島麗羅っていうの」

ハッピーエンドを許さない、ミスバッドエンド、月島麗羅（ツキシマレイラ）。

「お姫様を助けに来た王子様、だけれどお姫様の目前で、化け物に王子様は惨殺されるの。お姫様は大好きな王子様の惨たらしく飛び散った臓物を浴びながら発狂するの。そして、化け物は、発狂して泣き喚くお姫様を、体を少しずつそぎ落としながら嬲り殺す。なんて、素敵な悲劇なの……♪」

レイラの顔が醜く歪む。

「私、悲劇のヒロインでいるのも大好きだけど、悲劇を鑑賞するのもだぁいすき♪そして、もしも、私の悲劇を邪魔する化け物が、私を酷くいたぶっても、私はとぉっても幸せ♪そう、どっちに転んでも私はしあわせ♪……あれ？私、不幸になりたいのに幸せ？……なんて不幸なの私っ！私、可哀想っ！」

悲劇に溺れる化け物の、酷く醜く狂った叫びが、その場にいる者全てを震え上がらせる。

レイラはその狂った瞳に、同じ化け物、薄葉の姿を刻み込む。

そして、喜々として、腕を広げてステージに立つ女優のように、叫びを上げた。

「さぁっ！最ッ高の悲劇を始めましょっ！醜い野獣の王子様っ！」

薄葉は無言でゆらりと体を揺らす。

その姿を見て、レイラは狂喜に踊るように、ルカを払いのけながら、薄葉目掛けて飛び上がる！

「私、今、最ッ高に黒ずんでるッ！？」

レイラの叫びと共に、薄葉は動いた。

ＥＰ３０：　オラクルの闇（後書き）

明華の元に辿り着いた薄葉。そこに待ち構える天使レイラ。悲劇に狂った化け物を前に、普通の化け物は動き出す。化け物ＶＳ化け物の、狂った戦いが幕を開ける。

今回は才羽兄妹の覚醒回。そして、ちょこっと天使の伝承の情報追加です。

そしてそして、遂に主人公登場。主人公の登場です！誰がなんと言おうと主人公です！でも、一言しか喋ってない、とか言わないでください……ｗ

対戦相手は狂った悲劇フェチの天使、レイラ。オラクル内部では化け物と恐れられ、済やハランも化け物と表現する危険な天使。それに薄葉は対抗できるのか？いや、しろ！ですねｗ

次回、薄葉の戦闘スタートです！

Ｅｐ３１：　私、最ッ高に黒ずんでるッ！（前書き）

薄葉ＶＳレイラ

Ｅｐ３１：　私、最ッ高に黒ずんでるッ！

赤い血塗れドレスは、上の階層で『食事』して来た時の汚れ。たっぷりお腹を膨れさせた化け物は、黒い髪を無造作に垂らす。髪には死んだお母さんからもらった形見のリボン。首にはずっと会っていないお父さんからもらったおもちゃのペンダント。

澱んだ瞳で、そんな天使、月島麗羅は目の前の得体のしれない化け物に食らいつく。

ガリガリガリガリ！

不快な騒音を立てながら、レイラは地面を駆けてくる。その騒音は、その足踏みが地面を削り抉る音。スケートリンクを滑るように走り、レイラはその細い右腕を得体の知れない化け物、杏樹薄葉にすっと伸ばした。

優しく自然にそっと触るような手つき、他者の目からはそう映るその挙動は、その実、鋭く研ぎ澄まされたナイフのような鋭さで、常人には目で追えない程のスピード。その刃物の手を目前に、薄葉はくいっと体を逸らす。

それはとても静かな光景だった。ガリガリと床を抉る不快な音が止み、静かに伸ばした細い指を男が体を軽く動かし無音で躱す。どちらも殺し合いを演じる素振りにも見えないその遣り取りに、明華もルカも状況の把握ができなかった。

体を横に傾けた薄葉は、そのまま伸ばされた腕を右手で掴み取る。そして、横に倒れるような反動を利用し、ぐいっとその腕を引き寄せた。グンとレイラの体が迫り、薄葉はそのまま、突き飛ばすように左手をレイラの体に叩き込んだ。

レイラを一瞥する事もなく。

レイラの体ががくんと弾む。レイラはその澱んだ目を大きく見開き、その体からはみしりと嫌な音がする。薄葉を「本気で殺す」つもりで放ったそのナイフの指は、それと等価の痛みでもって報復されたのだ。

暗中無心拳、無意識の型、殺気返し。

相手の敵意や殺意といった悪意を、等価で返す基本動作。

「……かはっ……！？」

レイラは口からぴしゃりと血を吐いて、壊れた人形のように地面を弾みながら廊下をごろごろびったんと転がり滑った。そして、だらりと腕を垂らし、レイラは廊下の奥で、仰向けになったまま動か

なくなった。

「まさか……レイラのスピードに……対応した？」

ルカが驚き呟く。彼自身、此処で彼が妹に殺される事は望んでは居なかった。しかし、まさか妹、レイラの動きが対応されるとは思っていなかったのだ。

「……ん？どうした？変な顔して。あんたをどうしたら明華を返してくれるって？」

何事もなかったかのように、男は格子にもたれるようにしているルカに視線を戻した。ルカの傍で、格子に顔を寄せて明華が潤ませた瞳でその兄の姿を見つめる。そして、震える声で兄に声を掛ける。

「兄様……私……ごめんなさい……！」

兄に、謝罪を。

明華が言葉を繋ごうとする。薄葉がそれに意識を傾ける。その時、ルカが声を荒らげた。

「駄目だっ！！レイラはその程度じゃ倒れない！油断をしたら……」

「なぁに愚図？まるで私の敵みたいなこと言っちゃって？」

明華は驚愕した。口から血を滴らせながら、その赤い女はぬっと

薄葉の後ろに姿を現したのだ。

「そ、そんな……兄様の一撃を受けて……どうして立てるんですか……！？」

「効いたわ。とっても、効いた。ひどいじゃない……ひどいじゃない……痛い、痛い、痛かったわ。この世界に来てから、初めて痛かった……内臓潰されかけたじゃないっ！ああ、こんな酷い仕打ちを受けて、私ったら不幸っ！不幸っ！不幸だわっ！しかも、実の兄からも裏切られて……私、なんて可哀想なのっ！！」

恍惚とした表情で口の血を舐めとるレイラに、明華は恐怖を覚えた。

この人、おかしい……！

その明華の表情を見て、嬉しそうに顔を歪めたレイラは、ぎろりと薄葉の背中を睨む。

ズドンッ！

「あぐぁっ……！？」

そんなレイラの腹に、薄葉の鋭い肘打ちがめり込む。再び、目を大きく見開くレイラに、薄葉は目もくれずに振り向きざまに、その

手刀を横薙ぎに振り払った。それはレイラの首を捉え、ごきりと再び嫌な音を立てて、ごろりとその体を地面に転がす。横に倒れたレイラの姿、それに薄葉は構いもせずに再び明華に視線を戻す。

「なんで……お前が謝るんだよ。……まぁ、今はとりあえず其処から出してやるからな。そのあとで、俺も少しだけ話したい事が……あるんだけどさ」

薄葉は少しだけ照れくさそうに、気まずそうに、ルカに一瞥をくれると、明華を閉じ込める格子に歩み寄った。

「ちょっと下がってろ。多分だけど……今の俺ならなんとかできるからさ」

明華はきょとんとした様子で一歩下がった。

あれ？兄様、雰囲気が違う？

何処か、優しげな、そんな印象を受けながら、明華は薄葉の動きを見守った。何をするつもりでしょう？そんな疑問を抱きながら。

しかし、その疑問はすぐに振り払われる。

「痛いッ！最ッ高ッ！快ッ感ッ！これよッ！前居た不幸な世界では味わえた、これが痛みというものだわッ！思い出したッ！思い出したッ！痛い、痛い、痛いのは不幸ッ！不幸ッ！不幸ッ！」

ぬるりと立ち上がるレイラ。目を血走らせて、口から滴る血をドレスの袖でごしごしと拭いながら、レイラは再びその手を薄葉に伸ばす。

次に薄葉は、再び虚ろに瞳を虚空に移し、地面を蹴り上げ、ぐるんとその身をひねらせ空中で回転する。そして、その回転の勢いに任せた、強烈な蹴りをレイラ目掛けて振り抜いた。蹴り上げた地面には足型の窪み、その強烈な脚力の足刀は、山をも割る死神の鎌。

明華は、驚愕した。

その一撃を、レイラが左腕一つで受け止めた、その光景に。

「……あっぶないわぁ。今の、下手したら首が飛んでるじゃない。……恐ろしい化け物に、惨殺されかける私、可哀想……！不幸、不幸、不幸だわっ！」

レイラは受け止めた足をぎゅっと握り、ぐにゃりとその顔を邪悪な笑顔で歪めて見せた。

「……もっと、私を不幸にしてよ、王子様♪」

レイラが掴んだ薄葉の足を、ぐんと廊下の先目掛けて放り投げる

！薄葉の体は浮き上がるが、その反動を利用して、ぐるんと体を捻って、その飛ばされる方向を無理矢理に矯正し、その勢いを載せた踵の一撃を、レイラのこめかみに叩き込む！

ゴキッ！

嫌な音。しかし、レイラは動じずに、踵をこめかみに受けたままにやりと笑う。そして、踵蹴りを終えて、重力に引かれて、地面に落ちる薄葉の体目掛けてスカートを翻しながら足を高々と掲げ、踵落としをお返しする。

ヒュッ！

その風を切る音が、その尋常じゃない速度の踵落としの威力を示していた。

ゴッ！と音を立てて、薄葉の体に突き刺さるその一撃に、明華は悲鳴にも似た叫びを上げる。

「兄様っ！！」

明華は、初めて兄が他人にやられるという、有り得ない光景を脳裏に過ぎらせる。気付けば、その潤んでいた瞳から、涙がぽつりと溢れていた。

しかし、その光景は実現されない。

薄葉は、腕でその踵を受け止めていた。そして、地面にいち早く着いた足を軸に、体を背中から直角に逸らした有り得ない体勢で、その強烈な踵落としを支えていたのだ。その激しい衝突音は、防御によって生じたものだったようだ。

薄葉の腕が、踵落としを放ったレイラの足に絡みつく。そして、直角上体逸らし状態の体を直立状態に戻す反動を利用して、レイラの体を放り投げる。さながら投石器のように放たれたレイラの体は宙を舞い、レイラは高い天井にふわりと手を当て、ぐっと天井を押し付ける。ベゴンッ！と天井は勢い良く手形に凹み、レイラはその手押しの反動で、ズドン！と地面に雷のように着地した。鉄の地面を足型に凹ませながら。

「あっはは♪」

レイラは首をかくんと傾け、笑顔を浮かべる。その禍々しいまでの殺気は、薄葉でなくとも、明華とルカにも十分に感じ取れた。

それに反応するように、ぼんやりと虚空を見つめる薄葉が駆ける！

「……さ、踊りましょう王子様♪」

レイラも地面から足を引き抜き、ガリガリと地面を抉るように駆

ける！

正面衝突。薄葉とレイラ、二人の化け物が、その手を構えながら激突した。

薄葉の掌が目にも留まらぬ速度で連続で打ち出される。風を弾く音を立てながら。

レイラの指先が目にも留まらぬ速度で突き出される。風を切り裂く音を立てながら。

ズパパパパパパパパパパパパパパパッ！！！

破裂音とも取れる激しい衝突音。互いに撃ち込み、互いに弾く、その激しい攻防は、まるでリズムを刻むかのように音を立てる。

「あはははははははははははははははははははははははははははッッッ！！！！」

レイラの高らかな笑い声と共に。

その光景を目の当たりにして、明華もルカも驚愕と震えを隠せない。

「そんな……兄様と……」

「レイラと……」

「渡り合える人間が居るなんて……！」

それは無敵の化け物を兄妹に持つ、二人が初めて見る光景。

薄葉とレイラ、二人の能力は拮抗していた。

その均衡が崩れ始めたのは、数分の交戦の後の事だった。

チッ、と薄葉の頬に薄い線が入り、血が滴る。

「兄様っ！いやっ！」

明華が初めて傷付く兄の姿を見て、悲鳴を上げる。しかし、それは薄葉が押され始めた訳ではなく……

レイラの頬にも線が入る。薄葉よりもずっと多く。

「……レイラが、押されてる……！」

レイラは傷つくほどに、その表情を喜々としたものに染め上げる。

そして、レイラの喜びが絶頂に達しかけた時、レイラは喜びの雄叫びを上げる。

「……私、最ッ高に黒ずんでるッ！！」

その叫びが隙となる。

メキッ！！

薄葉の掌は、遂にレイラの顔面を真正面から捉えた！みしりと音を立てて、その圧はレイラの体を後方に吹き飛ばす！

ガリガリガリッ！！！

地面を抉るような音。それを立てながら、レイラは顔を後ろに傾かせながら、地面を滑るように後退する。その後には、地面を抉った後が残る。まるで足に鋭い爪のようなエッジが仕込んであるかのように。

その抵抗が、やがてレイラの体を止める。

「あ、あは、あはは、あっはは……♪」

ぴくぴくと、顔を上に向けたままレイラが痙攣する。笑い声が漏れている。まだ、化け物は倒れない。

がくんとレイラの首が前に倒れる。鼻血を垂らし、目を見開いたレイラはけたけたと口を大きく開いて笑う。まるで狂った人形のように。

「分かっちゃったぁ……！『あなたに見えてるもの』、『あなたが何に反応してるのか』……そして、『あなたを殺す方法』……！あっはは♪」

レイラが自らの顔に左手を押し当てる。

ゴキゴキッ！

骨がどうにかなるような音。レイラが左手を退かすと、その鼻から滴る血は消え、鼻は綺麗に元通りになる。そして、レイラは無数に刻まれた頬の傷をぎょろりと瞳を動かすと。、口からべろんと舌を垂らす。

長い、長い、人間のものとは思えない不気味な真っ赤な舌を。

べろりと、その長い舌が、レイラの顔中を舐めまわす。べろり、べろり、と獣が傷口を舐めるように。

すると、レイラの顔に刻まれた裂傷は、瞬く間に拭い去られる。

「……そ、そんな……！」

明華が余りにも恐ろしい、人間離れした所作に、表情を引き攣らせる。天使を名乗るのなら人間の筈のその少女は、とても人間には見えなかった。

まさに、文字通りの『化け物』。

レイラはくすりと笑って、すっと手を垂らす。すると、薄葉は虚ろな視線を、レイラに落とした。

「あれ？……お前、誰だ？いつから其処に？」

惚けた表情でレイラをまじまじと見つめる薄葉。その姿を見て、明華は絶句した。

「やっぱり……♪……あなたは私の殺意に反応して、反射的に動いているのね……！やたらと反応が早いから……何か変だと思っていたわ……♪ああ、不幸だわっ……楽しいお遊びも、此処までみたい……あなたを殺す、素敵な方法が思いついたわ♪」

レイラは薄葉の暗中無心拳、そのトリックを見抜いていた。

連撃による応酬により、薄葉の頬に傷を付けた時から、レイラは

既に身に付けていたのである。

自らの内から滾る、狂った殺意を抑え込む方法を。

殺意を介さない『とある一撃』が、その頬を掠めた事により、レイラは薄葉の攻略方法を見出す。

バキ、バキ、バキキ……！

「さ、第二ラウンドの始まりよ……♪次の舞台に広がる悲劇は、一体何になるのかしらっ！」

レイラの両腕が、長く、長く、伸び上がり、太く、太く、膨らんでいく。黒く染まったその巨大な腕は、アンバランスにレイラの細い体に繋がったまま、レイラの体のうねりに従うように、周囲の壁を薙ぎ倒すように暴れだす！

化け物の腕、レイラはそれを生み出した。

―――

天使レイラを見たものは、彼女を必ずこう表現する。

『化け物』。

それは彼女の圧倒的な強さや、圧倒的な残酷さや、圧倒的な狂気に基づき与えられた表現ではなかった。

彼女は本当に『化け物』なのだ。

異形の翼をその背に生やし、無数の眼を体に咲かせる。

大きく醜い鬼の腕を作り出せば、細く長い蔓のような腕を操れる。

体を鋼のように固くすれば、水のように蕩ける事も出来て。

彼女は変幻自在にその姿を『異形』へと作り上げた。

その『異形』はまるで……

球界テッラを脅かす、異形の化け物『テラス』とそっくりなものだった。

人は彼女をテラスと疑う。

しかし、彼女は紛れもない伝承の天使、普通の人間。

彼女はただ、球界テッラを訪れたその日に、とある才能に目覚めてしまっただけなのだ。

『テラス化』。体の一部、その全てを自在にテラスのものへと変貌させる、おぞましき異形の術に。

一一一一

「ば、化け物……！？」

薄葉は思わず声を漏らす。

「あっはははははははっ！！お互い様っ！！」

その間の抜けた表情を楽しむように、レイラは腕を滅茶苦茶に振り回しながら歩きだした！

ブンブンブンブンブンブン！！

ゴシャァッ！！！

壁を砕く強力な腕。その重々しい武器は、まるで嵐のように暴れ回る！壁を砕き、地面を凹ませ、施設を揺らしながら。

「殺意に反応するのなら、適当に腕をぶんまわしてればいいじゃないっ！！当たればラッキー！……いえ、あなたからすれば当たればアンラッキー、程度の気持ちで、ね？あっはははははははは♪」

それは薄葉でも反応できない、悪意なき暴力。

ただ駄々を捏ねる子供のように、レイラはその巨大な腕を振り回す！

嵐のようなそれは、薄葉の身を震え上がらせた。

そして、今まで兄を信じ続けていた明華さえも、震え上がった。

兄様が……死んじゃう？

直感。明華の中の、今までの薄葉。その姿から、今の暴れ狂う化け物の拳をくぐり抜ける姿が思い浮かばない。

薄葉の力を見抜き、『殺意を抱かない』などという感情の完璧なコントロールという、常人には成し得ない技術を見せつけられ、明華の中には絶望的な光景しか思い浮かばなかった。

「やめて……お兄ちゃん……逃げて！！」

鎖で腕も動かせない中、身を乗り出し、格子に顔を押し当てるように叫ぶ明華。

「危ない！離れて！」

ルカがその体を押し、明華を牢の奥に押しやると、すぐさま自分も身を伏せる。その上を通過する無差別殺戮は、格子をぐにゃりと

歪ませた。明華がそのまま立っていたら、確実に頭を潰されていただろう。

その拳は、足を震わせ立ち尽くす薄葉についに迫る。

「いやあああああ！」

明華の悲痛な叫びを聞き、レイラはにんまりと満足気な表情を浮かべた。

そして、その拳は薄葉の目の前にまで迫り……

「うわっと、怖っ！！」

ひょいっ。

薄葉がびくっと肩を弾ませ、反射的に振った手により、起動を逸らされ地面を撃った。

「……え？」

恐怖からとめどなく溢れる涙で霞む目、それを更に両手で覆っていた明華は、その手をどかし、その思わぬ光景にぽかんと見入っていた。

「ちょ、ちょ、ちょ！危ない！危ない！」

ひょい、ひょい、ひょい。

薄葉はその巨大な腕に磨り潰されて居なかった。

あわあわと慌てるように腕を動かしながらも、生きていた。

その手で、降りかかる火の粉を払うように、その拳の嵐を振り払いながら。

「……なんで、当たらないの……？おかしい、おかしい、おかしい……蟻が通る隙間もなく、振り回してるのに……あなたはどうしてそこにいるの？」

「ちょ、ちょ……ちょっと……危ないって……！！」

ひょい。

薄葉はその手のひと振りで、腕を地面に逸らす。そして、そのまま慌てて懐に飛び込むように身を回転させ……

まるで暴れ回るレイラにお笑いのツッコミでも入れるかのように、手の甲での裏拳を叩き込む！

「言ってんだろがッ！！」

「ぐぎっ！？」

みしりとレイラの体が軋む。目を見開き、ぎりりと歯を鳴らしたレイラは、よろりとよろめき、その腕の遠心力に振り回されるように、後ろに向けて倒れ込む！

ズズゥゥゥンッ！

巨大な腕が、地面を凹ませ、めり込む。

「が、か……！？……かはっ！？」

レイラがびくびくと体を震わせながら、目を白黒させる。

「……悪いな。どこの誰がか知らないが……化け物じみてて危なかったから、ビビって思わず手加減しないでぶん殴っちまった。……まぁ、生きてて良かったよ」

薄葉はふう、と汗を拭う。そして、巨大な腕を投げ出し、ぶるぶると震えるレイラを見下ろした。

「だ、騙した……のねっ……！？……そこのメス豚も、焦ったふりして……！本当は殺意なんてむけなくても……戦えたのに……！」

明華は、口を手で覆い、唖然としていた。それは今、横たわるレイラよりも、ずっと深い驚愕だっただろう。

意志もなく、ただ人形のように返り討ちにするだけの兄が、薄葉が、喋って、自我を保ったままに、戦っていた。

敵意を向ける敵に、言葉を投げかけ立っていた。

それは絶対に有り得ないと思っていた光景で、

明華がずっと見たかった光景でもあった。

「どう……して……？」

明華は喜ぶよりも先に、その言葉を吐いていた。涙を浮かべたその表情は、ぽかんと固まっていた。

「……明華？……大丈夫か！？なんで泣いてんだ！？」

薄葉が慌てて檻まで駆け寄る。そして、格子に手を掛けて、牢の奥でへたり込む明華に声を投げかけた。

「どっか痛いのか！？」

「……なんで」

明華はぼそりと呟いた。兄の危機を目の当たりにして、明華の中では、薄葉が自らの意思で戦っていた事は、小さな事実となっていた。

兄の暗中無心拳。それを無視する危険な化け物。その存在、兄の命を奪いかねない存在を前にして、今までは平気で兄の背中を押せていた明華は初めて、踏みとどまっていた。

そして、恐れた。初めて、兄が傷付く事を。

「なんで……逃げなかったんですか……！あんなに、あんなに、怖い相手が目の前に居たのに……！」

「そ、そりゃ怖かったが……！」

薄葉は照れくさそうに頬を掻く。

「……お前を置いて逃げれるかっての」

その言葉に、明華はぽかんと惚けてしまった。

「それに、お前には言わなきゃいけないことがあるしな。……それのお陰で、まぁ、少しは踏みとどまる度胸もできたというか、なんというか……まぁ、う～ん、えっと……あ、痛っ！……あれ？なんか頬に傷出来てないか？……うわっ！血っ！血ぃでてる！い、いつの間に！？」

頬を掻いていた薄葉は、あわあわと再び慌てだす。相変わらず凄みこそないものの、確実にその雰囲気は以前とは違っていた。

そんな薄葉は心中で思う。

……足震えて逃げられなかった事は黙っておこう。

彼は、ちょっとした見栄を張る程度には、普通なのである。

「と、とにかくだっ！こんなところにいつまでもいられるか！早く逃げるぞ！」

誤魔化すように、声を上げる薄葉。明華はそんな滑稽な様子に、笑顔を見せずにただただぼんやりと涙を貯めた目で、その顔を見つめていた。

「……っふふ。本当に、君のお兄さんはヒーローだったんだね」

ルカはそんな様子を、格子にもたれ掛かりながらくすりと笑って眺めていた。そして、懐から鍵の束を取り出すと、それを薄葉に放り投げた。

不意に投げられた、じゃらり、と音を立てる鍵の束を、薄葉は慌ててキャッチする。

「おわっと！」

「その中に、この牢屋の鍵と君の妹を縛る鎖の鍵が混じってるよ。それで、早く妹さんを助けてあげなよ」

薄葉はきょとんとした様子で尋ねる。

「そういや……あんた、俺を倒してみろ、みたいな事を言ってなかったっけ？」

「レイラが負けた相手に敵うとは思ってないよ。オラクル最強の天

使を、レイラを倒した時点で、勝敗は決してるから。……それにできれば君とは戦いたくないなぁ」

ルカはくすりと笑う。

「それと……レイラを止めてくれた、お礼だよ。ありがとう」

それはぼそりと、聞こえないくらいに小さな声で呟かれた。惚けている明華も、きょとんとしている薄葉も、その声を聞き取れはしなかった。

「さ、早く鍵を見つけ出して。急がないと追手がくるかもしれないよ。早く妹さんを連れて、ここから脱出したほうがいいんじゃない？」

「……それもそうだな！……くっそう、どれがこの牢屋の鍵だ！？」

ガチャガチャと鍵を試す薄葉。その姿を横目に、ぜぇぜぇと息を切らし横たわるレイラに歩み寄り、ルカは顔を寄せて静かに囁いた。

「レイラ。大丈夫？」

「だ、大丈夫な……わけ、ないでしょうっ……！ふざけやがってこの愚図……！なに、あいつらに……肩入れしてんのよ……！……実の兄のくせに……裏切りやがって……ああ、本当に……不幸だわっ……！痛い……苦しい……！」

「それが『不幸』だよ、レイラ」

ルカは横たわるレイラを、厳しい口調で戒める。

「痛くて、苦しい、絶対に味わいたくないもの、それが『不幸』だよ。よく、分かっただろう?そんなものを追い求めても、何もいいことなんてないんだ」

「嘘よ……嘘……！私は……可哀想な……灰かぶりっ……！いいこと、なんて、なくていいの……だって、私は悲劇のヒロイン……！いいことなんて、たくさんあるわっ……！」

虚ろに呟くレイラを、ルカは辛そうな表情で、そっと抱き寄せる。

ごめんね、と謝りながら。

「ごめん、ごめんね……本当は、僕がもっと早くに止めてあげるべきだったんだ。不幸の痛みを、僕が教えて、レイラを、『可哀想な子』から解放してあげなくちゃいけなかったのに……」

「……なによ……それ……」

ルカはボロボロのレイラの体をそっと抱き上げる。それに身を委ねるように、巨大な化け物の腕は元の細腕へと戻る。

「やり直そう。こんなところから離れて。『可哀想な子』じゃなくても、レイラは僕が『ずっと見てるから』」

「……」

レイラは力なく、地下三階に上がる階段を見やる。そこには、どたどたと二人の白衣の男達が降りてくる。

「レ、レイラ様!ご無事ですか!?」

「まさか……レイラ様が敗れた!?まさか、そこの黒髪の……!」
「すみません!レイラは今、酷い怪我をしています!その侵入者に構う前に、早く治療をしてください!……オラクルにとって、レイラがどれほどに重要な存在か、分かっていますね?」

白衣の男達は顔を見合わせる。そして、直ぐ様礼をした。

「はっ!了解しました!私どもで至急、レイラ様を治癒術研究室にまでお連れします!」
「頼むよ」

ルカは抱き上げたレイラに、ぼそりと呟く。

「……ケガが治ったら、二人で逃げよう。櫛子ちゃんと哲哉君も誘っていいかもしれない。償おう。そして、幸せを求めて、頑張ろう」

レイラは、駆け寄ってきた二人組の男を見上げ、優しいルカの笑顔を見上げ、にっこりと、優しく微笑んだ。

「その必要はないわ」

ぐっとレイラがルカの腕をふりほどく。

そして、その左腕と右腕を、ぐにゃりと変質させて、それを二人の白衣の男にぬるりと伸ばした。

がぱぁっ、と開かれた、刺々しい牙並ぶ口。

レイラの腕は、そんなおぞましい姿を作り、あんぐりと白衣の男に迫り……

「れ、れいらさま……じょ、じょうだんはおやめくだ」

ぐしゃり。

「あ、あ、あ、あ……ぎゃあああああああああああ！」

ぐしゃり。

むしゃ、むしゃ、むしゃ、むしゃ、もぐ、もぐ、もぐ、もぐ、ごっくん。

そのレイラの狂行に、ルカは言葉を失った。

「レ……イラ……？」

「サギニちゃん……幻術を解いちゃったのね。でも、御陰で命拾いしたわ……！まさか、都合良く『ごはん』が飛び込んでくるなんて。でも、約束違反ね。あとで殺そ♪」

にやりと笑うレイラ。そして、その両腕の巨大な口。口はべろりと舌を出し、唇に残る血を舐めとる。

「ああ～～～～～、すっきり！心が洗われるようだわっ……！二人分のアルマ、流石にもうまんぷく……♪あっはは♪これで、私はまだ踊れる……♪」

薄葉と明華も、その光景を見つめていた。引き攣った表情で、顔

面を蒼白にしながら。

レイラは完全に復活していた。薄葉の一撃で一気に吹き飛んだアルマも回復し、傷ついた体も全快した状態で。

「悲劇は終わらせない……最ッ高の不幸はまだ味わってない……ッ!!」

レイラは薄葉にほほ笑みかける。邪悪な笑みを浮かべながら。

「あなたに殺されかけて……私、とっても不幸だわっ……不幸、不幸、不幸、不幸っ!!なんて、可哀想な私っ!」

そして、レイラは再び動き出す。

「それでは悲劇の第三ラウンド……今度は私が観客よ?……あなたの大切なもの、全部私が食べてあげる……♪」

レイラの視線が明華に傾く。そして、その体が勢い良く弾んだ。

二人の人間分のアルマを喰らい、さらに力を増したレイラは、殺意の方向を明華に向けて、地面を這う。

「駄目だレイラ！」

ルカの叫びも無視して、レイラの体が、黒い足の跳躍により跳ね上がる。それは薄葉の体を飛越し、その黒い爪は、巨大な腕でもひしゃげるだけの格子を軽くスライスする。そして、格子を掻い潜ったレイラは、崩れた格子に顔を寄せる明華の背後に降り立った。

そして、薄葉に向けたように、その黒い爪を『殺意』を削いで明華に向ける。

おもちゃで遊ぶように、人を殺せる可哀想なレイラだけが成し得る技。

その狙いは、しかし、明華ではなかった。

レイラが明華目掛けて駆け抜ける。その腕を変質させ、巨大な腕として振り下ろす。天井を削ぎ落とし、降り下ろされるその拳が、明華の頭上に影を落とす。

その巨大な腕の豪快なひと振りは、薄葉でも僅かに方向をずらして躱せる一撃。

逸らしても、明華を守れない絶妙な振り下ろし。

薄葉は都合良く切り開かれた格子を跨ぎ、手を縛られた明華の前に躍り出た。そして、受け流せないと判断すると、ぐっと息を呑み、身構えて……

その姿を確認して、レイラは邪悪に微笑んだ。

ぐしゃり、と嫌な音がして、明華の寸前で拳は止まる。

ぽたりと滴る血と、全身で拳を受け止めた薄葉の姿を見て、レイラはほくそ笑んだ。

「私、最ッ高に黒ずんでるッ！」

Ｅｐ３１：　私、最ッ高に黒ずんでるッ！（後書き）

レイラの描く悲劇。その結末は？

次回、「幕引き」に続く

薄葉と同等以上の強敵、レイラ。反吐が出る程の邪悪、そんな敵です。不愉快なまでに残酷で、不愉快なまでに自分勝手、そんな惨たらしい天使です。不愉快な表現が混じった事をお詫び申し上げます。

ＥＰ３２：　幕引き（前書き）

薄葉ＶＳレイラ、最終局面。そしてオラクル内部の戦争、遂に終結？

Ｅｐ３２：　幕引き

レイラはにやりと笑った。

その腕の下から感じる、暖かい血の感覚を味わいながら。

自らの理想とした、悲劇を作り出せたと。

「……あれ？」

しかし、すぐにレイラは異変に気づいた。

振り下ろした腕は、確実に薄葉に直撃した筈だった。

額と広げた腕、胸の全てに押し当てられた腕。額の辺りから血が滴っているのも感じている。

ならば、なんでこの男は立っている？

先程までは、この拳は全て受け流されていた。力をいなされ、回避されていた。

だから、レイラはこの男にはこの腕を止められないと思っていた。

いや、この腕を止められるものはそうは居ないだろうと踏んでいた。

しかし、薄葉は立っていた。まるで、振りおろされた腕を受け止め、明華を守るように。その防げない腕を支えるように。

刹那、レイラの体が檻の奥へと吹き飛ばされる。何も理解できないまま、壁に叩きつけられ息を吐くレイラは、目の前に立つ化け物を凝視した。

「なんで……立っていられるのよぉッ！？」

額からは血が滴っている。その血が目に掛かり、目を固く閉ざしている。

しかし、薄葉は目を閉じたまま、確かに両の足で立っていた。

しかし、全くレイラの攻撃が効いていない訳ではなく……レイラの一撃は確かに薄葉に相当なダメージを与えていた。

その衝撃で、薄葉が意識を失うほどに。

意識が完全に消失し、外された理性の枷が、薄葉のスイッチを切

り替えた。

薄葉が走る。

「速ッ……！？」

レイラはその速度に怯んだ。一瞬、姿を消したかと錯覚する程のその速度に、反応しきれないレイラのその体に、再び衝撃が走る。

「ぐぅっ……！」

壁に再び叩きつけるように、レイラの体が揺れる。その目の前には血を流しながら、目を閉じながら、再びその拳を振りかぶる薄葉。レイラは咄嗟に、体を守る『鋼鉄の装甲』を作り出し、ガードする。

その鋼鉄の装甲に、構わず薄葉は拳を叩きつけた。

「がぁっ……！？」

鋼鉄の装甲が、激しい音を立てて揺れる。そして、レイラの体を軋ませる。叩きつけられた拳は、鋼鉄など容易に砕く程に強く、重くレイラを打ち抜く。

そして、その反動に耐え切れないかのように、薄葉の拳にも血が

滲む。

「この……馬鹿力がッ！！」

レイラがその体から無数の触手を伸ばす。それにより、薄葉の腕を絡め取り、体を掴み、その距離を突き放そうとする。しかし、それよりも素早く動かしたもう片方の腕が、その触手を手刀で両断した。

そして、逃れそびれたレイラの壁に埋まる体に、容赦なくその拳を再び浴びせかける。

ゴッ！

「あ……！？」

背後の壁をも砕く程のその衝撃に、レイラは血を吐く。しかし、直ぐ様その目をぎょろりと見開くと、その腕を元の人間のものに戻して、その指先をぐんと薄葉の心臓めがけて伸ばす。

しかし、当然薄葉はそれを受け止め、そのまま腕を引っ張って、レイラの体を投げ飛ばし、背後の地面に叩きつける。肺の空気を吐き出し、目に涙を浮かべたレイラの視界に、直ぐ様、その足が振り上げられる。

その踵に、レイラは恐怖した。

ガゴンッ！！

激しい轟音。それと共に地面が砕ける。

ごろごろとその体を転がすレイラ。体から蜘蛛の足を生やし、体を強引に動かしたレイラは、直ぐ様痛みに耐えながら、自分の寝転んでいた位置に視線を送る。

粉々に砕けた地面。じわりとズボンの足に血を滲ませる薄葉。その目を閉じた顔が、こくりと自らを傾くのを見て、レイラは本当の意味で恐怖した。

殺される……！

その表情浮かばぬ血塗りの顔。そこからレイラは容赦ない殺気を感じ取る。先程までの、目の前の化け物には、何処か加減を施したような甘さが感じられていた。まるで何かが僅かに力を押さえ込んでいるような、そんな軽さを感じていた。

しかし、今、目の前で目を閉じ、穏やかな表情を浮かべる化け物からは、加減がまるで感じられない。

痛めつけられ、苦しめられ、そんな不幸を望んでいたレイラが、初めてそれを拒絶した。

レイラはその体の損傷部分を再生させる。そして、その体を再び変質させていく。鋼のような黒ずんだ肌、体中から周囲を見渡す無数の目、その身を完全な異形の化け物に染め上げたレイラは、ぎょろりとその全ての目で薄葉を睨み襲いかかった。

「あああああああッ！！」

その岩をも裂く爪の一閃を薄葉はひらりと躱し、その赤いドレスの胴体に、再び拳を叩き込む。ビキビキと骨の砕けるような音を立て、レイラの体が浮き上がった。

「がはっ……！」

しかし、レイラは異変に気付く。

骨の砕ける音。それが響いたのは、レイラの体からではなく、自らに打ち込まれたその拳の方からだった。

薄葉の拳が割れる。血が吹き出す。

薄葉の体は確かに常人を逸する強度を持っていた。しかし、鋼鉄の防御を誇るレイラの体に真正面から叩き付けるその攻撃の反動に、耐え切れずに悲鳴を上げていたのだ。

レイラはにやりと笑った。

薄葉に浴びせたレイラの重い一撃は、致命傷に近い威力を持っていた。それによる歪が、次第に薄葉の体を蝕んでいた。

なぁんだ……ちゃんと効いてるじゃないの……♪

レイラは直ぐ様、浮き上がった状態から、巨大な拳を作り上げ、下の薄葉目掛けて振り下ろす！薄葉はそれを移動し回避する。

その隙を見て、レイラは再びその視線をぐるんと回し、明華の方をぎろりと睨んだ。そして、地面についた巨大な左腕を支えに、その右腕をギュンと言葉通りに『伸ばす』。

「ほらほら！また妹さんを庇わないとっ！あっはははははっ！」

レイラはけらけらと狂ったように笑い出す。

「やめろレイラ！」

それに反応して、ルカが明華の前に腕を広げて立ちふさがる。その手には鍵の束が握られており、レイラもその状況を直ぐ様理解した。

「その子、逃がすつもりだったの？……ルゥウカァァァくぅぅぅんッ！？」

レイラの腕が、飛び出してきた兄にも構わず次第にその先端を巨大化させる。まるで鉄球のように変質したその巨大な拳が、ルカの前に迫った。

「ルカさんやめて！死んじゃいます！」
「それは君も同じだろう！……大丈夫、僕は運がいいから……！」

避ける事は不可能だろう。うねるその腕は、意思を持つように動いている。それを理解し、ルカはそれを受け止めるという判断を下した。明華ごと砕かれてしまうかもしれない。しかし、彼は、彼の持つ唯一の力、『運』に全てを委ねた。

そしてそれは彼の願いを叶える。しかし、思いもよらぬ形で。

自らの身をなげうってでも、明華を守ろうとしたその願いは、目の前に飛び込んできた男によって叶えられた。

二人を庇うように飛び込む、薄葉によって。

薄葉は、瞬時に移動し、その足を後ろに振り上げ、その巨大な鉄球を迎え撃つ。その薙ぎ払うような蹴りが、鉄球と衝突する！

ゴッ！！

みしりと音を立て、レイラの鉄球の拳がヒビを入れる。

「ぎぃっ！！」

しかし、対する薄葉の足も、その足を包む布地に血の痕を滲ませる。ぴしゃりとその血が地面に垂れて、血を滴らせたその足が、みしみしと嫌な音を立てた。

「敵を庇うなんて……ばっかじゃないのぉッ！あっはははははッ！」

顔を痛みで一度歪めたレイラは、しかし、その拳のヒビを、再び修復しながらその鉄球を再び叩き付ける！薄葉はその血の滲む足を振り上げ、反撃する。

ごきり。

レイラの拳が砕ける。薄葉の足が音を立てる。

「あっはははははは！どうしたの？だんだんと力が弱くなってなぁい？」

レイラの笑い声と、薄葉のボロボロな姿を見て、明華は震えた。

スリープモード。意識を削ぐ事で、理性による束縛から逃れる薄葉の暗中無心拳第二段階。今までに、数える程も見せていない兄のその力の『代償』を、明華は今更理解した。

『理性の封印』。ただ我武者羅に力を振るうその段階は、薄葉の暗中無心拳の中でも、屈指の破壊力を持つものである一方で、ある『代償』を必要とする『諸刃の剣』だった。

それは、体の限界を超えて、ただ本能の赴くままに拳を振るうが故の、体の崩壊。

普段は、たとえ無意識であっても、意識の潜在部分で働く僅かな理性で、押さえつけている越えてはならない一線。

スリープモードは、理性を完全に遮断し、その一線を越える。

体が壊れる事すら恐れない、その為の加減をしない。だからこそ、薄葉の持つ中で、最も高い火力を持つ武器。その一方で、自らの崩壊をも招く。

拳を強く叩きつければ拳が割れる。当然の事が起こっているに過ぎない。それをも恐れず、眠る薄葉は構わずその拳を打ち込み続ける、それだけ。続ければ全身に歪が生まれるのも当然の事。

薄葉が眠りに落ちる時に受けた一撃、それで既に薄葉の体は限界に近付いていた。

そこから彼は本能だけで戦っていたのだ。

「もう……やめて……」

初めて戦う兄を見ていて苦しくなった。

「私の事なんか……守らなくていいから……」

眠っているのに、本能だけで動いているのに、明華の前に立つ兄。

「……どうして……そんなにボロボロになって……！」

薄葉が答える筈もない。

「全くだよ……」

そう、明華は思っていた。

「……え？」
「体中めっちゃ痛ぇ……！あんの化け物……メチャクチャしやがって……！」
「どうして……どうして喋って……？眠っていたんじゃ……！」
「こんだけ痛けりゃ起きるわなそりゃあ……！」

薄葉は迫る拳を弾きながら、はぁ、と溜め息を漏らす。

「そんでもって、何か勝手に手が動くし……こんな状況で、俺は何もできねぇぞとは言えんわな……！」

明華は、ぽかんとその光景を眺めながら、もう一度だけ呟いた。

「……どうして？」

薄葉は再び溜め息をつく。

「……お前の兄様は凄いんだろ？……だったら、こんな時位……格好付けさせろってのの！！」

薄葉は攻撃をいなし、横目で明華を一瞥すると、にやりと笑う。

「妹の一人を守ってやるくらいにゃあ、俺も普通だってんだ！」

明華の目からぽろりと涙がこぼれ落ちた。

「あんた、あいつ妹だっけか？……ちょっと流石に俺、イラっと来てるからぶん殴るぞ。構わないな？」

「……うん！思いっ切り、お仕置きしてあげてよ！僕じゃあいつをしかれないからさ……情けないけど……お願い！」

「……まぁ、何となくだが……気持ち分かるわ、うん。……じゃ、あんたの代理って事で！」

薄葉とルカは、視線で何かを語り合い、互いににっと笑って約束を結ぶ。

「じゃ、ちょっと行くから気をつけろ！そいつ、明華の事頼んだ！」

「任せて。僕は弱いけど……運だけはいいからさ！頼むよ！」

「……頼み事されるのは慣れねぇなぁ」

薄葉は苦笑し、目の前の拳を振り回す化け物を睨む。

レイラはその不敵な視線を目を見合わせ、ぞくりと鳥肌を立てた。

……来る！？

それを察知したレイラは、それでもにやりと不敵に笑んだ。

来させはしない……！

レイラはなおも薄葉の背後にへたり込む、明華に視線を送る。そして、その姿を守る兄のルカにも視線を送った。

こっちに来ようものなら……あいつらを狙ってやる……！それで、あなたは庇わざる得ない……！万が一こっちに来ようとも、あいつらを殺して絶望させてやる！そして、絶望する弱りきったあなたを……じっくりいたぶり殺す……！

最ッ高の悲劇を味わえ……！

レイラはほくそ笑む。

しかし、その余裕は、一瞬で崩れ去る。

「……あ？」

薄葉の姿が消えた。速さで見失ったのではない。本当に『消えた』。ほんの少し、明華とルカに向けた意識。そのほんの一瞬。薄葉にも意識を残していた筈なのに、煙のように消えた。

「ど、何処に……」

その動揺が命取りだった。突然の自体に、レイラは動きを止め、周囲を見渡したのだ。

「……流石の俺も、あんな真似されちゃあキレるぞ？」

そして、目の前に、そのボロボロの男が立っている事に気付く。

「……なんで！？い、いつからそこにッ……！」

薄葉は両腕をぐっと引き、突き飛ばすようにレイラの両肩を突き飛ばす！

教えは、「相手の腕を上げさせないように」。山田さんが教えてくれた数少ないまともな説明の技。腰を落とし、力が加わる最高の姿勢で打ち込む一撃。山田さんとバランスを取りながらの手押し相撲で身に付けた押し技をイメージする。

「『肩慣らし』ッ！」

ズドン！とレイラの巨大な腕をぶら下げる双肩に力が加わる！がくん、と腕に掛ける力が抜けるのをレイラは感じる。肩が外れたのだ。そして、その圧力は、レイラを浮き上がらせ、その巨大な腕も

加えて相当な重量となる体は吹き飛び、砕けた壁に叩きつけられた。

「うが、は……!?」

レイラが息を吐き出す。

「さっきから……痛いんだよ!今の俺は相当必死だぞ!」

薄葉は既にレイラの目の前にまで迫っていた。先程までは感じられない必死さ、とっととケリを付けてやるという切迫した空気が伝わる。

教えは「気に食わない奴に謝らざるを得ない時をイメージして」。薄葉は壁にもたれかかるレイラにぐっと迫り、その目を見つめる。

「な、な、なによ……!?いきなりなによ!?」

その視線に思わずレイラが動揺する。「謝るときは相手の目を見ますよね?」山田さんの言葉通り。

そして、薄葉は勢いに任せ頭を一度思い切り引き、思い切り振り下ろした。

「『三千星落下(サーセンッッッシター)』ッッ!!!!」

ちなみにこの漢字の当て字は山田さん考案のものである。

「謝る振りをして、思い切り頭突きをするんですよ。『あ、当たっちゃいました。あっはは－さ－せん』位のノリで」

そうやって得意げに語る、山田さんの顔が思い浮かんだ。

ゴンッ！！！

「……いってぇぇぇぇぇぇぇぇッ！？」

薄葉は、渾身の頭突きをぶちかまし、悶えて地面を転がった。

ちなみに、頭突きをかます前から薄葉の額は割れている。

レイラの反撃が恐ろしくて、一発で意識を刈り取れる方法を考えた薄葉は、一度山田さんを一撃で地面に沈めたその技を選択した。

確か、「薄葉君、どうして一週間も来てくれなかったんだ！」と山田さんに詰め寄られた時に使ったと思う。

薄葉は涙目で身を起こす。そして、目の前で壁にもたれかかったまま、額を真っ赤に、それでも血は流さずに、虚ろな目をして気絶するレイラを確認し、ふぅ、と息を吐く。……そのあと、何度かつんつんと頭をつついたり、目の前でパンと手を鳴らしたりして、意識の有無を確かめたが、ぴくりとも動かなかったので、薄葉はやっと息を深く吐き、ルカと明華の方に向かって歩きだした。……途中で何度も立ち止まって、ちらっ、ちらっとレイラの姿を確認しながら。

「ありがとう。……殺さない、なんて情けまでかけてもらって」
「いやいや。情けなんて掛けてないよ。あれが俺のできる精一杯だ」
「……君、面白いね。名前は？」
「杏樹薄葉」
「僕は月島流河。本当にありがとう。妹を……レイラを止めてくれて」

軽くぎゅっと握手を交わし、ルカと薄葉はすれ違い、それぞれの妹の元に歩み寄る。

「……明華」
「……兄様」
「さっきお兄ちゃん言うてただろ。そっちでいい。いや、変な意味じゃなくてだな……それ、堅苦しいんだよ。様、なんて柄かよ俺が」
「お兄ちゃん……」

明華は、血塗れの兄の姿から、悲しそうな目で目を逸らす。

「……私のせいで……こんなにボロボロになって……それに今

までもずっと……私の勝手な理想を押し付けてきて……」
「いや……理想も何も、事実だったろ。俺が何か知らんが勝手に戦ってたのって。……お前の言うこと間違っちゃいないってのの。……いや、言い過ぎなところもあったが」
「そうじゃなくて……それに、私……フェガロフォスで、お兄ちゃんを見失ってしまって……ずっと、私だけはお兄ちゃんを見てるって……傍にいるって思ってたのに……！……ごめんなさい……！」
「いやいや……お前は俺の保護者か。迷子になった子供みたいに……」
「そうじゃないんです！私は……」
明華は何かを言いかけて、口を噤む。そして、俯き、呟いた。
「ごめんなさい……」
「いや……こっちこそごめんな」
薄葉の思わぬ言葉に、明華は顔を上げる。
「お前の言ってた事信じられなくて……冷たく当たってたよなって……お前が変な嘘つくような奴じゃないって分かってたのに。本当にごめん」
明華はぽかんと口を開いたまま止まる。そして、そのままぼろぼろと涙を零す。
「わ、な、泣くなって！悪かったから！な？……あ、ほら。手の鎖！外すぞ！鍵は……どれかな？」
がちゃがちゃとルカの置いていった鍵をいじり、薄葉は明華の後

ろに周り、鍵を色々と試し始める。明華は黙って腕を任せ、何故か溢れ出る涙を擦る事さえできずに口を噤んだ。

「……無事で良かった。心配したよ」

薄葉の囁くような声に、明華はただ静かに口を噤んだまま、ぽっと頬を朱に染めた。

がちゃり。

「お、あった。これで鎖を……ったく、なんてもん付けやがんだ」

明華の鎖が解け、薄葉は鎖をゆっくりと解く。明華の手を挟まないよう、気遣いながら。その時、ぞわりと背筋を震わせるその声は響いた。

「……ああ、あああ、何て、素敵なの……♪」

明華は目を見開き、薄葉は肩を弾ませ、前方を見る。

其処には、黒い巨大な一本角を生やし、黒い翼を広げるレイラが、その巨大化させた腕で、ルカを握っている姿だった。

「……うすは、ウスハ、薄葉……♪……まるで美女と恋に落ちる野獣のように素敵な人……♪……荒々しくも穏やかで、綺麗な心を持った素敵で無敵な最高の化け物……♪」

「……勘弁してくれ。まだ立つのかよ化け物め……しかも、それ褒めてるのか……？」

「ごめん……薄葉……レイラ、まだ懲りないみたいだ……」

「黙れ愚図」

「私は『ぐず』ではありません！『ぐぜ』です！」

その声は、牢の外の廊下から響いた。牢の前に駆けつけたのは複数の人影。

「って、わ！あ、あれはテラス人間じゃないですか！しかも……随分と強そうな」

「あいつは……！……あ、ウスハ！？どうして此処に！？しかもなんだその酷い怪我は！？大丈夫か！？」

「あ、薄葉さん！大変！すぐに治療を……！」

救世と済、二人の天使、才羽兄妹。

「あらあら、騒がしい……折角の私の王子様へのメッセージを……」

むすっと唇を尖らせて、レイラがいじける。ルカがその表情を見上げて、怪訝な表情を浮かべた。

「……あれ？レイラ？」

「ハァーーーーッハッハッハァッ！此処かァーーーーーーッ！って、ぐわあ！あの時の……！？」

「お兄ちゃん待ってー！怪我してるのに先に行っちゃ……あ、ウスハ！だいじょうぶ！？痛そう……！でもどうしよう……！イタイノトンデケー、アルマ切れで使えないよう……！」

「ウスハ？あの血塗れがか？一体全体あいつは……」

「……ハラン。今はその話は後ね。それより、あの天使は……？」

駆けつけた派手な白黒衣装の男、ハランと少女ミュゲの紗羅葉兄妹。そして、魔女アヤメ。

「……ぞろぞろぞろぞろ天使がよくもまぁこんなに揃うわね。別れの挨拶に水を刺さないで欲しいものだけど……ま、いいわ」

レイラは不満そうに溜め息を吐く。其処に先程までの狂った殺気は感じられず、「別れ」という言葉が、突然の来訪者達に驚く薄葉の視線を引きつけた。

レイラは怪しく微笑み、その空いた手の指をすっと薄葉に向ける。

するとその指は瞬時にグンッ！と伸び、薄葉に勢い良く迫った。

「危ねぇ！」

薄葉は慌てて目の前の明華を横に押しのける。細い槍を伸ばすようなその攻撃に、ろくに動く余裕もない薄葉は、明華だけを逃がすのが精一杯だった。その細く伸びた指は、ぐんと薄葉の額に迫り……

「お兄……！」

ちゅっ。

薄葉はきょとんとしていた。てっきり、額を貫かれるのかと思っていた。しかし、そんな痛みは走ることなく、薄葉の額に当たったのは、伸びた指先から変形した、赤い唇だったのだ。

「ちょこっと不気味な挨拶でごめんなさいね？……指先の変質だけれど、一応私のファーストキッスだから、ね？……うふふ♪」

するりと唇のついた指が戻っていく。

その光景に、全員が唖然としていた。薄葉にいたっては、その言葉の意味さえ理解できずに凍りついていた。

ぽっと頬を染めたレイラは、くすりと微笑み黒い翼を翔かせる。

「やだ、恥ずかしい……じゃ、これで、ね？また、会いましょ薄葉。次あった時は、もっと広い青空の下で、清々しく殺しあいましょうね♪それじゃあ、愛してるわ私の王子様。最後に素敵な情報をひとつ」

レイラの体が、ルカと共に浮かび上がる。最後にウィンクひとつを送り、レイラはその情報を提供する。

「……ヴォラスに行くといいわ。其処でちょこっと面白いイベントがあるから。……運があったら、其処で会いましょ♪……いえ、運が無ければ、かな？えへへ、良く分からないや！……じゃあね、薄葉♪」

ガゴンッ！！

空に勢い良く舞い上がったレイラは、その頭に生やした一本角で、天井をぶち破り消え去った。

薄葉が鼻をひくひくさせながら痙攣している。

「ウ、ウスハ……や、やったな！愛の告白をされたぞ！こ、この色男っ！」

「済ちゃん下手なフォローはやめてあげてください！……薄葉さんは、複雑な恋愛事情に巻き込まれて大変なんですから」

「へ、下手……！？いや、それ以前に！それをお前が言うか救世！？」

済の雑なフォローも耳に入らず凍りつく薄葉。そんな彼に更に複雑な恋愛事情が絡みつく。

ちゅっ。

薄葉の頬に柔らかい感触。つい先程、味わったばかりの感触に似ているが、それよりももう少しだけ柔らかい感触。

薄葉がロボットのように首を横に傾けると、其処にはムスっとした表情で、頬を赤くした薄葉を睨む幼い少女の姿があった。

「ミュゲもちゅーくらい出来るもん！ウスハのお嫁さんは私だよ！」

薄葉の思考は完全に停止した。

「ウ、ウスハ……なんだかよく分からないが、モテモテだな！い、色男！妬けちゃうなぁ、ま、全く！結婚おめでとう！」

「済ちゃんはもう余計な事言わないであげてください！薄葉さんはそういう趣味は……あれ？そういう趣味は……ないですよ……ね？」

救世が僅かに身を引いた。

そして、もう一つ、わなわなと震える様子のおかしい男が一人。

「き、き、き、き……貴様ァァァァァァァァァァッ！！！」

「だ、駄目よハラン！気を鎮めるのよ！」

「離せアヤメェッ！！こいつだけは……絶対に許さないッ！！」

燃え上がるお兄ちゃん。それを必死で止めるお姉ちゃん。

なんだ……これ……

薄葉は理解不能な事態と衝突し、ふらりと体を傾かせる。

ばたり。

そして、そのまま意識を失ってしまった。

「ウ、ウスハ！いくら幸せだからって気絶すること……」

「違いますよ済ちゃん！怪我！怪我です！大変、早く治療しないと……！あと、其処のバランさん！あなたも右腕見せてください！怪我してるんでしょう？」

「バ、バラン！？それじゃ弁当に入ってる緑のアレだろ！？」

「ご存知ないのですか？バランって葉蘭（ハラン）の別称ですよ？弁当に入っているのは人造バラン。葉蘭を元につくられたものなんです。だから、何もおかしくないです」

「む、むぅ……そうなのか。……いや、例えそうでも俺はハランだ！おかしいだろうが！」

「うるさい人ですねー」

「！？」

わいわいと騒ぎ出す天使達。

そんな中で、明華だけが惚けたようにぼーっと地面を見つめていた。キス騒動に一番最初に乗ってきそうな、明華が、だ。

明華はただ一人、ぽかんと頬を染め、じっとそこに座り込んでい

た。

――

オラクル研究施設。

オラクルの天使不正召喚の証拠を掴んだズィスィ王フラルは、優秀な戦力を集め、其処に先陣を切って踏み込んだ。

大きな抵抗が予想されたが、ズィスィ軍が基地にたどり着いた時には、既に協力依頼を要請したセルセラコミュニティの手によって、オラクルは制圧されていた。

施設には隠された地下室があり、其処では多くの禁止魔導の研究資料、そして実験の成果である、人体実験の被験者などが発見された。

奇跡的に研究施設内には死体が全く出ておらず、負傷者こそ出た者の、調査時点では重傷者は殆ど出ていなかった。今後も関係者と思われる人間の照合を行い、正確な状況を把握する必要はあるが、

コミュニティサイドには負傷者はなしという結果に終わる。

非人道的な実験の被験者達、首輪という魔の道具により支配されていた伝承の天使達、テラスに似た体構造を持つ人間などは、ズィスィで保護された。オラクルのメンバーの処遇については検討中。

なお、一部の幹部は拘束したが、一部幹部の所在は不明。更に代表のイエレアスの所在も掴めておらず、その捜索は続行される。

こうして、ズィスィ内部に蔓延る組織、オラクルによる悪事は暴かれ、ズィスィの平和は守られる。

それが後に、オラクル事件と呼ばれる、セルセラコミュニティの名を更に響かせる事件の、表側の真相である。

Ｅｐ３２：　幕引き（後書き）

オラクル事件は終息に向かう。そして、天使達は帰っていく。取り戻した平穏。一同は、その疲れを癒すためにズィスィで一時休息を取る。しかし、そこに訪れた平穏は、少しだけ形を変えていて……

次回、「天使の羽休め」に続く。

遂に決着！なんか最後に色々と大変なフラグを乱立した薄葉さんでございますｗ　これにて、ズィスィ編の山場は終了。あと二話ほどで、三章ズィスィ編は完結です！あとの二話は少しだけ短くなるかもです。

少なくとも、あとの二話は鬱展開とかシリアス展開ではございませんｗ　ただの日常パート的なもの、もしくはちょこっと情報説明的なものとなりますｗ

ではではあと二話、是非ともお付き合いよろしくお願い申し上げます！

ＥＰ３３：　天使の羽休め（前書き）

今回はかなり短め。前話の半分程度しかありません。

ＥＰ３３：　天使の羽休め

――オラクル研究施設にて

男は後を追ってくる三つの影に怯えながら、施設内を駆けていた。切り札である筈の天使軍団を楽々と捩じ伏せて、彼の最大の手駒である天使が与えてくれたテラス化兵士をも赤子の手を捻るように薙ぎ払って、三人の恐ろしい影は、扉を潜り、広い実験部屋へと追い詰められた男に迫る。

「くっ……！一体どうなっている！？此処は実験部屋ではなかった筈だ……なんで部屋が…！」

「おやおやぁ？お気付きでなかったんでぇ？この施設、何者かの幻術によって知覚出来る構造が狂ってますよ？あの扉を開けたらあそこの筈、なんて常識は通用しないんですよぉ。……このアルマ色は恐らくはサッちゃんの仕業かねぇ？懐かしいわぁ」

何時の間にか、部屋にまで足を踏み入れていたその中心に立つ女。奇妙なドレスを着こなし、灰色の髪を纏め上げた白い面の女。その白い目の穴も空いていない面には、ぴたぴたと赤い模様が刻まれていた。

唯一、その三人の中で見覚えのある女。

「エッちゃん。扉を押さえといてねん♪」

「エッちゃんはやめろ……」
「いひひ……！堅いこと言わないの♪……久しぶりに体を動かしてテンション上がってるんだからん」

こきこきと首を鳴らし、女はカツンと赤いスコップで地面に叩いた。すると、大男は黙って扉の前に立ち塞がる。男は逃げ場を失った。

「貴様……どういうつもりだ！？」
「どういうつもりって……分かってたから逃げてたんですよねぇ？」
「裏切ったのか……セルセラコミュニティッ！！」

女はセルセラコミュニティのメンバー。男、オラクル教主、イエレアスと一年少し前に契約を結んだ、セルセラコミュニティの窓口係、名をジアミエンと言った。

女、ジアミエンは「あはは」と笑い、赤いスコップに片手を添え肩をとんとんと叩く。

「裏切った？……いえいえ。もっといいお仕事が入ったので、そっちの依頼を受けてきただけですよ？」
「私との契約を蔑ろにするつもりか！」
「いえいえ。契約内容は『技術の提供』だけだった筈。ウチの優秀な研究者を寄越した時点で依頼は達成されていた筈ですよねぇ？」
「馬鹿な……貴様ら、私を売るつもりか……！？そうなれば、あの禁術に手を貸していたお前らもただではすまんぞ！」

喚くイエレアスにジアミエンは「くすり」と笑った。

「だからこうして、証拠を潰しがてらにオラクル制圧の依頼を達成しにきたんじゃないですか。……わざわざ私がこうして出向いてま

で」

その殺気に震え上がるイエレアスを前に、ジアミエンはそっと耳に手を添えた。そして、ぼそりと喋り始める。

「んー、こちらジアミエンさん。ん？シェーヌと研究資料の回収はオーケー？りょーかいー、んじゃ、こっちに合流してねんトンガリちゃん♪……え？あー、映像なら届いてたわよん。問題ナッシング♪……はい、じゃあおご苦労様～！後でね～！」

独り言だろうか。一人でぼそぼそと喋ったかと思うと、ジアミエンは手を降ろす。

「ジアミエン。マオちゃんはちゃんとシェーヌ回収したって？」
「マオ？」
「……あなたがトンガリトンガリ言ってる子。変な渾名で呼ぶの止めてあげたら？」
「あっはは、冗談よん♪親しみを込めての渾名なんだからいいじゃないの、ねぇ、アッちゃん？」
「……シェーヌはどうなの？」
「ああ、そうだったわねん。ええ、無事回収完了～。証拠の処分もカンペキみたいね♪」

奥に立つ銀色の髪の女と会話を交わし、白面女は「にやり」と笑う。イエレアスはその笑みに恐怖を覚えた。口で「にやり」と呟く滑稽な笑顔だったが、その赤でぽつぽつと飾られた仮面と赤いスコップに僅かに見える赤黒い何かが、その滑稽な所作を不気味なものへと変質させる。

「……おたくの私達の『契約』を知る人間は、既に処分済みよん♪

あとは貴方一人を葬れば、セルセラの名は『悪魔の共犯者』から『悪魔を討った英雄』へと転じるの。滑稽でしょう？」

「……貴様、さては最初からそうしてオラクルを利用しようと……！」

「うふふ♪刹那に生きる女、ジアミエンさんにそんな計画性がある訳ないじゃないですかぁ～♪その場その場の状況を、うまく転がしてるだけですよぉ～～～♪やだ～～♪」

イエレアスはその言葉が嘘である事はすぐに見抜けた。背後に立つ二人の仲間のなんとも言えない呆れ返った表情から。

天使召喚の儀に失敗を続けていたオラクルに、セルセラコミュニティが天使召喚術の技術提供と開発協力を申し出てきたのは一年と少し程前のこと。

セルセラコミュニティは優秀な人材の派遣と情報提供をし、その報酬と技術開発の協力をオラクルも提供するという相互の協力関係の締結。

それは全て、この時の事を見越して？イエレアスはこの先に待ち受ける結末を予想し、後ずさりする。

「あれ？ビビっちゃってる？やだなぁ、そう簡単に人を殺す程に残忍じゃないですよ私ぃ～？なんたって今じゃセルセラコミュニティの事務担当ですしね？」

「……頼む！お前達の事は決して口外しない！だ、だから命だけは……！」

「殺さないって言ってるでしょ？」

ジアミエンの声のトーンががくんと落ちる。

「でも信じられないよね？やっぱりビッグリターンにはビッグリスクが付き纏うように、人間は裏に何かが無いと物事を信用出来ないものだよねぇ？それが命なんて重苦しいものが絡むとなるとなおさら、ねぇ？」

イエレアスにジアミエンが一歩近づく。イエレアスがじわじわと後退する。そしてまた白面が近づく。

「……だったら、私が納得の出来るビッグリスクを用意して、あなたの命をビッグリターンとして与えてあげる♪……ジアミエンさんの～～～クイズアワ～～～テテンッ♪」

陽気な声でジアミエンがひゅっと赤いスコップをイエレアスの目の前に突きつける。そして、「にやり」と笑うと、今まさに死に行こうとしている男に最後のチャンスという名のゲームを与える。

「……今からジアミエンさんの出すクイズに正解できたら、あなたの洞察力や運などなど、様々な才能を評価して、あなたをコミュニティに歓迎しちゃいま～す！つまり、あなたは私達の正式な仲間となり、ズィスィの追手からも逃れられ、命が助かる！なぁんて素敵な景品なのかしら！？ねぇ、ジョニー？ああ、素敵だねケリー！さぁ、イエレアス氏、挑戦するかい！？」

滑稽な一人芝居。何処までもふざけたその女。しかし、イエレアスにとって、その悪ふざけは唯一の生命線に映った。

「す、する！」

「オーケイ！ノリの悪いボーイはブッコしちゃところだったぜい！

それじゃあ、早速始めましょう！ジアミエンさんのクイズアワ～～！デデン！」

ジアミエンのスコップが引く。

「……私、ジアミエンさんは、今はセルセラコミュニティの事務全般を請け負っておりますが～……以前のジアミエンさんの請け負っていた仕事はなんだったでしょ～うかっ！？」

イエレアスは目を泳がせる。

「あれれ～～～分からない？麗しきこの乙女の仕事なんて、大体想像つくと思うけどなぁ～～～？じゃあ、大ヒント！私はなんで仮面を付けているのでしょ～かっ！あと私の魔具に注目！これ、スコップだよね～～～！って事は～～～～～～～～～～～？」

分かるはずがない。

「はい、あと三秒～～～！さ～ん、に～い、い～ち……」

「ま、待って……」

「ズィロ～～～……パーペキアウトだにぃ～♪」

「にやり」「くすくす」

「スコップといえば『殴って殺して』、『穴掘り埋める』。そして、仮面は顔を隠す変装アイテム！証拠なく殺し、素性を隠す。答えは当然……」

イエレアス目掛けて、ジアミエンはそのスコップを振り上げる。

「麗しき『女暗殺者』に決まってるじゃないですかぁ～～～♪」

ぐしゃり、と。

オラクル教主、イエレアスは『失踪』した。

それが、オラクル事件の、裏の真相。

――――

「……むう」

見覚えのない天井を見上げる形で、薄葉はベッドの上で目を覚ました。

「……あれは夢か？」

「あら、目が覚めた？随分と寝てたから心配したわよ」

目を覚ました薄葉の目に映ったのは、黒髪の魔女、アヤメ。

「あれ？アヤメさん？……俺、何処から夢を見ていた？いや、アレは……夢じゃない？無事だったんすか？そういえば明華は！？」

「大丈夫。みんな無事に帰ってこれたわ。今はみんなちょっと外してるけどね」

予想外のアヤメの優しい微笑みに、薄葉は心底戸惑った。あのおっかないお姉さんが笑っている……？

「……あ、ごめんなさい！こ、困ってるわよね？魔具口に突っ込んだりして……あの時のはね、ちょっと演技だったというか……本当に悪いことしたわ！ごめんなさい！」

「え、演技？」

「う、うん……ミュゲを守る為にどうしても……でも今はもうその必要もなくなったから……うう、本当にあの時はごめんなさい……！」

「ちょ、ちょちょちょ事情が全く飲み込めんのですが！？」

薄葉は、あわあわしながら顔を覆うアヤメに心底戸惑った。

え、演技て……アレが演技て逆に怖いわ……

戸惑う薄葉が、何とかアヤメを宥め、事情に耳を傾ける。

本当の天使のこと、今までついてきた嘘のこと、全てを。

薄葉はそれに聞き入り、オラクル研究施設での顛末を聴き終え、ほっと息を吐いた。

「……いや、まぁ俺はアヤメさんの為に何もできなかったですけど……良かったです。いや、むしろミュゲを一緒に連れていってしまって……」

「いえ、むしろ……ありがとう。あの子があそこに来てくれたから、私達は助かった部分もあるの。いつの間にかミュゲ、伝承の天使みたいに強くなっちゃってたみたい」

「いや、まぁ、強いのは知ってますが。ボコボコに殴られましたし。にしても、あいつもかぁ……なんでまぁ、伝承の天使ってのはやたらと集まるもんなんですかねぇ」

薄葉はぼんやりとベッドの上で呟いた。

「……あ、ところで明華は!?」

「明華ちゃんなら、ミュゲと一緒に居ると思うけど……」

薄葉は慌てた。めっちゃ慌てた。

……やべぇ。俺の記憶が正しければ……あのキスシーンを見られとるっ！！

ただならぬ修羅場の予感を感じ取り、薄葉は飛び起きようとした。

「あ、行くならいいけど先に顔を洗ったほうがいいわよ……？」
「え？なんでですか？」
「……あらかじめ代わりに謝っておくわ。ほら、これ」

アヤメが差し出した手鏡を見て、薄葉は唖然とした。

「な、なんじゃこりゃあああ！？」

その顔にはヒゲや眉毛やその他諸々、激しい悪戯書きが施されていた。

……ちなみに犯人は、無邪気なお子様と、怒りに燃えるお子様のお兄様である。

「はい、出来たよー！」

ミュゲはころりとその小さな手のひらに、綺麗な指輪を一つ転がし、それを傍の椅子で座る明華の手に渡す。

「はめてみて！」

「うん……わぁ、すごい……！」

ミュゲは明華が指輪をはめて驚きの表情を浮かべると、くるりと小さなピンを回してにっこり笑った。明華の魔具、その指輪には、新しく金色の装飾が施されていた。綺麗な花の装飾は、勿論ただの飾りではなく、極微細な器術デバイスである。

「これで大気中のアルマを使用可能なアルマに還元して蓄積していくから、それを利用してアルマの節約割合がもっと大きくなるよ！それに自然現象系を使ってる記録が多かったから、自然現象を利用できるようにちょっと特別な素材も組み込んだんだ！これでもっと楽に、もっと大きく自然系の魔法を使える筈だよ！」

「すごい……そんな事までしてくれたの？」
「うん！ミュゲはめいっぱい魔具は強くしてあげたいの！もっといい素材が手に入ったら、アキカの魔具もいっぱい強くしてあげるね！」
「うん、ありがとう。ミュゲちゃんはすごいなぁ」

明華はくるくると椅子の代わりに使っているとらちゃんを回しながら楽しそうに笑うミュゲを見て、優しく微笑んだ。

明華は前々から興味のあった器術を学びたいということで、オラクル事件で知り合ったアヤメに器術の事を教えてもらおうとしたところ、ミュゲが明華の魔具の改造を申し出た。なにやらアヤメよりも腕がいいらしいその幼い少女の技術を、魔具の強化がてらに明華は見せてもらう事にしていた。

色々な話をしながら、説明を受けながら、その子供とは思えない鮮やかな手付きを魅せられ、明華は器術の習得は難しいと判断する。

この器術においても、それを操る為のアルマの操作に、治癒術のようにある種の才能が必要らしい。原理は理解できても、それが明華には実現できなかった。

しかし、望む形で、ズィスィでも一、二を争う器術士アヤメが認める少女の手により、魔具をオーダーメイドで強化してもらえるという贅沢な経験だけでも、明華は十分満足だった。しかも、話していたら思いの外仲良くなってしまったのも明華にとって良かった。
明華は子供好きなのである。

「アキカー！ウスハのお話、聞かせてー！」
「え？兄……お兄ちゃんの？」
「うん！ミュゲ、もっとウスハの事知りたいな！大好きだから、もっと知りたい！」
「そうなんだ。じゃあ、お話しようっか？」
「うん！」

明華は、薄葉にミュゲが懐いている事を知っていた。そして、ミュゲが薄葉のお嫁さんになると本気で言っている事も知っていた。
それでもミュゲに優しく接する明華は、決してミュゲを子供だからと侮っている訳ではない。その気持ちは本物だと思っているし、一人の兄を巡る恋の恋敵だと認めている。

今までの明華なら、確かに例え子供なミュゲでも、ライバル視をして、勝手に警戒していたかもしれない。

しかし、ほんの少しだけ、今の明華の気持ちは変わっていた。

「それじゃあ、何から話そっか？」
「ウスハのすごい事教えて！」
「うん。お兄ちゃんはとっても凄いんだよ」

明華は昔の兄の話を、小さな少女にゆっくりと語った。

彼女の中で、兄の、薄葉の存在が大きくなるきっかけとなった話を。

薄葉の初めての武勇伝を、しんみりと感傷に浸りながら語る明華。
そのお話にミュゲは夢中で聞き入っていた。
ほんの少しだけ、思い出の補正の掛かった格好よすぎる薄葉の話に、きらきらと目を輝かせるミュゲ。その身を乗り出すように話を聞く様を、優しく微笑み見つめながら、明華は淡々と語る。

そして、懐かしい記憶を辿っていくと、次第に胸が苦しくなった。

ミュゲの瞳に以前の自分自身を見る。幼い頃の、兄を心酔していた自分の姿を見る。

話しながらも、明華はオラクル研究施設での薄葉の姿を思い出す。

「アキカ？どうしたの？どこか痛いの？」
「え？」

ミュゲが心配そうに身を乗り出していた。

「痛くないよ。どうして？」
「だって、アキカ泣いてるよ？」
「……あれ？」

明華は頬を伝う雫に今更気付く。

……なんで、私は泣いているのだろう？

その理由を全く理解できないまま、明華はぽかんと頬を伝う涙に指を添えた。

その時、バタンと勢い良くミュゲの部屋の扉が開く。

「こらぁぁぁミュゲぇぇぇ！お前、何使って俺の顔に落書きしたっ！？洗っても全く落ちんぞ！？」

「あ！ウスハだ！やっと起きたー！ウスハー！ウスハー！一緒にあそぼー！」

「いや、俺は怒っているんだぞ！遊びとかそういう……」

「いけー！とらちゃん！」

「か、勘弁してくだせえ！！」

ぐわっ！と立ち上がるとらちゃんを前に、薄葉が勢い良く逃亡する。それを楽しそうに縮小させたとらちゃんを操り追いかけていくミュゲ。その光景を見て……というよりも、部屋に突然顔を覗かせた汚い顔の薄葉を見て、その声を聞いて、明華は何故か惚けていた。

涙を撫でていた頬を触る指は、いつしか熱くなっていた。

「私……どうしちゃったんだろう……」

明華は一人残されたミュゲの部屋の中で、小さく、ぽつりと呟いた。

明華の中で、何かがほんの少しだけ、明華にとってはとても大きく変化していた。

それに彼女が気付くのは、もう少しだけ先のお話……

ＥＰ３３：　天使の羽休め（後書き）

事態の終息。そして変わり始めた薄葉。自らの力に目覚めた彼を取り巻く世界は大きく変わる。
次回、ズィスィ、旅立ちの時。その先に待ち受けるものとは？
最後の時に、予想外の事態が薄葉達を待つ？

今回は少し短めで申し訳ありません。ちょっとした羽休めでございます（私的にも……ｗ）。次回はそこそこ長くなるかと思いますので、その前の休憩回のようなものです。
明華にちょっと、いやかなりの変化？それが今回のメインでございます。
決して最初の方の怪しい話はメインではございませんｗ

次回、ズィスィに伝わる天使の伝承が明らかになり、遂にズィスィ編完結です！そして……？

ＥＰ３４：　嘘つき達の進む道（前書き）

ズィスィ編最終話！

ＥＰ３４：　嘘つき達の進む道

伝説の塔デア・ピルゴス。その頂上から通じる隠し部屋に、救世と済は居た。二人を此処に導いたハランが壁に寄りかかりながら、其処に収められた本に目を通す救世を眺める。

「どうだ？欲しいものはあったか？」

「ええ。地下室に落とされた時から、多少のアテはありましたので。ズィスィにおける天使伝承の発信源は此処で間違いないでしょう」

救世はぱたりと本を閉じ、少し難しい表情で何かを考えた後、他の本にも手を伸ばす。少し離れた所で同じように本を眺めながら、済が声をかける。

「しかし、明華は一緒じゃなくてよかったのか？」

「ええ。多分色々あって疲れているでしょうし、私が代わりに色々情報を仕入れておきますよ。済ちゃんも無理して付き合ってくれなくてもいいんですよ？」

「そうだぞ。俺に負けてボロボロにされたのだから、ゆっくり休んで……」

「ああ、そういえば明華さんと済ちゃんがお世話になりましたね」

「はは、そうだ。俺の圧倒的な強さの前にあ痛たたたたた！！やめろ！腕をひねりあげるな！ごめんなさい！冗談だから！やめろ！がああああ！」

いつの間にかハランの腕を掴んで思い切りひねり上げている救世。

笑顔で涙目になり始めたハランの腕をぱっと離すと、すたすたと本棚の前に戻る。

「くっ……！俺の右腕を治した恩があるから黙っていればいい気になりおって……！」

「じゃあもう一回折っときましょうか？」

「いやマジで御免なさい」

「救世……もしかして、お前、こいつの事、滅茶苦茶嫌ってないか？」

「はい」

「！？」

軽く肯定した救世は、再び本を手に取り考察を始める。新しい天使伝承の断片は手に入れた。そして、その上で、一つの疑問と地下で見たものに疑問と不安を覚える。

断片的に記された伝承を救世は繋ぎ合わせる。

天使はある時舞い降りる。

天使は兄妹。

天使の召喚には多大な大地のアルマを要し、二人の天使を降ろせる土地を、我々は国と定めた。

天使は互いに手を取り合い、巨悪に立ち向かう運命にある。

他の情報は所々が隠すように潰されており解読はできない。

しかし、『天使は兄妹』という記述。そして、救世がノトスに居る内に知った伝説。さらにはデア・ピルゴス地下で見た石碑。それらの情報から救世が抱く不安。

大昔、最初に舞い降りた天使の伝説。世界を恐怖のどん底に叩き落とした化け物を討った勇者アゲロスの伝承。世界で広く知られる、天使伝承の最も有名な御伽噺。

救世が地下で見たのは、その御伽噺を示す石碑。其処に描かれるのは化け物に立ち向かう二人の天使。

救世は疑問を抱く。

何故、アゲロスの伝説は語り継がれているにも関わらず、その妹の記述は残っていないのか？

まるで、広く知られる天使の童話が、その妹の存在を覆い隠しているかのような……そんな不安。

その妹に何かがあったのか？それにアゲロス以外の天使は居なかったのか？

「救世？どうした？」
「……いえ、何でもないです」
救世は笑顔を作り、済にその不安を悟らせまいと努める。そして、それを明華にも、薄葉にも話すつもりはなかった。
もしも、その妹の存在が、または他の天使の存在が、『意図的に』隠されていたとするならば……？
天使伝承の翳りは封印される。一人の天使の優しさから、そしてその不安から。
天使伝承その真実、其処に至るまでのピースはあと少し。

一一一一

書物を納めた隠し部屋に二人の天使を残し、ハランは塔の最上階の自らが長年使っていた部屋に戻る。其処には昔からの顔なじみが待っていた。ハランは少しだけ驚き、その客人に笑みを送る。
「……久しいな。フラル」

「ああ。元気そうで何よりだ。ハラン」
「いいのか？一国の王ともあろうものが……評判の悪い堕天使様の住まう塔に訪れていて？」
「お前とアイリス……いや、アヤメを囮にオラクルを釣ろうなどと考えている時点で、ロクな王じゃないから大丈夫さ」
「……それ、開き直るところか？」
「まぁ、お前もアヤメもミュゲも、全員無事で何よりだ。それでいいじゃないか」
「……だな」

現ズィスィ国王、フラル。十年もの間、顔こそあまり合わせないものの、多くの協力をハランに与えてきたその男は、久しく友人であるハランと顔を合わせていた。
初めて会った時から、ハランの事情を知るやいなや、迷いなく協力してくれた彼に、ハランは勿論感謝している。

「……感謝している」
「何を言ってる？俺は何も出来ていないさ。お前がアヤメとミュゲを救ったんだろう？オラクルの制圧もセルセラコミュニティに全て片付けられてしまって……コミュニティには感謝してもしきれないな」
「其処は悔しがらないのか？」
「悔しい？……はは、国の危機を、被害も少なく乗り切れた事の何処に悔しい部分がある？例え、役立たずの王と罵られようと、国がいい方向に傾けば俺は構わないさ」
「なんだ。また叩かれてるのか」
「……またって言うな」
「愚痴ならこの堕天使が幾らでも聞いてやろう。王が愚痴を言える相手はそうはいまい？」
「お前……何か変わったか？」

フラルは十年前とは、その後わずかに見たことのある男とは、まるで違って見えるハランを見て目を丸くした。そして、吹き出すように笑い出す。

「くく……！あはは！参ったな……まぁ、お前に愚痴を言う程に、俺のプライドも腐っちゃいないさ」

「其処は有り難く腐れ」

「断る。……何故なら、残念ながら俺はお前があまり好きじゃない。むしろ嫌いだ」

「！？」

「くく、なんて顔してる？冗談だよ。ま、世間話に興じる位なら付き合ってやってもいいぞ」

「……なんでそっちが上から目線なんだ」

「王様だからだ」

「そんなところで権力を振りかざすなよ……」

苦笑するハランとフラルは、暫く互いの歩んできた道を、改めて語り合う。フラルは対等に話せる友との話を楽しみながらも、たった一つだけ嘘をついていた。そして、それを嘘だと明かすつもりもなければ、表に出すこともなく、それはその内真実になるだろうと考える。

フラルはハランがあまり好きではない。それは嘘ではない。……とても勝手な、男の嫉妬である。

互いに歩んできた平坦ではない道を語り合い、堕天使と王という交わりようのない二人の人間は共に時間を過ごす。

そして、時間が過ぎ去り、フラルはふとハランの出てきた隠し部屋の入口となる魔法陣に視線を送る。

「……ところでお前、珍しいな。天使の伝承を見たくもないと言っていたお前があの部屋に入っていたとは」

「……客人、他の伝承の天使が伝承について調べに来ただけだ。俺は全く関係ない」

「本当にか？」

フラルの何かを察したような視線に、ハランは苦笑する。

「……はぁ。お前には嘘をつけそうにない」

「天使の伝承、それに従って……行くつもりか？」

ハランは答えない。

「……どういうつもりだ？」

フラルの問い掛けに、ハランは複雑な表情を浮かべ、視線を送る。

一一一一

薄葉はようやく動きを制圧したとらちゃんからミュゲを引きずり降ろし、その大暴れを静止させていた。すっかり化け物の仲間入りだな、と薄葉は微妙な表情を浮かべた。あ、前からだったのかな？と薄葉はむむむと唸る。

「どうしたのウスハ？」

ようやく落ち着いて、薄葉が寝ている間に施された顔の落書きを、何だかよく分からない筆のようなもので撫でるミュゲが尋ねる。何やら特殊な魔法で悪戯書きしたようで、魔法じゃないと落ちないとの事で、今まさに落としてもらっている途中である。

「いや、何でもない」

薄葉は少しだけ心配そうに見つめてくるミュゲに、笑って答える。それでも心配そうな表情を作ったまま薄葉の顔をごしごしと擦るミュゲ。そして不満そうに口を開いた。

「困った事があったら相談してもいいんだよ？ミュゲはウスハの奥さんになるんだから」

「ええ？いや、まぁ……うん。でも、ほら、別になんともないからさ」

他人の前なら否定できるが、いざ一対一になると、ミュゲに泣かれるんじゃないか、と強く否定できない薄葉。まぁ、子供の言うことだし、と割り切ってしまいたい所だが、キスされた事を思い出すと非常に微妙な心境である。

何だか後ろめたい気持ちを感じながらも、何と言っていいやら分からない薄葉。罪悪感に苦笑いが漏れる。

「……アキカと仲直りしなきゃダメだよ」
「え？」
そんな時、突如としてミュゲから投げ掛けられた言葉に薄葉はきょとんとしてしまった。
「アキカ泣いてたよ」
「泣いてた？」
いまいち状況が理解できない薄葉。明華が泣く理由が思い当たらない。……と、そこまで考えて、いや、と首を振る。
「あ、動かないでよう！」
「あ、悪い」
顔をがっしり持たれて、ゴシゴシと擦られる。
……もしかして、何か悪いこと言ったか？
薄葉は思い返す。あの時は色々と慣れない言葉を交わしたから、いまいち滑ってないか自信がない。もしかして、どこかで傷つけるような事言ったのか？考えれば考える程に不安になってくる。暫くずっと酷い態度取ってたもんなぁ、と心当たりが有りすぎて怖い。
「アキカ、すごく楽しそうに昔のウスハのお話してくれたよ。そしたら泣いちゃったの」
確実に何かやっちゃってる俺……！いや、昔話で？……やっぱり辛く当たってきたのが今になってぶり返してきたのか？昔のまだ妬

んでなかった頃を思い出して？……そういえばいつからだったっけか？あいつが俺にべったりとしだしたのって？

そう。思い出せない。

あいつには昔から何をやっても勝てなかった。昔はあいつも俺の事を兄様なんて呼ばなかった。いつからだ？あいつが俺を兄様と呼び出したのは？

まるで気付かぬ内に動いていたあの時のように、ぽっかりと空いた穴。それにほんの少しだけ、薄葉は焦りと戸惑いを感じた。

もしかして、あいつの求めていた『俺』は、その俺の知らない内に戦っていた俺だったんじゃないのか？俺がもしも、自分の持つものに気付いて、その『俺』が必要なくなった時、今の俺が出しゃばっている時に……あいつはどう思うのだろうか？

「……昔の俺、ねぇ」

少しだけ、気が重くなった。そんな俺の顔から筆を離し、ミュゲは頭を撫でてくる。

「だいじょーぶ」

薄葉は落としかけていた視線を上げる。其処には優しく微笑む少女の姿があった。

「アキカはウスハの事、絶対に大好きだよ。だから絶対に仲直りできるよ！ミュゲもお手伝いしてあげる！」

大好きなのは、本当に今の俺なんだろうか。

「……ウスハはそのままにしてていいんだよ？」

ふと、その小さな言葉は薄葉の耳に強く残った。

何かを見透かしたように、じっと視線を合わせてくるミュゲは、まるでそんなネガティブな感情を抱く薄葉を励ますように、もう一度、額にキスをした。

「『あの時』のウスハも、『昔』のウスハも、『今』のウスハも、全部ミュゲは大好きだよ。だからアキカもきっとそうだよ」

……何、考えてるんだろうなぁ俺。

薄葉はこんな小さな少女に励まされている自分が酷く滑稽に思えて、少し前の誓いを忘れかけていた自分を恥じる。

「ありがとな、ミュゲ」

「当然だよ！未来のお嫁さんだもの！ウスハは強くて格好いいけど、所々で情けないんだもん！ミュゲがいっぱい助けてあげなきゃ！」

「い、意外と辛辣な評価だな……」

だが、的を射ている。と、薄葉は苦笑した。

「あれ？薄葉さん。もう起きていて大丈夫なんですか？」

横の方から響いた声。村の道を歩いてきたのは、大根片手に笑顔

の救世と、色々と荷物を背負った済。

「お怪我の具合は？」

「ああ、大丈夫です。救世さんが治療してくれたんですよね？完璧ですよ。あとその大根はなんですか？」

「それは良かったです。これはベゲモートさんのお土産ですよ。ずっと置いてきぼりでしたので」

軽く会話を交わした救世に、ミュゲは突然ぴょんと立ち上がると駆け寄っていく。

「イツキー！グゼー！頼まれてた魔具、出来たよー！」

「早いな！まさか本当にこんなにすぐ出来るとは……」

「ミュゲさんはすごいですね～」

「じゃあグゼー！治癒術の事教えてー！イツキは付術ね！」

「おお、いつの間に仲良く……ってか、二人とミュゲの関係は？」

「あれ？聞いてません？堕天使さん繋がりですよ」

「ああ……ミュゲの兄貴か」

アヤメから大体聞いた男を思い浮かべる。ちなみに、薄葉の中での堕天使は、三割増し位で格好いい男となっている。これから薄葉が堕天使と出会い、かなりがっかりするのはもう少し後のお話。

「ミュゲの部屋来てー！」

「はいはい。あ、あんまり引っ張らないでください。私、結構どんくさ……きゃあ！」

「あざとい……」

ミュゲに引っ張られてすっ転ぶ救世を見下ろして、ぼそりと済が呟いた。そして、薄葉のほうをちらりと見ると、思い出したように

手を差し出す。

「あ、コミュニティのカード、貸してくれないか？」

「え？いいけどどうして？」

「ほら。フェガロフォスでの依頼分と、あと実はあのオラクルの一件で結構な量のポイントが出るそうだ。私が後で代わりにポイント貰っておくから。一応、一番の怪我人だったんだからちゃんと休んでいろ」

「ああ、ありがとう」

「悪かったな、暫く眠っているのを放っておいて。できれば看病してやりたかったが、私はそういうの苦手なんだ。出来ることもないし、それより足を使って助けになることをしようと思ってな」

「済ちゃんはずっと座ってられないんですよ～！」

「救世、黙れ！」

「イツキも早くー！」

「あ、悪いなウスハ。ゆっくり休め」

何だかんだで気遣ってくれている才羽兄妹に感謝しつつ、薄葉はミュゲから解放されて一旦、元の休んでいた部屋に戻る事にした。

薄葉の中で、ほんの少しだけネガティブな気持ちは消えかかっていた。

それから、暫くの間、一行はズィスィに滞在する事になる。

ズィスィの名物を見て回ったり、ミュゲの遊び相手（過酷）を請

け負ったり、珍しい道具などを集めたり、久しくのんびりとした時間を過ごし……何処かぼんやりとしていた明華の様子も前のように戻っていった。

そして、その日が訪れる。

一一一一

暫くのズィスィ滞在、明らかに今回の一騒動での休養期間だったのだが、明華がぼんやりとしている中、その動きを取り仕切ったのは救世だった。

「ズィスィでの特別治癒術士としての活動がまだ残っていましたので……皆さんにはお付き合いをさせて申し訳ありません」

一応、本当に一人で、時に済を引き連れて、コミュニティからの依頼は執り行っていたらしいが、それは気遣いさせない為の方便だったのだろう。それは薄葉にも理解できた。

「ようやくズィスィでの活動も終わりましたので……勿論、向かう

んですよね？薄葉さん」
「……はい」

薄葉達はズィスィを出発する。

四大国、最後の一つ、ヴォラス。恐らくは不幸に溺れた化け物天使、レイラが待ち受けているであろうその国に向けて。

レイラの語ったイベント、そして最後の天使の伝承の断片を求めて、朝早くに一行はカーゼブ村のカサロラインへと通じる道へと出る。そこで救世が待機させていた、移動を支えるテラス、ベゲモートに乗り、一路、ズィスィを抜けて、次なる目的地ヴォラスを目指す。

朝早くの出発を決めた大きな理由は、一行全員がすっかり仲良くなってしまった、幼い伝承の天使、ミュゲにあった。

常々、ずっと一緒に居たいと言っていたミュゲの事、分かれる事になったとしたら、少し大変になるだろう。

幼い彼女をこの旅に巻き込む訳にもいかない。それに既に、ミュゲには家族がいる。無理矢理に連れていく理由もないので、黙って去る事が一番だと一行は考えた。

「もう、行くのね」

一人、見送りに出てくれたのはアヤメ。

「気を付けてよ。あのレイラって天使、相当に危なそうだったから

……」

「ありがとうございます。わざわざ見送りまで……」

「いいの。それより本当にごめんなさいね？別に私、あなたの事嫌いって訳じゃないのよ？」

「あはは……それはもう大丈夫です」

ベゲモートの上で、苦笑いする薄葉に、アヤメは滞在期間中も何度も繰り返してきた謝罪を投げかけた。

どうやらこの人は本当にあの高圧的な態度を演技でこなしていたらしく、日に日に大人しい印象の女性に姿を変えていった。重荷が降りたように、アヤメは素で振舞うようになったという。

「……じゃあね。また、来てくれたら嬉しいわ」

「はい。暫くの間、お世話になりました」

最も多くの関わりをもった薄葉について、明華、救世、済も挨拶をする。アヤメは照れ臭そうに手を振り、今まさに去ろうとする薄葉に、ぽつり、と呟いた。

「……私、正直、ミュゲを見てたら、ウスハ君にならミュゲを任せてもいいかな……なんて思ってたり」

「え？どうしました？」

「……いえ、何でもないわ。これを言ったらハランに怒られちゃうから。……宜しくね？」

宜しく？少しだけ気になる言葉を残したアヤメに僅かに意識を向けつつも、徐々に離れていくその姿。その言葉を理解することなく、薄葉達は前を向いた。

「……あの子達と一緒なら、きっと、大丈夫……よね？」

アヤメは寂しげに、一人、首を傾け微笑んだ。

薄葉達は、アヤメの残した言葉の意味を、カーゼブを離れてから理解する。

カサロラインを歩むベゲモートの背に揺られ、進む一同の上空から、一部にとっては聞き覚えのある声が響く。

「ハァーーーーーッハッハッハッハァッ！！！」

嫌な予感。続いて響く、可愛らしい少女の声。

「はーーーーっはっはっはっはっはあ！」

高らかな二つの声は、次第に大きくなってくる。

ひゅるるるるるる……ズドンッ！！

親方！空から女の子が！ついでに変なロボットと変なおじさんが！

「な……な……！？」

「フン……貴様ら、俺の、この堕天使の力がそんなに借りたいか？」

空から降ってきたのは、自立起動型魔具、とらちゃん。そしてその上に立つ、二人の天使、紗羅葉兄妹、ハランとミュゲ。

「ミュゲ！？」

「ウスハ！ミュゲはとっても早起きだから、置いてこうったってそうはいかないんだぞう！」

「置いてく？……お前、まさか付いてくるつもりか！？」

「言ったでしょ？ミュゲはウスハをいっぱい助けてあげるよ、って！だから、ウスハをいっぱい助けにきたの！」

「お、お前そんな事言ったって……危ないぞ！？それに、アヤメさんは！？」

「アヤメとは話は付けてある。それに俺の妹の力を知らない訳じゃないだろう？お前らとは比べ物にならない程のその力を！」

ハランが高らかに宣言する。

「話を付けてきたって……それはどういう事だ？」

済が尋ねる。それにハランは真面目な表情で答えた。

「俺とミュゲも元の世界に戻る方法を探す旅に協力しようと言っているのだ。有り難く思うがいい！ハァーーーッハッハッハッハァッ！」

「はぁーーーっはっはっはぁ！」

「ミュゲさんが真似したら教育上宜しくないのでその下品な笑い方やめてください」

「！？」

救世の辛辣な言葉に怯みつつも、ハランは決意に満ちた目で立つ。

ーーーー

「アヤメ」

「ハラン……どうしたの、こっちに顔なんかだして……って、その顔どうしたの！？」

「はは……フラルと少し喧嘩をした。全く……熱くなりやがって」

それは天使達がズィスィを離れる数日前の事。暫くろくにアヤメの元に顔を出していなかったハランが、カーゼブのアヤメ宅を訪れた。その頬を赤く腫らしながら。

「喧嘩って……」

「いや、ずっとちょくちょく話をしてきたんだが……昨日は酒が入っていてな。互いに熱くなって思わず……殴られてやった」

「……喧嘩に負けたのね？」

「ぬう……」

呆れて溜め息をつくアヤメ。それに気まずそうに目を逸らすハラン。

「待ってて。救急箱持って……」

「いい」

ハランはそれを遮った。アヤメの目を真っ直ぐに見つめるハランに、アヤメは少しだけ頬を赤くした。

一方のハランは極めて真面目な表情で、そして何処か気まずさを含んだ微妙な表情を浮かべる。

アヤメは最初少しだけ目を逸らしたが、すぐにその目を見て、真面目な、何処か寂しげな表情を返す。

「実は……話がある」

「……天使の、あの子達と一緒に行くのね？」

「な……！？どうしてそれを……！」

「フラル様から聞いてるわ」

「ちっ……あいつ……！勝手に話して……！」

ハランがくっと悔しそうな表情を浮かべる。しかし、すぐにアヤメの目を見て、再び気まずそうな表情を作った。

「実はだ、アヤメ……」

「知ってる。ミュゲの事でしょう？」

「な！？それはフラルにも……！」

「あなたの事を覚えていたのは驚いたけど……あの子は両親の事までは覚えていないみたいね。このまま親の顔を知らないまま、この世界で生きていくのも少し可哀想だと思ったんでしょう？」

「……」

「親の愛情も知らないなんて、とても辛い事よね。……わかるわ。私も親の顔を知らないもの。あなた達に出会う前から、家族は血の繋がってないお婆ちゃん一人だった」

ハランは自ら話す覚悟を決めていたが、アヤメはその覚悟を無視して全て先に話してしまう。寂しげに、悲しげに。

「……俺は、お前を愛してる。でも、俺は……」

「嘘でも嬉しいわ、ハラン」

「嘘などでは……！」

「分かってる。あなたはそんな残酷な嘘をつく人じゃないって事くらい」

苦笑するアヤメを見て、ハランは胸が傷んだ。アヤメは、アイリスは昔もこんな笑顔を見せた。自分の気持ちを押し殺すような、寂しげな笑顔を。

「……行くといいわ。ミュゲと一緒に」

「アヤメ……お前も……」

「それは無理よ。私は天使じゃない。足を引っ張るだけだわ。それに、私も暇じゃないから。一応、お婆ちゃんの魔女の名を引き継いでいるの。私の元には魔具作成の依頼が絶えないのよ。だから此処を離れられる筈がないじゃない」

アヤメは魔女だった。彼女の育ての親、魔女は、一流の器術士だった。故に一部からは恐れられているものの、一部ではその上質な魔具作成技術を認められ、依頼が引切り無しに寄せられる。先代を超える腕を持つと言われるアヤメの元には、ズィスィの上流貴族などからもなおさら依頼が寄せられる。

此処から離れられる筈もなかった。

「二人で、あの子達に同行させて貰えばいいじゃない。優しい子達だから、きっと迎え入れてくれるわ。ミュゲも懐いてるみたいだし、何も問題ないでしょう？」

「……だが、アヤメ！お前は…！」

ハランは言いかけて口を結ぶ。そして、アヤメの目を見つめて、真剣に伝える。

「……フラルに言われた。『アヤメの想いを踏み躙る気か』と。分かってる。お前をさんざん利用して、俺はお前から家族も奪い、目の前から消えようとしている。最低の男だということくらい分かっている」

「……」

「……だから、俺は……考えた。あいつの……ミュゲの幸せを考えて、そしてお前を一人にしない方法。……ミュゲは行かせる。だが、俺は……」

パンッ！

アヤメの平手がハランの頬を打った。ハランの両方の頬が赤く染まる。

「馬鹿にしないで。私はどうとも思ってない。あなた、ミュゲを一人にする気？」

「……一人じゃない。弱い俺など、ミュゲの傍に居なくとも……あいつらなら上手くやってくれる」

「甘ったれんな！」

「アヤメ……！？」

アヤメの口調が強くなり、ハランは驚き目を見開いた。

「私が惚れたのはねぇ、弱々しく丸まりながらも、ミュゲを必死に守ろうとしてた、兄として必死だったあなたなのよ！そんな、軟弱なあなたになんて、傍に居て欲しくないわ！」

「アヤ……メ……」

「意地でもミュゲを守り抜くって、そう言って此処から離れなさいよ！私は全然寂しくなんてない！……ミュゲに可哀想な想いをさせる方が、あなたに信念を曲げさせる方が、ずっとずっと辛いわよ！勝手に行くといいわ！うんざりなのよ！」

アヤメが顔を赤くしながら叫ぶ。そして、懐から取り出した銃型魔具を、ハランに突きつける。

「行くと言って……！ミュゲと話したいなら後でどうとでも打ち合

わせするといい。でも今は目の前から消えて！これ以上、私を失望させないでよ……！」

アヤメの言葉に、ハランは目を閉じ、頷いた。

「……俺は、ミュゲを元の世界に帰す為、共に戻る為、旅に出る。あいつらと共に、天使の伝承を追う」

アヤメの魔具を握る指から力が抜ける。アヤメはくすりと微笑み目を閉じた。

「それでいいのよ。あなたはミュゲの事だけを考えて。私が愛したあなたは、そんなあなたなんだから。行って……」

言葉を続けようとしたアヤメの体に力が加わった。ぐっと引き寄せられる体。ぎゅっと締め付けられる体に、アヤメは硬直した。

「……ハ……ラン？」

「だが、帰る方法を見つけても、必ず此処に帰ってくる。ミュゲと一緒に、お前に会いに……」

ハランは強く、強くアヤメを抱き締めた。

「だから、別れの挨拶はしないぞ……絶対に……」

「俺はお前を愛している。アイリス」

アヤメは、アイリスは、もう嘘をつききれなかった。強がりの技術を、十年間磨いてきた筈なのに、それは脆くも崩れさった。

「……絶対に……戻ってきて……！私も、あなたを愛しているわ。葉蘭……」

ぽろりと、涙を零して、ぎゅっと葉蘭の肩に顔を被せるアイリスは、葉蘭を一度だけぎゅっと抱き締め、すっと腕を離した。そして、その左手を葉蘭の顔に添え、その唇を葉蘭の唇に重ね合わせる。

葉蘭は驚き目を見開いた。長く感じるその数秒の交わり、それを終えるアイリスはするりと葉蘭から唇と手を離した。そして、赤く染めた頬と、涙で潤んだ瞳をもって、くすりとハランに笑顔を贈る。

「私はアヤメ、よ。ミュゲのお姉ちゃんで、あなたの恋人。……ミュゲと一緒で、私だってキスの一つくらい出来るのよ？」

アヤメの笑顔に胸を締め付けられながら、ハランは本気で目の前の女性を愛おしく思った。しかし、それを噛み殺すように、ハランは目を閉じ背を向ける。

「また会おう」

「ええ、また。それとハラン。これ、受け取って」

ぽいっと右手に握る銃型の魔具をハランに放り投げるアヤメ。ハ

ランは頭を飛び越して、目の前に落ちてきたそれをぱしりと受け取った。

「器術デバイス搭載銃型魔具、『アイリス』。お婆ちゃんが私に遺した、私が最初に調整した魔具よ。魔法の使えないあなたでも、魔法を使えるようになる魔具」

「……そんな形見を」

「私の昔の名前を持つ魔具よ。私だと思って連れてって」

「……有り難く受け取ろう」

ハランは歩みゆく。思いを噛み殺して。

そんな背中を見つめながら、アヤメはぽつりと呟いた。

「戻ってきてくれるのね……例え、嘘でも嬉しいわ」

嘘で塗り固められた別れを、アヤメは嘘で彩った。

ハランも悟られていると気づいていた。アヤメの嘘に気づいていた。しかし、気づかない振りをする。

互いの想いを守るために。

「ミュゲさんはともかく……堕天使バランさんは役に立つのでしょうか？」
「！？」
「救世……お前、ちょっと風当たり強すぎるぞ」

流石の済も同情する。

「冗談ですよ。……明華さん、薄葉さん。彼らの同行、許してくれますか？」
「……私は大丈夫です」
「……ハァ、言っても無駄だろう、どうせ」

救世はにっこり微笑んで、二人の天使に手を伸ばす。

「歓迎しますよ。ミュゲさん、堕天使バランさん」
「バランじゃなくてハランだッ！！」
「やったあ！これでウスハといっしょー！」
「……貴様、ウスハァ……！」
「な、なんだよ……！？」

するりとボールサイズにとらちゃんが縮小し、ミュゲの手元に収まる。そして、ベゲモートが新たな二人の天使を背中に載せる。

「では、一路ヴォラスへ！」

救世の号令と共に、ベゲモートは再び歩き始める。

去りゆく天使をじっと見つめる二つの影。

「結局、行くのか……ちっ」

「フラル様。何をそんなに怒ってるんです？」

部下、メントルの問い掛けに、ズィスィ王、フラルは溜め息混じりに顔を伏せる。

彼もまた、嘘をついていた。

「……お前がこのまま居なくなると、アヤメの中で、お前の存在が綺麗なままに残ってしまうだろうが……」

アヤメを悲しませるな、という嘘。それはアヤメを想っての言葉には違いなかったが、それは本当は利己的な想いであって、フラルはそんな自分が嫌になる。どうしても、ハランという友人に勝てなかった事も含めて。

「……メントル。飲むぞ」
「ええ？失恋のやけ酒ですか？」
「……やめろ、その言い方」
「はいはい、お付き合いしますよ。こっちも面倒くさい上司から解放された記念です。あ、アヤメさんも誘います？」
「やめろって！……いや、まぁ、誘うが」
「はは。ハランさんもフラル様も似たようなもんですねぇ」

ズィスィの嘘つき達は、それぞれ新たな道を征く……

ＥＰ３４：　嘘つき達の進む道（後書き）

新たな二人の天使を加え、一行は四大国最後の国へと踏み入る！そこで待ち受けるものとは……？

三章ズィスィ編、遂に完結！新たにミュゲとハランの二人を加えて、物語は佳境に突入！一行を待ち受けるものとは？
四章、ヴォラス編に続きます！

よろしければ感想、評価、ご意見、ご指摘などいただけますと励みになります！

ＥＰ３５：　ヴォラスカーニバル！（前書き）

新章突入！今章は少し賑やか系？
導入部なのでいつもよりは短めです

EP35：ヴォラスカーニバル！

踊り騒ぐが信条の、娯楽溢れる国、ヴォラス。

陽気な国の中心、首都ヤドハクには黒い髪の王が住まう。

その黒い髪の王の為に、ヤドハクにて行われる最大の祭典。

それが『ヴォラスカーニバル』。

毎年行われるその祭典、しかし今年はその裏で動く怪しい影が。

――――

無数のイラストの並ぶ前で、一人の男がにやりと笑う。背後に一人の女を従えて。

「ククク……！確かに。いい情報じゃ……！それで、そいつらは、本当に役に立つのじゃな？」

「勿論ですとも♪ついこの間のズィスィでのオラクル事件、ノトスでのテラス侵攻の騒ぎ、アナトリでのテラス討伐の一件、その全てに大きく貢献していますので。実力は折り紙つきですよ♪」

「ほほう……素晴らしい……！これで今年のヴォラスカーニバルの優勝は、余のモノに決まりじゃな！」
「喜んで頂けたようで何より……♪して、誰にご依頼を出しますか？」
その前で対話するのは一人の女。
「無論、女子（おなご）を全て！オスになど更々興味はないわ！」
「かしこまりました～♪」
「くくく……しかも中々に容姿も素晴らしい……場合によっては余の妻に迎え入れても良いほどじゃ！」
男はぐふふと笑い、イラストを手に取る。手書きながらも中々に上手く描かれたそのイラストを、男はじっとりした目で見つめた。
「見ておれアミーラ……！……ヨシエ！出るぞ！準備を！」
「アミール坊っちゃん。何処へ行くおつもりで？」
「人前で坊っちゃんはやめろ！くくく……！早速、この天使達に会いに行くのじゃ！」
「あ、ごめんなさ～い！まだヴォラス入りしてないんですよ～♪直に到着すると思いますのでぇ、その時にまたご連絡致しますね♪」
「何！？おのれ、まだなのか！くくく、まあいいだろう！楽しみはとっておくものじゃ！下がって良いぞ、ヨシエ！」
「はい坊っちゃま」
「坊っちゃまはもっとやめい！」
くすくすと微笑み、男アミールの背後に立つ、エプロン姿の落ち着いた女は頭を下げる。後ろでゴムで纏めた黒いおさげ髪を靡かせて、ひらりと流麗な動作で下がっていく。
その姿を見送ると、アミールはくくくと笑うと目の前の奇怪な女

に不敵な笑みを送る。

「それでは抜かりなく頼むぞ、ジアミエン」

アミールの言葉に、白面の女は「にやり」と笑った。

「ええ、勿論ですわ♪」

―――

無数のイラストの並ぶ前で、一人の女がにやりと笑う。背後に一人の男を従えて。

「うふふ……！確かに。いい情報ですわ……！それで、この方達は、本当に役に立つのですね？」

「勿論ですとも♪ついこの間のズィスィでのオラクル事件、ノトスでのテラス侵攻の騒ぎ、アナトリでのテラス討伐の一件、その全てに大きく貢献していますので。実力は折り紙つきですよ♪」

「ふむむ……素晴らしいですわ……！これで今年のヴォラスカーニバルの優勝は、ワタクシのモノに決まりですわ！」

「喜んで頂けたようで何より……♪して、誰にご依頼を出しますか？」

その前で対話するのは一人の女。

「無論、殿方を全て！メスになど更々興味はないですわ！」

「かしこまりました～♪」

「うふふ……しかも結構格好いいじゃないですの……場合によってはワタクシの夫として迎え入れても良いほどですわね！」

女はぐふふと笑い、イラストを手に取る。手書きながらも中々に上手く描かれたそのイラストを、女はじっとりした目で見つめた。

「見ていなさいアミール……！……ダディ！出ますわよ！準備を！」

「アミーラのお嬢。何処へ行くつもりだ？」

「うふふ……！早速、この天使達に会いに行くのですわ！」

「あ、ごめんなさ～い！まだヴォラス入りしてないんですよ～♪直に到着すると思いますのでぇ、その時にまたご連絡致しますね♪」

「何ですって！？まだなのですか……うふふ、まあいいですわ！楽しみはとっておくものですもの！下がってくださいまし、ダディ！」

「失礼……」

渋い声で背を向ける、アミーラの後ろで黒いオールバックにスーツ姿の大男が、のしりのしりと歩いていく。

その姿を見送ると、アミーラはくくくと笑うと目の前の奇怪な女に不敵な笑みを送る。

「それでは抜かりなく頼みますわ、ジアミエンさん！」

アミーラの言葉に、白面の女は「にやり」と笑った。

「ええ、勿論ですわ♪」

―――

六人の天使達は、最大の危機を迎えていた。

ヴォラス入国を前にして、とある問題に直面していたのである。

それは国境直前でふと気付いた大問題。

「そろそろ国境ですよ～。これから身分証明するのでカード準備しといて下さいねー……あ」

ベゲモートの上で手綱（？）を握る救世がはっとした。

「どうしたんですか救世さん？何か問題でも……あ」

救世の様子を気に掛けた明華も気付く。二人の視線が、くるりと二人の兄妹に向く。

「……身分証明できるもの、持ってます？」

突然の質問を受けた新しい仲間、紗羅葉兄妹、ハランとミュゲ。
まずはミュゲが元気よく答えた。

「持ってるよ！コミュニティの人がお誘いに来たってお姉ちゃんが言ってたー！それでね、お出かけするなら持ってきなさいって！」

にこやかに腕に抱くバッグに手を突っ込んで、一枚のコミュニティのメンバーカードを取り出すミュゲ。きちんとポイントも入っており、有効になっている。

「へぇ、ミュゲも持ってんのかー。ってか、あの人抜かり無いな……マジでミュゲも引き込んだのか」

薄葉が感心したような、何とも言えない複雑な表情を浮かべる。
思い浮かべるのは勿論白い仮面のコミュニティ窓口の奇人である。

「ウスハとおそろい！」
「おお、お揃いだな」
「おい、貴様ぁ！ミュゲに手を出したら容赦せんぞ……！なぁにがお揃いだァ！？俺は絶対に結婚なんぞ許さん！このロリコンがぁ！」

お兄ちゃんは激怒した。ちなみにハランはずっとこの調子である。

「俺はロリコンじゃねぇっての！あんた、ずっとしつこいぞ！？なんで初対面から敵意むき出しにされにゃあかんのだ！？」
「あぁん！？自分の胸に聞いてみろ！」
「はいはい。喧嘩はダメですよー。それよりバランさん、身分証明

になるものは？」
「バランじゃない。ハランだッ！」
「いいからほら」

ちなみに救世もずっとこの調子である。中々に険悪な男性陣に、時折ぽかんとしていて別段仲裁に入らない明華、楽しそうに見ているミュゲはともかく、済は常にハラハラしていた。しかし、常にフォローは下手なままである。

ぬぅ、と唸るハランだったが、しばらく黙りこくった後に、次第に顔色を悪くする。

まさかの事態である。ハランは身分を証明できるものを持っていなかった。

何だかんだで勢いで生きる男、ハランのノープランっぷりが此処に来て墓穴を掘った。

「どうやらハランさんとは此処でお別れのようですね……」
「バランだ！いや、ハランであってた！……じゃなくて、ちょっと待てッ！」

ハラン大慌てである。あんな風に愛する女の元を去ったのに、「国境で止められちゃった、てへ♪」なんて言って帰ってくるとか格好悪いにも程がある。アヤメの冷めた表情が目に浮かぶ。

「どうしてミュゲちゃんは準備してきたのにハランさんはそんななんですか！」

明華に怒られて、ぐぐぐと怯むハラン。そんなハランに気まずそ

うに声を掛ける済。

「……ま、まぁ、お前も長年大変だっただろうからな。ずっと塔に篭ってたんじゃあそういう事知らなくても仕方ないさ……な？」

「ぐぅっ……！そ、そんな引き篭りの世間知らずみたいな……！」

「わ、悪い！そういうつもりでは……！」

済のフォローに膝を抱えるハラン。

「お兄ちゃんを置いてかないで！かわいそうだよ！」

ミュゲの必死の懇願。拾ってきた犬を捨ててきなさいと言われた子供みたいである。しかし、当のお兄ちゃんは妹の愛に感激している。

「ミュゲさんにそう言われたら、置いてく訳にもいかないですね」

「ミュゲが言わなきゃ置いていく気満々だったのか！？」

「はい」

「！？」

救世の笑顔で吐く毒に、ハランはじりりと身を引いた。

「……で、どうするんだ？強行突破って訳にもいかないし……一度戻ってコミュニティに登録をしてくるのがいいかな？」

「そうですね。面倒ですけど仕方ないですよね。明華さんもそんな感じでよろしいでしょうか？」

「え？あ、はい」

「……大丈夫か明華？もしかしてまだ調子が悪かったりするのか？」

「え、いえ大丈夫！別に何でも……」

明華は笑顔で首を横に振る。しかし、その変わった様子に周りが気づかない筈もなく、しかし下手に触れないように口を噤む。少し変わった空気の中、一行は意見を揃えて、一旦近場のコミュニティのある街まで戻る事に決めた。しかし、そこで意外な声が降りかかる。

「あらら～～～黒い髪が一杯……と思ったらあの時の天使さんがいらっしゃるじゃないですか～～～？」

のんびりと間延びした声、その声の主が分かるのは、薄葉達の中でもほんの二人だけだった。

救世と済、実際に一度だけ交戦したこともある二人が、どうにも良い印象を持っていないその女の名前を呟く。

「シェーヌ……？」

ズィスィにて禁断の魔導などに手を触れ、その思想の元にズィスィに反乱を目論んでいた宗教組織、オラクル。敵として現れたその組織内に居たその巨大絵筆を担ぐでか帽子の白衣女。赤縁メガネをくいっと上げる『自称天才』の召喚術士、シェーヌ。大きなダチョウのような鳥に跨り、彼女は後ろからやってきていた。

知り合い？と救世と済に視線を送る一行。

「どうして此処に……！？」

「そんな怖い顔で睨まないで下さいよ～～～！私のオラクルとの契約はもう切れてるんですから～～～。今は故郷に帰ってきたってだけですよ～～～。敵対するつもりなんてさらさらないですから～～～」

くすくすと笑い、シェーヌはひらひらと手を振る。その気の抜け

た態度に、身構えていた済は身を引いた。

「……いえね～？なにかお困りのようでしたから～～～声を掛けたんですけどね～～～？」

「お前も人を心配するのか？」

「いえいえ～～～そりゃあ、伝承の天使様でもなければ心配なんてしませんよ～～～興味ないですしね～～？」

素直に、その黒い部分を包み隠さずにシェーヌは笑う。

「逆をいえば～～伝承の天使様がお困りなら、少し位なら手を貸して差し上げてもいいですよ～～～ってことなんですけど～～～？」

「見返りでも求めるのか？」

「いえ～～～恩売っとくだけでも儲けじゃないですかぁ～～～？」

くるりと巨大な筆を片手で回して、シェーヌがくすくすと笑う。

そして、その筆を片手でぐいっとハランに向けると、にやりと不敵な笑みを浮かべた。その場にいる全員が、絶対にシェーヌに善意など無いことを理解するには十分な言動だった。

「要はそこの冴えない天使さんを～～～ヴォラス内に通したいですよね～～～？」

「冴え……！？」

「ん～、すぐにでも通れる方法、私なら実行できますよ～～～～？」

胡散臭いその女、シェーヌ。その誘いに、全員が顔をしかめる。

顔を見合わせ、その返答を言い淀んでいると……

「お願いします！お兄ちゃんと一緒に行きたいです！」

顔をしかめず、疑いなく頭を下げる少女が一人。

クリーム色の髪を揺らして、一度下げた頭を持ち上げたミュゲがおねだりするかのような上目使いでシェーヌを見つめた。

シェーヌは暫くその『一見天使ではない少女』を見つめて、なにやら難しい表情を浮かべたあとに、ぽっと頬を赤くしてにっこり微笑んだ。

「いいわよ～！お姉さんに任せて置きなさい～！」
「ありがとうシェーヌ！」
「いえいえ～～～♪その代わり～～～」

シェーヌがにっこり笑顔を浮かべて、一言。

「そこのお嬢ちゃん、こっちに乗らない～？」

シェーヌが何を思ったのか、それが分かるのは後のお話。

シェーヌとミュゲを乗せたダチョウのような鳥（牙とか生えている）、シェーヌがシュトラオスと名付けるその鳥に続いて、巨大なテラス、ベゲモートに乗る五人が続く。

国境警備がその異形の化け物二匹を繰るどう見ても怪しい集団を、当然止める。

「お待ちください。此処を通るには……」

「私はシェーヌ。王宮魔導士左門一席、そう言えば分かるかしら？」

「……これはシェーヌ様！大変失礼致しました！長旅ご苦労様です！」

「結構。この子達は私の研究の協力者なのだけれど、通しても構わないわね？」

「は！勿論であります！」

「ご苦労様。ほら、あなた達、行くわよ」

シェーヌに敬礼する警備兵を横目に、一行は唖然としたまま後を続き、国境を楽々越える。

暫く進んで、シュトラオスを止めたシェーヌがにっこり笑顔で後ろを振り向く。

「……と、まぁ大体こんな感じですから～～～あんまり問題起こさないで下さいね～～～？私の責任になっちゃいますんで～～～♪」

救世がじとっとした目でシェーヌを睨む。

「……ヴォラスのお偉方だとは分かりました。けど、それでズィスィの、他国の転覆を目論む組織に所属していたって……大問題ではないですか？」

「あはは～～～ですね～～～だからそれも黙ってて下さいね～～～？流石にヴォラスとズィスィ間で血が流れるのは見たくないでしょ～～～？」

「……やっぱり私はお前が嫌いだ」

救世と済がじろりとその裏のありそうな笑顔を睨む。

「……ま、冗談ですよ～～～♪そんなヘマはしませんし～～～♪……それより、折角一緒になったんですから～～～近場の街、ニフタまで同行しません～～～？ちょこっと位ならヴォラスの案内もしていいですよ～～～？」

「……皆さんどうしましょう」

救世の問いかけに、一同が答える間もなく、シェーヌは背中にしがみつく少女に笑顔で問いかけた。

「お姉さん楽しい場所いっぱい知ってるけど、ミュゲちゃん行きたいかな～～～？」

「行きたい～～～！シェーヌ、お兄ちゃん助けてくれたから大好き～～～！」

ただでさえ教育環境の悪さを抱えた一人の少女が、また新しくよろしくないことを覚えてしまった瞬間である。相手が男でなければ大丈夫と言わんばかりに、語尾を伸ばしたふざけた喋りを真似する

ミュゲを見て、「さすが俺の妹可愛い」とでも言いたげにハランはうんうんと頷いている。その様子を見たその他の天使達は、きちんとミュゲに色々教えなければ、と保護者としての意識を芽生えさせていた。

ちなみにこの後、一同が真っ先にミュゲに教えたのは勿論、「知らない人に付いて行ってはいけません」である。

「実はこのヴォラスでは四年置きにビッグイベントが催されるんですよ～～～♪なんと今年はまさにその年！だから、国中お祭り騒ぎ！結構色々楽しめると思いますよ～～～！」

シェーヌの言う『ビッグイベント』。それで一同は天使レイラの言葉を思い出す。

「ビッグイベント？」

「『ヴォラスカーニバル』。四年に一度の『チーム制闘技祭』ですよ～～～。優勝チームには、超豪華賞品が与えられるイベントです～～～。ああ、私もチームが揃えば出たいんですけどね～～～なにぶん天才故に妬みが酷くて友達いないんですよ私～～～」

シェーヌの戯言を無視しつつ、そのイベントの情報を手に入れた薄葉は、はぁ、と息を吐く。

「あの化け物は……これに出ろって言ってんのか？」

去り際にレイラが残した言葉を思い出す。

『次あった時は、もっと広い青空の下で、清々しく殺しあいましょうね♪』

薄葉は思った。

絶対に参加せんぞ……！

――

「くしゅんっ！」

「あれ？レイラが風邪？珍しいね」

「……きっと薄葉が私の噂をしてるんだわ。ヴォラスカーニバルの事を知って、私が嫌いな薄葉はきっとこう言ったの。『参加したくねぇ。あいつと会いたくないし』……と。想いも届かず私、可哀想！不幸、不幸、不幸だわっ！」

「あはは……」

ルカは「本当にそう思ってそうだよ」とは言えなかった。彼の鋭い勘は当たるので、レイラが癇癪を起こしかねないからである。

ヴォラスの首都、ヤドハクに既に侵入し終えた二人の伝承の天使、

月島流河と月島麗羅は既に広場で騒動を起こしていた。正確には『レイラが』、だったが。

広場の中央で山積みになった屈強な男達の一人の頭をぐっと引き寄せ、レイラは物憂げな表情で頭を撫でる。

「はぁ……」

何を思ってかレイラは、引き寄せた気絶する男の頭髪を一本ずつ引き抜き始める。

「好き、嫌い、好き、嫌い……」

ぶち、ぶち、ぶち、と物憂げに髪を毟る女の子。どんな表情をしても花占いのような可憐さがまるで見えない。むしろ怖い。

「レ、レイラやめてあげて！それはいけない！」

「……好き、嫌い、好き、嫌い……」

聞く耳持たずのレイラの手を、ルカが掴んで制止する。すると珍しくレイラはそれに抵抗しなかった。

「……レイラ？」

「……不幸だわ。とっても不幸。もしも、カーニバルで殺しあったら……薄葉は私を、可哀想って言ってくれるかな？」

「……？」

レイラの何処か寂しげな表情。ルカはその表情に違和感を覚えた。

レイラは今までも、何度か恋をしたことがある。

しかし、それはフラれる事が前提の、失恋の瞬間に酔っていただけの恋。最低な男に近付き、散々に振り回されてから捨てられる…そんな恋をレイラは愛していた。

しかし、今回の様子はルカの目には違って映った。

「どうして薄葉君に可哀想って思って欲しいの？」

「……好きだから」

「だったら可哀想と思ってもらわなくても、好きになって貰えるように頑張ればいいんじゃないの？」

「……好きになってもらう？」

レイラは不思議そうに首を傾げる。

「それで本当に薄葉に振り向いてもらえるの？」

何処か壊れた妹の、そんな質問に、ルカは表情を曇らせた。

そっか。レイラは……

そして、すぐさま曇った笑顔を浮かべると、レイラの手を引き立ち上がらせる。

「ヴォラスカーニバル、僕も参加するよ」

「え？ルカ、参加しないって……」

「メンバーが集まらないんだろう？だったら僕が足しになるよ」

「一体どういう心変わり？それに、それでも二人足りないわよ？」

「大丈夫、僕は運がいいから」

ルカの笑みに、初めてレイラは笑みを返す。

「……初めてルカの力が有り難いと思ってしまったわ。ああ、不幸、不幸、不幸だわ。こんな頼りない兄に頼らないといけない私、可哀想っ」

「そうだね。じゃ、こんな頼りない兄を使って、ちゃっちゃと優勝商品を手に入れちゃおう」

「優勝商品？」

「え？レイラ、そっちは知らないの？」

「思い切り殺しあえる舞台なだけじゃないの？」

「いや、殺しは禁止されてるよ……優勝商品は」

ルカはその優勝賞品の名を告げる。それを聞いたレイラは、喜々として目を輝かせた。

ちなみに、そのヴォラスカーニバルに参加する多くの参加者が、その賞品の正体は知らない。

ルカとレイラが正規のルートで大会参加を決める事になるきっかけとなったその決め手は、ルカが『偶然』運営側の人間から漏れた情報を耳にした事だった。

ヴォラスカーニバルの一角で、一人の少年の思うがままに運命が廻る。

不幸に溺れた化け物レイラと、幸運に愛された少年ルカ。二人は

己が望むがままにヴォラスカーニバルに参戦する。

そして、彼らの望むがままに、彼らの求める者達も、否応なしに巻き込まれていく事になる。

国を包むお祭りムード。その裏で、良からぬ企みが息を顰める。

ヴォラスカーニバルは誰が為に廻るか？

ＥＰ３５：　ヴォラスカーニバル！（後書き）

四年に一度のビッグイベント、ヴォラスカーニバル！それに思わぬ形で巻き込まれていく薄葉達。賑やかに、派手に盛り上がるその舞台。その裏に潜む怪しい動きの真意とは？

次回、「Ｓｗｅｅｐｅｒ　&ａｍｐ；　Ｇｏｄ　Ｆａｔｈｅｒ？」に続く！

遂に四章、ヴォラス編に突入です！ヴォラス編は表側では賑やかドタバタ展開になるかと思います。裏側では怪しい人達が動き回る……かも？

物語の真相に迫る四章、四大国最後の国にて、最大の戦いが繰り広げられる？

Ep36：Sweeper & God Father？（前書き）

ヴォラス編の導入部分。まだまだバトルはおあずけです。

Ep36：Sweeper & God Father?

かつて世界には幾つもの危機が訪れた。

そんな危機を幾度となく救ってきたその伝説。

黒髪の天使兄妹。

ヴォラスにも、かつて危機を救った天使がいる。

――――

三十年前、世界に人知れず訪れたとある危機。

球界テッラ随一のアルマ量を誇る、四大国からなる大陸、エザフォス。球界プルトナスからの侵略者、テラスからテッラの民が逃げ込んだ最後の砦にして、不可侵の大地。

その安住の地が確立されたのは、その危機を乗り越えた時からだった。

エザフォスに全戦力を集中し、その豊富なアルマを利用したテッラの民は、難なく大海から攻め入るテラスの軍勢を討ち払っていた。

元々、この大地には優れた者が多く集い、外から流れ着いた僅かな生き残りの戦力も含めて、その戦力は盤石のものとなっていた。

しかし、その盤石を揺るがしかねない事態が密かに動いていた。

それは生物とは思えぬ異形。

最強にして最悪の三躰のテラス。三躰で『レマルゴス』を名乗るテラス達のリーダーが、大海から密かにエザフォスにへと侵入したのである。

遥かに高い知性と、遥かに強い力を持つ三躰のテラスは、密かにエザフォスに根を下ろした。

レマルゴスの中でも、特に秀でた実力と知性を持つ紛れもない最強のテラス、ルーナは、今までの粗暴なテラスとは違い、レマルゴスの他のテラス二匹をだけを率いて、大国ヴォラスの王宮へと踏み入った。

「テッラの王様ご機嫌麗しゅう。わたくし、プルトナスからの使者、ルーナと申します。テッラの皆様方がテラス、と呼ばれる化け物のリーダーにございます」

名だたる戦士を、魔導士を、楽々と薙ぎ倒して現れたテラスのリーダー、ルーナ。宙に浮かぶ十字架に張り付けられた女は、恭しく当時のヴォラス王に頭だけをこくりと下げ、挨拶をした。

「わたくし共三人はテラスの支配者『レマルゴス』と申す者。此の

度は、テッラとプルトナスの平和的な統合について、お話し合いに参りました」

そのふざけた提案に、王はそれを突っ撥ねようともしたが、ルーナはその隙を与えないように話を続けた。

「私共も、無駄に命の花を散らすつもりはございません。我々三人がこのエザフォスに攻め入れば、お互いに尋常ではない被害が出るでしょう。多くの命を散らす事になる。勿論、私共もタダでは済まないと思います」

ルーナは微笑み提案する。その言葉が事実であることを、王は理解した。それほどに、一目で分かるほどに圧倒的な威圧。その三躰のテラスは格が違っていた。

「そこで、ゲームをしませんか？」

それが危機。人知れず行われたテラスとのゲーム。

「我々三人、『レマルゴス』と、そちらが用意した精鋭とで勝負をしましょう。もしも、其方が勝った場合は、我々レマルゴスはエザフォスから手を引きます。しかし、我々が勝った場合は……この国をそっくりそのまま寄越して頂きたいのです。戦力、資源、人民、その全てを」

それは交渉でもあり脅迫でもある。

「勿論、お断り頂いても構いません。その場合は、すぐにでも多くの命が失われるでしょうが」

拒否は即ち死。王にはそれが分かっていた。

「こちらの一方的な要求であることは分かっています。しかし、我々とて限られた資源を無為にはしたくない。だからこその交渉なのです。勿論、こちらにしかメリットはないですので、ハンデは差し上げます」

その意図は掴みかねたが、ルーナには確固たる目的があったようだ。何処か焦るような、後がないような、そんな印象を王はその危機的状況で感じ取る。

「こちらは三人。……ならば其方は三十人まで精鋭を出しても良いという事にしてはどうでしょう？十倍の人数、それなら其方が圧倒的に有利。そして、私達三人をその圧倒的に有利な状況で倒せるかもしれない事の大きさ、かなりのものだと思いませんか？」

自信に満ち溢れたその言葉には偽りも奢りもなく、それは紛れも無く事実に近かった。この機会で、この三躰のテラスを討てる事の大きさは相当なものに違いなかった。

「……一ヵ月、猶予を差し上げます。それまでに我々を倒せる精鋭を用意してください。その間は我々は手出し致しません。一ヵ月後に、もう一度貴方の元を訪れます。そのときに、ゲームを始めましょう……」

そうとだけ言い残し、三躰のテラスは姿を消した。

そして、一ヵ月の猶予を与えられたヴォラス王は、各国にその事

態を告げ、呼び掛け、多くの人民に覆い隠した形で、各国から強力な戦力を集める事にする。

その中に、『伝承の天使』はいた。

当時は六人。既に溶け込むように世界に馴染んでいたその六人の天使達は、世界の危機に立ち上がった。

そして、六人の天使と、二十四人の精鋭達は、見事にテラスのリーダー、ルーナを打ち倒す。

大きな犠牲を払いつつ、大きな過ちを犯しつつ……

そして、三十年経った今。エザフォスへのテラスの侵攻も収まりつつあるように見え、大陸の外、海の向こう側へのテッラ奪還作戦が持ち上がりつつある中で、今もその天使の生き残りは、静かに息を潜めて生きている。

一一一一

薄葉達が訪れた街、ニフタでは、まさにお祭りといった空気が流れていた。あちこちに装飾が飾り付けられ、出店が並び、其処ら中に『ヴォラスカーニバル』の表記が見られる。この末端の街でもこの賑わい様、そのイベントの大きさが容易に伺えた。

「ミュゲちゃんほらほら風船～～～～！」

「風船～～～～！」

一つの出店から奇妙な動物を形取る風船を買ってきたシェーヌから、笑顔でその風船を受け取るミュゲ。ちなみにこれで十個目のプレゼントである。

「可愛い～～～！これも強くしよ～～～！」

「強く？いいね～～～強くしようね～～～♪」

その様子を微妙な表情で眺める救世と済。

「……子供が好きなんですかね？」

「まぁ……悪巧みしているようには見えないからいいだろう」

と、言いつつ、次第に喋り方が似てきているのは気になる二人。

「ところで救世さん。ヴォラスでもお仕事があるんですか？」

はしゃぐシェーヌとミュゲを眺める救世に、明華が尋ねる。

「ええ。でもヴォラスは意外と治癒術士が揃っているそうなので、緊急で必要な場所はないそうです。取り敢えず何処から寄ってもい

いそうですから……一応、ニフタにもコミュニティはあるみたいですし、後で行ってみますよ」
「その時は私も一緒に行かせてください」
「大丈夫ですよ？色々とやっているみたいですし、私一人でも仕事は片付けておきますから、観光でも落ち着いて楽しんだらどうですか？天使の伝承の情報も、手掛かり位探っておきますから」
「いえ、行かせてください！……えと、ヴォラスの事を調べる間もなく来てしまったので……情報収集もしておきたいですし！」

何処か変わった様子の明華に気付いた救世は、別段それに触れる事なく微笑んだ。

「そうですか。じゃあ、一緒に行きましょう」
「私も行くぞ、救世」
「済ちゃんもせっかくのお祭りなんですから楽しんでくればいいじゃないですか。別に私に気を遣わなくても……」
「いや、いい。別に興味ない」
「……枯れてますねぇ、済ちゃん」
「枯れ……！？」
「いえ、冗談ですよ。お付き合い感謝します」

救世も気付いてはいた。済がかなり気を遣ってくれている事を。明華が連れ去られた一件以来、救世は多少無理をして仕事もこなし、明華や薄葉が必要としていそうな情報収集なども積極的にこなしていた。その姿が、妹の目からは無理をしていると映っていたのだろう、と。変なところにはよく気付き、気を遣おうとするとことん気遣う妹の善意に感謝しつつも、変な心配を掛けている事を反省しながら、救世は無理のない笑顔を浮かべた。

「……じゃあ、早めに確認だけ済ませておきましょうか」

「あれ？救世さんどっか行くんですか？」

済と明華を引っ提げた救世に気付いた薄葉が声をかける。

「あ、これからちょっとコミュニティの方に顔を出してきますので。ミュゲさんの邪魔をしちゃ悪いですから……薄葉さんはミュゲちゃんの事、見ていてあげてくれませんか？」

「え？え？イツキも明華も行くんですか？まぁ、大丈夫ですけど……まさか、こいつと二人きりで？」

薄葉が横で凄い形相で睨んでくるハランを横目で見て、尋ねる。

「俺、この人の事良く知らないんですけど……何か初対面からやたらと絡んでくるし……未だに互いに自己紹介すらしていないんですが」

「だぁれが貴様なんぞに名を名乗るかッ！！」

「……俺、こいつ嫌です！」

「まぁまぁ、仲良くして下さい。薄葉さんが一緒なら、ミュゲさんも安心ですし」

「俺一人で十分だッ！こんなロリコン野郎など必要ない！」

「じゃ、よろしくお願いしますね？」

「おい！俺の話を聞けッ！」

笑顔でするりとスルーして、立ち去る救世。その姿をぎぎぎと唸りながら見送って、薄葉とハランはじろりと視線を交わらせた。

「……なんなんだあの女は」

「救世さんは男だよ」

「お前は俺をバカにしているな？」

「本当だっつうの！」

火花を散らす二人の男。どうやら相性は悪いらしい。しかし、笑顔で手を振るミュゲを見て、ハランは視線を薄葉から離した。

こんな地味で冴えないロリコン男に、鈴蘭は、ミュゲは絶対に渡さんぞ……！

そう心に誓いながら、シスコンお兄ちゃんは笑顔で妹に手を振り返す。

この後、一人の少女をめぐり、とある騒動がこの場で巻き起こるとも知らずに……

―――

「ワオ！明華ちゃん！無事で良かった～♪心配したよ～！もう、ズィスィの支部で顔を出してくれないから心配してたよぉ～♪具合はどぉ～う？」

コミュニティニフタ支部であいも変わらず待ち構えていた白面の窓口係は、親しげに入口を潜った三人組に手を振った。それと同時に、コミュニティ奥のバーに居たメンバーの視線が一気に入口に集まる。

「はい、大丈夫です」
「それは良かった♪ごめんね～、想定外の事態で危ないことに巻き込んじって！」
「いえ。コミュニティは何も関係のない事ですから。私のミスです」
「そっか～～でも、薄葉っちとはまた巡り会えてよかったねぇ？」

「にやにや」と笑うジアミエンに対して、明華はぽっと頬を朱に染めた。それに対し、なんでもお見通しと言わんばかりにいつもは笑うだけのジアミエンは「ん？」と首をかしげる。しかし、別段気にする事なく、直ぐ様立ち上がりすたすたと歩み寄る。

「と、ご挨拶も此処までにしてさぁ。実は相談があるのよねぇ？」
「それは特別治癒術士としての依頼、ということですか？」
「うんにゃ、違う違う。でも、あなたたちに対する『特別な依頼』ってところかしらん？」

『特別な依頼』という言葉に、ぴくりと奥の男達も反応する。

「……『ヴォラスカーニバル』、噂くらいはもう聞いてるんじゃないかって思うんだけど。実はとあるお客様から直々にあなたたちに参加依頼が出てるのよねん♪」
「参加……依頼？」

奥の男達がざわめく。それを気にする様子もなく、ジアミエンは

ひらりと一枚の紙を差し出した。それはどうやら『ヴォラスカーニバル』の参加案内のようで、救世が受け取ったそれを、明華と済が覗き込むように目を通す。

「……参加者は四人チームで、と書いてありますけど」

「そ、だからあなた達にはお客様の『不足人数分』の『三人』を埋めてもらいたいって訳なのよん♪」

「三人？……それは今ここに居る三人、ですか？」

「いやいや。『あなたたち六人』を、三人ずつに分けて、ね？お客様、二人居るのよん。そしてそれぞれが『男だけ』、『女だけ』を要望してるのよねぇ……」

「六人って……それはミュゲちゃんも含んでるって事ですか？」

明華が少し怪訝な表情で尋ねる。

それに「うふふ」と笑顔を返して、ジアミエンはぽんぽんと明華の肩を叩く。

「子供に戦わせたくない？大丈夫大丈夫。ちょっとしたスポーツ的なもんよ♪殺しは御法度、そもそも怪我もないようにきちっと安全管理された環境、万が一に備えた治癒術士の配備、普通にミュゲちゃん位の子供も参加申請してるわよん！ハランっちに関しては、まだお誘いが行き届いてないけど……きちんとした待遇でお誘いするつもりよん♪国境越えるのも苦労したでしょ？」

全てお見通し、というその不敵な「にやり」という笑みは健在のようだ。

「依頼主はなんとヴォラス有数の貴族、ストラティゴス家の時期当主の座を争う双子さんよん♪お二人は時期当主の座を賭けて、このヴォラスカーニバルでの優勝を目指しているみたいなの」

「それって……御家騒動というやつですか。その両者に肩入れするって問題があるんじゃ……？」
「そこは依頼者様にもご了承いただいてるわん♪その上で、指名する三人を選んだみたいだし！」
「……もう受けてしまったんですか？」
「……あはは♪」

ジアミエンの笑い。それに対して三人は溜め息を漏らした。

「まあ？別に『コミュニティの宣伝になるー！』とか？『めっちゃ報酬もらえるぜい！』とか？そんな理由じゃないのよん♪」

そんな理由らしい。

「……あなたたち伝承の天使にとって、ちょこっと美味しいお話もあるから快く受けたのよねぇ」

伝承の天使という言葉が、三人の表情を動かす。その表情を見れて満足と言わんばかりに、ジアミエンは「にやり」と笑う。

「実は依頼者の所で仕えてる側近、一昔前の『伝承の天使』だった兄妹なのよね。さらには、このヴォラスを治める王、マラークは……なんと原初の天使、勇者アゲロスの子孫なの」

ジアミエンが「どや」と呟き「にやり」と笑う。その思わぬ情報に、まさに開いた口が塞がらないといった表情を見せた三人の天使。

「彼らからなら、とっても有益な情報を得られると思わない？……もしもこの依頼を受けてくれたら、その兄妹にも会えるし、優勝すれば滅多にない王との謁見の機会も与えられる。さらにさらに……もう一つ、今回の依頼を受けてくれたら最高の『ご褒美』をあげるわ♪」

とん、とジアミエンが指を添えるのは救世の胸。そして、「うふふ」と笑い声を漏らすと、囁くように告げた。

「救世っちの、ズィスィでの大きな働きで、今のランクはＡランク。今回の依頼では『参加』だけが条件になっているけれど、もしも『優勝』した場合は特別にポイントを上乗せして、Ｓランクへの格上げを許してあげる……との上からのお達しよん♪最高ランクではないけれど、十分高いランクよねぇ」

「私は別にランクなんてものには……」

「Ｓランクになったら、売れるわよん？情報『天使の伝承の１ページ』、『伝承の天使の帰還について』……」

帰還。その言葉が一瞬で救世の表情を固まらせた。横で話に耳を傾ける二人の天使も、同様の反応を示す。

「くすくす」とそれを楽しみながら、ジアミエンは続ける。

「勿論、三人ずつ、男女に分かれて参加してもらうけど……どっちが優勝した場合でも、キッチリバッチリ全員にポイントは平等にあげる。だから、どっちかが優勝すれば……あなたたちが求めてる、『元の世界に帰る方法』を売ってあげる。勿論、今までの働きに応じて、格安で、ね♪」

それは願ってもない情報。すぐにでも飛びつきたい情報。

しかし、救世だけは、その情報を今、提供すると語るジアミエンに対して、言い知れぬ不安を抱かずには居られなかった。

人を疑うことを好まない救世。しかし、それでも、どうしても感じずには居られない妙な危機感。救世に向けられたジアミエンの見えない視線から、仮面に隠された瞳から、嫌な感覚を感じる。

しかし、断る訳にもいかない。少なくとも、僅かな手掛かりに手を伸ばすには、その依頼主の心証を悪くする訳にもいかず、更には王に会う為にも避けては通れない道。目の前に一本だけ伸びる道に乗るしか、今の所できる事はなかった。

「……取り敢えず、全員の総意を問いたいので、この場の返答はお待ちいただけますか？」

「ええ勿論♪ヴォラスカーニバル開催と参加申請にはまだまだ時間があるからね！……いいお返事お待ちしてるわ。あと、この付近では救世っちに頼むお仕事はないから。ま、それでもお仕事したかったら掲示を見てね？」

ジアミエンは今度は笑い声を漏らさずに、静かに身を引く。

一旦は保留にした返事。しかし、その答えがＹＥＳである事を既に見抜いているように。

そのお見通しに従わざるを得ない状況に、救世は僅かに表情を歪

めた。

一一一一

依頼を受ける事に対して、明華と済は賛成の意を示す。

「少し、ジアエミンさんに踊らされてる気がしないでもないですけど……それに乗るしか今は方法はなさそうですし」

「ああ。あいつはどうにも怪しいが……全てにおいて嘘をついているとは思えないな。少なくとも依頼を受ければ一昔前の天使兄妹には会えるだろう」

明華と済は怪しさを理解しながらも、それに乗るつもりのようだった。しかし、自分達の優勝がコミュニティの利益に繋がる事を考えると、罠にはめてどうしようというつもりはないのでは、と考える。

「コミュニティは伝承の天使を手放したくない筈、それでも情報提供を申し出たということは……恐らくは『帰る方法』には『すぐには達成できない条件』があると考えてもいいでしょう。もしかした

ら、『更にランクをあげたらその条件を満たす為の情報売りますよ』とでも言って利用するつもりなのかもしれませんよ」

「……ありそうだな、あの変人なら」

「でしょう？」

明華と済は、勝手に納得してうんと頷く。何だかんだでズィスィでの一件から仲の良さそうな二人を見て、微笑ましく思ったり羨ましく思ったりと複雑な心境で、救世はやんわり微笑んで、二人の意見に同調するかのように頷く。

本当に、それだけ？

天使の伝承、その中のとある記述から感じている不安を噛み殺しながら、救世は自分の思考を誤魔化す。

そんなネガティブな気を紛らわせようと、辺りに並ぶ出店に視線を移す救世。食べ物、記念品、アクセサリなどなど様々な店の並ぶ賑やかな通りを見渡す。

その明るい光景を見渡し、ほっと一息ついた時、前方から聞こえてくる聞き覚えのある声。

「うわあああああん！」

「ミュゲさん？」

たたたと泣きながら駆けてくる少女、ミュゲ。そしてその後ろを駆けてくる女。

「はぁっ！はぁっ！ミュゲちゃ～～～ん！！」

真っ先に駆け出したのは済。向い来るはぁはぁ息を切らし必死の

形相の女、シェーヌを迎え撃つ！

「この変態がぁッ！！」

「ひでぶっ！？」

ガッ！

すれ違いざまラリアットで、空中で一回転して地面に倒れるシェーヌ！

「このロリコンめッ！」

「ち、違っ！わ、私はミュゲちゃんを心配して追いかけて来ただけです～～～！」

「ウスハとお兄ちゃんが……！」

ミュゲは明華に抱きつきながらえんえんと泣く。

「あ、そうそう！大変です～～～！あの冴えない男二人が、殴り合いの喧嘩を始めたんです～～～！」

「何！？何をやってるんだあいつらは……！」

「……あの、謝ってもらえません？私、なんでロリコン扱いされたんですか～？」

「……はぁはぁ言いながら走ってきたから」

「走って息を切らしてただけですよ～～～！まぁ、多少興奮はしてましたが……ひでぶっ！？」

「ったく、あいつらめ……！」

シェーヌを踏みつけトドメを刺し、済がまずは駆けていく。

「私達も行きましょう！」

「え、あ、はい！」

救世と明華もミュゲの手を引きながら急ぐ。

そして、待ち受けていたのは……

ボコボコにされて地面に沈むハランと、無傷で微妙な表情をするウスハだった。

「殴り合いの喧嘩は止めろ！ハラン！ウスハ！」
「どう見ても俺が一方的にやられてるだろうが！」

地面からすくっと立ち上がり、ハランが猛抗議する。

「いや、何かしらんがこいつが勝手に倒れてた」
「あれだけ殴っておいてさらりと嘘をつくな！」
「最初に手を出そうとしたのはそっちのぼこぼこの方ですよ～～～。そしたら攻撃を当てる間もなく返り討ちにされてました～～～」

遅れてやってきたシェーヌが証言する。ハランが先に手をだし、ウスハが無意識に反撃した形である。

「ハラン、お前何した？ウスハは何かされなきゃやり返さないぞ」
「くっ……！こいつがミュゲとイチャイチャと！」
「してねーよ！」
「なにおう！？おのれ、きさ…ギュウッ！？」

立ち上がり吠えようとしたハランの頬にビンタをぶちかます薄葉。薄葉は敵意に反応して無意識のうちに反撃する特性を持っているのだ！

ビターンと地面に再び倒れるハラン。周囲の視線釘付けである。

しかし、それでも引かないハランにトドメを刺したのは……

「喧嘩で暴力振るうのやだ！お兄ちゃんもウスハも大嫌い！」

ハランは９９９９ダメージを受けた！ハランは倒れた！

「え、えええ？俺、暴力とか……振るってた？」

ウスハは戸惑い気味で頭を掻いた。しゅんとしている。ロリコンじゃないとはいいつつも、好き好き言われていた少女から突然嫌いと言われてショックだったようである。

その様子をむむむと唸りながら見て、済ははっとしたかと思えば、次にはにやりと不敵な笑みを浮かべて、珍しく抜群のフォローを加える。

「ミュゲはあの二人が嫌いか、そうか。……じゃあ、少し全員頭を冷やす必要があるなぁ……」

済はちらりと後ろに目をやる。その先に居たのは明華。そして、その話を切り出した。

「実は、コミュニティでとある依頼の話を貰ってきたんだが……」

こうして、実は成功し得なかったその依頼を受ける話は、運よく成功へと転がった。

一一一一

「いやぁ～～～まさかこんなに早く返事を貰えるとは思わなかったわ～～～！」

ジアミエンは喜々として、早速やってきた六人を迎え入れる。

「……でも、何だか変な空気が流れているのは気のせいかな？」

「ああ、気にするな。直に良くなる」

放心状態のハラン、微妙な表情を浮かべる薄葉、そして明華の手

を握る涙目でいじけ気味のミュゲ。明らかにおかしな空気である。

「ならいいけどね！いやぁ、良かった～♪実は依頼主の使いの人があなたたちのヴォラス到着を聞きつけて、早速このニフタまで迎えにやってきてるんだよねぇ♪喜べ貧民ども！なんと馬車でのお迎えであるぞ！」

ジアミエンの「けらけら」という笑い声と共に、コミュニティ奥のバーに居た、二人の異質な人間が立ち上がり、歩み寄ってくる。

「ジアミエンさん？その子達は……あ」
「窓口。その若造達は……あ」

二人の人間は足を止めて、互いに視線を合わせる。

ひとりは女性。おっとりとした印象を与える人で、黒いおさげ髪を垂らし、家庭的な可愛らしいエプロンを前に掛けた、元の世界での「奥さん」といった感じの女性。道端で会議をしていそうな女性である。見た目は若そうだが、何処にでも居そうな若奥様といった空気がむしろこの異世界では浮いている。

ひとりは男性。黒いスーツに赤いネクタイ、黒いヒゲに黒いオールバックの髪。顔は黒いサングラスで覆うという、如何にも怪しいガタイのいい大男。向こうの世界の裏で生きていそうな雰囲気である。勿論、圧倒的に浮いている。

「……貴様か。何だ？まさか其方もこの天使共の力を借りようと？お嬢の要望と被らないとなると……はは、相変わらず色ボケした青

臭いガキのようだなそっちの主人は」
「あら、其方もですか。おたくのアミーラちゃんもませてるのねぇ？男の子ばっかり集めちゃって……年頃の女の子がはしたない」
「あぁん？なんだと……？」
「あらあら、やだわぁ」
物凄く険悪な雰囲気である。
そんな中、空気を読まずにジアミエンはひらりと窓口から飛び出し、二人の険悪な男女の間に割入り、「にっこり」笑って紹介する。
「はいはーい！こちら、今回の天使様御一行の依頼主様のお使いの方々！まずは女性陣の雇い主、アミールさんのお使い、『掃除人（スイーパー）』と呼ばれた元天使、ヨシエさん！」
「あらあら、『掃除人（スイーパー）』だなんてそんな……恥ずかしいわぁ。宜しくお願いしますね？」
にこやかにエプロン姿の元天使が頭を下げる。
「そして、男性陣の雇い主、アミーラさんのお使い、こちらは『ゴッドファーザー』と呼ばれた元天使！ダディさん！」
「ふん、パッとしねぇ野郎ばかりだ。きりきり働いてもらうからな、覚悟しとけ」
黒グラサンの男が威圧的な態度でふんぞり返る。
「お二人は、なんと御兄妹なのです！」
「「だぁれが、こんなのの兄妹なものか。あぁん、今なんつった？」

」

ガンを飛ばし合う二人は息ピッタリである。全く似てないが本当に兄妹みたいだ。

元天使という聞き慣れないフレーズが耳に残らない程度に、その二人のインパクトは強烈だったようだ。

唖然とする天使様御一行に、ジアミエンは最後のメッセージを贈る。

「それでは諸君っ！健闘を祈るっ！」

先行き不安な、天使達のヴォラスカーニバルが幕を開けた瞬間である。

Ep36：Sweeper & God Father？（後書き）

ヴォラスカーニバル参戦が決定してしまった薄葉達。男女分かれて、依頼主の元へと迎えられる。そこで待ち受ける者とは？元天使、ヨシエとダディを前に薄葉達は……？そして、ヴォラスカーニバルに集う強敵？達とは？

ちょっとした過去の要素を含ませつつ、一行のヴォラスカーニバル参戦決定でございます。次回もまだまだバトルなし、ちょっとした日常（？）回的なものとなります。カーニバル参加者が続々登場？

ＥＰ３７：　ヤドハクに集う……？（前書き）

今回は短め。まだまだ本筋にははいりませぬ。

EP37：　ヤドハクに集う……？

ヴォラスカーニバル会場、依頼主であるアミールの待つ首都ヤドハクを目指して進む大きな馬車の中、明華は隣に座る済に尋ねた。

「済。本当にあの二人を一緒にして大丈夫なの？」

「大丈夫だ。一応、救世もついてる」

あの二人とは、勿論喧嘩耐えない薄葉とハランの事である。

ヴォラスカーニバル参加の依頼を受けることを決定した天使達は兄と妹、二つに別れて別々に首都のヤドハクを目指していた。こちらは妹グループ。アミールの従者、ヨシエと一緒の女性陣。

「ある意味では最適な判断だと思うんだがな。ミュゲは薄葉とハランにべったりだから、この依頼を受けるのには手こずるだろうなと思っていた。良かった、とは言わないが……少し距離を置くのにはいい機会だった」

「それはそうだけど……」

明華は泣きつかれて、寄りかかりながら眠るミュゲの頭をそっと撫でる。これでいいのかな？と少しだけ気まずそうに表情を沈めて。済はその様子を見て、腕を組みながらふぅと息を深く吐いた。

「そして、明華。お前の事もある」

「え？私？」

済の突然の言葉に、明華はきょとんとした表情で、済の顔を見やる。

「私が気付いていないと思ったか？……明華、最近やたらとウスハを避けているだろう？」

済の言葉に明華がびくりと体を震わせる。

「そ、そんな事……」

「……わざわざウスハと一度距離を置かせたんだ。私でよければなんだって話は聞くぞ？ウスハの前で話せない事でも、今なら話していいんだ」

「済……」

済の気遣いに、明華は僅かに目を潤ませた。全て気付かれていたのか、と何処か苦しいような嬉しいような感覚を感じながら、明華は決心する。

どうしようもないその感情を、済に話す決心を。

「……何だかとっても苦しいの」

「苦しい？」

明華は頬を赤らめながら、もごもごと口篭るように言葉を吐き出した。

「捕まって、助けてもらった時から……目を合わせると顔が熱くなって、ずっと見ているとどきどきして、声を掛けられるとふわふわして……とても幸せなんだけど、何だかこそばゆくなって……とっても胸が苦しくなるの」

済は、むう、と顎に手を当て、はっとした。

「……病気か！」

「いやいやいやいや違うでしょう」

その声は、二人の目の前から聞こえた。

そこにはにっこり微笑むヨシエが居る。

「それはきっと恋じゃないのかしら」

「……恋？ち、違います！そんなんじゃないです！」

「あらあら、ムキになっちゃってもう！可愛いわねぇ年頃の女の子は。おばさん、妬けちゃうわぁ。ちょっとだけ、若い頃を思い出しちゃった♪」

「恋とか……そういう……」

くすくすと笑うヨシエから目を逸らすように、明華は目を伏せて口篭る。

……恋？そんなはずない。そんなはず……

考えれば考える程に熱くなる顔を、明華は両手で覆い隠した。

「そんなんじゃないですっ！」

「あらあら照れちゃって！……おばさんは恋の達人なのよ？良かったら、人生の先輩として相談に乗ってあげるわよ？ほれほれ、話してみなさいな？ほれほれ！」

にまにまと笑うヨシエを前に、明華は再び声をあげた。

「だからっ！そんなんじゃないですっ！！もうっ！！」

顔を覆い隠しながら張り上げた、明華の叫びが馬車内に響く。

思わぬ話題で会話が弾み、ヨシエと少し打ち解け（？）ながら、四人の乙女（？）を載せた馬車は、のんびりヤドハクへと向かう。

一一一一

「済ちゃん……恨みますよ……」

救世は三人の男に囲まれて、ぎゅっと袖を握り締めた。放心状態の格好はだけは派手な男と、ぼんやりと外を眺めるいまいちな男。そして、目の前にはガタイのいい柄の悪そうなグラサンの男。

空気はすこぶる最悪であった。

「ミュゲぇ……ミュゲぇ……！」

ハランのボコボコにされた怪我こそ治療したものの、心の傷までは流石の救世にも治せない。ハランは愛する妹に嫌われ酷く傷心状態である。気まずい。

「……はぁ」

薄葉は何故かぼんやりと溜め息ばかり漏らしていた。いや、そもそも救世としてはハランと薄葉の仲の悪さを知った上でその間に挟まれるというどうしようもない気まずさを感じながら、たまに思い出す薄葉の告白の事もあり、ちょっと薄葉に対して気まずい気持ちがぬぐい去れない。そもそも隣にいるハランについても、此方から喧嘩を仕掛けたとはいえ、明華や妹を傷付けられたという言いようのない嫌悪が否定できず、気まずいというか嫌だといった状態で……うわもう何がなんやら分からないやといった感じの混乱状態に救世はあるのであった。

しまいには目の前の怪しい大男。やたらと救世を見ている気がするのは気のせいだろうか？

馬車内に佇む沈黙。気まずさ全開である。

救世はどうにかこの気まずい状況を切り抜けたかった。そこで、比較的、一番声を掛けやすい薄葉に話を振る。

「う、薄葉さん……どうしました？溜め息ばかりついて……」

「え？あ、救世さん……いや、ちょっと」

「ど、どうしたんですかっ！困ってるのなら、私でよければ相談に乗りますよっ！？」

声が裏返っている。

「いや……困ってるとかそういうんじゃないんですけど……う～ん」

「何でも言ってくださいよっ！私と薄葉さんの仲ではないですかっ！い、いや、変な意味ではなくてですねっ！」

薄葉はむうと唸ると、微妙なんとも言い難い表情を浮かべて、救世の方を向く。

「……なんか俺、オラクルの騒動以来……明華に避けられてるような気がするんですよ」

救世は後悔した。

これまた乗りにくい相談を……！

「何か悪いことしましたかね……いや、別にベタベタされなくなったのはいいんですけども。あ、もしかしてまだ怒ってるのかな……？いや、でもなぁ……う～ん」

「別に避けられてる訳ではないんじゃないですか？」

「そうですかねぇ……」

「普段近いから分からない事もありますよ。たまには距離を置いて考えるのもいいんじゃないですか？」

「なるほど……そうかもしれませんね。……でも、ミュゲの方も問題だなぁ。泣かせちゃったし」

「貴様がミュゲを語るなよ……！？」

そこでハランに火がついた。

「全ては貴様のせいで……！」

「いや、あんたのせいだろ……！」
「あの……間に挟んで喧嘩しないでください……」
救世が縮こまり、睨み合いを始める二人の間で、声を小さくする。
「「このパッとしない冴えない野郎がぁッ！！」」
「「お前が言うなッ！！」」
見事な掛け合いである。傍から見れば、実は仲良しなのではと思えるほどの。
「静かにしろ小僧共……」
睨み合いを開始した二人のパッとしない冴えない男二人に、静かに喝を入れるグラサンの男。ふぅと何時の間にやら吸い出していたタバコの煙を吐き出して、グラサンを少しだけずらし、ぎろりと二人の男を睨んだ。
「レディを挟んで喧嘩たぁいい度胸だ。怯えているのが見えねぇか？男の力は女を怯えさせる為にあるんじゃねぇ……惚れさせる為にあるんだよ」
「凄く格好良さそうな事を言っている所申し訳ないのですが……私、男です」
「……ほら見ろ。レディに庇われて、お前ら恥ずかしくねぇのか？」
「くっ……！そう言われると……！」
「いや、庇ってる訳じゃないです。私は男です」
「救世さんの言ってる事、本当ですよ？」
ハランがじっと隣に座る美少女（？）を見る。グラサン男もじっとレディを見つめる。薄葉だけが事情を知っている風に救世の言葉

をサポートする。
グラサン男は、タバコの煙を再びふぅっと吐き出した。
「……女の嘘を、笑って許すのが男だ。分かった。お前は男という事にしておく」
「いや、嘘じゃないです。だったら何で男性陣に私が加わってるんですか」
「……それはずっと不思議に思っていた。だが、気にしない。それが……男だ」
「……もうやです、こっちのグループ」
救世は一人手のひらに顔を埋めて俯いた。その肩を「悪かった。な？な？」と叩くハランと、「ドンマイですよ」と同じく肩を叩く薄葉。
こちらの空気は最悪である。
ピリピリ、どんより微妙な空気で、いまいち打ち解けられずに首都へと向かう。
一一一一

黒い髪、ヴォラスではそれは特別な証として広く認められている。王に、その側近、そしてヴォラスの問題児二人の元に仕える恐ろしい従者。その黒髪が居れば、其処が騒めくのも無理はない事だった。

コミュニティヤドハク支部、其処のバーで、不満げに座る二人の黒髪の天使に周囲の視線は集まっていた。

「……ちっ、面倒臭ぇ。何で俺らがそんな面倒臭ぇ祭りに参加しなくちゃならねぇんだよ？」

「あはは、そりゃあウチのメンバーだからねぇ。それにあなたたちはちょこっと特別な立ち位置なんだから、キリキリ働いて貰わないと、ね？」

「兄貴、仕方ないって。命に関わる問題だしさ」

「櫛子ちゃんは分かってるぅ～♪」

白面の女、ジアミエンの「にやり」という笑いに、眉間にしわを寄せながら目を逸らす鼻ピアスにツンツン黒髪の男、哲哉。その隣で、溜め息混じりにストローでジュースを啜る長い黒髪を地面に付くほどに垂らす女、櫛子。二人は天使の兄妹、天野兄妹。ズィスィのオラクルに所属していたが、オラクルの壊滅した今、特別措置でコミュニティに所属させられている。

そんな二人に持ちかけられたのが、『ヴォラスカーニバル』参加の話。

二人は一国を揺るがそうとした組織の積極的な協力者だった。なので罪人でも引き取るコミュニティでも立場が少し危うい位置にある。それが特別措置。特例として断れない依頼を割り振られる事になる立場にある。なので二人に自由はない。

そこで持ちかけられたのが、カーニバル参加の話。拒否権なしのコミュニティ宣伝活動である。

断れば勿論、コミュニティに身を置くことは難しく、コミュニティから離れれば、処罰は免れられない状況。というわけで、二人は渋々依頼を受けた。

「勿論、ある程度の宣伝効果が見られれば、報酬はぐんと跳ね上げたげるからさ！そうね……例えば、コミュニティ内での強制労働義務の免除、とか？」

「それマジか！？」

「ええ、ええ。コミュニティに貢献してくれれば、それなりの立場はあげるって♪……それに二人にはちょこっと美味しい話もあるのよねん♪」

「何それ？」

櫛子が僅かに興味を示す。そして、それは二人にとって願ってもない機会だった。

「実は『あの天使兄妹』も、別々のチームだけど参加してるの。ヴォラスカーニバルに、ね』

誰かを助けるだとか、義務を果たすだとか、そんな立派な心構えのない天野兄妹。しかし、二人には共通して持ち合わせているものがある。

それはプライド。ずば抜けた自尊心。

そんな二人が、『自分達に痛い目を見せた相手』を、見逃している程に落ち着いている筈もなかった。

「……あのふざけた馬鹿と、ガキか……！」
「いいわね♪あの時の借り、返してあげましょ♪」

自分達の居場所を得る為、それよりもリベンジに燃え上がる二人の天使。

「しかも、超豪華優勝賞品も出るらしいわよん♪」
「なんだそりゃ？」
「あ、ちょっと興味ある」
「……なにやら一生遊んで暮らせる程の財力だったり、地位だったり？願いの叶う魔法のお宝だったり？とにかく凄いものって噂よん♪」
「……益々燃えてきたぜ」
「兄貴ったら俗物ねぇ♪ま、私も好きだけど♪」

にんまり笑う二人の天使。まさに、小物である。

「ところでジアミエン。チームは四人なんだよな？俺らと組む奴は？」
「ええ。勿論、それなりに優秀なのを付けちゃうよん！なにせコミュニティの威信がかかってるからねぇ！」
「役立たずだけは勘弁して欲しいわね♪」
「ま、俺らだけで十分なんだがな」

天野兄妹はけらけら笑う。

まさに、小物である。

―――

首都ヤドハクには既に多数の参加者達が集っている。開催はまだ数週間後、にも関わらず、彼らは早くから現地入りし、設けられた修練場で鍛えていたり、カーニバル記念のイベントに興じている。

そんな中、一際目立つのは、既に参加を決めた『優勝候補』達。

その中の一人、小柄な少年が、無数の人波に揉まれながら、降りかかる声に答えている。

列を成し、彼に集まるのは無数の記者。彼は優勝候補であり、注目を集めるとある要素を持っていた。

「今回、ヴォラスカーニバル史上、最年少の十二歳での参加となるわけですが……緊張とかはしませんか？」

「年齢なんて関係ないよ。それに緊張だってしないさ。だって、大

人に囲まれながら競い合うのは昔から同じだからね」

少年はふふんと鼻で笑った。

「流石はヴォラス一の魔導学校、『コルドゥーン魔導学院』に歴代最年少の十歳で、主席で入学した天才少年！余裕じゃないですか！」

「……その天才少年っていうの、やめてくれないかな？それだと『少年にしては』、みたいに言われているようで嫌なんだけど」

「は、これは失礼しました……」

「大人や子供なんて関係ない。出来る奴は出来るのさ。だから別に最年少とかそういう事を注目して欲しくないんだ」

白い学士の制服を着た少年は、不服そうに記者を睨んだ。その背後には、同じ学士の服を着た大人びた青年達。年の差が一回りも二回りもありそうな見た目の差が、その少年の特異性を引き立てている。

「そう。そんなステータスは見ないで欲しい。ボク、ナスルという一人の魔導士を見て欲しいんだ」

「成程……流石です！では、ナスルさん。今回のヴォラスカーニバル、歴代でも最大の規模となりそうですが、ナスルさんの中でライバルと言える相手はいらっしゃるのでしょうか！？」

ナスルはくくくと笑う。そして呆れたようにつぶやいた。

「評判や括りで人を見たくないんでね。でも強いて言うなら……ライバルは自分自身、かな？ボクは魔導士としての高みを目指す為にカーニバルの参加を決めた。勝敗になんか興味はないね」

「おお！流石は……」

得意げに語る天才魔導士ナスルに、記者が再びにこやかに賞賛の言葉を贈ろうとしたとき、その声が割り込んだ。
それはナスルに群がる野次馬の、ひとりの発した声だった。

「おい！聞いたか！セルセラコミュニティ所属の十歳の女の子が、カーニバルに参加するって申請があったらしいぞ！」
「あのセルセラコミュニティの！？十歳！？なんていう子だそれ！？」
「よく分からないんだが……何やらあのオラクル事件の解決に関わってるとか……」
「そりゃ凄い！しかも十歳って……今大会最年少じゃないか！どこにいる！」
「いや、まだ参加申請があっただけでヤドハクには……」

騒めく野次馬。ナスルにインタビューをしていた記者も、明らかに其方に気を取られていた。

ナスルの眉間にしわが寄る。

「……へぇ。最年少の女の子、ねぇ。しかもセルセラコミュニティ……あんまり調子に乗らない方がいいと思うけどなぁ」

天才少年の中に、最年少参加者の女の子とやらが刻み込まれる。
その黒いオーラを滾らせる少年を見て、彼とチームを組む仲間は、はぁと溜め息をついた。

「ナスル君。程々に、ね？」
「……ああ。二度とチヤホヤされない程度にするだけだよ」

ナスルは不敵に笑んで、背後の仲間を見上げた。どす黒い腹の底

を煮え滾らせながら。

「セルセラコミュニティ……またあいつかっ！」

その野次馬の傍で、一人の女が声をあげる。

「ジアミエン……目立ちたがり屋のスカポンタンが！あいつに今まで、どれだけ見せ場を取られたことか……！オラクルの件でも先を越されるし、ノトスの騒動でも手柄を全部持ってかれるし……！うがー！今度の注目まで奪われるなんて！」

白銀の鎧に身を包み、赤いショートヘアーを揺らす女は、体よりも大きな大剣をぶんぶん振り回しながら喚き散らす。周囲が軽い騒ぎになる程度の危なさである。

「しっかーし！今回ばかりはそうはいかないっ！ヴォラスカーニバルの主役は、このレンダ様率いる『レンダサークル』なんだからねっ！うがー！覚悟しろ、セルセラコミュニティっ！！」

「レンダって……あの『女勇者』か！？」

「その通り！セルセラコミュニティ永遠のライヴァル！レンダサークル！今回の優勝は、このレンダ様のものとなるんだからっ！そして私達の知名度はセルセラコミュニティをも超えるっ！」

女勇者レンダは大剣を地面に突き立て、集まった視線に酔いしれるようにポーズを決める。その後ろで、じっとりとした目を逸らす

三人組。「この人と関わりたくない」というオーラが漲っている。
面倒くさそうな変人にしか見えない彼女。しかしこれでも一応優勝候補。世界に名だたる戦士である。
人助けをしながら世界を廻る、セルセラコミュニティに良く似た女勇者レンダのパーティ、レンダサークル。その名を知らない者はセルセラコミュニティの次くらいに少ない。

「何が高み、何が知名度……そんなものはなんの役にも立たないっての」

巨大な棺桶を背に背負った猫背の男がぼそりと呟く。

「世の中、コレだよ」
「ですよねボス」

男は指で円をつくる。その傍らに立つ眼鏡の男がにやりと笑って頷いた。

「ヴォラスカーニバルは金になる。うちの商品を試すいい機会なのさ。ついでに優勝賞金は、我ら『ムディ商会』が戴いてくよ。馬鹿共にゃあ勿体ないからねぇ」
「全くです。優勝候補と言っても、何処かふざけた馬鹿ばかりじゃないですか。ちょろいですね」
「いや……二組ばっかし、厄介そうなのは居るけどね」

棺桶を背負う男はちらりとその視線を離れた場所に佇む男女と、

更に別の場所に立つ背の低い老人に向ける。世界有数の巨大商会、ムディ商会のボス。彼の鍛え抜いた鑑識眼が、その危険性を見抜く。

しかし、それでも彼は余裕の笑みを浮かべる。

「ちょうどいい……実験台だよ」

「フフ……どいつもこいつも愉快な奴らだね、イロイダ」

「ほんとねイロアス。どれほどの人が集まるか不安だったけれど……イロアス程の英傑はいないみたいね」

「君ほど美しい女性も居ないようだ、イロイダ」

「やだわイロアス」

イチャイチャと絡み合い、別の意味で視線を集める二人の男女。お姫様のようなドレスに身を包む女イロイダと、金色の鎧を身に付けた派手な男イロアス。二人はじっとりと視線を交わらせながら口元を緩める。

「……イロイダ。このカーニバルに優勝したら、結婚しよう」

「嬉しいわイロアス……！ええ、絶対に優勝しましょう……！」

二人は熱く唇を交じ合わせる。それを見て、彼ら二人とチームを組む二人のメンバーは、もの凄く気まずそうに目をそらした。

「……くけけ。どいつもこいつも、人間やめてる奴ばっかりだネ」

小さな老人は、その姿に似合わない高い声でケラケラと笑った。

「でも、所詮は人間。限界なんて浅いもんなのサ」

ぎょろりとその目を動かした老人の口からでろりと長い舌が垂れる。見るからに人間ではない老人、その正体に気付いている者は居ない。老人は舌を引っ込めると、にんまりと不気味な笑みを浮かべて、すたすたと人混みに紛れながら広場を離れていく。

「くけけ。もうスグ。もうスグで、無念を晴らせるゾ。待っていロ。待っていロ」

老人の口から溢れる怨嗟の言葉。それは誰にも気付かれる事なく、かき消されていく。

ヴォラスカーニバル。何の因果か、天使達の集う今大会に集まる参加者は歴代最大数。ヴォラスに限らず、各国から有力な戦士達が集う。

様々な思惑の元、ヤドハクに集う強敵は曲者ばかり。

一筋縄ではいかない相手が待ち受ける。それも知らずに天使達もまた、ヤドハクに集う。

Ｅｐ３７：　ヤドハクに集う……？（後書き）

天使達がヤドハクに集う。そして依頼主と対面した天使達は……？
ヴォラスカーニバルを前にして、一同に待ち受けるものとは？

今回は完全に繋ぎ回。本筋とは違った部分であります。なんだか一杯名前が出てきましたが、あまり覚える必要はないかもしれません（ヒント：かませｒｙ）
ヴォラスカーニバル参加者登場。曲者というか変人というか、ややこしい人ばかりでございます。
次回からは本筋の話。ストーリーも進みます。

Ｅｐ３８：　男は裸で語り合う（前書き）

今回は兄貴組のお話

EP38：　男は裸で語り合う

ヤドハクまで馬車で約半日。それも勿論、休みなしで移動を続けた場合で、流石に途中に休憩も挟む。しかしまだ休憩予定地である街、キポスまでは距離があった。

暫くの重苦しい空気は、今は静かに落ち着いている。殴り合いの喧嘩（正確には一方的な暴行）に疲れたのか、それとも馬車に揺られて眠気を誘われたのか、ハランと薄葉は眠りに落ちていた。

「……まるで餓鬼だな」

「あはは、ですね」

今も覚醒している救世は、両脇の疲れる二人を交互に目線だけを動かして眺めると、目の前のグラサン男に向けて苦笑して見せた。

「お前は眠らないのか？聞けばかなりの長旅らしいな。疲れているだろう？」

「いえ。私は……」

救世は苦笑する。その様子を見て、グラサンの男はふむと頷いた。

「……眠れないのか？」

「……何の事です？」

「誤魔化すな。俺とて少なからず戦場を渡り歩いた身だ」

「私は別に戦場は渡り歩いてませんが……というよりも、あなたは一体？」

「眠れないんだろう？」
「……あはは」

救世は誤魔化すように再び笑ったが、グラサン男の真っ直ぐな視線に負けたように、少し表情を強ばらせた後、ふぅと溜め息をついた。

「あなたはダディさんで宜しかったでしょうか？」
「人は俺をそう呼ぶ」
「……ダディさんがどうという訳ではないのですが、私、人前だと眠れないんですよ」

救世は少し疲れたように首を傾け微笑む。

「ちょっと眠るのも恐ろしい時期がありまして。……加えて、ちょこっと男性の前で眠る事に抵抗があるんです」
「……ほう」
「はい。中学校時代と……この世界に来てから、ちょっとしたトラウマがありまして……」
「大体察しはついた。無理に話さなくてもいい」

ダディのぴしゃりと話を打ち切る言葉に、救世はきょとんとしつつも、息を深く吐き気を鎮めた。

「疲れないのか？」
「はい。これでも治癒術士ですので。ご飯を食べたり何もしないでいれば十分です」
「睡眠不足は肌の敵だぞ」
「いや、そんな女の子を扱うみたいに……」

じとっと目を細める救世に、ダディは不思議そうに言う。

「違うのか？」

「だから私は男ですって」

「……嘘をつけ。お嬢より……いや、今まで見た女でも一番いい女なのだが」

「いや、女じゃないですって。……まぁ、お褒めの言葉として、有難く受け取りはしますよ」

救世は自身の容姿があまり好ましくは思っていないし、女扱いされるのも願い下げだと思っている。しかし長年の慣れか、時に綺麗だ可愛いだなどと言われると嬉しくなってしまう事があり……その度に胸中で冷めざめと涙する乙女……でなく男、救世。一瞬ぽっと頬を染めつつ、何やってんだかと口許を引き攣らせながら目を逸らす。

「……安らかに眠れ」

「……い、いきなり何ですか。し、死ねと？」

「いや、遠慮せずに眠れと言っている」

突然のダディの言葉に逸らした視線を元に戻し、びくりと肩を弾ませる救世。そもそも、目の前の大男は相当に恐ろしい印象を与えるので、救世はあまり得意ではない。まるでヤクザのようだ、それが第一印象だった。

「眠れ、と言われましても……」

「大丈夫だ」

ダディは何時の間にやら銜えていたタバコを蒸す。

「時に稼ぎ、時に護り、時に癒す。女に平穏を与えるのが……男だ。俺はお前に何もしない。俺はお前に何もさせない。安心して眠れ」
「いや、だから私は男……」
「眠れ」

ダディの頑なな言葉に、最初は微妙な表情を浮かべた救世だったが、意外なまでに強情その裏に真剣みが含まれている事を感じ取り、やがて諦めたように息を零す。

「……じゃあ、お言葉に甘えさせて頂きます。でも、私は男です」

救世は最後にもう一度だけ注意を添えると、目を閉じる。勿論それで眠れる訳ではなかったが、言われた通りに眠る振りをした。

「絶対に起きるな」

最後に釘を刺すように、ダディは言葉を締め括る。そして、馬車の前方、ダディの後方の辺りをこんこんと拳で叩いた。

それは馬車を止める合図。静かに動きを止めた馬車から、音を立てずに抜け出したダディの気配を、救世は目を閉じながら見送った。

何か、あったのでしょうか？

そう思いつつも、救世は目を閉じ眠る振りを続ける。

ダディは首をこきりと鳴らし、銜えたタバコを口から離し、その掌で握りつぶす。火が消えるどころかまるで塵となったかのように消えてなくなったタバコ。少し黒い塵のついた手をパンパンと払い、ダディは静かに呟いた。

「さて。出てきたらどうだ？」

「……まさか、この『隠れ蓑』を使っていてもバレるとは。流石は『ゴッドファーザー』。かつて天使と呼ばれた男」

ダディと対峙するのは、黒い衣に身をすっぽりと覆い隠した三人の男。その中央に立つ男は衣をばさりと脱ぎ捨て、その手に握るレイピアをダディに向けた。

「悪いですが、貴方をカーニバルに出させる訳にはいきません。此処で、消えてもらえますか？」

「断る」

レイピアを構える男が、ダディの返事に答えるように、直ぐ様その身をひらりと動かす。一直線にダディに駆け寄り、素早い突きを繰り出した。

それに合わせて、左右の二人が散り散りになる。左右に別れた二人は、挟み込むように馬車へと襲いかかる！

目の前の男に対応せんと動いたダディは、一瞬その左右に移動した男に視線を移した。

「余所見は禁物！」

男のレイピアの突きが、意識を逸らしたダディの胸を刺す。

「はは！やった！討ち取っ……」

「蚊にでも刺されたか」

勝利を確信した男は、途端に表情を崩壊させる。ぐんと前に体を押し出すダディの胸は、レイピアを楽々とへし折った。

「邪魔だ」

「ひぃっ！？」

がしりとその巨大な手でダディは目の前の男の頭を鷲掴みにする。そして、そのまま、その体を持ち上げて、振り向きざまに馬車へと向かう男目掛けて、男を砲弾のように投げ飛ばす！

「なっ！？ぐはっ！」

放り投げられた男が、馬車に向かう男と激突し、巻き込まれるように二人一緒にゴロゴロと転がる。そしてその時、ダディは既に馬車に迫るもう一人の前方まで駆けていた。

「は、速い！？」

「俺が怖いから、俺の仲間を潰そうってか？……いい性格してるな、全く」

岩石のような拳の一撃が、男の黒い衣の上から悲鳴を上げる間もなくその顔を潰す。剣と魔法の世界にありながら、拳一つで剣と魔法を繰る敵を無力化したダディは、ぴたりと足を止め、馬の手綱を握る男の「うわああ」という悲鳴に反応する。

そして、馬車から少し距離を置いた自分の判断を後悔した。

「ちっ……やはり正面から向かってくる様な男じゃあなかったか」

ゴウ、とその巨体が一瞬で加速する。そして、馬車方面まで戻り、四方から降り注ぐ炎の雨と対峙する。

「対処しきれっか？」

ダディが言いながら拳をぐっと握る。

……最悪、身を挺して守ればいい。

軽くそんな判断を下し、構えるダディに思わぬ助け舟が飛び出した。

ガゴン！

馬車の扉を蹴り開けて、一人の男が殺意満ち溢れる戦場に躍り出る。男は足をぶおんと振り回しながら、空へと舞った。

迫り来る炎の雨、それら全てを薙ぎ払うかのように上空で振り回された足が巻き起こす暴風が、炎の雨をかき消した。馬車に迫る驚異を打ち消したのは、眠っていた筈の地味な男。その思わぬ助けに、ダディはにっと唇の端を釣り上げて笑みを浮かべる。

「やるじゃねぇか。どうやらお守りの必要な餓鬼だと思ってたのは間違いらしい」

ダディは地面をその黒い革靴でズドン！と蹴り砕く。跳ね上がる大地の欠片。それを地面を砕いた足とは逆の空いた足で、そして、その両腕で、強烈な打撃をもって思い切り打ち抜く。放たれた大地の弾丸は、ヒュッと空気を裂く音を立てて、馬車の周囲の戦場から姿を消した。

それは音も立てずに、隠れて馬車を狙い打った魔導士達を正確に撃ち抜いた。

その証拠に、馬車に向けられた殺意が消え失せて、馬車の屋根に立つ『眠る』男はすっと馬車の上に胡座をかいて、こくりと首を前に傾けた。

「……あ？寝たのか？……いや、寝ながらアレに対応したってのか？」

ダディは馬車の屋根に座る、天使と呼ばれる若い男に、にやりとその笑みを浮かべた。

「面白え……気に入ったぜ」

ズンと地面を沈ませ、その巨体に似合わぬふわりとした着地で馬

車の上に飛び乗ったダディはその男の体を抱え上げる。そして、ふわりと屋根から飛び降り、ダディは何事もなかったかのように、馬車に乗り込む。

そして、静かに眠る男を座らせ、再び元の位置に座ると、こんこんと馬車の壁を叩いた。

「……こりゃ、随分と祭りでも楽が出来そうだ。お嬢の我侭が、まさか『当たり』を引くとはな」

男は笑う。そして心中で詫びる。目の前の天使の実力を見誤っていた事を。

さらりと汗一つ流さず一仕事を終えた男を載せた馬車は、再び何事もなかったかのように進み出す。

一一一一

それから暫く何事も無く、馬車は中継地点キポスに到着した。

ようやく目を覚ました二人の男が揃ってううんとあくびしながら

背筋を伸ばす。間に挟まれた美少女（男）も、閉じていた目をゆっくり開いた。

「一先ず休憩だ。全員降りろ」

ダディに促され、三人は馬車からぞろぞろと降りた。未だに眠そうなハランと薄葉、そしてぱっちり目を見開いた救世。三人を一列に並べて、ダディは吸っていたタバコを握り潰しながら、宣言する。

「まともな自己紹介はまだだったな。これから共にヴォラスカーニバルで暴れる仲にも関わらず、だ。俺達は言わば運命共同体。もっと互いの事を理解する必要がある」

「急にどうしたんですか？」

「男は何時でも気紛れな獣なんだよ。いちいち理由を求めるな」

ダディにぴしゃりと言い放たれ、救世は直ぐに押し黙った。救世には一応、曖昧ながら理由……という程ではないが、その元となった出来事は分かっていた。

馬車の襲撃。ダディが一人で片付けようとしたあの出来事。敵意に反応した薄葉が、寝ながら飛び出していったあの一件。

この急な距離を縮めるような態度は、恐らくは薄葉の実力を目の当たりにしたからだと、救世は考える。

つまり、此処がスタートライン。今まではダディという男は、依頼主の意思に従って、三人に付き合っていただけなのだろう。そして、こっそりと覗いたその実力。三人を近距離で、隠れた三人の魔導士を全て討ち取ったその能力から察するに、恐らくは一人でもこのヴォラスカーニバルを勝ち残るつもりだったのだろう。

しかし、組まされた相手が思わぬ戦力だったと分かり、その背中を預けるつもりにでもなったのだろうか？勿論、薄葉限定だろうが。

……大体当たっている救世のその推測。少し違う点は、認められつつあるのが薄葉に限った話ではないこと。

馬車の一件で、既にダディは三人の天使の能力を見定めていた。

ダディはすっとサングラスを外す。サングラスに隠されていた小さな傷の刻まれた左目が姿を表す。その双眼は鋭く細く、黒い瞳は僅かしか覗かない。男の厳つさを演出する黒い髭とオールバックに固めた黒髪、そして黒いスーツに黒い革靴、どう見ても危ない人なその男は、サングラスを胸ポケットに刺し、静かに口を開いた。

「俺の本名は伊達巌（ダテイワオ）。又の名を、ダディファーザー……ダディと呼べ」

「ダディファーザーって……何だよそれ……父が二つ被ってんじゃねぇか。ダディもファーザーも父じゃねぇか」

「薄葉さん……！……突っ込んじゃいけません！」

薄葉の突っ込みを、救世が袖を引っ張りながら制止する。ダディは少し顔を赤くしている。英語がマジで苦手だったようだ。

「……人は俺を、『ゴッドファーザー』と呼ぶ」

ダディは誤魔化すように呟いた。サングラスを掛けなおしている。相当に響いたようだ。その反応を見た薄葉とハランは、見た目のおっかないこのおっさんに対して、少しだけ余裕ができたようだった。もっと言うとちょっと舐め始めた。

このおっさん、結構アホなんじゃなかろうか？

まぁ大体あってる。

ダディはがっと地面を踏み鳴らし、にやりと笑う。

「貴様らの事を此処で深く知りたい！そこで、暫く此処に滞在し、意気投合の為の親睦会を行う！」

「依頼主さんの所に早く行かなくていいんですか？それにヴォラスカーニバルの参加申請、急がなくても大丈夫なんですか？」

「構わん。どうせヴォラスカーニバルはまだまだ先だ。それに申請はもうとっくに済んでる。あと、うちのお嬢は堪え性のない人間じゃあない。こっちの事情位察するだろう……いや、案外カンカンかもしれないが気にするな」

「それは本当にいいんですか……？」

じと目で睨む救世に対し、ふんと鼻で笑って見せると、とっとと背を向けるダディ。聞く耳はないようだ。

「俺が奢ってやるってんだ。有り難く付き合え」

ダディに誘われ三人は後に続く。どうせ断る事もできないのだろうと、仕方なく。

「何を奢ってくれるんですか？」

「ふっ……キポスは有数の温泉街。貴様らにはキポス一の風呂を奢ってやろう。コーヒー牛乳も付けてな……！」

「ふ、風呂……？そ、そんなどや顔で言われても……」

「何でいきなり知らんおっさんと風呂に入らにゃいかんのだ……」

「ふっ……絆を深めるには、服など脱ぎ捨て、裸の付き合いをする

に限る。それが、男だ」

ダディの得意気な表情に、多少呆れ顔の薄葉とハラン。しかし、別に温泉が嫌いという訳でもなく、温泉街一の温泉を案内してくれるというのだから、断る余裕もなければ、断る理由もなかった。

「……というか、こっちの世界でもコーヒー牛乳とかあるのか。懐かしいなぁ」

「フン！コーヒー牛乳など軟弱者！男は牛乳一択だ！そんな軟弱者にミュゲはやれんなぁ！」

「まだ引っ張るか！」

「ほう……貴様が男を語るか？面白い……！ならば、熱湯我慢比べと行こうじゃないか……！」

「フン……面白い……！望むところだ……！この中で誰が一番なのか、思い知らせてやるッ！」

「子供かあんたら！」

わいわいと、何だかんだで仲良さげなダディと薄葉とハラン。その様子を遠巻きに見て、笑顔のまま凍りつく乙女……でなく男が一人。

「あれ？救世さん、立ち止まってどうしたんですか？」

「あはは……私はパスです」

「一人でも女風呂に入ってくればいいだろう？何故だ？」

「いや、救世さん男だから」

「はは、冗談はよせ！こんな男が居るわけないだろう！お前のような嘘つきに、ミュゲは渡せんなぁ！」

「しつこいな！救世さんも何とか言ってくださいよ！」

「……私はパスです！」

救世は方向転換して走り出す！

「何故逃げる！？」

「私はパスですッ！」

「ちょ……待ってくださいって！」

その後を追って走る薄葉、ハラン、そしてダディ。脇目も振らずに駆ける救世は、付術を使っての全力疾走である。

「待てと言ってる！何故逃げる！」

「来ないでください！」

救世が何故逃げるのか、それを理解できないままに薄葉は一心不乱に駆ける。そして意外な自分の足の速さに改めてびっくりする。救世の相当のスピードについて行き、ハランを置いてきぼりである。そんな感じで自分の意外な能力に驚きつつ、薄葉は次第に冷静になってくる。

何で俺、救世さん追いかけてるんだ……？

「待て！」

「いやぁ！」

……そして、薄葉は気付いた。

逃げる美少女（男）。追うどう見ても堅気じゃない怪しい男＋自分。

悲鳴を上げる美少女（声が可愛い）。待てと叫ぶ怪しい男（太い声）。

薄葉の血の気が引いた。

「……ダディさん！これ、絵面的にヤバいっす！誤解されるッ！」

「何がだ？」

「畜生、鈍いなこの人！」

薄葉がもう、ここは離れて知らんぷりすべきかと思い始めたその時、誤解はやっぱり炸裂した。

「待つのはあんたよこの人売りッ！」

逃げる救世と追うダディ、その間に颯爽と立ちはだかったのは、一人の赤髪の女。短い赤髪と鋭い眼が、その気の強さを顕しているようなその女は、眩しい輝き放つ白銀の鎧を着こなしている。そして、何よりも特徴的なのはその右手で引き摺る大剣。その太さ、長さ、全てにおいて握る女のサイズを大幅に上回る異常な大きさだ。

それをぶおんと軽々と持ち上げ、ダディと薄葉に突きつけるその様が、その強靭な腕力を容易に理解させた。

女はぎらりと赤い瞳を輝かせて、にたりと不敵な笑みを浮かべる。

「ヤドハクからトレーニングのランニングがてら、キポス名物の温泉で一っ風呂浴びてこうかと思っていたこの女勇者、レンダ様の前で！最強のチーム、レンダサークルのレンダ様の前で！悪さしようたぁいい度胸じゃないのこの性悪ッ！」

「何かまた面倒くさそうなのに絡まれた……！」

「女勇者？レンダ？聞かねぇ名だな……しかし、首都ヤドハクからランニングで此処まで来た？馬鹿も休み休み言え。馬車でも相当掛かるぞ？」

「ムキーーーッ！馬鹿ですってぇ！？許せないッ！！」
「……やっぱり馬鹿っぽいな」

喚く『女勇者』、レンダを見て、ダディが呆れた様子でコキコキと首を鳴らす。

「いや、ダディさん！喧嘩腰やめて下さいって！事情を話せば分かってもらえるでしょ！」
「多分話の通じないタイプの馬鹿だこいつは。ったく、やっぱり語るなら拳が一番ってか？」
「いや、一応話してみましょって！」
「あれ？あんたその黒髪……」

レンダが薄葉にふと気付く。そして、にたりと今度は意地の悪い笑みを浮かべる。

「さてはヴォラスカーニバルに出る黒髪の天使ッ！そして、にっくきセルセラコミュニティのッ！ジアミエンの手先ッ！！此処で会ったが百年目ェッ！！このレンダ様の力、思い知らせてくれるッ！！うがー！」

赤い髪、赤い瞳、さらには顔まで真っ赤にして、片手に握る大剣をぶんぶんと振り回す怪力女。明らかに薄葉に対して敵意剥き出しである。しかし、余程やんちゃな敵意なのか、薄葉も反応せずにじっとりとした目で見ている。

「ほらな」
「……そっすね」
「う、うわあああ！レ、レンダだぁぁぁ！レンダが暴れる気満々だぁぁぁ！」

「や、やべぇ！逃げろ！あの馬鹿力女に暴れられたら、周囲一帯崩壊するぞ！！」

呆れ顔で突然出てきたもいいところの真っ赤な女を見やる薄葉とダディ。そして、騒ぎ始める周囲の人間。こんな滅茶苦茶なやつだ。恐らくは普段から迷惑な奴なのだろう、と薄葉は考える。

大体あってた。

「私は馬鹿じゃないってのッ！！私は……インテリアのデリートだッ！！」

「……言いたいのはインテリのエリートか？」

「だいたいそんな感じッ！！」

レンダは巨大な剣を片手で振りかざし、そのまま信じられないスピードで駆け出す！

「は、速ッ！」

「ほう……あながち、ヤドハクから走ってきたのは嘘じゃねぇのかもな。化け物か、こいつ」

驚きつつも、その化け物じみた暴走機関車を前にして、薄葉とダディは思いの外の余裕を見せていた。

「お前、名前は？」

「薄葉でいいっす」

「薄葉。ちょいと力、見せてみな。俺も見せてやる」

「……はぁ、やんなきゃ駄目っすかねぇ。……了解」

にやりと笑うダディに、溜め息混じりに構える薄葉。

「覚悟ッ！！」

ブオンと激しく空気を揺さぶり、巨大剣が凄まじい速度で降り下ろされる！

ガッ！！

「んなッ！？」

「……おいおい。付術抜きでどんな馬鹿力だよお前……悪いな、見縊ってた」

ダディはその両腕で、レンダの巨大剣を受け止める！顔を覆うように、その切れ味十分に見える巨大剣の刃をその二本の太腕が見事に受け止める。スーツにわずかに切れ込みが入るが、その腕には傷一つ残らない。

レンダは一瞬驚愕に目を見開いたが、すぐににやっと笑って大剣を思い切り後ろに振り上げ、その反動で後退する。

「今のはただの小手調べなんだからねッ！！」

レンダは顔を真っ赤にしながら、今度は大剣を横薙ぎ気味に振り払う！回避困難な広範囲攻撃を、次は薄葉が迎え撃つ。

「あっぶね！」

レンダの振り抜く剣が、周囲の家屋を粉砕しながら迫る。それを薄葉は慌てるような素振りで、すっと手で払った。

ふわり。

するとその手のひと振りで巨大剣の軌道が、楽々と逸らされてしまう。レンダは軌道の変わった巨大剣の重量に振り回されるように、ぐりんと回る。

「あわわわわわわ！」

ぐるぐると巨大剣に振り回されるように回転するレンダ。その勢いに任せて滅茶苦茶に周囲の地面や家屋を粉砕しながらコマのように暴れ回る。

「「いい加減に……」」

薄葉とダディィが地面を蹴る。それは加速。回転する巨大な刃、それを掻い潜るようにレンダの懐に飛び込んだ二人は、息を揃えてその手のひらをレンダの顔に当てる。

「「しろッ！！」」

ズドン！

「むぎゅっ！？」

顔面を張り倒されて、ずだんと地面に沈むレンダ。その手から巨大剣がふわりと離れ、ぐるぐる回転しながら宙に舞い上がる。そして、ぐるぐると落ちてきて、ズドンと激しい音を立てて地面に突き刺さった。

ぐるぐる目を回してダウンするレンダ。

その様子を溜め息混じりに確認して、薄葉とダディはハイタッチを交わした。

「凄いなダディさん。あれを腕で止められるのか」
「お前もやるじゃねぇか。剣の軌道を流す技、並の技術じゃねぇだろ？」

にやりと笑うダディに、薄葉は似せた笑みを返す。

「……やっぱり男は拳で語れってな。お前の事が大分見えたぜ」
「俺、そんな柄じゃないんだけどなぁ……でも、あんたの凄さは分かったよ」
「本番でも宜しく頼むぜ相棒」
「此方こそ」

ぐっと握手を交わす男二人。その様子をおどおどとした様子で見ていた影に、ダディは振り向きにやりと笑う。

「……そこで何してる？」

声を掛けられた救世はうぅ、と情けない声を漏らして、とぼとぼと歩み寄る。

「……ごめんなさい。私のせいで余計な誤解を招いて面倒事を……」
「謝らなくてもいい。だが、何で逃げたかの事情くらいは話してもいいんじゃねぇか？」

ダディの言葉に救世はうるると瞳を潤ませ、目を伏せる。まるで少女である。

「私、誰かとお風呂とか目の前で寝るとか本当に駄目なんです。中学時代の修学旅行、それに言いたくもないトラウマが……」
「トラウマ……？」
「……言えません。ただ言える事は、私の修学旅行は隔離状態にあったということで」
「……何となくご察しします」

救世の肌は陶器のように透き通った白。顔や、僅かに覗く細腕のきめ細やかな肌を見るだけで、もしもそれが救世の中学時代も健在だったならば、男子中学生には刺激が強すぎるであろうことは薄葉にも容易に想像できた。そして、その美少女顔である。男子風呂に入ってきたり、男子と同じ部屋で過ごしていたりしたら絶対にまずい。

「ま、まじまじと見るのは……や、やめてください」
「い、いやそういう訳じゃないです！誤解だ！」
「ふん、まぁいいじゃねぇか」
「よくないっすよ！」
「いや、そうじゃねぇ」

ダディはふっと笑って、胸ポケットのサングラスを掛けなおした。

「今まで知らなかった仲間の一面を知れただろ？それが男の、裸の

付き合いってもんだ」
「……まさか、狙ってました？」
「さぁな？」

むすっと膨れる救世に睨まれ、ダディは何処からか取り出したタバコを蒸す。

「……さて、と。軽く喧嘩したら風呂を浴びる気分でもなくなっちまった。この馬鹿力女が目覚めても面倒だ。とっとと発つか」
「本当に何で此処に留ったのか分かりませんね……」
「そりゃあなぁ。お嬢が待ってるしよ」
「……最初から長々と滞在するつもりはなかったんですか」
「ま、軽く狭い馬車で縮こまった体を解せたしな。十分だろうよ。お前らも走ってすかっとしたろ？本当なら汗でも流したいが……女の嫌がる事をするのも、女を待たせるってのもな？男が廃るだろ？」
「だから私は男ですって！」

ムキになる救世に、「悪い悪い」と適当な返事を返してからかいつつ、ダディが元来た道を戻っていく。

「変わった人ですね」
「……私、ちょっと苦手です」

苦笑する薄葉に、珍しく取り乱し気味の救世。そんな二人はダディの後に続く。

「ま、互いに少しは打ち解けたって事で。次からは馬車の中でも腹を割って話そうや。もうギスギスした空気はなしだぜ？」

背中を向けたままダディは手をひらひらと振る。

「……変わった人ですね」
「やっぱり……苦手です」

薄葉と救世は相変わらずの表情を浮かべる。包み隠さず、その心情を顔に浮かべる。

何時の間にやら気まずい空気は消え去って、目の前の堅気には見えない男の背中は、少しだけ違って見えていた。

前方から息を切らしながら走ってくるハランを見やり、ダディはにやりと横顔を見せて笑う。

男四人の馬車の旅、風向き変わって道も変わる。

Ｅｐ３８：　男は裸で語り合う（後書き）

少し打ち解けつつ、兄達はヴォラスカーニバルへと向かう。一方、その頃妹達は……？

今回はダディさんの馴染み回。一応、チームを組むことになる人なので、メンバーに打ち解ける事は必要なのです。
ヴォラスカーニバルのバトルはまだまだお預け……ごめんなさい！
次回もまだです。番外編的のんびり（？）風景を少々の間ご覧ください……
ちなみに、ダディを狙った一味については後々……

Ｅｐ３９：　母は強くてお掃除上手（前書き）

妹組のお話です。カーニバル本戦はまだ……

EP39：　母は強くてお掃除上手

お茶の街プラティア。明華、済、ミュゲ、そしてヨシエの四人を乗せた馬車が休憩ととある用事がてらに留まったその街で、四人の妹達は小洒落たカフェテラスでお茶を楽しんでいた。馬車旅も非常に静かで順調、荒れた旅を繰り広げる兄達と比べ、此方は何も問題は起こっていなかった。

「え!?ヨシエさん、四十五!?み、見えませんよとても!」
「ちょっと明華ちゃん、大きい声で言ったら恥ずかしいわ」
「あ、ごめんなさい……でも、見えないです!お若いですね!」
「あらあら、嬉しいわぁ」

四十五歳、伊達淑恵（ダテヨシエ）。エプロン姿のよく似合う、おさげ髪のその女性は、明華の言うとおりとても四十台を思わせない容姿をしていた。カフェテラスでお茶を楽しみ男客が思わずお茶を吹き出す位に驚く程に。

しわ一つない滑らかな肌、ツヤのある黒髪、エプロンの下に隠れるすらっとした体型、全ては若々しい大人のお姉さん、といった印象しか与えない。

明華も済も、お世辞抜きで賞賛し驚きを示した。

「しかし驚いたな……私の親と同い年位だぞ?」
「へぇ、そうなの。じゃあ、私はあなたたちのお母さんみたいねぇ」
「お母さん?」

ミュゲが小首を傾げる。ミュゲの事情を既に聞いている明華と済

は少し気まずそうに顔色を変えた。

ミュゲがこの世界に呼び出されたのは本当に幼い赤子の頃。親と言える人間との思い出など殆ど残っていない。確かにミュゲは物覚えはいい方だが、さすがに赤子の頃の事まで覚えていない。兄であるハランの事を覚えていた事が、本来驚くべき事で、ある意味では奇跡的とも言える事なのだ。

つまり、ミュゲには親というものとの関わりが殆どない。だからこそ、ハランはミュゲに親と会わせてやりたいと、旅の同行を申し出たのだ。

お母さん、その言葉に疑問を示すミュゲ、そしてそれに心苦しいものを感じる二人の表情を見て、ヨシエは何かに気付いたように、口元を軽く緩めて近くに座るミュゲの頭をそっと撫でた。

「じゃあ、私がお母さんしましょっか！」
「なぁにそれ？」
「ミュゲちゃんの家族よー！明華ちゃんと済ちゃんはミュゲちゃんのお姉ちゃん！そして、三人は私の娘！いいわねぇ、こんな可愛い娘が欲しかったのよ♪」
「ムスメ！ムスメは何をするの？」
「娘はお母さんのケーキをもらえます！」
「やったー！」

ヨシエのケーキを貰って喜ぶミュゲを見て、明華と済はほっと息をはく。そんな二人にウィンクして見せたヨシエに、二人は笑顔をお返しした。

「よし、ミュゲ。私の事はイツキお姉ちゃんと呼んでいいぞ！」
「イツキお姉ちゃん！」

「私も明華お姉ちゃんって呼んでね！」
「明華お姉ちゃん！」
「私の事はヨシエお姉ちゃんって呼んでね！」
「ヨシエおばちゃん！」
「やっぱりヨシエお母さんでいいです」

子供は時に残酷である。

「ああ、でもいいわねぇ。こんな可愛い娘が居たら」
「ヨシエさんは子供は居ないのか？」
「ええ。いい相手が居ないのよねぇ」
「まだ結婚してないのか？」
「……行き遅れみたいに言うのはやめましょうね？済お姉ちゃん？」
「そ、そういう意味じゃなくて！ヨシエさん、綺麗なのに結婚できないのか？」
「……もう、結婚の話はやめましょう」
「ご、ごめんなさい……」
「謝らないで……」

済は結構残酷である。

そんな感じの冗談のような話（結婚の話の時はヨシエの目は本気に見えたが多分気のせい）をしながら、お茶を楽しむ美女四人。黒髪が珍しい事もあるが、中々の高レベルの美人揃い。当然のように周りの視線が集まっている。

ストレートの紅茶を啜り、ヨシエはほっと息をはく。

「それにしても御免なさいね？うちの坊っちゃんの我儘に付き合わせちゃう事になって……」

「いえ、そんな」
「でも、大丈夫よ。私が可愛い娘には、怪我一つさせないからね？」
くすりと笑ってヨシエがカップを置く。その笑みに、明華も済も、ぞわりと恐ろしいものを感じた。悪い感覚ではない。ただ単に、『強い』、そんな印象を感じさせる『強者の笑み』。普通の奥様、そんな印象のヨシエが、やはり只者ではないことを二人は改めて認識して、ごくりと息を呑む。

明華は、其処で思い出したように、話を切り出した。和やかな空気の中、おそらくはヨシエもその話をしようとして、空気を僅かに作り替えたのだろう。

「ヨシエさんは……元天使なんですよね？」
「ええ」
「元天使というのは……そもそも何なんですか？」
「……やっぱり知らないみたいねぇ。簡単に言うと、『役目を終えた天使』、ってところかしら？」

役目を終えた天使、その言葉には天使の伝承の最も深い部分にある何かが含まれているような……そんな印象を感じ取りながら、明華と済は耳を傾ける。

「天使としてこの世界に喚び出された私達には、『成すべき役目』が与えられている。私達『元天使』は、その役目を終えて尚もこの世界に留まり続ける天使の事。お役御免の必要とされていない天使、と言えばいいんでしょうねぇ」
「役目……？」

ヨシエはにっこり微笑んで、昔を思い出すように目を閉じる。

「私達の場合は、『テラスの王を打ち倒すこと』。『舞い降りた天使は巨悪に立ち向かう』、私達が天使だった時の『巨悪』は、世界を手にしようとしていた最強のテラスだったの」

天使伝承その断片、それを聞きながら、明華は一つの疑問に気付く。

テラスの王を打ち倒す事が役目、そして役目を終えたと語るヨシエ。つまり彼女達、元天使はテラスの王を打ち倒したということなのだろうか？

ならば、自分達、今の天使にとっての『巨悪』とは一体何なのか？

「そう。最強の、テラスの王を、私達は倒した筈だったの。なのにどうして、今になってもなお、天使はこの世界に舞い降りているのか……」

ヨシエがぼそりと小さく語る。それに明華は小さく答えた。

「……他の『巨悪』が、居るから？」

ヨシエはこくりと頷く。

「……今の私の目から見て、テラスの存在は以前よりずっと脅威ではなくなり始めていると思うのよ。あなたたちの居るセルセラコミュニティの働きで、テラスと人間の共存さえ謳われ初めている今、本当に巨悪と呼べる存在はいるのかしら？それはテラスと思い込んでしまっていいのかしら？」

そこまで言葉を紡いだヨシエは、少し困ったように首を傾け優しく微笑む。

「私にも分からないのよねぇ。ごめんなさいね、不安がらせる事を言い出しちゃって」

「いえ、全然大丈夫です」

「そう。ならいいのよ。でもね、一つだけ覚えておいて」

ヨシエは一人、気付けば複雑な表情を浮かべている明華の頭に手を添えて、優しく、まるで母親のように微笑んだ。

「もしもこの先困った事があったら、私でよければ力になるわ。だからあなたたちだけで抱え込まないでね？」

「ヨシエさん……」

「この世界だけでも、私がお母さんになってあげるから」

照れくさそうに笑うヨシエは、すくっと椅子から立ち上がる。そしてその顔にまた新しい表情を貼り付けた。

「明華ちゃん、机の下、足元に落し物よ」

「え？」

明華は頭を下げて足元を覗き込む。

その瞬間、ズドンと明華の背後で激しい音が鳴り響く。驚き、顔を後ろに向けた明華の目の前には、黒い衣を羽織った男が飛んでい

く姿があった。

「な、なんですか！？」

「娘はお母さんにしっかり守られてないさいな」

ヨシエの手に、何時の間にか握られているのは一本の竹箒。ガタンと机を飛び越し、ヨシエはひらりとカフェテラスを飛び出て通りに躍り出る。

「お掃除の時間ね」

パァンッ！

激しい破裂音と共に、カフェテラスに居た複数人の男が額に赤い痕を残しながら倒れ込む。周囲の客が驚き響めきを上げる。明華、済、ミュゲの三人も同様に慌ててヨシエの方を見た。

通りに立つヨシエを挟み込む様に、前後から迫る黒衣の男二人。その手に剣を握る男は、そのままスピードに載せて剣を振り抜く。

ふわり、とその剣の軌道から、箒を握ったヨシエがエプロンを舞わせて身を躱す。そして、二人の男との擦れ違い様に、その箒で男の足をさっと掃く。

足を掬われ、二人の男が同時にバランスを崩す。慌てて体勢を立て直す男達が、再びヨシエを振り向いたとき、ヨシエは既に次の動作へと移行していた。箒に両手を添え、落ち葉でも掃くかのように地面をさっと箒で撫でる。

ゴウ！と舞い上がる砂埃。その一掃きは風を巻き起こす。

それは二人の男のそれなりに大きな体でさえもバランスを崩す強風。男達が立て直したバランスが再び崩される。

「塵になりなさい」

回るように振りかざされる竹箒。それは全ての者の背筋を凍りつかせるような笑顔と共に、行使される。

「消去」

パァン！と音を立てて何かが弾ける。音の発生源を辿った明華と済がそれぞれ違う方向を見る。それはバランスを崩した二人の襲撃者の手の中から響いていた。

何も起こっていない？

否、その手に握られていた箸の剣が、影形もなく消え去っている。音はどうやらその剣に起こった異変によるものらしい。視認できない謎の攻撃、それは更に続けられる。

「消去」

再び笑顔で放たれる箒の一振り。それが今度は二人の男の黒い衣を『消し去る』。パァン！という破裂音と共に、『本当に消えた』かのように、一瞬で見えなくなる衣。

掃除人（スイーパー）、ヨシエの摩訶不思議なマジック。

それは氷の笑顔と共に、恐怖に顔を凍りつかせ始める男達に向けてさらに、さらに放たれる。

「消去」

パァンッ！

「消去」

パァンッ！

「消去」

パァンッ！

箒で通りを掃除する家政婦。一見するとそんな印象しか与えないヨシエの華麗なステップ。それと同時に、次第に男達の身ぐるみが剥がされていく。

鎧が消し飛び、靴が消し飛び、篭手が消し飛び……体に纏うものが剥がれていく毎に、男達の表情が恐怖にゆがむ。

どさりと地面に腰を落とす二人の男、その顔すら見ずに箒を止めると、ヨシエは笑顔で囁いた。

「……次はあなたたちを塵にしてあげましょうか？」

ヨシエの、その場の全ての人間を凍りつかせるような、地獄の底から響きわたるような言葉に、二人の男は悲鳴も上げずに脱兎のごとく背を向け逃げ出す！

「あらあら、喧嘩を売っておいて、それは少しないんじゃありません？」

エプロンのポケットに手をいれ、ヨシエは何かをするりと取り出す。細く銀色に光るそれは針。両手に一本、二本の針を構えたヨシエが、それを横に向けてヒュッと放り投げる。

瞬間、走る二人の男がどさりと地面に沈む。

「……骨のない男の子ばっかりねぇ。もっとこう男らしい子はいないのかしら？」

頬に手を当て、うふふとヨシエが微笑む。周囲の凍りついた空気に気付いたヨシエは、困った笑顔で頬をかく。

「あらあら……ちょっと怖かったかしら？これだから男性が寄り付かないのかしらねぇ……やだわぁ」

明華も、済も、ミュゲも、表情を凍りつかせてヨシエを見る。

「……あら？そ、そんなに怖がらないで？私、本当はとっても優しい……」

言いかけたヨシエの背後に、済が一瞬で移動する。そして迫る雷の矢を、その手に握る新しい魔具（ヴィヴロス）、まるで十手（じって）のような武器で打ち落とす。

それに追随するように明華の指先が動く。それと同時に雷の矢が飛び出た位置に飛ぶ、雷の矢。「うぐっ！」という声と共に、カフェの向かいの建物の二階の窓からどさりと何かが倒れる音が響く。

「あらあら。二人共、凄いわぁ。助かったわ、ありがとう」
「良く言う……気付いていただろう？」
「多分要らない助けだったんでしょうけど……ヨシエさん、人殺しちゃいそうな勢いだったんで邪魔させてもらいました」
「……うふふ。やだわぁ。人殺しなんてしないわよ？……そんな女に見えるのかしら、私」
「だからモテないんじゃないのか？」
「済ちゃん、後でちょっと一人で私のところにきなさい？」
「ごめんなさい」

何事もなかったかのように、くすくすと笑うヨシエと、平然と話す明華と済。なぜ、襲撃されたのか？それを別段気に留める様子もなく、さらりと受け流していた。

「う、動くなぁぁぁぁぁ！」

そんな三人に降りかかる、一人の男の声。

「……あなた、どういうつもり？」

ヨシエが少し、表情を強ばらせて男を睨む。
椅子に座るミュゲの横に立ち、手に握るナイフを向ける黒衣の男を。男は顔を引き攣らせながら、震える声を張り上げる。

「このガキがどうなってもいいのかぁ！？」
「やめなさい。馬鹿なマネをしたら、あなた、本当に消しますよ？」

「う、うるせぇ！やれるもんならやってみろよぉ！このガキがどうなってもいいならなぁ！」

男の叫びに、ヨシエは僅かに眉間にしわを寄せる。そして、その箒をぐっと握り、その鼓動を高鳴らせる。

……ああ、殺すつもりはなかったのだけれど

ヨシエの中の黒い一面が顔を覗かせる。

『一瞬で消し去るつもり』でやれば、男が動きに反応する前に殺れる。ヨシエは手加減なしで、その隠した牙を剥こうとする。

しかし、それは明華と済、二人の声で覆い隠された。

「あの……やめたほうがいいと思うぞ？」

「……子供は手加減を知らないですから……どうなっても知りませんよ？」

苦笑いしながら明華と済が、『その男』を心配するような声をかける。

「な、なに言ってやがる！？」

「ミュゲ。立ち直れる程度にしてやれ」

「ミュゲちゃん。やりすぎは駄目だよ？」
「うん！分かった！」

ナイフを突きつけられながら、笑顔で返したミュゲ。男がそれに対応した動きを見せるその前に、ミュゲの抱くボールからにゅるりと伸びた、二本の腕が男の頭をがしりと掴む。

「ひっ！？」
「やりすぎないで、立ち直れる位に……塵にするー！」
「や、やめ……！」

※自主規制※

「ああ……」
「ヨシエさんが余計な事言うから……」
「え？私のせいなの？いや……それにしても……」
「「「子供って怖い……」」」

男はモザイクが必要な位に色々と酷い状態である。やりすぎないで、立ち直れる位に、塵になっている。生きてはいるようだ。

周囲のどよめきが最高潮に達する頃、ヨシエは周囲を見渡して、あらあらと微笑む。そして、エプロンについた僅かな汚れをパンパンと払うと、店の中に向かって歩き出す。

「うふふ。ちょっと騒ぎ過ぎたわねぇ。そろそろ行きましょっか。

お代を払って、お土産のお茶っ葉を買って、これで大体の用事はおしましね」

無数の男達が転がり、騒然とする中、何事もなかったかのように、ヨシエはにこにこ笑顔を浮かべる。

「今の一件の事情は馬車で話すわね。あと、ありがとね。……頼りにしてもらっていいけど、私もあなたたちを頼りにさせてもらうわ」

ヨシエはどうやら三人の実力を認めたらしく、三人もヨシエの底知れぬ実力を認めていた。

四人の妹天使達は、騒動から離れるように、再びヤドハクへの旅路に戻る。

一一一一

再びヤドハクを目指す馬車の中、ヨシエは三人の天使が十分にヴォラスカーニバルに参加するに値する存在だと認めた上で、その裏に潜むものについて語ることを決めた。

元々は、一人で大会を勝ち進む、そんな魂胆で大会参加を決めていたヨシエは、仲間に加える三人に大きな期待など抱いて居なかったのは事実であった。

「まずは謝るわね。あなたたちを仲間と認めてはいたけれど、戦力としての期待はしていなかったわ。本当にごめんなさいね」
「そこまではっきり言われると……まぁ、ヨシエさんの力は分かったから私は別に文句はないが」
「初対面から期待をして貰えるとは思ってませんよ」
「期待していいよ！」
「うふふ、そうね。期待してるわ」

くすくすと笑うヨシエの笑顔は、少し翳りが浮かんでいた。

「本当はそれでも、あなたたちのような女の子をこんな争いに参加させるのは嫌なんだけれど、背に腹はかえられないものね」
「こんな争い？ただの祭りなんじゃないのか？」
「ええ。表向きは。でも、このイベントはヴォラス内においてはもっと重要な意味合いを持つの」

ヨシエは笑顔を解き、真面目な表情で語りだす。

「ヴォラスカーニバルは昔からヴォラスで行われている大会なのだけれど、昔からこの大会にはヴォラスの中でも有力な上流階級の人間が参加チームを擁立しているの。まぁ、私達もその類の人間になるのでしょうけれど」
「上流階級……ですか？」
「ええ。この大会の優勝者に与えられる褒美が目的の、ね」

褒美、カーニバル参加の説明時に聞いていなかったその言葉に、

明華と済が反応を示す。大会自体にも褒美があるのか、と。

「与えられるものは富と絆、そして権力。ヴォラスにおいての大きな力。その詳細は、優勝者しか知れないと言われているけれど……一つ確かなのは『優勝商品としてヴォラス内において最高クラスの地位が与えられる』という事。事実、今まで優勝チームを擁立した人間は、例外なくヴォラスの中での重要なポジションに身を落ち着けているわ」

「……では、依頼主のアミールさんも、その地位を求めて？」

「ええ」

ヨシエは包み隠さず言葉にする。

「そして、あの襲撃者達は同じく優勝の利益を狙う者の使い。有力な参加者を襲撃して、邪魔者を消そうという魂胆でしょうね」

「……真っ黒だな」

済が渋い表情でつぶやいた。賑やかで楽しいお祭りの裏で、そんな動きがあるということ、それにがっかりしたように溜め息を漏らす。少し暗い表情を浮かべるヨシエ。しかし、済はにやりとすぐに笑って言葉を発した。

「だが、それは私達も同じ事。私達も私達の為に、このヴォラスカーニバルに参加を決めた。ヨシエさんが気に病む事でもないだろう？」

それは済のフォロー。後ろめたさを感じているヨシエの心情を察しての言葉。

「互いにメリットがあるんだ。いいじゃないか。なぁ、明華？」

「うん。それに別にそれを知った所で、辞めるつもりはありません」
「済ちゃん……明華ちゃん……」
済は少し照れくさそうに頬を掻く。そして、視線を逸らしながら、ぶつぶつとつぶやいた。
「まぁ……ヨシエさんは、なんだ。こっちの世界での母親役をしてくれると言ってくれたし……家族のようなものだろう？助け合うのは当然……だと思うし……いや、別に変な意味じゃなく！」
あわあわとする済を見て、ヨシエは首をこくりと傾ける。
「済ちゃんって、もしかしてお母さんっ子？」
「違う！そういうのじゃない！」
顔を赤くして声を上げる済。その体にふっと腕が絡みつく。馬車の中、顔を赤くして立ち上がった済に、ヨシエが抱きついていた。
「済ちゃんはイイ娘ねぇ……ああ、可愛い……ああ、こんな娘が欲しい……ああ、可愛い！」
「や、やめ……頭撫でるな！そ、それに可愛いなんて……」
「照れてるの？やだ、可愛い！」
「イツキ可愛い！」
「や、やめろヨシエさん！ミュゲまでマネする！」
「いい娘、いい娘～～♪」
「イイコ、イイコ～！」
「う、うううううう～～～～！」
「済、案外満更でもないって顔してるよ」
「明華まで……！ううううううう！」

三人にからかわれながら、顔真っ赤な済は唸り声を上げる。

こちらもこちらで気が付けば、襲撃者の事も忘れ、和やかに、何事もなかったかのように先へと進む。

打ち解け集う二組の天使達。

彼ら、彼女らは遂に戦いの舞台、首都ヤドハクに辿り着く。

Ｅｐ３９：　母は強くてお掃除上手（後書き）

天使達は遂に戦いの舞台、首都ヤドハクへとたどり着く。そして迎えるヴォラスカーニバル予選。そこでは意外な強敵たちがその実力を見せつける？

今回はヨシエさん馴染み回。とっても怖い家政婦さんです。
次回はようやくヴォラスカーニバルに突入。ようやく、大暴れの展開に突入となります。

ＥＰ４０：　ヴォラスカーニバル開幕！（前書き）

遂に……？

ＥＰ４０：　ヴォラスカーニバル開幕！

じゃりりと音を立てる鎖が宙を舞う。まるで糸に吊られているかのように。

その長い鎖を操るのは一人の青髪の男。地面には既にその鎖で制圧した無数の敵の体が転がる。殺してはいない。ただ、気絶させただけ。

ぶかぶかに開いたその袖から溢れるように伸びる鎖を、男はぐいと引っ張った。すると、生きているかのように鎖はするすると袖の中へと戻っていく。明らかにそのぶかぶかに弛れた服に収まる限界を超えた量の鎖が次々と袖に吸い込まれていき、最後にじゃらりと音を立て、その先端に繋がれた小さな鎌が、ぱしりと男の手に収まった。

その武器は異常な長さの鎖に繋がれた鎌、男の特別な鎖鎌型魔具（ヴィヴロス）。

広い屋敷の中央で、男はたった一人で数十もの敵を殲滅した。

そしてその数十の戦士達を従える男は、じりじりと寄る男を前に顔を引き攣らせた。

「クソ……何処の回し者だ……！」

「何処の？ああ、あんたが思ってるような所からの回し者じゃないから安心しろよ。俺はあんたの『悪事』を見兼ねて送り込まれたも

んだ」

男は鎖を収めた袖から、鎖をまるで指のように操り、一枚の紙を引っ張り出す。そして、鎌を握らないもう片方の手に握る紙を、悪の親玉である男に突き付けた。

「ヴォラスカーニバル参加受付開始時から、あちこちで参加者が襲撃を受ける事件が発生している。メンバーを欠いて欠場するチームも結構居るそうだ。……ああ、言わなくても分かるか。犯人さんよぉ」

男はすぐさまその言葉を否定しようとした。しかし、突きつけられたのは、彼が襲撃に利用したとある組織との契約書。そして、紙に魔法で刻み込まれた、密約を交わした場面の映像。それはまさに動かぬ証拠。

「くっ……私をどうするつもりだ……！」

鎖鎌の男は笑った。

「あ？なんにもしねぇよ。ただ、お前が操る邪魔な犬は潰させてもらう。そして、ちょこっと脅させて貰うぜぇ？余計な真似はせず、素直にカーニバルにお使いを送り込みやがれ」

「……私を糾弾しないのか？」

「してるけどな。だが、お前のチームに参加をやめてもらっても困るんだよ」

男は呆れ顔で笑う。彼が長年付き合うひとりの相棒の顔を思い浮かべて。

「あいつは出来るだけ多くの相手と競い合う事をご所望だ。参加者を減らされちゃ困るんだよ。……ったく、優勝する気はあんのかねぇ、あいつは？」

バリバリと証拠を破り捨て、鎖を操る男は、犯人に背を向けた。そして、最後に脅しを一つ。

「……次、何か問題を起こしたら、あいつに止められてても八つ裂きにすっぞ？人の好意は無駄にするもんじゃねぇよなぁ？」

背中を向けながら、鎖鎌の男は、その情けない顔を誰にも見せまいとする。その情けない満足げな表情を。

……ああ、俺も甘っちょろくなったモンだなぁ。あいつに似たのかねぇ？

男、カテナもヴォラスカーニバルの裏で暗躍する男の一人。

しかし、そのベクトルは、少々他の人間とは違っていたようだが。

そして、そんな彼らの動きが、カーニバルの背後に動く、とある事態の思わぬ鍵となる。

一一一一

その女、ズィスィに巣食った悪の組織オラクル元所属にして、ヴォラスの中でも実は指折りの魔導士である女、シェーヌは久しくその地、ヴォラス首都ヤドハクへと足を踏み入れていた。本来なら専門としている高等魔法、召喚術によって、故郷ヤドハクに戻る事は容易だったのだが、彼女はとある事情により、正式な手順を踏んで、ヴォラスに帰国せざるを得なかった。

勿論、当初は面倒だと思っていたが、嬉しい誤算が彼女の気持ちを高揚させていた。

「ふんふふ～～ん♪」

鼻歌交じりにヤドハクの商店街を歩く彼女は、そのダボダボな白衣と大きな風船帽子を揺らしながら満面の笑みを浮かべている。その手を突き出し、その指にはめられた安物の指輪ににへらにへらとだらしない笑みを零す。まるで結婚指輪を眺める妻のように。

シェーヌは初めて、恋のような感覚を覚えていた。勿論、『ような』と言うだけあって、全く恋ではない。

シェーヌは今、一人の少女にメロメロなのである。

元々、小動物は大好きなシェーヌ。召喚術を専門として始めたも

っぱらの理由は『可愛い動物とお友達になりたい』である。だからこそ、戦闘に召喚術を用いる彼女は、その戦闘の舞台には決して可愛い動物は用いない。いや、動物は用いない。

そんな彼女は生まれながらの才故か、それとも驕りに驕ったその性格故か、昔から良い人間関係を築けていない。故に、彼女の中では、人間という存在はそこらに落ちている綺麗な石ころ以下のものであった。

そんな彼女が『仕事上』でとはいえ、出会って触れ合ったその少女は、まるで小動物のように、可愛らしく、上目づかいでシェーヌの顔を見上げてきた。

一目惚れである。

シェーヌは初めて、人間が好きになった。

当初は勿論、撫で撫でしたり、いい子いい子したり出来たらいいなあ程度に、それこそまるで小動物のようにしか思っていなかった。

しかし、思いの外に、喋れる人間というのは楽しく愛おしいものだった。

お喋りしたり、一緒に美味しいお菓子を食べたり、何かを買って喜ばせたり、次第に懐くその少女に、シェーヌはでろでろに溺れていた。そんなことがとても嬉しかった。

気付けばその少女達を、コミュニティまで誘導するという任務さえもすっかり忘れ、少女の手を引き遊んでいた。

ああ、ミュゲちゃん可愛いよぉミュゲちゃん……！

ヴォラスカーニバルに出るのかぁ、特等席を取って応援しなくちゃ！

ああ、でも出来れば一緒に出たかったなぁ……

頬を染めながら、しかしシェーヌは立ち止まる。

「……なぁんて。そんな資格、私にはないかな～？」

シェーヌは当然、上から伝えられた情報で、少女ミュゲの過去を知っていた。

少女を不幸に陥れた組織に、たとえ任務であったとしても、大きく加担していた自分。少女の事を知らなかったとはいえ、その存在を軽く見て踏み躙っていた自分の行いを理解できないほどに、彼女は非道ではなかった。

初めて人間を愛しく思った彼女は、同時に初めて罪の意識を感じ始めた。

今まで一度も傷んだことのない胸が痛む。

しかし、彼女は償う事を知らない。

「私には、な～んにもできないんですよね～……」

沢山ものを買ってあげても、沢山美味しい食べ物をあげても、沢山遊んであげたとしても、許される筈がない。

しかし、自分勝手な彼女は思う。

一方的でも、許されずとも、彼女のタメになることをやろう。

不幸にしてきた他の天使達や人間たちには目もくれず、たった一人の少女の為に、自分勝手な彼女は既に『とある決意』を固めていた。

そんなシェーヌの自分勝手な決意が、カーニバルの背後に動く、とある事態の思わぬ鍵となる。

「あらぁ？シェーヌじゃないの？」

「あれ？どうして此処に、シェーヌさん？」

シェーヌの背後から掛かるのは、聞き覚えのある二つの声。その声に、ぞくりと体を震わせて、シェーヌは恐る恐る振り返った。

彼女が恐れる数少ない存在。

その化け物は、シェーヌの背後でにっこり微笑んでいた。

「あ、あれれ～～～？……レ、レイラちゃん？どうしてここに……？」

引き攣った笑顔で尋ねるシェーヌに、化け物、レイラはにんまり不気味な笑顔でぽんと手を叩いた。

「ルカ……やっぱりあんたの運は本物だわ！シェーヌが居れば、ヴォラスカーニバル参加もいけるじゃない！」
「え？え？え？」
戸惑うシェーヌ。そんな彼女に、レイラは笑顔で言い放つ
「シェーヌ。私達と一緒に、ヴォラスカーニバルに参加しない？勿論、断る事は許さないわよ？」
「あ、あはは～～～よ、喜んで……」
断る事は当然許されない。
しかし、シェーヌにとって、これは思わぬチャンスであった。
……あれ？もしかして、これはミュゲちゃんとお近づきになれるビッグチャンス？
「でね？シェーヌにお願いしたいのだけれど……私達、実は不幸な事にメンバー不足で困ってるのよぉ。そこでシェーヌの召喚術か何かでなんとかならない？」
「バッチコイですよ～～～！取って置きの人脈使って最高の戦力引き込みますんで～～～！」
「シェーヌさん？……何か気合入ってません？」
それはルカの強運ゆえか、レイラとルカ、二人の天使は、やる気

に満ち溢れた強力な戦力を補給する事になり、そしてそのカーニバル出場決定的にする。

カーニバルの波乱がまた一つ、追加される。

―――

アミーラは花束を抱えて、嬉々として館の入口門前にて体を揺らして待っていた。念入りに整えたウェーブの掛かったブロンドヘアをゆらゆらと舞わせて、まるで恋人でも待つ乙女のように、待っていた。

「来ましたわ！」

見えてきた馬車。それと同時に肩を弾ませ、とろりととろけたその顔を、停る馬車の窓へと向ける。

「ようこ……！」

言いかけてアミーラは言葉を止める。馬車から降りてくるのは自分の従者。そして、絵で見た冴えない男、一番鼻持ちならぬ可憐な

女、そして、再び冴えない男。

あれ？

アミーラは凍りついた笑顔で首を傾げた。

肩口まで伸びた黒髪。凛々しく尖った目。きりっとした印象を与える鼻筋。強く結ばれた唇。すらりと高い身長。彼女が最も楽しみにしていた『彼』の姿は何処にもなく、代わりに一番見たくもなかった女の姿がそこにはあった。

「お嬢。今帰ったぞ」

アミーラは笑顔を次第に溶かし、わなわなと震え出す。

「お嬢どうした？」

ゴツイ従者が不思議そうに顔をのぞき込む。

混乱極まったアミーラは、心の底から叫びを上げる。

「どうしてこうなったッ！！！」

一一一一

ビシっと服装を整え、花束を抱えたアミールは屋敷の門の前でしきりに姿勢を確認しながら胸を躍らせた。少し癖っけのあるブロンドのショートヘアをいじり、身嗜みに注意を払う。まるで想い人との再開を待ちわびるように、青年はその頬をだらしなく緩ませていた。

「来たか！」

見えてきた馬車。それと同時に肩を弾ませ、だらりとふ抜けたその顔を、停る馬車の窓へと向ける。

「よくき……！」

言いかけてアミールは言葉を止める。馬車から降りてくるのは自分の従者。そして、絵で見た子供、一番鼻持ちならぬ長身の男、そして、かなり美しい女。

あれ？

アミールは凍りついた笑顔で首を傾げた。

さらりと流した美しい長髪。大きく眩しい黒い瞳。聖母を思わせる穏やかな表情。柔らかそうな艶ある唇。陶器のような白い肌。守ってやりたくなる儚さ。彼が最も楽しみにしていた『彼女』の姿は

其処にはなく、代わりに最も見たくなかった凛々しい男が立っていた。

「坊っちゃん。今帰りましたよ」

アミールは笑顔を次第に溶かし、わなわなと震え出す。

「坊っちゃん？」

おっとりした従者が不思議そうに顔をのぞき込む。

混乱極まったアミールは、心の底から叫びを上げる。

「どうしてこうなったッ！！！」

―――

「うふふ。取り乱して申し訳ありませんでしたわ……ワタクシ、ア

ミーラと申しますの。皆様の御助力、大変感謝致しますわ」

館の客間に三人の天使を招き入れたアミーラは、取り繕った笑顔を浮かべて首を傾けた。

しかし、男天使達はどんより顔である。

館の前で「どうしてあの格好いい殿方を連れてこなかったの！冴えないの二人と、しかも女を連れてくるなんて！うわああん！」なんて感じで泣き喚かれたら微妙な気分である。

薄葉とハランは、格好いい殿方こと、一応乙女な済さんに男の容姿で完敗したという事実に落ち込み、救世も女呼ばわりされたことをとある種の申し訳なさに伏せた目が上げられずにいた。ダディに宥められてようやく落ち着かされたアミーラは、何を吹き込まれたのか不満そうに三人を招き入れたのである。

なんという社交辞令。見え透いた嘘の笑顔に男三人ドン引きした。

「今回は依頼を受けていただいて誠に感謝しておりますわ。ええ、誠に。ただ、あの格好いい方が来てくだされば……たとえ女でも来てくだされば最高だったのですけれど」

「お嬢」

「……わかってますわよ」

あからさまな愚痴を咎められ、不満げにアミーラが口を尖らせる。しかし、すぐさまにっこり薄っぺらい笑顔を浮かべて口を開く。

「ご協力は感謝しますわ。報酬ならいくらでもお支払いします。『ヴォラスにおける地位』、その栄誉だけ寄越して下されば他のもの

はなんでもお持ちくださって結構」
「要りません。私達の目的は、王との謁見、そしてダディさんからお話を聞くことだけですので」

救世はぴしゃりと言い放つ。アミーラは元より目の敵にしていた女（本当は男）の態度に、僅かながら眉間にしわを寄せたものの、すぐに笑顔を取り繕って、首を可愛らしく傾けた。

「あらそう。それならいいですけど。なら言うことはもう何もありませんわ。……では、カーニバルまではご自由にお過ごしくださいまし。部屋は用意してありますので好きに使ってくださいな。ダディ。案内を」
「あいよ、お嬢」

ダディはサングラスをくいと直し、「こっちだ」と軽く三人に囁いて、客間を後にする。

客間から離れて、階段を上がる。そのあとに続く三人。やがて二階の一つの部屋の前に辿りつき、ダディは足を止めた。

「此処だ。一応それなりの広さがあって、ベッドも三台用意してある。救世には悪いが三人で一部屋で構わないか？もしも困るなら俺の部屋を空けるから言えよ？」
「いえ。お気遣いなく。大丈夫ですよ」
「そうか。悪いな」

ダディはボリボリと頭を掻き、難しい表情を浮かべる。なにやら言葉を探しているようで、その様子に気付いている救世は足を止め

て言葉を待つ。

「……悪いな。主人が不快な思いをさせちまって」
「いえいえ。別に不快には思ってませんよ」
「ショックだっただけっす」
「だな」

割と本気で落ち込む薄葉とハラン、冴えない男二人。一方、相変わらずの笑顔を浮かべて、救世はさらりとダディの謝罪を受け流した。

「埋め合わせは必ずする。俺に何でも言ってくれ。ただ、お嬢は許してやって欲しい。そして、その力をお嬢の為に貸して欲しい」
「もちろん。受けたお仕事に手を抜いたりはしませんよ」
「だが、何故お前はあんな小娘に仕えているのだ？」

ハランが怪訝な表情で尋ねる。

「……そいつを語るのはちと勘弁してくれねぇか？他の事なら何でも話すからよ」
「ハランさん。人様の細かい事情には首を突っ込まないで下さい」
「むぅ」
「別に気にしないで下さい。聞きたい話も今すぐに必要でもありませんし。今はヴォラスカーニバルの事に集中しましょう」
「……おう」

救世の締めの言葉に、ダディは静かに頷いた。少し不満げなハランも、大方不満もなさそうな薄葉も、馬車旅の疲れからか今は長々と話し込むつもりもなかったらしい。
それでは、とひとまずの解散に向かおうとする一同。

「明日また、ヴォラスカーニバルの詳細について話しましょう。準備をするに越した事はないですから」
「……そうだな。じゃ、今日はゆっくり休め」
ダディは静かに去る。しかしその去り際に、ぼそりと一言、聞こえないくらいの声でつぶやいた。
「……何かあったら俺に言え。これでも一応先輩だ」

一一一一

「ククク。取り乱して悪かったの……余はアミールと申す。協力、感謝しておるぞ」
屋敷の客間に三人の天使を招き入れたアミールは、不敵な笑みを浮かべて三人を歓迎した。
しかし、女天使達は微妙な表情である。

館の前で「あの一番かわいい子はどこじゃ！しかもオスを連れてきおって！うおおお！」なんて感じで叫ばれたら微妙な気分である。

明華は、一番かわいい子こと、一応男な救世さんに女の容姿で完敗したという事実に落ち込み、済は突然の男呼ばわりに、相当傷ついていた。ミュゲは何やら単純にアミールが気に入らないらしく、すごく微妙な表情でその顔を睨んでいる。済を泣かせて、ヨシエさんに軽く数発殴られたアミールは、腫れた顔でなおも高慢に取り繕う。

小さい人だなぁ、と明華は思う。

そんなに男っぽいかなぁ、と済はしょんぼり床を見つめる。

あれはなんだろう、とアミールのはるか後ろに飾って鎧をじっと凝視するミュゲ。

結論から言うと、三人はあまりアミールに興味がなかった。

「し、しかし悪かったな済よ。よく見れば中々に美しい顔立ちではないか！……ただ、もうちとその救世という兄に似ておれば……」

「黙れ小僧」

「……す、すみませんでしたヨシエさん。だから叩かないでおくれ」

早速へこへこしだすアミール。小物である。

しかし、おっほんと咳払いをし、改めて強気な表情で語りだす。

「協力、感謝する！この礼はカーニバルの後に、存分に果たそうぞ！お主らのような女子（おなご）が助力してくれるだけで、余は満足じゃ！何でも力は尽くそうぞ！」

「私達はヨシエさんや王様から天使の伝承の話を聞きたいんです」

「ほほう。そうか。それで王の謁見を望む、と。分かった。何とか

しよう。ヨシエとの話は勝手にするが良い。王との謁見については余も持てる力でなんとかしよう。だから、負けを恐れず存分に励むがよい！」

「負けをって……」

アミールはにかっと笑い、胸を張る。

「勿論、勝つのが理想じゃがな。だが、ただでさえ女子に頼る情けない立場。無駄な重圧など与えとうない。せめて、勝ち負け問わずにお主らに尽くさせてくれ！」

勝ち負け問わず、そんな意外な言葉に明華も済も驚いていた。

「あ、わざと負けるのはなしじゃぞ！で、できれば優勝はして欲しいのう！せめてアミーラのチームを倒して欲しいし……」

「坊っちゃん」

「むう！そうじゃな！気にするな！とにかく頑張るのじゃ！今日はささっと休むが良い！カーニバルに向けての準備で困ればなんでも言えい！全力でサポートするぞ！」

意外なアミールの言葉に驚きつつも、明華達は力強く頷き、ヨシエの案内で客間を後にする。

一階にある一室。中に入ると其処は食べ物もベッドも何でも揃う広い部屋。

「別々の部屋にも出来るけれど、三人一緒の方が都合が良くないかしらと思ったのだけれど……」
「はい大丈夫です。ありがとうございます」
「なら良かったわぁ。でも、遠慮しないで言ってね？部屋のならまだ空いてるからね？」
「みんなと一緒がいい！」
「そうね。じゃあみんな一緒にしましょうね！」
「おばちゃんも！」
「おば……そ、そうね。おばちゃんも一緒にしましょう！」

ちょっと笑み引きつらせたものの、流石は大人である。妥協が早いヨシエさん。ミュゲと視線を合わせてにっこり。明華はアミールを殴るヨシエの怖い目を覚えていたので、内心ハラハラしていたが、杞憂だったようだ。

「でも、ごめんなさいね。私、ちょっとお仕事が残ってるから……また後で顔を出すからゆっくり休んでて頂戴な。その時でも、カーニバルまでの間にでも、お話したい事があったら言ってね？私で乗れる相談なら、何でも。これでも先輩なんだから、頼りにしてくれていいのよ？」
「はい。ありがとうございます。その話はまた。お仕事、頑張って下さいね」
「あら、ありがと。じゃ、また後で」

ヨシエはにこにこ大人びた笑顔で手を振り、踵を返して部屋を出る。その姿を見送って、明華はふうと溜め息をついて、背中に隠れる済の方を振り向いた。

「行ったよ」
「む、むう……」

ひょこっと顔を覗かせた済。その顔はほんのり朱色に染まっていた。

明華は大体の事情を察しているようで、少し呆れたようにじろりと済を凝視した。

「済はどうしてああやって悪い人に引っ掛かるの？」
「ひ、引っ掛かるって……何を言って……」
「だって、アミールさんに『中々に美しい顔立ちではないか』って言われた辺りから顔赤くしちゃって……」
「アキカ真似うまーい！」
「べ、別に変な意味ではないぞっ！そ、そりゃ美しいとか何とか言われたら照れ臭いだろうが！」

済が顔を真っ赤にしながら抗議する。

「済は高慢で我侭な人が偶に見せてくれる優しさにキュンと来ちゃうタイプなの？」
「前例との共通点を冷静に分析するな！べ、別にそういうのじゃないからな！それに、アミールは其処まで高慢で我侭でもないだろう！気を遣ってくれていたし……」
「まぁ、前例よりかはいいんだろうけど……どうして済はそんな難解な愛に突っ走るの？」
「だからそういうのじゃないから！美しいとか、褒められて嬉しいのはみんな一緒だろう！な、ミュゲ！？」
「うん！」

あたふたあたふた手を振って、じたばた暴れる済を見る明華のじとっとした視線。ぐぬぬと口をへの字に曲げながらも、済は言い訳を続ける。

「あ、明華だってウスハから『綺麗だよ明華』って囁かれたらドキドキするだろう!?」
「んな!?お兄ちゃんは関係ないでしょ!」
「イツキ声そっくり!」

明華も一瞬で茹で蛸状態である。ただ一人、物真似ショーでも眺めるように、ぱちぱちと楽しそうに手を叩くミュゲ。

「だ、だったら済は救世さんから『可愛いね済』って言われたらドキドキするの?そういう話になってくるでしょ!」
「あ、あんまりドキドキしない……でも、今は異性間の話だろうが!あ。救世はまあ異性だけども!ほら、想像してみろ!『やっぱり可愛いよ明華。ほらこっちにおいで』」
「お、お兄ちゃんはそんな事言わない!」
「『照れてるのか?ハハ、やっぱり明華は可愛いなあ』」
「うぐぐ……ぐぬぬぬぬ……!そ、それって済が言って欲しいんじゃないの!」
「んなっ!?」
「『やっぱり可愛いよ済。ほらこっちにおいで』」
「や、やめろ!妙にアミールに似せて言うのやめろ!」
「『照れてるのか?ハハ、やっぱり済は可愛いなあ』」
「うぐぐぐ……ぐぬぬぬ……!」

見事なモノマネパーティーを繰り広げる二人の乙女は顔真っ赤である。何故か涙目で睨み合い、バチバチと変な火花を散らす二人。

今にも取っ組み合いを始めそうな勢いである。

「あらあらまあまあ」

そのとき、ぎい、とドアの音が鳴った。明華と済がはっとしてドアを振り向く。すると其処には仕事に向かったはずのヨシエがドアの隙間から顔を覗かせていた。

「お熱いわねぇ。あとでゆっくりお話しましょっか?うふふ♪」

家政婦は見た!

「「わあああああああ!ち、違うから!これは全然……!」」
「お邪魔しました~♪」
「「うわあああああああん!」」

この暫くあと、明華と済は仕事を終えたお節介おばさんに根ほり葉ほりあれこれあれこれやたらと話を聞かれたが、それはまあ関係のないお話。

一一一一

勿論、ヴォラスカーニバル開催までの間に何もなかった訳ではない。しかし、めっきりと裏で動く不正が減り、大きな事故や事件は起こらないままに、参加者達は時に休み、時に腕を磨き、時に記者の取材とやらを受け、時に敵の調査をして、各自が大会に向けて動いていた。

それは天使達も同様で、彼らもまた油断はせず、それぞれチームとしての結束を高めながら、それでいて兄妹同士の交流はなく、ライバルとして着々と準備を進める。

そしてその日はやってくる。

ある者が呟く。

「全ては予定通り」

ある者が笑う。

「あとは待つだけ」

ある者が企む。

「今日は記念すべき日」

ある者は……

「マラーク様。何か気掛かりが？」

「……参加するそうだな。あの二人」

「ええ。どういうつもりかは分かりませんが」

「しかも、組んだ相手は今の天使だそうだが」

「セルセラコミュニティに所属する者のようです。ズィスィでの事件、あれを解決した一団のようでして」

「奴等から決して目を離すな。『過ち』は二度と起こさせん」

「……御意」

黒髪の男二人の会話。それを扉の裏から静かに聞いて、同じく黒髪の女は唇を噛む。

「……まさか。そんな馬鹿な真似は、しないよね？」

女は肩を震わせながら、静かにその場を立ち去る。

遅れて扉が開き、黒髪の男が静かに女が立ち去った方向を睨む。

「どうした？」

「いえ。何も。……そろそろお時間です」

「……ああ」

玉座につく黒髪の男はゆっくりと腰を上げる。

王、マラークの目指す場所は王宮の最上階。広場を見下ろすその場所。側近の男を傍に置き、マラークはその場所にたどり着く。

広場には、見渡す限りの人、人、人……人の洪水はマラークの登場で更にざわめきうねりを上げた。

果たしてそれは、王、マラークに対する畏敬の念か、それとも遂に開幕するその戦いへ向けた興奮か、もしくは腹のそこに仕舞った底知れぬ野望の沸騰か。

それは抱くもののみが知る。

マラークも長々とした話は好まない。

ただ一つ、見上げる群集たちに向けて、遠く響きわたる重々しいその声を放り投げる。

「これより、勇者に捧ぐ祭典……ヴォラスカーニバルを開催する！」

沸き立つ歓声。

それは記念すべき日。最も波乱に満ちた史上最大の祭典が幕を開ける。

ＥＰ４０：　ヴォラスカーニバル開幕！（後書き）

遂に幕を開けるヴォラスカーニバル！その予選から、強豪達がその実力を見せつける！そして集いし戦士達は……？

次回、「ルナティックカーニバル」に続く！

ようやくカーニバル突入。遅い……あと、投稿間隔も遅い……申し訳ないです（－＿－；）

カーニバルに突入してからもドンパチやるのでやっぱり長いです。しかし焦らずに（十分急展開ですが……ｗ）着実にやっていきます……ああ、早くラストシーンが書きたいです。いや、言ってるそばから何を……ｗ

色々な点をバラマキつつ、のちのち回収忘れのないよう（コラ）、一気に収束させていきます！

EP41：　ルナティックカーニバル（前書き）

ヴォラスカーニバルに突入

ＥＰ４１：　ルナティックカーニバル

ヴォラスカーニバルには毎回かなりの優秀な人間が集まる。

しかし、そんな中で、今回は何故か格段にその人数が、その質が上がっているという。

そして、また、何かの偶然か。

今回のカーニバルの運営を任された人間も、また格段に奇妙な人間だった。

ヴォラス王マラークの簡単な言葉が終わり、騒めく王宮前広場。

それを見下ろすかのように、上空には巨大なモニターが浮かび上がる。

魔法で構成されたそのモニターに浮かび上がるのは一人の男の顔のドアップ。

突然のその映像に広場は響めく。

『ゾハルさんカメラに近すぎです！離れて！離れて！』

『む。これは失礼。では少し離れよう』

男の顔が離れ、その全身が映し出される。
長い白髪に顔を埋め、青白い顔から鼻と口だけを覗かせる男は、白衣を纏った研究社風の男。

『あー。あー。聞こえるかな？ヴォラスカーニバル参加者の諸君。私は今回のヴォラスカーニバルの運営を任されている王宮魔導士右門第二席、出身は球界クロノス、今年で二十九で只今絶賛彼女募集中、そして……』
『ゾハルさん！話が長いです！』
『む。これは失礼。そう、ゾハルと申します。今後ともよろしく』

カメラマン？らしき女の声との気の抜けた掛け合いを交わし、その男、ゾハルは「はぁ」と明白な溜め息を零す。

『まぁ、競技だの、何だの、方針？まぁ、そんな感じのモノを決める権利を託されたのだが、あれだ。なんだ？ほら、選考？ん？あー。えーとだな』
『ゾハルさん！纏めてから喋ってください！』
『む。これは失礼。……まぁ、じゃあマラーク。競技は私が決めて構わないのだな？』
『ゾハルさん！これ、双方向の通信じゃありません！あと、全て一任するとの事ですよ！』
『む。これは失礼。じゃ、とっとと始めるか』

何とも気の抜けたやり取りである。

『参加者は……おお、大分多いな。よし、じゃあちゃちゃっと絞るか』

ゾハルは「はぁ」と面倒くさそうに溜め息をついた。若干の不安を覚える参加者達。

『第一次選考は……そうだな。「じゃんけん」だ』

映像のゾハルはパンと手を叩く。すると、ブオンという音と共に、広場の上空、否、果てなく広がるその空に、奇妙な文様が浮かび上がる。

驚き上空を見上げる参加者達に、ゾハルは解説を始める。

『「じゃんけん」、分かるな？グーはチョキに勝ち、チョキはパーに勝ち、パーはグーに勝つ、三竦みの関係を表す簡単なゲームだ。今回は第一次選考、予選として、私とのじゃんけんにより次のステージに進む者を選考する』

内容までも拍子抜け。広場から熱気が失せていくのが感じられる。やる気のなさそうなゾハルの態度からして、参加者達は次第に不満を露にしだしていた。

怪訝な表情を浮かべる中には、アミーラ組の兄天使達もいた。

「予選の内容が運任せって……本当にいいのかね？今までもこうだったんですか？」

「今まで見てきた中では少なくとも無かったな。今回の運営のあいつの方針なんだろうよ」

薄葉の問いに、今まで参加はしなかったものの、その内容は見てきたダディが答える。そう、ゾハルは今回が初めての運営担当。そ

の考えは誰にも見抜けない。

「適当なのか？やる気もなさそうだし」

「分かりませんが……どうやら参加者の方々からは不満が出ているみたいですよ」

救世がちらりと周囲に目をやる。

「ふざけんな！闘技大会でなんでじゃんけんなんてお遊びをしなきゃならねーんだ！」

「バカにしてんのか！？」

飛び交う罵声。怒りの声。由緒ある闘技大会とされているヴォラスカーニバルに、その内容は余りにも不似合い。そんな意見は殆どの参加者間でも共通していたようだ。

そう。『殆ど』。

荒れる声に、王の側近が対処をしようとした時に、一つの大きな声が上がった。

「騒ぐなっての馬鹿馬鹿しいッ！！」

ゴウ！と強烈な衝撃が広場の一部を駆け巡る。その大きな声は広場中を黙らせる。薄葉達がその『聞き覚えのある声』の方向をちらりと見ると、複数の参加者がその強烈な大声に耳やら何やらをやら

れてか、ゴロゴロと転がっていた。その中心で、巨大な大剣を掲げて苛立ちを露にする薄葉達も見覚えのある一人の赤髪の女。

名をレンダ。『女勇者』と呼ばれる参加者の一人である。

「この程度の運も無い奴が、この祭典で勝ち抜ける訳ないでしょうにッ！ごちゃごちゃ文句垂れてないで、とっとと始めようじゃないのッ！！」

薄葉達は溜め息を漏らした。

「なんだあいつまだいたのか」
「早速騒いでますね」
「それにしても声のデカい……」

周囲を騒めかせながらも、しかし、不満を語る周囲の声は消え去っていた。さっぱりしたその無駄にデカい一声で、何組のチームが脱落したようだが、それはまあ置いておいて……

ゾハルはそんな様子を知ってか知らずか、さらりと次の言葉を紡いだ。

『まぁ、運ゲー乙、と言いたいだろうが……その程度の運もなくて、勇者の祭典に参加できると思わないほうがいい』

どこかの勇者と全く同じことを言っている。

『ルールは簡単。チームから一人、代表者を出して、この映像に映る私とじゃんけん一本勝負をしてもらう。だが、普通にやっても面白くない。そこで、ここに展開した結界の登場だ』

空を覆う紋様、それは結界。

『これはウチの一流魔導士達を動員した特殊な結界だ。ヤドハク中に張り巡らされている。この結界の効能は「天罰」。この結界内で特定動作をしてものに、魔法によるダメージを与える研究段階の代物だ。実験がてらに今回の選考に使わせてもらう』

ゾハルの口がぐにゃりと歪んだ。悪い笑みだ。大会の運営自体は面倒だが、自身の魔導研究には熱心らしい。まるで実験台を大量に得たとでも思っているかのような笑みである。

『じゃんけんをする時は、代表者は腕を上にあげて勝負しろ。その時、もしも上げた手が私に負けていた場合……代表者には「天罰」が降る。安心していい。気絶する程度だ』

僅か広場に緊張が走る。

『しかし、もしもこのじゃんけんが終わった時点でチームメンバーが一人でも倒れていた場合は……その時点で失格。チーム諸共即退場。簡単だろう?』

つまりはこのじゃんけんという名の選考、もしくは実験は、こうである。

代表者が運営ゾハルとじゃんけんをする。勝てばクリア。負ければ意識が飛ぶほどの天罰が降り、それで代表者がダウンすればチームは即敗退。

結局はじゃんけんの勝敗という運での選考。それにゾハルの実験を組み込んだだけのものだ。

『勿論、天罰が怖ければ棄権しても構わない。その場合はチーム全員地面に伏せていろ。相当に痛いからな。怖気付いても無理はない』

ゾハルの脅迫のような言葉に、参加者はゴクリと息を呑む。しかし、それで引く参加者は居ないようだ。

『では、代表を選べ。五分後、選考を開始する』

たかがゲーム。しかし其処に恐怖という一味を添える事で、緊張感は格段に変わる。今や内容に文句を垂れる参加者は居なかった。途端にざわざわとチーム内での相談が始まる。

勿論、兄天使一同も代表者の相談を始める。

「俺、運其処まで良くないんだよなぁ」

「私も自信ないです……」

薄葉と救世が自信なさげに呟く。運がいいどころか、何かと不幸なこの二人。あまり向いていない事は確かである。

ダディは二人の顔を見て、ふぅとタバコの煙を吐き出した。

「そういう奴からは逆に運が逃げるぞ。まぁ、救世には参加させる

つもりはねぇさ。女に危ない目は見せられねぇしな」
「だから男ですって！」
「冗談だよ。もしも、天罰で一人が負傷した時に、治療できる奴がいなけりゃ困るだろ」
「あ……」

ダディの意外と冷静な判断に、救世は不満そうな表情を見せつつも、直ぐに納得したように俯く。ダディはやれやれと首を振り、口を開く。

「……仕方ねぇ。俺が出……」
「まぁ待て」

其処で一人の男が、その不敵な笑みと共にその言葉を遮った。

にやりと笑うその男はハラン。

「此処は俺に任せて貰おうか」
「大した自信だな」

意外そうにサングラスをずらすダディに、ハランは余裕の表情で胸を張る。

「当然だ。俺は運で此処まで生きてきたようなものだからな。ミュゲの信頼を取り戻すためだ。見せ場は存分に稼がせて貰おう」
「……ほう。なら任せるか」
「ダディさん!?いいんですか!?」
「大丈夫なんですか!?」

驚き声を上げる救世と薄葉。ハランの胡散臭さにいまいち納得の

いかない様子の二人に、ダディはにっと笑って答える。
「お前らは一緒に居て全然こいつの事を分かってないんだな」
「え？」
ダディは既に見抜いていた。ハランという男の本質も。
「馬車での襲撃の一件。あの時にお前らの反応から、大体お前らの長所は見えてた」
「ハランさんは本当に寝てただけだと思いますが」
襲撃の一件を覚えていない様子の薄葉だけが首をかしげる。じろりと横のハランを睨む救世に、ダディはやれやれと首を振りながら答えた。
「こいつ、危険と分かって寝たふりかましてやがったんだぞ」
「んな！？ね、寝たふりしてたんですか！？」
「な、なんのことやら……さっぱりだなッ！」
「誤魔化さなくていい。俺はそれを評価してるんだ」
ダディの意外な一言にハランは僅かに驚きを見せる。
「そりゃあ男としちゃ気に入らないが……生きる術としては、無駄な危険は回避するのは賢い手段だ。その狡猾さ、お前にはそれがある」
「……む、むう」
「そして無駄な危険は避けるお前が、こうして名乗り出たんだ。なあ？……信用してるぜ、ハラン」
ぽんとその大きな手がハランの肩を叩く。ハランはそれににやり

と笑みを返し、強気の言葉を返した。

「フン、任せておけ」

ハランは三人の仲間に背を向け、モニターを見上げる。ダディの言葉には、薄葉も救世も黙らざるを得なかった。

『それでは時間だ。始めるぞ』

ゾハルの宣言により広場に緊張が走る。四分の一の人間、代表者達がその腕を高く掲げる。勿論、ハランもそれに続く。

『じゃーんけーん……』

ゾハルが手を振りリズムを取る。それに合わせて、代表者達がリズムを取る。声を上げずに手を動かさない者、声を上げてリズムを取る者、やたらとデカい声で叫ぶ女。

ゾハルの手が形を作る。

『ポン』

バチバチバチバチバチバチバチバチッ！！！

瞬間、周囲から激しい音と共に、大きな悲鳴が沸き上がる。激しい発光は電撃のようなもの。一部の手を上げた代表者が、強烈な光と轟音に包まれて悲鳴を上げる。

これが『天罰』。

その凄まじい光景に、広場の参加者達の反応はバラバラ。騒ぐもの、恐怖するもの、笑みを浮かべるもの……

ゾハルの手は『グー』。

そんな中。薄葉と救世、そしてダディはハランを見て驚愕した。

ハランは立っていた。

……「その手を下におろしたままで」。

「な、な、な、なんでじゃんけんしてないんですか！？」

「お前、ビビって勝手に棄権したのか！？」

救世と薄葉が慌てふためき声を上げる。しかし、ハランはにやりと笑って顔を向ける。

「慌てるな。少し待て」

何故、余裕なのか？勝負することなく、選考は終わったにも関わらず。

『さて。脱落者が出たな。全員が立っていないチームは、早速退場願おうか』

ゾハルが口元を曲げて不敵に笑う。その手を再びパンと叩いて。

すると、倒れる参加者と、その仲間の周りを囲む魔法陣。

『これも実験。転送用召喚術で、脱落チームにはヤドハク外に出てもらう。まだまだヤドハクはカーニバルに使うのでね』

カッ！

魔法陣が光を放つ。じゃんけん勝負に参加する事なく、ただ立っていたハランを含むアミーラのチームは……

『残ったチームは第一選考突破だ』

「……あれ？」

多くの参加者が魔法陣で飛ばされる中、その広場に残っていた。

「どういう事だ……？不戦敗なんじゃなかったのか？」

薄葉が周囲を見渡しながら、戸惑いを見せる。救世も驚きぽかんとしている。そんな中、ハランの顔は不敵な笑みで輝いていた。

「何を驚く？俺達は、きちんと『立っている』だろう？どうして脱落しなければならない？」

「……どういう事だ？」

ダディの言葉にハランは得意げな表情で答える。

「バカ正直に、運試しに付き合う必要なんて無かったんだよ。あいつの話を思い出せば、この正解は『立ったまま、じゃんけんに応じない事』だと分かるだろう」

「あ」

ゾハルの言葉を思い出し、思わず救世が声を漏らした。ダディもふんと納得したように、軽く笑う。

『じゃんけんをする時は、代表者は腕を上にあげて勝負しろ。その時、もしも上げた手が私に負けていた場合……代表者には「天罰」が降る。安心していい。気絶する程度だ』

『しかし、もしもこのじゃんけんが終わった時点でチームメンバーが一人でも倒れていた場合は……その時点で失格。チーム諸共即退場。簡単だろう？』

『勿論、天罰が怖ければ棄権しても構わない。その場合はチーム全員地面に伏せていろ。相当に痛いからな。怖気付いても無理はない』

未だに理解ができない薄葉に、ハランは「感謝するがいい」と言わんばかりにどや顔で語る。

「天罰が降る条件は『上げた手がゾハルの手にじゃんけんで負けた時』。そして失格条件は『チームメンバーが一人でも倒れていた場合』。そう、誰も『じゃんけんで負けたら敗北』などと言っていない」

「……おお？」

「つまりは、『じゃんけんをしなければ天罰は受けない』。そして、『立っていれば』失格ではない。どこにも失格の要素はない。つまりは、早とちりをして『天罰条件』と『失格条件』を混同した馬鹿だけが、運任せの勝負に挑むんだ。ハナから勝負に乗らなければいい」

見れば、たしかに残った多くの参加者が手を上げていない。

「この試験は運を試すものじゃない。いかに冷静な判断を下せるかの試験だ」

ハランはフフンと鼻で笑い、変なポーズを決めて見せる。

「だがこの偽りの堕天使、ハラン様には通じぬわ！ハァーーーッハッハッハッハァ！」

呆れたいが、何だかんだで見事に第一の試験突破のキーマンとなったハランに、何も言えずにぐぬぬと口を歪める救世と薄葉。ハランの高笑いが響く中、ほかの参加者達もこの試験からゾハルの意図と本質を見抜き、分析していた。

天才少年ナスルは鼻で笑って空を見上げる。

「馬鹿な奴らだよ。こんな簡単な事も分からないなんて」

「どういう事だ？」

ナスルはチームメイトを振り返り、呆れたような視線を送る。そして再び空の結界を見上げて、語る。

「はぁ？分からない？……簡単だって。この結界が天罰を成しているんだろう？この結界がじゃんけんの手の判定、それに反応した攻

撃、全てをこなしている?そんな高度な魔法が作れる訳ないじゃないか。要は、あいつは嘘をついてる」

「嘘?」

「結界なんて固定的な魔法に、細かい動的な条件設定はできないって事。ゾハルの手に合わせて、この手を出したら瞬時にこの手を禁じ手とする、なんて設定の結界はできないのさ。それこそいちいち条件に合わせて張り直す必要があるだろうね。だから、『じゃんけん』とは言いつつも、あいつは最初から出す手を決めてたのさ。これはただのゲームの名を借りた茶番だったってこと」

「それが、お前が手を出さなかった事となんの関係が?」

ナスルはふふんと鼻で笑う。

「だから、そんな動きに対応できるような結界は張れないっての。穴をついたんだよ。最初から出す手が決まっているとはいえ、それでも残れる確率は三分の二。此処は『天罰を受けない手』を選べばいいのだから、『出さない』が正解なんだよ。ご丁寧に『棄権は地面に伏せろ』だってさ。そんなの倒れている人間がいる括りがアウトだって教えてるようなものだよ。あの魔法陣での一括転送だってそんな細かい条件は設定できないからね。魔導を理解していれば、こんなことはすぐわかるよ。そもそも……」

ナスルの得意げな講釈に、仲間達は顔を歪めた。その長い講釈は、まだまだ続きそうだ。

「さっすがルカ！やるじゃないの！」
「まあ、じゃんけんで負けたことないから」

二人の黒髪の天使を含むそのチームも残る。ごく単純に、じゃんけんに『運良く』勝利して。運がいい天使、ルカは生まれてこの方じゃんけんで負けたことはない。

「これはそもそも冷静に魔導分析をする事を試されているんだと思います」

じゃんけんに勝利して残った明華は、ヨシエ達にこの試験に対する考察を語る。

「まず、この難解な結界。ゾハルさんは『一流の魔導士に張らせた』と言っていました。つまり、結界のコントロール権はゾハルさんにはない。彼がじゃんけんのグーチョキパーで結界設定を切り替えられる筈がないんです」
「なるほどね。ということはあの人が出す手は……」
「はい。あらかじめ決まっていたんでしょう。出したのはグー。つまりは結界は『チョキの手を掲げる者を対象にする』という設定だったんです」
「その構成情報を読み取って？」
「いいえ。こんな……行動に反応するような結界は初見でしたので無理ですよ。私が見たのは『幻術』です」

明華は目を細めて、張り巡らされた結界の下に薄い膜をはる『幻術』を、以前まんまと騙された幻術を見た。

「この『行動判定結界』の内側に、もう一枚『幻術の膜』が張られています。『ちらちらとチョキの手を見せる』幻術が」

「……刷り込みね」

ヨシエがつぶやき、明華が頷く。

「つまりは、この試験。『ルールの穴』、『結界の特性』、それか『幻術が張られている事』に気付かなければ……確実に負けるようになってます。取れる手段は二つ、『勝負に応じない事』、『幻術を見抜き逆らう事』、私は後腐れのないように後者を選びましたが、前者でもよかったみたいですね」

周囲の参加者を見渡す明華。手を上げていない者は、前者を選んだのだろう。その話をむむむと唸りながら聞く済と、その真似をするミュゲ。

「……でも、とにかくこれで分かりました」

「何がだ？」

明華はモニターに映る男を睨む。

「ゾハルさん、あの人はやる気のない人じゃない。結構な引っ掛けを用意して、容易ではないゲームを仕掛けてくるつもり満々の、大真面目な人ですよ……！」

明華の予想通り、ゾハルは適当にその場で試験を選んだ訳ではない。

以前から練った試験で、本気で参加者を潰しに掛かっているのだ。

「……それなりに残ったか。今年は中々に楽しめそうだ」

ゾハルはマイクの影で呟いた。

参加者は、じゃんけんで敗北する確立の三分の一以下にまで減っていた。これも、幻術による『絶対に勝てないじゃんけん』の効果。試験を見抜いた者が居なければ、下手をしたら全員脱落も有りうるトラップ。

それでも、まだ四桁もの参加者が残る。

「さぁッ！！次の試験をはじめようじゃないッ！！」

赤髪の女、レンダが大剣を振りかざし、大声を上げる。ちなみに彼女の声で意識の飛んだ参加者は、きっちり失格となっている。

レンダは軽く煤けた顔で、体にバチバチと電気のようなアルマを纏いながら高笑いする。

ただ一人、『天罰を耐える』という明華は勿論、その他参加者、さらにはゾハルでさえ予想し得なかった無茶苦茶な方法で残った規格外の参加者である。

勿論、それに気付いた参加者達は唖然としていた。あと、彼女の仲間も凄い微妙な表情で見ていた。

『さあて、「運の良い者達」。よく残った。早速次の選考を始めよう。』

溜め息をつき、ゾハルが再びパンと手を叩く。休む間も与えないその手早さ、それが怠惰から来るものではなく、狙ったものである事を理解した参加者は少なくなかった。

『……運の次は、「力」だな』

空の結界が消えると同時に地面に魔法陣が浮かび上がる。そして姿を現したのは、石作りの虎の像。人より少し大きいその石像は、チーム毎に一つが割り振られるように出現する。

『目の前の虎の像を砕け。時間は五分。用意始め』

「早っ！」

――

マラークと側近は、王宮の上から広場で繰り広げられる予選会の様子を見つめる。

「ゾハルの奴、随分と滅茶苦茶をしてくれる。本当に奴に一任して良かったのですかマラーク様」

「ああ。今回は少しばかり事情が違う。存分に試させて貰う」

「……天使、ですか」

マラークの目的を理解し、側近は静かに視線を戻す。

「どっせい！」

赤髪のやたらと騒がしい女が、その身の丈以上の巨大な大剣を振るい、まるで石像をバターのように両断する。

「はっ！私の作ったパンのが硬いわッ！」
「レンダのパンは鋼より硬いからな……」
「あはは、ですね」

そのチームは、女勇者レンダが率いる『レンダサークル』。規格外の台風娘の暴走で、楽々と？駒を進める。

「へぇ。付術を込めた器術かな？中々に硬いけれど、仕組みが分かればどうという事はないよ」

学士の服に身を包む少年ナスル。石像に手を添えにやりと笑う。

「『イリニ』」

その一声で、石像はその威圧を失い、放つアルマ量が大幅に減少する。それを確認して、ナスルの背後に控える男が、握るハンマーで石像を叩き壊す。

「ま、魔導の理解があればどうという事はないよ」

スマートに試練を乗り越えるは、神童ナスル率いる『コルドゥーン選抜』。

「ちっ！硬ぇよ！糞が！」

「兄貴どうする？私達、いまいち火力不足な訳だけど。なんとかならない？」

黒髪の天使天野兄妹、鼻ピアスの哲哉に、大量の黒髪を靡かせる櫛子。二人は石像を殴ったり蹴ったりしながら悪態をつく。

「私にお任せですジャ」

そんな二人の背後から、小柄な老人が小さな声を絞り出す。よぼよぼな老人は石像を睨んでぼそりと口を開く。

「『エリモス』」

途端に崩れ去る石像。砂のように細かい粒子になったそれを見下ろし、天野兄妹はけらけら笑う。

「ははは！やるじゃねぇかジジイ！」

「良かった♪頼りになる仲間がついて♪」

「お褒めに預かり光栄ですジャ」

セルセラコミュニティから送り出された、二人の出来損ない天使。
彼らはコミュニティのコマである小柄な老人と、やせ細った少女を引き連れて、このカーニバルに殴り込む。
彼らはチーム『セルセラアンゲルス』。

「ククク。此処で無駄な魔導でアルマを使う気は毛頭ないよ。ウチの商品さえあれば、ね」

何時の間にか崩落した石像を前に、かちゃりと何かを懐に収める棺桶を背負う男。世界最大規模のムディ商会を背負うその男の名はイェシン。

「流石ですボス」
「流石なのはウチの商品さ」

怪しい商人、イェシンをボスに据え、何かを狙う『ムディ商会』。
その『商品』で、彼らも試練を捩じ伏せる。

「イロアス、流石だわ……」
「先程の試練はイロイダ、君の力で切り抜けたからね。岩を砕く程度、訳ないさ。さぁ、イロイダ。僕らの愛を阻む壁は、全て破壊し尽くそう！」

「嬉しいわイロアス。あなたと一緒なら、どんな壁だって怖くない……！」
「ああ、イロイダ！」
「イロアス！」

薄く、まるで紙の様に何百枚にもスライスされた石像を前に、二人の男女は熱い口づけを交わす。それを気まずそうに見つめる残る二人のメンバー。
イロアス、イロイダ二人が率いる『愛の剣』は他の参加者とは一層違った空気を漂わせる。

「明華ちゃんばかりに頼ってもいられないわねぇ」

うふふ、と笑って、箒を構えるヨシエ。その冷たい笑顔を顔に浮かべて、軽く一言。

「消去」

石像は一瞬で消し去られる。

「さて、此処は軽く突破しようか」

ゴキリ、と指を鳴らして、その巨体を動かすダディ。無駄な小細

工は一切なしで、その岩石のような拳を石像に叩き込む。

ゴッ！！

砕け飛び散る石像の破片。それは一人の女めがけて飛んでいく。

「あ、危ない！」

薄葉が思わず声を上げるが、それは杞憂に過ぎない。女は手にした箒を操り、迫る破片を粉々に砕く。

「あ……」
「え……」

其処には兄が、妹が、今回はその仲を違えた兄妹達が集う。

「あらあら、残ってたのね」
「そっちこそ、もう落ちたかと思ったぜ」
「「……喧嘩売ってんのか？あァんッ！？」」

ダディとヨシエが火花を散らす。

他の天使兄妹達も、合わせた視線を直ぐに逸らす。その理由は様々だったが、結局はいずれぶつかり合うに違いない。

交わる事なく、天使達は衝突する。

石像砕き、それは強豪達がいとも容易く熟すせいか、一見簡単に見える競技。しかし、大半の参加者はここで消える。

それは鋼より砕き難き、ゾハル率いる研究室の、自慢の付術と器術の複合テクノロジーを組み込んだ、城塞の防衛に使う想定の防壁素材。

「今年は中々に面白そうな人材が揃ったな……」

ゾハルは笑う。楽しそうに。

集まったチームは、たった四人で城塞を落とせる程のチームなのだ。

つまりはこの大会に残るは、国の軍隊にも引けを取らない化け物ばかり。

カーニバルを毎回楽しみにしているゾハルの胸が踊らないはずがなかった。

『終了。タイムアップだ。さぁ、大分絞られてきたぞ』

あれ程残っていた参加者は、大幅に減り一気に三桁を切る。だが、これでもまだ多い。

ゾハルは更にふるいにかける。あらゆる面から優れた化け物で、カーニバルをより盛り上げる為に。

『さぁ、まだまだ行くぞ。次の選考だ』

息をつく間も与えずに、ヴォラスカーニバル予選は加速する。

ＥＰ４１：　ルナティックカーニバル（後書き）

厳しい予選を通過して、数々の強豪が遂に決勝トーナメントへと歩を進める。順調に進む天使達。しかし、其処には思わぬ戦いが待っていた？

次回、「３２」に続く

予選回。ヴォラスカーニバルの強豪が僅かながらその実力を見せます。でも、大体名前を覚えなくてもｒｙ

何だかんだで決勝トーナメント編の此処からが本番。暗躍する者も、次第にその動きを見せ始めます。

ＥＰ４２：　３２（前書き）

ヴォラスカーニバル決勝トーナメント前夜

Ep42：　32

ヴォラスカーニバルの初日、その日に予選会全てを詰め込むというアイディアを提示したのは運営を任された王宮魔導士ゾハルだった。歴代ヴォラスカーニバルでは、数日を掛けて予選会を行う無理のないペースでの大会運営だったのだが、今年はゾハルの無理を押しとおした形である。

勿論、反対意見は出た。しかし、ゾハルの主張を王マラークが許容したが為に、今回はこの厳しいスケジュールの大会が認められたのである。

知恵を試す『じゃんけん試験』。力を試す『岩砕き試験』。そして最後に行う戦闘力を試す『戦闘試験』。このハードな試験内容の奥には、あらゆる状況でも潰れないだけの計画性、先見の明を持ち合わせているかの観察という目的もある。

事実、一つの試験を突破した所で力を使い果たした、目的通りにあぶれた者も多数。まさに狙い通りといった所である。

「ゾハルさん、しかしまあ随分と上手い事絞り込めましたね」
「だな。もっと減るかと思ってた」
「あはは。これ以上減らしたら盛り上がらないですよ」

王宮魔導研究室。ヴォラス抱える優秀な魔導士が集まるこの研究室の一室に、ゾハルを中心として複数の魔導士が、汚く散乱した実験器具や書物の中で、僅かなスペースを探してカップを握る。カッ

プに入れられているのは酒。ヴォラスカーニバル初日を終えての労いの意を込めた飲み会である。

ゾハル、彼の第一助手の女ピソ、そして予選会に用いた最新魔導の運転を任せた十数人の魔導士たち。今、この部屋にいる面子はそれで全てである。

予選会は無事終了。残ったチームは３５。これはゾハルの想像よりも大分多い数となった。

「しかしまあ、ご苦労だった諸君」
「全くですよ。滅茶苦茶な術ばっかり要求して」
「鬼上司ー」
「まあまあいいデータも取れたんだからいいだろう？」
「鬼ー」
「鬼―」
「……私は鬼なのか」
「ゾハルさん落ち込まないで下さいよ！」

ピソの励ましで、酒が入ってブルーになっているゾハルは僅かながら気を持ち直す。

「長年の夢だった。ヴォラスカーニバルに関わる事が、そう。それは二十八年前の大会……」
「ゾハルさんの思い出話はどうでもいいです。それより今回の大会、ゾハルさんはどう思います？」
「どうでもいいって……」

かくんと首を傾けるゾハル。そんな事も気にせずに魔導士たちは酒が入って少し高めのテンションで、ヴォラスカーニバルの話に移る。

「賭けないか？優勝チームは何処か」
「お、いいねぇ」
「ずるいって！俺、結界展開で全く予選会見てないぞ！何処がいいのか分からない！」
「大丈夫だって。映像記録残ってるから」
「おいおい諸君。神聖なヴォラスカーニバルで賭け事など……」
「ゾハルさんはお固いなぁ。いいじゃないっすか。どうせ今回も裏で利権を巡って汚い動きがあるんですから」
「……はぁ」

ゾハルの呆れた溜め息。

「……だからこそ、わざわざ私が名乗りを上げたというのに」

言いつつも、ゾハルは心中で自嘲の笑みを浮かべた。自らが望む『神聖なヴォラスカーニバル』、それを実現する為に、自分も多少なりとも手を汚しているという事実に。彼のような何の力も後ろ盾もない人間が、今回のような強引な改革を行えたのには理由があった。

勿論、誰にも話せない。

「コルドゥーンのナスルは注目株ですよね。是非ともうちの研究室にも欲しい人材だし」
「だな。だけど俺はイロアスイロイダのバカップルのチームに注目してる。あいつらイカレてるぜ。二人の愛を馬鹿にされたってだけで、砦一つ落としたって噂だ」
「ムディ商会も最近よく名を聞くな」
「あとあいつ。『デンジャラスレッド』だっけ？レンダサークルの

レンダ。あいつも大概イカれてるらしいぜ。何でも海を泳いで渡って他所の大陸に修行に行くとか」
「嘘くさっ！……って、『デンジャラスレッド』って何だよ。あいつは『女勇者』って呼ばれてなかったか？」
「『壊れ屋』じゃなくて？」
「というか、レンダなんて名前初めて聞いたぞ？」
「セルセラコミュニティの陰に隠れてる便利屋のトップだよ」
「コミュニティと言えば、今回は大分メンバーを送り込んできたらしいなぁ」
「噂じゃズィスィのオラクル事件を解決した、伝承の天使を抱えてるらしいぜ」
「マジかよ。ああ、そう言えば黒髪が何人もいたなぁ」
「おいおい。賭けの話はどこ行ったよ？」

魔導士達のカーニバル参加者達の勝敗予想は何時しか、参加者達の噂話に変わる。それ程に、今年の参加者は異色揃い。勿論、噂する彼らが知らない顔を持つ者も多々居る。そんな異色のカーニバルに複雑な想いを馳せながら、ゾハルは苦手な酒をぐいと呷る。

「ゾハルさんは注目しているチーム、あります？賭けとか関係なしに」

隣に座るピソの問いに、ゾハルは冷めた表情で答えた。

「……やっぱり居ない」
「え？今なんて？」
「……いや。運営を受け持つ私が肩入れする訳にもいくまい」

ゾハルは小さな声で漏らした本音を誤魔化した。

彼が選んだ参加者の中にも、彼の望んだ者は居ない。

ーーーー

ザク、ザク、ザク、と土を掘り返す音が響く。

「ココ掘れわんわん♪ココ掘れわんわん♪埋まってるのは、金銀財宝♪それとも腐った屍の山♪」

夜の暗闇に似合わない明るい歌声。その歌声の主は一つの影と共に誰も居ない、花も枯れた花壇に立つ。

「犬の、おまわりさん♪困ってしまってわんわんわわん♪だって、ちょいと鼻にクル♪やっぱり死肉はノーセンキュー♪」

「なんダ、その歌ハ？」

「『あっち』の歌よん♪」

「……『あっち』は相当に悪趣味なんダナ」

「まぁ、大幅に私が改訂したんだけどね？悪趣味でごめんちゃーい」

ザク、と地面に何かを刺す音。

「しかし、何故このワタシがあんなショボイのと組まなければならないノダ？」
「嫌ならいいのよん？ま、あの二人はああ見えてあんたより強いしい～？」
「冗談はヨセ。確かにワタシは驕りハ好かんガ、実力位は理解してル」
「うふ♪そうねん♪……ま、いいのよん本当に。計画における大した誤差にはならないしね」

女の声に、嗄れた奇妙な声は返す。

「……冗談ダ。お前の計略ニ水は刺さンヨ」
「あはは♪そう言ってくれると信じてたわ（はあと）」
「……お前は嫌な女だナ。人の気持ちを踏みにじっテ」
「いいえぇ。私は人の気持ちを大切にするわよん？……だから、あなたを誘ったんじゃないの」
「む、むぅ……」

「くすくす」と女は笑う。

「あらま、照れてるー。ジョークよ？ジョーク」
「……嫌な女ダ」
「でもでもぉ？そんな嫌な女にぃ？」
「……言わせるナ」
「やだ、顔赤ーい♪照れてる？照れてる？きゃっほーい♪」

女のはしゃぐ声に、嗄れた声の主は溜め息を吐いた。

「シカシ、『この程度の奴等』ヲ、ワザワザお前が処理スル必要が

あったカ？」
「ありもあり。おおありよんっ！」

女の声が弾む。

「決勝トーナメント表。弄らないと障害が出るのよね。やっぱり然るべきイベントは然るべき場所で。イベント設定は基本よん♪」
「……まァ、期待しているゾ。お前の計略」
「こうご期待♪」

「にっこり」笑う女の影。

その足元には、何かが埋まった黒い土。

一一一一

カーニバル初日、予選会を突破した参加者達は、王宮傍に用意された宿舎が各々割り振られる。十分な施設の整った充実の環境下で、明日から行われる決勝トーナメントに備えるのだ。

予選会を突破した総勢３５チーム。この３５チームにより、決勝トーナメントは数日をかけて行われる。

宿舎には王宮から派遣される護衛兼見張りが多数控える。歴代ヴォラスカーニバルにおいて、これは欠かせないものとなっているのだ。

そうしなければならない理由がある事、ヴォラスカーニバルの裏にあるものをあえて口にする者は居ない。

空間的には広いものの、見張りの多い何処か狭苦しい宿舎の中、明日のカーニバル決勝トーナメントの緊張から、ふらりと部屋を出て歩く薄葉。もちろん緊張だけではなく、ちょっとした悩みも抱えながらの憂鬱散歩である。

部屋の並ぶ廊下、見張りの騎士のような人々に軽くビクビク挨拶しながら廊下を抜ける。男性部屋、女性部屋をきっちり分けて個々人に与えられる個室。それを分かつ、中央フロア。男部屋、女部屋への廊下が伸びる。薄葉が歩いてきたのは男部屋側の廊下だ。ちなみに、救世と済が多少部屋分けの時に運営側と揉めたが、それはどうでもいいことだろう。

ヴォラス名物天然温泉。その浴場へと繋がる廊下、その他休養用の施設へ向かう廊下、充実した設備整うその宿舎。その中心にある中央フロアには、数人の参加者が集まっていた。その中の一人は、ふと顔を出した薄葉に手を振り、声を上げる。

「おお！セルセラの天使っ！此処であったが百年目っ！ちょっとこっちに来なさいっ！！」

「……あー」

薄葉は部屋を出てきて失敗したな、と後悔する。以前、ちょこっとトラブルを起こした、その面倒臭そうな赤髪の女がそこにいた。

『女勇者』レンダ。何故かセルセラコミュニティを敵視し、薄葉達に喧嘩を売ってきたはちゃめちゃ女である。ちなみに、薄葉もレンダの予選会での滅茶苦茶を知っていた。

軽く濡れた髪にタオルを被せ、鎧や大剣を取り払い、なにやら可愛らしい、というか子供っぽいパジャマに身を包んだレンダは、中央フロアに置かれた大きな円卓に添えられた椅子に腰掛けていた。風呂上がり？その姿は多少は女っぽく見える。

どうせ無視しても食いついてくるだろうと、別段暴れだす雰囲気も、見張りの御陰でなかったので、薄葉は嫌々ながら歩み寄る。

その時から多少は気付いていたが、円卓にはレンダ以外にも数人の男女がついていた。その中に、見知った顔が居たことも、薄葉をその円卓に引き寄せた要因であった。

「イツキ……何してんだ？」
「風呂でこいつに絡まれて連れてこられた」
「災難だな。明華とミュゲは？」
「私を人柱にして部屋に逃げた」
「災難だな」

済は少し湿った髪をゴシゴシとタオルで擦りながら、そのタオルの隙間から薄葉の顔を覗く。薄葉はとりあえず、空いている席に腰を掛けた。

円卓につくのは五人。レンダ、済、薄葉の三人。そして、傍らに棺桶を置いた、白い髪と赤渕メガネが特徴的な男。そして学士の服に身を包む、少し小柄な少年。

「ふふふ……集まったわね！このレンダ様のお呼びが掛かった事、せいぜい感謝することねっ！！呼びかけを無視しなかった事は褒めてあげるわっ！！」

「呼び掛け無視されたのか？」

「う、うるさい！あいつらが無愛想なだけなんだから！決して私が避けられてる訳じゃないわっ！」

その机を囲む全員が避けられてるだろ普通に、と心を一つに通わせた。

「……それにしても何の用だよ？明日から戦う仲なのに、集まって何する気だ？乱闘したら怒られるぞ」

「ふふんっ！セルセラの天使！」

「薄葉でいいよ。長くて面倒だな」

「ウスハ！そういえばあなたは飛び入り参加だったわねっ！いいわっ！教えてあげる！これから始めるのは……」

レンダがバン！と箱を机に叩きつける！

「トランプ大会よっ！！」

……はい？

「ちょ、ちょちょちょちょっと待って下さいよ。いきなり意味が分かりません」

「ウスハ、何だか修学旅行みたいでワクワクするな！」

「いやいや、ちょっとイツキさん？なんでそんなにノリノリなんですか？」

「ふふん。子供じゃあるまいし……何がそんなに楽しみなのやら。さぁ、とっとと始めましょう」

「いや、お前子供だろ。あと、なんでそんなに机を指でカンカン叩きながらウズウズしてるんだよ」

「ふふ……返り討ちにしてやろう」

「あの……あなたもノリノリな方ですか？」

「よしっ！じゃあ何やる！？」

「何やる！？じゃないよ！なんで明日の敵と仲良くトランプやるんだよ！……って、この世界ってトランプあるんだ！初めて知った！」

薄葉は何やら臨戦態勢に入っている四人に突っ込みきれない状況に陥った。一人慌てふためく薄葉をじろりと四人は睨み、やれやれと首を振る。

「ウスハ。ノリが悪いぞ。トランプだぞ、トランプ。私、大勢でトランプとかしたことない」

「僕より年上の癖に、接待の一つもできないんですか？」

「天使君。敵になるのは明日からの話だよ？慌てなさるなって」

「な、なんで俺がおかしいみたいな空気になってるんだ？」

「ババ抜き？七並べ？ポーカー？ババ抜き？それともババ抜き？何やるっ！？」

「もう、お前ババ抜きやりたくて仕方がないんだろ！もう分かったよ！勝手にしろ！」

薄葉は腹を決めて、円卓に向かう。

そんなこんなで始められる全くと言っていいほどに関係性のない五人のトランプ大会。しかし、この時薄葉は気付いて居なかった。このトランプ大会に隠された、裏の意図に。

レンダが慣れない手つきでおたおたとカードをシャッフルする。余りにもぎこちないので、棺桶の男は「私がやるよ」とカードを受け取る。すると見事な手つきでカードを操り、カードのシャッフルをとっとと終えて、ささっと全員にカードを配り終えた。

「さ、ババ抜きでいいんだよね？始めよう」

配られたカードを見て、揃うカードを捨てる。この世界でもババ抜きとかあるのか、と薄葉は別の感動を抱きながら手札を整える。

「じゃ、じゃ、一番私ね！」

嬉々とした表情で、隣に座る棺桶の男の手札に手を伸ばすレンダ。一枚のカードに手を掛け、にっと笑う。

「私は『レンダサークル』の代表、レンダ。よろしく」

自己紹介と共に、抜き取ったカード、さらに手札の一枚をあわせて捨てるレンダ。

続いて棺桶の男が少し離れた位置に座る小柄な少年の手札に手を伸ばす。

「では次は私……『ムディ商会』の代表、イェシンだよ。よろしく」

イェシンも抜き取ったカードと、一枚の手札を揃えて捨てる。続いて、少年が離れた位置に座る済の手札に身を乗り出して手を伸ばす。

「『コルドゥーン選抜』代表、ナスルです。よろしくお願いしますよ」

にやりと笑って二枚のカードを落とすナスル。

続いて済が隣の薄葉の手札に手を伸ばす。あたふたあたふたとカードを何度かさわり、ようやく一枚を取る。

「『レディエンジェルズ』代表、済。よろしく」

「代表とか見栄張るな。しかもなんだその暴走族みたいなチーム名」

「う、うるさい」

薄葉のツッコミにむっとしながら済が手札を二枚捨てる。

薄葉も取り敢えず、周りをマネして、カードを取りながら自己紹介をする。

「チーム名とかよく分からんが、薄葉だ。よろしく」

カードが揃わない。みんな捨ててるのに薄葉だけ捨てられない。

ちょっと恥ずかしい。

「ドンマイ」

「う、うるさい」

済の意地悪な笑みに、今度は薄葉がむっとする。

「ウスハ、運がないわね！この勝負、貰った！」

「う、うるさい！」

レンダがにやりと笑ってイェシンのカードを引く。そして、ぼそりと口を開く。

「ま、明日からのカーニバル決勝、何があっても恨みっこなしだからね」

二枚のカードを捨てる。

次はイェシン。

「もちろんだよ。ああ、でも、もしもこの中で私に勝てる者がいたら、是非とも私のところの商品の宣伝を頼みたいね」

カードを二枚捨てる。

次はナスル。

「ふぅん。別に構いませんよ？僕は」

カードを二枚捨てる。

次は済。

「まぁ、こちらが困る事でなければいいと思う」

カードを二枚捨てる。

これはある種の儀式だった。

敵対関係にある者達の、特別な会話。

ゲームで友好を深めた体で行われる、儀式。

「だな。ってか、イェシンさんは商会とか言ってたけど、宣伝目的で？」

「そうだね。私としてはうちの商品の宣伝が一番の目的かな。……ま、実の所、優勝して優勝賞金も貰っていく算段だったんだけれど、ねぇ」

「どうしたんです？予選会で早速自信無くしました？」

「フフ。そうかもね」

カードのやり取りをしながら、五人は会話を交わし続ける。

「謙遜を……何か狙いでも？」

「人聞きの悪い事を言わないで欲しいなイツキちゃん。本心さ」

「ま、そういうことにしておきましょう」

イェシンと視線を合わせて、ナスルと済はにっと笑う。イェシンはというと困ったような表情を浮かべて、鼻の頭をぽりぽりと掻いた。

「ま、下らない腹の探りあいはナシよ」

レンダがぴしゃりとその火花を断ち切る。

「本当は全員と確認したかったけれど。……ま、正々堂々、明日は戦いを勇者様に捧げましょう！その為のヴォラスカーニバルだからねっ！」
「……それを言うためだけに集めたんですか？」
「……お嬢さん、変わり者だねぇ」
「……だな。余計な事は考えず、明日は精一杯やり合おう」

五人の間に、ゲームに見合った和やかな雰囲気が流れる。

「ま、確かに裏で動いてる連中は気に食わないですし」
「そこんところは協力してもいいかもね」
「ああ。確かに」
「……裏？」

一人だけ蚊帳の外の薄葉が首を傾げる。その様子を見て、レンダはわっはっはと気持ちよく笑った。

「ま、ウスハはそれどころじゃないからねっ！お風呂で聞いたわよ！妹と喧嘩してるんだって？」
「し、してないし！」
「え～？でも、アキカに聞いたらなんか嫌な顔してたけど？」
「お前はなんで他所の兄妹の事に口をはさむ！？それにいつの間に明華と！？」
「まぁまぁ、いいじゃないの！どうせ明日ケリを付けられるんだから、ここはノーサイドでこの問題解決のスペシャリスト、レンダ様が相談に乗って上げてもいいんだけれどっ！？」
「余計なお世話だ！……で、でも本当に嫌そうな顔してたか？」
「あれ？ウスハさん気になってるんじゃないですか？見栄張らないほうがいいですよ。そんな兄妹喧嘩が気になって本気出せなかったと言い訳されても、僕は嫌ですし」

「仲を取り持つのにピッタリな贈り物、紹介しようか？」
「贈り物？イェシン、そんなモノも扱ってるのか？」
「おや？イツキちゃん興味あるかい？だったら後でいろいろ見てくかな？幸運の猫の置物、贈った相手仲良くなれる魔法の指輪、お金がガッポガッポと入ってくる不思議な帽子、なんでもあるよ」
「怪しいな！」

一体何の話をしているのやら。何時の間にやら雑談に興じ始めた五人の参加者。それに吸い寄せられるように、気付けば数人の参加者や、見張りの騎士が話に混ざってくるのはもう少しあとのお話。

そして、レンダが枕投げを提案し、集まった一部の緊張感のまるでない参加者達で、壮絶な枕投げ大会を開催する事になったのは、さらにあとのお話。

そして、騎士の中でもすごく偉い人に、全員揃って早く寝なさいとこっ酷く叱られたのは、さらにさらに後のお話。

そんな修学旅行のような勢いで、参加者達の中の一部は互いに仲を深める。それに一体何の意味があるのか？それを知る者は意外と少ない。

しかしそれでも、薄葉も、済も、一部の緊張に固まっていた参加者も、その子供のようなパーティーに参加した者達は、何処か表情が解れ、少し違う心境で夜を過ごした。そういう意味では、この馬鹿騒ぎは、大きな意味を持つことになる。

―――

正と負、二つの側面を見せながら、カーニバルは廻りだす。

「3チーム、棄権だそうだ。それぞれ欠員が出たらしい」

「欠員？馬鹿な。監視は付いていなかったのか？」

「ついていた。厳重に、な。でも消えたんだ。怖気づいて逃げたんじゃないか？」

「監視に気付かれず、か？」

「……消された？」

「それも監視に気付かれずにか？」

「なら何だと言うんだ」

「知らん。だが、まあ……監視の複数の証言からも分かっている。その欠員となった参加者は、絶対に部屋を出ていない。なのに、居なくなっていた」

「……まぁ、いいんじゃないっすかねぇ？これで丁度『32』。綺麗なトーナメント表が出来上がる」

「……偶然にしちゃ出来すぎてないか？」

「はは。偶然だろう。……それを必然にしている誰かがいるとでも？」

運営側の人間の会話である。勿論、その内容が参加者の耳に入ることはない。彼らは三つのチームが棄権した、その事だけを知る。ただ、パニックになり、狂乱し、喚く仲間を一人失った三つのチームのメンバーだけが、その裏に潜む事態を知る。

三人の参加者が、煙のように姿を消して、三つのチームが、欠員により棄権した。

チームは残り３２。

―――

３２。

奇しくも、第一回ヴォラスカーニバルの決勝トーナメントに残ったチーム数と全く同じ数。三つのチームの欠場という形で、その『偶然』は現実となる。

ヴォラスの中でもかなり深い歴史を誇る『ヤドハクコロッセウム』。勇者アゲロスの像が見守るその広大な闘技場。多くの観客に囲まれる中、その中央には３２の列が並ぶ。

王の側近の騎士による開会の挨拶。それが会場に緊張の空気を張り詰めさせる。

王による短い言葉。それが会場を沸かせる。

そんな形式的な儀式を終え、遂にその時は訪れる。

『それでは皆様！大変長らくお待たせしました！私、今回のヴォラスカーニバルの司会を務めさせていただきます、王宮魔導士右門第四席、ピソと！』

『運営全般担当、予選会でお馴染みのゾハルだ』

『ゾハルさん挨拶適当過ぎます！……それは兎も角、そろそろ空気もあったまって参りました！早速始めましょう！』

『ヴォラスカーニバル、決勝トーナメント……始まりますっ！！』

わあああああああああああああああああああああ！

沸き上がる歓声。そして、始まる決勝トーナメント。

『ここから先はチームによる、歴代ヴォラスカーニバルでもお馴染みの闘技形式の競技です！対戦カードはランダムで決定！それでは第一回戦！』

第一回戦。早速、そのスポットが彼らに当たる。

空中を舞う無数の紙。それがひらりと二枚、高い位置にある司会席に立つ女、ピソの手元に舞い落ちる。

『決勝トーナメント参加チーム番号３番！「チームアミーラ」！！
そして、番号１３番！「カルディナリオス」！！』

バッ、と空から無数の光が降り注ぐ。スポットライトのようなその光が、二つのチームを照らし出す。

ＥＰ４２：　３２（後書き）

ヴォラスカーニバル決勝トーナメント遂に始動！３２の精鋭による初戦は早くも波乱の展開に？その中で真っ先に注目を浴びたのは……

次回、「全ては時の運」に続く！

まだまだ引っ張る決勝トーナメント。しかし、次回から遂にスタートです。バトル展開です。

ＥＰ４３：　全ては時の運（前書き）

決勝トーナメント編、遂にスタート。此処からが本番？

ＥＰ４３：　全ては時の運

開会式終了後、ヤドハクコロッセウムの闘技会場から一旦立ち去る参加者達。そんな中、早速、決勝トーナメント初戦に上がる事になった薄葉は非常に緊張していた。何だかんだと言って、この世界でも戦っていける力を手に入れても、こういう舞台ではドキドキする程度には普通なのである。

「おい、薄葉。緊張してるのか？」
「い、いや全然大丈夫っすよ。全然」
「フン！口ではそう言っても、足は震えているな！情けない！」
「お前が言うな！一番ガッタガタ震えてる男が！」
「ふん……情けないなお前ら。男ならどんと胸をは、ははは張って……」
「「あんたが一番震えてんじゃねーか！」」

三人のビビリ気味の男を溜め息混じりに眺め回して、救世がぽんとまずはダディの背中を叩く。そして、順に薄葉、ハランと叩いていくと、三人の情けない男達の震えは次第に収まっていく。

「はいはい。落ち着きました？」
「お、おお。落ち着いた。今何したんですか？」
「ちょっとしたおまじないですよ。ま、ガチガチに固まっていてもいいんですけどね」

救世はくすりと蠱惑的な微笑を浮かべて、すっと三人の前に出る。

「私一人で、素敵なトコロを見せてあげますから♪」

そのほんのり染まった顔を見て、薄葉はぽかんと口を開いたまま立ち尽くす。

「……へ？」

―――

『それでは早速選手の入場です！伝説多き伝承の天使、ゴッドファーザーを中心に！なんと、あの最近ノトスやズィスィで起こった大事件の解決に大きく貢献した伝承の天使を加えた、超豪華な天使チーム！ストラティゴス家の御令嬢、アミーラさんの揃えた優勝候補筆頭！「チームアミーラ」！』

司会のピソの仰々しい紹介文に、微妙な表情を浮かべながら、入場ゲートを潜る薄葉とハラン、そしてダディ。そんな三人とは対照的に、ひらりと服と髪を靡かせながら、一人様子のおかしい救世がまっ先に会場に飛び込み、歓声沸き上がる会場に手を振った。

「みんなー愛してるー！」

そうして笑顔の投げキッス。唖然とする薄葉とハラン。そして一人冷や汗タラタラなダディ。

「おい、おっさん。何した」

「……いや、今日部屋を出るとき緊張してると言ったから、こう一杯……」

「ま、まさか……酒？」

無言で頷くダディ。

「試合前に何酒飲ませてんですか！？」

「いや、一杯位ならと……」

それがこの始末である。観客席に愛想を振り撒きまくっている救世。観客席から男達の野太い歓声があがる。哀れな男達である。

しかし、一杯で此処まで落ちるとは……と、改めてこの人を酔わせちゃいけないなぁと薄葉は思う。

「それにしても、緊張を解すために飲ませたって……じゃあなんであんたは緊張してたんすか」

「……一杯で酔うような男じゃねぇよ」

「……緊張解すためにあんたも飲んだのか」

「情けない奴等だ！」

「お前も言うな」

「お前もな！」

火花を散らすハランと薄葉、威厳が損なわれて気まずそうにそっ

ぽを向いて立つダディ。一人観客席に投げキッスを振りまく救世。仲が良いのか悪いのか、少なくともチームワークが良さそうには見えない。

そんな光景を見ながら、ざわざわとざわめく会場に、気まずい状態で入場してきた相手チーム『カルディナリオス』。紹介文句も見事に会場の男達の歓声に掻き消されていた。

「ふふふ……やはり寄せ集めのチーム。チームワークは最悪のようだな」

「『ゴッドファーザー』を討ち取る最高のチャンス。四人で一人ずつ、確実に潰しましょう」

黒い衣、『隠れ蓑』に身を包み、その気配を押し殺す四人組。彼らは主、カルデナルの選んだ最強の四人。裏世界に名を轟かせる暗殺集団『侵略する黒』の精鋭。国の上層部とも繋がりを持つ上流階級カルデナルの牙である彼らは、当初の予定では危険因子とされる『ゴッドファーザー』、並びに『スイーパー』との戦闘を想定していなかった。

何故なら、本来ならその二人は、メンバーの欠落により大会参加自体がままならなくなる予定だったからだ。

しかし、『侵略する黒』のメンバーに二人の仲間を襲わせて、欠員を出させる作戦は失敗に終わった。差し向けた刺客との連絡が取れないまま、彼らは主カルデナルの「もういい。そのまま戦え」という何かに怯えたような適当な指示に従い、こうして大会決勝トーナメントまでコマを進めた。

そう。全て想定外。それは彼らの不安を煽っていたが、今、目の

前にいる四人を見て、付け入る隙は十分にあると判断した。

「まずはひ弱そうな女を狙え。そして次はあの……何か地味な奴だ。そして、あの変な奴を潰し、最後に四人がかりでゴッドファーザーを潰す！」

四人組が息を揃えて敵を捉える。そこで司会のピソの拡声魔法で大きくされた声が響き渡る。

『それでは早速決勝トーナメント第一試合を始めましょう！ルールは簡単！殺しは失格！それ以外はどんな魔導を使おうと、どんな武器を使おうと、何でもオーケー！怪我をしてもヴォラス自慢の治癒術士が控えています！闘技場と観客席の間には、超強力な結界が設けておりますので、参加者の皆さんも遠慮なしに闘って下さい！』

殺しは禁止、それだけの単純なルール。カルディナリオスの四人はふふんと鼻で笑った。

「なんて温い……所詮は子供のお遊び。命も懸けないお遊びだ。楽勝だ」

そんな余裕を見せる暗殺者達を前に、天使達は……

「……結界が周りに張ってあるって……明華のあの雷ドッカンの奴は使えるのだろうか？」

「あ。確かにそうですね～。外部から要素を引き寄せる魔法、使え

ないかもしれません。あれ？薄葉さん？明華さんを心配してるんですか～？ほれほれ～！」

「ちょ、救世さん絡まないで下さいよ……！そ、それに別に心配なんかしてないですし！」

「照れてるんですか～？ほれほれ～！」

「くっそう！この酔っぱらい！」

言いつつも顔を寄せられるとちょっと照れてしまう自分が悔しい薄葉。ハランはもう救世には関わらない方が無難だと言わんばかりにそっぽを向いている。ダディもなるべく関わらないよう腕を組んで黙る。

天使は酷く余裕だった。

『第一試合、チームアミーラ対カルディナリオス、試合開始！！』

それと同時に動き出そうとしたカルディナリオスは、戦慄した。

体中から力が抜ける感覚。まるで何かに体中のアルマを奪われている様な感覚。異様な恐怖が四人を包む。観客席も一瞬で響めく。

「な、何が起こった……！？」

それを理解するのは簡単だった。視界に入るのは、その手に握る白いタクトをリズムを刻むようにとんとんと振る女……いや、実は男、救世の姿。

救世は、超一流の器術士にして、魔具職人のミュゲから受け取った、新たな専用魔具を振りながら、くすりと妖艶な笑みを浮かべた。

「試合開始が勝負の合図ではないですよ。準備は事前にしておくもの。其処から勝負は始まってるんです」

救世は酔ってフラフラしているだけではなかった。

きちんと試合が始まる前から、試合開始の合図に合わせて動けるように、呪文の詠唱を終えていたのだ。

「ミュゲさん、凄いですね。これは私にぴったりの魔具です」

「何したんですか救世さん」

「『アルマを吸った』、それだけです」

治癒術、アルマの移動を行う魔導。それによる相手アルマの吸収。治癒術を極める救世に許された秘術。しかし、それは今まで『相手に触れること』が絶対条件であった。

「触らなくても行けるんですか？」

「ええ。この私の、ミュゲさんに作ってもらった新しい魔具、『ノートル・ダム』さえあれば」

白いタクト型の魔具、ノートル・ダム。新しい救世の魔具は、自らの技術をミュゲに伝え、力を最大限に引き出す為にその細かい機能を設定した、まさに救世専用の魔具。最高の器術テクノロジーと治癒術を複合した、凶悪な力。今見せた『遠隔アルマ吸収』はその

一端にしか過ぎない。

「糞がぁ……！」

しかし、カルディナリオスの四人も並の暗殺者ではない。力が抜ける体に、アルマを循環させて、付術により無理矢理に体を起こす。中々に使いこなすのが難解な付術を四人全員が使えるだけでも、実は大した事なのだ。

「あらら？立たれちゃいました。やっぱり、遠隔だと完全に無力化は出来ないようですね。私一人でも行けるかと思ったんですけど」

救世はくすりと笑ってタクトを止める。

「……じゃ、皆さん。後はよろしくお願いします♪私、基本的に術中は集中していて無防備ですので。しっかり守って下さいね♪」

アルマ吸収で、酒酔いに加えてアルマ酔いの症状によりさらに顔を赤くした救世が、後ろの三人にウィンクを送る。

「最初からそういう手筈だったろ。……いきなり突っ走るな」

「だって皆さん不抜けてるんですもん」

「はは。返す言葉がないです」

「フフ……ハァーーッハッハァ！任せろ……！」

三人の男が前に出る。

「「「じゃ、行くか」」」

立ち上がり、飛び掛ってきた三人の暗殺者を前に、薄葉がその敵

意に反応して動き出す。そしてダディも合わせて動く。

「向こうも後衛一人に前衛三人。丁度いい」

「すね」

薄葉とダディはそれぞれ一番近い敵に照準を合わせる。

カルディナリオスは焦っていた。

最初の手順では、自慢のスピードを生かし、速攻で女をまっ先に仕留めるつもりだった。しかし、突然の謎の攻撃で動きを封じられる。何とか立て直したものの、出遅れたのは紛れもない事実。この時点で後衛に構えた女を狙う事は難しくなった。彼らは動き出しつつ、即座に作戦を変更する。

後衛に構える男、シーカーは呪文を詠唱しながらも、照準は絞らない。相手の動きに合わせて対抗するサポート役。

リーダーのドロフォノスは、その最速を誇る付術による強化体術により、ナイフを構えて向い来る相手の要注意人物、ゴッドファーザーに照準を定める。回避重視、まずは様子見。スピードならば、彼はゴッドファーザーにも負けないと自負していた。そしてそれは思いあがりではなく、最初の接触で、その強烈な右ストレートを彼は難なく回避する。

行ける。

そう判断したドロフォノスは、左手で合図を送る。それを確認して、残る前衛の暗殺者二人は、その照準をゴッドファーザーから逸

らした。

続いて紅一点、シノが迫る地味な男に対応する。まずは様子見、彼女は攻撃の意思を緩めて、その動きを追う。

「うりゃ！」

適当な腕のぶんまわし。そこそこに早いが、まるで素人の動き。シノは余裕で身を低くし、その一撃を回避した。

一対一になんの問題も感じられない。仲間の対応を確認して、最後の一人、カーテルは残る前衛の男に目をやった。

其処から大きなズレが生じる。

カーテルは目を疑った。彼が睨んだやたらと派手で、胡散臭そうな男。その男は向かってきて居なかった。

な、な、なんであいつはあんなにも堂々と無防備で立っている！？

男、ハランは腕を組んで、足を開いて、堂々と仁王立ちしていた。まるで動く様子もなく、ただ堂々とそこに立つ。

何が狙いだ!?何かの罠か!?一体何を企んでいる!?

カーテルは予想外の動きに戸惑いを隠せない。深読みが彼のスピードを緩める。それを確認して、ハランはキッとカーテルを睨み、口を開いた。

「ハァッ!!!」

「!?」

謎の雄叫び。カーテルは思わず足を止める。

な、何だ今の!?なんだ今の!?

バカの一つ覚えのように、心中で同じ言葉を繰り返す。身構えたカーテルだったが、何も起こる気配がない。

それも当然。ハランはただ叫んだだけである。

あと、ただ突っ立ってるだけである。

(殺しは禁止。そう。どうせ殺されやしない)

ハランはタカをくくっていた。さらにはダディという男のデタラメな強さに任せて、どうせ前衛三人は一人で倒してもらえるだろうと期待していた。だから、堂々と格好よく立っていた。

しかし、意外な事に一人が此方に向かってきた。だが、正直足が震えてどうしていいものか分からない。彼は救世の治癒術による緊張解しを受けたにもかかわらず、未だに緊張していたのだ。

動けない。どうしたものか。そう考えていると、何故か遅くなる相手。そこでハランはハッタリを掛けた。

何かとりあえず叫んでみる。

するとぴたりと止まる相手。何かを警戒しているようだ。

しかし、ハランもこの後どう動けばいいのかに悩む。相手がどういうつもりで止まっているのかが分からない。何か攻撃でも仕掛けてくれれば、その意図は掴めるのだがと、悩む。いや、でも攻撃されたら困るだろ、とも悩む。

そんな二人は微妙な膠着状態に陥った。

謎の睨み合いに突入する二人に、後衛のシーカーは困る。

な、何してるんだろうあの二人。

何故か動かないカーテル。あそこをサポートした方がいいのだろうか？いや、でも特に困っているようには見えないのが現状。しかしそう思うと、尚更カーテルが何故止まっているのかが全く理解できない。

シーカーがそれに気を取られている隙に、勝負は動いていた。

ガキン！

金属の衝突音が響く。それに反応して、シーカーはリーダーのドロフォノスに目を向ける。

余裕があると思っていた。しかし、それは間違い。

ドロフォノスは、スピード以外の全てでゴッドファーザーに劣る。

突き立てたその付術ナイフは、そのゴッドファーザーの岩石の如き手に、粉々に砕かれていたのだ。

リーダーの鉄をも切り裂くナイフが割られた……！？

シーカーは其方に意識を割くのが僅かに遅れた。あの二人の異質な対立に気を取られた急いだ。即座に詠唱を終えて、発射準備を終えた魔法の照準をドロフォノス側へと向ける。しかし、その迷いと焦りが、もう一つの脅威を見落としていた。

「余所見は禁物ですよ」

ふわりと、甘い香りがシーカーの目の前に漂った。

その一陣の甘い風は、交戦する者達の間をすり抜けるように通り抜けた。

それは後衛に徹するかと思われた、女。

「は、早っ……！？」

相手を行動不能に陥れられないとはいえ、一時的に動けなくなるほどの量のアルマ。それを四人分。それを吸収した救世の内包アルマ量は、既に人二人分以上には跳ね上がっている。普段はアルマ量の少ない故に、付術でも大した力を出せない救世だが、今は恐らく、この場にいる誰よりも速く動けるだろう。

その高速移動にシーカーが反応する事は不可能。否、反応は出来ても、呪文詠唱後の待機状態にある彼は、対抗手段を持っていなかった。彼が構えるそれは遠距離魔法。目の前で怪しい笑みを浮かべる女には当てられない。

ぐっとその細い指が首に絡む。

ずずず、と体から力が抜け落ちる感覚。

「う……あ……」

「ご馳走様です♪」

体から、十分に動ける量のアルマを抜き取られ、シーカーはがく

んと膝から崩れ落ちた。ぺろりと舌を出して、救世がウィンクする。必要アルマを消費して、シーカーの魔法は不発に消える。

「ぐへっ！？」

ドロフォノスが間抜けな悲鳴と共に、顔面に突き刺さった拳の衝撃で、後方に吹っ飛び、闘技場の壁に叩き付けられる。壁にめり込み、ドロフォノスは動きを止めた。

「あ……」

シノはがくりと崩れ落ちる。動きは単調、大した相手でないと判断していた地味な男、薄葉。彼はシノが反撃に移ろうとした途端に豹変した。軽々と彼女の素早い一撃を受け流し、彼はとん、とシノに見えない一撃を叩き込む。その一撃は、シノの意識を刈り取るには十分すぎる一撃だった。

どうすればいいんだ……！？

カーテルは汗をこぼした。

未だににらみ合うハランとカーテルは膠着状態である。しかも極度の緊張状態。周りの状況に意識が向けられない。

カーテルの肩をとんとんと叩く何か。

「な、なんだ？今取り込み中……」

後ろには三人の恐ろしい笑みを浮かべる鬼が居た。

「あ……あれ？」

カーテルは顔を引き攣らせて笑った。気付けば、余裕を取り戻したハランもどたどたと「ハァーーッハッハッハァ！」と笑いながら駆け寄ってくる。

四対一。四人の天使に囲まれて、カーテルは即座に宣言した。

「……降参です」

両手を上げて、カーテルは引き笑いした。しかし、司会のピソは、運営のゾハルは首をかしげる。

「？」

「？」

「降参だっていってんだよ！！」

「大丈夫」

カーテルの首に指が絡んだ。

「楽に落としてあげます♪」

「……あ、ありがとうございます」

カーテルは全身から力が抜けるのを感じながら、謎の心地良さを

感じながら倒れた。

『い、一回戦！チームアミーラの勝利です！』

その試合光景は、一見すると、天使達が暗殺者達を手も足も出ないままに一瞬で倒していったようにしか見えなかった。

圧勝。

それに驚き静まり返っていた会場は、熱を取り戻したように沸き上がる。

わあああああああああ！

一回戦、ゴッドファーザー率いるチームアミーラは、その前評判に違わぬ試合を演じ、更なる注目を集めることとなる。

控え室には、第一回戦を映像投影魔法により観戦した参加者達が多様な反応を見せていた。

そんな中、次の試合が宣言され、驚きと喜びを示すその一室の空気が揺れる。

『第二試合！『プリプラノメノス』対『ヴォルシェーヴニク』！』

女が声を上げる。

「あ、私たちの出番のようですよ～～～！」

「え？今のがチーム名なんですか？」

少年、ルカの問いかけに、にやりと笑って女、シェーヌが答える。

「『プリプラノメノス』。かつて何処の国にも所属せず、世界を放浪した魔導士の名前ですよ～～～。どうです～？私たちのようなはみ出しものにはピッタリでしょ～～～？」

「ええ。いいわね。チーム名なんてどうでもいいわ……！」

黒髪をさらりと手で払い、椅子から立ち上がる少女。

レイラはその顔に最高の笑顔を浮かべて動き出した。

「ウスハ、とっても素敵だったわ……早く、早く会いたい、会いたい……♪さあ、さっさと殺っちゃいましょ！」

「レイラ……殺しは禁止ね」

ルカは額に手を当て、溜め息をこぼす。

はみ出しもの集団、『プリプラノメノス』。この大会に波乱を齎すそのチームが、最初の勝負に動き出す。

――

『各国から集められた一流魔導士達のドリームチーム！銀の魔導士アソス率いる『ヴォルシェーヴニク』！対するは所属なし！詳細不明！『プリプラノメノス』！』

入場ゲートを潜って姿を現すそのダークホース。彼らの、彼女らの姿に気付くものは殆どと言っていいほどに居ない。

と言うのも、そのチーム、『プリプラノメノス』のメンバーは、その全員がその正体を偽っているからだ。

レイラとルカ、二人の天使兄妹は、かつて与していた組織、オラクルの問題から。更には天使である事がバレる事による不都合から。その髪をシェーヌの変装魔法で茶色で染め上げて、顔を隠す幾つかの装飾を身に付けて、加えてレイラの特別な能力でその体格さえも

改造して、まるで別人へと姿を変えている。
シェーヌ、そして彼女が連れてきたもう一人のメンバー。二人もヴォラスに大きく関わる身の上から、その正体を偽り参加している。

「ヴォラスの人間に知られたら、少々困る事があるんですよ～～～」

シェーヌの助言により、この四人は全くの別人として、この大会に立つ。

司会の面倒な口上、それに全く耳を貸さずにウズウズと血を疼かせるレイラ。彼女の目には当然、目の前に立ち塞がる四人の魔導士など入っていない。見据えるのはその先。彼女が初めて恋した男。

「ああ、ああ、ああ、あああッ！早く、早く、早くッ！」

「レイラ。ちょっと落ち着きなよ」

「そうですよ～～～。あまり目立たないようにお願いしますね～～～」

「待ちきれないわ……ああ、不幸よ。どうしてこんなに私を焦らすの？不幸、不幸、不幸だわっ！」

がじりとその爪に歯を立てる妹に、溜め息を吐きながらも、兄、ルカは肩を叩き優しく説く。

「此処でもしも問題を起こしたら、ウスハ君とは会えないよ？」

「それは嫌！」

「だったら言うことを聞いて。……大丈夫だから」

ルカはその顔に優しい笑顔を張り付けて、初めて前に出る。

「レイラを其処まで必ず連れていくから。全部、僕に任せておいて」

口上が終わり、ピソの声が響く。

『試合開始！！』

一人、ルカは前に進む。三人のメンバーを置いて、たった一人で四人の魔導士に向かう。

「僕は運がいいから」

唖然とするレイラ。彼女は初めて、自ら前に出た兄を見た。

「大丈夫なんですか～～～？一人でも～～？」

シェーヌの問いに、ルカは後ろを振り向き微笑みを浮かべる。

「はい。僕一人で十分。無駄な手札を晒す必要なんて、ないですよ」

その微笑みは、シェーヌを震え上がらせた。

不気味。

強者の威風も、悪意の欠片も感じられないその笑顔。しかし、言い様の無い不気味さが其処には佇んでいた。言い表せないその笑顔の仮面。その正体は、オラクルで少しの間を共に過ごしたシェーヌでも理解できない。彼女はずっと、ルカをレイラのおまけ程度にしか感じていなかった。そして、それはこの兄妹を知る全ての者にも共通した感情。

しかし、レイラはぶるりとその身を震わせて、笑った。

「あいつ、本気だわ」

「え？」

レイラはルカを見下している。しかし、その運については認めざるを得ない。

「あいつ、勝つ気よ。あいつが勝つ気になったなら、きっと、誰も勝てやしないわ」

「……本当ですか？」

「ええ。例え軍隊であっても、そして私であっても」

シェーヌには信じられない。しかしルカの姿を見つめるレイラのその目は、まるで異物でも見るような、何処か恐れを秘めた目だった。

本気のルカ。運がいいだけの少年の本気に、会場が震撼する。

ヴォルシェーヴニクは各国でもトップクラスの実力を持つフリーの魔導士が集まったチーム。努力といったものではなく、生まれながらの才能に恵まれた、真の天才達である。国の研究機関に所属せずとも自らの力で魔導を極める者、天才達は、大概国の鞘には収まらない。彼らは自由。自分達の為だけに生きる。

そんな奔放な魔導士達の目的は簡単。

金と実験、ただそれだけ。

地位などに興味はない。ただ、自らの欲を満たす為の金と、自らが築き上げた力をぶつけられる玩具を探しての参加。

各地のそんな魔導士達を誘い、チームを結成した『銀の魔導士』の異名を持つ魔導士アソスは、ゆっくりと歩み寄る一人の少年を前にして、怪訝な表情を浮かべる。

「どういうつもりだ？」

試合は開始している。しかし、彼らはすぐには動かない。

詳細不明。なにやら怪しげな雰囲気を漂わせるフリーの四人組プリプラノメノス。この決勝トーナメントに残るということは、それなりの実力者なのだろう。にもかかわらず、名無し。見覚えもない相手ばかり。彼らは僅かに警戒していた。

そして警戒し、動きを待つ中、見せた初手は少年一人の前進。まるで意味が分からない。

「舐められたものだな」

魔導士の一人、ウモが苛立つ。

「一人で向かってくる？何か勘違いしてるんじゃないのか相手は」

「ウモ。挑発に乗るな」

「分かってる。様子見だ。それに、命令するな。あくまでこれは共

同戦線。リーダー面するなよ」

彼らは天才。今までに負けを知らない。故にプライドが高い。

ウモは迷わずに、瞬時の詠唱により魔法を発動させる。

「『パゴクリスタロス』」

その背後に浮かび上がるのは無数の氷柱の槍。槍は一人前進する少年に向かって、空気を切り裂き飛翔する。

ウモは氷の魔法のスペシャリスト。その魔法の中でも最低級の魔法をまずは放つ。ガードか、回避か、どちらにせよその挙動で、魔導士達は少年の実力を読み取る自信があった。

しかし、少年が取った選択肢は想像外のものだった。

「『当たるといいですね』」

少年は口元だけに笑みを浮かべて、そのままっすぐゆっくりと、歩き続けた。

「な……！？」

ウモは驚愕した。

ドドド！と氷柱が突き刺さる。地面に、壁に、あちこちに。

それは一発たりとも少年、ルカを捉える事はない。

「何をしている！外したのか！？」
「ち、違う！確実にあいつを狙った！」

そこからの光景は、常軌を逸したものだった。

飛び交う魔法の弾丸。それはひとりの少年を一切掠める事もなく、ただ周囲の壁や地面に衝突し弾けていく。
魔導士達は理解もできないその現象に、ただただ魔法を打ち続けた。

広範囲魔法。追尾魔法。

広範囲魔法は、まるで少年と相手チームを避けるように、当たらない。追尾魔法は軌道が突然乱れて地面に消える。あらゆる行動が、まるで見えない『何か』に邪魔されるように消えていく。

一人が、付術による身体強化により距離を詰め、接近戦を挑む。
突如、その拳に宿したアルマが暴発し、拳で爆発を起こす。
男は拳を抑えて転げまわる。

ありえない事だった。熟練の魔導士が、魔導の制御を失敗するなど。

「たまにはあるかもしれませんよ」

一人の足元の地面が陥没した。男は足を取られ、放とうとしていた魔法がその拍子に放たれる。浮かび上がった光の魔法弾は、ふわりと浮き上がり、転倒した男の上に落ちる。

ボン！

爆発が男に落ちた。数々の攻撃で弱くなった地盤が崩れた？偶然、その男の足元で？

「ついてないですね」

ウモは周囲を凍結させる持ちうる中で最強の氷魔法を発動させる。

刹那。

ピシシッ。

「あ」

ガシャンッ！

「有り得ない……」

ウモは地面に倒れていた。攻撃は無かった。ルカはただ、歩いていただけ。

『偶然』、闘技場を覆う、観客防護の為の結界が、砕けて降り注いだ。その大きな破片の一つが、鉄壁の雨となり凍結魔法からルカを守り、その破片が鉄槌となりウモの体を地面に叩き伏せた。

それに衝撃を受けたのは、一人残されたリーダー、銀の魔導士アソスだけではなく、ただただその理解不能な光景を眺める観客だけでなく、大会の運営を任される、結界を管理するゾハルと司会のピソも同様だった。

「有り得ないですよ……！結界が崩れる……！？国の誇る魔導砲撃でさえ防ぎきる最強の防壁ですよ！？」

「ああ、有り得ない。ヴォルシェーヴニクの魔導士達の無数の魔法があの結界を軋ませた？あの威力ならば有り得ない事ではない。しかし、余程上手く計算し尽くして結界の歪みに攻撃を当てなければあの結界は……」

ゾハルは呟く。

「……『偶然』？」

仲間である筈のシェーヌも驚愕してその光景を見つめる。

「な、なんですかあれ……」

レイラは答える。淡々と。化け物でも見るような視線を双子の兄に向けて。

「……ルカが望むだけで、全ての事象は、ルカが望むがままに転がってしまうの。あいつは『運がいい』のよ」

「運がいい……そんな次元の話ですか！？有り得ないです！」

「そう。有り得ないの。それがあいつ」

最早、誰の理解も及ばない。『本気』を見せたたった一人の少年の起こす『奇跡』が、あるいは『悲劇』が、ただただ全ての人間を凍りつかせる。

「この世界の人はみんな私を化け物と呼ぶけれど、それはとっても不幸で望ましい事だけれど……あいつのが、よっぽど化け物よ」

ルカがゆっくりと地面に突き刺さる結界の欠片の間を通り抜ける。細々と降り注ぐ破片は、まるでルカを避けるように地面に刺さる。

「な、な、なんだお前は……なんなんだお前は！？」

恐怖し魔法を乱射するアソス。その魔法の間を歩きながら、ルカは遂にアソスの肩に手を添えた。

「ただツイてるだけの人間ですよ」

アソスの肩、其処はかつて魔導の実験の際に負傷して古傷の残る弱点。しかし、ほんの少しの衝撃では開くはずのない、もう治りか

けていた傷口。しかし、無数の魔導の乱射により、僅かに緩んだその古傷に、『偶々』ルカの指先につけた指輪の突起が触れた。布の上から触れたその突起に、勿論傷口を開く力はない。しかし、ルカは結界の破片に『偶然』躓いた。思わぬバランスの崩れに、意外な程に上手く力が加わり、その傷口を突起がぐいと押し開く。

「～～～～！？」

声にならない悲鳴。

ぴしり。

近付き触れ合う二人の上の結界が更にきしむ。ルカは『偶然』、体勢を立て直した時に、その鋭い破片が落ちてくるのに気付く。

「あ、危ない」

ルカはドン、とアソスを押した。放っておけば、その破片がアソスの頭を貫いていただろう。ふらりとよろめき、アソスは後方にバランスを崩す。

ガツン。

アソスは肩の痛みに気を取られ、背後に迫る壁に気付かずに、『運悪く』そのまま後頭部を強く壁に打ち付けた。

そしてそのまま意識を深い暗闇の中に沈める。

事故。それはただの事故だった。

優勝候補の一角、最強の魔導士の集まるチーム、ヴォルシェーヴニクは、悲劇的な事故により、残念なことに運悪く全滅した。

しかし、その異常の中心に立つ少年の不気味さに、気付かない人間はその会場には殆ど居なかった。

『あ……「ヴォルシェーヴニク」の選手、全員戦闘不能です……！しょ、勝利チームは……「プリプラノメノス」っ！！』

誰も納得できない、誰も沸き上がらない、異様な勝利。

しかしそれは、そのチーム、『プリプラノメノス』が注目を浴びるには、十分すぎる勝利だった。

ＥＰ４３：　全ては時の運（後書き）

決勝トーナメント第一回戦、其処は驚異の実力者達の独壇場と化す。天才少年と妹天使達の魔導の祭典、ムディ商会の新商品お披露目会、まだ見ぬ強豪の謎が次々と明らかに。無数の陰謀渦巻く中、その渦を潰す一つの声が響く？

レイラの兄、ルカの実力のお披露目。まさにイカサマ、まさにチートのトンデモ能力です。あれ？これ誰も勝てないんじゃない？という疑問が解消されるのはもう少し後のお話。ちなみにトーナメント表はありませんので、試合が隣り合わせだからといって、レイラ組と薄葉組が二回戦であたる訳ではございません。二回戦はまたもシャッフルといった形式。

ＥＰ４４：　少し狂ったカーニバル（前書き）

☆顔文字的な何かを作ってみた！☆
０↑ジアミエンさん
　↑薄葉

０＜私の出番はまだよん
　＜何かがおかしい

ＥＰ４４：　少し狂ったカーニバル

「あれは明らかに『何かの能力』だ。俄には信じ難いが、間違いない」
「本当に信じられませんね。一体あの男の子は何者なんでしょう？」
「そう……全くのノーマーク。あれ程の不可解な能力を持つ人間が、今まで名も知られず、何処にも所属せずに居たのは些か信じられない。いや、そもそもあれ程の力が今まで知られていないのが信じられない」

崩落した結界と会場の修復、騒めく会場の中でそれを待ちながら、司会のピソと運営代表ゾハルは、『運がいい』少年の力について語り合う。

「運……それを操る魔導が存在するとでも言うのか？……興味深い」
「今回の大会、早速掘り出し物を発見ですね！」

にっこり笑うピソ。それに対して呆れ気味に首を振るゾハル。

「そういう話じゃない……」
「……あ。修復、完了したみたいです！それじゃあ早速次の試合のアナウンスを……」

ピソはゾハルの言葉を気にも留めず、再び大会の司会に戻る。

ゾハルは薄々気付いていた。
あの奇妙な少年の裏に、覚えのある陰がある事に。
しかし、一方で気付いていなかった。
その裏に、少年本人でさえ気付かない陰がある事に。

―――

衝撃的な試合、会場はあれが事故でなく少年の魔法だと思い込んでいた。

しかし、それは紛れもない『事故』。

少年は理解しつつも補足はしない。その御陰で、大会は続行されるのだ。

しかし少年は理解していなかった。

それが例え不幸な『事故』でも、大会は構わず続行された事を。

この大会の裏には、既に何かが巣食っている。それに操られている事など、誰も知る由もない。

『続いての試合は……「コルドゥーン選抜」ＶＳ「チームアミール」！』

コロッセウム、闘技スペースに繋がる廊下を、係の案内を受けながら控え室に向かって歩いていく運のいい少年の属するチーム、プリプラノメノス。暫くあの事故の処理のごたつきに巻き込まれて引っ込むのが遅れた彼らは、もう少しで控え室に辿り着くところで、場内に響き渡ったアナウンスに耳を傾ける。

「あ、もしかしてミュゲちゃんの試合～！」

それにぴこんと反応して、メンバーの一人シェーヌが目を輝かせる。シェーヌとの話で、ある程度の天使達のチームの情報を得ていたルカは、そこから次の試合内容を把握した。

「へえ。じゃあ明華ちゃんも一緒かな？」

「ええ。確かそうですね～～～。観客席に行きます～～～いや、やっぱり早く控え室に戻りましょ～～～！映像魔法で確か観戦は出来た筈ですし～～！」

「姉御。なににそんなに惚れ込んでるんすか。もしかして、突然この大会に参加したのもそれが原因ですか？」

メンバーの男が不思議そうな表情で尋ねる。しかし、シェーヌはくねくねしながらその言葉には気づいていない様子。男ははぁと溜め息をつく。

「まあ、早く部屋に戻ろう」

「別に私は興味ないわ。私はウスハの試合が見れただけで満足だも

の」
「……あれ？レイラ機嫌悪い？」
ルカはむくれる妹の顔をのぞき込む。
「……独り占めずるい」
「……あはは。ごめんごめん。でも、ウスハ君と存分に戦えるように、レイラは力を温存しないと」
「その必要はないわ。私は全然……」
「大丈夫。ウスハ君の時は、存分に戦わせてあげるから。邪魔はしないし、誰にも邪魔はさせないよ」
レイラは口を尖らせながらも、少しは納得した様子で、それでもじろりとルカを睨む。
「……絶対よ」
「はいはい」
ルカは苦笑しながらも、手に負えない妹の変化を微笑ましく思う。
このまま行けば、もしかしたら……
妹の未来を想い、そして自分の中の『欠陥』を想い、ひとりの少年のヴォラスカーニバルはひっそりと動き出す。

一一一一

結界と闘技場の修復は、あらかじめ用意されていた魔導士達の力によって迅速に終了する。本当に念の為、万が一を想定して配備されていた人員が早速役に立とうとは誰も思いはしなかった。

しかし、運営も続行可能の判断を下し、大会は何事もなく続行される。

ピソの宣言から数刻遅れて、次の試合を戦うチームが入場する。

『第一試合を見事勝ち抜いた黒髪の天使のチーム「チームアミーラ」！なんとお次はその妹にあたる天使達によるドリームチーム！此方もまた優勝候補の一角！「チームアミール」！！』

入場するのは美しき女天使達。当然の如く、会場は沸き上がる。分かりやすい会場である。

しかし、今回は、男女の歓声が入り交じる形となったが。

「……思いの外、歓声が凄いな。さっきまでこんなに黄色い歓声があったか？」

「あらあら。済ちゃん人気者ねぇ」

「？」

不思議そうに首を傾げる済。彼女はその黄色い歓声が自分に向けられている事を知らない。

「ミュゲちゃんに歓声を送ってる特殊な趣味な人は置いておいて…明華ちゃんもやっぱり人気あるわねぇ。おばさん、妬いちゃうわぁ」

くすくすと笑いながら、ヨシエは観客席を見渡す。そう語るヨシエ自身にも、観客席の歓声は降り注ぐ。それはその四十過ぎの女が、そうは見えないほどに若々しく美しいおかげでもあり、彼女の素性を知る者の尊敬の意のせいでもある。

ちなみに、ボールを抱える小さな少女に向けられる歓声は、男女のものが入り混じっているようで、それは特殊な趣味という訳ではなく、単なる子供可愛さに対する応援のようだった。

『あの「スイーパー」は勿論！今大会最年少参加！いえ、歴代ヴォラスカーニバル最年少参加となるミュゲちゃんにも注目です！』

その紹介に、歓声がさらに沸き上がる。

「まあ、それだけで喜ばれてもな……」

「まあまあ済ちゃん。こういう好意は素直に受け取るものよ。ねぇ、明華ちゃん？」

「……はぁ」

「あれ？明華ちゃん？」

「どうした明華？……あいつらの試合を見てからずっとそうだが」

「……え？え、いや、なんでもないです！大丈夫！」

度々ぼんやりとした空気を漂わせる明華に、僅かに不安を覚える

のは済。彼女は理由はともかく誰のせいかは大体分かっていた。
その内なんとかしないとな、そんな事を考えながら、眼前に姿を現す敵に集中する。

「一日ぶりです。イツキさん」

にやりとその口元を歪ませるのは、小柄な少年。学士の服に身を包み、三人の背丈の高い学生に囲まれるその少年、ナスルと済は視線を交わらせた。

「ああ、ナスル。手加減はしないぞ？」
「ええ、勿論。昨日のあれはお遊び。今日は手加減も遠慮もなしに、正々堂々言い訳ナシの勝負をしましょう」

昨日の晩、一部の参加者で行われたレクリエーション参加者二人。互いにちょっとは楽しんでいた節もあったが、ただ単に遊んでいたという程、二人も馬鹿ではない。
昨日のババ抜き勝負、枕投げ勝負から、二人は互いの能力の一端を十分に認める仲になっていた。

恐らくは、前日の接触がなければ、この勝負は意外な迄に早く決着が着いていただろうと、済とナスルは考える。

恐らくそれがなければ、油断していた。ナスルはその才と、相手が女だという事実故に。済は子供が相手だという事実故に。
恐らくその油断があれば一瞬でやられる相手、それが今の二人の認識。その仲間にも、二人は十分な敬意を払っていた。

ナスルは元々、済との接触に思惑があった。それは自分に取って代わって最年少参加者となったミュゲに対する対抗心。ただ幼いだけで注目を浴びる、それはナスルを苛立たせていた。しかし、それも誤解と分かり、彼は己の未熟さを悟った。

自分が特別だと思っていたとは、僕もまだまだ青いということか。

彼は今、むしろ喜びを覚える。自分と近い世代で、世間に力を示す者と出会えた事を。

勿論、まだまだ彼がミュゲという少女の実力を把握した訳ではない。しかし、済の実力を見て、彼はその仲間ならば、と期待を寄せた。いや、確信したのだ。

手加減は一切なし。出し惜しみも一切なし。僕の最高の魔導で、最高の戦いを見せる……！

ナスルは自分に向けられる大袈裟な紹介文を聞き流しながら、構えていた。今の彼に天才という肩書きは意味の無いものとなった。彼は既に燃え上がっていた。ひとりの魔導士として。

『……それでは……試合……開始ッ！！』

ナスルは瞬間、構えた魔導書をパラパラと開く！それは彼の魔具であり、彼の魔導の集大成。恐らくは歴史に彼の名を刻むきっかけになるであろう、革新的な大魔導。彼は温存しようと考えていたその力を、迷うことなく行使する。

「さぁ、目覚め……」

「どーーーーーんっ！！」

みしり、と変な音がした。くるくると少年の体は空中をきりもみ回転して、そのまま闘技場の壁にぶつかり、激しくバウンドしたかと思うと、べしゃりと地面に沈み込んだ。

会場中が沈黙に包まれる。

その会場の中心に立つのは、十分な高さに設けられた観客席からでも見上げる程の、高い位置に浮かぶ少女の姿。

にゅーんと天を突くように伸びるのは二本の棒。その先に取り付けられた、真ん丸球体の上に少女は乗っていた。

観客は見た。その異様な長さを誇る四肢、その内の一本、右腕にあたるであろうその棒が、一瞬、たった一瞬で伸びて、その長距離を一気に駆け抜け少年の頬を打ち抜いた場面を。

何が起こったのか、理解するのが最も遅れたのは、殴り飛ばされて一瞬でダウンしたナスルの後ろに立っていた、コルドゥーン選抜のメンバーだった。

「……あー」

済が吹き飛んだナスルを見て、申し訳なさそうに呟く。

「……ご愁傷さま」

そこで漸く、コルドゥーン選抜は状況を理解した。

「「「ナ、ナスルーーーーーー！！」」」

メンバー三人が同時に瞬殺されたリーダーの名前を叫ぶ！

「新必殺！『のびーるパンチ』っ！！」

「ひ、必殺って……殺してないわよね？」

にゅーんと縮んで、人のサイズに落ち着いたその謎の物体の上で、ブイサインを作るミュゲに、ヨシエが引き攣り気味の笑顔で尋ねる。

ナスルはというと、ぴくぴくと痙攣しているので生きてはいるようだ。しかし、気の毒な、と敵に同情さえするヨシエ。

そして更に容赦のない乙女が一人。

「『アナラビ』」

パァンッ！！と響くのは衝撃音。それと同時にコルドゥーン選抜メンバーその1が跳ね上がる。

「な、何が起こって……」

「『アナラビ』」

パァンッ！！

再び響く衝撃音、そして舞い上がるその2。一気に意識を刈り取られたナスルとその1、その2の三人のメンバーを見渡し、残るその3がその謎の攻撃の正体を悟る。

それはただの打撃。敵は、『移動して、叩いた』、ただそれだけ。

その敵は、一瞬消えて、一瞬でその姿を現していた。

「明華。今何をしたんだ？」

「ちょっと新しい魔法を試してみたの。ちょっとした移動術なんだけど、やっぱりちょっと使いにくいかな。とにかく速く動けるけど、制御がちょっと難しいの」
「まるで見えなかったが、あれは移動してたのか。……それにしてもさっきまではぼんやりしてたのに、随分と切り替えが早いな」
「……うん。やっぱり動いてた方がすっきりする」

やんわり微笑む明華。その視線が、残る一人その3に向く。

「ひっ！」

怯えるその3を見て、明華は申し訳なさそうに視線を地面に落とした。

「……うう。なんだか八つ当たりみたいなことしちゃったなぁ。反省」
「安心しろ。ミュゲよりはエグくない。それに遠慮はいらない。そういう大会なんだし」
「はっちゃけちゃっていいのよ明華ちゃん。思う存分ぶちまけちゃえ！」
「ぶちまける！」
「ミュゲちゃんはやめて！」

落ち込む明華を慰める済とヨシエ。その想いに、応えるように、明華はうんと力強く頷いた。

「はい！私、やっちゃいます！」
「え？」

明華は呪文を唱える。その早口詠唱でも、時間が掛かる程の長い

詠唱。それにより浮かび上がるのは、無数の光。まるでアルマをそのまま丸めたような、純粋なエネルギーの塊が、ぽう、と点灯する。光はまるで空間を埋め尽くすように増えていき、天井を覆う結界に達するほどに積み重なる。

「な、なにこれ？」
「あ、明華？何かこれやばいやつじゃないか？」
「アキカすごーい！」

数え切れないほどの光の玉。それは明華の呪文終了と同時に、振り上げられた腕に呼応するように震える。
そして、その腕が降り下ろされると同時にくだされるその号令と共に動き出す。

「ぶちまける！無限砲台『ヴェスカニェーチナヤ・バリシャーヤ・ヴェリチナー』っ！！！」

魔法大国アナトリ秘伝の魔導書『傾国の秘術』。それに記載された複数人での発動を前提とされた秘法。本来なら一人で行使する事など不可能、最低でも五人の優秀な魔導士を要するその魔法を、たった一人が行使する。

その異常性を理解する者は、『傾国の秘術』がアナトリの書庫の奥底に封印されてから久しい今日、皆無と言ってもいい。

　ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド
ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド
ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド！！！！！

目がチカチカする程の光球の流星群。たった一人に降り注ぐその雨は、用意された数え切れないほどのものだけではなく、更に次から次へと湧き上るように増殖する。
この魔法の概要は単純。

無数のアルマの塊を、無尽蔵に放出し続ける砲撃魔法。

その一発一発は極限にまで威力を抑え、ただアルマを固めただけの芸のない低燃費弾。しかし、まともな防具を纏わない相手を制圧するには、その一発は十分すぎる威力を誇る。

それは残る一人を制圧する為……ではなく、単純な発散。明華が自分でも気付けない「もや」を吹き払うための、単純にして最大の海に向けて発する大声。

無数の光の激流と、地面から舞い上がる砂埃。それがその３の周囲を包み込む。それに巻き込まれたその３の命運は誰の目にも明らかだった。

「…………ふう」

すっきり。

そんな言葉が似合う清々しさで、明華が放った光に負けない位に眩い笑顔を浮かべる。撃ち尽くされたらしき光の大洪水は、明華の背後から既に全て消え去っていた。そして残ったのは、立ち上る砂煙。

ふわりとそよ風が吹く。それは明華が会場を覆い尽くさんとする砂埃を払うために起こした魔法の風。もやはそよ風に攫われ、綺麗に一箇所に押し込められた。

その中から姿を見せたのは、光の球を一発も食らう事なく無傷のままのメンバーその3。彼は奇跡か明華の思いやりか、あの洪水を生き残っていた。

しかし、その圧倒的恐怖の前から完全に失神していたが。

「……気分は？」
「すっきり」
「それはよかった」

引き攣り笑顔の済とヨシエ。それに満面の笑みを返す明華と、常に満開の笑顔のミュゲ。色々と思い悩む節があった二人の乙女は、今の一暴れで大分満足した様子。

『……「チームアミール」の勝利です』

会場は今までで一番凍りついていた。人知れず、誰かがボソリと呟く。

「……怖っ」

それはまさに会場中の総意とも言える一言だった。

ちなみに、明華とミュゲ、二人の恐怖乙女を怒らせていると勘違いした二人の参加者とその仲間達が、この光景を見て本気で震え上がったのはまた別のお話。

――

それは奇妙な道具のオンパレード。会場は別の意味で沸き上がる。

伸び縮みする剣に、あらゆる傷を癒す薬。きらりと奇妙に輝きながら、あらゆる魔法を吸収する宝石。

一人、ふわりと舞う男をよそに、『ムディ商会』ボスのイェシンは淡々と、男の繰る道具について解説する。まるでそれは観客達に、

扱う商品を紹介するかのように。

「誰でも付術が使えるようになる、不思議な不思議なブレスレット。それで彼はあんな動きができるのです」

「先を見通す『先見のメガネ』。彼はこれで敵の動きを見通すのです」

「玄関に置くだけで、お金が転がり込んでくる魔法の壺。今ならお安くしておきますよ」

「おいおい！これじゃ、ただの宣伝やないかい！」

イェシンの胸をばしんと叩く部下その2。まるでコント。

「……はは。これは失礼。それではそろそろ終わりにしましょう。……これ以上は誰も得るものはない」

眼鏡の男がひらりと舞い、その手に握る商品『弱者の剣』を振るう。その剣は敵を切らず、触れた者の体を痺れさせ、自由を奪う特別な剣。

そんなこの決勝トーナメントに向いた武器をもって、ムディ商会は最初の試合を楽々と制する。

一一一一

ショッキングな光景続くヴォラスカーニバル。それはまだまだ続くようだ。

「2．7秒後、三時の方向、拡散系炎魔法出力中の下」
「了」
「一拍、前方１８０。にシールド展開」
「了」
「右、左、右、右、前方にダッシュ。足元は見ない」
「了」

しゃーん……しゃーん……

その音は、その女の声と共に響きわたった。

女が振るのは、無数の鈴が括りつけられた身の丈程の錫杖。一つ、その言葉を三人の従者に授ける度に、彼女は錫杖の底を地面に突きつける。響きわたる澄んだ鈴の音、それと共に、指示に従い従者は舞う。

まるで何かの儀式であるかのように、まるで定められた演舞を踊るように、三人の従者は鮮やかに動く。

その動きはまるで敵のチームの動きを全て見据えているかのような、伸び伸びとして当然のような動き。しかし、誰もそれを捉えることはできない。その動きから逃れる事ができない。

引き摺るような白いローブ、それとは対照的な黒いケープ、そして顔を完全に覆い隠す神秘的な金の刺繍を施した藍色のベール、手

にした黄金の錫杖とその全身をまるでカーテンに包み込んだかのような外界との交わりを遮断する装いが、女の不可思議な雰囲気を際立たせる。

そしてその『予言』は、遂に敵に一切の反撃も抵抗も赦さぬままに、全てが的中し、勝負を制する。

『し、試合終了！勝利チーム、「チームミスティコ」！！』

試合終了の宣言。それを聞いても、そのシームミスティコのメンバーは表情一つ変えない。

「……運命（おもい）通り」
「姫巫女様。お見事」
「姫巫女様。流石」
「姫巫女様。何か要りますか？」

ヴォラスの頭脳とも言われる名家、プロフィティス家の現党首、ミスティコが送り込んだのは、一人の謎多き女。既に一部には知れ渡っている、偉大なる『予言者』。

『姫巫女』。そう呼ばれる彼女は、取り巻き三人にその表情も窺わせずに、ぼそりと静かに呟いた。

「……おうどん食べたい」

一一一一

「面倒臭え」

男は何故か、だらしなく弛んだ背広を纏い戦場に立つ。当然のようにに開いたスーツの前ボタン。そこから見えるのはゆるゆるの赤いネクタイ。下に着込んだワイシャツもしわしわ。スーツのズボンもだるんと下に落ちていて、下手をしたらずり落ちてパンツ丸出しの危険なライン。

そんな男からは兎に角やる気が感じられなかった。

「トム。此処は戦場。なのにスーツ着用とはどういう事。緊張感が足りてない」

「ああ？　スーツは男の戦闘服なんだぜ？」

「誰の言葉？」

「無論、俺」

「緊張感が足りてない」

「そういうお前は気合入れすぎ」

篭って響く女の声。それは男の背後に立つ……いや、転がる大きな丸いボールの中から響く。よく見れば、それは無数の鎧や盾などの防具を寄せ集めた蓑（みの）。今やただの鎧団子と化した蓑虫女はひょっこり顔をのぞかせた。

「不測の事態に備えての当然の装い」
「まあ軽く逝こうぜ」
「不吉な響き。却下」

浮いている二人の奇妙な男女、その後ろには何故か遠慮気味に身を縮こまらせる二人の男。まるで二人の奇怪な男女に恐縮しているように、二人のメンバーは口を噤んだ。

「ふざけた奴等だ……お前達、舐めているのか？」

対戦相手が不満げに尋ねる。それにダルダル男は灰色の髪をぐしゃぐしゃと掻き乱して答える。

「……なぁ、お前等はさ、『花の美しさ』は何にあると思うよ？」

答えてなかった。意味の分からない質問カウンターに対戦相手は思わずきょとんととぼけた表情を作ってしまう。

「『花は咲き誇る姿が美しい』？　はたまた『花は散り様が美しい』？　それとも『ただ健気にそこにあるのが美しい』？　はてさて答えはなんだろうねぇ？」
「それは人それぞれなのでは？」

答えたのは対戦相手でなく蓑虫女。やはり遣り取りはこの二人だけのもの。

「はっは～ん。甘いねぇ、マリー。残念な答えだわ」
「ならばトム。貴方の答えは？」

ダルダル男はにやりと笑う。

「そもそも俺、花が美しいとか思ってねえし」
「奈落の底までダイブしろ」

無意味。無気力。まさになんの意味も実りもない下らない会話が会場に咲く。

「花より団子、団子より惰眠、それが俺学（オレがく）。気楽に生きる人間が、世の中一番有利なんだ。働いたら負けだと思っている」
「その男の戦闘服は飾りですか」
「これで外を歩けば馬鹿にされない。不思議！」
「馬鹿にされないけど馬鹿」
「言えてるー」
「お前ら、いい加減に……」

対戦相手のイライラも最高潮。奇妙な二人のおしゃべりに、試合開始後彼らは動き出せずにいる。

「ここで一句。『めんどくせ、ああめんどくせ、めんどくせ』。俺、心の俳句」
「季語は？」
「季語？　ああ、俳句って季語いるやつ？　じゃあ、『めん』でいいや。カップ麺はいつでも食えるから、季節は年がら年中だ」
「何という愚かさ。俳句の始祖に謝れ」
「めんご」
「麺だけに？」
「ラーメン食べたい」
「勝手に食え」
「じゃあ食おう」

男はにやりと笑って、しゅるりとネクタイを解いた。

「それでは皆さん、ハバグッナイ。ちょっとコンビニ行ってくる」

その一言で、ぐらりと景色が揺れた。揺れた景色に足を取られるように、対戦相手の四人はふらりと地面に倒れた。

揺れたのは景色ではなかった。四人の戦士の視界が揺れた。

まるで眠りに落ちるように、言葉を発する事もなく、四人は二人の無気力系の前に沈む。

『え？　え？　……終わり？　……しょ、勝利チームは……「なんでもいいや」……』

ダルダル男はかっかと笑う。

「いやいや、『なんでもいいや』、ってチーム名じゃねーし！チーム名なんてそっちで勝手に決めてくれよっていう……まあ、それでもいっか？」

「チーム名はさして重要じゃない。重要なのは如何にして勝つか、まけないか、それだけ」

「よーし、じゃあ俺らはこれから『なんでもいいや』だ！ははっ、全然盛り上がらねぇ」

静まり返る会場の中、欠伸しながらダルダル男は引っ込んでいく。にゅっと足を生やして、ひょこひょこ蓑虫女も征く。それに続いて二人のメンバーも去っていく。実に味気ない結末。

『なんでもいいや』を名乗る彼らは、ズィスィのとある良家から

送り込まれたチーム。『天使の血を引く一族』を名乗る、奇妙な家からの刺客だ。

そうは見えないダルダルな彼の言葉通り、会場はまるで盛り上がりを見せなかった。

今回の大会、厳しい選考基準によって選び抜かれた精鋭たちは、些かアクが強すぎたのだ。

常人には理解できないレベルの戦い。それに運営の一端を担うピソはがっかりした様子で見ていた。それは恐らく、隣に座るゾハルも同様。

しかし、ゾハルはまだ諦めない。

実力が拮抗しだすこの先の戦いならば、と淡い期待を寄せる。

手に汗握る、まともな戦いが繰り広げられるのはいつのことか？

―――

そんな状況に、不満を隠せない者は参加者の中にも居た。そして

その者は、限りなくこの大会に、この大会らしさを望むゾハルの思想と同じものをもっていた。

『続いての試合は「レンダサークル」対「愛の剣」です』

二人の男女は苛立っていた。

この大会、ここまでの展開、その醜さ、愚かさ、その全てに。

「ああ、彼らは何も分かっていないのね。イロアス」
「全くだよイロイダ。この大会の意味を全くわかってない」

入場ゲート前に立ち、二人の男女はその体を交わらせる。

「この大会は決して力を競うものではない」
「そうねイロアス。だって、それなら個人戦を開けばいいんだもの」
「そうさイロイダ。ならばなぜ、この大会はチームを組まなければならないのか？」
「簡単よイロアス。私達は試されているの」
「そうだイロイダ。チームを組む意味、それはその絆を試すため」

ぎゅっと指を絡みつかせ、二人は熱い視線を交わす。

「今までの戦いは愚かすぎる。この大会は個人の力を試す場ではない」
「そう。これは絆の試練。より強く、その絆を交わらせた者が勝ち

残る」
「そう、最も強い絆は『愛』」
「そして、その『愛』を最も深く刻むのは私達」

従者二人が目を覆いたくなるほどに、情熱的に二人の男女、イロイダ、イロアスは交じわり合う。揺るぎなき信念をもって。

「「さあ、振るおう『愛の剣』を」」

入場ゲートをくぐり、最も『愛』という絆を深く刻む、二つの美しき剣が光の元に立つ。

その眼前には、大剣を携える赤髪の女と、それを取り囲む三人の仲間。

赤髪の女の赤い瞳が二人の男女を捉える。その視線に、二人の愛の剣は意識を返す。

「……さあ、始めましょう」
「……ああ、始めよう」

イロアスはその細身の剣を突き出す。イロイダもその腕を前に突

き出す。

そして、立ち塞がる愛の邪魔者に、その言葉を投げかけた。

「「君は何が為に戦う？」」

赤髪の女は答えない。しかし、それでも構わないと言わんばかりに二人は示す。

「僕達は」
「私達は」

「「愛の為に戦おう」」

其処には、今までの勝負とはまた違った、確固たる信念が渦巻いていた。

これが、この試合が、本当のヴォラスカーニバルの始まりだった。

ＥＰ４４：　少し狂ったカーニバル（後書き）

混沌とするカーニバルに訪れる信念ある戦いが、カーニバルの流れを変える！

次回、「本当のヴォラスカーニバル」に続く！

カオスな展開、お許しください！
あっさり風味の試合が続く決勝トーナメント一回戦。この時点だと実力の落差が激しいのです。あと、ナスル君は本当はすごい人。

＜俺の顔文字空白じゃねぇか
０＜空気だしね
＜おのれ

こんな感じの茶番とお遊びを、今後も前書きと後書きに入れたいですなぁ。あっさり展開が多いだけに。名前も危うい脇役達の小話をちょいちょい挟んだり、出番のない人の小ネタを挟んだり。

ＥＰ４５：　本当のヴォラスカーニバル（前書き）

☆顔文字的な何かを作ってみた！☆

？◯？

→エストレリャさんだよ！　ロケットパンチとか飛ばす凄い人（？）だよ！　え、誰だよって？　一章をよろしくお願いします！

ＥＰ４５：　本当のヴォラスカーニバル

『愛の剣』入場に先立って、既にゲートを潜って闘技場に姿を現した赤髪赤眼の女に、降り注いだ歓声は、幼く騒がしいものだった。

「レンダー！」
「頑張れー！」
「見にきてやったぞー！」

観客席の一角、まるで応援団のように統率されたそのグループ。その多くが幼い子供で、一部見える大人はまるでその子供達の引率者のようであった。その騒がしい子供達の歓声に気付いたレンダは、その普段の幼稚さを匂わせない柔和な笑みを浮かべて、片手で身の丈を裕に越すその巨大な大剣を子供達に向けて高々と掲げた。

「ゴリラー！」
「馬鹿力ー！」
「誰がゴリラで馬鹿力だコラァァァっ！」

……しかし、すぐに普段の幼稚な大声で喚く彼女に逆戻り。その様子を見て、子供達はけらけらと楽しそうに笑った。それに対抗するように、にやりと悪戯っ子が何か企むように笑ったレンダは、ぶんぶんと剣を振り回して馬鹿でかい声を張り上げる。

「うがー！　生意気っ！　……ったく、ガキンチョ共！　刮目して見てなさいっ！　このレンダ様の勇姿をっ！」

「レンダ。『刮目』には『見る』って意味も含まれてるから『見てなさいっ！』はいらないぞ。『頭痛が痛い』みたいだ」
「う、うるさいカテナ！　ガキンチョはどうせそんなの気付かないわ！」
「レンダー！　何『頭痛が痛いみたいなこと言ってんだー？　刮目の意味も知らないのかよー！」
「……なんで早くに教えてくれなかったのよ、このインテリ貴族っ！」
「お前は馬鹿だなぁ」
「う、うがー！！」

レンダはその顔をその赤い髪と赤い瞳に負けないくらいに真っ赤にして、だんだんと地面を踏み鳴らした。

今までとはまた違った滑稽なその様子は、少しながら会場を和ませる。

「あの子供達は何なんでしょうね？」

司会席からその様子を眺めるピソが隣のゾハルに声を掛ける。ゾハルはぱらりと手元に積んだ資料を捲り、ふむ、と頷いた。

「招待客だ。あのブロック一帯は招待客席なのだが、その多くが一人の参加者に買い占められてる」
「その参加者があのレンダという女の子ですか？」
「だな」

レンダと子供達の繋がり、それまでは調査の及ばぬ範囲だったが、

それはゾハルの興味の対象外。これといって深入りする理由もなかった。それは慈善であろうとも、何かの企みであろうとも、それは大した問題ではない、微笑ましくも怪しくも思わない、それがゾハルの認識である。

レンダはふうと溜め息をつき、ずんと大剣を地面に下ろした。子供達とのコミュニケーションを終えたレンダは、抱えていた苛立ちに再び表情を沈める。

「……ったく。折角、ガキンチョ達を招待したのに……あっきれるわ。どいつもこいつも」
「何をそんなに苛立っているんですか、レンダさん？」
「趣旨を理解してない馬鹿が多過ぎるって話よ」
「馬鹿に馬鹿と言われる奴等が気の毒だな」

その男、カテナの言葉に、珍しくレンダは反応しなかった。その様子を、彼女を囲む三人のメンバーは怪訝な表情で見つめる。

「……おい、こいつ熱でもあるのか？」
「何か悪い物でも食べたんですか？」
「……解せぬ」
「あんたら私を何だと思ってるわけ？」

レンダの呆れたような大人びた対応に、とうとう雨、いや槍でも降るんじゃないかと顔を引き攣らせる三人の男達。
その表情に疑問符を浮かべるレンダは、こきりと首を回しながらウォーミングアップを始める。

そして、入場してくる二人の男女。その従者。

目が痛い程の密着っぷりを見せつける男女の紹介が響きわたる。

『チーム「愛の剣」！各地で多くの武勇伝を残す「最強のカップル」、イロアス、イロイダ率いる優勝候補チーム！その剣術と魔導技術は一度に千の兵団を落とすほどと言われております！』

適当に紹介を聞き流しながらレンダとその仲間達は、ゲートを潜り姿を現した二人の姿を見据えた。

「……で、レンダ。勝てる見込みは？」

にっと笑ってレンダが大剣から手を離す。

「無論、１２０％」

地面に突き立てた大剣。その横に立つレンダに視線を送る二人の男女、イロアス、イロイダ。それに視線を返し、レンダは表情を真面目なものへと作り替える。

そんな二人から彼女に飛ばされた言葉は、重く、鋭い二人の信念。

「「君は何が為に戦う？」」

レンダは答えない。

そんなレンダの無言の答えを、背後に立つ三人の男達は察した。

――――ああ、苛立ってるな。

「僕達は」

「私達は」

「「愛の為に戦おう」」

二人は極めて真面目に、その心に任せた何より重い言葉を吐いた。

愛の為に戦う二人。それを前にしたレンダの……

苛立ちは最高潮に達した。

「……ああ、やっぱダメ」

ゆらりとレンダの背後で、重苦しい空気が揺れた。それにゾクリと身を震わせるのは、レンダサークルの一員、笠を被った一人の男。

「……レンダ。気を鎮めよ」

レンダは言葉を放った男にその赤い瞳を傾かせる。そして、静かに、小さな声で呟いた。

「大丈夫だっての。それじゃ、始めよっか」

試合開始の宣言はまだだった。しかし、レンダとその仲間、レンダサークルのメンバー達は、静かにその胸に手を当て、頭を垂れた。その緊張感張り詰める空気に、会場中は疑問と興味の空気を漂わせながら一瞬騒めく。

白銀の鎧、赤い髪に赤い瞳、傍らにその武器である大剣を突き立てた女戦士は、背筋を伸ばして、まるで神に祈る信者のように、見えない何かに祈りを捧げた。

「勇者アゲロスに、この戦いを捧ぐ」

レンダの言葉は祈りの言葉。その言葉は、会場の観客を一度だけざわりとざわめかせた。

その言葉の意味を理解して席を立ったのは、司会席のゾハル。

「……まさか」

彼以外にも、それを理解した者は居たが、それは極少数。それは誰もが理解していない、誰もが忘れていた儀式。

「どういうつもりなの？」
「君は何か信仰でも抱いているのかな？」

イロアスとイロイダ、カップルは怪訝な表情で祈りを捧げるレンダを睨んだ。胸から握った拳を離し、すっと閉じた目を開いたレンダの赤い瞳がゆらりと赤い炎のように揺れる。

「……はぁ。馬鹿ね」
「何？」

睨み返すカップル。それに対し、レンダは大剣に手を添え、鋭い視線を送る。そこに浮かび上がるのは苛立ち、怒り、呆れ、負の感情の詰め合わせ。

「さっき私に聞いたわね？　『何が為に戦うか』って。いいわ。答えてあげる。本当なら、『答える必要もない』ことを理解していて当然なんだけどね」

『答える必要もない』。それがレンダの苛立ちの理由。レンダは語る。『何が為に戦うか』を。

「ヴォラスカーニバルの起源はかなり古いもの。この儀式は、ただのお祭り騒ぎじゃないことは理解してる？」

語りだすのはヴォラスカーニバル、その歴史。その意味を理解しかねてカップルは顔を歪めた。

「その顔、理解してない人間の顔ね。……ったく、どうしてどいつもこいつも、こうも理解が浅いの？」
「馬鹿に言われちゃおしまいだな」
「カテナ、黙れ」
背後の男を後ろ足で蹴るレンダ。
彼女は語った。

「ヴォラスカーニバル、その始まりは『勇者アゲロスを慰める』、そんな目的のためよ」

ずず、と大剣を引き抜き、レンダがまるで軽い準備運動でも始めるかのように大剣を振り回す。レンダの語りに、会場中は静まり返り、ピソも試合開始の宣言をしかねていた。

「勇者アゲロスは、この世界に呼び出されて、辛い戦いを戦い抜いた。彼には仲間がいたという。しかし、仲間は失われた。辛い戦いの末に。アゲロスは悲しんだ。彼が勇者として、この世界で生きていき、命を引き取るその時まで」

その物語は、高みから見物する王、マラークの眉を動かす。司会席のゾハルは震えた。

「そんな悲しめる彼を慰める為に、人々はこのお祭りを始めた。ひとつ、『私達は、あなたの分まで戦っていけますよ』、そんな自立のメッセージ。ふたつ、『私達は、絆を守り抜く』、勇者に示す懐かしき絆のメッセージ。みっつ、『あなたの栄光を忘れない』、戦い抜いた彼に最高の感謝を込めたメッセージ。勿論、込められた想いはもっと多かったのだと思うわ」

それを知る者はあまりにも少ない。決して忘れてはならない想いにも関わらず。

「それは感謝の気持ち。それは勇者をこんな世界に呼び出して、戦いを押し付けた謝罪の気持ち。そして何より、二度と彼のような悲しい勇者を生まないための決意。其れを示すのが、この『ヴォラスカーニバル』の最大の目的」

レンダは鼻で笑う。

「『何が為』？　決まってるじゃない、その為よ！」

その大声に、一瞬会場が怯む。

「愛？　結構よ。でも、それはあんた達の為のものでしょうよ！　でもこの戦いは、勇者アゲロスに捧げる、彼の為の戦いよ！　どいつもこいつも、私利私欲に走って！　この戦いの意味も忘れて！　恥を知りなさいっ！！」

一喝。

それは巨大な波のように、会場を揺らす。

「祭りってのはね、必ずちゃんと意味があるの！　それをないがしろにするのは先人達に対する侮辱っ！　その裏にどんな目的持とうが構わないけど、其れを忘れるんじゃないわよっ！」

説教、その締めくくりにレンダはにかっと笑って剣を構えた。

「私は勇者アゲロスに全身全霊の戦いを捧ぐっ！　その上で、誰よりも目立って、目立って、伝えてあげるっ！」

「この世界にレンダサークルありっ！！　勇者様は安心して見守ってて、ってねっ！！」

「……見事」

王マラークは静かに呟いた。

「これだ」

ゾハルは体を震わせながら、喚起した。

会場には歓声の洪水が巻き起こる。

それは誰もが想像し得なかったダークホース、レンダサークルが遂に喝采を浴びる事となるその瞬間だった。

「はん。コミュニティに対抗心燃やして目立ちたがってた奴のセリフとは思えないな」

「それはそれ！　これはこれ！　お祭りの起源くらいちゃんと調べときなさいっての！」
「レンダさんは変なところで真面目ですね」
「変なところじゃないっての！　あと、いつでも私は大真面目よっ！」
「……それは頷けないが……だが、それがお前だ」
「だな」
「そう。それが私達の認めた」

「「「レンダサークルだ」」」

『レンダサークル』。破天荒な台風娘、レンダの率いる小さな小さな便利屋チーム。それはレンダという女に惚れ込んだ、立ち位置も思想も正確も違う、三人の恋する男が彼女の周りを固めて出来た、奇妙なチーム。

とある人物はかつて語り、後に別の人物は語る。

――――生まれる時代を間違えなければ、生まれる場所を間違えなければ、彼女は間違いなく、世界の『勇者』だった。

『女勇者』レンダ。ありとあらゆるものに恵まれなかった一人の

勇者が、遂にそのベールを脱ぐ。

『試合……開始っ！！！』

熱の篭ったピソの声が闘技場に響きわたる！かつてない歓声と共に、赤髪が靡いた。

「それじゃあよろしくッ！！」

レンダがウィンクを送るのは、背後に控える仲間達。そして、眼前に構える対戦相手。大剣を引き摺る様に、白銀の鎧が戦場を駆ける！

完全にアウェー。そのカップルはその表情を苛立ちに歪ませた。

「僕らの愛をッ！！」
「馬鹿にするなッ！！」

目を見開き、イロアスがレンダに対抗するように飛び出した。細身の剣が鈍く輝く。

「馬鹿にはしてないわ。場違いと言っただけよ。素敵じゃない。……彼氏居ない歴イコール年齢の私からしたら、十分妬けるってのッ！！　うがーーー！！」

その唸りと共に、巨大剣が地を這うように、イロアスに襲いかか

る！その巨大さには似合わないかなりのスピード。しかし、『巨大さにしては』。身軽さとそのスピードが自慢のイロアスが、それを視認し回避するのは容易だった。

そして其処からはイロアスのターン。大剣を振り抜いたその体勢は、隙だらけの格好の的。

「その腕、切り落としてやる……！　薄鈍がッ！」

イロアスの剣、『アモーレ』は、鋼鉄をも切り裂く振動アルマ粒子を纏う切断力特化の凶悪な武器。

その斬撃は確実にレンダの腕を切り落とすだろう。

しかし、レンダは危機的状況で笑った。

「背中を預けるって意味、知ってる？」

振り抜かれた大剣を、レンダは僅かに傾ける。否、『裏返す』。そこには一人の男がピッタリと張り付いていた。非常にシュールなその光景に、イロアスは驚愕する。

その巨大な大剣は、レンダの仲間の一人の体を完全に隠していた。男は、気付けばレンダの突進と同時に大剣にしがみついていたのである。

「レンダさんに、手出しはさせないよ」

男は柔和に微笑み、その武器も握らぬ素手をイロアスに伸ばした。掴んだのはその手首。剣を握るその手首を封じ込め、剣の動きを封じた男は、まるで曲芸師のように剣から離れ、イロアスの手首を捻りながら宙を舞う。その頭を飛び越して、序でに手首の捻れに従う

ように体を浮かび上がらせるイロアスを空中回転させながら、しゅたん、と地面に降り立って、イロアスが地面に落ちるのを合図に前方に駆け出した。

「ありがとナルっ！　あと、よろしくっ！」
「はいはい。お姫様」

即座に立ち上がるイロアスに目もくれず、男、ナルは残る三人の敵に向かっていた。イロアスは一瞬そちらに気を取られたが、前方に再び迫るレンダの大剣に意識を戻す。

「イロイダ！」
「ええ、イロアス！」

イロイダは既に詠唱を終えている。構えた扇子から放たれるのは風の刃。

「『カテギダ』！」

ゴウ！と放たれる風の刃の照準は、向い来るナルだけでなく、その遥か後方でイロアスと交戦するレンダ、さらに後方、待機状態にある二人の敵。イロイダの魔法は、その威力だけでなく、コントロール性により、無数の敵を同時に、的確に打ち倒す。その複雑怪奇な軌道と攻撃範囲は常軌を逸する。

「当たれば腕が飛びますね」

ナルはくっと足を止める。ズザザ、と地面を足が削る音。そして、ナルが駆けた勢いは、彼の体を足を軸に回転させた。ナルはまるでバレエでも踊るかのように、その身を回転に任せながら、ぐんと急

激に背後に逸らす。ぐにゃりと９０。近く背中が反る。すっと腹の上を掠める風の刃。しかし、風の刃は複数。次はナルの足を切り落とさんと地面スレスレを走るもの。ナルは地面をたんと蹴って、その身を浮かせる。地面に水平になるように浮かぶ体はぐるぐると回る。空中、身動きの取れない格好の的であるはずのナルは、続く彼を撃ち落とさんとする風の刃を、回転に身を任せながら体を捻って回避した。

曲芸師、その名の似合う見事な回避。

地面に再び足をついたナルは、くいっと首を横に傾け、最後に自分の居るルートを通る風の刃をスレスレで躱し、再び地面をたん、と蹴って前進した。

「拍手喝采をよろしく！」

ナルは微笑み、腕を広げてのアピール。表情を凍りつかせるイロイダとその従者以外の会場は、大いに盛り上がる。

「レンダ。構うな」
「よろしくっ！　カテナ！」

ナルを通過した風の刃は、次にレンダに迫り来る！其れを迎え撃つのは、後方に控える一人の男、カテナ。そのぶかぶかの袖から飛び出すのは、鎌。そしてそれに繋がる鎖。

「んじゃ、いっちょやりますか……っと！」

カテナがグン、と腕を振り上げる。それと同時に風の刃を遥かに超えるスピードで鎖が宙を舞う！

まるで蛇。その鎖はじゃりり、と音を立てながら向い来る風の刃を目掛けて、レンダとイロアス、その剣を交わらせる二人の周囲を取り囲むように回転する。

それはイロイダにも、会場の全ての人間にも、想像のつかない光景だった。接触音もなく、その無数の風の刃は鎖の蛇に噛まれて霧散する。

ただ、回転する鎖の蛇が作り出す奇妙な円形が、じゃりりと走る美しい光景に、人々は見惚れた。

そしてその中心で、徐々にその剣を振る速度を上げていく赤髪の女勇者の豪快ながら美しい剣戟も、人々を虜にする。

まるでそれは丸い鎖の額縁の中の、一枚の絵画のようだった。

「ぐっ……！」

イロアスは歯噛みする。次第にその速さを増す大剣。打ち込む剣は盾のようなその刃に阻まれる。そして逆に振り抜かれるその剣は、受け止めるには余りにも重すぎた。受け流すのがやっと、それ程に異様な重量の大剣がイロアスの額に脂汗を滲ませる。

「やるじゃないっ！」

イロアスはにっと笑うレンダの攻撃を回避し、再びその隙を見出す。しかし、レンダのその体は、本来なら動き得ない方向へと動く。跳躍もなしに、彼女の体は後方に浮いた。その思わぬ動作に、その剣は空を切る。

「な……！？」

レンダは片手で振り抜いた剣を引きながら、『もう片方の手で握ったカテナの鎖』に引っ張られながら後退していたのだ。じゃりり、と音を立てる鎖のケージ。それに片手でぶら下がりながら、レンダはカテナともう一人のメンバーの待つ位置まで戻る。

「逃げるかッ！？」
「逃げた訳ないでしょっ！」

イロアスは挑発しつつも、自らも後ろに飛び退きながら、イロイダの様子を確認する。イロイダの護衛の従者が、その剣術によって、ナルを迎え撃っている。それに向けて無数の風の刃を舞わせるイロイダ。その無数の斬撃の嵐の前に、ナルは攻めあぐねているようだった。

「他愛ない！」

イロアスはにやりと笑んで、そのまま剣を振り抜いた。

「『カテギダ』」

風の刃、イロイダ程の精度はないが、十分な牽制となる無数の斬撃が、三人で固まるレンダ達に襲いかかる！

勿論それは牽制。距離を詰めさせない為の策。

イロアスは周囲にアルマの知覚を張り巡らせながら、勢い良くイロイダ達の乱戦に飛びいらんと駆け出した。

――四人掛かりでまずは一人！

ひらり、ひらり、と回避を続けるナル。その不意を突くように、付術の加速で一気に距離を詰めたイロアスは、その背中を貫かんと剣を構える。

しかし、イロアスは捉え間違えていた。

ナルは責めあぐねてなどいない。

誘っていたのだ。

「よろしくっ、ムサシ！」

「御意」

刀を腰にさした男が静かにその目を閉じる。ヴォラスでも、その他の国でも見慣れない奇妙な衣服に身を包む男。男の前には大剣を構えてぴょんと跳躍するレンダ、そしてそこから距離を取るカテナ。

フッ。

瞬間、レンダの姿は消えた。否、一気に四人集まる『愛の剣』めがけて飛翔していた。遅れて響くのは奇妙な音。

キンッ。

「……魅せろ。レンダ」

「ご苦労、ムサシ」

「……そちらもな、カテナ」

男、ムサシは既に一仕事を終えていた。
その一瞬の抜刀。峰でレンダの体を弾き飛ばすという瞬間的動作を捉えた者は極僅かだった。普通の人間の目には、彼はただ突っ立っているだけに見えただろう。

「レンダさん。あとはよろしくお願いします」

ナルは再び微笑んだ。そして、たん、と地面を蹴って、背後から迫る突きを、イロアスを飛び越える。ふわりと翼の様に舞ったナルは、さらにはグルグルと縦回転をしながら大剣の竜巻と化したレンダをも飛び越した。

「さぁ、派手に行くわよッ！！」

激しく縦回転する車輪の如き女は、その凶悪な大剣を、地面に向けて振り下ろす。力任せの、まるで捨て身の、荒々しい一撃。

「必殺ッ！！　レンダクラッシュッ！！」

回転の勢いを乗せた叩きつける一撃は地面にめり込む。その巨大な刃は地面を砕き、隆起させる。
自然を操る上位魔法、その一柱、大地属性を思わせる地面の隆起、飛び散る岩石。しかし、それは魔法などという技術ではなく、単純な力業。

「おのれッ……！！」

イロアスが顔を歪め、その岩石の狂乱に飲み込まれていく。

ゴウ！と激しい爆音と共に、跳ね上がる岩石が結界を叩く！叩きつけた剣の衝撃と大地の崩落が、愛の剣のメンバー達を飲み込む！

叩きつけた剣を、後ろに片腕で引き戻すレンダは、その反動と飛び散る岩石の衝突を利用してそのまま後ろにその身を浮かす。

「……やるじゃないっ……！」

レンダはくっと笑いながらもその表情を歪め、その大剣を盾のように構えて、空中で防御体勢を取る。

それに容赦なく襲いかかるのは、跳ね上がる岩石の弾幕の中から飛び出す無数の風の刃。

大剣の盾を構えるレンダ。しかし、そのガードをすり抜ける様にその風の刃はレンダの白銀の鎧とその体を掠めて、赤い線を刻み込む。

「レンダッ！！」

「大丈夫っ！」

頬の線から赤い血を滴らせながらレンダが叫ぶ。レンダを越えて襲い来る風の刃を鎖でガードしながら、カテナは歯噛みした。

「この程度ッ……！」

岩石の弾幕を薄くスライスしながら飛び出してきたのは、片腕で扇子を構えるイロイダを抱えながら飛び出してきたイロアス。岩石

弾幕の衝撃で意識が飛んでいる二人の従者とは違い、イロアスは愛する女イロイダを護りながらその危機を回避していた。

「イロアス！」
「イロイダ！」

名前を呼び合う二人は心でつながっている。その呼び掛けだけで二人は即座にその難解なコンビネーションを始動した。

イロアスは付術による強化剣術に加えて、魔法も操る魔法剣士。しかし、レンダに披露した風の刃を放つ魔法は、決して彼の得意魔法ではない。

彼はイロイダを愛している。故に、彼女の魔法も出来る限り模倣している。あれは彼の模倣魔法に過ぎず、彼の本領は辺り構わず焼き尽くす、まるで彼の情熱的な愛を示すような『火炎』にある。

しかし、それは制御のままならぬ無差別攻撃。それをイロイダはイロアスに向ける包み込むような愛の如き『風』で抑え込む。

イロイダは魔法を得意とする魔導士。更に加えて僅かな治癒術、付術の才能を持つ。イロアスに抱えられ、お荷物に見える今の彼女は、その実その二つの魔導の複合で、イロアスの肉体強化を補強していた。それにより、イロアスは一人の時より更に強力なスペックをもって機動する。

そして、二人の愛の『火炎』と『風』は、複雑に絡み合い、混じり合い、激しく燃え上がる。

イロアスの剣に纏わりつくは上級火炎魔法『フランメ』。その熱量と拡散範囲に比重を置いた大量殺戮魔法。本来なら剣に留まる筈

のないその炎は、イロイダの上級風魔法『ティフォナス』によって抑え込まれる。
強力な小型竜巻は炎の拡散を抑え、その剣に無理矢理縛り付ける。
そして風で更に増幅する炎が威力を増す。

複合魔法。複数人が魔法を同時に行使し、その複合を単純な足し算ではなく掛け算に昇華させる高等技術。

全てを焦がし、全てを引き裂く、破滅の剣。二人はそれを『愛の剣アガピ』と呼ぶ。

その危険性を、その場に居る全ての人間が理解した。

「レンダ！それは危ない！」
「大丈夫だっての！」

レンダはその恐怖の権化を前ににかっと笑った。

「これが私達のッ！」
「愛の力だッ！！」

炎と風の槍。それに向かって、着地し、前方への突進を始めたレンダはその大剣を振りかざし、真正面からぶつかっていく！

付術を施した剣であっても、恐らくは一瞬で蒸発させるであろうその灼熱の剣。それに大剣一つで向かう事は限りなく無謀。

誰もがそう思った。

「だりゃあああああッ！」

レンダの大剣が、灼熱の剣に触れる。

じゅわっ。

衝突。そして、イロアスの手が止まった。

付術とイロイダのサポートにより得た強靭な力を持って、イロアスはその大剣の超重量級の一撃を受け止めた。

レンダの大剣と、イロアスの灼熱剣は鍔迫り合いの状態に陥ったのだ。

イロアスを評価するとしたら、レンダの怪力をたとえ二人の力でも、受け止めた事があげられる。

しかし、この場で驚くべきはレンダの力。

彼女の剣は、その灼熱を完全に鎮火していたのだ。

「何故だッ！！」

イロアスの叫びにレンダは答える。

「私の大剣『海龍オケアノスの角』は、大海の力を宿した『水剣』。炎の力とは拮抗するのよ！」
「海龍オケアノスの角……！？」
「ちょっと昔に、オケアノスと海で出会って殴り合いしたときの戦利品よっ！固くて強いから気に入ってんの！」
「海龍と殴り合い……馬鹿な……」
「馬鹿じゃないっての！　……信じられないなら見せてあげるわ！」

鍔迫り合い状態を、押し合う形で飛び退き距離を取るレンダ。その大剣、海龍オケアノスの角に膨大なアルマを流し込む。

それは赤い、燃え上がる炎。

まるでそう錯覚させるかのように、レンダの背後には異様な量のアルマが溢れ出す！

「な……！」
「レンダさん。それ、もう使っちゃうんですか？」

後方で傍観するナルの言葉に、レンダは笑って返す。

「笑止ッ！　私はいつでも至って真面目ッ！　手加減ナシの全身全霊よッ！！」

大剣がアルマに満ちて、その不可思議な文様を浮かび上がらせる！

「さぁ、出ておいで……オケアノスッ！！！」

グオオオオオオンッ！！！

唸りを上げながら、レンダの背後に巨大な水流が渦巻く。其処からずぶずぶと這い出してくる、巨大な影。

青いウロコに包まれた、鋭い牙を並べたトカゲのような顔。その頭には、一本の立派な角と、折れた一本の角。ぎらりと輝く赤い瞳。その体は筋肉で隆起し、太い双腕は胸の辺りで組まれている。全身青いその巨体は、腰の辺りから下はまるで蛇のように長く伸び、それは途中で霧の様にぼやけている。それは実は、その巨大な力故の召喚容量オーバーによる一部具現だったのだが、まるでその姿は幻に浮かび上がる幻獣を思わせた。

≪レンダ呼んだか？　今日は何をして勝負する？　指相撲か？　腕相撲か？　トランプか？　それとも拳の語り合いか？≫

青い竜はその荘厳な声を響かせる。それに対し、レンダはふふんと笑って大剣を地面に突き立てた。

「今日は力を貸しなさい」
≪ほう。敵はそれ程の相手という訳か。所望の力は？≫
「無論、拳ッ！」
≪流石はお前だ≫

背後に守護霊の如く浮かび上がるオケアノスが組んだ腕を解き、

拳を構える。その下で、同じように拳を構えるレンダ。

「直接使役……召喚術……！まさか、本当に海龍を倒したのか……！」

イロアスがぎりりと歯を食いしばる。

直接使役。それは召喚術の一形式。それは召喚対象との事前の直接契約により、アルマを捧げるだけでの簡易な召喚術を可能とする特殊魔導。それに必要なのは使役召喚対象の体の一部。つまり、レンダの握る大剣は、紛れも無い『海龍オケアノスの角』ということ。

龍は実在すら疑われる伝説の生物。それを倒した。それを使役する。その凄まじさは理解するに容易だった。

イロアスは静かにその口に篭った力を解く。その圧倒的な迫力と威圧を前にして、イロアスはその腕に抱えるイロイダを見下ろし、何かを決意したような目でその体を優しく地面に降ろす。

「イロアス……？」

「すまないイロイダ」

とん。と優しくイロアスはその魔法を愛する女にかけた。

ふらりとよろめき女は目を閉じる。それを優しく支えながら、イロアスはゆっくりと地面に彼女を横たえた。

「どういうつもり？」

「勝ちの目の有無が分からない程に、僕も落ちぶれてはいないつもりだ」

レンダは僅かに眉を動かす。

「勝負を捨てたの？」

「まさか」

イロアスの目が怪しく光る。

「『我が身一つで勝ちに行く』」

「……捨て身？」

「違う。……『献身』だ！　イロイダは巻き込まない！　この身だけで！　砕いて見せよう！　我らが愛を妨げる、この障壁を！！」

イロアスはその呪文を唱える。対峙するレンダとオケアノス、それに対抗すべく行使する、いちかばちかの大勝負を。

「燃え上がれ『フランメ』ッ！！」

イロアスの賭け、それは制御不能の火炎魔法『フランメ』の強制使役。その身にその炎を纏って、無理矢理にその灼熱を抑え込む。

熱い。炎魔法を得意とするイロアスでも防ぎようのない熱量。

それを背後で眠るイロイダの為、愛する者の為に、耐え抜く。

気合い。情熱。感情論。何の根拠もないその力で、逆らう炎を人型に留める。失敗したら後ろのイロイダを巻き込んで、イロアス共々、二人は助からないだろう。

故に、失敗など有り得ない。イロイダを傷付けるものか。

それがイロアスという男の思考。一片も、彼女を守りきれない事などないことを信じて止まない愛に燃える男の姿。

彼はぶっつけ本番の奇跡を、必然として使役する。

「……わお」

≪レンダ。こいつも龍か？≫

オケアノスの間抜けな質問。それが現実味を帯びるほどに、イロアスは変容する。

炎の巨人。その呼び名が似合う、巨龍オケアノスと同等の体躯を持つ巨大な炎の塊。

炎と海、二匹の龍が、対峙する。

「……オケアノス。負ける気でしてるの？」
≪侮るな≫
「オーケー。それじゃあ……行くわよッ！！」

レンダが龍を引き連れその拳を炎の龍に向ける。炎の龍は其れに対抗せんと、同じく燃え盛る拳を向ける。

「来いッ！！！」
「言われずともッ！！！」

剣もない、それはただの殴り合い。

「必殺ッ！　『レンダラッシュ』！！！」
「うおおおおおッ！！！」

振りかざされた拳。そのタイマン勝負を邪魔する者は誰も居ない。

「うりゃ！！！」
「おおお

おおおおおおおおおおおおおおおお！！！」

何に驚くべきなのか、そんな思考さえも麻痺させる壮絶な光景。

レンダとオケアノス、二人の猛烈なラッシュ。其れに対抗するは、燃え盛る無数の腕の、激烈なラッシュ。

拳と拳の衝突。

果たして龍の拳を受け止めるイロアスの魔法が恐ろしいのか、それともその巨大な炎の腕をパンチ一発ずつでもって対抗するレンダが化け物なのか。

その衝突の幕切れは、意外な迄に、早く訪れる。

ゴスッ！

「うぐっ……！？」

炎の巨人、イロアスの足に突き刺さるレンダの拳。怯んだイロアスに、オケアノスの巨大な拳が突き刺さる。

「ごあっ！？」

レンダとオケアノスはその隙を逃さない。巨人の目線、その位置まで、地面の一蹴りで飛翔したレンダが、その拳を構えてオケアノスと並ぶ。

「ぶッッ……飛べぇぇぇぇッ！！！」

細い腕と巨大な腕。その二つが、炎の巨人の顔面を捉える。

ゴパアアアアッ！！！

激しい音と共に、巨人の体がゆらりと揺らめき、その豪炎は激しく暴れながら飛び散り、オケアノスの吐く息によってかき消される。

すたり。

地面に降り立ったレンダは、すっとすぐに一歩前に踏み出して、かき消された炎の中から姿を現したその男、イロアスに歩み寄った。

ふらり。

よろめき、前に倒れるイロアス。その体をそっと支えて、その肩に彼をもたれ掛からせて、レンダはにやりと笑った。

「……何故、支える？」

レンダの肩に顔を沈めるイロアス。最早力は残っておらず、やっ

との思いで声を絞り出している。

「試合が終わればノーサイド。でしょ？」

レンダはぽんとその背中を叩く。ぎしりと歯噛みする音がレンダの耳に転がり込む。

「惨めだ……愛の証明、それが脆くも、貴様の意志に砕かれるとは」

そんなイロアスの背中を再び、今度は強くバン！と叩き、「うぐっ」と声を漏らすイロアスに、屈託のない笑顔を浮かべたレンダは言う。

「あなたは立派よ立派。見縊ってたわ。彼女の為に燃えてたあなた、輝いてた」

「それは燃えてるんだから光って見えるだろう……」

「そうじゃないっての！　ライト的な輝きじゃないしっ！」

ぐいっとその垂れる体を片腕で持ち上げる怪力レンダ。まるで疲れを感じさせない彼女の背後から、オケアノスは≪今度は腕相撲な≫とどうでもいい約束を取り付けて消え去っていく。

しゃがんでひょいと倒れるイロイダをも肩に担いで、レンダはふうと息を吐く。

「あなた達の『愛』。私の思ってたよりずっと重かったわ。お見事。あー。運ぶの手伝ってカテナー。あと二人ー」

「……光栄だな。『女勇者』に認められるとは」

「え？　……や、やめてっての」

肩に担がれるイロアスの言葉に、ほんのり頬を赤らめたレンダは声を裏返らせた。

「そんな柄じゃないんだからっ！」

愛の剣は全員沈んだ。その全員を、運営が運ぶのを待つまでもなく、レンダサークルは入場ゲートへと運んでいく。

その激しい戦闘に、静かな切り替わりに、呆気に取られていた司会のピソは、はっと我に帰って、赤くなった頬を更に紅潮させて、力強く拡声魔法でその声を、今までにない大きさで響かせた。

『勝利チーム、「レンダサークル」ッ！！！』

彼女は叫びたかった。「レンダサークルに、そして全力でぶつかりあった愛の剣のメンバーにも、大きな拍手を！」と。しかし、運営。フェアを義務付けられた彼女はその言葉を僅かに残る理性で噛み殺した。

しかし、そんな彼女が口惜しさを感じることはなかった。

彼女の扇動がなかろうと、観客達は今までで一番の声を張り上げ、張り裂けるような拍手の音を響かせた。

熱狂、狂乱、お祭り騒ぎ。その拍手は、信念を全力でぶつけ合い、燃え上がった双方へと送られる。

「お祭りはやっぱりこうでなくちゃ」

入場ゲートを潜るレンダはにかっとやんちゃな笑みを浮かべた。

レンダサークルＶＳ愛の剣。

その誰もが期待も興味も寄せていないカードが、ヴォラスカーニバルに大きな影響を刻み込む。

それは観客だけでなく、参加者達をも突き動かす。

此処からが、本当のヴォラスカーニバルの始まりである。

ＥＰ４５：　本当のヴォラスカーニバル（後書き）

ヴォラスカーニバル決勝トーナメント一回戦。新たなる白熱を帯びて、カーニバルは姿を変える。
そして、二回戦へと駒を進めた者の、信念が交錯する？

次回、「休息の夜、初日」に続く！

レンダさんの本気モード！実は超重要ポジションだったのは彼女だったんですぜ！
実はテッラサイドの主人公ポジションとも言えるのが、レンダさんなのです。その深い部分が見えるのは、今後の展開で……

？〇？＜我が名はエストォォレリャ！
　＜何故今更出てきたし。帰れ
？〇？＜テステス
？◎？＜かぱあ
　＜うわあ。口が開いた。気持ち悪い
？◎？＜スタヴロス・トゥ……
　＜そぉい
？⊂　⊃？＜ぎゃあ

茶番、お許しください！エストレリャさんってなんなんだー？
Ａ：一章のロケットパンチ
ちなみに空白一つは薄葉さん。薄葉さんって誰なんだー？
Ａ：それを私に聞かれましても……

＜ひでぇ

それにしてもなんでエストレリャさんなんだ……（自問自答）？

０ノ.ｉ―Ｄ　＜スコップぶつけんぞコラァ

Ｅｐ４６：　休息の夜、初日（前書き）

今回はバトルなし。大会の合間のお話

ＥＰ４６：　休息の夜、初日

『「ネア・セリニ」の勝利っ！！　これにてヴォラスカーニバル決勝トーナメント第一回戦は全て終了です！』

司会の言葉に、観客席から巻き起こる拍手。満身創痍で相手チームに勝利した最終試合を戦ったネア・セリニは、観客席の歓声に頭を下げながら応えると、フラフラとよろめく足取りでゲートに戻っていった。

奇妙奇天烈、まるでこの大会自体には興味がないような戦いぶりを見せていた参加者が目立った前半戦、それとは打って変わって、レンダサークルと愛の剣の試合以降、参加者達の目付きと雰囲気はより鋭く研ぎ澄まされたものとなっていた。

勿論、祭りの趣旨とはいえ、この大会において、試合開始前の挨拶の義務などない。

しかし、後の参加者達の多くは、律儀に頭を下げ、相手チーム、そして勇者アゲロスに対して敬意を送った。試合終了後は固く握手を結び、健闘を讃える場面も多く見られた。

更には、前半では実力差が大きいカードが多かったのか、後半では接戦らしい接戦も多く見られた。手に汗握る試合、ギリギリの攻防、最後の最後の大逆転、観客を大いに沸かせる無数の試合が展開されたのだ。

完全にカーニバルの空気が変わっている。それは誰もが感じ取れ

る事ができる事だった。

『それでは第一回戦を勝ち抜いた偉大なる戦士達を、改めてご紹介っ！』

ヴォラスカーニバル決勝トーナメント第二回戦進出チーム１６組。その全容が再び上空に浮かぶ映像魔法に浮かび上がる。

兄天使の集う『チームアミーラ』。強運で生き残った『プリプラノメノス』。妹天使達の集う『チームアミール』。奇妙な道具のオンパレード『ムディ商会』。予言者姫巫女率いる『チームミスティコ』。その戦い適当『なんでもいいや』。女勇者率いる個性派『レンダサークル』。召喚術士の集団『ヴィーゾフ』。

魔導料理研究家の集団『キャンディレイン』。セルセラコミュニティの送り込んだ刺客『セルセラアンゲルス』。魔導格闘道場『魔闘会』。特徴なし『匿名希望』。各地の名だたる戦士の集まり『最強軍団』。各国の騎士団の元メンバーが手を結んだ『騎士連合』。謎多き魔導、錬金術使い『金の鐘』。無難な戦闘、器用な魔導、オールマイティー『ネア・セリニ』。

個性派チーム揃いのベスト１６。其れに観客は惜しみない歓声を贈る。

『それでは今日の試合はここまで！　第二回戦は明日からの開催となります！！』

ヴォラスカーニバル初日はその幕を下ろす。湧く観客達は、翌日からの第二回戦に心躍らせながら会場を後にする。

しかし、戦いに期待寄せる彼らとは違い、参加者達はまた別の動きを見せ始める。

一一一一

夜。

参加者達には平等に次の戦いを万全の状態で迎えられるように、疲れを癒すように、十分なケアが施される。優秀な治癒術士による治療、十分な食事、休息、その他様々なサービスにより、翌日の大会に備える者、今日の疲れを癒す者は、参加者宿舎内を徘徊する。

そして、その中には、明らかに違う意図をもって動き回る者も居る。

薄葉は今日こそゆっくり休もうと、割り振られた部屋で寛いでい

た。ベッドに横たわり、はぁ、息を吐く。
昨日はあのレンダに連れ回され、ろくな休息も取れなかった。しかし、レンダは何やら複数の参加者に囲まれていた様子で、今日は薄葉に構っている場合ではなさそうだった。
これで俺を邪魔する者は居ない。
そんな甘い考えでいた薄葉を、嘲笑うかのようにその扉は音を立てた。
コン、コン
ノックの音。薄葉は嫌な予感に顔をしかめた。
心当たりは複数ある。果たしてその内誰なのか。何度も、何度も、繰り返されるノックを聞き、訪問者は去るつもりはないのだと悟った薄葉は嫌々扉に歩み寄り、僅かに開いて様子を伺う。
明華？　いや、今は様子がおかしいし、ないだろう。　ミュゲ？　いや、嫌われたし、ないな。　イツキ？　いや、イツキ個人が訪ねてくる用事が思いつかない。……いや、言い出したら、薄葉目的で訪ねてくる用事のある人間が思いつかない。
……それはそれで……と、変な落ち込み方をしながらも、薄葉はその訪問者をじっと見つめた。
それは思いもよらぬ訪問者。まるで面識のない相手だった。
ベールで顔を覆い隠し、はぁはぁと色っぽい息を漏らし、よろりとよろめく不思議な女。その特徴的な姿を、流石に薄葉も、普通に

覚えていた。

「……姫巫女……だっけ？」

「……は、はい」

息絶え絶えに女は頷く。女は『チームミスティコ』を率いる、姫巫女なる者。まるで未来を見通すかのような細かな予言で、仲間を操り、相手に何もさせずに勝利したという、かなり印象的な相手である。

しかし、そんな彼女と、薄葉は何の関わりもなかった。その心当たりも当然。

「な、何か用でも……？」

恐る恐る尋ねる薄葉。扉から顔を出した薄葉のその腕をぎゅっと握り、ぶるぶる震える姫巫女は、ようやく言葉を吐き出した。

「な、なんでもいいので食べ物を戴けないでしょうか……」

本当に予想外だった。

一一一一

ベールをまくり上げ、もしゃもしゃと部屋に置かれていたフルーツの盛り合わせから、腹持ちがいいからとバナナを集中的に食べ始めた姫巫女。そう、各部屋にはそんなフルーツやらの食料が備えてある。にも関わらず、何故、姫巫女は薄葉の部屋まで訪れて、わざわざ食料を要求したのか？　薄葉はその裏に何か思惑があるのかもしれないと警戒した。

「それにしてもよく食うな」

「もむ……おああふいひゃっへおああふいひゃっへ」

「飲んでから喋れ」

姫巫女（笑）である。姫とか巫女とか、そんな言葉が勿体無い位にアレな人である。まくり上げたベールの下には、そこそこ美麗な顔立ちが佇む。でも、頬を膨らませながらむぐむぐ言っている姿はアレである。

「ごっくん。……ふう。もうね、お腹空いちゃってお腹空いちゃって……ここ最近ロクに食べてないんですよ」

「何で？　部屋に食べ物ないのか？」

「没収されましたよ。私、予言する前は食べるの禁止されてるんです。身を清めるー、とか言っちゃって。もうね、辛いのなんのって。あの人ら、早速部屋にやって来て食べ物全部持っていきやがるんです。飢え死にするかと思いましたよ」

「……それって俺が食べ物あげたのバレたらまずくない？」

「ドント、ウォーリー、ヒゲソーリー。全く問題ナッシング。それも考えあなたを訪ねたんですし」

ごそごそとフルーツのバスケットを漁りながら、姫巫女は鼻歌混じりにリズムに合わせて首を振る。薄葉は正直、どういうリアクションを取っていいのか分からなかった。

「……なんで俺を？」

「全て運命通り。あなた、参加者中で一番影薄いですし。うちの使いもまさかこの男の所には来ないでしょう、と思うだろうという論理的思考によるチョイスです」

「ひでえ！」

「ま、それは冗談として。使いが来なくて、尚且つ食べ物をくれる心優しい殿方が、あなたしかいなかったというだけです。そう、すべて運命通り」

「……さっきからあんた一体なんなんだ？　『おもいどおり』とかなんとか……」

林檎を取り出し、がぶりとかぶりつく姫巫女。綺麗に歯型のついた林檎を眺めながら、姫巫女はするりと顔を覆い隠すベールを脱ぎ去った。はらり、と頭を隠していた布が退き、その長い黒髪が垂れ下がる。それに驚き目を見開く薄葉に、唇を三日月のように曲げた姫巫女は、今更の自己紹介を始める。

「私は何か、その問いに答えましょう。私は『姫神美命』。『予言』の才に恵まれた、ヴォラスの地の天使です」

やはり、とそれでも驚く薄葉に、姫巫女、姫神美命は突然、真面目な表情を浮かべて告げる。

「今日、此処を訪ねたのは、お腹を満たす為……そして、あなたに御告したい事があってのことです」

林檎をもうひと齧りして、姫神が告げる。

「ひへひほくあふへ」
「一旦食うのをやめろ」
「ごっくん。食うのはやめたくない」
「なら満足したらにしろ」
「ＯＫ。じゃあ、ちょっと調理場行っておうどん貰ってきてもらえませんか？」
「……お前……！　ああ、もう、分かったよ……」

と、言いつつ、普通に部屋を出ていく薄葉。

「全ては運命通り……！」
「やっぱり持ってこない」
「ごめんなさい。おうどん食べたいです」

薄葉は結局、面倒なのに絡まれたと額に手を当てうつむいた。

薄葉が、ヴォラスの天使、姫神に絡まれているその時……他の場所でも天使を巻き込む動きはひっそりとその影を見せ始める。

一一一一

其処には黒髪の二人の男女が居た。

「どうして？　どうしてあなたはそんな道を選ぶの？　あなたなら、王の下でも……」

「柄じゃねぇのさ。そういうのは」

男は疲れたように首を振った。

「それに『選ぶ』、なんて大層な事ぁしてねぇよ。お前と同じ場所に居る度胸はねぇ。そんな時に声を掛けられた。だから、俺は今の道に居るだけだ。お前と違って、俺は自分の生き様も決められねぇ小心者だからよ」

「そんなこと……私だって……」

「言うな」

男は女の言葉を遮った。白い鎧を身に纏うその女は、黒いスーツで闇に溶け込む男に歩み寄る。

「私だって、『あの時』のことを忘れられた訳じゃない」

「だが、お前は引き摺ってねぇ。立派なもんさ。今や国の中心になる、立派な騎士になっちまって」

「あなたは……ずっと……？」

「情けねぇよな。男らしくねぇ。俺はずっとあの時から離れられねぇのさ」

「……」

「俺は『マヤ』に惚れてた」

女はその目をぎゅっと細めて、唇を噛んだ。それは悔しさ。それ

は悲しみ。彼女はかつて恋した、今でも恋するその男の、そんな言葉が辛かった。

「……やっぱり、あなたは……王を、ヴォラスを恨んでいるの？」

「そこまで腐っちゃいねぇよ。そこまで、な」

「やっぱり……淑恵も？」

「あいつの事はてんで分かりゃしねぇよ。だが、まあ……あいつだって俺と同じだろ。自分で選ぶ度胸も、ヴォラスに身を捧げる勇気もねぇ。ただ、与えてくれるあの兄妹に甘えてるだけなんだよ」

素っ気ない男の態度に、女は潤む目を隠して、忠告する。

「これは昔の仲間としての忠告。『血迷わないで』」

そうとだけ言い残し、女は男に背を向け去る。男は煙草を蒸す。

「……さて、どうだか、ねぇ。『誰が本当に血迷ってるんだか』……」

男はくくっと笑い声を漏らした。

「なあ、淑恵」

男が声を掛けたのは、女が去りゆく方向の、また逆。その影から姿を見せた淑恵は、冷めた瞳を男に向けて、静かに呟いた。

「……巌。あなたも……」

「ったく、急に掌返したように……ああ、もう！」

赤い髪をくしゃくしゃと掻き乱し、女勇者レンダはようやくギャラリーを振り払い、目的の場所へと向かっていた。彼女はそもそも、ひとりの参加者と話をするために歩いていたのだが、複数名の参加者に捕まってしまっていた。派手な口上、海龍召喚と、とことん目立った彼女は、元より願った事が叶いつつも、今はそれはそれで鬱陶しいと感じ始めていた。後先を考えないタイプなのである。

そんな彼女も、目的の参加者を見つけた途端に、すぐさまその表情を不機嫌なものからご機嫌なものへと作り替える。彼女は切り替えが早いタイプなのである。

「ごめんごめん。待った？」
「全然大丈夫ですよ。大変そうですね」
「そっちもさっき囲まれてたでしょ？」
「あはは……ちょっと派手に暴れすぎちゃいましたから」

苦笑いして、中央フロアで待っていたのは黒い髪の天使と呼ばれる参加者。レンダは周囲を見渡して、またも髪を掻き乱すと、むむ

と唸って踵を返す。

「ここじゃまた面倒だからさ、私の部屋来ない？」

「いいんですか？　なら……お邪魔します」

その天使の名は明華。一見、何の共通点も持たない二人の参加者は、ひっそりと会合の約束を取り付けていた。

一一一一

「汚くてごめんね。今、座る場所空けるから」

レンダの部屋は、酷くものが散乱した、言葉通りに汚い部屋だった。ほんの少し前に入ったばかりの筈の部屋は、巨大な剣に無数の本、小物や何やらと、狭く感じるほどに埋めつくされていた。

レンダはベッドの一角に積まれた本の山を持ち上げ、脇にどかす。

「さ、座って」

「ありがとうございます」

明華は空けられたベッドに腰を下ろし、脇に置かれた本に視線を落とした。そこに積まれているのは、『ヴォラスカーニバルの歴史』なる本。明華の視線に気付いたレンダは、尋ねられる前に答えた。

「読みたきゃ読んでいいわよ」

「あ、はい。レンダさんはこれを読んで？」

「そうそう。私、物覚え良くないけど、そういうのは覚えられんの。読むなら教科書より物語って感じ？」

明華は促されるままに本を開いた。其処には大体のヴォラスカーニバルの成り立ちが書かれていた。とはいえ、天使の伝承を辿るには、勇者アゲロスに関する記述は曖昧な物語風のもののみで、心許ない。明華は、それをひとつの物語として楽しんだ。

目を通し、レンダの口上そのままに近い物語を胸に仕舞い、明華は横に座るレンダの横顔を覗き込んだ。

「……なにか、申し訳ないです。私、こんな事に全く目を向けてなくて……自分の感情を発散する為に暴れちゃって。レンダさんの言葉で、目が覚めて、何だか自分が恥ずかしくなっちゃいました」

明華は反省していた。レンダの口上が、彼女に与えた打撃は大きい。彼女もまた、ヴォラスカーニバルを何処か軽く見ていた一人だったからだ。

そんな彼女に、レンダは意外にもにかっと笑って思わぬ言葉を発した。

「何言ってんだか。いいのいいの。アキカは天使でしょ！　あんたは感謝される側！　何重く受け止めちゃってんの！」

「え？」

ばんばんと明華の背中を叩いてレンダは笑う。

「言ったでしょ？　この世界に呼び寄せて、戦わせてる勇者様に感謝を、って。それ、アキカ達も込みなのよ？」

「そんな……私は、私達はそんなものじゃ……」

「申し訳なくて仕方がないわ、全く。私らこの世界の人間が不甲斐なさ過ぎて、あんた達に迷惑かけてね。今更だけど、本当に申し訳ないと思ってるし、感謝もしてるわ」

「レンダさんに召喚された訳でもないんですが」

「世界の代表としてよ！　……なんて、ちょっと驕りすぎ？」

あはは、と笑うレンダに、明華も思わず笑顔を零した。さっぱり、すっきり、そんな話をするレンダに、明華の心も少しだけ軽くなる。

「ああ～～～、元々はさ、あの胡散臭いジアミエンのお使いだと思ってたから『どんなやつなのかしら』ってず～っと睨みを利かしてたケド……悪かったわね。案外、話せばいい奴だったわ、あんた達」

「あ～……あの人、確かに胡散臭いですね……」

「アキカも思う？　まあ、でも……結局は大きな問題も解決してるから、認めては居るんだけど……」

レンダは難しい顔で赤髪をくしゃくしゃと掻く。それは彼女にとって話しづらいことなのか、レンダは僅かに歯切れ悪く言葉を濁した。そして、すぐに話題を切り替える。

「それよりウスハ！　アキカの兄貴！　あいつ、中々にやるわ！　ぱっとしないけどね！　いい兄貴じゃない！」

レンダの話題の切り替えに、今度は明華が表情を濁した。しかし、レンダはそれを気に留めない。

何故なら、『最初からそうなることは分かっていたから』。

「ウスハと話したわ。　何だかアキカの事で悩んでたみたいだけど……思い当たる節はない？」

レンダが何故その話に切り込んでくるのか、明華は理解できなかった。しかし、明華は誤魔化すようにそれから目を背ける。

「いえ。分からないです」

「そう。ならいいけど」

レンダはぐいと明華の顔を覗き込む。まるで、全てを見通すように。

「言いたくないなら言わなくてもいいわ。でもね、これだけは覚えておいて」

それは決して明華や薄葉を想っての言葉ではなかった。

レンダが、自分自身の為に紡いだ言葉。

「私と戦うその時に、悩みを抱えてて本気を出せませんでした、なんて言ったら……絶対に許さない」

その言葉に明華は再び心を揺さぶられる。

レンダは不思議な空気を持っていた。

何か、人の心を解きほぐすような、大きな器のような空気。

気付けば明華は、彼女に今の不安を隠す事が、とても失礼な事なのでは、そうとさえ思い始めていた。

彼女が自分の悩みを、自らの意思で打ち明けるのは、殆ど無い事だった。

「……レンダ、さん……ごめんなさい……私……」

震える声で、明華は言葉を搾り出した。レンダは馬鹿で鈍感で大雑把である。しかし、人の気持ちが全く分からない人間ではなかった。

「……無理はしなくていいけど、身近な人間にも言いづらい悩みだったら、別に気軽に、愚痴みたいに私に言ってくれてもいいんだからね？　試合の外はノーサイドっ！　なんでも相談に乗るわっ！　それがレンダサークルっ！！　そして、試合では全力で、心置きなく戦ってもらうからっ！！」

明華は自分の中にある、得体の知れない感情を、この夜、レンダに向けて吐き出した。

「ご苦労様。どう？　苦労したかしらん？」

「そう。そりゃああなたレベルなら、難なく突破出来る相手でしょうねぇ」

「引き続き、好きに戦ってくれていいわよん♪」

一人で喋る、ひとつの影。影は楽しげに、「うふふ」と笑って耳を抑える左手を離す。

「……はてさて、カードもシナリオ通りに並んだみたいだし……予定通り……」

顔の目のある位置を抑える右手を離し、影は「あはは」と笑い声を漏らす。

「そう、全ては手筈通り……あとはネズミにちょろちょろ動き回らないで欲しいところね……」

しかし、それでも構わない。そう言わんばかりに影は笑う。

「けらけら」「くすくす」「へらへら」「けたけた」

その楽しげな笑いは、夜に不気味に響きわたる。

カウントダウンは既に一ケタ。

ーーーー

「おうどん♪　おうどん♪　嬉しいな♪」

「おおう……なんという喜びよう。それにしてもこの世界にもうどんってあるんだなぁ」

「うどんじゃねぇです。『お』うどんです。『お』を付けろよデコ助野郎」

「なんで俺はおうどんを持ってきたのにここまで罵られているのか」

ズオオオオオ！と物凄い勢いでうどんを啜る姫神。ふてぶてしい、とかいうレベルじゃない。

「お前、ベッドの上で食うなや」

「ズオオオオオオオオ！」

「……聞け」

「ごっくん。食事中に話しかけてんじゃねぇです」

「お前、もう、帰れ」
「ごめんなさい」

到底、上品さの欠片もない掃除機ばりの勢いでうどんを食する姫巫女様。その高貴なるお食事が終わるのを待ちながら、薄葉はもういい加減嫌になってきていた。心落ち着く場所がまるでない。

掃除機は意外と早くお掃除を終えたようで、豪快に丼を傾けて、姫神は汁を一滴残らず飲み干した。「ふう」と力強く息を吐き、そしてすくっと立ち上がる。

「ごちそうさまでした～。じゃ、これで」
「待てい」

器をテーブルに戻して、とっとと帰ろうとする姫神の腕をがっしと掴んで引き止める。

「お前、何しにきた」
「……ああ、忘れてました。予言ですよ、予言。はぁ～～～しちめんどくせぇ」
「俺はお前が面倒くさくて仕方がない」

姫神美命、姫巫女は、ぐいと指先で口を拭い、ばさりとベールで顔を再び覆い隠した。まるでその顔を隠す布一枚で、今までの『姫神美命』と、今からの『姫巫女』の境界づけをするかのように、その身に纏う空気を見事に作り替えた。すっと静かにベッドに腰を下ろした姫巫女は、ベールの下から声を漏らす。

「……先程御告しましたように、私は『予言』の才を持つ者。今回はあなた、『杏樹薄葉』にお話したい事があり、此処を訪ねて参りました」

薄葉はひやりと冷たい空気を感じ取り、表情を引き締め自らも腰を下ろす。まるで別人。目の前のミステリアスな女は、力ある言葉を紡いだ。

「姫巫女が告ぐ。『あなた、杏樹薄葉の直ぐ側に、やがて、大いなる災厄が舞い降りる。それはこの世界をも揺るがす災厄。あなたは近く、この災厄と向かい合わねばならなくなる』」

「……災厄？」

不吉な言葉に薄葉は表情を固まらせた。

「多くは語れません。何故ならこうしてあなたに未来を語ったその時点で、私の見ている未来は書き変わっているのです」

言葉を発しようと口を開こうとする薄葉の口を指で制し、姫巫女は続ける。

「ありとあらゆる要素による未来の分岐、その全てが私には見えます。しかし、それ故に、遠く離れた未来程、その見通しは曖昧になる。なのでその災厄が何か、私には語れません。しかし、それは『ほぼ』確実に訪れます。ありとあらゆる選択肢のその先で」

『ほぼ』、強調されたその言葉に気付かない程に薄葉も鈍くはない。姫巫女に言葉を封じられながらも薄葉はその表情で、その疑問を示した。

「そう、『ほぼ』。故に私はそれを回避する為に、こうして手探りで未来を書き換えているのです。僅かな可能性を探り当てる為に。ほら、今も書き換わりました」

くすり、とそのベールの下から笑い声が漏れたのを薄葉は聞き取った。

「……少しずつ、歩を進める事で、災厄のビジョンは明確になっていきます。今はまだ、完璧な解答を得るには至っていません。しかし、少なくとも見えているビジョンがふたつ」

姫御子の二本の指が立てられる。

「不可避のビジョンそのいち、『私、姫巫女がヴォラスカーニバルを勝ち残る事は不可能』」

指が一本折りたたまれる。

「不可避のビジョンそのに、『あなた、杏樹薄葉はこの大会で、大きなトラブルに巻き込まれる』」

指が全て折りたたまれる。

「……そう、それは不可避のビジョン。あなたは少なくとも、その大きなトラブルに向き合わなければならない」

「……それって」

「勿論、言えません。いえ、正確には『言うことに意味がない』。運命はまるで『仕組まれた様に』収束しています。『あなたを襲うトラブル』、それは何を告げようと、また違った形のトラブルとなってあなたを襲う」

「……なら、なんでそれを俺に？」

姫巫女はそっと薄葉の頬に手を添えた。まるで、励ます様に。優しく、柔らかく。

「忠告します。確かにその『トラブル』は、『災厄』に繋がる大きな布石となっています。しかし、あなたはそればかりに目を向けてはいけません。『今、悩んでいる事はありませんか？』」

薄葉は目を泳がせた。

ずっと話せていない明華の事、それが突然脳裏を過ぎった。

「言わなくてもいいです。でも、大方思い浮かべた事が、私の指摘する事だと思ってもらって構いません」

「……それをどうしろって言うんだ？」

薄葉の問いに、姫巫女は答える。

「……それが、私にできる僅かな助け。予言します。『私も、あなたも、明日の試合には勝ち残る』。故に、私は『明日まで』は、あなたの傍に居ることができる」

それは姫巫女が、『明後日』に消えるという予言でもあった。そして、敗退した参加者も、大会期間中は宿舎を利用できるという規約の中、『あなたの傍に居ることができる』という言葉は、姫巫女が『それができない状況に陥る』事も予言していた。

「度胸がないのは分かります。何を話していいのか分からないのも

分かります。でも、ならば、私が同行しましょう。だから、どうか……『妹さんと会ってあげて』」

姫巫女は、重要な事を語らない。それが、災厄を回避する為の要素なのか、それまでは語らなかった。しかし、薄葉は、素直に頷き、頭を下げた。

姫巫女のその言葉を信じた訳ではなく、自分の意思に従って。

「……はい。ちょっとあいつと向かい合って話す自信ないんで……お願い出来ますか？」

「はい。勿論です。私は無闇に動けませんが、出来る限りの協力は致しましょう」

姫巫女はベールを捲り上げ、その顔を再び晒す。姫神美命に戻った彼女は、その予言に従わない、彼女自身の言葉で告げた。

「……私も兄と擦れ違ったままなんですよ。だから、できればそういう思いを他人様にもして欲しくないんです」

「……ありがとな」

「何はともあれまた明日。大丈夫。『助け舟は他にもあります』」

「あんたの言葉は何か頼りになるな」

「そうですか？　なら良かった。では、御馳走様でした。明日、勝てるといっても油断はしないで下さいね」

姫神美命は優しく微笑みベールを下ろした。そしてゆっくり立ち上がり、姫巫女は薄葉の部屋を去る。

そして、ドアを潜った姫巫女は、いつも通りの一言をぽろりと零

した。

「……運命通り」

――

ヴォラスカーニバル決勝トーナメント初日、様々な思惑が蠢いた夜が明けて……

『それでは皆様お待たせしました!!　ヴォラスカーニバル決勝トーナメント第二回戦、始まりです!!』

本日は晴天。観客達のより熱い歓声の元で、ヴォラスカーニバルは二日目を迎える。

ＥＰ４６：　休息の夜、初日（後書き）

ヴォラスカーニバル決勝トーナメント第二回戦、決意新たに臨む舞台、一回戦以上の激しい戦いが幕を開ける？

今回は伏線回。不安要素を混ぜ込んでおります。そして、ヴォラスの天使、姫巫女様の薄葉との接触です。それでも話はいい方向に動き出している……筈？

Ep47：Avenger（前書き）

バトル回になります。

Ｅｐ４７：　Ａｖｅｎｇｅｒ

コロッセウム上空に展開される結界。その表面に映し出される映像魔法。それは今日の対戦カードをランダムに表示する抽選システム。二回戦に駒を進めた１６のチームの名前、トーナメント表、そしてＶＳの文字を挟んだ二つの囲いが表示されている。

『それでは決勝トーナメント第二回戦、張り切って行きましょうっ！！　最初の試合は……こちらっ！！！』

ヴォラスカーニバル決勝トーナメント、二日目の戦いが幕を開ける。

―――

『勝利したのは「金の鐘」っ！！　勝ち上がる「金の鐘」にも、敗

退した「最強軍団」にも、素晴らしい戦いを繰り広げた両者に、盛大な拍手をっ！！』

拍手の音と、歓声が会場に響き渡る。錬金術師の集うチーム、『金の鐘』は、難なく下した対戦相手に軽く一礼を済ませて、入場ゲートへと戻っていく。特に感慨深さもない様子で、大した傷も負わずに二回戦を突破する。

リーダーのアルヒミアは、後ろに続く三人のメンバーに、背中を向けたまま呟いた。

「我々も大分、頑張った方だ。そうは思わんかね？」

「そうですね」

アルヒミアは錬金術と呼ばれる特殊な魔導の求道者である。しかしその実、その能力は特に秀でたものではない。だが、彼は一芸に秀でた賢者には違いない。彼は十分に自分の器と他者の器を見定めていた。

「次の試合、勝ち残れる確率は一割未満。何か異議のある者は居るかね？」

「異議なし」

「異議なし」

「もういっそ賭けちゃいましょう。我々は次の試合で負ける方に」

「ふむ。そういえば何処だかでヴォラスカーニバルを対象にした賭けが有ったね。それはいい。是非、ベットしてこよう。研究費用の足しにはなろう」

「さらにはベスト８の結果。これは援助も十二分に期待できますね」

ふむ、と頷きながら退散するアルヒミアは、唇を歪めて目を細める。その言葉を向けるのは、女勇者の登場で盛り上がる観客と、燃

え上がる参加者達。彼の言葉は、一部、心を揺らさない平静の参加者達を代表するものだった。

「誰もが高尚な理由をもって、物事に臨むと思ったら大間違いとは思わんかね？」

スポンサーを手に入れる為、研究費用の足しにする為、更には完成目指す錬金術も結局は私腹を肥やす為、欲望赴くままにヴォラスカーニバルを戦い抜いた『金の鐘』。

彼らの言葉が指し示す様に、まだまだ己の為だけに大会に臨む者は居た。

彼らの抱く、『金』という分かりやすい欲望よりも、より深く、より黒いものを抱えて。

一一一一

「ったく、下らねぇ。臭ぇ、臭ぇよなぁ」

控え室の一室で悪態をつく鼻ピアスの男、天野哲哉はモニターを

睨んでいた。その傍らで、髪を解かす妹、櫛子が嬉々とした表情で尋ねる。

「何が～♪」

「女勇者だか何だか知らねぇが、勝手に押し付けがましい事言ってくれやがってよぉ……どいつもこいつもいい子ちゃんになっちまって、下らねぇ」

「気にしたら負けよ～♪　それに私、結構女勇者様、好みかもっ♪」

「はぁ！？　お前、そっちの気か！？」

「私は私の好みに従うだけだしぃ～♪」

「そういやお前はレイラもやたらと慕ってたな……今更になって妹の性癖を知ることになるとはな……」

「妹の性癖知ってる兄貴もキモイけどね♪」

「うるせぇ！」

苛立つ哲哉に、和かな櫛子。二人の最大の目的、それは『復讐』。

二人に泥を塗った天使に、一泡吹かせてやろうという濁った感情が、彼らを突き動かしていた。

モニターのモブＡＢの試合には興味なし、そう言わんばかりに櫛子はその異様に長く美しい髪を弄り、哲哉はがたがたと体を揺すりながらモニターから目を離した。

「ああ、早く来いよあの野郎ども……早くぶっ殺してやりたくて仕方がねぇんだからよ……！」

「殺したら反則だから♪」

「わぁってるよ！　半殺しだ半殺し！　思い知らしてやんだよ、あいつらに……！」

怨嗟の言葉を吐く哲哉、そんな彼に声を掛けたのは、意外な事に

チームの老人。セルセラコミュニティから送り込まれた刺客の彼と、天野兄妹はろくに話していなかった。別々に、好き勝手に此処までカーニバルを勝ち抜いてきたのだ。

「思い知ラス……？　誰か、因縁でもあるのデスカナ？」

言葉の端々に怪しいイントネーションを含む、白髪に緋の眼の小柄な老人。哲哉は老人の問い掛けに別段気を悪くした様子も見せず、答えた。

「ああ。俺らを舐めてくれやがった糞共に復讐してやんだよ」

その刺々しく歪んだ言葉に、老人は……

「カカッ……」

「あァ？　何がおかしい……」

笑った。不満げに眉を歪める哲哉に、首を振りながら老人は言う。

「アー、スマンですジャ。私ハ、少しばかり貴様らを誤解してイタようダ。一回戦の実力を見たときカラ、言おう言オウと思って居たのダガ」

「誤解？」

老人は、その無機質な瞳を光らせながら、哲哉の顔をまじまじと見つめる。僅かにその不気味な色にたじろぐ哲哉だったが、強がりからか、鋭く睨みを返す。すると、老人は尚更愉快そうに笑うのだ。

「カカッ、イイ。実に、イイ。貪欲。貪欲。シカモ、其処らのヌルイ奴らと違い、貴様らハ実に強イ」

「そ、そうか？　そ、そりゃ当然だろうよっ！」

照れる哲哉。尖った男だが、意外と褒められるのには素直なようだ。

「ソシテ、目的がイイ。『復讐』。素晴らしイ。貴様に聞いたノダ、私も言オう。私の目的、それもマタ『復讐』。言わば我らハ『同志』という訳ダ」

『復讐』。老人はカカッ、と笑い、その目的を口にした。哲哉も櫛子も、意外そうに目を見開いて、明らかな驚きを示した。そんな二人をまだまだ驚かせ足りない様に、部屋の隅でぽつんと佇むやせ細った淡い印象の少女も口を開く。

「復讐……復讐……それ、わたし、同じ。わたし、復讐する。ヴぉらすに、復讐」

壊れたラジオのように呟く少女。不気味。そんな感情を抱くのが普通。しかし、何処かズレた欠陥天使、天野哲哉はくくっと楽しげに笑う。

「へえ。なんだ、似通った目的を持った奴同士が集まったってか？　食えねえなぁ、あのお面野郎。なんだ、お前らの好感度ずっと上がったわ」

「貴様モ、ソコソコに面白いネ。やはりそこは天使といったトコロカ。ノウノウと生キてるバカよりずっとイイ」

カタカタと人形の様に口を動かす老人と、けらけらと笑う哲哉。その様子を呆れた様に見遣り、櫛子は溜め息をつく。

「ところでお前らの名前を聞いてなかったな……この機会に教えとけよ」

今更である。しかし、それでも噛み合う不可思議なチーム、それが彼ら『セルセラアンゲルス』。他人に興味のない集団。

老人は答える。

「……貴様ナラと、評価した上デ名乗ろウ。我が名はシャムス」
「俺は天野哲哉だ」
「私は天野櫛子♪」
「わたし、ゼンゼンマン」
「何、そのヒーローみたいな名前！　面白っ♪」

くすくすと笑う櫛子。それに釣られる様に、三人も笑みを浮かべる。悪人らしい、歪んだ笑みを。

「いいねえ。お前らとなら、出来そうだ」
「貴様らの力なら、大いに足しにナロウ」

手を取り合う復讐者。

勿論、腹の底では相手を受け入れてなど居ないのだが……

それでも噛み合う、不可思議なチーム、『セルセラアンゲルス』。

そんな彼らの控え室に、その放送は響きわたる。

『続く試合は……『セルセラアンゲルス』！！　ＶＳ……』

―――

天野哲哉は高揚していた。
早速訪れた機会。それを前にして醜く口元を歪める。

「兄貴……正直、私、あの子トラウマなんだけど……」
「大丈夫に決まってんだろ」

哲哉はビクビク肩を震わせる櫛子に言う。
根拠なき自信ではなく、櫛子から目の前の少女の話を聞いた上での自信。そして、『以前とは違う』という、己に対する自信。

「負けはねえ。絶対になあ」

『「セルセラアンゲルス」ＶＳ「チームアミール」、両チーム入場

が完了しました！』

先頭に立つ哲哉は、対戦相手を睨んで声を上げる。

「よお、久しぶりだなガキィッ！！」

対戦相手、四人の天使が集まるチームアミール。

天野兄妹のターゲットである少女ミュゲ。彼女に傍らに立つ済は尋ねる。

「ミュゲ。何かお前を睨んでるようだが……知り合いか？」

「……分かんない」

まじまじと相手の顔を見つめるミュゲが首を振る。本当に覚えがない様子である。

ミュゲは記憶力はいいが、興味のない事は覚えないのだ。

そんな興味の範囲外の鼻ピアスは、その様子に気付く事なく得意げな笑みを浮かべて相手を見据える。

「……え、人違いか？」

「気まずいわねぇ……あの子、勘違いしきっちゃってるし……」

「でも髪が黒いし、伝承の天使っぽくはあるんですよね。……何者なんでしょう」

勘違い野郎扱いの謎の男。ちなみにミュゲ以外とは面識がない。

そして面識あるお子様はすっかり記憶の外に彼を追いやっている。

既に完全に知らない人である。

「……まぁ、いいわよね、気にしなくて」
「ですね」
「だな」
「うん」

ヨシエの言葉に同調する三人。それに気付かない哀れな男は一人、得意げに腕を組んでいた。

「……哀れだナ」
「あん？　何か言ったか？」
「イヤ、何モ」

耳がいいシャムスは、彼なりに哀れな男に気を遣い、彼女達の遣り取りを闇に葬った。

「トニカク、余計な口上は無用ダ、ジャ。憎い相手ならバ、タダ、叩き潰す事を考エろ」

シャムスの言葉に不満げながら頷いた哲哉は口を結んで、目で櫛子に合図を送る。それに軽く頷いて、彼女は櫛を握るその手に力を込めた。

『それでは……試合開始っ！！！』

司会ピソの高らかな宣言と共に、ミュゲは深々と頭を下げた。それは、女勇者の試合を見て、明華と共に反省をした彼女の決めた作

法。

試合前には挨拶をする。

不意打ちで相手を沈めた一回戦、それが良くない事だと考えたミュゲは、丁寧に頭を下げて挨拶をした。

「よろしくおねがいしま」

ヒュッ、と風を切り、何かが動いた。頭を下げる少女の目の前には、一人の凛々しい女が立つ。胸元で拳を握り、鋭い視線を敵に送る済は、その手からはらりと数本の針のようなものを落として、口を開いた。

「……試合開始後の速攻が、ルール違反とは言わない。違反とは言わないが、丁寧に挨拶する子供を真っ先に狙うのは見過ごせないな」

「あら、止められちゃった♪」

ゆらりとその異様な長さを誇る髪を揺らして、櫛子がくすりと楽しげに笑った。隣で同じく笑う哲哉が首を傾け挑発的に言い放つ。

「まさか、試合開始時に挨拶すべきだ……なんて温い事は言わねえよなぁ？」

「……強制すべきではないですけど、せめて相手に敬意を払うべき……とは思わないんですか？」

明華の問い掛けに、哲哉は迷わず解答する。

「全く思わねぇよッ！！」

その哲哉の言葉が試合開始の合図となった。

腕で何かを引き寄せるように不可思議な動きを見せる哲哉。その動きと周囲を渦巻く風を見て、ミュゲは思い出したように指を指す。

「あ！　牛とひじき！」
「牛とひじき？　思い出したのか？」
「すっごい悪い奴！」
「……何となく分かってた」

前に立つ済が、ひとつ溜め息をつき、奇妙な動きを見せる男を注視する。明華も元気を取り戻しつつあり、ミュゲもやりすぎを反省し、ようやくまともに舞台に立てると思った矢先、目の前にはまた曲者。済でも溜め息ぐらいつきたくなる。このチームで、一番の苦労を強いられるのは、どうやら済のようだ。

「さあ、行くぜェッ！！　この前のように行くと思うなよォッ！！」

哲哉の周囲の風が加速する。

それを確認したその瞬間、明華は即座にその魔法を展開した。

「『フリューゲル』」

ふわり。

明華の背中に広がる、純白の巨大な翼。まさに天使の具現とも言えるその光景に、済が、ミュゲが、ヨシエが、そしてセルセラアンゲルスが驚き目を見開く。

「どうした明華!?　空を飛んでどうする!」

「違う済!　あのピアスの人の魔法、ちょっと危ないから!」

飛行魔法フリューゲル。しかし、明華は今回、その魔法を空を飛ぶために使用したのではない。地に立ったまま、明華はその翼を羽ばたかせ、周囲に風を巻き起こす。そして、明華は緊張の篭る声で指示を出した。

「あの人をまずは止めて!　放っておいたら大変な事になる!」

「どういうことだ?」

明華の気付いた危険性。それはまさに哲哉の狙いと合致していた。明華は敵の魔法の特性、今起こっている事象を正確に分析して今、自分達が置かれた状況の危険性を示す。

「あの人の魔法は『風』。でも、風で攻撃する『放出』とはまた違った……周囲に風を留まらせるような『支配』の魔法!　より上位に位置する魔法なの!　風は『空気の流れ』『流れる空気』、それを支配するという事は『空気を支配する』という事!　今、あの人は私達の周りから酸素を奪おうとしてる!」

その言葉を聞いた瞬間、ヨシエは飛び出した。

明華の予測通り、哲哉の狙いは『酸素の枯渇』。敵の呼吸を奪う

という戦術。

かつての彼はこんな戦術も、彼自身の魔法のこんな使い道も思い浮かばなかったし、使えもしなかった。これは彼が新たに身に付けた力。

セルセラコミュニティの刺客として送り込まれた彼が、気に食わないお面野郎から伝授された力の使い道。

今、哲哉と明華が行なっているのは空気の綱引き。互いに風を支配下に置き、それを奪い合っているのだ。

明華は動けない。風の奪い合い、そのコントロールに集中力を割かれるからだ。それを突き詰めた哲哉と違い、明華も持ち前の才能である程度のコントロールは出来るものの、余裕はない。今、明華は酸素の移動を食い止めるだけで精一杯である。

素早く、哲哉を制圧しなければまずい。

それを理解し、ヨシエは箒を構えて、それを哲哉目掛けて振り抜いた。

「消去」

ヒュッ、と飛ばす彼女専用の魔法。あらゆるものを消し去るそれは、哲哉の服を吹き飛ばそうとしていた。殺害は禁止、故に加減が必要。その程度でも、哲哉の注意を乱すには十分と図ったヨシエだったが、それは易々と黒い洪水によって防がれる。

「させないわっ♪」

動いたのは櫛子。ただでさえ計り知れない質量を誇っていたその髪は、更にその容量を増して、風を操る哲哉の前に、黒い壁として拡散する。

ボッ、とその一端が消失する。しかし、圧倒的質量全ての消失にまでは至らない。ヨシエの魔法は、櫛子の髪の盾に防がれた。

「くっ……！」

ヨシエがそれを突破せんと、更に箒を振る。次は加減なし、そのぐんぐんと侵食する髪の盾を全滅させる広範囲消去。

「消去！」

しかし、無駄。髪の雪崩が押し寄せる。消失、その規模を圧倒的に上回る髪の増殖。一瞬、ヒュッ、と髪の一部が欠落したかと思うと、すぐにそれを埋めるように髪が増える。

ヨシエの魔法は、櫛子の魔法に極端に相性が悪かったのだ。

「済！　ミュゲちゃん！　ヨシエさんとあの人は相性が悪い！　早く援護に……」

「そうも言ってられない状況だ」

済はすっと明華の腰に手を回した。風を操る事に集中する明華、その体がふわりと浮かび上がる。

「わっ！　い、済……何を……」

「足元だ」

ボゴォッ！！

明華の立っていた地面から、太い腕が突き出される！　明華が驚き、風に気を配りながら前方に注意を向けると、セルセラアンゲルスのメンバーの一人、細身の少女の姿がない。この状況に乗じた奇襲、少女はそれに動いていたのだ。

済はヨシエと共に飛び出すのを待ち、それに備えていた。無防備な明華の防御、それも必要不可欠な存在。

明華を抱え、もぐら叩きゲームのモグラのように、何度も地面に穴を開けながら迫り来る腕を回避する済は、既に自立起動型魔具、とらちゃんを展開しているミュゲに指示する。

「ミュゲ！　あの牛を止めろ！」

「うん！」

ミュゲを乗せたとらちゃんが駆ける。それに気付いたヨシエは、髪の防御壁目掛けて、再び箒を構える。

「ミュゲちゃん！　一瞬だけあの髪の毛を退けるから、その間にお願いね！」

「うん！」

ヨシエは力を込め、箒を一振り。

「消去っ！！！」

ボウッ！と消え去る髪の壁。その隙間を縫うように、とらちゃんの細い拳がグンと伸びる。その拳は壁をすり抜け、哲哉を狙った。

しかし、セルセラアンゲルスにはまだひとり、控えがいる。

「通さんヨ」

シャムスが髪の壁の向こう側からそのしわの集まる顔を覗かせる。

「『フィアンマ』」

刹那、髪の盾は激しく燃え上がる！

「あっ……！」

「ミュゲちゃん下がりなさい！」

目の前の髪の盾、それが忽ち炎の壁へと姿を変えて、ミュゲはその熱にたじろいだ。直ぐ様、ヨシエの声に反応して、とらちゃんを後退させる。それを確認し、ヨシエが直ぐ様箒を振り、その炎の壁を消失させる。

「熱っ！　あっつッ！！　ちょ、コラ、ジジイぃぃッ！！　何、人の髪燃やしてんだッ！！」

「髪を燃える先からドンどん伸バせ。そうスレば自分には寄るマイ」

「……グッドアイディア♪　……しかもこれっていい武器じゃな～い？」

櫛子がにやりと笑って髪を伸ばす。先に炎を灯した髪の毛が、焦げ落ちながらも保たれる。炎を纏う髪の触手。櫛子の武器は、また違った変化を遂げた。

「『髪の毛針』っ♪」

炎上する髪、それを切り離し、試合開始時に見せた様に、針のように鋭く強化し発射する櫛子。燃える針が、ヨシエに、ミュゲに、襲いかかる。

「消去！」

箒の一振りでそれは全て消失する。しかし、結局は攻めあぐねている事実に、ヨシエは歯噛みした。

「想像以上に……厄介ね……！」

再び広がり、哲哉を覆い隠す髪の盾、それを睨む。しかし、相性が悪すぎる。接近戦を挑もうにも近付けない、そんな状況。

しかし、それを突破するきっかけはすぐに訪れる。

「いくよとらちゃん！」

ミュゲが、その手をとらちゃんの丸い頭に添えて、掛け声を上げる。瞬間、そのロボットの口から飛び出す複数の風船。

「何？　風船……」
「どっかーんっ！！」

ミュゲの元気な『合図』。それと同時に……

ゴオッ！

風船が爆発する！

「な、ナんだコレは！？」

「ちょ……風船爆弾！？　こ、このガキやっぱり嫌いっ！！」

その衝撃に驚き、何とかガードをしつつ、飛び退くシャムス。そして、燃える髪を伸ばし切り離す櫛子。小規模ながら、思わぬ爆発攻撃は、埃を撒き散らし、周囲を覆う。

「ちっ……！　だが、その程度の爆風、俺の『風の鎧』で余裕でかき消せるんだよ！！」

哲哉が吠える。

しかし、それは布石。

ミュゲは既に次の動作に移っていた。

ゲコ、ゲコ、ゲコ、ゲコ

その隙を突いて、ミュゲがとらちゃんから散蒔いたのはカエル型の魔具。それらは地面に可愛らしく並んで、合唱を始めていた。その声に気づいて、ぞわりと鳥肌を立てるのは櫛子。

「やばい兄貴ッ！！　『アレ』が来るッ！！」

『アレ』。櫛子が身をもって体験した、驚異の『多重詠唱』。ひとりの人間には不可能な、複数魔法の合成魔法を放つという、桁違いのミュゲの技。

それが飛び出す、しかし、哲哉は慌てない。

「ハン！　そいつは俺には効かねぇよ！」

櫛子の証言、それを聞いた哲哉はその魔法に対して、絶対の自信を持っていた。

「お前のその魔法、初撃は『風』なんだろ!?　風で敵を捉え、其処に滅多打ちの魔法攻撃を加える……そんな魔法だ！　だが俺には効かない！　何故なら、初撃の『風』は、俺を捉えられないからだ!!」

ミュゲの九重詠唱魔法、『キューシニイッショー』。それは哲哉の考察通りの攻撃。それは哲哉には確かに通じなかった。

そう、『それ』は。

「……ミュゲちゃん、見せてあげて」

済に抱えられ、風の綱引きに努める明華が僅かに笑みを浮かべる。

地面に佇むカエルは『四匹』。

「小型自立起動型詠唱代理魔具『かえるのうた』！　いっけ～～～

～！」

哲哉は気付いた。自分の周囲を囲む、『四つの光』に。

「四重詠唱っ！　『すたぶろす・とぅ・のとぅ』っ！！！」

「な、なんだこり」

四色の光球、其処から放たれるのは四色の光線！　その魔法を目の当たりにしたシャムスは目を見開いて唖然とした。

「馬鹿ナ……！　そレは、エストレリャの……っ！！」

ドォォォンッ！！

爆音、それと共に四色光線の挟撃が哲哉に直撃する！

「兄貴っ！！」

明華が表情を柔らかくし、その翼をふわりと消し去る。

「……ミュゲちゃん、ナイス！」

「アキカ、出来たよ！」

その魔法は、明華がミュゲに教え、ミュゲがそれを実現させた、

特別な魔法。明華がかつて見た、とある強力なテラスが操った、異色の魔法。

規模はオリジナルよりずっと小さい。しかし、『複合魔法』としてはこれ以上はない完成度の魔法、そのコピー。その威力は、哲哉の風の鎧を突き破り、撃破するには十分過ぎた。

「あ、りえ……ねぇ……」

ボロボロに服と髪を焦がした哲哉がふらりと後ろに倒れた。風が止む。

「……ったく、いっつも先に倒れてッ！！」

『前回の接触』、その時同様先に倒れた兄に、次は櫛子は気を留めない。前回の反省を生かし、彼女は隙を見せずに次の動きに移った。それは後方から突撃を開始するシャムスも同様。

「成程ナ……！」

髪の洪水がヨシエを襲い、赤い瞳を光らせるシャムスがミュゲを狙う。

相性で不利なヨシエ、『かえるのうた』の後、隙を生じさせたミュゲ、今の二人は格好の的である。

しかし、今は風の綱引きから開放された明華がいる。そのサポートから離れた済がいる。

ミュゲに向かうシャムスの眼前には、割り込むように姿を現す、十手のような魔具を手にする済。

髪の洪水に、飛び込む様に、済に放り投げられてヨシエの前に文字通り『飛んで』来たのは明華。

「イツキっ！」

「よくやったミュゲ。後は任せろ」

済の構える十手型魔具。ふわりと気配もなくミュゲとシャムスの間に立った済、その手に握られるそれは、その挙動を意識さえさせない滑らかな動きでシャムスの体を突く。

とん、とん、とん。

打たれる本人でさえ打たれた事に気付かない、それ程に優しい攻撃。しかし、それは確実にシャムスの体のバランスを崩していた。

「ナ……！？」

「弱点を見切れば、強く打ち込む必要もない。多分、お前はもう立てない」

済の目はまるで全てを見通すように落ち着き払っていた。今まで、付術を扱う際に済が見せた僅かながら動きを少し鈍らせていた無駄な体の強ばり、それから開放されたように、済は極々自然体で付術の強化状態を実現している。その佇まいには余裕が漂っていた。

「明華ちゃん！」

「ヨシエさん、ここは任せて下さい！」

明華は髪の毛の洪水に、飛び込む！

「ぶぁ～～～っか！！　自分からやられにくるなんて……」

その時、一瞬で櫛子の表情は崩れた。髪に加える力、それが突然抜けていく。ふっ、と重みを増していた髪が軽くなり、風に揺られて舞った。髪の洪水はカーテンのようにふわりと捲れ、その中から姿を現した明華が眼前でその指に輝く指輪を翳した。

「『アルマ封じ』。私もタダで捕まってた訳じゃない」

オラクル事件で囚われた明華。しかし、ただで転ぶ彼女ではなかった。

彼女が盗んだ技術。其れは自らを封じ込めていた『アルマの動きを封じ込める術』。

その手を触れる事で、一時的にアルマの供給を立ち、その力を失った櫛子の髪は、最早無力。

明華は呪文詠唱と共に、その指輪の煌めく手を櫛子の額に当てた。

「う……っそ……」

体から力が抜ける。いや、体が言うことを聞かない。そんな不可思議な感覚によろめき、櫛子は地面にへたり込んだ。

「『アルマ封じ』。あなたの体を動かす力を止めました。しばらくはあなたは動けない」

「ありえ……ない……っての」

がくりと体の力が抜けて、櫛子は地面に頭を落とす。当分はまともに動けないだろう。それを確認し、明華は、済は、後方、地面から這い出してくる巨大な影を睨みつける。

「「残るは……」」

まるでボティビルダーを思わせるような筋骨隆々な体、それでいて見上げる程に巨大。土色の日焼けした肌を思わせるその体の頂上には、余りにも不似合いな頬の痩けた少女の顔。土色、ではなく本物の土。

土の肉襦袢（にくじゅばん）に身を包んだ少女、その焦点の定まらない瞳が鈍く光った。

「復讐、復讐、ヴぉらすに、復讐、邪魔、やめて、仲間、でしょ、セルセラ、仲間、邪魔、邪魔、やめて、やめて」

壊れた様に、言葉を紡ぎ出す少女。

「ヴォラスに復讐？　セルセラ？　仲間？　一体どういう……」

「悪いのは、わたし、じゃない、助けて、助けて、返せ、返せ、悪いのは、全部、オマエラ、オマエラ……」

その時、ほんの一瞬、普通の人間には見抜けない程の一瞬、少女の額に、ぎょろりと目が開いたのを、明華と済、そしてヨシエは見逃さなかった。

ぬるり。

それをまるで隠すかのように、少女の土の肉襦袢から人間の手が伸びる。その手は少女の顔に当てられ、その顔を覆い隠す。

その光景は、少女が自分の顔を被ったように見えたが、一部の人間には『別の何者かがその顔を覆い隠した』様にも見えた。

ごくり。

少女が唾を飲む生々しい音が響く。するりとその手は肉襦袢に帰っていき、少女は取り乱した表情を完全に打ち消し、静かに生気を感じられない瞳を四人の相手に向けた。その額には浮かび上がった筈の目は消えている。

「……わたし、ゼンゼンマン、セルセラコミュニティ、ＳＳＳクラス、本部勤め、今回、セルセラアンゲルスの、代表、として、ヴォラスカーニバル、参加、仲間、全滅、でも、わたし、ひとりで、十分、ですよね、セルセラ、偉大なる、セルセラ、愛すべき、セルセラ」

ぶつぶつと呟く少女が操る、巨大な土の体が動き出す。

「仲間の非礼、詫びます、申し訳、ないです、では、最高の敬意、評し、全力、行きます、最後の勝負、よろしく、お願い、致します」

その不気味な少女に違和感を感じつつ、チームアミールはその瞳を真っ直ぐに見据えて、応える。

「よろしくおねがいします！」

少女、ゼンゼンマンは笑った。

「行きます」

ズン、と地面を凹ませ、その巨体が動き出す。落ちる巨大な拳を、四人はバラバラの方向に回避する。

「意外と速いな」

済が呟きつつ、その巨体に纏わり付くように走り、その関節部分に十手を打ち込む。ガキン、という音を聴きながら、済はあまり表情を変えずに相手の力を確認する。

「やっぱり硬い。隙が見えない」

「当然、この土、密度が違う、並の攻撃、効かない、です」

ゼンゼンマンが丁寧に説明する。それを聞いて、うふふ、と笑う、良いところなしのヨシエ。

「それなら漸く、私の出番のようねぇ」

土の巨体を駆け上がり、箒を振り翳すヨシエ。

「硬さも柔らかさも関係ない。私の箒は、『必ず消す』」

「消去」

ヒュッ、と音も無く、その土の体は消えて無くなる。定量の物質ならば、消せないものはない。そんな魔法を漸く振るい、ヨシエはすたっと軽やかに着地した。

土肉襦袢の縛りから開放され、投げ出されるゼンゼンマン。その体をお姫様抱っこで優しく反応が早かった済が受け止めて、少女に静かに尋ねた。

「これ以上やれるか？」

「……参った、です」

両手を上げて、ふうと息をつくゼンゼンマン。何故だか観客席からはキャーキャーと歓声が響き渡っている。

ゼンゼンマンの手を振る合図、それを受けて、ようやく試合は幕を降ろす。

『降参です！　勝利チームは『チームアミール』っ！！　激しい戦いでした！　健闘した両チームに、盛大な拍手をっ！！』

観客席は沸き上がる。

しかし、どうしても勝った筈の明華と済は、清々しい気分にはなれなかった。

少女の並べた言葉の中で、特に強く響いた言葉。

『ヴォラスに復讐、わたしは悪くない』。

それがどうしても心の隅に引っ掛かる。

「……あなた達、私を立てる為に最後に少し手を緩めたでしょう？」

暗い表情を浮かべる二人の肩をぽんと叩き、ヨシエは笑う。

「恥ずかしいわあ。後輩に気を遣われちゃうなんて……次は頑張るわね？」

それが気を紛らわせる為の言葉だと、二人はすぐに理解した。

不思議そうに二人の顔を見上げるミュゲと、三人の背中を押しながら退場を促すヨシエ。それに合わせるかのように、明華と済は微笑み、ゲートを潜った。

少女の額に開いた目、土肉襦袢から伸びた腕、人が変わったかのような少女……その全てに疑問を残しながらも、チームアミールは駒を進める。

Ｅｐ４７：　Ａｖｅｎｇｅｒ（後書き）

淡々と進む二回戦。その中で、意外な実力者達が牙を剥き、大会に混乱を呼び寄せる？

次回「８」に続く！

天野兄妹（小物）撃沈！　意外と健闘しました。した筈です。実は結構重要なフラグをひく為に、登場→１コマ撃破というネタ的終了ができなかったりです。ちなみにあっさりといっちゃあっさりやられちゃったので出てきませんでしたが、櫛子の新技は手に持ってる櫛のおかげ。セルセラコミュニティ入りして、魔具を手に入れパワーアップしたのです。鼻ピアスは施しを受けない男前。でもアドバイスは聞き入れるのです。

ちなみにちなみに、ゼンゼンマンはヒーローじゃないです。ゼンゼンマンという名前です。「〇〇マン」みたいな意味ではないです。

Ｅｐ４８：　８（前書き）

超ハイペースでございます。

Ep48：　8

伝承の天使。
其れは特別な召喚術で呼び出される救世主。

大地のアルマを吸い上げて展開されるその特殊な儀式は、特別なものとして、重く見られてきた。
ひとつの広大な土地に兄妹一組のみを降ろせるこの儀式。人々は天使を呼び出せる領域を分ち、国と定めた。

四大国、ヴォラス、ズィスィ、ノトス、アナトリ。大陸中央の不可侵の巨山ケントルムを囲むように存在するその国々は、それぞれ二人ずつの天使を呼び出せる領域とされている。

二十年、三十年、未だにその規則性の見い出せぬ時を経て、土地のアルマが復活するまで、天使を再び呼び出す事は出来ない。

その時代に最も求められる救世主は、全部で８人までしか存在し得ないのだ。

次第に薄れつつある信仰が、その儀式を風化させる。最早、完璧な形で伝承と儀式の残る場所はない。都合のいい解釈と、都合のいい伝承を切り抜き、各国はひっそりと伝承を抱える。不完全故に伝承の天使が降ろせない事もしばしばあった。

故に、伝承の天使が８人揃う、そんな奇跡は今の時代には起こり

得ない。

起こり得ない筈だった。

すっと閉じていた目を開き、周囲の従者に装飾を纏うのを手伝わせながら、ひとりの少女が呟いた。

「運命（おもい）通り」

黒い髪を後ろで束ね、その全身を覆い隠す様に布を纏う。其れは彼女が『伝承の天使』である事を隠す為。今のヴォラスでは、天使召喚は固く禁じられていた。

しかし、彼女は召喚されたのだ。名家ミスティコ、天使の血を引くその一族の復興の為に。長い年月を経て、天使の血を薄めつつあるその一族に、新たな血を齎す為に。

「所詮は欠陥品。真の天使、救世主には勝てない運命（さだめ）」

「姫巫女様。準備が整いました」

はらりとベールが下ろされる。天使らしいその美しい目鼻筋が覆い隠される。姫巫女、姫神美命（ひめがみみこと）は、傍らに立て掛けていた鈴を飾った錫杖を手に取る。身の丈程の大きな錫杖。それを憂いを秘めた瞳で見つめ、悲しげに囁く。

「行きましょう、お兄様」

しゃらん、と姫神の言葉に応える様に錫杖の鈴が鳴った。その静かな、儚げな空気は、その装いも相まって、彼女を神秘的な存在へと昇華させる。彼女を取り巻く三人の従者は、その姿に見惚れていた。

祀りの舞台、其処に上る準備を終えた姫巫女と三人の従者。彼女達の出番は、まだ発表されていない。しかし、彼女達は決して遠い先の出番に備えて装いを整えた訳ではない。

『次の試合は……「チームミスティコ」!!　VS……『ネア・セリニ』!!」

彼女達は、出番が目前に迫っていたから準備をしたに過ぎない。

彼女達は自分達が舞台に上がるその時を知っていたから。

「……運命(おもい)通り。さぁ、参りましょう」

未来を見通す『予言』の力。それを引っ提げ、ヴォラスの天使、姫神美命は、予言者姫巫女として舞い降りる。

彼女の未来を見据える目には、不吉な未来が渦巻いて、その胸中には、不敵な笑みが浮かんでいた。

一一一一

『～～～～～～』

聞き飽きた司会の言葉。既に未来のビジョンとして、彼女は何度も体験している。其れを今更聞きたいとも思えず、姫巫女は其れを聞き流す。

遥か前方に構える戦士。待機している彼らの姿は当然、この後動き出す光景も見えている。

彼女の世界には、新鮮さというものが存在していなかった。

嗚呼なんて退屈な世界。

それでもかつて彼女が身を置いた世界よりは幾分かはマシ、彼女は自身にそう言い聞かせながら、錫杖の鈴を打ち鳴らし、三人の従者を指揮した。

姫巫女は事前に相手の動きの無数のパターンを説明し、従者達に告げている。彼女がするのは、僅かな言葉の切り替えによる現在のパターン状況、錫杖によるタイミングを伝える事。

「右斜め下、剣を」

パターンCへと戦略を切り替え、姫巫女は錫杖の鈴をしゃんと打ち鳴らす。従う従者。予定調和、彼女の言う「運命通り」。飽き飽きした展開。

キン！

従者の剣が弾かれた。

「姫巫女様っ！」

その従者の脇を掻い潜り、一人の剣士が姫巫女に迫る。慌て叫ぶ従者。

しかし、それさえも「運命通り」。

「よくできました」

彼女の言葉に、慌てて剣を拾いに走る従者は笑った。それは演技。彼は欠片も焦っていない。姫巫女に演技を褒められ、彼女に恋焦がれる従者はにへらと笑ったのだ。

パターンC、少し試合を演出する、姫巫女の舞。彼女はあえて、己の力を示す。

「お兄様」

しゃん、と鈴がなる。迫る剣士、唱えるのは呪文、魔法攻撃、早

い、間に合わない？　否、既に姫巫女は動いている。

手にする錫杖『姫神清信（ヒメガミセイシン）』、それをしゃらんと振りかざし、姫巫女はその重々しい布を引きずる体を動かした。

「『アマノイワヤト』」

しゃん、と鈴の音。それと同時に、姫巫女を守る様に、岩が隆起し、その身を包み込む。剣士の放つ衝撃波は、岩に篭った姫巫女には届かない。

「『トコヤミ』」

しゃん、と鈴の音。それと同時に、岩の周囲から光が消える。じわりじわりと染み込む様に広がる暗闇。何かの魔法かと警戒し、剣士は飛び退いた。

「『御開帳』」

暗闇からぬるりと錫杖が顔を出す。出処を悟らせぬ、暗闇よりの突きが、飛び退く剣士の腹を捉える。暗闇からはしゃらんと澄んだ音と共に、姫巫女が姿を顕す。

「一本、ですね」

ぐん、と剣士の腹に当てられた錫杖が加速する。ズン、と鈍い音と共に、鈴がしゃらんしゃらんと鳴り響く。その細腕からは想像もつかない力が、ふわり、と剣士の体を浮かせ、胃液を僅かに吐き出させる。

短い呻き声、それと共に、剣士はがくりと首を垂らした。錫杖の

先に突き上げられ、その体が洗濯物の様に高く晒し上げられる。
片手で支える錫杖、その先端にぶら下がる剣士、それだけで、姫巫女という予言者の異様な力が見て取れる。

それを見て、ネア・セリニのメンバーが唖然としているのも当然。

「……ただ、相手の動きを予測するだけの司令塔、虚弱な女と思いましたか？」

言い当てる。ネア・セリニの立てた作戦、思い違い、その全てを。

「実に惜しいです。私は虚弱な女ですが、『私には常に私を守る兄が居る』」

ベールに覆い隠された顔ににやりと笑みが浮かぶ。優しく、そっと、地面に剣士を降ろした姫巫女は、しゃん、と一回鈴を鳴らした。

「……そう、全ては運命（おもい）通り、予定（おもい）通り、未来（おもい）通り……！」

それは、彼女がプランを大幅に転換する合図だった。
書き換わる未来、そしてより確定的に定まるビジョンを確認しながら、姫巫女は未来を作り上げる。

彼女は、未来を見通している。そして、その未来を選びとる事が出来る。

そして、彼女の錫杖は、彼女の兄『姫神清心』は、『未来』のビジョンを見る妹、美命と対照的に、『過去』のライブラリを自在に

引き出す力を持つ。

「姫巫女様……？」

予定、それとは違う姫巫女の反応に気付いたのは、彼女の従者、ミスティコの家に仕える駒の一人、『豚』と呼ばれる僕。

姫巫女は、その禁断のベールを脱ぎ捨てる。

観衆に曝される、黒い髪。黒い瞳。この世界では珍しい、ごく一部の者に許される純粋なる黒。

「天使……！」

驚愕するネア・セリニ、観衆、そして彼女の仲間の従者達。

「『ムニミィ』」

姫巫女、『姫神美命』はその素顔を晒しだし、その錫杖『姫神清心』を振り翳した。彼女のその魔法は、過去の情報を引き出す特殊な魔法。その地に根付く思念アルマを読み取って、歴史や過去を読み解く魔法。

しかし、その戦闘には何の意味も成さない魔法は、ネア・セリニ

の面々に思わぬ打撃を与える。

ゴス。

まずは魔導士の背中を何かが突いた。魔導士は肺の空気を吐き出した。

スッ。

次に魔法剣士の腕を何かが斬った。魔法剣士は血を滴らせて、剣を落とした。

フワッ。

最後に残った魔導士は、その体を突然浮かび上がらせて、そのまま壁に叩きつけられた。

怪奇現象。試合を見ている観衆の目には、それは不可解なものにしか映らなかった。突然、何の前触れもなく、息絶え絶えに膝を付く魔導士。何の前触れもなく、血を流して剣を落とす魔法剣士。何の前触れもなく、浮かび上がり壁に叩きつけられ悶える魔導士その2。

それは姫巫女のたった一つの魔法によって引き起こされたにしては、あまりにも多彩で不可思議。

錫杖をしゃんと鳴らし、何時の間にか静まり返っていた会場を更に静かな空気に包み込ませると、姫巫女は口を開いた。

「まだ、やりますか？」

ネア・セリニ、その中で未だに動けるのは二人。

呼吸を乱す魔導士、ヘクマと剣を握れない剣士、リチ。ほかの二人は既に意識がない。そう、既に誰も戦える状態ではなかった。

しかし、姫巫女は尋ねる。「まだ、やりますか？」、と。

答えは当然……

「まだ……やれる……！」

動かせない右手の代わりに、慣れない左手に剣を握り、リチが姫巫女に牙を剥く。

「……全力で戦い抜く！」

ヘクマは呼吸を整えながら、その手に握る木の杖を構えた。

答えはＹＥＳ。それを待ってましたと言わんばかりに、姫巫女の顔が喜びの明かりで輝いた。

「……そうこなくては」

錫杖を振りかざし、姫巫女は止めに移ろうとする。しかし、その攻撃は、その手を握った従者『牛』によって止められる。

「姫巫女様。お止め下さい。制圧は我々が」

「……」

険しい表情で見下ろす牛に、姫巫女は無邪気な笑顔を返して手を降ろした。牛は咎めた。『予定を大幅に無視した姫巫女』を。彼らを見下ろす王とその配下達、その視線に意識を向けて、牛は二人の仲間、『豚』と『羊』に手で信号を送る。

無言で頷く『豚』と『羊』は、前に飛び出し、残る二人に襲いかかる。

迫る魔法攻撃を、まるで埃でも払うかのように、軽くその手で払い除ける『牛』は、ぐっと姫巫女の腕を握り、険しい表情で口を開く。

「……どういうつもりで？　天使の召喚にミスティコが手を掛けた事を悟られれば……」

「大丈夫ですよ。全て、運命（おもい）通りです」

突っ撥ねる様な言葉。姫巫女の言葉に嘘はなかった。

「初戦、私は予言の力を示した。続いて二戦、天使としての力量とその素性を明かした。これからヴォラスが取ってくる行動、それは決してミスティコへの粛正などではありませんよ」

「……それも、『予言』ですか？」

「ええ。勿論。きっと、彼らは取引を持ちかけてくるでしょう。ミスティコを監視下に置き、あわよくば天使の力を借りる為に、それ

なりの条件を与えて飼い慣らそうと動いてきます。その時点で、『一族の復興』というミスティコの、このヴォラスカーニバルに置ける悲願は達成されるでしょう」

姫巫女の言葉は絶対。彼女が口にする予言は絶対に外れない。

しかし、牛は疑念を抱かざるを得なかった。

「……優勝する、その形を取る事は出来なかったのですか？　天使召喚の罪を露呈するリスクを冒す必要など……」

「何を言っているんです？」

姫巫女は呆れた様子で言葉を返す。

「リスクなんて、私の前では存在しませんよ」

全てを見通す彼女は、危険が訪れない事など百も承知。故にリスクとは無縁。それは牛にも分かっていた。

しかし、それでも、ミスティコの犬として飼い慣らしている筈の天使に、彼は不安を覚えざるを得なかった。

彼には、ミスティコも、この世界も、彼女の掌の上で踊らされているようにしか思えなかったのだ。

そして、その危機感も、彼の彼女に抱く淡い感情の前では、意味のないものだということも分かっていた。例え姫巫女の企みを、彼が看破しても、彼はミスティコに彼女を売らない。

弄ばれる家畜達。牛、豚、羊は、既にミスティコの駒ではなく……ミスティコの駒の駒に成り下がっていた。

「……あ、そろそろ決着ですね」

羊が最後に残ったリチを捩じ伏せる直前、姫巫女はくすりと笑って、その細腕からは想像もつかない力で、牛の手を振りほどいた。

『しょ、勝利チーム、「チームミスティコ」！！』

潜んでいた伝承の天使、それに戸惑いを隠せない司会の声を楽しみながら、姫神美命はそっと囁く。

「運命（おもい）通り。……ああ、お腹が空きました」

ぺろり、と舌を出し、怪しい瞳で虚空を見つめて、一足先に会場を後にする。

「今晩が楽しみですね」

その正体を晒した姫巫女。更なる黒髪の天使の登場に、波紋は広がる。

「あー、あー、面倒、面倒、面倒臭ぇ。集まっちゃってんのかよ、天使」

「8人全員揃うのは、レアケースだったのでは？」

控え室の一室、灰色の髪を持つ背広姿の男と、同じく灰色の髪を持つガチガチの鎧蓑虫の女が、映像を見ながら無気力に口を開く。

その傍らで、身を縮こまらせる一人の男が、くすくすと笑いを零した。

「レアケース。そうですね。とてもレアなケースが成立している。しかも何やら欠陥品も混じっちゃってる、そんな感じですかね？」

口を結んでいた時は、男は気弱な印象を与えていた。しかし、ひと度口を開けば、その口調は軽快で、軽い印象を与える。男は曲がった背中をさすりながら、二人の無気力系男女と向かい合う。

「おいおいおい、話が違うんじゃね、不動王？　もっと楽に勝ち抜けると思ってたのによぉ」

「楽は楽でしょう。十二年熟成したあなた達とは『熟成度』が違う」

『不動王』、そう呼ばれた男は、口元だけを曲げて笑った。

「あなた達こそが、現在のテッラに置いて最強の天使です」

トムとマリーを名乗る彼らは、その賛辞に大した喜びも見せずに無表情を保ち続ける。この世界に呼び出され、天使の素性を隠すためにノリと勢いで名乗り出した適当な名前と灰色に変えた髪。勿論、それは偽り。

その真の名は、今井千明（いまいちあき）と今井千歳（いまいちとせ）。ズィスィの地の加護を受けた、正真正銘のズィスィの天使。

鎧を幾重にも纏う用心深き蓑虫妹、千歳はひょっこり丸い体から顔を覗かせぼそりと呟く。

「それでも気は抜けない。万全を期さなければ」

「そう。万全を期さなければ、ですね。だから、少し『本気を許可しましょう』」

「いいの？」

「勿論。なんなら、いや、寧ろそろそろ……素性を明かしてもいいかもしれません」

千歳はぴくりと眉を動かした。その限りなく仮面に近い無表情をほんの僅かだけ動かし、感情の動きを表現する。

「……『何処まで』？」

「……天使相手ならば『架空領域』も許可しましょう。それ以外は『あなたの世界』位でしょうか？　それで十分ですか？」

「十分。寧ろ、天使以外には『元の世界』もいらない」

「用心深いお前が珍しいじゃねーのマリー」

「私は力量を正確に把握出来ているだけ」
「そーかい。なら、俺は何もしなくていいか？」
「できれば助力は欲しいですね。しかし、『無気力症候群』はやめておきましょう。あれは観客受けが宜しくない。もっと緩いものでも結構」
「そりゃあ楽だ」
「ええ。楽に行きましょう、トムさん。我らが目的の為に」
「……ああ、そうだなぁ。目的の為に」

彼らのチーム名は『なんでもいいや』。彼らはチーム名などに興味はない。ただ、彼らはひとつの目的の為にこのヴォラスカーニバルで戦う。
リーダー、『不動王』の思想の元で。

「……さぁ、第一歩を踏み出しましょう。我らが『不動王国』の、第一歩を」

一一一一

『勝利チーム、「レンダサークル」！　「レンダサークル」、「ヴ

ィーゾフ」、両チームに惜しみない拍手を!!』

チームミスティコ、その試合の後、勝ち上がったのは2チーム。魔導と格闘術の融合武術を操る『魔闘会』を打ち倒した、『匿名希望』。魔闘会の武術に、競り合う形で格闘し、堅実で目立たない戦闘で幕を降ろす。

召喚術操る魔導士が集まる『ヴィーゾフ』。其れをド派手な大暴れでぶっ飛ばした『レンダサークル』。ヴィーゾフが呼び出す無数の召喚獣をちぎっては投げ、ちぎっては投げのレンダの無茶苦茶な大立ち回り、そしてその仲間達の奇妙な戦い方は、危なっかしくも圧倒的にヴィーゾフを打ち倒す。

残るは6チーム、試合は3つ。

気絶した対戦相手全員を運搬しようとしたが、運営の医療スタッフが「それは私達の仕事ですので」と素早く飛び出し、そのまま会場を出る事になったレンダサークルは、試合の感想を交わし合う。

「召喚術って、結構ヤバかったわね。カエルとか出されたら私、ダメだわ」
「龍殴り倒す女がカエルがダメって……」
「苦手なモンは苦手よ!」
「あはは、レンダさんは変わってるなあ」
「だーーーっ!!　うるさいっ!」
「……しかし、召喚術。極めた者が居たら、相当に厄介だろうな」

刀を携え、目を閉じたまま歩く男、ムサシがぼそりと呟くように話す。

「え?　相手チーム、極めた相手でしょ?」

「違うな。あれはもっと、桁外れの魔導だ。それこそ、この世の全法則さえも覆す程に」
「そうかぁ？　俺は知り合いにかなりの腕利き召喚術士が居るけど……全法則を覆す、って程の事はできないぜ？」
ムサシはむ、と声を短く漏らし、首を小さく横に振る。
「……少なくとも、常識外れの天使を召喚できる術。使い道次第では、恐らく最高位の魔導と言えるだろう。……そう、例えば、この大会に参加している……」

『次の試合は……「なんでもいいや」！　……ＶＳ……「ムディ商会」！！』

廊下にも響く放送、それを聞いてムサシが頷く。

「そう。『なんでもいいや』。こいつらだ」
「え？　あのチーム、召喚術なんて使ってた？　変な魔法は使ってたっぽいけども」
「ふざけた奴らだが……そんなに厄介か？」
「……少なくとも、カテナ。貴様がそう思う程度に、奴等は厄介だ」
「俺の目を欺く程度に、って事か？」
「うむ」

ムサシの根拠も感じられないその言葉。しかし、多くを語らない彼が、それを積極的に告げる事に、レンダサークルの三人は重みを感じ取る。

「つまりは……そいつらも注意すべき相手って事ね！」
「お前、そればっかだな」
「単純でいいじゃないですか」
「うがーーーっ！　あんたらまた人をバカにして！！」
「バカだろ」
「可愛いじゃないですか」
「……愚か」
「うがーーー！」

プンスカ怒るレンダ。ちなみにレンダの理論において、現時点で注意すべきチームは勝ち残った全部である。
そんな緊張感があるのかないのか分からない、レンダサークルの会話の通り、チーム「なんでもいいや」はその本性を見せる事となる。

――――

「あ～、正直俺、いらなくね？」

頭をぽりぽり掻きながら、男、千明は呟いた。

戦場を跳ねるひとつのボール。ゴムボールのように飛び回る鎧の蓑虫。本来なら跳ねるはずのないそのボールは、しかし激しく飛び回っていた。地面に着地するその瞬間、ボールは地面に浮かび上がる紋様をすり抜け、再び地面に現れる紋様から飛び出す。

「くっ……！　これは一体……！！」

必死で攻撃を回避するムディ商会の面々。反撃の隙も与えず飛び回るボールから、ひょこっと顔を出して、千歳は無表情で口を開いた。

「『召喚術』を利用した『ワープ』。私を別箇所に召喚する、召喚術士の移動術」

「召喚術……!?　馬鹿な、そんな利用法が……」

「あるんだな、これが」

ムディ商会のボス、イェシンが戸惑い叫ぶ姿を見て、千歳はぷすーっと吹き出すように笑った。普通の人間が見たら、十人に九人は怒らせる笑みである。

「それを実現する超一流を通り越した超零流召喚術士、それが私。生まれながらの本物の天才の私からしたらなんの苦労もないこと。努力とかマジご苦労様、プススーw」

「この女……！！」

ムディ商会の一員、メガネの男が怒り飛びかかる。ぐるぐると高速回転する団子。相手の動きを全て見切るそのメガネの性能を生かし、その唯一の弱点、剥き出しの頭部目掛けて拳を伸ばす。

しかし、千歳は再び笑う。

「あ、あぶなーい（棒）」

接触……する間も無く、男の体は横方向に吹っ飛ばされた。その隣から、突然飛び出してきた四角い塊に撥ね飛ばされて。

「がぁっ……！？」
「『カモン軽トラック』。飛び出し注意。交通事故は怖いから」
ごろごろと地面を転がり、動かなくなる男。四角い塊は、まるで空間に飲まれるように消えていった。
「うわぁ……ひでぇよ、マリー」
「戦いは元々酷いもの、トム。大丈夫、生きてはいる」
「うわぁ……こりゃ俺がやったほうがいくらか人道的だよね？」
相も変わらず、怠そうにぶつぶつ呟くトム（と呼ばれる千明）。その後ろでは、やはり相も変わらず縮こまる二人の仲間。変わった光景は、飛び回る蓑虫女のみ。しかし、その異様な光景は、また彼らの印象を塗り替えた。
「こうなったら……取って置きの切り札を……！」
「出させる程温いと思った？　馬鹿なの？　プススーーーｗｗｗ」
嘲笑。それと同時に上空に浮かび上がる無数の紋様。それは召喚術の起点となる魔法陣。頭上から何かが落ちてくる、そんな漠然とした危機に、イェシン達は気付かされる。
「空から何が降ってくる？　雨？　キャンディ？　それとも女の子？　はたまた大穴親方さん？」
身構えるイェシン、その手下。そして、門は開かれた。

「答えは『雷（いかずち）』。ボッシュート」

魔法陣、其処から吐き出されるのは無数の雷。召喚術で召喚されたのは雷。それはまるで雷魔法の如く、イェシン達の反応を許さず降り注いだ。

カッ。

「あ～……御愁傷様」

千明は縁起でもない合掌を、ムディ商会に贈った。常人なら確実に命を落とすであろう落雷の直撃。それを受けてもイェシン達が気を失う程度で済んだのは、千歳が召喚する雷の量を絞ったからだったが、それは彼女達にとっても、周囲の人間達にとっても、どうでもいいことだった。

ただ、異様。ただ、圧倒的。それが分かるだけで十分。

「司会の人。勝利宣言を」

千歳が丸い鎧蓑虫の体をゆらゆら揺らしながら、司会席にじろりと視線を向ける。しかし、司会のピソは「なんでもいいや」の勝利宣言をしない。

不可解に思った千歳は僅かに眉をひそめたが、直ぐ様目の前でぴ

くりと動いた一人の男を見て、納得した。

「成程」

「ほえ～、丈夫だなぁ」

むくりと身を起こし、死んだ魚の様な目を千歳に向けるのは、ムディ商会を率いるボス、イェシン。服を焦がし、ボロボロになりながらも、彼は背中の棺桶を引きずりながら立ち上がった。

「く、くくくくく……まだまだ。まだまだお見せしたい商品はあるんだよ」

どさり、と背中の棺桶を引き摺り下ろすイェシン。そして、その胸ポケットから一粒の何かを取り出した。

……と、普通の物語の展開では、相手は普通は優しくそれを見守ってくれるのだが……今井千歳、用心深く容赦のないその天使は、冷酷に、淡々とその目をぎょろりと動かした。

ドッ！

イェシンの目の前に魔法陣が浮かび上がり、其処から飛び出した四角い鉄の塊が、棺桶を携える彼を、その棺桶毎吹き飛ばす。

「『カムバック軽トラ』」

別の敵も撥ね飛ばした四角い鉄の塊は、再び魔法陣を潜って帰っていく。取り出した小さな粒で何をすることもなく、砕けた棺桶を共に横たわるイェシン。生きているかも疑わしい程に、彼は静かに倒れていた。

「生きてはいる。加減はした。全く、やりにくいったらありゃしない」

千歳は再び司会に視線を向けようとした。しかし、今度はその暇さえなかった。

「まだまだ……さあ、本日の目玉商品は……これだ」

イェシンは粒を口に放り込んだ。

ばき、ばきき。

ばきききき。

何かがめきめきと捻じ曲がるような、不気味な音が響きわたる。その音の発生源はイェシン。見れば分かる異常事態。彼の体はばきばきと音を立てながら変形していた。

腕が捻じ曲がり、体が反り返り、体の所々が膨張する。

変形。イェシンはその姿を変えつつある。

観客席から僅かに悲鳴すら上がりつつあった。イェシンの肌の色が変わり、どす黒いものとなる。その上から浮かぶのは白銀の鱗。瞳はぎろりと金色の光を放ち、口には禍々しい牙が並ぶ。腕は先が太く、上半身のみが筋肉で膨張したような、アンバランスな体型へと変わる。

化け物だ。

観客の一人がぼそり、と呟いた。

「……これがムディ商会の目玉の新商品ッ！　人間にテラスの力を与えるッ！　『テラス細胞薬』ッ！」

バン、と棺桶を叩いてイェシンだった化け物が、その蓋をこじ開ける。中から出てきたのはひとりの女の人形。まるで本物の人間のようなその美しく眠る女の人形は、ふらりと棺桶から倒れるように出てきた。それを化け物はすっと優しく抱え上げ、何か優しく弄った後に、手を再び放した。

立ち上がる女の人形。すっと自然な人間のような動きで、女はその瞳をゆっくりと開く。金髪を腰まで伸ばし、ピンクのドレスを着こなす女。青白い肌のそれは、不思議な美しさを持っていた。

「……それは本当に人形？」

「ああ、人形だよ。だが、これは非売品だ。私の大切な大切なお人形だよ」

化け物はしゃあ、と歯を剥き出して笑った。

「さぁ、まだまだ商品の質を見せてないからね。……まだまだ、まだまだ行くよ……くく、くくくくくくくく……！」

ずん、と覚束無い足取りで進む化け物。その執念深い目に、観客は鳥肌を立てた。

しかしただ一人、それを見て、少し熱を帯びる者が居た。

「……失礼な事を言った。その執念、立派な才能と評すに相応しい。見事、ブラボー、貴方は紛れもない『天才』だ」

千歳はすっと目を閉じて、無表情でイェシンを称えた。そして、千歳を包む鎧の蓑は、がしゃりと音を立てて解け落ちた。

細い体がすっと地面に降り立つ。幾重にも重ねた鎧を魔法陣に収納し、千歳は静かに後ろを振り返った。

「不動王。『架空領域』の許可を。彼は其れに値する者と判断した。手加減は不要では」

男、不動王はぐにゃりと口だけを曲げて、答える。

「結構ですよ。マリー、いや千歳。あなたの自由意思を尊重しまし

ょう」
「了解」

千歳は返事をすると間も無く、その傍らに不可解な形をした紋様を浮かび上がらせた。

ずず、と其処から何かが這い出してくる。不気味な威圧感、神々しい空気、それが何か凄まじいものである事は、誰の目から見ても明らかだった。

「おいでませ、『フラガラッハ』」

ずるり、と魔法陣から千歳は引き抜いたのは、不気味な血に塗れた、黒く光る剣。歪に歪んだ形の刃は赤と黒の絶妙に混じった気味の悪い美しさを演出していた。

何より、その剣の放つ威圧、観客席の人間がぶるりと震え上がる程のもの。

「今の私は……剣では斬れないッ！！」

化け物はその恐怖をかき消すように、叫んで人形と共に突撃した。

「どんなものでも切り伏せる。鉄でもなんでも。つまりこの刃に斬

れぬものなどなし。相手はたちまち力失せ、無様に切り伏せられる運命」

ぎらり、と黒い刃が光る。前進する千歳は、軽く、散歩でもするかのように、その刃をふわりと振って、突進する化け物と擦れ違った。

音もなく、鮮血もなく、ただ何をすることもなく千歳の横を通り過ぎた化け物と人形は、ぐしゃりと地面に崩れ落ちた。

切り伏せた。自然に、呼吸をするように。

「殺してはいけないルール下だからではなく、ひとりの天才としてあなたを生かす。さあ、そろそろ退場してもらおう」

倒れて最早動けない化け物。その下に一つの魔法陣が浮かび上がり、その体が飲み込まれていく。やがて完全に姿を消した化け物にこくりと頭を下げて見せると、千歳はようやく司会を再び見上げ直した。

「さあ、試合終了の宣言を」

こうして、『なんでもいいや』の強烈な二度目のデビュー戦は幕を閉じる。

史上最強最高峰の召喚術士、マリー。真名は千歳。彼女の鮮烈なデビューである。

驚愕で呆然と凍り付く大衆に、目を合わせる事もなく、『なんでもいいや』のメンバーは感慨もなく去っていく。

「しっかし、マリー。お前が相手を認めるなんて、珍しいな。ところであいつを何処に送った？」

「保護した」

「はあ？」

その試合を忌々しげな表情で見ている者が居た事を、千歳はとっくに気付いていた。彼女は用心深い人間。本来なら危険に自ら足を踏み入れる愚行など犯しはしない。

しかし、それでいて、彼女は認めた者にはとことん甘く、優しかった。彼女は恐らくその身に危険が及ぶであろう、イェシンを直ぐ様保護したのだ。

「全く、大した商魂。呆れた馬鹿」

彼女が無機質な瞳で睨んだのは、遥か高みに座する、ヴォラスを統べる王だった。

「死なすのは勿体無い」

―――

「フンッ！！」

ダディの拳が魔導菓子職人キャンディレインの最後の一人をぶっ飛ばす。それをおおうと感心しながら遥か後方で、相手の散蒔いた魔法水飴でベッタベタになった薄葉とハランが見ている。

「フン……お前は一体何をやってるんだか……馬鹿め」

「お前が言うな！」

未だに険悪な二人を見て、はぁ、と溜め息をつく救世。

なんだかんだで彼らも決勝トーナメント第二回戦を勝ち抜き、駒を進める事になる。

『勝利チーム、「チームアミーラ」！！　両チームに盛大な拍手を！』

二回戦、この前の試合では既に『プリプラノメノス』が再び『強運』で勝ち残っている。これで全チームの試合が終わった事になる。

『これにて、ヴォラスカーニバル第二回戦、全試合が終了しました！　ベスト8の決定ですっ！！』

上空モニター、トーナメント表に浮かび上がるのは、異様な顔ぶれ。異様な力の持ち主。

最強の8チーム、そして人知れず揃った8人の伝承の天使達。

天使の伝承蠢く祭典、その舞台は波乱の三回戦へと移行する。

Ｅｐ４８：　８（後書き）

激動の第二回戦を突破し、それぞれの参加者はそれぞれの休息に移る。その裏で、見え隠れするヴォラスの不穏と不吉な影。ヴォラスカーニバル二日目の夜が訪れる。

次回、「休息の夜、二日目」に続く！

補足：まとめ
・伝承の天使
各国に伝承の天使は兄妹一組のみが降り立つ。それ以降に召喚された天使は少し欠陥をもつ。天使は基本的に、召喚者の願いを聞き入れる。

アナトリの天使：薄葉、明華
ノトスの天使：救世、済
ズィスィの天使：千明、千歳
ヴォラスの天使：清心、美命

・欠陥天使
伝承の天使と比べ、問題点を抱える儀式失敗の例。不完全儀式や、既に天使を降ろした後の儀式によって呼び出される。
ハラン：才能の欠如
ミュゲ：年齢不相応（召喚当時赤ん坊）
哲哉・櫛子：スペック不足
レイラ、ルカ：制御不能

一応、伝承の天使が色々と出てきたのでまとめ。実はちょろっとしか出てませんが、ハランとミュゲは正式な伝承の天使じゃないのです。十年前より前、十二年前に既に今回出てきた今井兄妹が召喚されていた為、条件不一致の失敗で呼び出された、ということになっております。その他、3章に出てきた量産天使も同じ失敗例。やっぱりスペックが低め、制御がききにくいものとなっております。

天使の伝承関連の情報を更に掘り下げるのは今後のお話ということで……

それは兎も角……

主人公組、まさかの試合カットである。

ＥＰ４９：　休息の夜、二日目（前編）（前書き）

まさかの前後編。ちょっと長めなので分割です

ＥＰ４９：　休息の夜、二日目（前編）

二回戦が終わり、ベスト８が決まる。そして再び休息の夜が訪れる。

ある程度の飲み物や食べ物が用意された、参加者宿舎の休憩ホール。ちらほら人の姿の見えるその場所で、一組の兄妹が同じテーブルについていた。

見た目からすれば、その黒い長髪を持つ方が妹、短めの髪の凛々しい方が兄だと思えるその兄妹。しかし実は逆だという性別を間違えた兄妹、その可憐な兄、救世は手元のカップを弄りながら、凛々しい妹、済に尋ねる。

「最近あまり話してませんでしたね」

「まあ、な。互いに敵対関係にあったし……」

「それが急にどうして？」

「別にいいだろう。近況報告のひとつくらい、自然にしても。それに……ほら。私達以外はなかなか顔を合わせられないのばっかりだろう？」

薄葉と明華、ハランとミュゲ、そしてダディとヨシエ、彼らのチームのメンバーの殆どは、今現在、余り顔を合わせたがらないという状況。その中で、別段亀裂もなく、他の兄妹に合わせる形で離れた二人の兄妹は、深々と溜め息をついた。

「元々は一番不仲な兄妹だったんだが……」

「あれ、嬉しいですね。今では仲良し兄妹ということでいいんです

か？」
「……べ、別にそういう訳で言ったんじゃ……！」
「済ちゃんは可愛いですね～」
「う、うるさい、この酔っぱらい！」
「それはやめてください……反省してるんですから。後で一回戦の映像見せられて……」

額に手を当て、俯く救世。ふふん、と得意げに弱みを握った済は鼻で笑った。

そんなやり取りに興じながら、あくまでライバル、対立関係故の気まずさが、壁がないことを確認できた済は少し緊張を解いた。お人好しの兄ならば、と期待していた事が間違いでなかった事を安心すると、済は何気なく話し出した。

「……そっちの二人、どうだ？」
「最悪ですね。未だに喧嘩ばっかりです」
「……はぁ。やっぱりか」

そっちの二人、とは薄葉とハランの事。言わずとも救世はそれを理解していた。

二人は非常に仲が悪い。それ故、ハランは妹のミュゲを怒らせてしまった。その妹が原因で、兄馬鹿ハランがやたらと薄葉に喰い掛かって行くのだが。

「ミュゲさんのご機嫌は？」
「いや、機嫌はいいんだ。この前も明華とヨシエと楽しそうに遊んでたし。ただ、ハランと薄葉が喧嘩してる試合を見てるとむすっとしてる位で」
「……じゃあ、まだ仲直り、とはいきませんか」

「そっちの二人を何とかしないと、なあ。ミュゲの件でハランを脅して何とかならないか？」
「それで割り切れる程にハランさんが扱いやすかったら苦労しませんよ。それに私個人的にもたまにイラっとしますし」
「お、おおう……それは相当だな」

温厚な兄の「イラっ」という言葉に多少驚きつつ……どうにも動かしにくい現状に、一番気疲れしている兄妹は、再び仲良く溜め息を漏らした。

「それに問題は明華さんと薄葉さんの微妙な空気も一緒です。あの二人、どうしてああなってるんでしょうね」
「んん……分からない。それとダディとヨシエ、あの二人も異常に仲が悪いな」
「結局は面と向かって話さなければならないんでしょうけれど」
「でも、事情も知らずに無理矢理引っ張り合わせるのも、なぁ」

うーん、と唸りながら、才羽兄妹は頭を捻った。

「……まぁ、私は薄葉さんとハランさんの間を何とかしてみます。丁度いい脅し文句でも考えて置きますよ」
「その他はどうするべきだろうか？」
「この大会中は難しそうです。あくまで敵対関係ですしね。まぁ、いざこの大会でぶつかる事になったなら……その時に思う存分感情を吐き出して貰いましょう」
「つまり……黙ってみてろ、と？」
「はい。静観です」

救世の多少行き当たりばったりなプラン。それ位しか二人が出来ることはないと分かりつつも、済はむう、と唸った。

「それを言ったらミュゲが何をしだすか分からないが。あとヨシエの方も案外怖いんだぞ？」
「それで被害を被るのは、ダディさんとハランさんですし、大丈夫ですよ」
「大丈夫って……ダディの方は分かるが、ハランはそこまで凄いのか？　この大会中いいとこなしだぞ」
「いえ、心が痛まないという点で」
「……お前、随分と黒くなったな」
「いえいえ。肌の白さには定評がありますよ」
「……そうか」

逞しくなっていく兄を見つつ、ただの聖人じみた善人でなく、人間らしくちょこっと毒を吐くようになった兄を知りつつ、安心したような、嬉しいような、逆になんだか悲しいような、そんな複雑な感情を抱いて済は苦笑した。

「もしも勝負する事になったら、私はお前を遠慮なくぶん殴るぞ」
「ふふ、怖いですね。私は出来ませんよそんなこと」
「いいか。絶対に手加減なしだ。ノトスでの借り、返してやる」
「はいはい。今の済ちゃんなら私程度は楽勝ですよ」
「よく言う」

互いに鍛えた能力を知るが故に、兄と妹は可笑しそうにくすくすと笑った。それは互いを羨み、歪み、擦れ違ってきたかつての感情とは違った、また新しい兄妹関係。
互いを評価しつつ、自信を持って対峙する。
ぶつかる、という事を繰り返して来たからこその関係。

それを改めて認識しつつ、二人は今まさにぶつかっている兄妹達

を想う。

―――

時を遡って……

この大会、一躍脚光を浴びる事となったレンダサークル。その大将であるレンダは、第二回戦全試合終了後すぐに、集まる人目を切り抜けながら、男性部屋の一室、薄葉の部屋を訪ねていた。
ドアを開き、別段気にも留めない様子の薄葉は、無理矢理部屋に押し入ってきたレンダを止めなかった。

「何だ？　またトランプでもしようってか？」
「あれは互いに試合に臨む態度を意識するための儀式だっての」
「どっかで俺達に喧嘩を仕掛けてきたのは？」
「天使がどんな奴か見たかっただけよ」
「……ただの馬鹿かと思ってたよ」
「ふふん。否定はしないわ。私はただの馬鹿なのかもね」

くくっと自嘲気味な笑みを浮かべて、レンダはどかっと薄葉のベ

ッドに腰を降ろす。荒々しく暴走気味な普段見せる性格との大きな違いに、薄葉は少し違和感を覚えた。

「馬鹿と言われて怒らない……熱でもあるのか？」

「違うっての！　……あんた達をちょっとでも疑ってた私が馬鹿だったって言ってんの！」

「疑ってた？」

「……それは今はどうでもいいのよっ！　今日はちょっとした約束を取り付けにきたの！」

誤魔化すのが下手糞なレンダ。その裏に薄葉でも感じ取れる程に何やら怪しいものを漂わせる。しかし、薄葉もここまで分かりやすいと、今まで多少なりとも関わってきた相手ということもあり、そこまで警戒はしない。優れた悪巧みをできるようなタイプじゃないだろう、そんな薄葉の予想は実は大体当たっていた。

「約束？」

それよりも、レンダの言葉に気をかける。

「そう！」

レンダはずびしと薄葉の額に指を当て、キッと目を尖らせながらその約束を告げた。

「今日の夜八時に、宿舎の裏口から出てまっすぐ進んだ先のでっかい木の前で待ってなさいっ！！」

まさかの呼び出しである。

「え？　なんで？」
「いいからっ！！　黙ってくればいいの！」
「……う～ん、困るなあ」

薄葉は腕を組んで難しい表情を浮かべる。
彼にも用事というものがある。それを思い浮かべながら、薄葉は濁す事なくはっきりとレンダに告げた。

「俺、今日の夜に明華と話をしようと思ってるんだ。だから、ちょっとお前の呼び出し、受けられないわ」

レンダはきょとんと目を見開き、ぐぬぬと口をへの字に曲げた。
そして、彼女は諦めたようにその呼び出しの意味を告げた。

「……ああ、もうっ。サプライズの意味がないじゃない」
「サプライズ」
「分かった分かった！　もう言っちゃうわ！　私があんたを呼び出したのは、アキカと会わせる為になの！」
「……え？　それってどういう……」

びしっと指を突き立てて、レンダは必要以上の大きな声を上げる。

「事情説明してあんたに逃げられたら元も子もないでしょ！　だから、適当に誘き出して会わせようとしたのよ！　いつまでもウジウジウジウジ二人揃って面倒臭いのっ！　私と戦うその時までそれを引き摺ってたら承知しないわよッ！！」
「わ、分かったから大声出すなって！　人が来ちゃう！」
「誰もあんたになんて興味ないっての！」
「ひ、ひでえ！」

軽くショックを受ける薄葉。そういえば、昨日も姫神に同じような事を言われた事を思い出し、あれ？俺ってもしかして誰にも気にされてない？　と今更な疑問を抱きつつ、バシーン！とシャレにならない威力で背中を引っぱたかれて、悶絶する。

「とにかくっ！　八時まで猶予をあげるわッ！　会う覚悟が決まってるなら絶対に来なさい！　裏口出てまっすぐ先のでっかい木の場所だからっ！」

「お、オウケイ。心得た」

「ウジウジしないように私が立ち会ってあげるんだから！　感謝しなさい！」

鼻息荒く、再びバシーン！と薄葉の背中を叩いて、レンダは立ち上がる。その荒々しい善意を受けて、ベッドに蹲りながら、ようやく言葉を捻り出せる状態の薄葉は、やはり荒々しくドアを開く後ろ姿を見ないままに呟いた。

「……ありがとな」

「べ、別にあんたの為にやってるんじゃないんだからねっ！」

「ツンデレかっ」

そんな、二回戦終了後、すぐのやり取り。

一一一一

銀色の檻の中、男は目を覚ました。
鉄格子の向こう側、其処に並ぶのもまた鉄格子。それは、空っぽの場所もあれば、中になにやら人が閉じ込められている場所もある。
男は身の回りを見渡し、自分の装備の全てが剥ぎ取られている事に気付いた。

「一体、何が……？」

記憶を辿りながら、男は自らが閉じ込められた空間を睨む。
無骨な格子、それからは想像もつかないメルヘンチックな内装。
カラフルな時計がぶら下がり、壁はまるでビスケットのような見た目……いや、どうやら本物のビスケット。時計はキャンディ。
チョコレートにゼリー、プリンにケーキ。

そこはお菓子の牢屋。

なんだここは？　なんで私はここにいる？

男は頭を抱えて、夢のような……悪夢のような空間の中心で、記憶を辿る。

確か、ヴォラスカーニバル、闘技大会に参加していた。そして、戦った。誰と？　召喚術士だ。奇妙なものを召喚し、最後には見たこともない不気味な剣を取り出した女。そう、確か……

「目は覚めた？」

そう、この女。

男、ムディ商会総帥のイェシンは、鉄格子の向こうから姿を現した女を見て、完全に思い出した。

「……確か、マリー、と言いましたか」

「それ偽名。私は千歳（ちとせ）」

女、千歳はその張り付く仮面のような顔をイェシンに向けた。

「ここは……一体？」

「安心して。別にとって喰いやしない。むしろ感謝して。あなたを私が保護した事を」

「……そう、か。そうなる、か」

「そう。正気の沙汰じゃない。まさか『テラス化』の技術に手を染めようなんて。ヴォラスの王家の『テラス嫌い』を、知らないあなたではないと思うのだけれど」

イェシンは静かに笑う。疲れはてたようなその表情に、相変わらずの変わらない表情を向けて、千歳は勝手に喋り出す。

「ヴォラス王のテラス嫌いは余りにも有名。以前からちらほら見え始めていた人間との共存を望むテラスを迫害するほどに、王はテラスを嫌っている。そこでテラス化なんてしてみれば、たちまち異端者扱いで追放、酷い場合は処分される」

「っくく……だねぇ。それより私としては、さらりと『テラス化』の技術を知っている風なあなたが気になるんだけどね」

「天才だから」

イェシンの言葉に即答する千歳。真面目に答えるつもりはサラサラないようだ。彼女はただ、イェシンに質問をするだけ。

「……どこから買った？」

顔を背ける男に、千歳は質問を続ける。

「スポンサーがいるでしょ？」

続ける。

「ある程度、テラス化技術に手を出してる連中の目星はついてる。言わなくてもいずれは露見する。それより黙りしてたら体に聞くことになるけれど」

「拷問、かな？」

「それもありだけれど。あなたの誠意次第では、交渉という形も取れるけれど」

「交渉？」

千歳は優しく囁く。全て、見通しているかのように。

「……あなたがスポンサーと交わした取引、みたいな？」

「……知っている、と？」

「その答えはあなたの返事次第」

イェシンはキッと千歳を睨む。それに千歳は対応せずに、腕を広げて紹介した。

「この世界は私の世界。何でも私の思い通りになる世界。私は神。

望むなら、あなたの願いを叶えましょう」

お菓子の牢獄、それを抱えるその世界。

「ようこそ、『チトセズファンタジーワールド』へ」

―――

午後七時。約束の時間まであと一時間。

「あー、もう、慌てすぎだっての！」

「で、でもでも……」

すたこらさっさと裏口に向かおうとする明華を、ぐいっと引っ張り止めるレンダ。頬を赤くしながらうずうずしている彼女に、こつんとゲンコツ一発。

「まだ一時間前！　早すぎるっての！」

「でもやっぱり先に待ってた方が……」

「にしたって早すぎ！」

八時の薄葉との待ち合わせ。明華は身支度を完璧に整えて、既に待ち合わせ場所に向かう気満々だった。それに付き添う事になるレンダは、呆れ果てて首を振る。

「……ちょっと、本気で落ち着きなさいって。心の準備は？」
「うう～～」
「出来てないんかいっ！　……あ～、もう、本当に、もうっ！」

仕方がなく、レンダはそわそわしっぱなしの明華の手を引き、女性部屋区域の道を進む。

「え？　もう行くんですか！？」
「あんたが行こうとしてたんでしょうがっ！　ああ、もう、面倒くさっ！　会いたいのか会いたくないのかどっちなの！」
「……会いたいです」

本当にどっちなの……と、いつもは溜め息をつかれる側のレンダが溜め息。ぐい、と明華の手を引いて、廊下を進み、裏口を目指す。

中央ホールに出て、裏口方面への廊下を進む。人気がない場所だということは事前に調査済み。だからこそ、この二人を引き合わせるのにその場所を選んだのだ。結界による監視下、移動が許されていて、会話が聞かれない数少ないその場所に向かう裏口も、あまり需要がないので人は居ない。裏口の小さな扉を押し、レンダと明華は外に出た。

そして、先を進んでいたレンダは足を止める。

「レンダさん？」

「……どうして、あんたが此処に居るわけ？」

裏口を潜ってすぐ、奇妙な生き物を象った石像に腰掛けるように、その女は其処に居た。

特徴的な白い無地の仮面。それだけで彼女だと判別できる曲者。

「ジアミエンさん？」

「おや、奇遇ねえ明華ちゃん」

「アキカに何の用？　急いでるんだけど。それに、参加者以外が此処に入っていいと思ってるの？」

セルセラコミュニティの窓口係、ジアミエン。ひらひらと手を振る彼女は、レンダの鋭い視線を受けて、「くくっ」と笑うと、首を横に振った。

「いや、構わないで結構よん。私は別の用事で来てるから。ちゃんと許可も取ってるしね」

ぴらりと一枚の紙を取り出す。参加者宿舎入場許可証、そんな事が書かれたその紙が、彼女が此処に居る事を許しているようだ。

「別の用事ってどういう……」

「ジアミエン！」

その声は、レンダと明華、二人の背後から響いた。裏口を抜けて、たた、と走ってきた一人の少女。痩せこけた頬に、細い体、この大会の参加者で、明華の所属する『チームアミール』とも戦ったばかりのチーム『セルセラアンゲルス』に属していた少女。

少女、ゼンゼンマンは、石像に腰掛けるジアミエンに駆け寄り、ぎゅっと抱きついた。

「ごめんなさい、ごめんなさい、負けちゃって、ごめんなさい、捨てないで、捨てないで」

「捨てないで、って……大丈夫、大丈夫。大丈夫だから、ね？　ほら、よ～しよし」

ぎゅっと胴にしがみつく少女の頭を優しく撫でて、ジアミエンはぎゅっとその体を抱き寄せた。

事情が分からず、ぽかんと見つめる二人。ジアミエンはその様子に気付いたようで、仮面の顔を其方に向けて「あっはは……」と気まずそうに笑い声を漏らした。

「いやぁ……微妙な所みられちゃったね。気にしないでね、明華ちゃん。本当に」

「あの……その子は？」

ジアミエンが珍しく、本当に気まずそうな、困った様子を見せた。珍しい光景に、明華もレンダも驚きの表情を隠せない。いつも飄々としていて、どこかふざけている彼女の、優しく少女を抱き寄せ慰める姿は、何処か母親のような印象を与えた。

「……今、隠しても気にされちゃいそうだし……まあ話すけど。本当に気にしなくていいんだからね？」

「いいからとっとと話しなさいよっ！」

「おお、怖い怖い。女勇者様は気が短いですねえ」

ふざけて誤魔化すジアミエン。しかし、キッとレンダに睨まれて、「あはは」と誤魔化し笑いをしながら、彼女は一通りの事情を話す。

「この子、色々複雑な事情があってね。まぁ……コミュニティで預かってるのよ。虐げられて、親も失って、精神的にも疲れきってたこの子を引き取って、私が面倒見てたんだけどさ……それが色々教えて上げると吸収のいいこといいこと！　つい、私の方も楽しくなっちゃって、気付けばコミュニティでも一握りのＳＳＳランクメンバー！　何時の間にやらコミュニティの働き手になっちゃってねぇ」

「虐げられてたって……なによ？」

「『テラス狩り』、明華ちゃんはともかく、女勇者様なら知ってるんじゃない？」

「……あれの生き残りなの？」

「『テラス狩り』って……なんですか？」

明華が尋ねる。ジアミエンはすぐさまそれに答えてみせた。

「簡単に言うと、ずっと前に起こった最強のテラスと人間の最終戦争の後始末、ってやつよ」

「最強のテラス……」

「そう、『レマルゴス』を名乗る三躰のテラス。最高の頭脳と魔導を持つリーダー『張り付けのルーナ』、圧倒的なアルマ量と破壊力を持つ『球界のエストレリャ』、変幻自在で無数の姿を持つ『異物のイリョス』。あいつらは、人類に三躰で喧嘩を売った。テッラを統べる為にね」

明華は聞き覚えのあるひとつの名前に反応を示した。

アナトリの地を支配していた一体の強力なテラス、エストレリャ。彼がその最強のテラスの一角だったとは、と唖然とする。そして、その事が意味する不可解な矛盾に、すぐに気付いた。

それを明華が尋ねるまでもなく、ジアミエンはその戦争の結末を

告げる。

「代表を立てての代理戦争。結果はテッラの、人類の勝利に終わったわ。リーダー、ルーナを討ち取り、テラスの侵攻は防がれたの。そう、リーダーのルーナ『だけ』を討ち取って、ね」

ジアミエンは震える少女の頭を再び優しく撫でた。

「彼らを倒したのは当時の天使達。ルーナを倒し、他の二躰のテラスを追い込んだ天使だったんだけど……そんな中、二人の天使が突然二躰のテラスを庇ったのよね。『勝敗は決した。これ以上の殺戮は必要ない』……ってね」

当時の天使、それを聞き、明華はまっ先にヨシエの事を思い出した。彼女が果たして、当時、最強のテラスを倒したメンバーだったのか？　彼女の倒した巨悪とは、そのテラス達だったのだろうか？

「『テラスとの共存』、それを謳い、二人の兄妹はテラスを庇った。その結果、二躰のテラスはまんまと逃げ延び……二人の『血迷った』天使は、敵を逃がした『反逆者』として……処刑されたの」

「……え？」

逃げ延びたテラス。血迷った天使。処刑。

「そして、逃げたテラスを追い、ヴォラスの天使と軍勢は、各地を回ったわ。大陸外に逃亡したエストレリャは確認できた。でも、一番厄介な、『化ける』力を持ったイリョスは姿が確認できなかった。それは想像以上に厄介なこと。人間に化けられたらお終いだしね。だから……ヴォラスは『怪しい者を手当り次第に殺した』。当時からテラスと馴染み、関わる、ヴォラスの多くの村で『テラス狩り』

を行なったの」

明華がまっ先に思い浮かべたのは魔女狩り。ジアミエンはぼそりと「ごめんね」と腕を絡みつかせる少女を撫でて、話を続けた。

「……まあ、だいたい分かるでしょ。要は『疑わしきは黒』よ。それ程に、イリョスというテラスは厄介だった。秘密裏に行われたテラス狩りは、とにかく殺して、殺して、殺して、殺して……そりゃもう、他の国には言えない程に凄惨なものだったのよね。そして、それは『今でも続いている』」

「え……？」

今も続くテラス狩り。それはつまり、残るテラス、イリョスはまだ見つかっていないということ。そして、『今でも非道な殺戮は続いている』ということ。

「この子の村も、テラス疑惑を掛けられて……家族全員失ったのよね。まぁ、依頼で出向いてた私が何とか子供は保護したけど……大変だったのよ。心のケアもね。そっちの女勇者さんも、風の噂で聞いた事だけれど、結構知ってるんじゃない？」

「……そうね。私もその子と同じだから」

明華は驚き、レンダの顔を見た。暗く、悲しげなその表情。明るく輝くいつもの表情はそこにはなく、辛そうにジアミエンにしがみつくゼンゼンマンを見つめていた。

「今でも依頼外で、そういう村を守る為に、せめて罪のない弱者を守るために、独自でコミュニティでも動いてるんだけどね。この国の『テラス嫌い』は相当なものよ。とてもじゃないけど、並の力じゃ抑えきれないわ」

並の力、やたらと人材を欲していたジアミエンを思い出す明華。

「セルセラの名の元に……『全ての弱者は守られるべき』。それが、私達のリーダー、『リエン』の想い。それが例えテラスであっても、敵であっても、全て、全てが救われるべきなのよ」

初めて、真面目で、重々しく、悲しげなジアミエンの声を明華は聞いた。それは裏で、『テラスを庇った兄妹』を庇護しているようにも、テラスを嫌うヴォラスを批難しているようにもとれた。

「……ってね。柄にもなく湿っぽい話しちゃったね！　ほら、ゼンちゃん泣かない！　いやぁ～、私、この子のヴォラス嫌いを治すのにさぁ、ヴォラスカーニバルで見返してやれっ！　なぁんて無責任な事言っちゃった訳よ。だから、負けちゃったこの子慰めに来たってわけ！　あははっ、ごめんね？　結局、引き止めちゃって！」

笑って誤魔化すジアミエン。その仮面は、都合良くその表情を覆い隠していた。ほんの少し、この得体のしれない女性の一面を知れたような気がして、明華はほんの僅かに微笑んだ。

「私も、出来ることがあったら……何でも協力しますから」

「やだ、やめてよ～！　そんな重っ苦しい事言わないでって！　大丈夫よん！」

あくまで最後まで誤魔化す。それも彼女なのか、と明華は納得し

て頷いた。ジアミエンにしがみついて泣くゼンゼンマンを見て、明華は邪魔しないほうがいいかな、とレンダの腕をくいっと引っ張った。

「じゃあ、私達、これで……」
「……ごめんね？　気、遣わせちゃって」

小さくジアミエンは囁いた。

そして、ジアミエンは、明華を呼び止める。

「待って」
「……え？」
「これは善意よ。決して思惑があっての忠告じゃない。それだけは理解して」
「な、何ですか、急に……」

ジアミエンは忠告する。

「今は薄葉との待ち合わせ場所に行くのは止めなさい」
「な、なんでですか？　なんで……」
「ジアミエン……どういうつもり？」
「……現場に立ち会って、冷静な判断が出来なくなるよりかは、『此処で』見せて欲しい？　どうせ、私が止めた所で、あなた達は聞く気がないでしょう？」

真面目なトーンに、明華は少し怯んだ。しかし、引く気のないレンダ。明華も、薄葉に会いに行く、その意思を曲げるつもりはない。だが、ジアミエンの忠告は、何故かとてつもなく不気味なものを含んでいた。『此処で見せる』、その言葉が蠱惑的な空気を醸し出す。

「何が……あるんですか？」

「見たいの？　正直言うと、見るべきものじゃないと思う。でも、今からあっちに向かってあなた達が見るよりも、此処で、薄葉の居ない所で知った方がいいとも思う。私には、それを判断する能力がない。だから、選んで。『今此処から引くか』、『此処で見るか』……あ、今すぐ此処を通って見に行くというのなら……」

ジアミエンの手からぐんとスコップが伸びる。

「明華ちゃんの為に、私が全力で邪魔をする」

覚悟、それがジアミエンの言葉の裏にはあった。

「なによ！　やろうっての！？」

「レンダさん。待って」

明華はそれを察して、選択する。

それはきっと、目を逸らしてはいけないものだと判断し、そして選ぶ。ジアミエンの『善意』を受け取る事を。

「見せてください」

「ちょ……アキカ！」

「……分かったわ。んじゃ、お目々を拝借」

ジアミエンの唱える不可思議な呪文。そして最後に明華の目に向

けられる、白い指。

「『ショジニ・メアリ』」

明華の目には、大きな木が映った。視界に映像が張り付けられた、そんな感覚。待ち合わせ場所の大きな木のようだ。その木の下には、待ち合わせをしている筈の、薄葉がいた。

「……お兄ちゃん？」

彼の傍らには、一人の女が居た。ローブに身を包む、不思議な印象を与える女。黒い髪を垂らし、薄葉の隣に座っている。何かを話しているようだが、その会話までは明華は聞き取れない。あくまでこれは、視界を得る魔法のようだ。

何を、してるんだろう？

周囲の暗さから、ジアミエンの話口から、明華は映像は今現在のものだと思い込んでいた。待ち合わせ場所、一時間程前の筈の待ち合わせ場所に、薄葉はとっくに来ていたようだった。しかし、それ

までの時間潰しという事だろうか？　傍らの女性と、薄葉は何かを話しているらしい。

これの何処が、問題なのだろう？

疑問に思う明華。もしかして、ヤキモチ焼くと思われているのだろうか？　そこまで嫉妬深くないけどな、と明華は唇を尖らせる。しかし、何処かで苦しい胸の突っかかりを覚えながら、明華はその様子を見ていた。

何も、起こらない……

筈がなかった。

女の体がすっと薄葉に寄った。体は薄葉の胸に飛び込んだ。女の腕は薄葉の体に巻き付いた。薄葉はその体を受け止めた。そして、うっすら見えるその口元。

薄葉と、女の唇は、確かに重なりあっていた。

「……あ」

キスだ。キスだった。薄葉と女のキス。それと同時に、明華の視界は元に戻った。「ごめんね」と再びぼそりと呟くジアミエン。明華は凍りついてた。

同じ映像を見せられた、レンダが明華の顔をゆっくりと覗き込んだ。

唖然としているその表情。それを見て、レンダはごくりと息を呑む。

「アキカ……」

レンダは兄妹二人の置かれた状況をよく知らない。しかし、今見えた映像は、明華にとってよろしくないものなのではないか、と彼女は直感する。

どんな言葉を掛けていいのか分からない。レンダは言葉を詰まらせた。

明華は唇をぎゅっと結んだ。

「アキ……」

レンダがそれにびくりと肩を弾ませて、何とか言葉を掛けようとしたその時、明華の表情が変わった。

明華は笑っていた。すっきりとした、明るい笑顔で。何か、吹っ切れたように。

「アキカ……大丈夫？」

「……なんだか、ようやくすっきりしました」

すっきりした、そういう明華の言葉に嘘はないようにレンダには思えた。明華自身も、嘘をついたつもりはまるでないようだった。

何がすっきりしたのか？　それを聞く事はレンダにもジアミエンにもできない。ただ、何かを納得したような明華の表情を見て、ぽかんとする他なかった。

「レンダさん。一度、戻りましょう」

「え？　行かないの？」

「行きますよ、後で。待ち合わせ時間に、もう一度行きましょう。邪魔をしちゃ、悪いですから」

明華は踵を返して、宿舎に戻っていく。レンダはそれを引き止められずに、ただ、ジアミエンを鋭く睨んだ。

「どういうつもり？」
「善意だと、私は言った筈よ。選択の余地もあげた。これは明華ちゃんが選んだこと。それに、『目を背けていて』、何かが変わる？」
「……」
「そう、目を背けてちゃ、駄目なんですよね」
明華が歩みを止めて呟いた。
「大丈夫。ありがとう、ジアミエンさん。もし、目の前で、生で見ちゃってたら、私卒倒しちゃってたかもしれません！　あはは」
「……ごめんね」
「仕方ないですよ！　それに、ようやく分かりました、私！　モヤモヤの正体も、私がこれからどうすべきなのかも！」
明るく、華のように笑って、明華は腕をぐっと伸ばした。
「だって、私は、お兄ちゃんが大好きだから！」
明華の明るい声が夜空の下で響き渡った。
二日目の夜、大きく何かが動き始める。

Ｅｐ４９：　休息の夜、二日目（前編）（後書き）

薄葉の秘密の会合を目の当たりにして、明華が見つけた答えとは？
　休息の夜二日目、その裏では、様々な想いが動いていた。そして、薄葉と明華が遂に対面する。

次回、「休息の夜、二日目（後編）」に続く。

ヴォラスの裏にある歴史と、それに関わるセルセラコミュニティの立ち位置が出てきました。そして、薄葉にまさかの事態が発生しております。明華達が見たその光景。その裏で、その時、何が起こっていたのかは、次回に。

そして、地味に名前を出しましたエストレリャ。はい、一章のボスでございます。実は彼、最強のテラスの一角だったのです。
大陸外に逃亡→再来→アナトリ侵略、といった感じの流れで動いております。大陸外で四天王（笑）などを仲間にして、戦力を強化してリベンジに来たという事になっております。その辺りのエピソードを出すかは未定……

そんなこんなで初めての前後編、後編に続きます。

Ｅｐ５０：　休息の夜、二日目（後編）（前書き）

初めての前後編、後編。

ＥＰ５０：　休息の夜、二日目（後編）

時間に合わせて出向けば良かった。ただ、それだけだった。しかし、それは全て運命であるかのように導かれてしまった。今更何を嘆いても、最早手遅れ。最早無駄。

其れは午後七時が迫る頃に遡る。

―――

薄葉は八時の待ち合わせを前にして、そわそわしながら待ち合わせ場所の木の下で、既にその時を待っていた。

「早すぎたか……？」

早すぎである。待ち合わせの一時間以上前から、普通の小心者、

薄葉はその場所を訪れていた。別段、話し相手がいる訳でもなく、誰も構ってくれなくて、暇で寂しいからここにいる訳ではない。……いや、多少その節はあったが。

薄葉も覚悟を決めたものの、どうしても緊張は拭えない。ただ妹と久しぶりに話をする、しかも第三者を交えて、たったそれだけなのに、何故かそわそわする。なんだこれ、と自分で自分に疑問を抱きながら、薄葉はじっと明華を、レンダを待ち続ける。

指を擦り合わせながら、じっと、待つ。まだまだその時間は来ないにも関わらず。

「どれだけ早く来てるんですか。まあ、待ち合わせ場所に早く来るのはデートに置ける男のマナーと言えるでしょうし、いい心がけだとは思いますけれど」

その女は、突然、気配もなく現れた。

「お前……姫神？」

「はい。これから妹さんと会うんですよね？　大丈夫なんです？」

姫神美命。姫巫女と呼ばれるそのヴォラスの天使は、ベールを外してその素顔を晒したまま、薄葉の前に姿を現した。そのまま薄葉の隣に腰を降ろして、目の下、ほんのり浮かんだくまを撫でながら、薄葉の返答を待っている。

「……いや、まあ、立ち会ってくれるやつがいるから。大丈夫、だと思う」

「そこは格好よく大丈夫と言い切って欲しいですね。ヘタレですか」

「面目ない……」

そう。いつまで経ってもヘタレ。自分の持ち物に気付いた後も、気付く前も、ずっとそう。それがいけないんじゃないのか？　そんな事を思いながら、薄葉は顔を伏せる。

「そこはヘタレじゃねーし！　……とでも威勢良く言って欲しい所ですね。全く、勘違い甚だしいです」

「勘違い？」

「『気付いたライン』、其処を越える前と後では、あなたはおうどんと蕎麦くらいに違ってますよ。今のあなたはおうどんです」

「……それはレベルアップしているのか、レベルダウンしてるのか、それとも変わらないのか」

「変わってはいますよ。それが良い変化なのか、悪い変化なのかは人によって評価が違います。例えば、あなたの言う『レベル』というのは、誰にとってのレベルなのか……それが分からない内には私にはなんとも言えません」

姫神は指を立て、くるりと空気を撫でる。宙に描いた円、それが一体何を意味するのか、はたまたなんの意味もない動作なのか、薄葉には分からない。

「妹さんにとってのレベル？　それとも、あなた自身にとってのレベル？　はたまた私、姫神美命にとってのレベル？　私がお答えできるのは最後のひとつだけ。だって、私はそれしか知りませんから」

薄葉はぽかんと姫神の顔を見る。ぼんやりと虚空を見つめるその瞳。何もない空間を見つめている筈のその瞳は、何かに焦点を合わせていた。口を噤んで、しばらく黙りこくる姫神の口角が、やがて釣りあがる。

「私には、『未来と過去』を見る力しかありませんので。人の気持

ちまでは分かりませんよ。ああ、間違えました。私には、未来を見る力しかありません。仮に、過去を知る力が本当に私にあれば、あなたの妹さんの気持ちも、あなた自身の気持ちも見えたのでしょうが」

笑っていた。姫神美命は笑っていた。しかし、それは姫神美命の笑みであり、姫神美命の笑みではなく、薄葉に初めて彼女が見せた、『姫神美命であり、姫巫女である』、底無しに不気味な笑み。

薄葉は其処から、明確な、それでいて歪みに歪んで、薄葉の本能さえも気付けないほどに捻じ曲がった『悪意』を感じ取った。

「そう、『過去を見る力』は私のものではないのです。だから、私はそれを取り戻したい。取り戻したい。取り戻したいのです」
「……何を言ってるんだ？」
「つまりは……こういう事です」

ふらり、と姫神の体から力が抜けるのが、一目で見て取れた。重力に身を任せるように、姫神は横に倒れ込む。自分に倒れてくる姫神の体、それに思わず薄葉は反応した。腕でその体を支えようと構えた彼。その動きを見越したように、姫神はすっと薄葉の体に腕をかける。巻き付いた腕、それに抵抗する間も与えず、姫神はぐいっと薄葉の体を引き寄せて、その顔にぐい、と自分の顔を近づけた。

「お、お前、何して……」
「マウストゥマウスは初めてですか？」

らんらんと輝く黒い瞳に飲み込まれるように、薄葉はその唇に、唇を当てられて……

ぢゅうううううっ！

「んんんんんんっ！？」

薄葉の篭った悲鳴が響きわたる。

数秒の交わりを終えて、姫神は薄葉を抱く腕を解き、その顔をぐいっと後ろに引いた。

「……ふう。キッスというモノは初めてでして。上手く出来ましたか？」

「な、何をするきさまーーーっ！！」

薄葉は顔を真っ赤にして、叫ぶ。唇も真っ赤である。

「何って……キッスですよ、キッス。ちゅーです。ちゅー。あれ？照れてます？」

「吸うなッ！！　……じゃなくて、いきなり何してくれてんだ！？どういうつもりなんだよお前は……」

薄葉の戸惑いも、驚きも、全て、全ては一瞬で消え去った。

姫神の口角がぐにゃりと持ち上がる。細めた目から漂う不気味な空気。それは恋する相手にキッスをした女の見せるものではない。まるで何か、企みが成就した、極端に言えば『悪党』の下卑た笑み。ぱくぱく食事する時や、予言を語る時のような、どこかぼんやりとした姫神美命の表情は其処にはなく、今までの彼女の存在を全否定するかのような別の女が其処には居た。

「どういうつもり……？　うっくく……！　面白い事を聞きやがりますね？　ハナから私の目的は、たぁったのひとつに決まってんじゃねーですか？」

「姫神……？」

「そぉんな、捨てられた子犬みたいな目で見てくれてんじゃねーですよぉ？　うっけけっ！　大丈夫ですって！　別に君に変な感情なんざ抱いてねーですし？　戯れだと思ってくださいな！」

豹変。まさにそんな言葉がぴったりの状態。

姫巫女、姫神美命は豹変した。否、正体を現した。

すくっとなんの未練もないように、薄葉の隣から立ち上がる。ぱんぱんとローブを叩いて、うっすらついた汚れを落とし、口角を歪ませたまま、薄葉の方を見下ろした。

「……あれ？　空いた口が塞がらない、って感じですか？　うぉっほん。それまた失礼しました。なら丁寧にお話をさせていただきますと、今のは『ちょっとした運命操作』ですよ。私にとって望ましくない運命、それを終生してルートを確定的に固めただけです。その為に君の純潔を奪っちゃったことは謝ります。ごめんね～？」

「運命操作って……それはお前が言ってた、『大いなる災厄』を回避する為か？」
「……ん～、大きく間違っちゃ居ないですね。大体そんな感じです。あれ？　それとももしかして本当に私が惚れちゃったかと思いました？　期待しちゃいました？」
「いや……正直引いた。俺の生気でも吸い取るつもりなのかと思った。……てか、吸うなよ」
「あれ？　キッスって互いに吸い合うものなんじゃありませんでした？」
「……俺もしたことないからわからない」
「……ハッ」
「鼻で笑うな！」

キッスの余韻、そんなものを全く感じさせない姫神の態度。それに振り回される薄葉も、大した意識はしないで済んだ。
突然のキッス、ロマンチックのカケラもないそれは、本当にただの『運命操作』に成り代わる。

「それで……今ので何が変わったってんだよ」
「それを言ったら全てが無駄になりますので。……さて、私も用事が済んだことですし、これでお暇しましょう」
「あれをするためだけに来たのか！？」
「ええ。そうですよ。まあ、これから大勝負に出向くあなたへのエールだと思ってください」

姫神は、ひらひらと手を振って、すっと歩き出す。背中を向けて、納得いかない様子の薄葉に、最後の言葉を贈った。

「緊張しないで、存分にお話を楽しんでくださいな。最後に姫巫女の予言をひとつ。『妹さんは待ち合わせ時間丁度に来ます』。それ

では良い夜を」
「お、おい！」

薄葉の呼び止めにはもう答えずに、姫神は夜の闇へと姿を消した。突然現れ、突然のキッス、そして突然の豹変。その全てに散々に振り回されながら、薄葉は深く息をついた。

「……緊張を解す為、なのか？」

ひりひり痛む唇に指を当て、確かに解けた緊張を意識しながらも、薄葉はあの時の姫神の顔を思い出す。

ぶるっと身震いがした。

「……あれで、本当に、悪い未来を避けられるのか？」

一一一一

姫神美命は、緩む口元を抑えながら、確定した未来を睨んで胸を躍らせた。

やった、やった、やってやったッ！

杏樹薄葉、地味でどうしようもなくぱっとしないあの男。しかし、あの男こそが、運命の分岐点。あの男との接触により、不確定に揺れていた天秤が、完全に望む方向に傾いた。

限りなく１００％に近い確率で訪れるその運命。しかし、ほんの僅かの失敗可能性はあった。僅かな、１％にも満たない低確率。しかし、それを覆した存在は、姫神も何度か目撃している。

それは『伝承の天使』。どうやら、天使という自分と同列の存在は、その僅かな可能性を掴み取る力を持つらしい。

だからこそ、万全を期す。ほんの僅かな可能性も削ぎ落とす。危険が訪れれば、その都度修正を施してやる。

そして漸く、姫神に見える全ての未来が、一色に塗り変わった。

黒、黒、真っ黒。果てしなく黒。限りなく黒。星も炎もない夜よりも、ずっと、ずっと深く真っ黒。

笑みが溢れる。これで漸く、訪れるのだ。

「大いなる災厄、これにて１００％確定ッ！！　運命（おもい）通り、未来（おもい）通り、思い通りッ！！」

姫神美命はヴォラスに舞い降りた伝承の天使である。ミスティコという名家の復興、それを願われ舞い降りた。

そう、それだけ。彼女には、それ意外の義務はない。

だからこそ、彼女は復興したミスティコがどうなろうと関係ない。興味がない。むしろ、滅びてしまえ、とさえ考える。

何故なら、彼女はミスティコが憎くて、憎くて、仕方がないのだから。

「大いなる災厄ッ！　大いなる巨悪ッ！　やっと、やっと来てくれるッ！！」

彼女のたったひとつの目的。それはミスティコに奪われた、最も大切なものを取り返す事。その為に、彼女はミスティコという隠れ蓑を借りながら、じっとチャンスを待つしかなかった。そう、全ては『運命（おもい）通り』。

「……さぁ、もうすぐ会えますね。お兄様」

姫神は懐からひとつの鈴を取り出して、ちりんと小さな音を鳴らした。そして、その鈴に、いつもの口付けをしようとして、思い止まる。唇に残る感触、利用した男、それを思い出し、少しの引け目を感じる。

しかし、彼女は首を振って、意識を切り替える。決めたのだ。手段は選ばない、と。

「そう、全ては運命（おもい）通り」

確定した未来、それを見据えて彼女は笑う。

その遥か彼方、背後から、じっと見つめるその視線に気付く事なく。

その影は、彼女が大きな木の下で、薄葉に接近したその時から、正確には薄葉がその木の下に、座った時からずっと其処にあったのだ。

ぎろり、と光る、人間のものとは思えない不気味な目。千里先も見通すその目は、じっと姫神を睨み続けていた。

木の下に、今も座ってその時を待つ薄葉の背後、木の影に立ち、わなわなと震えながらその指を木にめきめきとめり込ませる恐ろしい影。

「……全く……不幸だわ」

その小さな、黒い囁きに、姫神も、薄葉も気付く事はない。

大いなる災厄、その確定と共に、姫神美命の運命も確定した事を、この時の彼女は知らなかった。

一一一一

待ち合わせ場所は裏口から出てすぐのその場所、待ち合わせ時間は夜七時半、それが人目につかない時間だと、女は言った。

何を根拠に、と思ったが、女は断言した。「絶対にその時間なら大丈夫」、と。

不安は残るが、いざ見られても、何ら問題はない。誤魔化しようはいくらでもある。

そう考えて、警戒しつつも待ち合わせ場所に向かったが、どうやらその心配は杞憂だったようだ。女の言葉通り、其処には、更には

其処に至るまでの道にさえも、目撃者となる人間は居なかった。しかしそれが逆に女の不気味さを煽る。

「おや、来ましたか？　そろそろ来る頃かと思いましたよ」
「……その子は？」
「ええ、お気になさらずに。うちの子ですから。大丈夫、ちゃあんと『お話』に絡んでいる子ですよ」
「大丈夫、外部に漏らしたりは、しません、我々は、同じ立場、なのですし」

大会参加者、既に脱落したその少女は、ぽつり、ぽつり、と言葉を漏らした。その少女がぎゅっとしがみつく白い仮面の女、ジアミエンは、「くくっ」と笑ってわざとらしく首を傾げる。

「で、なんの用事があって此処にご招待下さったんですか？　もしかして、お食事のお誘い？」
「ふざけるな。分かっているんだろう？」
「おお、怖いですねぇ。分かりませんよ、なんの事やら。要件ははっきり言っていただかないと」

女のふざけた態度に、男、ゾハルは心底苛立ったが、ぐっとそれを噛み殺し、要件を告げる。

「大会に使用する区域内で、三つの死体が見つかった。地面に埋められたそれは、あちこちが鋭い牙のようなものにちぎられていた。破損が激しく、見た目では判別がつかない程になっていたが、アルマ情報を解析した結果、このヴォラスカーニバル決勝トーナメントに残った中の、『失踪』した参加者だと分かった。勿論、失踪者が出てメンバーに欠員が出たチームは既に失格となっている」
「へえ、それはご愁傷さまですねぇ。で、それを私に話してどうし

ろと？　まっさか、私を犯人扱い？　やだー！」
「ふざけるなと言っている！！」

ゾハルの怒鳴る声に、「しーっ」と指を口元に当てて、ジアミエンは黙る事を促す。そう、此処で二人が会っている事は機密事項。ヴォラスカーニバル運営陣にも知られてはならない密会なのだ。

「……『話が違うぞ』、そう言っている。契約内容は、『ヴォラスカーニバルの裏で動く者達を取り締まる手を貸す事』だった筈だ。お前は邪魔者は始末する、そう言った筈だ。何故、犠牲者が出ている？」
「あー、そんな契約内容でしたねぇ。失念してました。これはお代を受け取る訳にはいきませんね」
「そういう話をしているのではないだろうが！」

「しーっ」と指を口元に当てるジアミエンと、少女、ゼンゼンマン。それを睨んで、ゾハルは呼吸を整える。

「お前達の働きは評価している。既に数組の暗殺者を処分した事も把握している」
「それは嬉しいお言葉ですね」
「だが、だからこそ！　……お前達は、本当に、『この犯行を認知していなかったのか』？」

ゾハルの言葉は核心を突いていた。事実、彼がより良いヴォラスカーニバルを作り上げる為に選んだ、禁断の果実、『セルセラコミュニティ』は、彼らでも捉えられなかった裏で動く者達を、大量に捉えている。それ程の情報網と能力を持ちながら、この荒々しい『殺し』をコミュニティが察知していないとは思えない。

「……『仮に』、私達がその犯行を知っていたとしたら、あなたはどうするつもりなんです？」

疑うゾハルを嘲笑うかのように、ジアミエンは言い放った。キッとジアミエンを睨み、ゾハルはぐっと、唇を噛む。

「そう、無意味。何も出来やしないんですよ。何故なら、あなたは違法な仕事を私達に頼んだ。『汚いものには汚いものをぶつける』、その発想はよかったんですがねぇ」

「貴様……！」

「……というのは冗談としまして。私達は汚くない、清く正しいセルセラコミュニティですので♪」

「清く、正しい、セルセラコミュニティ♪」

「にこっ」と笑うジアミエン、真似するゼンゼンマン。ただの悪ふざけにしか見えないリアクションに、何処から何処までが冗談なのかを見失う。

白面の女は、はぁ、と溜め息をついて、ただ首を振る。

「その質問は汚いですよ。何故なら、それに『いいえ』と答えても、証明する手段がないのだから。『認知している事』を証明できても、『認知していない事』は証明できない、ですよね？　それとも記憶を覗く魔法でも使います？」

「そんなものがある訳がないだろう……しかし、それはすまない。私が悪かった。……だが、正直に言おう。『疑われても仕方がない事』は理解できるな？」

「……ええ。それは、もう。このヴォラス内に置いて、『牙を持つようなモノ』を管理しているのは……我々、コミュニティのみですからねぇ」

ヴォラスの主要都市において、牙を持つモノは存在し得ない。人を襲う牙持つモノ、それが例えば獣だとして、それが入り込む余地はない。

しかし、それが『テラス』だとした場合、話は違ってくる。

ヴォラス王は嫌ってはいるものの、セルセラコミュニティの影響力は大きい。故に、ヴォラスも彼らが入り込む事を拒めなかった。そして、彼らが『テラス保護』を謳い、多くのテラスを擁していても、それを止める事はヴォラスには出来ない。

セルセラコミュニティを支持する声は、既に抑えきれなくなっている。信者とも言える、熱心な応援者も居る程だ。

だからこそ、僅かながら、このヴォラスの主要都市に、テラスが紛れ込む事はほぼ防げない。獣型ならまだしも、人間型は不可能と言えるだろう。

「つまりは、あなたは『セルセラコミュニティのテラスが、参加者を襲った』、と。それを疑っている訳ですね」

「……当然、ヴォラスの警備も居る。テラスが参加者宿舎に入り込む事はできないと分かっているが……」

「言葉を濁さなくて結構ですよ。ええ、そうですねぇ。確かに私達が一番怪しいですよねぇ」

ジアミエンは「くすくす」と笑う。

「でも、本当に怪しいのは私達だけでしょうかねぇ？」

「……何？」

そして、腕に巻き付く時計を覗いて（白い仮面の上から見えているのかは分からないが）、「おっと」と声を漏らして立ち上がる。

「ちょっと時間ですねぇ。それじゃ、この子はもう脱落したから、連れてってもいいですかね？」
「……手続きが必要だ」
「ああ、そうですか。う～ん、面倒……じゃあ、しばらく我慢出来るわね？　ゼンちゃん？」
「ジアミエンに、いっかい、会えたから、いいよ」
「うん、偉い！　いい子いい子！」

ゼンゼンマンの頭を撫でまわし、ジアミエンはぐいとその背中を押して、宿舎内に入らせる。そして、「くくっ」と笑って、ゾハルの顔を向いた。

「……と、まぁ、何人かは参加者としてウチの人員を潜り込ませてますけど……内部警部まではウチは出来ないんですよ。立ち入り禁止ですし、ね？　……外部の侵入者は見張りますけど、内部はそちらでなんとかしてくださいよ？　ウチの可愛いメンバーもいることですし」
「……分かった」

ひらひらと手を振り、去りゆくジアミエン。それを手を振りながら見送る隣のゼンゼンマンを伺いながら、ゾハルはジアミエンの背中に最後の問い掛けを投げかける。

「……お前は本当に何も知らないのか？」

ジアミエンは最後に答えた。

「情報は有料になります♪　ああ、あと、メンバーにしか売りませんので悪しからず。あ、ウチに入っちゃいます？　ねぇ……ゾハル

さん？」

ゾハルは顔を歪めて、当然の答えを返した。

「お断りだ」

一一一一

それは大きな出来事であったが、今では些事にまで成り下がっていた。ちょっとした冗談のような口付けは、薄葉の中ではうっすらと色褪せている。今の彼には、ずっと思い悩んだ問題しか見えていない。

それは相手にとっても同じとは限らなかったが。

「あ……お兄ちゃん。待ちましたか？」

「ま、待ってないぞ、全く！」

八時丁度。待ち合わせ場所に、待ち合わせ時間ぴったりに、明華は薄葉の前に現れた。一緒に来る筈だった、レンダを伴わずに。

「それにしても、まさかお前が裏で動いていたとはな」

待ち合わせの巨木、其処から少し離れた茂みに潜みながら、ひそひそ声で話すのは済。その傍らで、赤髪の女勇者、レンダはふんと鼻息を鳴らした。

「まあね。やっぱりスッキリしたいじゃない」

「……うう。私もやっぱり何かサポートするべきでしたよね」

「ウジウジしないっ！　いいから目を離さないでよ！　トラブったらすぐに出ていくから！」

レンダの傍らで、ショボンとしているのは救世。

この三人組は、薄葉と明華、兄妹の会話を見守っていた。

と、いうのも、明華が「一人で大丈夫です」とレンダに告げた事から始まる。心配なんかしてないけれど！　どうしても気になった

レンダは、その仲間であり、少し交流のあった済に事情を話した。その結果、もしもの時の為に、影から見守る選択をしたのである。

そのミッションに出向いたのは、比較的邪魔にならずに、なおかつ信用できる者。

ミュゲは隠れてられないだろうし、ハランもいろんな意味で邪魔、ダディとヨシエは両方呼ぶのは無理だろうし、片方でもひと悶着ありそうだ。呼ばない方が無難と判断して、冷静に見ていられて、奇怪ないざこざのない才羽兄妹が助っ人として登場したのである。

「頑張れアキカっ……！」

「レンダ……お前、本当はお節介ないい人だろう？」

「べ、別にアキカの為にやってる訳じゃないんだからねっ！　私がスッキリ戦う為なんだからっ！」

「ツンデレかっ」

見守る三人。ずっと絡まっていた糸は解かれるか？

一一一一

明華の表情の違いに、薄葉はすぐに気付いた。おろおろしていて、

目を逸らすような素振りはなく、それでいて薄葉を熱心に見つめるかつて嫌った彼女の姿はなく、何処か満たされたような表情を浮かべて、薄葉の隣に座って空を見上げていた。

此処で、明華が話を切り出すのを待つのはちょっと違うだろう、と、薄葉は緊張しながらも、口を開く。

「……な、なんかちゃんと話すの久しぶりだな」

「はい。そうですね」

明華は特に目を背けることもなく、にっこりと笑って薄葉に首を傾けた。その表情を見て、避けられていない事を思うとほっとする薄葉。

しかし、そうなると話題が出てこない。薄葉に対する感情に悩む明華、明華に嫌われたのではないかと不安に思う薄葉、その擦れ違いが、そもそものこの話のきっかけ。それがまるで見られなくなると、話す理由がなくなってしまう。

薄葉はなんとか話を繋ごうとする。

「あのさ……大丈夫か？」

「大丈夫？　何がですか？」

「いや、ほら、あのオラクルとかいう奴らに捕まった時の事とか……」

「あはは。お兄ちゃんいつまで心配してるんですか？　もう大丈夫ですよ、全然」

明華は楽しそうに笑う。

「心配かけちゃって、ごめんなさい」

「いや、そうじゃなくてな！　いやまあ、ほら、心配というか……

あれだ！　そう……あれだ！」
「ふふ、お兄ちゃん、口下手」
「……ごめんなさい」

ふと、薄葉は離れたところから視線を感じる。

シッカリシロ……

謎のメッセージを受信して、ぶるりと背中を震わせる。いかん、しっかりせねば。薄葉はうっしゃと気合をいれた。

「ところで俺の活躍をどう思う？」

……

……やっちまったよ！　ナルシストみたいな質問しちゃったよ！　大した活躍してないよ！　最後の方では水飴ベッタベタ状態でもがいてただけだよ！

オマエ、イイカゲンニシロ……

遠くから呪いのメッセージが聞こえる……ヤバイ！　薄葉は直感した。冷や汗ダラダラで、薄葉は恐る恐る明華の顔を見た。

すると、其処には疑問のひとつも浮かんでおらず、ただほんのり朱に染めた頬で、明華は微笑んでいた。

「はい。とっても、格好良かったです」

ほんの少し、ほんの少しだけ薄葉はどきりとした。何故？　明華が薄葉を褒めちぎるのは、昔からだった筈。しつこい程に褒められる事に、うんざりしていた筈。なのに、薄葉は思わぬ賞賛に、どきりとしたのだ。

それは自分の持つものに気付いたからか？　それとも明華の言葉が、いつもとは違った色を持っていたからなのか？　薄葉は結局分からないままだったが、照れ臭そうに頬を染めて「お、おう」とだけ呟いた。

「強くて、誰も寄せ付けない、そんなお兄ちゃんも格好いいけど……怯えるように戦っていても、必死で相手に向かっていく……そんなお兄ちゃんも、とっても、とっても格好いいです！」

薄葉は明華が自分を避けている理由は、『強くて、誰も寄せ付けない薄葉』を、力に気付いた『怯えるように戦い、必死で相手に向かう薄葉』が塗りつぶしてしまったからだと思っていた。憧れの兄でなく、情けなく戦う兄になってしまった失望。それが自分を避けている理由なのだと思っていた。

しかし、明華は言う。「そのお兄ちゃんも格好いい」と。

ふわり、と風が吹いた。がさがさと静かな夜の景色に、木が騒めく。風が明華の黒髪を靡かせ、その横顔を浮かび上がらせた。

何処か嬉しそうに、満足そうに、しかし何処か悲しげに。そのほんのり染まった頬と、つぶらな瞳を見て、薄葉は改めて、明華が優れた容姿を持つ妹だと思い知らされた。騒がしい妹が、しっとりした空気を纏う今、薄葉はぼんやりとその姿に見惚れていた。女性の姿を見出していた。

なんて、何考えてるんだか俺は。

薄葉は苦笑した。

「……明華はさ」

そして、切り出していた。聞くのが怖くて仕方がなかった、その質問を。

「知らない内に戦っていた俺が、好きなんだよな？　今の、今更になって、持ってるものに気付いた……怯えるように戦う俺よりも、さ」

怖かった。しかし、何処かで明華は気を遣って、望む答えを返してくれると思っていた。なんて、卑怯な臆病者か。そんな自虐に囚われる。そのネガティブさも、駄目だと分かっているのに。

しかし、明華は望む答えを返してくれなかった。必死で向かう、今のお兄ちゃんが好き。そんな言葉はくれなかった。

「全部、お兄ちゃんじゃないですか」

そして、明華は、置かれた薄葉の手をぎゅっと握り、明るい華のように笑った。

「私は、そんなお兄ちゃんが、大好きです」

とても爽やかに、とても自然に、とても優しく、とても静かに、とても、とても、とても……とても強く告げられた言葉は、今までに薄葉に向けられた、どんな『大好き』よりも、ずっと重かった。

「強いお兄ちゃんが大好きです」

それは以前までの明華も言っていた。

「格好いいお兄ちゃんが大好きです」

それも同じ。

「こんな私でも、必死で助けてくれる、そんなお兄ちゃんがとっても大好きです」

その言葉には、一際強い力が込められていた。その言葉を受けた時、薄葉の胸が弾んだ。

なんて、言えば、いいん、だろうか？

薄葉は高鳴る鼓動に押され、完全に言葉を失っていた。おかしい。何か、おかしい。

妹だぞ？

薄葉のそんな心の中を、見通しているかのように、明華は返事を待たないで、自分の見つけた『答え』を告げた。

「……今までの私は、大好きを押し付けるだけで、お兄ちゃん自身のこと、なんにも考えてなかった」

彼女が薄葉に抱いていた感情、それは信仰のようなもの。彼女はずっと、兄の薄葉に『大好きな兄様』を当てはめていた。より格好よく、より強く、より理想に……それに近づける事に、兄の凄さを見る事ばかりを望んでいた。

明華は、薄葉ではなく、『兄様』を見ていた。

「本当に……ごめんなさい」

薄葉は返事ができなかった。それは彼が嫌っていた彼女に違いなかった。

「でも、思い出したんです。私が大好きになったのは、ヒーローみたいなお兄ちゃんでも、強いお兄ちゃんでも、格好いいお兄ちゃんでもないって」

彼女の中で、大好きだったかつての兄と、大好きになった今の兄

が重なった瞬間の事だ。彼女はその時、自分の抱いていた誤解に気付いた。それに気付いた時、彼女は兄に抱いたその感情は、今までの感情とはまるで違うものへと変わっていた。

その時、彼女の大好きは本物になって、その大好きは彼女の想いをひっくり返した。

「今なら言える。私は、お兄ちゃんが『本当に』大好き」

彼女は初めて、大好きな兄の、幸せを願った。

「『妹として』、お兄ちゃんのこと、ずっと見てるから」

そして、大きな大きな嘘をついた。

「ずっと、ずっと、仲良くしてね、お兄ちゃん」

『女として』、兄を大好きになってしまった彼女が、見つけた答え。

私は、『妹』、なんだ。

彼女は兄の幸せの為に、妹として、兄を大好きになることに決めた。叶わぬ恋、無謀な恋、それに兄を引き込まないように。兄に、普通の幸せが、訪れるように。

それがお兄ちゃんにとっての幸せ。

苦しくなかった。むしろ清々しかった。大好きなお兄ちゃんを、ようやく解放できた。きっと、お兄ちゃんはこれから幸せになれる。

そう思うと、とても嬉しかった。

「……ああ。俺も、今まで辛く当たってきて、ごめんな」

「『大丈夫』。全然、気にしてないよ。それは前に、謝ってくれたもん」

薄葉は、照れ臭そうに呟いた。

「俺も、お前の『兄貴として』、お前を守ってやるからさ。これからはさ……も、もっと……な、仲良くやろう、な？」

それだけで嬉しかった。

「……うん！」

満面の笑みを浮かべる明華に、薄葉はやっぱり照れ臭そうに笑いかけた。

心の凝りが解れたようで、明華は体がのびのびとする感覚を感じた。すっと背筋は伸び、頭の中が透き通っていくような感覚。

満ち足りたその感覚に身を任せ、明華は大きな声をあげた。

「ん～～～……わあああああああああああああっ！」

「う、うおっ！？　いきなりどうした！」

精一杯の笑顔を。

「これですっきり、ですねっ！」

叫び声が、すぅっと暗い気持ちを完全に吹き飛ばした。

「……う～～～～……うおおおおおおおおおおおおおおっ！！」

薄葉も叫ぶ。

「……っはあ～～～！　すっきりした！」

「ふふっ！　夜中に騒いじゃ駄目ですよ、お兄ちゃん？」

「お、おまっ……！　お前もやっただろ！」

薄葉をからかい、明華が笑う。それに釣られて、薄葉も笑う。

もう、二人の間に壁はなかった。

「……明日からさ、また試合だけど……怪我すんなよ？」

「お兄ちゃんも、ですよ？」

「ははっ！　だな！」

「……じゃあ、戻りましょうか！　あんまり此処に居ても、体冷やしちゃいますしね！」

「ああ、そうだ……ぶぇっくしゅんっ！」

「ああ、ほら！　もしかして、ずっと待ってたんじゃないですか！？」

「ま、待ってないず……」

「もう……お兄ちゃんは……」

すっと薄葉にハンカチを差し出し、明華は歩き出す。薄葉もそれ

に続いて、宿舎へと戻る道を辿る。
静かな夜に、兄妹の楽しげな笑い声が、明るく響いていた。

――

「……オッケーなの？」
「……大丈夫、そうですね」
「……大丈夫、だな」

レンダと救世、そして済は、顔を見合わせて確認する。そして、わなわなと震え出すと、声を揃えて互いの手を叩いた。

「「「イエイッ！！」」」

パァンッ！　と小気味いい音が夜空に響きわたる。

「良かったな！　笑ってたぞ、あいつら！」
「途中でウスハの奴ぶっ飛ばしてやろうかと思っちゃったけど、よかったわね！　いやっほおおおう！」
「ちょ……二人とも力強すぎです……手、痛……」

手を取り合い、陽気に踊る済とレンダ。真っ赤な両手を涙目で摩りながら、蹲る救世。影から見ていた保護者三人。途中でハラハラしながらも、怨念じみたテレパシーを送りながらも、なんとか仲良く帰っていった二人を見送り、三人のミッションはコンプリートした。

「私も叫びたい気分！　うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！！」

「ちょ、ちょっとレンダさん、声大きすぎです！」

「うおおおおおおおおおおっ！」

「済ちゃんまで！？」

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！！」

「やめて！　……というか、レンダさん喜びすぎじゃないですか！？」

「あああああああああああっ！」

「済ちゃん！　まずいですって！　人が来ちゃう……」

「コラァッ！！　そこでなにやってるッ！！」

「「「あ」」」

ガサガサっと茂みを掻き分けて、運営の魔導士さんが顔を出した。

「…………またお前らかッ！！！　夜中に外で大騒ぎとはッ！」

「こ、これは誤解よっ！」

「そ、そうだ！　これは違うんだ！」

「……またって……二人とも、前にも何かしたんですか？」

「「ま、枕投げ……」」
「……子供ですか」

呆れてじっとりした目で二人を見る救世。しかし、今回ばかりは彼も当事者である。

「お前ら、今度という今度は許さんぞッ！！！」
「「「い、いやあああああああ！」」」

この夜、三人の保護者は、こっぴどく運営に叱られた。小一時間に渡る説教だったという。

そんな犠牲を出しつつも、二日目の夜は過ぎ去っていく。一見平穏に、影で怪しい空気も漂わせながら。

しかし、少なくとも、薄葉と明華は笑っていた。あと、才羽兄妹とレンダは泣いていた。

明日はいい天気になりそうな、そんな夜だった。

ＥＰ５０：　休息の夜、二日目（後編）（後書き）

絡まった糸は解かれた。心機一転、新たな戦いに天使達は臨む。しかし、まだまだ複雑に絡まる糸は残っている？　チームアミーラ、思わぬピンチに、あの男が動き出す？

次回「凸凹同盟？」に続く！

＼割とどうでもいい！／
カーニバルのうらがわ！
～コルドゥーン選抜編～

―――

「君の器術、確かに凄いね。……でも、ここはこうしたほうがもっと……いや、これじゃダメだな」

天才少年、ナスルは壁に向かって話していた。

「……なぁ、ナスルは一人で一体何をしているんだ？　殴られて頭がおかしくなったのか？」

「いや。殴ったあの女の子に、どうやって話しかけるかの練習してるんだと」

「え？　何！　それって……もしかして、ナスル君、あの女の子に

恋しちゃったの！？」

　コルドゥーン選抜、紅一点のエルムがうほっと鼻息を荒らげる。
恋バナには目がない厄介ものだ。

「いやいや。……いやいや」
「それじゃあナスルって……マゾヒストってこと？」
「親父にも打たれたことないから、打ってくれる子にきゅん、と来ちゃったのよ！　間違いないわ！」
「いやいやいやいや……いや、でも、確かにこころなしかほっぺた赤いな」
「なんと……目覚めたか」
「可愛いところあるじゃないナスル君も……年も近いし、いいカップルになれるんじゃな～い？」
「クソっ……！　俺だって彼女とか居ないのにっ！」
「それはコルドゥーンの定めだ……ガリ勉とか言われて、な」
「……くぅぅ～～これは応援しないとねっ！！」

　とことこ。

「ナ～ス～ルくんっ♪」
「おわっ！　きゅ、急になんだよ！」
「ミュゲちゃん、だっけ？　あの子に会いに行きたいんでしょ～？」
「ま、まあ？　興味深い魔導を操ってたからねっ！　そりゃ、多少の談義をだね……」
「そんな堅苦しい話をしたら、嫌われちゃうわよ～？」
「え、そ、そうなのっ！？　嫌われちゃうのか……魔導の話、楽しいじゃないか！」
「それは学生だからね～」
「そ、そうなんだ……」

ナスルはあわわと慌ててみせる。子供らしい。にんまり笑ってエルムが手のひらを差し出す。

ぽんっ。

その手のひらに、花が咲いた。

「女の子にはお花をもっていって、まずは挨拶！」
「あ、挨拶……」
「そして、褒めるの！　褒めちぎるの！　『かわいいね』、とか！」
「な、なるほど……かわいいね、かわいいね」
「そして、隙を見せたら押し倒すッ！」
「お、おしたおす……」
「おいこら何純粋な子供に滅茶苦茶吹き込んでんだ」

びしっ。

「あ痛っ」
「子供をからかうな」
「じょ、冗談だって！　私は素直にナスル君の恋を応援しようと……」
「よ、よしっ！　じゃあ、早速行ってくるっ！」
「「「え？」」」

ナスルは花を片手に嬉々とした表情で駆け出した。

「「「ナ、ナスルーーーッ！！」」」

三人の仲間たちの叫びが木霊した。

……このあと、なんとかナスル君はミュゲちゃんの直前で引き止められて、誤解は解けましたとさ。

～続く？～

まさかの新コーナーである

反省はしている（キリッ

……ごめんなさい

こんな感じで、カーニバル編の後書きに、脱落した脇役達の裏ストーリーを描いてみたり、しちゃったり。

よろしければお付き合いいただけると幸いです……補足を入れたい時は省くかも？です。

Ｅｐ５１：　凸凹同盟（前編）（前書き）

今回も前後編。もしかしたら今後もこの形式が増えるかもしれません。

ＥＰ５１：　凸凹同盟（前編）

『ヴォラスカーニバル決勝トーナメントも遂に三日目っ！！　いよいよ大詰め！　此処まで勝ち残った８組の戦士達による、胸躍る偉大な戦い、今日も張り切っていっちゃいましょー！！』

司会の甲高い声が響き渡る控え室。ふう、と息を吐き、気合を入れる薄葉。そんな薄葉の背後から歩み寄り、微笑み混じりに救世は話し掛けた。

「今日は結構調子が良さそうですね」

「え？　あー、そうですね。ちょっと今日は気分がいいというか。救世さんも酔いはさめたんですか？」

「……反省してますからもう触れないで下さい」

「ほう……今日は俺も楽が出来そうだな。お前ら、昨日までとは顔つきが違うぞ」

軽く談笑する、緊張も、気負いもない薄葉と救世の様子を見て、ダディはにっと笑った。薄葉の中で渦巻いていた混沌が解けた事で彼の心は晴れ渡り、それを知る救世もすっきりとした心持ちで構えている。その空気がダディにも伝わり、チームアミーラは今までで最高の状態で待機していた。

そんな中、其処から距離を取る一人の男。

その様子をちらりと伺い、救世は今回は溜め息を漏らさずにぐっ

と拳を握って気合を入れる。チームアミール内だけでなく、伝承の天使達の中に残る亀裂、そのひとつ。

今度は私が何とかする番ですね……

薄葉とハラン、その間にある隔たりを埋める為、救世は新たに決意する。

『第一試合っ！　……「チームアミーラ」っ！！　ＶＳ……
……「匿名希望」！！』

「早速か」

司会のアナウンス。三日目最初の試合が決定する。チームアミーラ早速の出番、その相手は、此処まで目立った試合を見せていない『匿名希望』。特段目立った戦闘方法も見せず、特段目立った魔導もなく、特段目立ったメンバーも居ない……本当の意味で『特徴なし』とも言えるチームだ。

「相手は良くも悪くも目立った所がない。変な油断はしないように気をつけるぞ」

ダディの忠告を全員が胸に刻み、チームアミーラは試合へと臨む。

一一一一

『匿名希望』。チーム名を定める事を拒んだ、ノトス出身だという四人組のチーム。目立たない、と言えば聞こえが悪いが、よく言えば非常にバランスの取れたチームとなっている。

前衛には、棒のような魔具を操り、付術による巧みな棒術を操る戦士、エスペルト。奇抜な動きや飛び抜けたステータスこそないものの、その長い棒を操る自在な戦いは、複数の戦士相手でも安定した戦いを展開する。

後衛には、他のチームには見られない『ガード専門』の魔導士、パトリオ。色の異なる防壁を巧みにコントロールし、前衛で戦うエスペルトと他のメンバーをがっちりとガードする。

そして、サポート魔導士、サルバドル。特別目立った魔法こそ持たないものの、安定した魔法攻撃や補助魔法は、エスペルトの立ち回りのサポートと、パトリオのカバーできない穴の補足などなど、臨機応変。チームのバランサー的役割を果たす。

最後の一人はトロ。今のところ、その魔導や戦術などは一切見せていないが、後衛からの戦況観察により、仲間に的確なアドバイスを送り、相手のステータスを見抜くアドバイザー的立ち回りを見せていた。最も地味でありながら、遠巻きに試合を見る彼の目は、僅かな隙をも許さない。

「地味で飛び抜けた長所はない。だが油断するな、奴らは『普通に強い』」

ダディの評価は的確。匿名希望、名乗らないそのチームは、派手さこそなかれ、普通に強い。エスペルトの制圧力、パトリオの防御力、サルバドルの判断力、そしてトロの統率力、全てが噛み合い、各自が主張する他のチームとはまた違った力を見せていた。

『さぁ、両チーム出揃いました!!』

入場ゲートを潜り現れた匿名希望。その中央に立つエスペルトが一歩前に出て、腰を折った。

「チームアミーラ、貴殿らの試合、全て見させて貰った。実に素晴らしい試合だった。我らはこの大会に於いて、貴殿らこそが一番の注目に値する者達なのだと確信した。今までは、手の内を隠し、先の試合に備えた立ち回りを心掛けてきたが、今回ばかりは一切の出し惜しみをするつもりはない。互いに全力を尽くし、戦い抜こうではないか。宜しく頼む」

「……今まで出し惜しみしてきた、ってか？　それを明かすとは随分と余裕じゃねぇか」

「余裕？　誤解されては困る。余裕がないから、本気で向かうと言った。我々、手の内を隠してはいても、不意を打つ真似は好まぬ故」

エスペルトは口元だけで笑った。しかし、その目は真剣そのもの。戦場に赴く戦士の目。ビリビリと伝わるその気迫に、ダディは鋭い

視線を返し、同じく口だけでにっと笑った。

「宜しく頼む。こちとら何時でも全力だ」

「此処で貴殿らと剣を交える事を光栄に思う」

「エスペルト。お前が使うのは棒だ。剣じゃない」

「……空気を読め、パトリオ」

目を閉じ、はあ、と溜め息をつきつつ、その格好のつかない様子を恥じるように、エスペルトはチームアミーラへと苦笑を向ける。

「改めて……宜しく頼む」

『それでは試合……開始ですッ！！』

「参るッ！！」

真っ先に飛び出すのはエスペルト。右手で棒を構えながら、付術による脚力強化で猛進する。

それに対応する形で、地面を揺らす猛牛の如く突進する巨体。ダディはその拳を振りかぶり、闘技場中央で、早速前衛同士が激突する。

「ぬぅんッ！！」

ダディの岩石のような拳が、ブン、と空気を捩じ伏せ、首を逸らしたエスペルトの青髪を掠める。チリッ、と僅かに毛先が削れ、エ

スペルトはにやりと笑った。

「見事な剛力！　流石にそれは受けられないな！」

グン、と身を捻り、エスペルトが回転する。その回転に乗せて加速した棒が、ダディに迫る。

パァン！

付術により強化された棒術、それがダディの膝を直撃する。その巨体が僅かにぐらり、とよろめいた。

「ぐっ……！」

「意外と重い、そう思ったか？」

しかし、ダディは直ぐ様、地面をズンと踏みしめて、その拳を薙ぎ払うように振り回す。しかし、ぐっと地面に棒をついたエスペルト。その棒は、付術による強化を絶妙に調節され、ぐんと折れない程度に激しくしなる。棒を支えに身を仰け反らせ、ラリアットにも似た腕の暴走を交わしたエスペルトは、地面についた棒を浮かせた。しなった棒が、直線へと戻る。瞬間、エスペルトは再び付術強化を起動。強烈な重みを付随し、反動を利用した勢いある棒が、今度はダディの顎を捉える

ガッ！

「ぐぁっ……！」

「一撃一撃が恐ろしいな……！　だが、捉えた！」

顎を捉え、確実なダメージを叩き込んだと確信したエスペルトが

にっと笑った。しかし、ダディは首を仰け反らせながらも、その右腕を動かしていた。

「なっ……今のを受けて動けるか……！」

「ぬぅんッ！！！」

豪快なパンチで、即座の反撃。ダメージをものともしない反撃に、エスペルトも反応が遅れる。

しかし、そんな時の為の後衛。

「『テリオ』！」

ガードの要、パトリオ。その魔法により、エスペルトとダディの間に現れるのは、地面から迫り出す鋼の防壁。

ゴォン！

ダディ渾身の一撃は、ギリギリの所で防壁によって遮られる。エスペルトはその壁を飛越、反撃に移ろうと、棒を地面に突き、しなりを利用し跳躍しようとした。

「エスペルト、ストップ！」

トロの支持に従い、エスペルトは棒を引っ込める。

ミシッ！

鋼の防壁にヒビが入る。ぞくりと背筋を走る悪寒を感じ、エスペルトは後退した。

「ぬぅぅぅんッ！！！」

連撃。大砲の連射の如きダディの連続パンチが、壁を粉々に粉砕する！　その破片を棒で丁寧に弾き落としながら、エスペルトは棒のリーチでダディを牽制しつつ、距離を取る。

一方、ダディも、その棒術の意外な重さに、流石に警戒する。安全圏をキープするように振り回される棒のプレッシャーに、素直にその突進を止めた。

「ちっ……やるじゃねぇか……！」

エスペルトの棒術に、素直に賞賛を贈るダディ。その後方では、魔具を構えた救世が声を上げる。

「ダディさん、大丈夫ですか！？」

「おう。……すまねぇな。サポート、助かった」

エスペルトの顎を打ち抜く一撃。あれはダディの意識を刈り取らんと放たれた決定打だった。しかし、それをダディが難なく耐え、即座に反撃に移れたのは救世の治癒術によるサポートのおかげである。

『遠隔アルマ操作』。救世がミュゲから預かったその魔具によって実現した新たなる技は、遠距離からの治癒を可能にする。正確には今回は、『遠隔操作の付術により、ダディの顎をガードした』。これにより、ダディは何とか踏みとどまれたのである。

侮っていた訳ではない。しかし、少しばかり愚直に突っ込みすぎた。ダディは今更ながら、相手の実力を再認識した。

「全く……恐ろしい限りだ。あの壁を破るか？」
「想定外だ。私の防壁が破られるとは」
「しかも、『付術抜きの素手で』、だな。流石は伝説の怪物。規格外だ」

トロの冷静な分析。それによって、改めて匿名希望の三人はごくりと息を呑む。

そう、ダディは『一切の魔導を使っていない』。ただの、己の身体能力のみによって、あれ程の戦いを展開していたのだ。確かに相手の治癒術士、救世のサポートもあったものの、付術を使い、パトリオのガードがあって、漸く渡り合える怪物。それを前にして、エスペルトは胸を高鳴らせた。

「そうでなくては……トロ。『張る』ぞ」
「了解っと。んじゃ、まあ頼むわパトリオ」
「了解。サルバドル。サポート宜しく」
「了解しました。それでは健闘を祈ります」

エスペルトにより、彼らの隠してきた『手の内』が起動する。起点となるパトリオの魔法発動に先駆け、エスペルトは棒をぶんと振り回し、構えた。

「……所属なし、我流棒術のエスペルト……いざ、参るッ！」

再び前進。それと同時に、青い長髪をぐっと後ろで括り、気合を入れ直す紅一点、パトリオが起点となる防御魔法を起動させる。

「……『ペルフェクト』ッ！」

ズズン！　と地面からせり上がる曲線を描く岩の防壁。それは丸いドーム状に変化し、後衛三人を包み込む。僅かに空いた隙間は、前衛エスペルトを監視する覗き穴か。後衛は完全防御体制によって無敵と化す。

「一人を基軸に来る気か……！　随分と大胆な戦術じゃねぇか」

ダディは構えて、エスペルトを迎え撃つ体勢に入る。その後方で、薄葉は救世に尋ねる。

「アルマを遠くから奪う……ってあれは、使えないんですか？」
「使えなくはないです。でも、あれはこの大会中に見つけた困ったポイントがありまして……」
「アルマ酔い……ですか？　でも、恥ずかしがってる場合じゃ……」
「それだけじゃないんです。あれは『判断力が鈍る』。普通の酒酔いと同じです」

救世がアルマを奪わない理由。それは『アルマ酔い』。多量のアルマに、吸収した
救世が酔ってしまうという弊害。相手のアルマをそぎ落とし、自らを強化する強力な治癒術ではあるが、その反面で『判断力の低下』という弊害が伴う為、救世は使用を控える事にした。何より、周囲を覆い、殻に篭った敵。大気を通したアルマ吸収は、難度が上がっている。

「だから、私は今回、後衛からサポートします。身体能力強化、傷の治癒、できる限り続けて前衛が戦える環境をつくります。だから

……薄葉さん。ダディさん一人では厳しいかもしれません。前衛、お願いします！」
「……分かりました！」

前方を見据え、ダディに続いて薄葉が不格好に駆ける。それを見送り、救世は何時でもあらゆる状況に対応できる様に、待機する。そしてそうしながらも、傍らで腕を組み佇むハランに声を掛けた。

「……ハランさん。ハランさんも、何か……」
「俺は必要あるまい。あの化け物二匹で十分だ」

ハランはフンと鼻を鳴らして顔を背ける。救世は、ぎゅっと唇を噛みつつ、動かないハランから目を逸らした。

「二対一、しかもあの奇抜な動きの少年も加わる、か。これは荷が重そうだ……！」

しかし、エスペルトは笑う。彼は心の底から、剣を交える事を楽しむ。勝利する事を楽しむ。勝負に飢えた狼、それが彼を表現するに相応しい言葉であろう。勝利するには勝負が必要、そしてそれは困難であればある程に価値ある果実となる。
彼は難敵との衝突にこそ、燃え上がるのだ。

彼は回避に重点を置きながら、ダディの攻撃を何とか凌ぐ状態。其処に奇抜な動きの少年、薄葉参戦。厳しい、が彼は戦闘というものを理解している。単純に敵が二人になったところで、それが単純な不利に変わるかは分からない。

エスペルトは薄葉参戦をチャンスと睨み、攻撃に転じる。棒で狙うのは、ダディの肩。一点集中、肩を外さんとする一撃。暴風の如き拳の嵐を掻い潜るような突きに、ダディは反応した。体を僅かに捻り、その一撃を回避する。

捻った方向、それはエスペルトの計算通り。ダディの巨体が、前進してきた薄葉とエスペルトの間を塞ぐ壁となる。

肉弾戦を主とする二人の前衛、それを活かすには、相当のコンビネーションが必要な事をエスペルトは知っている。何故なら陣取れるスペースは、敵に近いほどに狭くなる。今のダディと薄葉は、エスペルトに同時に襲いかかるスペースがキープできないのだ。故にあくまで勝負は一対一。しかも、更なるメリットが生じる。

「ふっ……！」

エスペルトの突き。ダディの体ど真ん中を狙った攻撃。それはダディに大きな回避を強いる一撃。その為に、彼はわざとタメを作って、強力にして回避が容易な攻撃を選ぶ。

ダディがその巨体から照準を逸らす為に大きく体をずらす。

その先には薄葉。それがエスペルトの狙い。

ダディが既にカウンターの体勢に入っているが、そのガードはパトリオに任せる。一発なら防いでくれる筈だと先程の一撃で即断。それよりもターゲットの薄葉を沈める事に集中。『ダディの体で塞がれた視界』から伸びる突き、その回避は困難な筈。

エスペルトの読みは大方当たっていた。しかし、計算外なのは薄葉の能力。『敵意察知』、最初から向けられていた敵意は、薄葉に攻撃へのリアクションを齎す。

「な……！」

まさかの回避。エスペルトは驚愕した。彼の側面では、ダディの拳で防壁が凹む。セーフ。しかし、前方からは棒を飛び越し迫る薄葉。振りかぶる腕は、左から迫る。右には防壁、空いた道は後ろ。しかし、エスペルトの瞬断をもってしても、攻撃の隙は消せず……

ゴッ！！

薄葉の薙ぎ払う腕のひと振りは、エスペルトを鉄壁に挟むように直撃した。

「がッ……！？」

不幸は重なる。ガードが間に合わない、不意をつく脳を揺らすその一撃は、彼を怯ませるだけでなく、その体を吹き飛ばさなかった。つまり、二人の敵の中に彼は取り残される。

不味い……！　エスペルトは直感する。しかし、同時に瞬断。

背後には、仲間が控えている……！

エスペルトの想定外のダメージに、当然後衛は反応する。彼らは、エスペルトを『トロの仕掛け』が完了するまでに守り抜く必要がある。動いたのはサルバドル。ガードは今更な状況で、彼が操るのは『幻術』。エスペルトのダメージを、一時的に幻で誤魔化す。エスペルトは覚醒し、即座に後退。その逃げの動作には、薄葉の敵意察知は反応せずに、壁の破壊に努めるダディは、その動作に反応が遅

れた。
　エスペルトは二人の包囲から脱出、そのタイミングでサルバドルの第二詠唱が終了する。次はダディと薄葉にかける『視覚混乱』の幻術。エスペルトの姿を誤認させる。だが、対応するように、後衛、救世がそれを治癒。僅かに違う方向に動き出した二人だったが、すぐに方向を修正し、エスペルトを追う。

「まだかトロ……！」

　ぐらりと視界が歪む。幻術の誤魔化しが解け、エスペルトがふらついた。そんな彼の前に出現する巨大防壁。パトリオのサポートが間に合い、エスペルトと二人を隔離する。エスペルトは何とか持ち直し、次の攻撃に備える。相手は壁を破壊し猛進するか、右か左に避けてくるか。エスペルトは後者に賭ける。相手も無駄な体力は使うまい、そんな判断。次は二択、右か左か。彼は一か八か、左に向けて棒を振る。

ゴッ！

「ぐあっ……！」

　的中。エスペルトはついていた。飛び出した薄葉に、棒は偶然直撃する。闇雲に降った一撃、それに敵意はなく、敵を遠ざける牽制じみたもの。それは偶然にも、飛び込んできた薄葉の反応を遅らせた。直撃した棒の一撃に、僅かによろめく薄葉。目の前の壁が凹む。ダディは破壊を選んだようだ。またとない薄葉撃破のチャンスに、しかし、エスペルトは後退した。
　不可解な反撃、それに彼は警戒していた。勇猛な彼は、それでいて慎重だった。

そろそろ、時間だ……！

彼は仕掛けが終わる頃合だと判断し、ドーム状の彼らのベースへと身を引いたのだ。防壁ドーム、その前まで一気に彼が後退した時、薄葉は頭を抑えて立ち上がり、ダディは壁を破壊していた。

その時、ドーム内から声が響く。

「終わったぞ」

エスペルトはにやりと笑った。

「此処からが本番だ……！」

その口を開き、起動させる。今まで隠していた、その実力の一端を。

「『トランプフ』」

エスペルトの握る棒型魔具、『ウチオトシ』。その体積は、爆発的に変化する。

グンッ！

『トランプフ』、エスペルトの起動したその魔法は、彼の棒を急激に『伸ばした』。圧倒的速度、瞬時に壁まで到達するであろうその強烈な棒の突貫。そのターゲットはダディ。一瞬の、彼らの移動速度を大幅に上回る一撃に、寸でのところでダディは横に飛び退き、

その一撃を躱した。
ズドン！と闘技場の壁に棒が突き刺さる。その恐るべきスピードと威力に、それを捉えられなかった薄葉は目を見開き驚愕した。

「今のはやばいだろ……！」
「当たれば俺でもヤバイな」

砦の如き肉体を持つダディの一言が、今の一撃の見た目以上の危険性を告げる。しかし、それはただの伸びる棒の突貫では無いことを、すぐさまエスペルトは示す。

「フゥンッ！！」

気合一発、彼は壁に突き刺さった棒を、『思い切り横薙ぎに振った』。

ガガガガガガガガガッ！

壁を抉る様に、闘技場全てをカバーする様に棒が横切る。しかもその長さや、壁による抵抗をものともせずに、それは今までダディや薄葉に向けられた打撃と同等のスピードで動く。
回避する方法、その棒の高さから分かる事、『逃げ場は上のみ』。その棒を飛び越す事でのみ、それは回避可能。

しかし、ダディは飛ばなかった。その巨体をずしりと構え、真正面から棒に向き合う。

その圧倒的広範囲攻撃の射程には、背後に待つ救世とハランも含まれている。ダディは彼らの回避能力を察し、それを受け止める選択をした。腕を構え、全てを薙ぎ払う一撃を脇腹で受け止める。

「チッ……！」

ズン、と想像以上の重量が伸し掛る。しかし、それは受け止められ、逆に捉えた棒を握り、ダディはエスペルトを捉えた。

「ぐっ……！」

「逃がさねぇよ……悪いがな」

チームアミーラ全員を狙ったその一撃に、既に反応して薄葉がエスペルトげと無意識状態で突撃を始める。体を揺らし、地を這う蛇の如く、疾走する。その腕を構え、動きを封じられたエスペルトに向かう。

「やれ、薄葉！」

ダディの声に反応せず、薄葉は向けられた敵意への反撃として動く。

しかし、その危機的状況で、エスペルトはにやりと笑った。

「……掛かったッ！」

ガッ。

それは薄葉が一歩、その地面に踏み込んだ瞬間に起こった。

ふわり、と薄葉の体が浮き上がる。足元に走る衝撃に、薄葉の意識は覚醒する。速すぎるその動きが途切れ、その足元に何かに打ち

付けたような痛みが走る。

「薄葉さん！！」

その足元には、『穴』が生じていた。何もない地面に突如として空いた穴。それは薄葉の足を掬い、その身を宙に投げ出していた。目にもとまらぬ疾走、その勢いのまま地面に転がり、薄葉は「ぐっ！」とうめき声を上げる。ざざ、と体を地面に擦り付け、顔を顰めて倒れたまま後方を睨む。

「お、落とし穴……！？」

それは『落とし穴』。踏んだ敵を落とすトラップ。何故、こんなものがあるのか？　体に痛みの走る中、薄葉は救世の治療もあって何とか立ち上がり、直ぐ様、棒から手を離し、動き出そうとするエスペルトに向かう。

カチリ。

しかし、一歩踏み出した途端、その音は鳴り響く。何かのスイッチが起動するような音。その瞬間、再び薄葉の体に衝撃が走った。

バチッ！

「痛っ！」

地面から這い出す不可解な光。それが薄葉の体を駆け巡り、衝撃を与える。ぐらり、と再びよろめいて、何とか体勢を立て直すが、明らかに薄葉にはダメージが残っていた。それでもなお、突撃しようとする薄葉に、ダディの制止が掛かる。

「薄葉！　動くな！」
「……え？」
「それも問題ではないか？」

棒を見捨て、懐から新たに短い棒を取り出すエスペルト。それを握り、薄葉に照準を合わせて、エスペルトは呪文を唱えて、再びその魔法を発動させる。

「『トランプフ』」

必殺の弾丸と化す伸びる棒の突貫。それが薄葉目掛けて突き進む！　薄葉はその敵意に反応し、無意識下で飛び上がり回避する。そして、反撃に一歩を踏み出すその時、再び地面からカチリ、という音。

ボッ！！

小さな爆音。それと共に、薄葉の体に地面から吹き出す爆発が直撃する。着地後不安定なその体は、その一撃で吹っ飛ばされる。

「救世ッ！　あいつに治癒を！」
「わ、分かりました！」

救世が直ぐ様、その遠隔治癒の手を浮かび上がる薄葉に向けようとする。しかし、その治癒が行われる間もなく、地面に落ちた薄葉の体は、カチリという起動音と共に、地面から吹き出す風の刃に打ち上げられた。

「薄葉ッ！」

ダディの呼び声に答える事なく、薄葉は地面にどさりと落ちた。無数の傷と火傷を作り、動かなくなる。ダメージの痕は、救世の遠隔治癒によって、直ぐ様取り去られたが、立ち上がらない。

棒を縮めて、初期のものと同じ長さへと変化させたエスペルトは、棒を地面に立て、すっと頭を下げた。

「悪いな。本来なら、打ち合いで決着を着けるのが理想なのだが、勝利のために戯言も言ってはいられない。『これ』が、我らの、『戦略』だ」

ダディがエスペルトを睨みつける。その後方で、ぐっと唇を噛んで、魔具を構える救世。その傍らでは、じっと転がる薄葉を見ているハラン。動かない彼らに対し、チーム匿名希望は、後衛を包む防壁ドームを解除した。

その中には、ひとつの大穴と、その前に立つ泥にまみれた司令塔の男。

「改めて、自己紹介をしようかな。どうも、トロです。残念ながら、既にこの戦場には、『僕のトラップを張り巡らせた』」

『トラップ』。ドームにより、姿を晦まし、司令塔、トロは、彼の本分、『トラップマジック』を地面を伝って会場内に配置した。

薄葉が踏み付けたのは、まさにそれ。戦場は今、地雷原と化したのだ。

「これで、君達は動けない。僕達の勝利は……確定した」

――

チームアミールの控え室。試合の様子を映し出す映像魔法の前で、食いつくように四人の妹達は兄達の戦いを見ていた。

「もう……何やってるの、情けない……！」

ヨシエが動きを止めるダディを睨んで、顔をしかめる。その前で、ぎゅっと拳を握り締め、鬼気迫る表情で倒れる兄を見つめる明華。

「まずい……」

「いや……大丈夫だろう。あいつらなら……」

「まずいの……！」

心配しつつも、彼らを信じる済の言葉を遮って、悔しそうに画面

を見つめる明華が言葉を漏らした。
それは最悪の状況。
それは兄が傷ついた、という単純な理由ではなく、現状を見据えた冷静な戦況判断。

「何がまずいんだ……？」
「『トラップ』はお兄ちゃんに対抗できる、数少ない有効な手段なの」

相手がまさに取ってきた戦法。それは果たして薄葉の特性を見抜いての事なのか、その真相は分からない。しかし、確実にそれは薄葉を追い込める一手だった。

「敵意に反応する暗中無心拳は、裏を返せば『敵意を向けられなければ発動しない』。それは人間から放たれる感情のようなもの。だから、『配置された害悪』には、お兄ちゃんは反応できない……」

『回避策を失う』、それは思う以上に大きな問題。事実、今まさにその状態に陥った薄葉は地面に伏している。

「……どうしよう……このままじゃ」
「大丈夫だよ！」

戸惑う明華に降りかかる励ましの言葉。それは小さな少女のもの。

ミュゲは一人、確信に満ちた笑顔で、その試合を見つめていた。

「でも……」
「大丈夫なの！」

言い切るミュゲが見つめる先、それは一人、完全に試合の外側で腕を組む男。

「お兄ちゃんが、ずっと見てるから！」

何もしないで突っ立っているミュゲの兄、ハラン。少女が彼の何に期待を寄せているのか、三人には理解できなかった。

しかし、確かに男は見ていた。じっと、その戦況を。

ＥＰ５１：　凸凹同盟（前編）（後書き）

意外な伏兵、匿名希望。最悪の相性を前に思わぬピンチに陥る薄葉達。そんな状況を打破するのは、放たれた一発の銃弾だった。噛み合わない者達が手を結ぶ時、罠に塗れる戦場は塗り変わる。

次回、「凸凹同盟？（後編）」に続く……

番外編
≪とある日の天使達≫
「レイラとルカ、コンビニにいく」編

「うふふ……役たたず。私にピ○を買ってくれるなんて……今日だけは褒めてあげるわ！」
「はいはい。ありがとうレイラ」
「早速、頂くわ！」

ガサゴソ

「これこれ。こんなアイスを作った森○……あなたも褒めてあげるわ！」
「やめてレイラ。周りの人が見ている」
「いただきます！」

パリリッ

「……」
「あれ？　急にどうしたのレイラ？」
「不幸だわッ！！」
「な、何っ！？　あ、あと、周りの人が見てるから『不幸だわ』はやめて！　何？　何があったの！？」
「私のピ○、一個だけ変な形のが入ってる！　不良品だわ！　デコボコしてる！　せっかくルカに買わせたアイスが不良品だわ！　不幸！　不幸！　不幸だわっ！」
「え？　あ、それ星形のだよ」
「え？　星形？」

きょとん。

「たまに入ってる珍しいやつだよ。だから不良品じゃないよ。レイラ、ついてるね」
「え？　そうなの？　わ、やったー。ついてるー」
（そ、そこは普通に喜ぶんだ……）
「でも、これが出るのがついてるのなら、あんたはしょっちゅう出てるんじゃないの？」
「いやいや、そうでもないよ。何度か見たけど、しょっちゅうなんかは……それに意識したこともなかったし」
「じゃあ、あんたも開けてみなさいよ。今回は意識したら入ってるんじゃない？　もしかしたらついてるあんたは二個入ってたりして！」
「あはは、ないない」
「いいから開けなさいよ！　じゃあ、私は二個に百円賭けるわ。あんたは一個に百円ね」
「もう……負けても人前で『不幸だ』って叫ばないでよ？」

パリリッ

「……な、なんですって……」

「ぜ、全部……だと……」

―おわり―

今回も結構長くなるので前後編に分けさせていただきました。もしかしたら、ここからこの形式を増やすかも。……どんどん四章が長くなっちゃいます。

そして、再び番外編を後書きに突っ込むという暴挙。異世界に呼び出される前の天使の日常です。

その内、本編にもちょっとした番外編を設けたいなぁ、と考え中です。でも、それも四章が終わってからですね。

EP52：凸凹同盟（後編）（前書き）

後編。決着編。

EP52：凸凹同盟（後編）

無数の罠と、棒術使いエスペルトの伸縮自在の棒攻撃。その掻い潜る隙さえも与えない攻撃を前に、前衛の薄葉とダディは満身創痍であった。

救世は身体的なダメージを取り除けても、意識の回復まではできない。傷が癒えて、漸く立ち上がる薄葉は、しかしふらふらとよろめいていた。痛みと熱、それが意識を遠のかせる。

「ああ……格好悪いな……情けない……！　この程度……！」

「まだ、立ち上がるか。流石だ、我々の見る目は間違っていなかった。だが、無理はしない方がいい」

立ち上がる薄葉に、エスペルトは冷ややかな視線を送る。

「うるさい……罠張った程度で何が勝利が確定だよ……」

「分からないか。貴殿らは既に動けない。動けば破滅。動かずとも破滅。既にこのフィールドは、我々の支配下だ」

「思い上がるなよ」

飛び出すダディ。その足元でカチリと音が響く。

ゴウ！

吹き出す爆炎。しかし、それをものともせずに、突っ込むダディ。確実にダメージはある。だが、止まらない。

カチリ。ボッ！

閃光。止まらない。

「強引に突破するか……！」

迫り来るダディ。それを前にして、エスペルトは懐からもう一本の棒を取り出す。そして、その二つの棒をそれぞれ薄葉とダディに向けて、構える。

「だが、無駄！　『トランプフ』！」

伸びる棒。強烈な突き。

この罠の張り巡らされた戦場に置いて、エスペルトの伸縮自在の棒は、最強の武器となる。罠に気を取られる相手を打ち抜き、時に罠へと誘導する攻撃。それから逃れる術はない。

「ちっ……！」

迫ろうとする棒、それを左へ躱そうとして、ダディは止まった。左方向に現れたのは、鋼の壁。あらゆる攻撃を防ぐその防壁は、ダディの逃げ場を防ぐには十分すぎるものだった。

「後ろにまだまだ控えが居ることも……忘れてもらっては困る」

ガード魔法専門のパトリオ。彼女の魔法は、エスペルトとトロの二人と組むことで、強力な武器にもなる。逃げ場を失ったダディが

右に切り返そうとした時にはもう遅い。その伸びる棒は、勢い良くダディの腹を突いていた。

「がはっ！？」

「……何？」

両腕に構えるエスペルト二本の棒。その一本はダディを捉えたが、もう一本は薄葉に見事に回避される。喩え弱ろうとも、薄葉は反射で回避する。ジャンプし、身を捻り、その棒に向けて、打ち下ろす蹴りを叩き込む。がくん、と傾く棒に、エスペルトは大勢を崩した。

「ぐっ……しぶとい……！」

薄葉の一撃で、強化された筈の棒はへし折れた。しかし、それに動じず、エスペルトはダディを突き倒した棒を振り上げ、棒を蹴り上げ、再び飛んだ薄葉を狙う。振り上げる形で放たれた長棒の一撃は、救世とハランの頭を掠め、上空の薄葉に届く。

薄葉の腕が、すっと撫でる様に棒に触れる。単調な攻撃、それを受け流し、ふわりと身を躱した薄葉は、そのまま地面に落ちていく。ゆっくりと、ふわりと地面に降り立った薄葉。しかし、その足元からは、再びカチリと音が鳴った。

ゴウンッ！！

飛び出したのは岩の刺。相手を殺めれば失格のこの大会、トロが仕掛けたのは踏んだ位置に立つ者に、深い傷を負わせる程度のもの。それは見事に薄葉にヒットし、血を撒き散らさせ、膝を付かせた。

「これで終了だ」

エスペルトが棒を縮めて、手元に寄せる。地面に沈む、ダディの巨体。膝をついて、ふらふらとよろめく薄葉。どちらも傷は既に塞がっている。しかし、立ち上がる気力はほぼ削がれた。

普通に強い。それが匿名希望を名乗る四人の戦士。

戦略、コンビネーション、基礎能力、そのどれをとっても強力。此処にきて見せた独自の戦法。ノトス出身を名乗る彼らが、此処にきて漸くその真の力で会場を静まり返らせる。

「我らは勝利した。強力なる伝承の天使を打ち破って、な」

エスペルトが満足げに笑みを浮かべる。素性不明、謎多き彼らの目的はひとつ。

「これでまた、我らの力が証明できた……！」

純粋に、その力を試しに来た、戦闘狂。戦場を駆け回り、あらゆる戦闘おける四人の能力の高さを示す者。

彼らは名も無き傭兵団。それ以上でもそれ以下でもない。

「さて、残るは二人。まだ、続けるか？」

エスペルトが後衛の救世とハランに視線を向ける。前衛なき今、両手の棒は、二人をすぐにでも撃ち抜ける。構えた棒で、それを強

く示しながら、エスペルトは問いかけた。

「……いや、一人か」

答えを待たずに、エスペルトは片手を下ろす。それと同時に、魔具を構えて立っていた救世は、がくりと膝をついて倒れた。

静観していたハランは、瞬間目を見開き、その傍に駆け寄る。彼が初めて、この試合中に見せた動きだった。

「大丈夫か!?」

蹲り、ぜえぜえと息を吐く救世。その額には大粒の汗が伝い、顔と唇は真っ青に染まっていた。息を切らして、ハランをようやく振り向く救世は、弱々しい微笑みを浮かべていた。

「あ、あはは……ちょっと……疲れちゃいました……」

「どういうことだ?」

絞り出すような声。救世はハランの問いかけに答える。

「……ちょっと、この遠隔治癒術……集中力と相当のアルマ量を消費しまして……ちょっとぶっ続けだと……辛いんですよね」

救世はこの試合中、常に薄葉とダディの治癒に努めて来た。しかしそれだけではなく、救世は常に惑わしの術を繰るサルバドルに対応し続けていた。幻術、その度解除、幻術、その度解除、時に治癒……と、対応を続けてきた救世の体力は、限界に近かった。

そして、遠隔治癒、その便利すぎるスキルは、一方で精度が落ち

るという欠点も持つ。その治癒は、完全に前衛二人を回復するには心許なかった。ある程度なら大丈夫。しかし、今の薄葉とダディは傷付き過ぎている。

救世は、絶体絶命のこの状況で、ハランに優しく微笑み掛けた。

「……ハラン、さん……お願いが、あります」

それは藁にも縋る思いか。

「この試合……ちょっとだけ……助けて、もらえませんか？」

ハランは目を見開いた。

救世はハランの実力を知らない。一度も見たことがないからだ。彼が余りにも弱すぎること、それを詳しくは知らない。ただ、彼が、明華と済の二人を倒した、それだけを知っている。それが姑息で、一回きりの謀略による勝利だとは知らない。

薄葉が気に入らない、それだけの理由で彼が参戦しないのだと思っているのだ。ハランはそう考えた。

……全く、酷い勘違いをされたものだ。

ハランはそれを不服に思いつつ、そんな勘違いを招かせた自分の態度を恥じた。

「……ああ、任せろ」

ハランは再び嘘をつく。彼は卑怯で手段を選ばぬ姑息な男。己の大切なものの為なら、何でも犠牲に出来てしまう、人でなし。

だからこそ、彼は己を偽ってでも、大切なものに尽くす。

「あと、勘違いするな。これはチームの為じゃない。あの泥棒野郎と協力するつもりもない。化け物グラサンに従うつもりも、高慢女に奉仕するつもりもない」

「……じゃあ」

「……借りを返す為だ」

ハランは立ち上がり、腕を組みながらエスペルトを睨みつけた。

「……俺を塔から引き摺りだし、敵地に引っ張り込んだ貴様。いい迷惑だったが、お陰で俺は後悔せずに済んだ。恐らくあのまま彼処に残っていれば、俺は一生後悔していた」

ズィスィの一件。愛する女を妹の為に見捨てようとしたハランを、無理矢理引っ張り連れ出した救世。そのお陰で、ハランは大切なモノを失わずに済んだ。妹とも向き合えた。

その恩を、彼の道を変えた出来事を、忘れ去るほどに彼も人でなしではなかった。

「それにこの右腕も、貴様の治療で取り戻したものだ」

決死の覚悟で捨てた右腕。それをあっさり治したのも救世。覚悟があっさりなかったことになったような気もしたが、プライド云々よりも現実的なハランは素直に感謝した。

「……借りくらい、返してやる」

はっきりとは言わない。
しかし、ハランは端からこのチームの為に戦わないつもりなどない。否、正確には、今の彼は借りを返すため、彼が認めた恩人の為に戦うつもりだった。

その為に、ハランは非力な足で立ち上がる。

恩人の、期待を裏切る訳にはいかんしな……！

「やる気か？」
「無論だ」

ハランはエスペルトに向かってにやりと不敵な笑みを浮かべる。
まず最初に、彼がとった行動は、至極単純なものだった。

「……何時まで寝ているッ！！！　この木偶の坊ッ！！！　無個性ロリコン野郎ッ！！！」

「だぁれが、木偶の坊だって……？」
「ロリコンじゃねぇって……言ってんだろがッ！！！」

ハランの見え見えな挑発。それに乗っかり、ダディと薄葉は立ち上がる。ぎろりとハランを睨んで、意地で復活する。

「喜べ貴様ら！　この堕天使ハラン様が、貴様らに手を貸してやろう！　さぁ、思う存分戦うがいい！！」
「「……こいつ……ッ！！　何もしてねえくせに……！」」

煽り。それに乗っかる単純な二人。立ち上がる二人ににやりと不敵な笑みを送って、揃った手札を眺め回した。

「救世。悪いが今の俺には手札が少ない。ミュゲを怒らせて、十分な道具の供給を受けられないからだ」
「え？」
「だから少ない手順で一気に決めさせて貰う。伏せて、目を閉じて、ゆっくり休んでいろ。大丈夫だ。既に『攻略法』は見つけた。トラップ地獄のデア・ピルゴス……その支配者であるこの俺が、トラップ勝負で負けるものか！」

気遣いの言葉。それにほんのり力なく微笑み、救世は「はい」と呟いた。そして、力なくへたり込む。

準備は完了。救世の『目は閉じさせた』。ハランは心置きなく、勝利への一手を打ち出す。

「ロリコンッ！　木偶の坊！　俺がサポートする！　俺の合図と同時に、前に飛び出せッ！」
「え？　でも、罠が……」
「構わんッ！！」

謎多きハラン。その動きを警戒しながら、エスペルト達は様子を

伺う。そんな彼が懐から取り出したのは一つの魔具。

「『アイリス』」

拳銃型魔具『アイリス』。その銃口を、エスペルトへと、更にはその射線上に居る後衛へと向けるハラン。この世界では珍しい、その武器の形状に、エスペルトはいつでも対応できるように身構え、ガードのパトリオもいつでもガードを発動できる準備をする。

回転式弾倉、装弾数六発、リボルバーに近いその形状。シリンダーカラカラと回し、ハランはその引き金に指を掛けた。

「穿て……『エクスプロードエクスタシーエクスブラスト』ォッ！！」

「だせぇ！」

薄葉の声にかき消される程に、ポッ、と意外に小さな音と共に、銃口からは一発の弾丸が飛び出した。速い。しかし、魔導を、特に付術を駆使して行われる高速の戦闘の中では、対した速さとも言えない。十分に見切れるその一発。エスペルトは難なくその身を罠のない地面の方向へと動かし、弾道に居たパトリオは念の為に石壁を前方に張り巡らせた。

「……ふん、そんな地味な攻撃で」

言いかけて、エスペルトはぞわりと背筋に走る悪寒に口を閉じた。弾丸がその横を通り過ぎる瞬間。余裕の言葉を紡ごうとしたエスペルトの横で、『弾丸は発火した』。

ジジッ、という音。それは丁度エスペルトの真横で、その『本当の姿』を見せる。

ボウンッ！！

爆発。ハランの放った弾丸は、爆発した。その意外な爆風に、石壁のガードを用いた後衛は無傷だったが、身を躱しただけのエスペルトは吹き飛ばされた。

「ぐあっ！」

「エスペルト！」

致命傷とまではいかない。しかし、思わぬダメージ。

「お、のれ……！」

体をよろめかせるエスペルト。その不意を打つ一撃に焦り、即座に敵意をハランに向けて、反撃に移ろうとする。エスペルトは、僅かに冷静さを欠いていた。故にハランの今の一撃が、『攻撃にしては弱い』ことに気付けなかった。ハランの目的、それにいち早く気付いたのはトラップを仕掛けたトロ。

「い、いけない！　エスペルト！　体勢を立て直せ！」

忠告は既に遅い。ハランの一撃で移動を強いられたエスペルトは、『カチリと足元に音を鳴らした』。

爆発、それに引き続き起こる爆発。それはエスペルトの足元から吹き出した。

「うおおッ！？」

エスペルトが踏んだのは、トロのトラップ。仲間の仕掛けた罠の上に、彼はまんまと誘導されていた。

トロは直ぐ様それが敵の狙いだと理解した。つまりは、エスペルトを移動させ、罠を踏ませる、トロのトラップを逆に利用するという戦術。その為の不意を突く爆発攻撃。

「……やって……くれる……！」

エスペルトは、その身を焦がしながらも、ぐっと地面に踏み止まり、にやりと笑った。

「嵌められた負け犬らしく、卑怯とでも罵るか？」

「まさか！　勝利のために最善を尽くす姿勢を、誰が罵るものか！　見事な一手、侮っていた非礼を詫びたい位だ！」

ハランの挑発。それにエスペルトは、その仲間達は引っ掛からずに、素直に賞賛を送る。ハランはちっと舌打ちしつつ、その視線を薄葉とダディに向けながら、シリンダーをカラカラと回した。

動くな、ってことか？

薄葉とハランは無言のメッセージを理解し、踏みとどまる。エスペルトが怯んだチャンスをわざわざ棒に振り、ハランはどんなチャンスを狙っているのか。

再びハランは銃口をエスペルトに向ける。引き金を引く僅かな動作、それは捉えられる速さと言えど、起動スピードはエスペルトの遠距離攻撃『トランプフ』を大きく上回る。それこそが彼の握る魔具、愛銃『アイリス』の、『器術』のメリット。

魔法を使えないハランが魔法を操り、しかもそれが通常よりも早

く発動する。その力がハランにとって大きな支えになっている事は言うまでもない。

だが、『二度目は通じない』。

節約を念頭に置いていたパトリオの『ガード魔法』。しかし、それは念には念を、最大限の警戒を払っての選択肢。広範囲爆発の危険を知った今、出し惜しみなど必要ない。エスペルトをガードする、それだけであの一手は無効化される。あの爆発が、パトリオのガードを越えないことは実証済みである。

まずは撃たせる。その上で、『トランプフ』で遠距離から貫く。

エスペルトは算段を立てつつ、構える。パトリオも準備完了。次の一撃は絶対に通らない。

「『エクスプロードエクスタシーエクスブラスト』ォッ！！！！」

無駄な叫び伴う発砲、それを笑って聞き流しつつ、自分を守るであろう壁ごとハランをぶち破ろうと、棒を構えて呪文を唱えるエスペルト。迫る弾丸、それを遮るように、エスペルトを、その後衛を防壁が包み込んだ。完全ガード、弾丸は再び中途で変化して……

カッ！！！

今度は弾丸は爆風を巻き起こさない。放ったのは強烈な閃光。

「うぎっ……！？　あああああああッ！」

「パトリオ!?　どうした!?」

パトリオが悲鳴を上げる。彼女は目を貫く思わぬ光の一撃に、大きく怯んだ。

「いつでもガードに移れる様に、囲うドームに『覗き穴』を作っていたのがアダになったな？　悪いがその隙間に、『閃光弾』の光をぶち込んでやった！」

ハランが丁寧に、その状況をエスペルトに刻み込む。パトリオの怯みによって崩れる防壁から顔を出したエスペルト。崩れた防壁から無防備な姿を晒すパトリオを、サルバドルとトロが前面に立ち、守りに入る。パトリオは目を抑え、復帰する気配がない。

「ナイスだ、ハラン。これで、思う存分ぶん殴れる……！」

十分な距離と、黒いサングラス、光をある程度遮断したダディがにっと笑って、ガード役が居なくなった匿名希望に殴り込もうと前へと飛び出さんとする。しかし、ハランは叫んだ。

「止まれッ！」

「今がチャンスだろうが！」

言いつつも、その指示に不満をぶつけるダディは足を止めていた。エスペルトは思わぬ危機的状況に、思わぬ転機を発見する。

「うおおおおお、目がッ……目がァァァァァァッ！！！」

目を抑えながら地面に転げまわる薄葉……

（……誤爆ッ！）

エスペルトは不敵な笑みを浮かべて、罠を躱す様に駆け出した。向かうは薄葉。彼は超越的な反応速度を持つ薄葉に目を付けた。ハランの不意を突く目晦ましは、同じく不意を突かれた薄葉の目をも潰していたのだ。

「てめぇ何やってる！？」

ダディが叫ぶ。

「ハランさん何やってるんですか！？」

顔を上げた救世も叫ぶ。

「好機ッ……！　これで、一人……！」

エスペルトは、目を潰され蹲る薄葉に止めをささんと襲いかかる。仲間の非難を受けながら、ハランは転がる危機的状況の薄葉を一瞥して、その照準を後衛三人へと向けた。そして、救世にむけて話し出す。

「あのロリコン野郎は、『敵意』に反応すると言ったな。そして、相手の姿も見ずに、無意識状態で反撃をする」

「そ……そうですけど……」

ハランはにやりと笑った。彼の眼中にエスペルトはもう居ない。何故なら、彼は既に『ハランのトラップ』に引っ掛かり、脱落が決定したからだ。

「敵の姿も見ずに反撃。つまり、ならば、それは『見なくとも構わんのだろう』？」

地面に目を抑えながら蹲る薄葉。それに向けられる棒の突き。エスペルトは、反応も察知もできない薄葉を打ち取れると確信していた。

メキィッ……

しかし、薄葉は反応する。グン、と腕で体を跳ね上げ、突き出される棒を躱し、カウンターの要領で、『目を閉じながら』、エスペルトの顎をその蹴りで打ち抜いた。

「うがっ……！？」

エスペルトの体が宙を舞う。一気にその意識が刈り取られる感覚。宙に浮きながら、ようやくエスペルトは声を搾り出した。

「な……ぜ……はんげ……き……」

どさり、と地面に落ちたエスペルト。

ボウンッ！！！

瞬間、その地面から爆音が響き、粉塵が飛び散った。『トロのトラップ』。ダメ押しとでも言わんばかりのその一撃が、エスペルトをもう一度地面から跳ね上げ、そして、完全にその意識を沈めた。

「……はぁぁぁらぁぁぁんんんんッ！！！　何、俺まで攻撃に巻き込んでんだぁぁぁぁぁッ！！！」

薄葉が地の底から沸き上がるような声を上げて、まるで何事も無かったかのように、その目から涙を流し、目を閉じたままに地面に立った。

「フン、悪いな。貴様を『利用』させてもらった」

全てはハランの狙い通り。

初手、爆発弾により、彼はエスペルトをトラップに誘導する……というフェイクをかけた。確かにそれは成功したが、彼の真の狙いはさらにその先。この瞬間。

爆発弾は、『敵のガードを促す』布石。その発動スピードと攻撃能力を見せる事で、ガードの必要性を認識させる。

それにより生み出される結果が、『パトリオの覗き穴』と『エスペルトの閃光弾回避』。全て、二手目、閃光弾へと繋がる戦況操作。

パトリオは迅速で臨機応変なガード対応のために、戦況把握を必

要とする。故に状況把握の覗き穴を作る。元々、それを用意する傾向はあったが、ハランは不意打ちで、それを更に決定づける。その隙間を貫く閃光は、パトリオを一時的に封殺する。

エスペルトの閃光弾回避は、一見失敗要素に見える。しかし、それは更なる戦略への布石。あの場で、ハランは、『閃光弾によって、前衛で薄葉だけが怯む』状況を作り出した。それはエスペルトを飛び出させる『撒き餌』。まんまと薄葉が誤爆で止まったと判断したエスペルトは、釣られて薄葉に飛びかかる。

しかし、それは薄葉の能力をハランが理解した上での罠。薄葉の『オートカウンター』により、目が見えずとも、いかなる状況であっても、薄葉は向かい来るエスペルトに反撃する。

棒を伸ばす『トランプフ』。それは確かに強力だが、『隙が大きい』という欠点がある。だからこそ、隙をカバーするパトリオのガードを外すという計算。そこからの、隙を付いてハランとダディが攻撃できるという無言の牽制。それ故、周囲のトラップをダディへの牽制に用いて、身を守りつつエスペルトは薄葉を直接仕留めに行くとだろういう予測。それにより、薄葉はトラップを越さずしてエスペルトに接近できる。そして、圧倒的有利な状況下で、後衛はエスペルトの、対薄葉の攻撃の援護に入らないというシチュエーション作り。そして、決まる薄葉のカウンター。

パトリオ、サルバドル、トロ、万全の援護体制を完全に崩し、相手にトラップを跨がせ、相手の戦力の要を撃沈。

予想から外れたいくつかの分岐パターンを用意していたハランだったが、その殆どは彼の思い通りに動いていた。

「ハランさん……まさか……これを全部狙って……？」

「当たり前だ。何の為に、後衛からずっと敵の動きを観察していたと思っている？」

腕を組み、静観するハランの姿を救世は思い出す。

「最初から……戦うつもりで……」

「俺は弱い。だからこそ、相手の能力を正確に察知しなければ生き残れなかった。相手の痛いところを突く姑息さならば、俺は誰にも負けないと自負している」

それは生き残るためにハランが身に付けた、彼の唯一と言ってもいい才能。無能であり、有能な人間を見つめ続けてきた彼の、謂わばその能力の名は『粗探し』。相手の才能を詳細に把握し、その上でその粗を探し、それに付け込む。

それを培ったのは彼の長年に渡る堕天使生活。トラップに守られる塔の中、じっと敵を観察し続けていた彼の長い年月は、決して無駄ではなかったのだ。

「……ごめんなさい……私は、ハランさんのこと、誤解してました……」

「フン、それは貴様も俺の罠に掛かっていたということ。気にするな。むしろまんまと引っかかった事を悔やむがいい！　……特にお前らだ、ロリコンと木偶の坊ッ！　ハァーーーーッハッハッハッハァッ！！」

「「……後で、凹ます」」

ようやく目が回復してきた薄葉と、ダディが憎悪に満ちた目をハランに向ける。そんなハランの背後で、救世は悪い顔色のまま、微笑を浮かべた。

本当に、素直じゃない人なんですね。

他人に心配かけまいと、その傲慢なキャラクターを演じきる。憎まれ役を勝って出る。臆病で卑怯で弱っちい。しかし、堂々としていて、迷いがない。非情で優しい、最弱の天使。ほんの少しだけ、救世は彼の事を理解できた、そんな気がした。

エスペルトを失った匿名希望は焦っていた。攻めの要が失われたのだ。彼らの勝率はぐんと下がった。彼らの戦略は、完璧な遂行の上に成り立っている。エスペルトは倒されない。パトリオのガードは崩れない。サルバドルのサポートは確実。トロの罠からは逃れられない。その全てが噛み合い、彼らの戦略は完成する筈だった。

「くっ……失策だった……！　早くにあいつを潰すべきだったんだ……！」

「今更悔やんでどうする！　意地でも勝つ、それだけだ！」

ようやく回復してきた目を開き、パトリオが歯噛みする。完璧は瓦解した。しかし、それでも残る三人のスペックの高さは変わらない。

「そうだ……まだ、僕のトラップもある……！　パトリオとサルバドルがそれにあいつらを誘導しながら戦えば……」

しかしそんな戦略を、後に許すほどにその男は甘くなかった。否、そんな度胸はなかった。

彼は行き当たりばったりのシナリオを極度に恐れる臆病者。既に

人知れず、彼は仕掛けを散蒔いている。

「貴様ら地面を見てみろ！」

「……ん？」

ハランのセリフは誰に向けられたものなのか、その場に居た誰もが理解できなかった。薄葉も、ダディも、救世も、パトリオも、サルバドルも、トロも……全員が地面を見た。

「ぐぎっ！？」

響いたのはパトリオの声。それに反応し、全員の視線が移る。其処には俯せに倒れて動かないパトリオの姿。そして、視線をハランに向ければ、魔具を片手ににやにやとした嫌味な笑顔。

「余所見なんてしてる場合か？　ん？」

「き、汚えええええっ！！　嵌めやがったな！」

「勝てばいいんだろう？　勝てば」

ハランの一声で視線を逸らした隙を突かれ、呆気なく倒されたガードの要、パトリオ。これで再び追い込まれた匿名希望。

そんな彼らを更に追い込む為に、ハランが息をつく間も与えずに口だけ動かす。

「ウスハッ！　奴らに向けて歩け！　俺の支持に従ってなぁ！」

「え？　お、おう！」

「まずは奴らの方向に一歩だ！」

すっと、薄葉は敵に向けて一歩を踏み出す。

「次は右斜め前に三歩！」

踏む、踏む、踏む、罠にはまるで引っ掛からない。その光景を見て、トロが顔面蒼白で震え上がる。

「う、嘘だろ……！？　あ、あの卑怯者、まさか僕のトラップの位置を既に把握しているとでも言うのか……！？」

「大丈夫だ……！　いざとなったら幻術で惑わす……！　糞、あの治癒術士の邪魔で余計な力を使ってなければすぐにでも行けるというのに……！」

トロとサルバドルは此処で重大な判断ミスをしていた。相手の奇抜な不意打ち、誘導に怯えて、待ちに入った。そもそも、用いる魔導、戦術が待ちである二人であったが、ここは相手の様子を見るべきではなかった。

地雷原を乗り越え、薄葉が自分達に迫ってくる。その光景を予想した二人の目の前には、想像だにしなかった光景が飛び込んでくる事となる。

罠を一歩一歩回避する薄葉。時に後退し、時に曲がり、複雑なラインを描きながら動く。そして、あるポイントに達したその時、ハランが声を張り上げる！

「其処だ！　真っ直ぐに駆け抜けろッ！！！」

「おう！」

真っ直ぐに。薄葉は残る二人の敵を目掛けて走り出す！！

とん、とん、とん、と地面を蹴り、一直線に二人の元へと向かっていく！

「え？　い、いや、ちょっと待て。それって……」

トロが何かに戸惑うように、駆ける薄葉を凝視した。薄葉は相手に辿り着く瞬間を確信し、笑みを浮かべた。凸凹だった二人、その協力によって、今まさに道は開かれようとしている。遂に手を結んだ二人を見て、救世は満足げに微笑んだ。

「うおらあああああ！　これで……終わりだあああああ！」

叫ぶ薄葉。この時、彼は、ほかの全員は、とある勘違いをしていた。

「薄葉」と名前で呼び掛けたハラン。元々は「ロリコン」呼ばわりの散々な対応だった彼の突然の変貌。そもそも、その変化のキッカケはあったのか？　いや、ない。

ならばなぜ、彼は対応を変えたのか？

まんまと乗せられている事にも気付かずに、薄葉は勢い良く一歩を踏み出して……

ズボッ！

穴に落ちた。

「「え、えええええええええ!?」」

身構えていたサルバドルとトロが思わず叫ぶ。その光景を見て、にやりと笑い、ハランはバッと腕を前に突き出し、最後の作戦を始動させる！

「ハァーーーッハッハッハァ！　道は開けたぞ、ダディ！」

「……おいおい、そういう事かよ……」

ダディはずっと指示を与えられずに待機していた。とあるポイントに注意しながら、ずっと。それ故に、ハランの誘導、その法則を理解していた彼は、その意図をこのタイミングで思い知る。

「やってしまえッ！」

「お前、本当に最悪だ……薄葉、後で骨は拾ってやらあ」

ズドン、と地面を蹴り、ダディが走る！

右へ、左へ、その駆ける方向をずらしながら、地雷原を駆け抜けていく！

「罠に掛からない！　いや、それ以前に何故、あいつは穴に引っ掛かった！？」
「……やられた」
「どうしたトロ！？」
「やられたッ！！　まさか、あいつ……！」

トロがその一手を理解した時にはもう遅い。全ての罠を飛び越えて、ダディの巨体が二人に迫っていた。

「エスペルトの移動先、相手の二人の移動先、既に発動した罠、それによってクリアした罠の位置……それ以外の、ブラックボックスの地面を、仲間にワザと踏ませて、罠の有無を確かめながら……終いには仲間に罠を踏ませて……あいつ、無理矢理安全なルートを作り出したんだ！！」
「ば、馬鹿な！？　な、仲間を犠牲にしたとでもいうのか！？」
「そ、そんな酷い奴がいるとは思いたくないが……事実、奴の踏んだ罠の位置で、丁度ルートが出来上がった！」
「犠牲などとは人聞きの悪い！」

二人の会話を聞いていたハランが、胸を張って主張する。

「『利用した』、と言ってもらおうかッ！！」
「「最低だコイツ！！」」

ハランは薄葉に地雷処理を任せた。それだけ。薄葉とこのタイミングで名前を呼び掛け、乗せたのだ。
罠を扱う人間として、何処にどんな感覚で罠を設置するか、そんな思考と踏まれて安全圏と化した地面、それらを総合してもまだ分からないブラックボックス。それを薄葉を誘導して踏ませる。勿論、

全てを処理するのは難しい。だからこそ、彼は『相手の陣から駆けてきたエスペルトの通ったルート』と『薄葉とダディが踏んできたルート』を結ぶように、安全を確認した。

そして、その短い区間の僅かな地雷ポイントは全て潰した。あるならば一つ、あるいは二つ、そんな予測。結果、薄葉に踏ませた地雷原は、運良くほぼ完璧にクリアリング出来た。

そんな道を、罠に掛かった最初から、安全圏を確認していた戦闘慣れしたダディ。何故、危険地帯を薄葉に歩ませるのか、理解できなかった彼は、薄葉が穴に落ちた時点で確信した。ルートづくり、それが成立した事を確認し、彼は今、安全圏を蹴って駆け抜けてきたのである。

「ハ、ハランさん……」

一瞬でも二人が協力してくれたと勘違いした救世ががくりと頭を垂れる。

「最低？　ああ、そうだ！　この俺こそ！　史上最低にして史上最強最悪最凶の、闇に堕ちし最狂の堕天使！　ハラン様なのだッ！！」

「その開き直りは気持ちいいんだがな……」

ダディが飛翔し、拳を構える。最早言葉もない二人の敵目掛けて、その隕石の落下の如き一発のパンチが、上空から降り注ぐ。

「「こ、この……卑怯者がぁぁぁぁぁぁッ！！」」

「お褒めに預かり光栄だ」

ズドン！と地面を砕く一撃。それと共に、トロとサルバドルは吹き飛んだ。砕けた地面と同時に、闘技場に仕掛けられた全てのトラップが暴発し、闘技場を激しく揺らす。

「……最初から地面ごと砕いちまえば良かったか」

「脳筋怪物め！　最初からやれ！」

「おい、ハラン！　後で覚悟しろや！」

チーム匿名希望、その全てが今、倒れ伏している。

『しょ、勝利チームは……「チームアミ……』

『待て。まだだ』

勝利宣言を行おうとする司会のピソを、隣に座るゾハルが止める。

「ほう……大した気合じゃねぇか」

感心したようにダディが呟いた。

彼の視線の先には、棒を支えに立ち上がる男の姿。薄葉の一撃で最初に沈め、その上トラップの追撃まで受けて、満身創痍の筈のエスペルト。

「ふふ……『まだだ』、とは言わんさ。ただ、情けなく倒れるような真似だけはしない……！」

よろめくエスペルトは、誰の目から見ても戦えない状態だった。

そんな彼が立ち上がった理由はたった一つ。息を大きく吸い、残った力で彼は叫ぶ。

「見事だ、堕天使ハランッ！　我が同胞が、貴殿を『最低』や『卑怯者』と罵ったが、それを詫びさせて貰いたいッ！！　戦場においては勝者こそ絶対ッ！　生き残った者こそ正義ッ！　綺麗事に溺れずに、栄誉ある勝利を勝ち取った貴殿に、私は最高の賞賛を捧げるッ！」

それは勝者への賞賛。エスペルトは最後に、己が信念をぶちまける。

「同胞が貴殿を罵った事、匿名希望などと、名乗ることを拒んだ非礼、誠に申し訳無いッ！　我らは『メルセネル』、我らが故郷の言語にて『傭兵』という何の捻りもない集団だ！　そして、我が真名は『エスペルト・アンペラール』！　今や滅びし『球界エルミス』が皇帝ッ！」

エスペルトの独白。それに驚きを見せたのはハランだけではない。会場中に衝撃が走る。そんな、衝撃的な告白をたった一人の男に向けて終えた男は、棒から手を離し、腕を広げた。

「……テッラが羨ましいぞ。貴殿らのような、偉大なる天使を迎え入れられて。……さぁ、これで終わりだッ！」

ジジッ！

「言われずとも……止めはさしてやる。まだ動ける相手の降参を認める程、俺は余裕もないのでな。騙し討ちされたら困るだろう？」

決して相手を認めない、そんな突き放す冷酷な一言と共に、ハランは引鉄を引いた。魔具アイリス。その銃口から吹き出した容赦の無い電撃が、エスペルトの体を撃ち抜く。

「……見事ッ……！　その容赦の無さ……抜かりの無さ……見事の一、言ッ！　……完、ぱ……い……」

どさり、と遂に地面に沈むエスペルト。この瞬間、勝負は完全に決した。

『勝利チーム、「チームアミーラ」ッ！！！』

どっと沸き上がる会場。その中心に立つ一人の男は、勝ち名乗りを受けて、初めて魔具を懐に仕舞い、ぼそりと静かに呟いた。

「大した奴だ。俺こそ貴様の有り得ない騙し討ちを、疑った事を詫びよう」

聞こえはしないその言葉。それを隠すのは、認めた相手だからこそ。相手の誇りを折らずに、泥に塗れる事を選ぶ。それが嘘つきな卑怯者、ハランの選ぶ、好む道。

会場に称えられるエスペルトの信念、それに手をつける事なく、

ハランは会場を去る。

「おい、ちょっと待て」

ハランの肩をダディがつかむ。何時の間にやら戻ってきていたらしい。

「……逃げるのか？」
「……木偶の坊とか言って本気ですまんかったと思ってる」
「オーケー。歯ぁ食縛れ」
「助けろ、救世」
「ごゆっくり」

ゴッ、と鈍い音と共に、ハランが会場外へ吹っ飛んだ。

卑怯者がぶっ飛ばされるその姿を見て、様々な感情を抱く人々。
何かを忘れているような気がしたが、会場にいる全ての人々は考えることをやめた。

ＥＰ５２：　凸凹同盟（後編）（後書き）

無事に駒を進めたチームアミーラ。しかし、壮絶な三回戦はまだ幕を開けたばかり。そして三回戦最大の戦いが幕を開ける。

次回、「残念ながら最強の天使です」に続く。

何かを忘れているような気がする。そう、大切な何かを。主人公はしっかりと戦った。そして勝利した。なのに、なのに何かが足りないような、いや、何かが間違っている気がする。巨漢の強烈な一撃により、揺らされた大地。それにより埋まったいくつかの落とし穴。その存在さえも忘れたままに、私達は考える事をやめてしまった。

＼俺はここにいるぞ！／

Ｅｐ５３：　残念ながら最強の天使です（前書き）

次の試合は……？

ＥＰ５３：　残念ながら最強の天使です

試合を終えて退場するチームアミーラを迎え入れたのは、意外な歓迎だった。

「お兄ちゃーん！」

入場ゲートを潜ったハランに飛びついてきたのは妹のミュゲ。目をきらきらと輝かせながら、ぎゅっと抱きつき久しい笑顔を兄に向けた。

そこで待っていたのは妹達。今までろくな顔合わせもなかったチームアミールの面々である。

「すごかったよ！　やっぱり、お兄ちゃんはすごーい！」

「そ、そうか？　そ、そうだろう……」

ハラン涙目。今まで遠ざかっていた妹が、再び懐いてくれている。感極まっての感涙である。ミュゲは薄葉とハランの喧嘩の件を気にしている様子もなく、その手にぶら下げていた小さな袋をハランに手渡す。

「はい！　魔法弾、いっぱい使ったでしょ？　これ、用意しといたよ！　ないと困るもんね！」

ミュゲが手渡した袋、ハランがそれを開くと、中には拳銃型魔具アイリスに用いる魔法弾がじゃらじゃらと入っていた。その中には、ちらほらとハランが用いる魔法道具も混じっている。魔法が使えず、

道具に頼りきるハランには欠かせないものだ。

「ああ、ありがとう」

笑顔のミュゲの頭を撫でて、ハランは今までの悪意に満ちた笑顔とは遠く掛け離れた優しい笑顔を浮かべた。まさに、雲泥の差である。

妹に癒されながらも、彼は内心安心していた。気の利く妹の道具補給がなければ、正直彼は今後の試合も危ういのだ。とりあえず、不機嫌が収まったことに感謝する。それがどうして収まったのかは深く考えずに。

「あらあら、随分と危ない試合だったんじゃない？」

「るせぇ。お前も大して目立ってねぇだろうが」

口調こそ柔らかいものの、ダディとヨシエは火花を散らす。お出迎えまであって、仲がいいのか悪いのか、今回は周りに気を遣いっぱなしの才羽兄妹、救世と済は苦笑する。それが偶然重なり合って、それをきっかけに済はふと救世に尋ねる。

「そういえば、お前、体調は大丈夫なのか？　随分と辛そうだったが」

試合中、力の使いすぎでダウンしてしまった救世。それを思い出し、済は意外とピンピンしている救世を見て、不思議そうな表情を浮かべていた。それににっこり笑顔を浮かべて、救世は答える。

「ええ。大丈夫です。試合中に休めましたし、ね」

「ぐぜー。疲れちゃったらすぐにアルマ吸収に切り替えた方がいいよー？　そうすれば、あんなことにならないのにー」

「あー……そうですね……気を付けます……」

ミュゲの的確すぎるアドバイス、それに苦笑いしながら答える救世。正直なところ、救世がアルマ吸収を控えたのは、前の試合の映像を見た時の、投げキッス振りまく自分の姿にこの上ない恥ずかしさを覚えたからだったが、少女からの言葉に反省する。

「そうですよね……吸いすぎなければ……そう、吸いすぎなければ……」

「気負いすぎだろ」

済の突っ込みを受けて、赤面する救世。それを見ながらくすくすと楽しげに笑う一同。和やかな空気が流れ、今までに交わらなかった事が不思議なくらいに、兄妹達は顔を見合わせていた。

「……って、お前ら……」

そんな空気の遥か外側から、入場ゲートからやってきたのは泥塗れの薄葉。正直、その場にいた殆どが彼のことを忘れていた。

「あ、あれ？　薄葉さん？　……あ、そういえば穴に落っこちて……」

「ええ。つい先ほど会場整備の時に掘り起こされましたよ……何故、誰も助けてくれなかった……」

今まで埋まっていた薄葉は、涙目で仲間達を睨んだ。

「わ、わりい……本気で忘れてた」

「やめてくださいダディさん。その本気で申し訳なさそうな反応はやめてください」
「ご、ごめんなさい……」
「救世さん。やめてください。そんな悲しい顔をしないでください。いっそ笑って欲しいくらいです」
「ふはは。傑作」
「お前、本当に許さんぞ？」

薄葉、マジギレ寸前である。しかし、それを抑え込むのはぴょんと泥塗れの薄葉に飛びつく少女。

「ウスハもすごかったよー！　やっぱり、ウスハつよーい！」
「え？　あれ？　お、おう……あ、ありがとな」

嫌いと言われていたのに、この変わり様。戸惑う薄葉だったが、取り敢えずただ一人、優しくしてくれる少女の愛に感激。素直にその好意を受け止めた。

しかし、それを黙って見ていない男が一人。

「おい、ロリコン……黙って見ていれば……！」
「ロリコンじゃねぇ！　あと、お前だ！　お前、何、人を罠に引っ掛けてくれてんだ！？」
「黙れ！　ミュゲから離れ……」

拳を突き出すハランに薄葉、綺麗なクロスカウンター。ゴロゴロと廊下を転がるハランを見て、首を傾げる薄葉。本人に悪気はない。

しかし、それが殴り合いの喧嘩にしか見えなかった少女も居たようで……

「お兄ちゃんもウスハもきらーーーい！！」

「あ、あれ？　ミュゲ？」

何故か怒って駆け出すミュゲ。突然の切り替えに戸惑う薄葉。あと、地面に転がったまま、通り過ぎざまに妹に踏まれていくハラン。入場ゲートとは逆方向に走っていく少女を見て、遠い目をしながら才羽兄弟が呟く。

「ミュゲは一体どうしたんだ？」
「さあ。仲直りしたんだと思ってたんじゃないですか？」
「どういう見方をしたらそうなるんだ？」
「さあ、私にも基準が分かりません」

いつになったら和解するのやら、と疲れ気味に溜め息を二人がついた時、意外なまでに早い放送が鳴り響いた。

『続いての試合は～～～……「チームアミール」！！　ＶＳ……』

「あら、もう出番！　ミュゲちゃん連れてこないと。私、行ってくるわ。先に入場しちゃっててていいからね」

ヨシエは笑顔で明華と済の方を見ると、すぐさま方向を変えて、走り去っていったミュゲの後を追いかけていく。

その様子を見て、「あ」と声を漏らして済は泥まみれで立つ薄葉と、明華を交互に見る。そして、ポケットに手を突っ込んで、ごそごそと漁り、何かを取り出すと、二人にちょいちょいと手招きをして呼びつける。

「ちょっと二人共。手を出せ」
「え？」
「なんだ？」

言われるがままに手を出す兄妹。その手のひらに、ぽんとその手に握るものを置く。それは赤い線が刻まれた銀色の指輪。全く同じ指輪を一つずつ、済は杏樹兄妹に手渡したのだ。きょとんとしている二人の肩をぽんと叩き、済は得意げな顔で胸を張る。

「これ……」

「『ルベルリング』という指輪だ！　縁結びの魔法が込められた指輪らしいぞ！」

「え、縁結び？」

首を傾げる明華と薄葉。

「その指輪を付けた者同士は、ずっと仲良くいられるそうだ！　これを付けて、仲良くしろよ！　その為にムディ商会の所で買ってきたんだぞ！」

済の心遣い。実際は、二人が既に仲直りしたことも知っている済。これはそれ以前に、彼女なりに考えた、二人の間の取り持ち方。今となっては必要ないかもしれなかったが、二人の平穏を願って、済はそれを手渡す事にした。

明華は指輪をじっと見つめて、くすりと笑った。

「済って、こういうの好きなんだね」

「な、なんで笑う！」

「なんだか、御利益のある怪しい壺とかも買っちゃいそう」

「し、失敬な！」

むむっと口を歪める済。それをからかう明華は、指輪をはめて、それを済に見せながら淡く微笑んだ。

「ありがとう」
「ああ」

薄葉も同じように指輪をはめる。お揃いの指輪を見せあって、睦まじい兄妹の穏やかな空気。その様子を見て、救世がちらちら済の様子を伺い尋ねる。

「あの……済ちゃん。私と済ちゃんの仲良しの証も……」
「ない」

羨ましかったのか、何なのか、期待を込めて尋ねた救世を突っ撥ねる済。まさに即答。その素っ気なさに、救世は顔を被い隠してしまう。

「うぅ……」
「な、泣くな！　冗談！　ちゃんと全員分用意してある！」

割と本気で泣いた女々しい兄に無理矢理同じ指輪を押し付ける。すると、けろっと手のひらを外して、救世は子供の様に笑う。

「済ちゃん、私感激です！」
「……あ、ああ」
「全員分？」

疑問の声をあげたのは薄葉。それに「ああ」と答えて、済はその手のひらに指輪を6つ乗せた。その内二つを摘み上げて、大男ダディにひょいと差し出す。

「ほら。ヨシエに後で一つ渡して」

「な、なに言ってんだ。いらねぇよそんなの」
「何ビビってる。男のくせに」
「ビ、ビビってねぇよ！　ああ、やってやるよ！」

子供っぽいプライドから、思わず指輪を受け取るダディ。その後になって後悔したのか、非常に渋い表情をしている。次に済は薄葉のカウンターによって沈み、妹とヨシエに足蹴にされていったハランに歩み寄り、その掌に指輪をふたつひょいと乗せる。

「ほら。これでミュゲと仲直りでもしろ」
「……受け取ってもらえるだろうか」
「薄葉と仲直りしたら、な」
「くっ……！　俺を脅すか……！」

ようやく顔を上げるハランに、にっと悪い笑みを浮かべて、済は残る2つの指輪を再びポケットに仕舞い込む。

「あれ？　それは？」
「もう二人いるだろう？　いまいち仲の良くない兄妹が」
「ああ」

明華は納得したようにこくりと頷き、済はふふんと得意げに胸を張る。はてな、と首を傾げる薄葉を他所に、満足気な済はいち早く入場ゲート方面へと歩みを進める。

「それじゃあ用事は済んだから、私は先に行かせて貰う」
「あ、私も」

明華が声を上げる。薄葉越しに先に行く済に声を掛ける。そして、嬉しそうに指輪をかざして、兄に、薄葉に微笑みかける。

「じゃあ……行ってきます！」
「おう。頑張れ。行ってらっしゃい」

薄葉の応援、見送りに、満足したように明華は小走りで済に続く。慌ただしくミュゲを背負ったヨシエが、廊下を駆けてくるのはこのもう少し後。

「では、控え室に戻ってゆっくり応援しましょうか」
「はい」

チームアミーラ、兄天使達はその指輪を眺めながら、廊下を歩いて控え室に戻る。「この指輪、伸びたぞ！」などと、謎の技術の搭載された、自らの指にジャストフィットした指輪にダディがはしゃぐのを冷めた目で周りの後輩達は見ている。ハランは手渡せなかった指輪を未練がましく眺めながら、救世は妹からの贈り物に満足そうに、薄葉はどこか照れくさそうに、ルベルリングを眺める。どうやら済からの贈り物は、全員に気に入られたようだった。

一一一一

無数に突き立てられた武器。剣、槍、銃、槌、無数の種類の武器は、それぞれが荘厳な雰囲気を纏う不可思議な武器。空には顔の描かれた月と太陽が同時に浮かび、あちこちに立つ時計塔は時計のない時計を飾る何の意味も持たないオブジェ。その空間の中央に、不自然に浮かび上がるお菓子の城。空を飛び、月と太陽さえも見下ろすその内部、鉄格子並ぶ重々しい空間に、女は二人の男と対峙する形でひとつの鉄格子の前にいた。

「何度言えば分かる？　必要もない生存証明は終わった。私には、この男をあなた方に差し出す義務はない」

「くっ……！　お前……」

「それとも、私の気分を損ねたい？　今ここで、お前らをバラバラにして私の可愛いペットの餌にしてもいいんだけれど？」

「……覚えていろ……ヴォラスに仇なす者が、どうなるか……思い知らせてやる……！」

分かりやすい捨て台詞と共に、二人の男は逃げるようにその奇怪な空間に浮かび上がる紋様を潜って退散した。それを見送り、苛立たしげな瞳をゆらりと揺らして、女、今井千歳は背後に居る男に視線を向ける。

男はやれやれといった表情で、首を振った。

「不動王。悪かった。あいつら、余りにも苛立たしいので喧嘩売っといた」

「ええ、構いませんとも。いずれは喧嘩を売る相手。我らが悲願のためには、ね」

男、不動王は不敵に笑みを浮かべる。彼は放任主義。彼のお抱えの天使達の行動には、基本的には何も言わない。そのスタイルが二

人の天使を怒らせないのか、彼と天使は非常に良い関係を築いていた。

不動王は、檻の中、ヴォラスの役人に引渡しを要求された男、ムディ商会のボス、イェシンを見て、千歳に尋ねる。

「しかし、何故、彼を庇うのです？」

「気に入ったから。この牢獄には、私のお気に入りを全員閉じ込めている」

「それは何故？」

千歳は無表情の上に、無機質な笑顔を貼り付けて笑った。

「一人逃げたら、彼氏候補が居なくなるでしょ？　全員キープ、それ、安心」

「おお。それは素晴らしい恋愛テクニックです」

恐ろしいことをさらりと言ってのける千歳を心から賞賛しながら、不動王はパチパチと手を叩く。そんなズレた会話を交わす二人に割って入るように、空間に浮かぶ紋様のゲートを潜って、弛れたスーツを着込んだ、格好だけサラリーマンの男、今井千明が姿を現す。

「お～い。対戦だってよ。相手は……チームなんとかとかいう、天使の詰め合わせだと」

「それはいい。そうですか。では、向かいましょう」

「千歳～。『鎧の蓑』は着なくていいのか？」

「必要ない」

千歳はぴしゃりと言い放ち、不動王に視線を送る。それに気付いた不動王、彼らの気持ちをいち早く察する彼は、にっこりと胡散臭い笑みを浮かべて頷いた。

「最初から、『架空領域』を？」
「ええ。いざとなったら『妄想領域』も」
「勿論、オーケーです。必要とあらば、全力で潰していただいて構いません。千明さん、あなたも」
「俺は適当にやっとくわー」
「ええ。適当に。しっかり確実にこなしましょう」

チーム『なんでもいいや』。未知数の力を持つ、天使を含むそのチームは、一際異色な野望を引っ提げ降臨する。

「全ては不動王国の為に」

―――

三回戦第二試合、『チームアミール』ＶＳ『なんでもいいや』。
そのカードが発表され、会場に集った両チーム。

「よろしくおねがいします！」
「よろしくお願いします」

試合開始の宣言が入る前に、丁寧に頭を下げて挨拶をするミュゲと明華に、背中を曲げて縮こまるような姿勢で立つその男は、にこりと笑って返答した。

「ええ。こちらこそ宜しくお願い致しますね。可愛い天使さん」

その前に立つ二人の兄妹、今井千明と今井千歳も、男の挨拶を見て、手をひらひらと動かし、軽い挨拶をする。

「よろしく」
「よろよろ～」

意外と好意的な態度に、チームアミールの面々は少しだけ相手の印象を変える。とはいえ、油断は微塵もない。彼女達は既に気付いている。相手が挑発的に示しているその正体に。

この世界には存在しない背広、明らかに『向こう』を知っている言動、規格外の能力……これで気付かない程に、鈍感な者はこの中には居ない。

そして相手も気付かれる事を前提にこの大会に顔を出している。それはほぼ確定的であった。

高まる緊張の中でも、何処か不抜けた無表情を貫く謎の『天使』二人。一早く動くため、チームアミールは身構える。

『それでは試合……開始っ！！』

それは明華が魔法を発動させようとするよりも、済が一歩踏み出

そうとするよりも、ミュゲが魔具とらちゃんを起動させるよりも、その場に居る誰よりも早く、動いた。

「済、下がって！」

圧倒的な威圧に済が気付き、一歩を止める。それに気付いて明華が済に指示を出し、発動魔法を切り替える。

「『アスピダ』！」

チームアミールを守るように展開する光の盾。それ目掛けて飛来するのは、奇妙な形をした『何か』。両端が尖った小さなそれは、見た目は武器にこそ見えずとも、圧倒的な威圧を持ちながら盾に接触した。

カッ！

その瞬間、放出されるのは『雷』。強烈な雷が、一瞬で光の盾を吹き飛ばす！

「なんて威力……！」

防御用の魔法、アスピダ。防御性能に特化し、単純な防御力ではかなりのものを誇るその盾が、一瞬で吹き飛ばされる雷。それを放った謎の武具を放り投げたのは、その投擲後の姿勢から、誰だったのかすぐに分かった。

「あれま。まさか『ヴァジュラ』を止めるとは」

天使の女は驚きつつも、無表情で言う。

「やっぱり天使、一筋縄では行かないか」

女は息をつく間も与えずに、その左右に紋様を出現させる。そこからぬっと姿を表す『何か』を掴み、引き抜く。左手には重々しい先端に切れ込みの入る槍。右手には朱塗りの棒。

「カモン、『ゲイ・ボルグ』アーンド『如意棒』」

女は、右手に握った棒を前に突き出す。

「伸びろ『如意棒』」

その言葉に合わせて、朱塗りの棒はグン！と伸びる。前の試合の棒術使い、エスペルトの使った魔法を思わせるその攻撃を、チームアミールは散り散りに回避する。速さはそれ程でもない。しかし、呪文もなしで放たれたその攻撃は、別の意味で明華の表情を動かした。

「……前の試合から薄々は気づいていたけれど……まさか……！」

女は、ぐっと棒を握り、再び口元だけを動かす。

「縮め『如意棒』」

壁に突き刺さった棒が、ぐんと縮む。それに引っ張られ、女の体は浮かび上がる。それなりの速さで飛んだ女は、槍を片手に、途中で棒から手を離し、近くで構える済へと向かう。

「済！　その槍、気を付けて！　絶対に当たっちゃダメ！」

「いや、そりゃ当たるつもりはさらさらないが！」
「それでも当たるのが『コレ』なんだけどね」

口元だけでにやりと笑い、女は済に単純に槍を突き出す。済の魔具は十手型、そのリーチの差は歴然。しかし、それを難なくひらりと躱し、槍のリーチ分を一気に詰めて、反撃に移ろうとする済。しかし、直ぐ様、背後に迫る気配を察知し、後ろに意識を向ける。

「あれま、気づいた？」

女は槍を握っていなかった。突き出した勢いに任せて、槍から既に手を話していたのである。『投擲』。本来なら直線上に飛ぶはずの槍が、『ぐるりと軌道を変えて』、済の背後に迫ってきている。

「な……！？」
「其処から離れて！」

明華の咄嗟の指示に従い、済は迫る槍と、向かってくる女から逃れる様に横に逸れる。それでも軌道を変えて迫る槍。そんな槍に、落ちるのは、一発の雷撃。それは槍を撃ち落とし、漸く済の追跡を止めさせる。

「……何だ今のは」
「ケルト神話を知らない？　戦士ク・ホリンの操る魔槍『ゲイ・ボルグ』。当たれば必殺、投げれば百発百中の伝説の槍。有名でしょ？」
「神話……？」
「そういうのに疎いの？」

女は再び口元のみを歪める不気味な笑みを顔に貼り付ける。そし

て、再び真横に紋様を浮かび上がらせ、其処から武器を引き抜いた。

「それではこれならご存知？」

引き抜かれたのは鞘に入ったままの剣。宝石の装飾が施された鞘、その神々しい雰囲気を醸し出す剣を、鞘のまま突き出して、女はその名を宣言する。

「おいでませ『エクスカリバー』。どう？　ご存知？」

それでも首を傾げる済。

「……マジ？」

「……何だ。その……それは有名な何かなのか？」

「……う、うん。でも、知らないならいいけど。まぁ、伝説の剣って感じで」

「す、すごい剣なのか……」

「……やりづらっ」

済と対峙したままに、ぼそっと無表情のまま呟いた女、その頭が突然ガクンと前に傾く。その背後には、一気に詰め寄り、後頭部に蹴りを叩き込んだ明華。突然すぎる不意打ち。それに驚いたのは、食らう女ではなく、女と対峙する済。

「あ、明華！？　それは酷いんじゃないか！？　確かに甘いことを言っていられない勝負なんだが……それに、こいつは私が相手を……」

「まあ、『効かない』んだけど、ね」

女はぐいっと顔を上げる。強烈な蹴りを受けつつも、まるで堪え

た様子はない。その頑丈さに驚く済に、『その事実』を確認して、苦い表情を浮かべる明華。

明華は、残るメンバーに警戒しつつ、少し女から距離を離し、その剣を睨んだ。

「……如意棒、ゲイ・ボルグ、エクスカリバー、フラガラッハ……どれも神話や伝説、物語の中の武器……一体、あなたは？」

「そう言えば、名乗ってなかったか」

静観する仲間達。それを他所に、まっ先に飛び出してきたその女は、鞘に収めたままの剣を構えて、無表情のまま名を名乗る。

それは彼女達の野望のスタートを宣言する、宣戦布告の一言でもあった。

「私の本当の名は『今井千歳』。あっちにいるダルダルリーマンは兄の『今井千明』。名前を聞いて分かるとおり、私達はズィスィの『伝承の天使』」

女、今井千歳の余計な自己紹介に、後方で立つ男、今井千明はやれやれと首を振る。

「残念ながら最強の天使です」

ざわざわ、と会場に奇妙な空気が流れる。それを見て、名乗った千歳を咎めるような事は、その男、不動王はしない。喩え、それによってヴォラスに敵視されることがあろうとも、恐らくは不動王は

受け入れるだろう。
　不動王はそれを好機と捉える。彼の野望、それを宣言する絶好の機会、と。

「千明。この試合で、宣言しちゃいましょう」
「は？」
「我らが『不動王国』、その建国を」
「……つまり？」

　とぼける千明。それににっこりと笑いながら乗っかって、不動王は簡略に告げる。

「やっちゃってください」
「あー。面倒臭え」

　言いつつ、笑う千明。面倒臭い、しかし、『負ける気はない』、そんな表情。

「んじゃ、ステンバーイ……おっと、俺は構われなければ働くつもりはさらさらないんで」
「結構ですよ。一人でも生き残れば勝ちなんですし」
「ま、負けはないわな」

　相手を舐めきっているのか、自身の実力に自信があるのか、どちらにせよ、『自分達の方が上』という明確な意思は、済の闘志の燃え上がらせる。

「随分と余裕だな……！」

　その十手を突き出して、剣を構える千歳に向かう済。しかし、千

歳は足元の召喚陣に飲み込まれるように姿を消す。済の突きは空振って、千歳が次に姿を現したのは千明の横。それは召喚術を用いた瞬間移動。

「余裕、だけれど？　何故なら私は『架空の武器』さえも召喚できるのだから。伝説に残る神々の武器に、人々の想像の中で最強と謳われる武器に、あなたは勝てるとでも思ってるの？」

千歳の背後に浮かび上がるのは、二つの巨大な召喚陣。その威圧に、明華は途轍もない危険を察知し、その場にいる仲間全員から一番近い位置へと移動しながら声を上げる。

「皆！　一箇所に集まって！」
「いい判断。でも、防ぎきれる？」

一箇所に集まる。そして、その攻撃に迎え撃たんと構える。

「絶対に防ぎきる……！」
「明華」

覚悟を決める明華に、寄り添う済は声を掛ける。

「気負うな。私達も居る」
「うん！　どんな攻撃も止められるよ！」
「もっと頼りなさいな。まだ頼りになるとことを見せられてないけれどね。それに伝説の武器がなに？　私達も、伝説の天使でしょう？」
「……皆、お願い！」

にやり、と口元を歪めて千歳が放つ。

「四人なら防げるかもね？　『アポロンの金の矢』アーンド『アルテミスの銀の矢』」

伝説の聖剣、エクスカリバーを振り上げて、二つの召喚陣から千歳が放つ神々の矢。金色に輝く太陽の矢と、銀色に輝く月の矢が大量に、押し寄せる洪水のように、チームアミールへと迫る。

「『ヴェスカニェーチナヤ・バリシャーヤ・ヴェリチナー』っ！！」
「『消去』」
「『とらちゃんびよよんパンチ』っ！！」
「わ、私だけ技名がないっ！！」

明華の放つ無限砲撃が、次々と迫り来る金と銀の矢を撃ち落とす。それでも物量と威力で上回る神々の矢。撃ち漏らしがまだ迫る。それをかき消す箒の一振りによる消去魔法。さらに溢れる矢をとらちゃんの伸びる腕が殴り落とす。そして最後の僅かな残りを、矢を落とすのに集中する三人に代わって、済が素早く、的確に叩き落としていく。

「余裕だ！　もっと任せても構わないぞ！」

済が素早く動き回りながら余裕の笑みを浮かべる。

「止まる気配が見えないわねぇ。まぁ、大分余力は残しているから大丈夫だけれど」

ヨシエも涼しい表情で、軽く箒を振るいながら未だに矢を吐き出し続ける魔法陣を見る。

「本人を何とかしないと駄目みたいだよ！」

ミュゲも明華の方を伺う余裕を見せながら、とらちゃんに全て任せて矢を防ぐ。

「皆、余裕みたいなら……任せちゃっても大丈夫？」

「「「勿論！」」」

明華はその返事を受け取って、多くの矢を捌く無限砲撃の一部の照準を変更する。ターゲットは召喚陣から少しずれて下方。千歳を中心とした敵チーム、なんでもいいや本陣。

「……照準変更！　すぐに数が増えるから！」

照準が切り替わり、その無数の砲撃が、チームなんでもいいやを襲う。それと同時にチームアミールへと到達する矢も増加する。

「やっべえ！　こっち来たぞ！　千歳！　撃ち落とせ！」

「残念。一度定めた召喚陣は方向転換できないから」

「自分達であの数を捌くんですか！？」

「がんばー」

「「う、うわあああああああ！！」」

千明と不動王が、まるで千歳を盾にするように大慌てで地面に伏せる。ちなみに残る一人のメンバーは棒立ちである。

情けなく怯える二人の男に対して、最前の千歳は顔色一つ変えずに立つ。

「その程度の魔法……いえ、私に攻撃が通用するとでも……」

ドドドドドドドドドドドド！

押し寄せる魔法弾が、千歳を飲み込む！

「やったか！？」

「……多分、駄目です」

忙しく移動しながら済が言うと、推測するのは明華。明華は薄々勘づいている。千歳の手にする聖剣『エクスカリバー』、それが持つであろう能力に。あの時の不意打ちの蹴りは、それを証明する為のものでもあった。

巻き上がる土煙の中から、やはり傷一つ、汚れ一つない千歳の姿が浮かび上がる。

「……思いましたか？」

「『妖精の加護』……ですよね？」

千歳は明華の問い掛けに、興味深げに口元をにやつかせた。無数の魔法弾を浴びながら。

「そのとおり。エクスカリバー、その鞘は、『あらゆる傷を癒す』力を持つ。傷付く先から傷を癒すこの剣を握る限り、私は絶対に倒れない」

「けれど、背後の彼らは大丈夫なんですか？」

余裕を見せる千歳に、明華は同じく余裕を秘めた笑みを送る。その指摘に、僅かに眉を動かした千歳は、にやりと笑って口を動かす。

「お、い、で、ま、せ、『アイギス』」
「な……！？　まずい……！」

明華がその名を聞いた途端に顔色を変える。千歳の前には巨大な召喚陣がひとつ。同時に、千歳の上方から矢の掃射を行う召喚陣が消失する。しかし、同時にそれに対抗する明華の無限砲台も消失。明華は即座に魔法を切り替えていた。

「『イクスード』ッ！！」

チームアミールの眼前に広がるのは、巨大な黒い盾。視界さえも遮るように立ちはだかる壁のようなそれに身を隠した彼女達に、千歳は賞賛の言葉を贈った。

「見事な判断。だけれど、どうやって突破する？」
「おい、明華。一体どういうことだ？」

済が尋ねる。

「『アイギス』は、ギリシャ神話の女神アテナの持つ盾……メデューサの首を埋め込んだその盾は、その首の目に映ったものを石にする無敵の盾」
「……それってまずくないかしら？」

ヨシエが軽く顔色を悪くしながら尋ねる。明華も無言で頷いた。

「目に映らなければ大丈夫です。でも……」
「反撃できない、と？」
「恐らくは、『殺害は禁止』というルール上……本当に石にする訳

ではないか、石にされても死ぬ事はない筈。でも、自信を持って持ち出す位ですから……行動不能にする何かは持っている筈です」
「……どうしたものかしら」

困ったように首を傾けるヨシエ。しかし、一人だけ、なぜかきょとんとしている済が首を傾げる。

「それはそんなに厄介なものなのか？」

済の言葉に、流石にヨシエが驚きを見せる。小さな声でのやり取り。済は自然にその攻略法を口にした。

「『見られなければいい』んだろう？　それにエクスカリバーも、『鞘をどうにかすればいい』」
「済ちゃん……簡単に言うけれど」
「簡単だろう？」

済はにっと笑った。決して難しい表情を見せていなかった明華も、視線を合わせてにこっと笑う。

「……本当に？」
「策はあります。私が行くつもりでしたけど……」
「大丈夫だ。私が行く。皆はサポートを頼む」

済が十手を構えて、自信満々に胸を叩く。決して虚勢ではない。本当に何とかできるといった空気を漂わせて。

「ありがとう済。アイギスは任せて」
「ああ。私の新しい力、見せてやる」

二人は軽く握手を交わし、強く頷いた。その様子をきょとんと眺めて、ヨシエとミュゲが首を傾げる。

「あら？　ひょっとして私、蚊帳の外かしら？」

「ひきこもるなー」

無敵の盾、アイギスを前方に展開し、千歳が挑発する。彼女が呼び出した『アイギス』、無敵のその盾の効力は、実はギリシャ神話のものとは異なる。石にしたら、反則になる恐れがある。そこで彼女が『調節』したそれは、『敵の動きを停滞させる』力。その盾に睨まれたものは動けなくなる。制圧力は十分である。

「おいおい千歳、言ってやるなよ！　あいつらだって負けたくないだろうしよう！　時間稼ぎくらいさせてやろうぜ！」

「……情けなく這い蹲っていた男が何を言っているのやら。死ね」

千歳の背後でやんややんやと千明が喚く。彼女がその馬鹿な兄に気を一瞬取られた時、敵は動いた。

「『ふうせんロケット』！」

敵の盾の後ろから、何かが勢い良く飛び出す！　それはジェット噴射で迫る風船。その激しい音に、びくりと千歳は肩を弾ませた。

「ふ、風船？」

きょとんとする。向かってくる風船は、アイギスに睨まれ停止する。

「な、何をするつもりで……」

「『テリオ』！」

明華の魔法が、千歳の前方に鋼の防壁を生み出す！

「何をするつもりで！？」

千歳が流石に驚いた。何故、敵の前面に防壁を生み出すのか？唐突過ぎて戸惑った千歳だが、直ぐにその意図を理解する。

「成程、『視界を遮る』か……！」

アイギスに埋め込まれたメデューサの首。それに睨まれたものは動きを止められる。つまりは、その目に睨まれなければ問題はないということだ。

「ここから奇襲でも掛けるつもりで……」

「気付くのが遅すぎるんじゃないか？」

千歳はその声にびくりと再び肩を揺らす。その声は、『上から響いていた』。

鋼の防壁、その上から垂直落下する影。最初のミュゲの風船攻撃に相手の盾の視線を向けさせ、それを掻い潜るように開いた距離を一瞬で詰め、防壁の出現と同時にそれに飛び乗り、隙を付いて十手を振りかざす彼女、済はにっと笑って、千歳へと向かう。

「くっ……！」

焦って盾を持ち上げる千歳。しかし、間に合わない。

「遅い！」

済は十手を振り抜いた。目にも止まらぬ速さの一閃。それはアイギスを易々と引き裂く。

「ば、馬鹿な！？」

千歳が驚愕の声を上げ、エクスカリバーを握りしめる。落ちてきた済は、地面に着地すると同時に、その十手を横一文字に振り抜いた。

スパッ……

聖剣エクスカリバーは、たったそれだけで紙切れのように鞘ごとまっぷたつ。千歳がブルりと震え上がる。

「なん」

言い切る前に腕に叩き込まれる済の一撃。アイギスの無敵の守り、エクスカリバーの無敵の加護を失った千歳は、ぐらりとよろめいて、後退した。

「なんで……！？　伝説の武器が……こんなに簡単に……！」

「今の私に斬れないものはない」

何処かで聞いたようなセリフを決めて、済は唖然とする敵チームに十手を突きつける。明華の張った防壁は地面へと沈み、アイギスの危機が去った戦場は、再び視界を開けさせた。

「済、凄い！」

「どうだ？　私は強くなっただろ？」

明華の歓声に、済はにっと笑って答える。そして、ぎりりと歯を鳴らし、その無表情を歪める千歳にも、その笑みを向ける。

「確かにお前は最強かもしれないな。『今まで私達と戦った敵の中では』、な」

そして、堂々と宣言する。

「残念ながら最強の天使は私達だ！」

千歳の表情が、その瞬間に大きく変貌した。

Ｅｐ５３：　残念ながら最強の天使です（後書き）

千歳の強力な武器を掻い潜り、一撃を入れたチームアミール。しかし、自称最強の今井兄妹の力はこんなものではなかった？　天使達の全力が遂に激突する。

次回、「無欲な天才と貪欲な天才」に続く。

ズィスィの伝承の天使、今井兄妹。デタラメ召喚術使いの千歳と、なんだかとっても情けない兄、千明の曲者コンビ。それを率いる奇人、不動王も含めて、意外な強敵になるかも？　次回には、今井兄妹の能力の全容、済の新しい実力が明らかになる予定。悩みを振り切った明華の変化も見られるかも？
ヨシエさんとミュゲも頑張ります。不動王さんの驚愕の野望も明らかになります。かなりややこしい事になっていくかも？

かも？ばっかり使いすぎかも？

Ｅｐ５４：　貪欲な天才、無欲な天才（前書き）

引き続き、妹天使達の出番

Ｅｐ５４：　貪欲な天才、無欲な天才

彼女は貪欲な天才であった。
天才でありながら、現状には満足しない、貪欲な天才。
世界には多くの天才が居る事を彼女は知っていた。
だからこそ、彼女は努力をする。
だけれどそれだけでは人は彼女を『貪欲な天才』とは呼ばない。
彼女は常に一番の天才で有り続けようとする。
その為に自らを高め、貪欲な天才は更には『他人を蹴落とす』。
彼女は知っている。この世の中で、上に登り詰める人間には二通りが居る事を。
自らを高めて這い上がる者、他人を蹴落とし上を引き摺り降ろす者。
彼女は知っている。そのどちらもが確実に上へと近付く事を。
這い上がり、引き摺り降ろし、単純に二倍早い、上へと至る近道。
貪欲に、貪欲に、ただただ貪欲に、彼女は頂点を目指し続ける。
故に彼女こそ最高の天才。

彼は無欲な天才であった。
天才でありながら、何も欲せず自己研鑽を忘れた、無欲な天才。
世界に天才がいようがいまいが彼には関係がなかった。
だからこそ、彼は異質な天才。
彼が『無欲な天才』と呼ばれる事は、想像以上におかしな事実。
彼は何も欲せず、何も求めず、ただぼんやりと生きている。
ただ何となく、思うがままに、何をする気でもなく、生きるだけ。
彼は思う。ああ、面倒臭い。何もしたくねえや。

彼は何もしない。何もしたくない。
彼は思う。楽して生きられねえかなあ。
なんとも低い志。彼は何もしないのだ。
なのに何故、彼は『天才』と呼ばれる？
望まずとも自然と天才になる、故に彼こそ最高の天才。

二人の天才を召喚した男、不動王はそう語る。

最高が二人じゃおかしい？　そこんとこ、適当に宜しくお願いします。

―――

千歳はその無表情を、異常なまでに明るい笑顔に作り替えた。不気味に、ただ楽しそうに笑うその表情に、最も近くでその顔を見た、済がかつてない黒い感情を感じ取り、思わず怯む。

「全く……これだから」
「おう、千歳ー。手ぇ貸す？」
「無用」

腕を抑えながら、千歳はぐっと立ち上がる。その顔には笑顔はなく、前までの無表情。

「私一人で二度と立ち直れない位にぐちゃぐちゃにするから」

何の予備動作もなく、その周囲に召喚陣が展開される。そこで済は、前に飛び出し千歳を沈めるか、一度下がってこの召喚陣に対応するかの判断に迫られる。

そこで浮かび上がるのは、あの時の、不気味な千歳の笑顔。

「下がることをオススメする」

千歳の脅迫じみた宣告。それはハッタリか、それとも本当の警告か。

済は自分を奮い立たせる。

此処で引き下がってどうする！

腕は封じた。武器も防具も破壊した。今が好機。逆にこれ以上待てば何を召喚されるか分からない。新たに見出した、自分の、自分だけの特別な力。それを信じて、済は切り込む。

「下がればよかったのに」

ボウ、と千歳の両の手の先に紋様が浮かび上がった。済の動きよりも速く、その紋様から、まるで済の動きに反応するように剣が飛び出す。一本は二回戦でも彼女が見せた不気味な血塗れの剣、一本は眩い光を放つ同じく血に濡れた剣。不気味な二本の血塗れの剣は、自ら意思を持つかのように、千歳の手に収まり、動いた。

千歳の体がグンと反る。済の十手のひと振りをぐにゃりと躱し、

まるで空を走るかのように、ふわりと足が浮かび上がる。

人間のものとは思えない、不可解すぎる動き。

刃は、その動きに乗せて、危険を感じ身を引く済に向けて振るわれる。咄嗟の判断が幸いして、刃はその頬を掠めるだけで、ぴっと血を散らしながら、済は素早く下がった。

「今のは……！」

「『フラガラッハ』アーンド『勝利の剣』。さっきあなたは何でも斬れるといったけれど」

千歳の体がふわりと浮き上がる。

「残念、それ、私も」

浮遊、そして飛来。糸に釣られた操り人形のように、千歳は済に飛びかかる。

「くっ……！」

「済、受けちゃ駄目！」

十手で対抗しようとする済。それを止める明華。済はその言葉に耳を貸し、その双剣の攻撃の回避に徹する。空を浮かび、剣に振り回されるような乱暴な剣術。回避するのは難しくない。ある程度の後退を終えた済を解放するように、明華の魔法による狙撃が千歳を狙い打つ。

「おっと」

ぐるんと有り得ない体勢で、空中でぐるりと回転する千歳。グンと体を捻らせて、ぐねぐねと動き回るその体には、攻撃は一撃も掠らない。

しかし、周りのサポートも入り始めたからか、千歳も無理はせずに双剣を引く。まるで実力を誇示するかのように、にやりと笑って千歳は地面に降り立った。

「さて、どう来る？」

頬を滴る血を拭い、済は明華に問い掛ける。

「アレは何なんだ？」

「両方とも似た性質を持っている剣だったと思う。簡単に言うとその性質は『自動操縦』と『何でも斬れる』……かな？　とにかく、あれを防御しても無駄な可能性が高いの」

「『自動操縦』……って何だ？」

明華の分析。それは単にその神話や伝説の知識だけでなく、実際に相手の挙動を元に導き出される。済の援護で放つ一撃、それから彼女は相手の、千歳の持つ召喚術の正体を見抜きつつあった。

「剣自らが意思を持って戦う性質、って言えばいいかな。勝利の剣なんかは、所有者の手元を離れても相手を殲滅するものだとも言われてるの。まあ、それでもアレは少しだけ違う存在みたいだけど……」

「少し違う存在？」

「確かに彼女は手元に握って使っているわね。アレは手元を離れないのかしら？」

ヨシエも血に濡れる二本の剣をまじまじと見つめる。明華は「恐らくは」とこくりと頷いた。

「あの人、千歳さんの召喚術。アレは正確には『伝説の武具を呼び寄せるもの』じゃないと思います。もっと正確に言うのなら……『伝説のイメージに準えた、自分のイメージした武具を召喚するもの』」

その推測は限りなく真相に迫っていた。千歳が聞き取れば、顔色を変える程に。千歳の持つ召喚術、それは実際に神話の武具を呼び寄せるものではない。

無敵の盾アイギスをあげてみてもそうだ。その能力は、彼女の都合の良いように、『睨んだものを石にする』から『睨んだものは動きを止める』へと書き換えられている。

そもそも、様々な解釈のある伝説の武具。どの伝説が正しいかも分からないそれを呼び出している……という事に、前の試合で彼女が召喚した『フラガラッハ』を見たときから、明華は若干疑問を抱いていた。それを晴らす事となったのは『アイギス』、そして今まさに対峙している『フラガラッハ』と『勝利の剣』。

そして明華は、元々ある程度持ち合わせていた知識と併せて、ある意味で召喚術の根源とも言えるものに辿り着きつつあった。それは更には、魔法、付術……全ての魔導に通ずる、『魔導の極地』とも言える答えへと繋がる事となる。

明華はまず、目の前の双剣の力の答えを導き出した。

「恐らくあの剣、その能力が大幅に書き換えられています。主に『自動操縦』その定義。あの剣は、『所有者を操り、完璧な戦闘をこなさせる』。例えるならば……」

「薄葉、か？」

　済がぼそりと声を漏らした。済がぼんやりと見えていたその動き。相手の動きに対応するように不規則に動く、人間離れしたその動き。剣に操られる千歳のそれと、暗中無心拳に操られる薄葉のそれとは、酷似していた。

「そう。あれはお兄ちゃんの暗中無心拳と、限りなく似た性質を持つ剣。相手の敵意に反応して、それに完璧に対応する、一分の隙もない自動操縦兵器。そしてその攻撃力は、斬れないものなどない程に強力無比」

「じゃあ、薄葉より強いの？　そんなことないと思うけどなー」

　むすっとして、ミュゲが大好きな強い人が、負けているという答えを批判する。それになんの偽りもなく、済は同調の言葉を放った。

「そうだな。あいつの方が、薄葉の方が、もっと気持ち悪くて、更に怖くて、ずっと速い」

「済ちゃん……そ、それはフォローになってないと思うわ……」

「済の言うとおり。あれは少し『遅い』。恐らくは、千歳さんの体があの剣の動きについていかないんだと思う。それに何より、お兄ちゃんが負ける筈がないもん」

「そこは相変わらずなんだな」

　この中で、一番付き合いの長い済と明華が、顔を見合わせて笑った。

「だったら、対応策は簡単だ！　『自動対応されないくらいに速く動けばいい』っ！！」

「いや、済ちゃん。それはちょっと……脳筋すぎるんじゃ……」

「いえ。十分にありかと思います。でも相手を殺すつもりはないとはいえ、あの剣に触れたら真っ二つ、という可能性も考慮して……こんな作戦はどうかと」

明華の立てる策。千歳に悟られぬよう、手早く告げられたそれは……

「そろそろ作戦会議は大丈夫？」

完全に舐めきっている。千歳は非常にプライドの高い天使であった。常にトップで、誰かに劣る事などあってはならない。千歳にとって彼女以外に存在を許される天才は、敵対する価値もない、兄である千明と、彼女達をこの世界に呼び寄せた男の不動王だけである。見下し、加減し、その上で潰し、貶める。千歳は敵の天使を引き摺り降ろそうとしていた。

「ご親切にどうも」

明華が皮肉と共に微笑む。

強がりを。

千歳は、両手の双剣を振りかざし、生意気な天使にその表情浮かばぬ顔を向けた。攻略できるものならしてみろ。そんな挑発の意味を込めて、口元をぐにゃりと歪める。

「来い」

腕のダメージをも問題としない、軽い力を込めて、千歳は双剣『フラガラッハ』と『勝利の剣』を構える。そんな彼女に向けられた敵意は、四方向へと散った。

「成程、複数人」

明華と済、二人が付術による加速によって、真っ直ぐに千歳へと向い来る。残る二人、箒を握るヨシエと魔具とらちゃんを繰るミュゲは、左と右に別れて前進した。四人掛かり、反応できない総攻撃を仕掛けるという作戦。千歳は甘い、とその作戦を鼻で笑って切り捨てた。

『フラガラッハ』と『勝利の剣』、それはどちらも鋼鉄さえも切り裂く絶対の切れ味を誇る剣。腕の一本を切り落とした所で、優秀な治癒術士が控える大会運営に掛かれば、死人は出ないと千歳は割り切っていた。複数人で来るならば、迷わず一人一人腕を落とす。足を落とす。そんな残虐性も彼女の強さの一端である。

例え複数人で襲いかかろうとも、隙を確実に突こうとも、『必殺』の武器の前に、犠牲を出さない事は不可能。彼女は自らが召喚した武具に、絶対の自信を持っていた。

「消去」

まず動いたのはヨシエ。しかし、それは千歳の思いもよらぬ方向へと攻撃の矛先を向ける。

ゴッ、と音を立てて、千歳の後方、千明と不動王の立つ地面が消失するかのように刳れる。「うわお」と慌てる声を漏らす情けない男達。そこに向けて、更なる追撃が、右方向で魔具を動かす少女によって放たれる。

「『とらちゃんびーーーーむ』っ！」

丸い体に長い手足、奇妙な形態を持つその魔具の口に当たる部分がガコンと開く。其処から飛び出すのは、光速を誇る魔法攻撃。規格外の光学兵器が火を吹いた。

「……まさかっ！」

千歳が気付く。地面を抉る様に放たれたレーザーが、決して相手を討つ為の攻撃では無かった事に。それは強力過ぎた。この際、なぜこんな子供がこれ程にふざけた兵器を所有しているかは置いておく。それ程に強力な兵器は、並の人間に当たれば消し炭。一撃で命を奪い去る程のものだろう。それを放った。反則負けが怖くないのか？

相手が上位の魔導士と知って加減を除いた？　リスクが高すぎる。しかも相手は弱い魔法弾の連射でも怯えていた連中。まず有り得ない。

子供の手加減知らず？　冷静な周りの空気から、それも否定。想定外の行動ならば、周りも慌てる筈。まるで想定内と言わんばかりに此方に向かう二人の表情は揺るがない。

牽制……！

千歳の後方に控える、謎の三人。その行動を封じる為の、牽制の攻撃。仕留める事に主眼を置かない、動きを封じるための攻撃。ひいひい悲鳴を上げる二人の男を見れば、それは成功している事が明らか。

つまり、チームアミールの狙いは……

「二人程度で、私に勝つつもりか……！」

屈辱。舐められたものだ、と千歳はわなわなとその頬を震わせた。後ろの三人を封じ、二人で千歳を討つ。それが明華の提案のスタートライン。

作戦を捉え違えた事よりも、二人程度で勝てると思い上がる二人の天使に千歳は苛立つ。彼女は四人で掛かってくるものだと思い込んでいた。

「思い上がらないで下さい」

「一人でも十分な位だ」

「舐めるなあああ！」

明華と済、二人の天使が千歳と接触する。くん、と二手に分かれて左右から迫る明華と済、その敵意に反応し、近くの相手にフラガラッハと勝利の剣はそれぞれ反応する。この時点で、各々の天使に向けられる剣は一本。少なくとも、その必殺の刃に斬られる可能性は激減する。

さらに済と明華が狙うのは、人間の限界、つまりは関節の可動域。構えられた千歳の自動操縦をコントロールするかのように、二人は息を合わせて千歳の周囲で方向を変える。

「な……！？」

千歳の肩の関節の可動域、その限界が、それぞれ別の標的を追う二本の剣の動きを止める。それが最大のチャンス。済は一気に距離を詰める。

「……なーんて」

冷静さを欠いた『フリ』。千歳に抜かりなど無い。彼女は常に、確実に相手を仕留める一手を、用心深く練り続ける。だからこそ、彼女はその一手を隠していた。

『フラガラッハ』に身を任せ、千歳は逆らう『勝利の剣』から手を離した。『フラガラッハ』の自動操縦により、千歳の体はグン、と済を狙い、剣を振るう。

「ぐっ……！」

必殺の刃を寸での所で回避。済は不意の一撃に背筋を凍らせながらも、がら空きの明華側を睨んで千歳の撃破を確信した。しかし、手を離された筈の『勝利の剣』は、ふわりと勝手に浮かんだまま、ギュン、と回転、加速し、明華目掛けてその牙を剥く。

済は思い出す。明華の解説を。

「残念。『勝利の剣』は、自分一人で動ける剣なの」

「明華ぁ！」

「あ……！」

明華は突然襲い来る刃に、右腕を上げて身構える。

「腕一本、もーらいっ」

千歳のうっすらと浮かべた笑顔と共に、その刃は明華の掌へと吸い込まれた。

あれ？

「どうかしましたか？」

鋼鉄さえも切り裂く絶対の刃は、その白い手にまるで紙切れでも扱うようにひょいとつままれていた。指全てを切り落とす、それが千歳の思い描いた光景。しかし、そんな光景はそこにはない。

明華は片手で、その指先で、『勝利の剣』の刃を受け止めていた。白刃取りだったらまだ良かった。なんて超人だ、と千歳も驚くだけで済んだ。

しかし、その全てを切る刃は、『明華の掌に当たって』、その上で止められていた。

「な……何故斬れないッ！？」

千歳の最大のミス。それは彼女の前で、無闇やたらと自らの自慢の伝説の武具を抜いてしまった事。あらゆる方面の性質に特化したその極端な武具達は、明華に新たな魔導理論を与えてしまった。

「簡単ですよ。『なんでも斬れる』、その性質を『打ち消した』だけです」

「そん……」

「ハッ！」

「へぶえッ！？」

フラガラッハを掻い潜っての済の隙間を縫うような一撃。その速さと正確さを込めた十手のひと振りが、千歳の顔面を捉えて、フラ

ガラッハ諸共遥か後方へと吹っ飛ばす！　地面に背中を擦りつけながら、転がる体から、フラガラッハは離れていく。

「ち、千歳ぇっ！？」

牽制に怯えながら、兄の千明はまさかの妹のダウンに驚愕した。
そんな彼女を吹っ飛ばした、二人の天使は掴み合ってなにやら騒ぎ立てている。

「び、びっくりしただろう！　お前、危ないことするな！！」
「だ、大丈夫だよ。ちゃんと確証があって……」
「心臓が止まるかと思ったぞ！　そういうことが出来るなら先に言え！」

涙目で喚く済に、困った表情を浮かべながら明華が揺さぶられる。
伝説の剣を受け止める、という明華のまさかの行動は、どうやら打ち合わせ外の行動だったようだ。

「い、済っ……悪かったから！　ごめん！」
「お前はいつも心配かけて！　このやろ！　このやろ！」
「あうっ！　ごめんったら！　とにかくっ！　まだ終わってないよっ！」

「コ……ろ……ス……！」

何時の間にか、立ち上がっている千歳が、顔を抑えながらその血

走った瞳を二人に向ける。手の隙間から、血を零し、その並々ならぬ殺気をダダ漏らしした。覆い隠すことのない、その狂気は、済と明華を改めて震え上がらせる。

千歳は我を忘れていた。

殴られた屈辱、自らの武具を破られた屈辱、泥まみれにされた屈辱……屈辱、屈辱、屈辱。彼女の頭の中で、どす黒い感情が逆巻く。本来ならば、『殺し合い』において、彼女は絶対に負けない根拠を持っている。

しかし、これは『試合』。『殺し』を禁じられた彼女の力は間違いなく弱まっている。

それをまさに紐解こうとしている脅威、それは対峙する明華と済には、身に迫る危機として強く感じられた。

「済、気を付けて」

「お前こそ」

千歳が腕を広げ、何かを宙に描き出す。今まではなかった筈の予備動作。それが今から繰り出す『何か』の規模を物語る。

「殺す」

腕で魔法陣を描いた千歳は、そのままばたりと前方へと倒れた。何の前触れも無く、何をするでもなく、ただ、無力に崩れ落ちる。

「はい、そこまで～」

ぱん、と手を鳴らし、その男は前へ踏み出した。後方で敵の攻撃に怯えていただけの男、千歳の兄、今井千明。ダルダルの背広姿の一際異彩を放つ彼は、倒れた妹をにたにたと笑いながら見つめていた。

「熱くなんなって。もっと気楽に行こうぜ？」

「く……ち、あきッ……！　やめろ……！　こいつら、殺す」

「だから止めてやってんだろうよ。あー面倒くせえ」

千歳が倒れ伏したのは、彼の仕業に違いなかった。しかし、それが何によって起こされた現象なのか。それが分かる人間はこの会場に殆どいない。何も見えない、何も聞こえない、何も臭わない、前触れも、変化も起こさない千明の『隠し球』は、千歳にだけ及ぶものではなかった。

倒れているのは、千明に攻撃を仕掛けていた筈のヨシエ、そしてミュゲ。何かによって倒された、というよりは『力が抜けている』と言った方が良さそうな状態。

「何が……起こって……」

済は言いかけて、急に沸き上がる虚脱感に膝をついた。それは隣で立っていた筈の明華も同様。その場にいる、千明、不動王を除く

全員が、その場に力なく沈んでいた。

「相っ変わらず……なんであんたには『コレ』が効かねぇのかねぇ？」

「簡単ですよ。私は最初からやる気などない」

「……成程な。違えねえ」

千明はくっくと詰まらせる様な笑い声を漏らして、一歩前に出る。

「よ～う、皆さん。ご機嫌いかがか？　どうも、うちの千歳がお世話になりましたぁ？　ところがどっこい、残念ながら、千歳よりも厄介な奴が後ろに控えていたとは思うまい？　俺だってやる気だしゃあ千歳よりもずっと強いんだぜ？　やる気だしゃあな。ああ、分かってる。明日から本気出す」

くいっとネクタイを緩める。気の抜けた顔でへらへらと笑い、男はがくりと肩を落とす敵達の間を摺り抜ける。

「怠いだろ？　そりゃあ怠いさ。これぞ、俺の真骨頂。周りの人間のやる気を根こそぎ削ぎ落とす、名付けて『無気力症候群』。魔導の系統は『呪術』。どうだい？　俺の毒は身に染みるだろ？」

呪術、その聞き慣れない魔導系統に、会場中にはざわめきが起こる。何を隠そう、千明の語るその呪術、魔導系統にそんなものは存在しない。それは彼自身が名付けた仮の名前であり、正確には彼の操る魔導は、現在の魔導にはカテゴライズできないのだ。

「犬にタマネギ食わしちゃいけねえように、人にも食わしちゃいけねえものがあんのよ。要はお前ら全員に、人間の体には到底合わねえ『人間のやる気を削ぎ落とす』アルマを注入したぁ。立つ気力も

残ってねぇだろぉ？　……おっと、返事する気力もねえか？　ああん？」

千明の言葉に、表情を沈ませるチームアミールは答えない。その様子を確認し、にんまりと笑うと、千明は上を見上げて声を上げる。

「おい、司会ぃ～～～。こいつらもう動かねえってよぉ～～～。俺らの勝ちってことで、試合終了宣言よろしくぅ～！」

「……まだ……終わってない」

勝ち誇る千明が視線を落とす。すると其処には膝で立つ敵の姿。明華はよろめきながらも、虚ろな目で、強く、強く千明を睨む。

「……ありゃ。不動王。あんた以外にも効かねえ奴がいやがんよ」

「こんな……情けないところ……見せられない……」

眠たげな目で、呆れたように千明は明華を睨みつけた。

「見せられない？　……どなたか想い人でも？　……あっついねぇ！　お前を立たせてんのは、気力じゃない、ってかぁ！　あ～、結構、結構。俺ぁ別にそういうの嫌いじゃねぇ。嫌いじゃねぇけど……」

一歩ずつ、千明は明華に向けて歩き出す。

「面倒臭ぇ」

その掌に、今度は目に見える、紫色の毒々しいアルマを宿しながら、千明はヨシエを、ミュゲを、千歳を通り過ぎ、並ぶ済と明華の元を目指す。

「だったら直接、最ッ高にローな奴をぶち込んでやらぁ。倦怠期って知ってるか？　夫婦仲が萎え萎えになって飽き飽きしちまう時期のことだ。あれも一種の毒、そう思わね？」

それは人間関係を冷めさせる毒。その名はそのままに呪術『倦怠期』。想い人との絆など、一瞬で崩壊させる千明の特別性ネガティブマジック。彼は他人をとことんネガティブに引き摺り込む才能に長けている。人を怠けさせ、人を弛れさせ、人を萎えさせる。祭りがあれば興を削ぎ、戦いがあれば士気を抉る。

『やる気無き煽動者』、彼が今まで台無しにしてきた事柄は、元の世界、今の世界を合わせて数百を超える。

そんな彼が、兄に対する想いで立つ明華の、兄に対する想いを萎ませようと手を伸ばす。

「あ……きか……！」

済がそれを何とか止めようと口を開く。しかし、体が怠く、動かない。動かす気力を、心の奥底が否定する。

「ゲームオーバーだ。あー、面倒臭かった」

ついに射程圏。手の届く位置に、千明はその一歩を踏み出した。

「……ちょっと予定外ですけど」
「……あ？」
虚ろな明華の目に、突然光が灯った。
「そこ、危ないですよ」
カチリ、と地面から音がする。「あ？」と間抜けな声を漏らす千明。明華は一早くその音に反応し、素早く傍にいる済に飛びつき、その体を抱えて一気に距離を取る。
カッ！！
「あ」
強烈な閃光が千明の顔を下から照らした。その瞬間、ボッ！と強烈な爆風が、千明の足元から吹き上がる！
黒煙が上がり、その爆炎から姿を現した千明は、髪の毛をちりちりと焦がしながら、再び間の抜けた声を漏らした。
「あ？」
そして、その弛んだ笑顔を浮かべたまま、後ろの方向へと力なくばたり、と倒れた。

「……何がどうなっているのでしょう？」
「簡単ですよ」
疑問の声を漏らす不動王に、明華は答えた。
「あらかじめ、『無気力症候群』のワクチンとなるアルマ構成を体内に作っておいただけです」
明華が済の背中をとんと叩く。すると済のうっすらと閉じかかっていた目はぱちりと開、驚いたようにきょとんと明華を見つめていた。
「え？　な、なに？」
「しゃきっとして！　ヨシエさんとミュゲちゃんももう大丈夫ですよ！」
「……あら、そう？」
「……わー！　どうだった？　うまかったでしょ！　『やられたふり』！」
「……『ふり』？」
何事もなかったかのように立ち上がるヨシエとミュゲ。一人、何が起こっているのか理解できない済だけが、おろおろと辺りを見回していた。
「二人には既に器術で記憶させた『ワクチンアルマ』を渡しておきました。私の合図でそれを体内に注入。それからしばらくの間は『無気力症候群』、並びに精神に干渉するタイプの攻撃は通用しない！」
「どうして対策を打ってきているのですか？」

不動王の疑問も当然。千明の『無気力症候群』は、隠し球。ヴォラスカーニバル中でも一回しか使わせていないし、そもそもこのような魔導が世間で晒されるのは初めてのはず。その対応策がすぐに見つかる訳がない。

「私は既に『対策方を知っていた』からです。同じ系統のアルマ干渉を、以前に見たことがありますから」

ズィスィにて、魔女の森フェガロフォスの主である大樹ケンズ、それを蝕んでいた毒のようなアルマ。それは限りなく千明の操る呪術と似ていた。その対策方、悪影響をもたらすアルマ、その対策を、明華は既に知っていたのだ。

「それが分かればあとは一回見れば十分です」

「……あの一回で見抜かれた、ということですか」

明華は試合を見ていた。チームなんでもいいや、その第一試合。千明の無気力症候群で敵を無力化したその試合。不動王の放任主義で、最初から切り札をとっとと出してしまった千明、その軽率さが災いした。

しかし、誰も予想がつくまい。まさかたった一度だけ見せただけの魔導を、一瞬で見抜かれようとは。

それをしてしまうのが、彼女の恐ろしさなのである。

「……なんで、私にはそのワクチンをくれなかった」

済が不満そうにつぶやく。

「ご、ごめん。あの人を一人で誘きよせる為に、わざとやられた振

りをする必要があったから……済、演技だめかなぁ……と」
「失礼だな！　私だって演技くらいできるのに！」
「成程。千明を誘い出す為の、動かす為の罠……」

明華の立てた作戦は、既に今までの敵の試合を見たところから確立していた。千歳の『フラガラッハ』、千明の『無気力症候群』、それらの手札を見た時点で、明華はそこから予想される魔導の性質を分析し、必要な対策を全て済ませていたのだ。

試合開始後、動きを見せなかったミュゲは、明華からの頼みで会場の一部にこっそりと『罠』を仕掛けていた。それはチーム匿名希望が張り巡らせたトラップと似た、地雷型トラップである。
『フラガラッハ』の特性、それを予測し、対擬似薄葉とも言える相手に、対薄葉とも言える罠で対抗する。
この罠は思いの外、スピードに欠陥を持つ千歳には必要なく、代わりに千明の不意をうつのに利用することになったが。

ワクチンをあらかじめ用意し、しかし時間制限のあるそれをすぐに使わずに、厄介な魔導を操りつつも前に出そうもない千明を油断させる為にやられた振りをする。
千歳の接近、それを狙い、千明への攻撃は防御するであろう千歳の動きは、千明の『無気力症候群』で封じ込める。煙のように拡散する魔導であることは、闘技場に残留した僅かなアルマから、明華は既に読み取っていた。
千歳の守りがない状態で、千明は最大の油断をする。なんとかしてそれをおびき寄せ、千歳復活の前に仕留める。それが今回、運良くまっすぐに地雷の方へと向かってくるので、明華はさりげなく位置調整をして誘導。爆破。

その他、様々な予測をたてつつ、明華は千明を無力化する道筋を導き、遂に沈めた。

「作るのが大変なワクチンを沢山常備はできませんし、系統を変えられたら対応できません。だから、『一番厄介』な相手を真っ先に狙わせていただきました」

「……千明がこちらの最強の手札だということも見抜かれていたのですね」

不動王は感心するように、しかし無関心そうにふむと頷きにやりと笑った。

「参った。千明が落とされるとは」

余裕の笑みというべきか、それともやる気のない笑みというべきか、何故か不動王は慌てない。真剣に捉えていない。

「なんであいつは余裕なんだ……」

「それは……まだまだ勝負は終わってないから。『無気力症候群』が切れた今、復活してくる筈」

「世界を我が手に、『チトセズファンタジーワールド』」

世界が大きく揺れた。巨大な召喚陣に囲われたのは、その会場全て。地面はピンク色に染まり、巨大な時計塔が這い出してくる。空

からは笑顔を浮かべる月と太陽が顔を出し。本の山があちこちに聳え立つ。全てを見下ろすように、その毒々しいカラーリングのお菓子城は、空に浮かび上がっていた。

異様な光景。その中心に、空飛ぶお菓子の城の天辺に立ち、千歳は最大にして最悪の召喚術を起動させた。

「マイナス千度だって召喚して見せよう」

「二次元だって召喚して見せよう」

「伝説の神々だって召喚して見せよう」

空が桃色一色に染まる。光り輝く無数の巨人が見下ろす世界に、千歳の巨大な召喚陣が無数に広がっていく。

「そして、私は、『世界』さえも、召喚して見せよう」

『世界召喚』。千歳の切り札、その一端。桁違いの力を見せつけ、千歳は叫ぶ。

「不動王ッ！！　手を貸せッ！！！　こいつら、ただじゃ置かないッ！！！」

「御意御意……私もそろそろ動きますか。我らが悲願の為に」

千歳の思うがままに回る世界。不気味に微笑む世界の中で、それ

でもチームアミールの面々は笑った。

「すごいすごーい！」

「あらあらまあま、びっくり。すごい召喚術もあったものねえ」

「とんでもないな……化け物か？」

「すごい……けど、負けられない、よね？」

全身全霊。ヨシエはその箒を構え、その笑顔に重々しい重圧を乗せる。ミュゲはとらちゃんの頭を叩き、その兵器倉庫の口をぱかりと開かせる。済は、表情を固まらせ、周囲を突き刺す様な緊迫した空気を漂わせる。明華はその指にはめた、新たな魔具をかざし、世界を見上げて微笑んだ。

「明華、勝ち目は？」

「もう、見つけてる」

「私もそろそろ、頼りになるとこ、見せないとね」

自信に溢れるチームアミールを前に、まず始めに千歳が動いた。

Ｅｐ５４：　貪欲な天才、無欲な天才（後書き）

底なしの力を見せる最強の天使、今井兄妹その片割れを撃破した妹天使達。しかしその先には、最後の強敵、千歳と謎多き男、不動王が待ち受ける。異質の天才、不動王の目的と、その驚異の実力が明らかに？　そして、遂にヴォラスカーニバル最大の波乱が訪れる。

次回、「不動王国」に続く。

妹天使戦、もう少しだけ続きます。
実は一番厄介な天使、千明さんは早速脱落。
万能幼女、ミュゲさんは、実は兄譲りの演技派。基本素直なお子様ですが、人を欺く才もある、とっても恐ろしい少女です。
千歳さんはキレ芸が得意な凶暴タイプ。余裕があると冷静。でも、舐められるとブチギレ。殺し合いなら最強クラスです。
済は演技ベタの称号を手に入れた！　というより基本的に不器用なのです。
次回は一気に話が進みます。それはもう、一気に。そして、ある意味でのターニングポイントが訪れる予定。

Ｅｐ５５：　不動王国（前編）（前書き）

引き続き妹天使戦

ＥＰ５５：　不動王国（前編）

彼の目論むその王国は、この上なく素晴らしいものだった。
それはまさに理想郷。
この世界でならば、私は一生安心して生きられる。

奴の目論むその王国は、この上なく素晴らしいものだった。
それはまさに理想郷。
この世界でならば、俺は一生楽して暮らせる。

その天使達は、その男の理想郷にすぐに同調した。そして、同時に、優れたる天使は、その男の圧倒的な才をも認める。

あいつは天才だ。

負けず嫌いな妹も、他人に興味のない兄も認める。そして二人は、彼の事を親しみと敬意を込めて、こう呼ぶ。

才能を持ちながら、それを余りにも無駄な方向に費やす天才。

『才能の不法投棄』、と。

一一一一

千歳の得意とする魔導、『召喚術』。その本質は『空間の操作』にある。

異なる空間と空間を繋ぎ合わせる、それが『召喚術』である。それに加えて、召喚したもの、所謂『召喚獣』との契約魔法など、様々な細かい魔導を組み合わせたものが一般的な『召喚術』に当たる。本来なら今に語り継がれる多くの召喚術は、それらの手順を一括して残されているのだが、それを極めた者は、その中の手順を独立させて行使する事ができる。

つまりは『契約』の手順を除く、本質である『空間操作』のみを自在に行使できるのだ。契約はそれ単体では大きく役立つ魔法ではないので、実戦に使われる事はない。しかし、その『空間操作』は、聞こえ以上に強力な能力である。

召喚術に必要不可欠な『召喚陣』を介す必要があるという制約があるものの、その用途は多岐に渡る。移動、防御、保管などなど、召喚獣を用いずとも、むしろ召喚獣を呼び出す以外の用途に多くの需要がある。

それだけでも強力、しかし、千歳は更に上の段階にまでその能力を昇華させていた。

『世界の召喚』、それは彼女の操る、『無境界召喚術』の一端に過ぎない。

彼女の操る召喚術は、『世界の境界さえも無視する』のだ。
異世界、現実と夢想、別時間、その他あらゆる境界を超えて、彼女の召喚陣は展開される。

其処は、彼女の『想像』が作り出した世界。千歳は自らの『想像した空間』を、この場に呼び寄せた。

その世界を上から見下ろす千歳。彼女を取り囲む無数の光の巨人は、彼女の想像の産物。故に契約を交わすまでもなく、彼らは彼女の従順なるしもべ。彼らはそれぞれその手に、大地に突き刺さる無数の神々の武具を引き寄せ、握る。するとその武具は、忽ち彼らのサイズに合わせて巨大化した。

「『ラグナレク』」

光の巨人、彼らは千歳の生み出した、想像上の『神々』。彼らはそれぞれ自分の武具を握り、敵、チームアミールの天使達を見下ろした。

「まさか、あれが全部襲ってくると？」
「みたいねぇ」

そう言う済とヨシエは大した焦りも見せていない。涼しい顔で光る巨人を見上げている。同じく召喚された世界に驚きつつも、焦ることはない明華が、ヨシエと目を合わせて、尋ねる。

「ヨシエさんの魔法なら、あれくらいは消せますよね？」

ヨシエは少し驚いた顔を見せた。それは明華に突然無茶ぶりをされたからではなく、どうして『本当に消せる』ことを見抜かれたのか、という驚き。そんな疑問を抱きつつも、ヨシエは優しく微笑み頷いた。

「ええ。勿論」

ヨシエは箒を握って光の巨人を見上げる。そして振りかぶる箒で、ターゲットを捕捉する。

その箒型魔具に記憶された魔法は、極単純な魔法『ティポタ』。『対象を分解する』その魔法たった一つを記録した箒型魔具には、特殊な機構が搭載されている。三十年以上も前、とある器術使いによって作られた、『振る』という運動エネルギーをアルマによる魔法のエネルギーへと変換する特別な機構。

それは単純に、箒を強く振ることで、その強さに比例してアルマを捻出、消費し、それに見合った威力を叩き出す。

それにより、『岩など砕けやすいものを崩壊させる』程度の威力である『ティポタ』は、ダディに引けを取らないヨシエの馬鹿力により、『あらゆる対象を分子レベルでバラバラにする』程の威力に跳ね上がる。

そしてそれはある程度『抑えた』力で呼び出される結果。更に強く振れば、その効果範囲は更に広がり、国一つを塵に変えられる程のぶっ飛んだ魔法と化す。

振るというラグがあるおかげで、髪の毛を操る天使、櫛子の『無限増殖』とは相性が悪かったものの、数が限られる敵ならば、如何なるものでも消し飛ばす。『殺してもいい』光の巨人ならば、尚更加減はいらない。

『殺し』を考慮に入れれば、現代のあらゆる天使を、千歳は上回

るだろう。しかし、『殺し』を考慮に入れれば、彼女の殺傷能力は、先代天使ヨシエに遥かに劣る。

『掃除屋（スイーパー）』ヨシエは、その箒を笑顔で、魔法起動の『合い言葉』と共にひと振りした。

「『消去』」

それは千歳にとって、余りにも想定外だった。

神々の武器を握るは『神の軍勢』。無数の光の巨人の攻撃に、そう簡単に対抗はできないだろうと彼女は考えていた。

神さえ見下す千歳の無意識化で、彼女の生み出す神々が、語られる伝説よりも大きく劣化していたとしても、普通は単騎でどうにかできる軍勢ではなかった。

音もなく振り抜かれた箒の一掃き。文字通りの『一掃』。

たったそれだけで、光の巨人、『神の軍勢』、殲滅魔法『ラグナレク』は崩壊した。

「やっと、見せ場が出来たわね」

「有り得ないッ……！」

千歳の貼り付けたような無表情は既に存在しない。自慢の武具、敵の無力化という点に置いては自分を上回る兄、あらゆる手を突破され、流石の彼女も焦っていた。兄、千明の『無気力症候群』で頭を冷やした彼女は、今はメリットのない殺害という手段を封じている。しかし、敗北という耐え難い二文字を回避するために、彼女はそれを考え始める程に追い込まれていた。

「大丈夫ですよ、千歳」

遥か上空のお菓子の城。その天辺に立つ彼女の横に、ふわり、とその男は降り立った。

彼女と千明、今井兄妹を召喚した張本人。姿勢の悪い笑顔の男、不動王。

「負けたっていいじゃないですか。『手加減してやった』と思えばいいんですよ」

「死ね」

その男が吐いたのは、まさかの『諦め』の言葉。千歳はイラッとした。

「やっぱり上に立たなくちゃ駄目ですか？」

「当然」

全てを見透かす様に苦笑する不動王。彼は他の誰よりも、二人の天使の心情を理解していた。それは彼が限りなく、二人の天使、今井兄妹に似ているからという理由が大きかったのであろう。不動王は、普通ならば決して口にはしない言葉を吐き出した。

「じゃあもう負けてもいいですから、『空想領域』でぶっ殺しちゃいましょうよ」

「……それは本気で言ってるの？」

「ええ。勿論」

不動王は笑ったまま頷いた。千歳はその改めて、この男の不気味な、それでいて不愉快じゃない奇妙な性質ににやりと笑みを浮かべ

て、その視線を遥か下に落とした。
千歳は理解している。今の『試合』という形式では、あの天使達には勝てないであろうということを。しかし、負けず嫌いの彼女はそれを受け入れられなかった。

つい、数秒前までは。

「……『空想領域』を出すまでもない」
「ですよね？」

今の彼女は、完全に不動王に毒気を抜かれていた。

そう簡単に許されると、なんだか違う……

まるで子供を宥めるような、不動王の寛大な言葉。それが癪に触った。そうなると、ムキになっている自分が下らなく思えてくる。まだ、千明の無気力毒が残っているのか、彼女にも分からない。しかし、明確に彼女は自分の中の熱が冷めていくのを感じていた。

「彼女達を追い込める可能性の作戦があります」
「……聞かせて」

不動王の提案。それに素直に耳を傾ける千歳。彼女はあらゆる意味でその男を信頼していた。

この男は、天才だ。

光の巨人を一掃したヨシエの得意気な表情。それよりも、明華は遥か上空に構える千歳と、その傍らに立つ二人の仲間の動向、そして千歳の操る魔導の不可解な点に、意識が向いていた。

「ねえ。どうだったかしら？　私の今の。どうだったかしら」
「……次はどう、動くつもり……？　それにもう一つ……」
「明華、どうした？　そんな難しそうな顔をして？」
「アキカもおかしいと思うよねー」

首を傾げる済、それに対して、明華と同じく難しい表情を浮かべたミュゲ。少女は既に、明華の疑問に気付いているようだった。

「何がおかしいんだ？」
「あれ程に大規模な召喚術を展開してたら、普通はアルマがもたないよ。器術でアルマを蓄えておくにしても、今のところ世間に出回ってる論文程度の技術じゃ、それどころかどんな素材をどんな規模で使っても、あの高性能の武器を呼び出した時点でアルマ切れを起こしているはずなのに……」
「お、おお……」

困った表情を浮かべる済。明華はミュゲの意見にこくりと頷き、分析する。

「そう。召喚術、ある程度の文献しか見ていないからはっきりとは言えないけれど、天使の伝承、それに従った召喚術を例にとっても、別空間から人二人を呼び出すだけで相当のアルマ消費を強いられていた……レンダさんもあの竜を呼び出すのに相当なアルマを捻出してたし……多分、召喚術は『呼び出すもの』の規模によって、消費

する労力が増大する筈。人間一人のアルマで、あれ程に高性能な武器を、ましてやとてもじゃないけどこんな『世界丸ごと一つ』を呼び寄せることは絶対に出来ない。……それに実際に有り得ない規模のアルマ変動も見れた」

「……召喚術の応用で、何かしてるのかな？」

「恐らくは。でも、アルマ変動の際に召喚術に必須な召喚陣の展開は見られなかったから……もしかしたら、『伝説の武器』なんか比にならない、もっと飛び抜けたオーバーテクノロジーの召喚を行なっているのかも」

「二人は一体何を話しているんだ……」

「……誰も褒めてくれないのね」

技術に関わる会話となると饒舌になるミュゲが、明華とどんどん考察を進める。勉強や技術は体に覚え込ませるタイプの済は、長い会話が苦手で、それについて行けない。そして、あらゆる意味で蚊帳の外のヨシエ。ある程度の考察を終えたミュゲと明華は上を見上げて、ひとつの結論に至る。

「「興味深い……」」

二人の探究心に火が点いた。本来なら警戒すべき、『敵の行動』。それを二人の探究者は期待と共に待ち侘びる。

そんな期待に目を輝かせる二人に気付く事なく、千歳は動き出す。

千歳の胸元に、渦巻く様に溢れ出す膨大なアルマ。突如湧いて出た様なその莫大な量のアルマは、千歳の手元に魔法陣を呼び起こす。

「『トライデント』」

ありとあらゆる無限の兵器が格納された千歳の『仮想武器庫』。そこから引き出すのは三又の矛。千歳がひと度その矛を振り翳すと、周囲の風景がざわりと騒ぎ出す。空想世界に吹き始めるのは風、そして次第に空を覆い始める雲。その現象を引き起こしているのが、他ならぬ千歳である事は明らかであった。

「あれは？」

「『トライデント』。嵐を巻き起こす……簡単に言うと風と水を操る矛、かな？」

最早武器の解説を自然にこなしつつ、明華は千歳の中心に渦巻くアルマを視認し、口元をきゅっと締めた。分析の片手間、その口を素早く動かし、対応策を始動させる。

「『ケラヴノス』」

明華のその呪文詠唱と同時に、千歳は顔を顰めた。

『ケラヴノス』は、本来ならば雷雲を呼び寄せ、雷を落とす魔法である。しかし、その本質は、雷を作り出すというよりは、『雷を操る』といったほうが正しい。

雷雲を引き寄せる魔法。それ以前には雷雲を作り出す魔法。雷の軌道を操る魔法。その他複雑な気候、環境コントロールを組み合わせた、超高度な自然支配系統の魔法である。単純そうに見えて強力なその魔法は、実はトライデント同様に、嵐などの気候のコントロールも可能なのだ。

つまりは、トライデントによる嵐の支配権が、明華の魔法に奪わ

れ掛けている。それに気付いて、千歳は顔を顰めたのだ。それでもトライデントも風と水を支配する魔法。易々とコントロールは譲らない。

見えない部分でぶつかり合うアルマ、二人は今、嵐の支配権を争っているのだ。

互角。そう見える争いの均衡も、明華の指輪の怪しい光の前に崩れさる。

「『フリューゲル』」

明華の背中に白銀の翼が開かれる。飛翔。そして、羽撃き。嵐の支配権争いに、新たに『風の支配魔法』が加えられる。

ぐい、と風の手綱が引かれる感覚に、千歳は即座にその手綱を手放す事を選ぶ。トライデントの支配を『水の支配』、その一点に集中させる。

「……流石の判断力ですね」

「そちらこそ。随分と大した魔法」

フリューゲルの翼によって、一気に頂点に立つ千歳の元へと舞い上がる明華。目を見合わせ、二人は火花を散らす。

千歳が水の支配により、全ての雲を消し飛ばす。それにより、明華のケラヴノスの雷雲は消え去った。降らせず溜め込んだ雨、それを水の塊として、傍らに従えた千歳。吹き荒れる風、それを支配し、従える明華。

水と風、二つの力の激突が始まる。

「「はあああああっ！」」

掛け声と共に、明華へ向かう洪水と、千歳へ向かう暴風が激突する！　激突により散る風と水が、ぱらぱらと雨を降らせる。互角。両者一歩も譲らない膠着を見て、千歳はにやりと頬を緩めた。

……不動王、ビンゴ！

狙い通り。全ては不動王の戦術の通りに、試合は動き始めた。

「チェックメイト」

降り頻る霧雨の中、遥か上空の手の届かぬ激突を見上げるチームアミールの面々の前に、その男は一人の仲間を引き連れ立っていた。足元には召喚陣。それに三人が気付いた時には、男は既に呪文を唱え終わっている。

「『ブラックシーギャング』」

不動王の詠唱終了と共に、沸き上がるのは黒い何か。わらわらわらわらとその量を増すそれは、雪崩の様に、明華を除くチームアミールに襲いかかる！

「な……！？」

「『消去』っ！！」

咄嗟に反応し、箒を振るヨシエ。しかし、その黒い物体は、留まることなく増殖し、消失分を取り戻す。迫る黒に、済も即座に十手を振り、薙ぎ払う。そこで、済はその黒い物体の正体に気付く。

「……ワ、ワカメ！？」
「その通りですよ。マドモアゼル」
不動王はにやりと笑い、次々と沸き上がるワカメを前に指を動かす。
「『ブラックシーギャング』は、私の作り出したオリジナルの魔法ですよ。魔法はそのスペックに比例し、アルマ消費量と呪文量が増加する。つまりは強力な性能を持つ魔法はアルマ量の少ない私にはそうそう使えない訳で……それを解消する為に作り上げた『制約理論』。それを搭載したのがこの魔法なのです。あ、遅ればせながら。私は不動王。決して動かぬ不動王です」
自己紹介も兼ねて、不動王は、次第に三人を飲み込み始めるワカメの洪水の解説を始める。
「『制約理論』。つまりは、高スペックの魔法に高リスクが伴うのならば……強力な出力を誇る魔法に、『強力な制約』を付ける事で、その魔法のスペックを落とそうという理論です。それに更に『外部要素吸収』の理論を組み合わせたのがこれ。『水を吸収して、無限に増殖するワカメを創り出す』……それがこの魔法ですよ！」
「「『増えるワカメ』！？」」
ある意味で驚愕の魔法を前に、済も、ヨシエも、素っ頓狂な声を上げた。緊張感のない響きの割に、次第に動きを封じ込めていく魔法のワカメの勢いは脅威である。
そんな状況に置かれた済達を見ながら、不動王は空を見上げる。
「上空で水をまき散らす激突が起こっている限り、私の『ブラック

シーギャング』の勢いは止まらない。あなた達はやがて呼吸さえ困難な状況に陥るでしょう。ヨシエさん、あなたの『分解』は、この勢いには追いつけない。イツキさん、あなたの剣術は身動き取れないその状況では発揮されない。ミュゲさん、あなたの複雑な動作を実現する魔具も絡みつくワカメに封じられる。力づくも無意味。このワカメ、想像以上に粘り強い」

「くっ……！」

思う以上の危機に晒されている事に、今更気付かされるチームアミール。確かに複雑に絡みつくワカメの洪水に、誰もまともな身動きは出来なくなっていた。切ろうにも止まらない。重なり合うとそれなりの拘束力になる。泥沼に沈むように動きが封じられていく。

「そして、残る頼みの綱のアキカさん。彼女は今、やっと千歳の水に耐えている。あとはスタミナ勝負。そうなれば、千歳は絶対に負けません」

「何を根拠に……」

「根拠は簡単。千歳の胸元に取り付けられている……ああ、服の下だから分かりませんか。彼女の胸元には、この世界とは別の世界、遥かに優れた文明を誇る世界から取り寄せた、究極の魔具、『無限機関』が取り付けられているのです」

「……それが、あの無尽蔵のアルマの根源なの？」

ミュゲが次第に押し寄せるワカメの波の中で、流石に表情を引き攣らせながら尋ねる。それに不動王はにこりと微笑み答える。

「そう。『無限機関』は要約すれば『無限大にアルマを生成する装置』、とでも言いましょうか。つまり、千歳のアルマ総量は……『無限大』なのです」

「そんな馬鹿な！？」

「馬鹿な、と思いますよね？　でも、現実なんですよ」

次第に上空の風と水の鍔迫り合いが動き出している。水が徐々に明華に迫りつつあるのだ。

明華は顔を顰め、下でワカメの大群に押されている三人を気に掛けている。

「この『ブラックシーギャング』を打ち破るには、まずは上空から注ぐ霧雨を止めなければなりません。千歳はさらさら止める気はありませんので、アキカさんが遠慮するしかありませんね。しかし、そうすると上空のアキカさんは千歳に負けます。例え、そうしなくとも、スタミナ勝負は、無限にアルマを捻出する千歳の勝利確定。だったらあなた方がアキカさんを助けないと、負けてしまいますよね？　でも、あなた方は動けません。……あれ？　これって詰んでますよね？」

ぺらぺらぺらと流暢ぬ喋る男には、今まで後ろで縮こまり、攻撃に怯えて悲鳴を上げていた面影はなく、不敵で不気味な威圧さえ感じさせる程に、男の姿は大きく変貌していた。

「この……程度ッ！！」

その魔法から一早く脱出したのはヨシエだった。ワカメの洪水を、力づくで引きちぎる。そして、動きを封じられる箒を同じく力任せにグンと振る。「消去」の一言と共に、近場のワカメは消失し、箒を振り回しながらワカメの洪水をかき消していく。

力任せの突破を試みたのは、他の二人も同様だった。しかし、動けないのだ。それほどに、この魔法は見た目以上に強力なのである。

「おお、流石は『スイーパー』様です。歴戦の英雄は、何処かの没

落貴族の使いっ走りとなっても、健在と言うわけですか」
「坊っちゃんを馬鹿にする言葉は、流石に見過ごしては置けな……いや、そうでもないかしら？」
「おやおや。随分と、冷たいじゃないですか。ちょっとした冗談で煽っていますのに。あらかじめ謝りますよ。お宅のアミール坊っちゃんは、決して没落貴族などではないですよ。私がお慕い申し上げたいくらいに、尊敬しているお方だ」

ワカメの洪水を力づくで捩じ伏せて、ヨシエは一気に不動王へと迫る。その周囲にはワカメの洪水はない。そこまで届けば止められる。箒を構えて、その男、不動王を討たんとするヨシエ。

「過度の賞賛は、嫌味にしか聞こえないわよ？」
「いいえ。過度の賞賛などではありません。『人を顎で使って動かない』、まさに不動のその精神、私が最も憧れる姿です」
「やっぱり馬鹿にしてるのね。それじゃああなたも動かなくなる？」

ヨシエがワカメの洪水を切り抜ける。

「……この私が、この不動王が、あなたの持つ最大にして唯一の個性、想像を絶する『怪力』によって、もしくはあなたの後ろに控える二人の天使様が未だに隠す切り札によって、この魔法を切り抜けられる事を想定していないとでも、本当に思いましたか？」

不動王の背後で、沈黙していた影が動いた。

「『アディペリスパスモス』」

控えていた、チームなんでもいいや最後の一人。少年のような透き通る声。その少年が唱えた呪文は、不動王と彼の足元に召喚陣を作り出し、見えない『何か』を引き起こす。

それに構わず、箒を振り抜き、不動王を打つヨシエ。その感触によって、ヨシエは何が起こったのかを理解した。

「残念でした」

箒が当たるその瞬間、不動王と少年の姿はどろりと蕩けて、ワカメへと変貌する。それは『偽物』。幻によって作り出された、囮人形。

『召喚術による逃避と、幻術による囮人形作成。相手の攻撃を躱し、攪乱する、この子のオリジナル複合魔導です』

どこからともなく響き渡る、不動王の声。それと同時に、空に浮かび上がるモニターに、消えた二人が現れた。モニターに映るのは、カラフルな装飾に彩られた空間。その空間で、不動王は口を動かしている。

『千歳の召喚したこの世界のアドバンテージは、ひとつ、千歳の召喚術によって呼び寄せた、最高の召喚獣が潜んでいる事。ひとつ、確実に地の利を取れるということ。今まさに、私は、地の利を活かしてあなた達の知らない空間に身を隠している、さて、あなた方は、この広大な、混沌とした世界で、私を探し出し打ち倒す事が出来ますか？』

挑発的に、この世界に飲み込まれた会場中の人々に向けて、不動

王はメッセージを発信する。未だに留まる事を知らないワカメの洪水。ようやく切り抜けたヨシエでさえも、それから次第に逃れきれなくなっていく。

その勝敗明らかな戦況に、誰もが疑問を抱かざるを得なかった。

この状況を、いとも容易く作り出した、天使の主、不動王とは何者か？

そんなオーディエンスの期待を見破り、全てに答えるかのように、モニターに映る不動王は、絶対的安全圏に座し、高らかに宣言する。

『ヴォラスカーニバルも終盤、そろそろ名乗っていいでしょう！只今この放送は、世界の皆様に向けて、全世界一斉中継となっております！　我が名は「不動王」！　偉大なる最強の天使、今井千歳と今井千明をこの世界に呼び寄せた天使の主にして！　新たに誕生する新国家、「不動王国」の王となる者！』

「不動王国……？」

誰かが呟く。

国家の誕生を謳うその傲慢にして不敵な男の語る、不動王国。

『全ての者が働く必要もない、全ての者が学ぶ必要もない、全ての者が動く必要もない、「堕落」を良しとする、真の極楽浄土！　苦労などない、真の楽園！　それこそが「不動王国」！』

男が語るは夢物語。しかし、その圧倒的な存在感と、圧倒的な説得力を持つ軍勢を率いた新たなる王の演説に、世界は揺らぐ。

「宣言するって事は、そろそろ潮時？」

三又の矛により、水を操り明華を抑える千歳が呟いた。彼女はにたりと笑う。ようやく、悲願が達成される。ようやく、楽園が完成する。彼女は遂に訪れるであろう平穏に、心を躍らせる。

影に生きる天才、不動王が、初めて世間に姿を顕したその瞬間から、彼は歴史に大きく名を残す怪物と化す。

『最大の祭典、ヴォラスカーニバルの舞台をお借りして！　今ここに！　史上最大の楽園の誕生を宣言します！』

Ｅｐ５５：　不動王国（前編）（後書き）

怪物、不動王による、世界を揺るがす演説が始まる。異質の天才の仕掛ける戦略と戦力の前に、絶体絶命の妹天使達は……？
混乱の第三回戦、遂に集結。準決勝へと駒を進める者達は……？

次回、「不動王国（後編）」へ続く。

少し長くなったので、前後編に分割。今井兄妹を召喚した男、不動王の本格登場です。今までの天使召喚主の中でも、最も危ない変人であり、最も天使と良好な関係を築いているという変わり者です。彼の素性とその能力、野望の詳細は次回に明らかに。そして彼の野望にどうして今井兄妹が同調しているのかも明らかに。そしてようやっと三回戦終了予定。……ということは残りの人達は……？

Ｅｐ５６：　不動王国（後編）（前書き）

妹天使戦決着

EP56：不動王国（後編）

男の夢、それを滑稽だと人は笑う。
男の野望、それを彼の両親は呆れた顔で否定した。
世間知らずの馬鹿の戯言。その一言で切り捨てられた目標を、男はしかし追い続けた。

『生きる為には食わねばならぬ。その為に、人は働かなければならぬ』

彼を咎めた父の言葉を彼は復唱した。

『ならば、働かずとも食える環境を、私が作り出せばいいのです！千歳の呼び出す永遠のアルマの源、「無限機関」。アルマは生命の源。アルマを直接注入する事で、人の生命活動を安定させる事のできる技術を私は既に見つけています。それさえあれば、安定したアルマ供給があれば、人々が飢える事はないのです』

食事とは、つまりは生きる上で必要なアルマの補給。そう割り切れば、食うために働く必要はない。

『ならば生きられればそれでいいか？　否、人は何かの楽しみがなければ生きてはいけません』

彼を咎めた母の言葉を噛み締めながら、彼はにっこりと微笑んだ。

『それも大丈夫。千歳の生み出す「空想世界」。そこでは望むものは何でも、苦労もなく手に入ります。彼女もそれを、喜んで提供すると誓ってくれました』

「但し、私を敬うがいい」

千歳は人の空想の世界を召喚する事ができる。望む人間にその世界を提供する。千歳は己が目論見に反せぬそれを喜んで承諾した。

『努力が必要な事もある、例えばこうして私がすらすらと言葉を話せるのも、両親から与えられた教育に努めさせられたおかげです。しかし、これからはそんな努力も必要ないのです。私が研究し、編み出した魔導。人の中に、ありとあらゆる概念を刻み込む、名付けて「教育魔法」。これさえあれば、言葉を知らない子供に、難解な魔導をいきなり教える事もできるのです！　知識は労せず手に入るのですよ！　その研究成果が……この子です！』

モニターに映る不動王の傍らに、フードを被って顔を隠して立っていた少年。不動王にそっくりな、縮こまるような悪い姿勢。フードを外し、そのあどけない素顔を晒し、思いの外幼い少年は口を開いた。

『ぼくは、ずっとひとりで生きてきました。親もいない、言葉も分からず、誰も助けてくれない世の中で、不動王さまだけはぼくを拾って、「教育魔法」でたくさんのことを教えてくれました。ぼくは不動王さまのために、いっぱい頑張ろうと思います』

『こら、フィロス。勝手な事を言ってはいけません。打ち合わせと違うでしょう。あなたは教えた魔導を……それに、私の為に頑張ってはいけません！　頑張らなくて済む世の中を私は作るのですから！』

『ごめんなさい。ぼく、頑張って頑張らないようにします』

少年フィロスを咎めた不動王に、奇妙な返しを示しつつ、少年は軽い呪文を唱えて、その掌に不思議な光を浮かべた。

色を変えつつ、変化する不思議な光。その美しい魔法は、ただ魅せるだけの魔法だったが、少年の持つ魔法のレベルを示すのには十分だった。それ以前に、魔導に携わる者ならば、先程見せた彼の高度な魔導を十分に理解はしていたが。

不動王の魔法で生み出される増えるワカメを身代わりに身を隠す……この中には、ワカメを自分達と錯覚させる幻術、そして自分達を退避させる召喚術、と言ったように、単純に複数の魔導が組み込まれている。それだけで、通常なら大人でも一種類身に付ければ上出来とも言える特別な魔導を、フィロスは二種類以上身に付けているということになる。

『人々の営みを支えるだけの魔導、そしてこの世界に平定を齎す伝承の天使。それらを私は長きに渡る研究の末に、遂に導き出しました！　今日の紹介はほんの一部となりましたが、十分に人が何もせずに生きていけるだけの世界は見えてきた筈です！』

モニターに映る不動王は、得意気に笑う。

済は顔を上げ、モニターをぽかんと凝視していた。彼女の中では、たった一つ、とある疑念が渦巻いていた。

『頑張る必要も、働く必要も、苦労する必要も、何も、何も必要なんてないのです！　一生楽して暮らしていこうではありませんか！』

不動王の呼び掛け。それに対して、済が思い浮かべたのは、「努力の否定など許さない！」だとか、「頑張らない世界なんて許せない！」だとか、そんな正義の努力家が語るような台詞ではなく……もっと単純な疑問だった。

「……いや、それ、お前が頑張り過ぎなんじゃないか？」

不動王は、その思わぬ台詞にきょとんとした後、くくくと笑って首を振る。

『まさか！　私は働きたくないからこうして不動王国の立ち上げを考えているんですよ！？　五十年に渡って様々な分野の魔導を研究し、到底到達出来ない技術を成し遂げる為に天使を頼ろうと天使の伝承を世界中を駆けずり回り十年研究して、ようやく完成した技術の実験に世界中を回ってあらゆる環境での実験を繰り返して、いざ建国の時の為の資金稼ぎの為に開発した技術で商売をして、建国後のコネクション作りの為の接待も忘れずに……』

そこで、不動王は口を止めた。彼は漸く、数十年に渡る自らの行いの、とある矛盾に気付いた。

『……私、頑張り過ぎてるじゃないですかっ！？』

「今更！？」

モニター上の不動王が頭を抱えて叫ぶ。

『うっそでしょう!?　私、頑張るのが嫌で、楽するために生きてきたんですよ!?　ちょっと、私、何頑張ってるんですか!?　嫌だ！　働きたくなかったのに！』

「馬鹿だ……」

「馬鹿だ……」

「凄いけど馬鹿だ……」

観客達の冷たい視線が突き刺さる。

「……凄いわね」

「ああ。五十年て……あいつ、五十歳以上にはとても見えないぞ」

「いや、済ちゃん。そこじゃなくて。いや、それも驚くけど」

「かわいそう」

ワカメの洪水の中からも、天使達の哀れみの視線。

「……ああ、やっと気付いた」

「もしかして、知ってたんですか？　あの人の言っている事がおかしいって」

「うん。知ってた。でも、楽しそうだったからスルーしてた」

上空で激突する明華と千歳も呆れたように言葉を交わす。

不動王、憐れなピエロは、一人、顔を真っ赤にしながら、モニター上で、傍らの少年フィロスに慰められながら、悶えていた。

「……それじゃあ、決着、着けようか」

不動王の演説、その終わりを確認して、千歳は右手に掲げる『トライデント』をグンと前に突き出した。それは今まで、加減をしていた事を示すかのように、そして事実、不動王の演説の終了を待ち続けていた千歳は、まずは対峙する明華を仕留める為に動き出す。

千歳が呼び出した『空想世界』。其処は文字通り、彼女の空想を形にした世界である。つまり、この世界は彼女の空想に従い動く。例えば、空間内に新たな要素を追加するのも思うがまま。

千歳は『水』を空間内に発生させる。

地面から吹き出す水。それは千歳の『トライデント』の水操作によって、彼女の武器と化す。単純に、それだけで拮抗する水と風の衝突は傾く。当初から、次第にスタミナ切れで攻撃の手が弱まり、押されつつあった明華の目の前にグンと水流が迫る。

「うっ……！」

「ジ・エンド」

遂に拮抗が終わる。

ドッ！

一瞬で、膨大な量の水が、明華を背中の大きな翼ごと飲み込む！

「プススー。あー、弱。まるで相手にならないわー」

にやりと口元だけで微笑む千歳。
そこで、自らの失敗に悶えつつも、未だに戦況の監視を続けていた不動王が気付いた。

何故、仲間は声一つ上げない？

仲間が今まさに撃ち落とされたにも関わらず、声一つ上げない相手チーム。思えば不可解な点は他にもあった。
確かに、永久にアルマを精製する魔具『無限機関』を持つ千歳は、明華とのスタミナ勝負に負ける筈もない。しかし、それにしても、明華の押され始めたタイミングは『早すぎた』。それは、予め全ての天使に対する調査を密かに行なっていた不動王の見立てとは合わない結果。例え明華が押されるとしても、もっと粘る筈。
実際に、明華の魔具は、アルマ消費を抑える事をメインに考えられたもの。千歳には及ばずとも、その持久力は優れている。

ならば、何故、彼女はこうも早く息切れしたのか？

そもそも、彼女は本当に息切れしたのか？

不動王は、自らに突っ込みを入れた、相手チームの一人を思い出した。

『……まずい！　千歳！　下です！』
「……した？」
「水で増えるのなら、水分を飛ばせばいい……ですよね？」

下。地面。千歳が見下ろした其処にあるのは、燃え盛る炎。そして、その中心に立つ、白い翼を広げる明華の姿。

「な、なんで!?　あなたはさっきまでそっちに……！」
『幻術……ですか……！』
「あちゃあ……見抜かれちゃいましたか。貴方には」

炎は、地を這う無数のワカメを焼き付くし、他のチームアミールのメンバーを救出していた。明華は、額をぺちん、と叩きつつ、モニターに映る不動王に視線を向けていた。

「まあ、見よう見まねですけど。だから、空気に投影なんて高等技術までは出来ませんね」
『……霧雨。千歳の力を利用しましたか……』

不動王は即座に見抜く。
霧雨。空気中に漂う水を、明華は利用した。空気よりも目で捉えやすいそれに、自らの姿の視覚情報を投影。それにより、千歳に、『明華は其処にいる』事を錯覚させたのだ。
明華は息切れを起こしたのではない。風の発生地点と思っていた場所から、単純に『離れた』のだ。幻の自分から、風が発生しているように見せかけながら、明華はずっと風の操作を行なっていた。
『翼の羽撃き』という、一見『翼から』起こしているように見える風の操作、それこそフェイク。『フリューゲル』、その白い翼は、『風を起こす』のではなく、『風を操る』。『空気の奪い合い』を演じた、セルセラアンゲルス戦で既に分かっていた事である。

『気付くべきでした。イツキさんが、私の過ちを指摘した時に。「何故、私の魔法で埋めつくされた彼女が、声を発しているのか？」……迂闊でしたね』

不動王の演説、その隙に、既に明華は千歳との激突から脱出し、済達の救出へと向かっていたのだ。不動王は、自らの野望を語るこ

とに熱中していたせいで、それを見逃していた事に呆れ、苦笑した。

「そして、これでジ・エンドです」

「ハァ？　何を言って……」

「こういう事だ」

眉間に皺を寄せる千歳は、自らの居る高みと同じ高さから、声が響いた事に気付いた。顔を上げた千歳の目に飛び込んできたのは、丸い巨体にしがみつく少女と、その巨体に乗った、十手を構える女の姿だった。

明華に目を取られ、気付かなかった。否、明華の広げた翼のせいで、気付かなかった。

地上には既に、明華とヨシエ以外には、誰も居なかった事に。

明華に開放された三人は、不動王の演説が終わり、明華の幻影が破れるその直前に、行動を開始していたのだ。ミュゲの乗る魔具、とらちゃんに済は飛び乗り、とらちゃんごとヨシエは済とミュゲをその馬鹿力で上空へと放り投げた。明華が残した僅かな幻術のベールで、姿を晦ましながら、ようやく上空に到達した二人と一機。それに千歳が気付いた時には時既に遅し。

「イツキ、行っけーーーーー！！」

ミュゲの掛け声と共に、済がとらちゃんを蹴り、水平に飛翔する。その十手を突き出し、天空の城に立つ千歳へと向かう。

「……糞がッ！！」

手にする伝説の武具、トライデントを咄嗟に千歳は突き出した。
しかし、その伝説の武具を前に、済は引く気配すら見せない。

「残念だったな」

突き出す十手が三又の矛に接する。

「私に斬れないものはない」

矛が砕ける。千歳は、その矛に宿る膨大なアルマが、バラバラに切り裂かれる感触を感じる。

「まさか……！　『アルマを切断している』！？」
「これなら、『ふらがらなんとか』も『勝利の剣』も、斬れていたかもな」

空中で腕を振り、済がぐっと身を反らせる。そして、そのまま千歳と接するタイミングで、それを思い切り振り抜いた。

ズン！

千歳の体を、一瞬で通り過ぎる十手が打ち抜く。何処に、どうやって、その攻撃を叩き込んだのか、それさえ分からない程の一瞬。
実際、一瞬で放たれたのは『四撃』。四肢を制御するアルマ流を断ち切る、まさに止めの一撃、いや四撃。それにより、千歳はぐらりと体勢を崩し、城の頂上から体を落とす。

「あ……」

「ミュゲ！　後は頼む！」
「うん！」

真っ逆さまに転落する千歳。四肢を封じられ、何も出来ない彼女に待ち受けるのは、そのままの転落。ミュゲが済と共に飛び上がったのは、済の空中方向転換を助ける為と、その救出の為であった。とらちゃんの伸縮自在の腕を伸ばし、落ちる済と千歳に手を伸ばす。

その手が済を掴む。しかし、千歳はその手からふっと逃れた。

「な！？」
「あ、あれ！？」

済とミュゲの表情が驚愕に染まる。千歳の姿は、消えるように見えなくなったのだ。

そのまま、済を引き寄せ、とらちゃんが、その足で、ズドンと地面に着地する。衝撃を殺し、安全に地面へと帰還した二人。その二人に駆け寄る明華とヨシエ。その二人も上空で起こった事に、驚いているようだった。

千歳の身に何が起こったのか、それを彼女達が理解したのは、その数秒後。

それはまるで、重要な場面がコマ落ちしたかのように、突如として現れた。

「……私の計算違いでした。彼女達は、あなたが手加減して勝てる程に弱い存在ではなかったようです」
「……くっ……認め、ない……私は……！」
「おや。意識はありましたか。良かったです」

四人は咄嗟に身構える。突如として現れたのは、ぐったりとした千歳を両腕で抱え上げる……俗に言う『お姫様抱っこ』というやつで、千歳を抱える不動王の姿だった。一瞬、この場にいる強力な天使達でさえ、捉えきれない一瞬で、彼は現れたのだ。

「速……いなんてものじゃない……その魔法は……」

「おっと、警戒しなくていいですよ。少々お待ちを」

冷や汗を流す明華に、笑顔で不動王は言い、抱える千歳に視線を落とした。

「……ちょっと……重いので、降ろしてよろしいですか？」

「し、失礼な……って……あれ？」

千歳は、動かせる首を傾け、今の状況を確認する。体を包む、暖かい腕の感触。体を支える意外な力強さ。千歳はそこでようやく、自分が不動王にされている事に気付いた。

「な、な、な、何して……！」

「え？　どうしました？　お熱でも？」

にっこり微笑む不動王の顔を見上げ、千歳が紅潮する。無表情など既に何処にもなく、その顔はパニックで滅茶苦茶になっていた。

「お、降ろせっ！」

「あ、降ろさない方がいい。足は暫く動かないぞ」

「あ、そうなんですか。じゃあ、骨は折れますがこのまま抱えてましょう」

「おい！」

声を荒らげつつも、千歳は動かない四肢のお陰で抵抗もできない。その光景を、「あらあらまあまあ」と言いながら微笑ましげに眺めるヨシエおばさんの視線を浴びつつ、次第に顔を赤くしたまま力を抜いていった。

ようやく口を閉ざした千歳に優しく微笑みかけ、不動王は四人の敵チームに視線を向ける。

「降参です」

そして吐いた一言は、あまりにもあっさりとしていて、その場に居た全員を驚愕させる。

まっさきに食らいつくのは千歳。

「な、何を言って……！」

「千歳はもう戦えないでしょう？　私もあなたを地面に置いて、自分だけ戦いに行く程に、落ちぶれちゃいませんよ」

不動王の言葉に、ぐぐっと千歳は唇を噛み締める。

「仕方ありません。これはスポーツのようなもの。千歳とは相性が悪かったのです。負けた訳じゃないですよ」

不動王の慰めに、千歳は悔しさの余り泣きそうになる。見透かされている。そして、宥められている。子供扱いされているようにも思える。

千歳には、自分をそんな風に扱う人間など、今まで全く居なかった。

「……と、まあ。私共にはもう勝ち目がありませんので。ここで退

散させていただきます」
「……嘘。あなたは何か、この状況さえもひっくり返せる、とんでもない魔法を持っているんじゃないですか？」
明華の言葉に、不動王は苦笑する。
「参ったな。アキカさん、あなたは何処まで『出来る』んですか？まあ、それを偽る程、私も嘘が好きではありませんが……何分、『それ』は『疲れる』ものでして。今も足腰ガクガクしてますよ。『不動』を愛する私では、どうしても好きになれない魔法です」
少なくとも五十年以上の月日を研究に費やし、生きてきた男、不動王。しかし、見た目は若々しく、とてもそんな月日を生きた人間には見えない。そして、『コマ落ち』のような移動術。明華は薄々気付いていた、その有り得ない魔法を思い浮かべ、ごくりと息を呑んだ。
「……時間」
「おっとそこまで。試合はこれで終了ですよ。……大丈夫。この魔法の『重み』も、『危険』も十分に理解していますので」
不動王はそうとだけ告げて、傍らから、千明を抱えて召喚陣から姿を現すフィロスを引き連れ、明華達に背を向ける。
彼の降参宣言から少し遅れて、その時、会場を包んでいた千歳の世界が消えていった。
下の姿を取り戻した闘技場、その出口に向かって歩くチームなんでもいいや。その姿を、静かに見送るチームアミールの上に、その声は降り注ぐ。

『な、「なんでもいいや」、降参です！　この波乱の戦いの勝者は……「チームアミール」ッ！！！』

沸き上がる歓声の中心で、チームアミールはどっと溢れる疲労に肩を落とす。

思わぬ強敵。

勝った気がまるでしない不敵な男を前に、しかし、彼女達はなんとか突破した三回戦を想い、胸を撫でおろした。

一一一一

生まれて初めてされた、というよりは多くの人間が体験しないであろうそのお姫様抱っこに、千歳はどぎまぎしていた。

「すみませんね、千歳」

「え？」

「あなたのプライド、傷付けてしまいました。実は、私は最初からこの試合には『勝てない』と踏んでいました」

意外な告白に、千歳はきょとんとしていた。

そういえば、何故、この三回戦という中途半端な舞台で、不動王は自身の野望を告白したのか？　するならば、決勝の舞台や、優勝後の方がより効果的な筈だ。

相手が強敵だから？　しかし、恐らくは、それ以上とも言える強敵と、この先に十分にぶつかれる筈だ。このタイミングで決行する理由としては弱い気もしていた。

不動王は、最初から此処で脱落するつもりでいたのだ。だから、演説の決行を急いだ。

「……分からない。不動王、あなたの考える事は」

「そうですか。すみません」

千歳はボソリと漏らし、口を結ぶ。しかし、彼女は分かっていた。不動王が自分に向ける気遣いに。

彼は、千歳を、相手が救出しようとしたにも関わらず、わざわざ『疲れる』魔法を使い、割り込んで救出した。それは、相手に助けられるという事で、千歳のプライドを傷付けないためだ。それだけの為に、彼は咄嗟に千歳を助けた。

自由に戦え、といいつつ、その裏で全力を出す事を禁じていた。恐らくは、相手を殺しに掛かろうとした千歳を宥めた千明も、彼が差し向けたのだろう。そして、全力を出させない事で、子供じみた言い訳だが、千歳の負けのショックを和らげようとしていた。

「今回は試合の都合上負けました。でも、本気で『殺し合い』をすれば、千歳は彼女達に勝つと私は踏んでるんですがね」

物騒な励まし。しかし、とても分かりやすい励まし。それに千歳の胸はぎゅっと締め付けられる。

この世界に来て、初めて見つけた、唯一その『才能』を認められた他人。努力の方向性を大きく間違い、才能の見せ所を派手にずらすその男は、彼女の拒む『天才』でありながら、彼女に不安を与えない存在だった。

その道化っぷりも、もしかしたら、千歳の為の演技かもしれない。

しかし、どうしようもなく、千歳には、その存在が心地よくも、頼り甲斐のあるものになっていた。

「……あなたも牢屋に入れて、私の彼氏候補ストックに入れようかな？」

「やめたほうがいいですよ。こう見えて、私は七十過ぎの耄碌ジジイですので。お若い千歳にはお粗末すぎます」

意外すぎる事実。しかし、千歳は驚かず、頬をほんのり朱に染めたまま、呟いた。

「それでも構わない、と言ったら？」

「牢屋行きはご勘弁願いたいですね。だから、こう言わせて頂きましょうか」

不動王は優しい微笑みと共に、囁いた。

「私はあなたを裏切りませんよ」

千歳は、ぽっと赤くなり、静かにその頼りがいの無い貧弱な男の胸に顔をうずめた。

初めて、唯我独尊の女、千歳が、人に心を許した瞬間だった。

錬金術師のチーム『金の鐘』をあっさり打ち破った女勇者レンダ率いる『レンダサークル』。ゲートをくぐり、控え室に戻るレンダは、不満げに口を尖らせていた。

「どういう事よ、あいつらっ！　やる気あんのかしら!?」

思いの外、大した抵抗も見せずに倒れた『金の鐘』。傍目から見れば相当な白熱した試合に見えるその試合に、レンダはその戦いに参じた当事者として、不満を隠せなかった。相手チームが手を抜いていた事は、レンダサークル全員が気付いていた事である。

「まぁな。あいつら、もう勝負は捨ててたんだろうよ。ベスト8、十分な結果は残せたしな。それだけでも、転がり込む利益はバカデカイだろうよ」

「ちぇっ！　だから最初にわざわざ啖呵を切ったってのに！」

「それに乗る単純馬鹿は少ないってことだよ」

ぶーぶーと文句を垂れるレンダ。満足のいく試合を楽しめずにいた彼女だったが、しかし、続く試合を思い浮かべてか、その顔は次

第に緩んでいく。

「……次は誰と当たるかしら？　アキカ？　それともウスハ？　燃えるじゃないっ！」

「あー、燃えちゃってるよ、この馬鹿」

「想像もしたくないですね。それほどに段違いですよ、その人達」

レンダを取り囲む三人は、それ程に戦いに対して「楽しみ」という感情を抱いていない様子である。戦闘狂と言ってもいい程に戦いを楽しむレンダと違い、他の三人は比較的正常な感覚を持ち合わせている。勿論、「戦闘」に関してだけ、だが。

うだうだと駄弁りながら歩く四人。その会話が止まるのは、前方からやってくる、次の試合に出向く四人とすれ違った瞬間だった。

ぞわぞわ、と『いけない』何かが駆け回る。それを感じ取り、レンダサークルのメンバーは全員足を止めた。

くるりと振り返り、軽く挨拶を交わしてすれ違ったチームの後ろ姿を見る。

「……何よあれ」

「いや、ヤバいだろ。アレ。どんだけ殺気立ってんだ……？」

感じたそれは『殺気』。殺し合いではない健全な試合には不相応な、とてつもなく禍々しく、恐ろしい、本当にこれから相手を殺し

に行く人間の放つ狂気。
レンダは額に汗を伝わせながら、引き返す。
「戻るわよ、あんた達！　いざとなったら、止めに入る！」
「おいおい、これ以上厄介事背負い込む気か！？」
カテナの引きとめる声に答えず、レンダは試合へ向かったチームの後を追う。
「無駄ですよカテナ君。レンダさんはそういう人ですから」
「……全くだ」
「あいつの事を分かったようにお前ら……ああ、もう、面倒臭ぇ！」
その後を追う三人も、結局はレンダに影響された変わり者。
彼らも、レンダと一緒に、危険な香りを漂わせるチーム、『プリプラノメノス』を追いかける。
一一一一

姫神美命は、ずっと抱き続けてきた強い想いと共に、胸にその鈴を押し付けて、会場に入った。

ミスティコという憎くて仕方がない相手に従い、姫巫女として耐えるのももう終わり。彼女は、目前に迫った夢の到来に胸を高鳴らせる。

「お兄様、待っててて」

彼女のたった一つの目的。人の想いを踏み躙り、絆を滅茶苦茶に崩壊させてまで、望むもの。それは『死んだ兄の復活』。彼女は兄の目玉にアルマを込めて作り上げた特別な鈴を、肌身離さず持っている。そして、兄の骨にアルマを込めて作り上げた錫杖は、彼女の最高にして唯一のパートナーである。兄は死んでも、彼女の傍に居た。

兄の体から作り上げた彼女の装飾は、兄の力をそのまま宿す魔具となった。未来を見通す彼女の力と対照的な、『過去を操る』不可思議な魔導。彼女は兄と二人で、『過去と未来』を司る力を持っていた。

『それでは第三回戦最後の試合ですっ！　「チームミスティコ」ＶＳ「プリプラノメノス」！！』

兄の力が内に宿り、彼女は兄を近くで感じられた事を喜んだ。しかし、彼女は寂しかった。兄の暖かい手のひらが、優しい目が、力強い腕が、心地よい声が、忘れられなかった。目玉で作った鈴は、美命を見つめてはくれない。錫杖になった腕は、彼女を抱いてはくれない。ましてや喋る筈もない。

だから、彼女は蘇らせる。『天使の伝承』最終節、『世界を救っ

た天使の見返り』、それを利用して。

『巨悪』を討ち滅ぼした天使は、元の世界に帰る事が出来る。そして、世界を救った報酬として、あらゆる願いを叶えてもらえる。

美命の願いは『兄、清心の復活』。その為に、彼女は『巨悪』を呼び出す未来を選んだ。

呼び出した巨悪を、自ら討ち滅ぼすという、滑稽にして大迷惑な自作自演。しかし、彼女が縋るものはそれしかなかった。

その為なら、なんだって利用する。仲間であれど、私を慕う者であれど、同じ境遇にある天使であれど……

既に利用し、陥れた天使の事を思い浮かべ、苦しくなる胸に、鈴を捩じ込むように押し付け、姫神美命は笑う。彼女には、手を汚す覚悟はとっくに出来ていた。そして、痛みに耐え、暗闇に身を落とす覚悟も既に出来ている。

目の前に広がる深い闇。意識の混濁。思い浮かべたくもない壮絶な痛み。回避はほぼ不可能な、『薄葉とのキス』の時点で生じる確定事象。しかし、それは同時に、『巨悪の到来』も決定づける必要事項。

大丈夫、死ぬわけじゃない。

彼女はそれだけを希望に、この『絶対』の舞台へ足を踏み入れた。

『試合開始っ！！』

しかし、それが余りにも甘すぎる覚悟であった事を、その瞬間に彼女は悟る。

それは『死』を思わせる光景。

「あはははははははははははははははッ！！！」

その女は、豹変した。目をぎょろりと見開き、その腕を有り得ない規模に膨張させながら、更には、その体から、同じ規模の巨大な腕を無数に生やし、跳躍した。

化け物。

まさにその一言が相応しい、そんな姿。

女は、その巨大な腕を、容赦なく振り下ろした。

「姫巫……」

姫神を庇い、飛び込んだ三人は一瞬で吹き飛ばされた。邪魔だと言わんばかりに、女は三人を薙ぎ払ったのだ。その化け物の目には、既に姫神しか映っていない。

あれ？　これ、殺される？

姫神は即座に理解した。化け物が自分に向ける殺意は本物である。気付いた瞬間、無抵抗に、なるべく無理なく倒されようと考えていた彼女は、反射的に錫杖を構えていた。

「『トコヤミ』ッ！！」

周囲を一気に包み込む、闇。姿を晦ます魔法である。身を隠し、逃れる。それが彼女の目的。未来の見える彼女には、何処にどう動いたら、どんな結果が訪れるのかが見えている。故に、暗闇の世界は彼女にとってなんの脅威でもない。

しかし、未来に広がる暗闇は、彼女に途轍もない恐怖を刻み込む。

逃げ場、ない……！

暗闇の中、何も見えないその場所で、化け物は周囲一帯を叩き潰す超広範囲攻撃を展開する。無数の巨大な拳による、叩き潰し。姫神は、どうやってもそれを回避する未来が見えなかった。

「や、やめて……」

そんな弱々しい命乞いも全て無駄。止まらない化け物は、容赦なくその無数の拳を叩きつけた。

「あっははははははははははははははっ！！」
「レ、レイラ！？　駄目だ！」
レイラ。その化け物少女は、気が狂ったように、拳を暗闇の中に叩きつける。暗闇はやがて晴れて、しかし尚も、その拳をたった一点にレイラは叩きつけ続ける。
「殺しは反則だって言っただろう！？　駄目だ！　殺したら、薄葉君と……」
レイラの耳にその言葉は入っていなかった。暴走。彼女は今、歯止めの効かない正真正銘の化け物なのだ。憎い相手をただただ叩き潰す。それだけの為に、今、彼女は拳を叩きつけている。凄まじい攻撃、それはそれに飲み込まれた姫神の安否すら確認できないほどの勢いで、誰もが唖然とその光景に震えていた。
その壮絶な光景は、会場の人間が思い浮かべもしなかった、意外な人物によって打ち切られる。
「だりゃあああああああああああああッ！！！」

無数の巨大な腕が、勢い良く横方向へと吹き飛ばされる。会場の壁に衝突し、めり込んだ腕。それに引っ張られ、レイラは僅かに表情を歪めた。

無数の化け物の腕は動きを止めた。その腕の群れの中から姿を現したのは、姫神ではなく、赤髪の勇者だった。

「っつぅ……滅茶苦茶するわね……！」

「なあに、あんた？　邪魔しないでもらえるかしら？」

其処に居たのは、女勇者レンダ。僅かにその白銀の鎧にヒビを入れ、額に血を滴らせながら、彼女はぺっと血を吐き捨てた。その姿を見て、レイラは不快そうに顔を更に歪める。

「邪魔ってあんたね……もうとっくに決着は着いてるでしょうがッ！！」

怒鳴るレンダ。その大声に、僅かにレイラが気圧され仰け反る。レンダの後方では、鎖を伸ばしたカテナが、既に姫神とその仲間達を保護していた。とはいえ、レイラの猛攻が始まった後にカテナは反応したので、初撃から数撃の攻撃を姫神は受けていた。その見るも無残な姿に、流石のカテナも顔を歪める。

「おいおい……骨が逝ってるとか、そんなレベルじゃねぇぞ、これ」

「レンダさん！　大丈夫ですか！」

「私は大丈夫だっての！　それよりその子、早く医務室にでも連れてって！　この試合は終了よ！　こら、司会ぃ！　早く終了宣言しなさいッ！」

「終わらせないわよ……まだまだ殴り足りないもの……」

「ちっ……！　やろうってのの……！？」

『わ、わ、わ……！　し、試合終了ですっ！　「プリプラノメノス」

の勝利！　だから引いてくださいっ！』

一触即発、睨み合うレイラとレンダ。しかし、その対立は、意外にも司会のピソの一言で収まった。

「……あーあ。もっと殴りたかったのに。不幸、不幸、不幸だわっ」

レイラは意外なまでに、あっさりと身を引く。まるで止めに入ったレンダなど眼中にないように、その腕を元の細腕へと戻し、レンダに背を向ける。

その背中を鋭く睨み、レンダははぁと溜め息をつく。

「……とんでもない奴ばっかりじゃないの。……ったく、いい加減にして欲しいわ」

「レンダさん！　レンダさんも早く治療を！」

「大丈夫だっての！」

騒めく会場から、レンダは背を向けとっとと退散する。血こそ流せど、大して気にした様子もない彼女は、複雑な想いを抱きながら、鼻を鳴らす。

一気に空気が混沌とするヴォラスカーニバル。それを見下ろす、一人の王は、ぼそりと口を動かした。

「テラスを、生み出す、力……」

ヴォラス王、マラークは憎々しげに会場を睨む。

それは、姫神の見越した『災厄』、それがまさに動き出した瞬間だった。

Ｅｐ５６：　不動王国（後編）（後書き）

三回戦を終えて、大会の裏では思わぬ事態が動き出す。国家規模のその事態は、否応なしに天使達を巻き込んでいく。その中央に巻き込まれるのは……？

次回、「何が正しい選択か」に続く。

ようやく妹天使戦終了、そして三回戦も終わりです。間を挟んで遂に準決勝、終わりがようやく見えてまいりました。

色々と不穏な空気が漂っている予感……？

EP57：　何が正しい選択か（前書き）

本戦から少し脱線。戦いの間の休息？です。

ＥＰ５７：　何が正しい選択か

準決勝へと駒を進めた４チーム。『チームアミーラ』、『チームアミール』、『レンダサークル』、『プリプラノメノス』。多くの波乱と混乱の中、騒めく会場を運営の人間が何とか鎮め、一旦の終わりを見せる三回戦。どの試合も注目に値するレベルのものだったが、やはり最後のプリプラノメノスの試合があまりにも衝撃的過ぎたようだ。

まさに本物の化け物。そして余りにも凄惨な光景に、人々は震え上がった。

しかし、思いの外、事態はすぐに収まる。人々は、あの恐ろしい存在を拒むことはなく、恐怖の声もやがて消え去った。

それは果たして運営側の対処が的確だったからか、それとも運が良かったからか、裏で誰かが動いていたからか。

「此処で無駄に味な真似をされると……私の演説の味が薄くなるでしょうし、ね」

「いいのかよ？　あんな化け物助ける様な真似をしてよぉ。あいつのしたことは下手したら失格だぞ、失格。殺しは禁止のルールで、明らかに殺しに掛かってたんだからよぉ。別にあんたの演説効果が薄れるとは思わないがな」

自らの力、自称『呪術』により、会場中の人間の化け物に対する恐怖や興味を有耶無耶にした千明が、男、不動王に尋ねる。

不動王は、くすくすと笑い、首を横に振った。

「そんな事したら、彼女、キレて暴れ回りますよ？　ここは穏便に……ね？　こっちに厄介事を回されても困りますし。ほら、怖いじゃないですか。まぁ、相手さんも生きてはいたから良かったとしましょう」

「……いや、今まさにその厄介事の処理を俺がしたんだけどな」

「……ハッ！　確かに！」

「……あんたは何処までマジなんだ？」

「いや、割と何時でもマジなんですよ。イツキさんのご指摘受けるまで、苦労してる事にも本気で気付きませんでしたし」

「あんた、意外と馬鹿だな」

「お恥ずかしい……ま、馬鹿な方が人生楽しめますよ。賢いと考えすぎてしまうでしょう？」

「違いねえ。俺らは馬鹿やって、楽して生きて行こうじゃねぇの」

面倒臭がりの苦労人、不動王の、ふとしたヴォラスカーニバルへの助力。それは誰の為でもない、彼自身の、彼の一味の為の行動。

その行動で、ほくそ笑むのは彼らだけではなく、その行動で、煮え立つ者は決して少なくはない。

しかし、それに気付かない程に、不動王という男は浅はかでもない。

「さて、これからどう動くのか……見ものですねぇ？」

「ん？　何の話してんだ？」

「いえいえ。こちらの話ですよ。ご安心を。あなた方、天使の皆様にはご迷惑がいかないように取り計らいますのでね」

「そうかい。なら深くは聞かねえよ。興味も、やる気もないしな」

不動王、自らを呼び寄せた男に、今井千明は信頼を寄せる。そし

て、彼は、その男がその信頼を裏切らない事も知っている。
わざとらしく見せた不敵な笑み、それがこれから起こる厄介事の前触れである事は、千明にも理解できていた。そして、それに巻き込まれる可能性も、既に彼は見越した上で、わざとらしく視線を逸らす。
互いに偽る本心を、二人は言葉にせずとも知っている。それは限りなく同じ性質を持つ二人だからこその必然。それは他人の為に尽くす事を否定する彼らが抱く大きな矛盾。
そんな矛盾を楽しむかのように、彼らは仲良く、無関心に、全力で、無気力に、野望の為に尽力する。

一一一一

運に愛された天使、ルカの内心は穏やかではなかった。彼の中では、レイラの暴走というものは完全に想定外の事態だった。
それに焦りを見せるのは、彼が数手先を読む天才だからという訳ではなく、彼にとって、『望まない結果』は起こり得ないものだったからである。
ルカは極端に運が良い。しかも、この異世界、球界テッラに来てから、彼の運の良さは更に磨きが掛かっている。それこそ、彼にとって不都合と思える出来事は、何一つ起こり得ないと言い切れる程に。
「レイラ。必要な場面までは、僕に任せてって言ったよね？」
「……うるさい」

事態がひとまず落ち着いて、時刻は大分経過した夜。ルカはレイラを連れ出して、今は人目のつかない宿舎の裏口を抜けてすぐの道で彼女と話をしていた。『その場所なら人目につかない』、とルカが思った時点で、其処は誰も通らない、無人の道。二人きりのその場所で、不機嫌そうにそっぽを向くレイラに、ルカは珍しく強い口調で詰め寄った。

「うるさいって……此処で素性がバレたら、レイラの目的も叶わなくなるんだよ!?」

「分かったって言ってるでしょ！　大体、あんたの運があればそれはありえないんでしょ!?」

「僕の話を真面目に聞いてくれ！」

初めて見た、ルカの強い態度に、レイラは彼を跳ね除ける事を僅かに尻ごんだ。今まで、どれだけ好き勝手をしてきても、一切文句を言わなかった双子の兄。それがここまで声を荒らげて彼女に突っかかってきた事はなかったのだ。

何故、ルカは此処まで必死になるのか？　そんな疑問を抱きながら、レイラは珍しく弱気な表情で、ルカの目を真正面から見る。

「わ、悪かったわよ……でも、何事もなかったから良かったじゃない！」

「もう二度と、あんな事しないと誓う？」

ルカの強く迫る勢いに、レイラは目を逸らす。彼女としては、その問いに「うん」とすぐに答えて構わなかった。何故なら、彼女がどうしようもない怒りをぶつける対象は、実際に既に片付けた姫神以外にはなく、目的を達した今、多少の好き勝手を我慢できる状態にあった。しかし、その勢いに気圧されて、レイラは言い淀む。そ

して、口をついたのは、咄嗟の言い訳。

「……だ、だって、あいつ……薄葉にキ、キ、キキキ、キスしてたんだもの……しかも、口同士で！　私だって、指と額でしかしてないのにっ！」

「……それで、あの子をあんな目に合わせたの？」

「許せないじゃないっ！」

駄々をこねる子供のように、レイラは声を荒らげる。

本来なら、此処で、彼女を叱りつけるのが兄なのだろうか。

しかし、ルカの『欠陥』は、その行為を行わせるどころか、彼を内心で微笑ませていた。

「……じゃあ、もう気は済んだ訳だね。もう、二度とあんな目立つ真似はしないと誓える？」

「……うん」

諭すように紡がれるルカの言葉に、少し目を潤ませながら、レイラはこくりと頷いた。ルカはそこでようやく、その顔にも微笑みを浮かべる。

ようやく、『不幸』を嫌だと思えるようになってきたんだね。

ルカはそんな的外れな感慨にふける。不完全な儀式で呼び出された、二人の欠陥天使。狂った妹も勿論、その兄も常人とは違う域に精神を置く、狂った天使なのだ。

狂った兄妹が、ようやくその険悪な雰囲気を和らげようとしたその時、『災厄』は降り掛かった。

「少し、宜しいかな？」

その声は、不意に兄妹に降り掛かった。二人が声の方を振り向けば、其処に居たのは闇に浮かぶ様な白い服を纏った男。スーツの様なデザインの上には、それとは対照的な黒い髭に、黒い髪。異彩な空気を放つ、中年の男は、ルカとレイラが二人とも気付く間もなく、其処に居た。

その事実は、ルカを何よりも驚かせる。

ルカにとって気配がなかった事は、大した問題ではなかった。運が良いルカが、此処には人が来ないと判断したにも関わらず、彼が来た事が大きな問題だったのだ。

「おかしい……！」

「ん？　どうした？　随分と顔色が悪いようだが？」

ルカの額に一筋の汗が伝う。明らかに、今の状況はおかしかった。ルカが決して望んでいない、レイラの暴走というハプニング。そして、ルガが望まない、謎の男の介入。全てが、悪い方向へと転がっている。制御の効かない『強運』というスキル。それに頼りきる事は本来なら間違いなのかもしれない。しかし、それを信頼しきって問題ないほどに、その力は強大なものの筈だった。

何故、ここにきてその力は働かないのか？

「……まあ、早急に話を済ませよう。私は、ヴォラス王の使いの者だ。今日はそこのお嬢さんに用事があって馳せ参じた」

ルカの中で、何かが告げる。

危険……！

そして、その直感は的中する。

「君に、とある嫌疑が掛かっていてね。ご同行を願いたいのだが」
「はぁ？　何を言ってるのかしら？　言い掛かりは止してもらえる？」
「おっと、言い方が悪かったか」
男はその手を静かに伸ばす。
「来い、と言ってる。従わなければ、此処で処分する」
言い終えると同時に、男の手から光が放たれる。それは無詠唱で放たれる魔法。その光線の直撃を受けて、レイラはガクンと仰け反った。
「レイラ！」
「……やってくれるじゃない。最初から殺す気？　ああ、馬鹿に絡まれて……不幸、不幸、不幸だわッ！！」
バキバキと音を立て、レイラの額に空いた穴が塞がっていく。その光景を見て、中年の男は眉間に深くしわを刻み込んだ。
「やはり化け物か……」
男が再び手を翳し、レイラに照準を合わせる。レイラも負けじと、その手にバキバキと鋭い爪を生やし、迎え撃つ。再び間を置かずに男が放つ光を、腕を盾に防ぎつつ、反撃するレイラ。その爪の一閃を、身を逸らし難なく躱す男。
一歩も引かない二人の交戦に、ルカは一歩も動けずに居た。
何かがおかしい。まるでついてない。

こんな想定外の出来事、絶対に有り得ない。ルカは考える。何故、こんな事態に巻き込まれているのか？　この男は何者なのか？　この男の目的は？　少なくとも、ルカとレイラにとって、この男は有益な存在には見えない。

何故？　何故？　何故？　何故？　不可解な要素に、ルカは思考をフル回転させるが、答えは出ずに……

「……成程、やたらと庇っている、『其処』が弱点か」

レイラはぴくりと眉を動かした。頭を撃ち抜かれても、心臓を貫かれても、まるで堪えないレイラ。それは単純に、体の急所にあたる部分を移動させているからに過ぎない。彼女の能力で、ある程度の強化も加えられるものの、損傷しては困る部分を無くすまでには至らないのだ。その『弱点』を、中年の男はほんの僅かな交戦で、見抜いていた。

男の放つ鋭い閃光。ありとあらゆる攻撃をものともしないレイラの体を貫くそれは、恐らくレイラの通常は傷付けられる事もない弱点も壊すだろう。

レイラの危機的状況、それに対して、「まずい」という感情がルカの中に生まれ、既に自身の能力が何故、こんな結果を招くのかという疑問など気にしていられなくなったその時であった。

「そ、そこで何してる！」

突如降りかかる声。それはピタリとレイラと男の動きを止める。男は余計な目撃者が現れた事によって、レイラは聞き覚えのあるその声に気付いて、意識を削がれたのだ。

その声の主を見て、ルカは目を見開き、まさかの事態に思わず声

を漏らした。

「……薄葉、君？」

―――

薄葉は、三回戦の試合が全て終わり、会場が落ち着いて、更にチームでの打ち合わせが終了してからしばらくして、真っ先に医務室へと向かっていた。

目的は、試合で酷い目に合わされていた、姫巫女こと姫神美命の状況確認。一応は知り合った仲、その容態を心配する程度には、薄葉は普通なのであった。

今、彼が歩いているのは、まさにその帰り道。姫神の容態が安定している事を確認でき、ほっと一息ついたところ。

「良かった……だけど、あいつ、やっぱり……そうだよな」

命に別状はなくとも、今も眠る姫神を、そんな状態に追い込んだ相手。薄葉の中には、一人の人物が浮かび上がっていた。

変質する体、狂った様な笑い声、まさに化け物と呼ぶに相応しい天使、その全ての要素が、今は容姿がまるで違う少女の姿と重なった。

薄葉は確信する。『プリプラノメノス』、あのチームに居る少女の正体が、ズィスィで他戦った、彼に恋する天使、レイラであるという事を。

元より、レイラの残した情報で、此処に彼女が居る事は分かっていた。だから大会に出ている事は不自然ではない。

薄葉はその難敵を思い出し、憂鬱な気分に溜め息をつく。

「やっぱり……また、相手しなきゃならんのか……」

自分の力に気付いても、流石にあれと何度も戦いたいと思うほど、薄葉もずれては居ない。出来ればそんな事は避けたい程度には普通なのである。

しかし、そんな彼の意思も無視するように、引き寄せる様な風がその頬を撫でた。

「……ん？」

薄葉が足を止めたのは、明華と会う為に通った、裏口へと通じる通路の前。あまり人気がない筈のその方向から、ひんやりとした空気を感じた薄葉。

「……もしかして、昨日開けっ放しだったか？」

昨日裏口を利用した時、その扉を閉めたかどうか今更不安になる薄葉。コタツを消し忘れたか不安になるあの心境である。

本来なら、宿舎の管理者側が管理はしっかりしているのだが、薄葉は妙に心配になる。戸締りを忘れていた、しかも勝手に裏口を使ったのが分かったら、怒られやしないだろうか？

二日前、枕投げでエキサイトしていた時に、こっ酷く叱りつけてきたおばさんが軽くトラウマになっている薄葉。彼は怒られると凹む程度に普通なのである。

そして、彼は戸締りを確認する為に、其処へと足を運んでしまっ

たのだ。

半開きの扉に手を掛け、その音を聞きつけた薄葉が、裏口を抜けて少し走ったその場所で見たもの。それは、自分の良く知る化け物天使が、謎の男と交戦する様だった。

「そ、そこで何してる！」

その見覚えのない男を、薄葉は変質者と勘違いした。人を助ける程度の力は持っている薄葉、怖い相手とは言え、変質者に襲われている女の子を放って置く程に非情ではない。本来なら心配も要らない相手だとは、薄葉も分かってはいたが、思わず声を掛けてしまったのだ。

驚き、振り向く化け物と変質者。そして、傍らで顔色を悪くする男も驚き口を開く。

「……薄葉、君？」

男は眉根を寄せて、薄葉を睨む。

「……誰だ……！　変質者か……！　どうやって此処に入り込んだ……！」

「お前が言うな！　俺は参加者だよ！」

「嘘をつけ！　お前のような奴など知らん！」

「ひでえ！」

「薄葉っ！」

男と薄葉のやり取りなど意に介せず、今まで化け物モードだった

レイラは、忽ち恋する乙女モードへと転身する。化け物のパーツをバキバキと解除し、目を輝かせながら、隙だらけの背中を男に見せて、薄葉へと駆け寄っていく。

「不幸な私を助けに来てくれたのねっ！　嬉しいわ！」

「え？　あ、お、おう……大丈夫なのか？」

多少、レイラにビビりつつ、薄葉は一応の気遣いの言葉を向ける。その言葉に、屈託のない笑顔で喜ぶレイラ。そんな彼女の背中に、男は迷う事なくその手を翳す。

「レイラ危ない！」

ルカの知らせる危機。

しかし、それに反応したのは、レイラではなく、その直線上に立つ薄葉だった。

「へっ？」

レイラが間の抜けた声をあげたのは、その体が突然傾いたからだった。ンとレイラの腕を引き、その体を後ろへと退ける薄葉。向い来る殺気、それに反応し、無意識下の反撃の為に、ただ邪魔だった人間を退かしただけ。

しかし、レイラには、ルカには、攻撃を仕掛けた男にさえも、その行為は、ただレイラを庇った様にしか見えなかった。

向かい来る閃光、それを足の一振りで霧散させる。その視界に男を捉える事なく、グンと姿勢を低くして、薄葉は首をガクガクと振りながら、一直線に男へと向かう。その一連の反撃動作はほんの一瞬の内に行われ、男は驚愕に目を見開く。

「馬鹿な!?　私の『ブリッツ』をかき消すだと……!　貴様、一体……!」

男はその手を前に翳し、再び手から光を放つ。次は光は線にならず、円を描き壁となる。薄葉が反撃に振り抜く鋭い手刀、それを受け止めた光の壁は、ミシミシと音を立てヒビを入れる。

バリン!

男の向けた殺意相当の反撃、喰らえば命も危うい手刀は、魔法で作られた光の盾を見事に砕いた。喰らえば即死、それを理解した男は、向けた殺意を削ぎ落とし、素早く身を引いた。それにより、薄葉の無意識モードは解除され、はっと正気に戻る。

そんな状況の把握出来ていない薄葉に、男は怒りを顕にして鋭い視線を向ける。

「思い出したぞ……あの奇妙な動きの黒髪天使か……!　邪魔立てする気か……さては、貴様もその化け物の仲間か……!」

「忘れてたのかよ!　失礼だな!」

「既に『血迷っている』とは……早急に、その『災厄』共々始末せねば……!」

『災厄』、その言葉に薄葉はぴくりと眉を動かす。

「……こいつが何かしたのか?」

姫神の予言を思い出した薄葉の問い。それに男はふんと笑って答える。

「さてな。しかし、『化け物を生み出す力を持つ者』は、処分しろとの命令を受けた」
「……どうして？」
「『災厄』を招くから、とだけ言っておこう。そいつを生かして置くことは、決してこの世界の為にはならないのだ」
男は汚いものを見るかのように、レイラを睨んだ。男の勝手な物言いに、薄葉はムッとし反論する。
「あんたがこいつの何を知ってるんだよ？　こいつはなぁ、そりゃあちょっと暴力的だし、怖いし、俺の妹に手出ししようとしたし、俺も怪我させられたし、人を食っちゃったりするけどなぁ……」
其処まで言って、薄葉は気付いた。
俺、こいつのことあんまり知らないよね？　しかも今の所、フォローのしようがねぇ！
レイラに対して、あんまりいい印象がなかった事を今更思い出す薄葉。どうしたものか、と言い淀んでいる薄葉に、男は呆れた顔で視線を刺した。
「言葉など必要ない。何故、そいつを庇う？　そんな醜い化け物に、救う価値などないだろう？」
カチン。
その一言は、悩む薄葉の中の『スイッチ』を入れる。その『スイ

ッチ』が何なのか、薄葉にもその正体は分からない。ただ彼は、感情に任せて声を荒らげた。

「勝手に決めつけんなッ！」

突然の薄葉の切り替わりに、男も、レイラも、ルカも驚きを見せる。そして、声を荒らげた薄葉本人でさえも、その事に驚いているようだった。しかし、薄葉は直ぐ様表情を固め、自らの意思を貫く事を選ぶ。

「人の価値を、お前が勝手に決めるな」

かつて何処かで聞いた覚えのあるその言葉を、薄葉は吐き捨てるように男にぶつけた。言い放ち、ようやく自分が前に出た理由を把握した様に、薄葉は更に強く男を睨む。

明確な敵意。それを受けて、男は鋭い視線を返し、口を開いた。

「私が決めた価値ではない。これは歴史が決めた価値だ。お前は今、ヴォラスという国に、いや、この世界に、喧嘩を売っているんだぞ？」

男は黒い髪を掻きあげる。

「この髪を見れば分かるだろうが……私もかつて『天使』と呼ばれた者だ。今はヴォラス王に仕えている。いいか？　私の行為は、ヴォラス王の、ヴォラスという国家の、世界の意志なのだ。よく考えろ。何が正しい選択か。感情に任せて、私に歯向かっていいと思っているのか？」

それは分かり易い脅し。しかし、それに薄葉が屈する事はなく、

否、屈する事のないように、その後ろから背中を押す大きな手。その男は、何時の間にか其処に居た。

「構わねえよ、薄葉。お前はお前が正しいと思った道を貫き通せ」

「……ダディ、さん？」

「巌……！？」

黒いスーツに夜に怪しく溶け込むサングラス。『ゴッドファーザー』の名に恥じない威圧。元天使、伊達巌。ダディと呼ばれる巨漢が、にやりと笑って薄葉の頭をぽんと叩いた。

「何が正しい選択だぁ？　んなモン、知るかってんだ。正しいと思った選択は、全部正しい選択なんだよ。それが男だ」

「巌……貴様まで血迷ったか！？」

「血迷っちゃいねえよ、治（オサム）」

ダディは笑う。グイと薄葉の腕を引き、その太い腕を肩に掛ける。

「俺ぁ、あの時から、一歩を踏み出して正しいと思った選択を押し通せなかった時から……俺と同じ思いをする奴に、手ぇ貸してやる事しか考えてねぇんでな」

「分かっているのか？　これは、国への、世界への反逆だぞ？　消されたいのか、『あいつら』と同じ様に」

「知らねぇよ。突然そんな事言われてもなぁ？」

「……お前は、私の事を知っていると思ったが？」

挑発的なダディの態度に、男はますます表情を歪めていく。そんな彼に止めを刺すように、もう一つの声が降りかかる。

「私は知らないけど、ね♪　それに、『化け物だから』、それだけ

の理由で神聖なるヴォラスカーニバルから、参加者を引き摺り降ろすのはいただけないんじゃないかしらん？」

闇に浮かぶ白い仮面。ぬっと現れたその女は、男の背後を取り、「くすくす」と笑った。

「ジアミエン！？」

「いよーう、薄葉っち。準決勝進出おめでとさん」

「お前は確かセルセラの……何故、此処に？」

男が尋ねる。ジアミエンは笑う。

「そりゃあ、ウチのファミリーが、喧嘩売られてちゃあ顔も出すでしょうに」

その表情を窺わせぬ白い面の下の視線が、ふと自分を向いた事に、薄葉は気付いた。声にも出さない、顔にも出さない、静かな笑みを、ジアミエンはそっと浮かべて前に踏み出す。男の横をすり抜けて、薄葉の傍ら、ダディとは逆方向に付き、後ろのレイラを指差し宣言する。

「この子達は、私達セルセラコミュニティが正式に保護する。我等が代表リエンと、聖人セルセラの名の元に、『弱き者に救いを』」

『保護』。あらゆる犯罪者でさえも、受け入れ更生させる。あらゆる化け物でさえも、受け入れ飼い慣らす。地道な、長い、膨大な功績の積み重ねにより、セルセラコミュニティに許された特権。殆どの国が、黙って口を噤むしかないその『善行』の行使を、ジアミエンは宣言する。

それに誰よりも驚き、怒るのは、口を噤まない国、ヴォラスの使

いのその男。

「馬鹿な……！　ヴォラスがそれを聞き入れると思ったか！？　これはお前達など信用していない、ヴォラス王の意志だぞ！　それに刃向かうということは……」

「喧嘩でも戦争でも受けて立ってやるよ、この糞野郎」

吐き捨てる様に放たれる、ジアミエンの宣戦布告は、その場に居る全員を唖然とさせた。

「あら？　言ったわよねん？　ウチのファミリーに手ぇ出すつもりなら……引くつもりはないわよ？」

「く……！」

その怖いもの知らずの一言は、男を一歩退かせ、その表情を見る見る内に歪ませていく。そして、男は、遂に身を翻した。

「覚えていろ……！　ただでは済まさんぞ……！」

男はその手に光を点し、一瞬の点滅の後に姿を消す。それを見届け、ダディはサングラスを外しながら、薄葉を挟んで白い面の女を見た。

「……大した口上じゃねぇか。いいのかよ？　お前一人の判断で、コミュニティ程にデカい組織を、国家一つと敵対させちまって」

「……あはは。いいわけないでしょうに。あー、やっちゃったわ。リエン様に怒られるとかいうレベルじゃないわ、コレ」

「ちょ、大丈夫なのか……？」

軽く顔色を悪くしつつ、薄葉はジアミエンの方を窺う。そんな彼

の背中をバシンと叩いく二つの手。ダディとジアミエンは、くくっと笑い声を漏らし、首を振った。

「ドギマギしてんじゃねぇよ。筋、通したんだろ？　気にすんな」
「気にすることないわよん。セルセラも、リエン様も、きっとこうする。『全てに救済を』、ってね♪　台無しよん、折角格好付けたのに」
「い、いや、でも……戦争って」
「大丈夫だって。相手さんもそう簡単には動けないから、ノコノコと引き下がったんだから」

ジアミエンは投げやりに言い放つ。それに不安を覚える薄葉だったが、ジアミエンは気にせず続ける。

「正しいと思った事をやればいいのよ。結構じゃないの人助け。コミュニティの人間は誰一人、薄葉っちの事を非難しないわ」
「ガキの内は正しいと思った事を貫きな。それを支えてやんのが、俺達大人の仕事だ」
「ガキって……」
「十分ガキさ。いいんだよ。……ほら、俺らの事はもういいからよ」

ダディが煙草に火を点けて、にやりと笑った。二人の力強い言葉に、知らず知らず勇気づけられ、薄葉はダディの言葉にはしないメッセージを汲み取り、後ろを振り向き、ぽかんとしているレイラを見た。

「だ、大丈夫か？　何か、服とか焦げてるけど」

レイラはぽかんと口を開いて立ち尽くす。その見慣れない表情に、ルカも、薄葉も頭の上に疑問符を浮かべた。

「……うん。大丈夫。ありがと」
「……礼ならダディさんとジアミエンに言ってくれ。俺は何も出来なかったし」

当然、無意識に反撃した事を覚えていない薄葉は、実はレイラを守った事も知らずに気まずそうに目を逸らした。対するレイラは、ぼーっと薄葉の顔を見つめて、こくりと頷く。そして、それっきり、お礼の言葉も発せずに、ぽかんと立っていた。

しばらく言葉を発せず、黙りこくるレイラ。なんの言葉も交わされない、気まずい空気に耐えかねて、薄葉はしばらく経って、思いつくまま口を開く。

「……えっと、あ、そうだ！　あ、あの、お前さ、流石にあの試合はやりすぎだぞ？　今は眠ってるけど、姫神……あ、お前が戦ったあいつに、後でちゃんと謝っといた方がいいぞ！」
「……で、でも……あいつ……」

レイラはその言葉にようやく反応したが、薄葉の目を見て、言葉を止め、悔しそうに曲げたその口を、何故かぎゅっと結んで俯いた。

「……うん」
「じゃ、じゃあ……これからどうするか……」
「宿舎に戻って大丈夫よん。裏から手を打っとくし、大会中は本来なら参加者には手出しはできない筈だから」

ジアミエンの言葉を受け、狙われているレイラの処置を理解した薄葉は、こくりと頷き宿舎に向けて歩き出す。

「ほ、ほら、とっとと戻った方がいいぞ」

「……う、うん」

レイラはとてとてと、薄葉の横をすり抜けて駆けていく。それを不思議そうに見送る薄葉の背後から、ずっと黙って、事態を見ていたルカの声が掛けられる。

「薄葉君。申し訳ないんだけれど、少し、付き合ってもらっていいかな？　君と、話がしたいんだ」

「……別にいいけど」

余り怖いイメージのない、穏やかそうな相手の言葉に、薄葉は余り迷わずに答えた。ルカはにこりと微笑むと、ダディとジアミエンの前に立ち、深々と頭を下げた。

「ありがとうございました。妹を、守っていただいて……」

「礼は薄葉に言ってやんな」

「そうそう。私は薄葉っちの手助けしただけだしね」

ルカは謙遜する二人に、もう一度頭を下げると、「行こう」と一言薄葉に告げて、宿舎とは逆の方向へと歩いていく。

宿舎に戻ったレイラ、宿舎から離れて話をしに行った薄葉とルカ。取り残された二人の大人は、顔を見合わせて、くくっと笑った。

「お前、随分と度胸あるじゃねぇか」

「お互い様ですよ。よくもまぁ、『昔の仲間』に喧嘩を売りましたねぇ」

「ああ、あんな後悔、後輩にはさせたくねぇからな」

ダディは昔を思い返し、煙草を蒸す。

「背中を押して、崖から突き落としてやるのが、俺の役目だ」
「が、崖から？」

ダディはフンと鼻を鳴らす。

「一度選んだ道は走り抜けるしかねぇんだよ。正しいと思った事は貫き通すのが男だ。引き返せたら、意味ねぇだろ？」
「成程」

ジアミエンも「くくっ」と笑い、すっと歩き出す。

「それじゃあ、大人な私達は、ゆっくり、じっくり男の選択とやらを見守りましょうかねぇ？」
「女のクセに、分かってんじゃねぇか」

ダディは宿舎の方向へ、ジアミエンは宿舎の逆方向へ、歩みを進めて離れていく。

薄葉の選択で、揺れ動く夜はまだまだ終わらない。

Ｅｐ５７：　何が正しい選択か（後書き）

レイラを庇う、その選択を決めた薄葉。そんな彼に、ルカが語る狂った兄妹の狂った話。
準決勝を前に、戦いに想いを馳せ、また違った想いに揺れ動き、それぞれの夜は更けていく。

次回、「休息の準決勝前夜」に続く。

薄葉、ようやく登場です。迷いつつも決めた、レイラを助ける選択は、果たして正しいのか？　といった所でまたまた決戦を先送りにして次回。

■補足コーナー■

ふと飛び出す、割とどうでもいい補足。実は明かしていない裏設定をちょこっと公開。気紛れで、今後も……？

・とらちゃんの秘密

ミュゲの操る自立魔具「とらちゃん」。実はその形状のモデルは、二章Ｅｐ１９の作中アニメ「ぶっとべ！　どらまるくん！」のどらまるくん。丸い体に生える長い手足という奇怪な形状。「とらちゃん」というネーミングも、「どらまるくん」から来ています。赤ん坊の時、ミュゲはふと見たそれをうっすら記憶し、それを再現してしまったのです。しかし、うろ覚えなので若干変なデザインなのか、周りの人は誰も気付いていないという……もしくは、気付いてもスルーしている？　少なくとも、早くにそれに気付いていたら、ミュゲの正体は存外早く分かっていたかも？

Ｅｐ５８：　休息の準決勝前夜（前書き）

準決勝にむけて、それぞれの夜。

ＥＰ５８：　休息の準決勝前夜

薄葉との話を終え、ひとまずレイラの様子を伺いに向かうルカ。
落ち着きのないレイラは、前日からあちこちをフラフラと歩き回っていたようで、時には想像だにしない場所に出没するようで、探し当てるのは至難の業と言える状態だったが、強運を持つルカならば、それに遭遇する事など容易い。
広間の机の下で、膝を抱えて縮こまっているレイラを見つけたルカは、その顔を覗き込んだ。

「何してるの？」

ルカはてっきり、レイラはいじけているのだと思っていた。
薄葉に、叩きのめした憎い相手への謝罪を要求され、納得いかないような表情を一瞬だけ見せていたレイラを、ルカは見逃さない。
その後、強情な彼女が何故、気に入らない言葉に頷いたのかは分からなかったが。
そう。そのたった一つの疑問は、思いの外大きなものだったようだ。レイラが見せたのは、予想だにしなかった表情。

「……レイラ？」

普段は強気な目付きは何故か情けなく垂れ下がり、落ち込んでいる様に見えた。しかしそれでいて、口元は情けなく緩み、まるで喜んでいる様にも見えた。染めた頬を、ごしごしと抱えた膝に擦りつけ、何かに悩む様にしきりに唸る双子の妹の姿に、ルカは疑問符を

浮かべた。

「……ルカ？」
「どうしたの？」
「どうしたのって？」
「様子が変だよ？」
「知ってるわ」

話がいまひとつ噛み合わない。今までも噛み合った試しなどないが、更におかしいレイラの様子。それはレイラが一番分かっている事で、まるでむず痒い感覚から逃れたいかのように、レイラは自らその奇妙な感覚を言葉にする。

「おかしいの。私、薄葉に庇って貰って、不幸じゃない筈なのに、とっても嬉しいの」
「……う、うん？」

矛盾しているレイラの言葉に、ルカは笑顔で首を傾げた。不幸ジャンキー、レイラにとって、不幸は蜜。毒された様にそれをひたすら求める彼女が思い悩むのは、初めて抱く不安と疑問。

「それに、薄葉が私を見る目がおかしいの。私、突然殺されかけて、化け物呼ばわりされて、とっても可哀想よね？　なのに、薄葉は、全然私の事を可哀想って見てくれないの」

レイラは首を振る。否定するように。

「有り得ないわ。有り得ない。どうして、人が可哀想じゃない私を見てくれるの？　分からない。分からないわ。なのに、どうしようもなく嬉しいの。嬉しいなんて……不幸だわ……不幸、不幸、不幸、

不幸……そう、おかしい。絶対に、おかしい」

自らに言い聞かせる様に、自らの異常を確かめる様に、レイラの言葉は紡がれる。それにルカは言葉をはさむ事なく静かにレイラを見つめる。

「謝りたくないのに……うんって言っちゃった。おかしい。殺し合いたい程に大好きな、私を不幸にしてくれる薄葉に、嫌われるチャンスだったのに。愛する人に拒まれる、最高の不幸を逃がしちゃった……不幸、不幸、不幸……なのに……」

ぽつり、とレイラが最後に漏らした言葉。それはルカに問い掛ける様で、自分自身に問い掛ける様な、純粋な疑問。その二人には、答えを理解できない、難題。

「それがどうしようもなく怖いのは何故？　今のこの失敗が、嬉しいと思ってしまうのは何故？」

ルカはその答えを知らない。しかし、不幸に怯える仕草を見せ始めた妹に、満足する。

「その答えを見つけよう。僕も精一杯手伝うから、ね？」

ルカがレイラに向ける優しい笑顔。いつもと変わらない筈のその笑顔は、何処か暗く影が掛かっていた。それは善意の笑顔ではなく、ルカが初めて見せる打算的な笑顔。

薄葉との接触で、変わり始めたのはレイラだけではなく、その兄、ルカも同様だった。彼は初めて、自ら目的をもった。

レイラにそっと手を差し伸べて、ルカは確定した未来を口にする。

「さあ、明日、全てを解き明かそう」

レイラは、自らの疑問に真剣に向き合ってくれる双子の兄に、初めて縋るような視線を向けた。しかし、ルカは何も『レイラの疑問』を解き明かすとは言っていない。

彼は、彼なりの『答え』を求めて、明日を待つ。

一一一一

ルカの独白を聞いた薄葉は、珍しく難しい表情を浮かべて、宿舎に踏み入った。笑顔で語られた、彼ら、月島兄妹の過去と欠陥。それを知った今、彼の中では初めて湧き上がる感情があった。

凡夫、普通、無能、自分をそう卑下していた薄葉が、到底思い描くことのなかった姿。誰かを救う『救世主』。

力に気付き、縋られる事を知り、薄葉は、その二人の為に、今まさにそれを具現する決意を固める。

「薄葉さん、どうしたんですか？　険しい表情で」

自分の部屋の前まで来て、鍵をポケットから取り出そうとしたその時、ふと聞こえた声に薄葉は視線を移す。

そこに居たのは救世。考え事をしていたからか、薄葉は隣の部屋の前に、ドアに寄りかかる様に立つその姿に今の今まで気付かなかった。

「いえ、なんでも。救世さんこそ、そんな所で何してるんですか？」

「部屋から追い出されてしまったんですよ」
「部屋から？　どうして？」
「立て込んでるんです。自分達の部屋でやればいいのにとは思いますけど、野暮なことを言って邪魔をする程に私も空気は読めなくないですし」

何やら事情がある様子で、救世は困ったように苦笑した。薄葉はそれに触れる事なく、さりげなく尋ねる。

「じゃあ、時間潰します？　そこにずっと立ってるのも疲れるんじゃないですか？」
「あ、いいですね。薄葉さんが珍しく深刻な表情をしているんですし、お話、聞かせて貰いましょうかね」
「え？　いや、レンダあたりにトランプでも借りてこようかなと思ったんですけど」
「え？　二人きりでトランプですか？　……いえいえ、せっかくですし、お話しましょうよ。嫌ですか？」

子首を傾げて尋ねる救世。相変わらず薄葉はその男性らしからぬ可憐さに慣れない。時折見せる仕草が女性そのものなので、それを見るたびに薄葉はどきりとして、過去の黒歴史を思い出すのだ。

「い、嫌じゃないです。じゃあ、俺の部屋で話します？」
「はい。ではお邪魔します」

女の子を部屋に連れ込むような気まずさを感じながらも、薄葉は目の前のこの人は男だと自分に言い聞かせ、部屋へと招き入れる。先に部屋に通した時、すれ違いざまに、ふわりとシャンプーのいい香りがして、再び揺らぎかけた心を沈めつつ、薄葉は後に続き部屋へと入る。

そして、彼は一切合切を話す事となる。彼が向かい合うべき、兄妹のことを。

―――

少し時間を遡り……

救世の部屋に押し掛けたのは二人の女。ぽかんとしながら、その様子を見ていた救世に、入ってきた一人、妹の済は部屋を見回し尋ねる。

「救世。あのおっさんを見なかったか？」

「お、おっさん？　ダディさんの事ですか？　い、いや、それより勝手に入ってこないで下さいよ！」

慌てて、ベッドから起き上がり、服装を整える救世。完全に落ち着いていたようで、服装も髪も僅かながら乱れている。その様子を見て、もう一人の来訪者、ヨシエはキランと目を光らせて、すすっとその傍に駆け寄った。

「あらあら。髪が乱れてるわよ？　ほらほら、お姉さんが整えてあげますから」

「え？　い、いえ、結構です。自分で直せますので」

「あらあらまあまあ、遠慮なんかしちゃって！　大丈夫よ、大丈夫。ほらほら！」

ガッと救世を捕まえて、何処からか取り出した櫛を片手に、ゴムをくわえて、内なる何かに火をつけるヨシエ。それを見て、済が思わず口を挟む。

「そんな事をしている場合じゃないだろう！　それに、お姉さんなんて年じゃ……」

「……済ちゃん」

「ご、ごめんなさい」

ヨシエの鬼の形相に、済、素直な謝罪。その途端に忽ち表情を柔和な笑顔に作り替えるヨシエ。笑顔で救世の長い髪を弄り始めたヨシエに、あわあわと慌てながら、救世は済に問いかける。

「いきなりなんなんですか！　それにダディさんになんの用事があるんです！」

「あの男、人を呼び出しておいて部屋にいやがらないのよ。……何がダディよ、伊達だからって。恥ずかしくないのかしら」

怨嗟の言葉を吐き出すのは、笑顔を再び鬼の形相へと作り替える般若ヨシエ。あの不仲兄妹の事を思い出し、救世はごくりと唾を呑む。結局救世は、髪を弄られながら、抵抗したら何をされることやらと、大人しくされるがままにする選択肢を取ったのだった。

ヨシエとダディの伊達兄妹。不仲な二人は待ち合わせをしていたようだ。しかし、ダディは部屋に居なかったという。そこで、行きそうな場所の候補として、救世の部屋を訪れた済とヨシエ。しかし、その時既に、ヨシエの興味はダディからは遠ざかり、気になっていた可愛らしい女の子……でなく、男の子に傾いていた。

その綺麗な黒髪を弄り、色々な髪型を試しながら、ヨシエはにこにこ鼻歌混じりにぼそりと言葉を漏らす。

「こんな可愛い娘達と、ずっと楽しく過ごせたらいいのに」
「私は娘じゃないです！　男です！」
「あらあら、ムキになって……済ちゃんも可愛いけど、救世ちゃんも可愛いわねぇ」

いつの間にやら二つ結いにされた髪を手で弄りながら、本当に幸せそうに笑うヨシエを横目で見て、救世はふと疑問を口に漏らした。

「ヨシエさんとダディさんは、どうしてそんなに仲が悪いのですか？」

誰もが気まずくて、機会がなくて、聞けなかったその問い。それを見ていた済は一瞬ひやりとしたようだったが、ヨシエは思いの外穏やかに、救世の髪を弄りながら答える。

「仲が悪く見える？　本当はそうでもないんだけど」
「え？　そうなんですか？」

意外な答えに救世も、済も驚きを見せる。

「少なくとも私は、兄を、巌を嫌ってなんかいないわよ。むしろ感謝しているくらい」

『感謝』、突然出てきたその言葉の意味は、救世と済に理解させる為のものではなかったようで、ヨシエは溜まった感情を吐き出すように呟いた。

「でも、割り切れないの。こんな年になっても……私は子供のままなのかもしれないわね」

かつて天使だった、仲の悪い二人の兄妹。その二人の関係には、何か事情があるようで。その過去を知らない救世と済には、何も言える事はなかったものの、二人の関係も修復できるのではないか、と淡い期待を抱いた。

そして、空気を読んでか読まずか、僅かに開いたままの扉を押して、その男は入口を潜るように通って顔を出す。

「お」
「あ」

顔を出したダディと、ヨシエの目が合う。一瞬固まる二人だったが、ピンと来た済の咄嗟の反応が、二人の意識をこの場に引き戻す。

「さあ、救世。私達は表に出よう」
「……そうですね。では、失礼しますね」
「え？　ちょ、ちょっと待って！」
「ほら、ダディさん。中に入って！」
「お、おい！　なんだなんだ！？」

慌てる二人の大人を部屋に押し込み、素早い手際で部屋を出る救世と済。最後に顔を覗かせて、にっと笑ってひらひらと手を振る。

「それでは、ごゆっくり～」

バタン。

扉が閉まる。閉じた扉をしばらく見つめ、ダディとヨシエはぽかんと固まる。長い硬直状態から先に解放されたのはダディ。深く溜息を吐き、頭を掻きながら、扉に手を掛けようとする。

しかし、それを制するヨシエの一声。

「私に何か用があったんじゃないのかしら？」

重々しい呼び止めに、ダディはヨシエを呼び出したことをようやく思い出し、僅かに開いた救世の部屋の扉から、聞き覚えのある声が聞こえたからと顔を覗かせたことを後悔する。

会う約束したものの、どうせなら覚悟を決めてから来たかった。そんな小心者のような思いに駆られながら、ダディは諦めヨシエの方を振り向いた。

「……ああ、そうだよ。文句あっか？」

「あァ？」

「あァん？」

睨み合い静止する二人。しかし、今回は意外にもすぐに膠着は解ける。

「……なぁんて。やめましょう。せっかく済ちゃんと救世ちゃんが気を遣ってくれたんだもの」

「あ？　お、おう……」

妹、ヨシエの大人な対応に、ダディは思わず静かに頷く。そして、じっとダディの動きを待つヨシエに屈して、静かにポケットに忍ばせたそれを取り出した。

「これをあのイツキってやつから受け取ったんだがよ……お揃いで悪いが、ほれ」

それは赤い線の入った指輪。ダディの指にはめられたものと全く同じ指輪が、その大きな掌の上には乗っていた。

済としては、これをきっかけにその関係を改善して欲しかった所だったが、其処は意外な部分でヘタレなダディ。しっかりと済の助力であることを宣言してしまう。
そんな掌の指輪をひょいとつまみ上げ、ヨシエはくすりと笑った。

「済ちゃんったら、こんな事までしてくれるのねぇ。もう、本当に可愛いわ」

ヨシエは迷わず指輪をはめる。そして、うっとりとそれを見つめて、おかしそうにくすくすと笑う。
そんなヨシエをじっと見つめ、どこかビクビクとしていたダディは、ぐっと意を決し、ずっと言えなかったその言葉をヨシエに向ける。

「……すまなかった」

謝罪。ヨシエはそれに視線も向けず、小さな声で返事を返す。

「……どうして、謝るのかしら？」

ダディがずっと抱いていた、ヨシエに対する引け目。それをダディは三十年の時を超えて、今になってようやく切り出した。今こそが、最大の転機であると信じて。

「あの時、俺は……殺される『あいつら』を、助けに行こうとしたお前を止めた。それはお前の身を案じて……なんて、俺ぁ男らしくもねえ言い訳を捏ねくり回しながら、ずっとあの時の選択を、正当化しようとしてきた」

ヨシエの視線がダディへと向く。思い出したくもない、元天使の

伊達兄妹の、最大にして最悪の、深く根付く忌まわしき過去。
二人の行く末を決めてしまった『あの日』の選択を、ダディはずっと悔やんでいた。

「でも、違う。俺はあの時、ビビってたんだ。お前と一緒に、俺がもしも、飛び出して行けば……二人は救えたかもしれねぇ。なのに、俺は引いた。……俺は、間違ったんだ」

ヨシエは若かりしあの日、ダディに、兄の巌に腕を掴まれた感覚を覚えている。感情に任せて飛び出そうとした彼女を、巌は静かに引き止めた。叫び、振り切ろうとするその腕を、ぐっと力強く掴み、ただ黙っていた巌。泣きながら、『彼ら』の行く末を見届け、ようやく膝から崩れ落ちたヨシエの腕を強く引き、無理矢理立たせてその手を引きながら、その事実からヨシエを遠ざけるように巌は歩いた。

その苦しい後ろ姿を、目を腫らしながら見つめたヨシエは、ダディの後悔を払いのけるに声を出す。

「間違ってなんか居なかったわ」

ヨシエの言葉に、ダディは僅かに揺らめく。ヨシエは穏やかに、しかし目は合わせずに呟くように言葉を漏らす。

「……過ぎた事だもの。それに、あの時、二人で飛び出していっても……私達は絶対に悔やんでいたわ。確かに私達は、二人揃って『あの二人』に恋していたけれど……みんなと友達だったもの。勝っても、負けても、私達は後悔した筈よ」

友を守る為に友と戦うか、友と戦わない為に友を見捨てるか、思

えばそれは究極の選択。結果、二人が選んだのは後者。自分達の身も守る、堅い選択肢。

しかし、ヨシエはその選択を強いたダディを恨んではいなかった。むしろ、抱いていたのは感謝の念。

「でも、生きてる。後悔はしたけれど、兄さんが手を引いてくれたから、私は今も生きて、後悔して、あの日を取り戻せる希望を抱いて生きてる」

ヨシエは心に決めていた。

あの日のあれを誤ちとは呼ばない。しかし、もしもあの日の苦しみを、自分達の後に続く者達が背負う宿命を持っているのならば……

「……私は、あの日を、可愛い後輩達を助ける事で、取り戻したいの。無力な自分を呪わずに、省みて、同じ苦しみを繰り返させないように」

それが、彼女が今日まで、静かに、アミールに仕えながら生きてきた理由。自分と同じ苦しみを、可愛い娘達に味あわせない為に、後へと繋ぐたった一つの願い。

「あの子達、本当にいい子なのよ。だから、壁にぶつかるかもしれないあの子達を、私は絶対に助けてあげたい」

ヨシエの告白に、ダディはただただ唖然としていた。

そして、しばらくの驚愕から解き放たれたダディは、思わず吹き出しそうになる。

なんだよ。

「兄妹揃って、考える事は同じってか」
「……え？」

ヨシエもきょとんとダディの意外な言葉に目を見開く。

「……くくっ！」
「……え？　ほ、本当に？」
「おう。ついさっき、後輩の背中を押してきた所だよ」
「え？　え？」

ダディはにやりと笑って、ヨシエにぐいっと手を差しのべる。

「一丁、『あいつら』と、ヴォラスってぇ国と、『喧嘩』するつもりはねぇか？」

『喧嘩』。ダディが敢えてその言葉を選んだのは、かつて自分達が選べなかった選択肢を選びとる強い決意の顕れ。
それを妹、ヨシエは理解し、迷うことなく手を伸ばす。

「……あらあら、何を今更。もしも、私の可愛い娘達を泣かせるのなら……最初（ハナ）からそのつもりよ？」
「なら、やるしかねぇかもなぁ？」

三十年もの間、すれ違い続けてきた兄妹。意外な事に、ずっと繋がっていた兄妹は、ふたつの指輪で結びつき、そして静かに闘志を燃やす。

訪れつつある災厄を、強く見据えて。

伊達兄妹の接触、それとほぼ同じ時刻。
そこには白い仮面のその女。その前には二人の男女。女は大きな帽子を深く被り、正体を隠すように。男も上着を多く纏い、隠れるようにそこに居た。
敷地内に生える大樹の下、秘密の会合に訪れた二人に、白い仮面の女、ジアミエンは堂々と、その頼みを投げかけた。

「それじゃあ、準決勝……二人ともしっかり負けて貰えるかしらん？　……ねえ、シェーヌ、カテナ？」

一人、『プリプラノメノス』に潜り込んだ、元オラクル所属の召喚術士、シェーヌ。一人、『レンダサークル』に潜む、謎の鎖使い、カテナ。
二人に肩にぐっと腕をまわし、ジアミエンは「にやり」と不敵に微笑んだ。

「それにしても驚いたわよ。元より、あの邪魔な女を妨害するスパイとして送り込んだカテナはともかく……シェーヌ、あなたまできっちりと邪魔者の懐に潜り込んでいたなんて！」
「偶然ですよ～～～～……」

オラクルの技術開発協力のため、並びに技術を盗み出す為に、長期に渡って、セルセラコミュニティが密かに送り込んだ刺客、シェーヌ。そして、レンダサークルという、セルセラコミュニティの動向を嗅ぎ回る邪魔者を探る為に送り込まれたカテナ。

二人はセルセラコミュニティの、影の仕事を引き受ける者の一部。スパイ活動に取り組む者達。

「ま、結果オーライ！　これで、セルセラが押し出す看板、伝承の天使セットの素晴らしい宣伝は完了するって訳よん♪　明日が、楽しみじゃなあい？」

シェーヌ属する『プリプラノメノス』。カテナ属する『レンダサークル』。その二つのチームが、それぞれバラけて試合を行う事になるのは、既に決定事項。大会の裏で根回しをしていたジアミエンの計画通りとなる。

正確には、『セルセラ抱える天使達が、決勝舞台に辿り着く』事が計画の目的。兄妹同士の決勝戦の実現が、最大の目的なのである。

そして、準決勝に残る二つのチームにも仕込みが終わっている。これで、ジアエミンの描いたシナリオは完遂されるかに思われた。

しかし、その計画に陰りが見える。

「断る」

ぴしゃりと言い放ったのはカテナ。ジアミエンは、すっと二人から離れて、首を傾げた。

「どうしたの？　カテナ。急に奇妙な事を言い出しちゃって」

「わざと負けるなんて真似するかって言ってんだよ、糞が」

「……おやおやおやぁ？　どういうつもりかしら、カテナぁ？」

ジアミエンの声が低くなる。黒い感情を煮え立たせるジアミエンに、カテナは屈する事なく追い打ちをかける。

「くだらねえ茶番には付き合わねぇよ。俺は、あいつと優勝を取りに行く」
「……裏切るの？　あの女に影響されちゃったりした？」
「ああ、そうだよ。悪いが俺は、あいつに惚れちまったんでな」

あいつ、スパイ活動の対象だった筈の女勇者、レンダ。カテナは堂々と、彼女に対する思いを打ち明ける。ジアミエンは「ふふん」とその思いを鼻で笑い飛ばし、仮面の視線を隣のシェーヌに向けて、投げかける

「ああ、お熱いわねん……シェーヌ、ねぇ、どう思うかしら？」
「さあ？　私は知らないです～～。私は嫌々付き合わされてるだけですし～～別に構わないんですけど～～？」

他人に興味のないシェーヌにとって、レイラとルカには、脅されて付き合っているようなもの。負けに貢献することは、彼女にとってはなんの問題でもない。
そう、そうしてジアミエンに、その背後に潜む者に、素直に従う事は、以前のシェーヌにとっては簡単な事だった。
しかし、思わぬ声が響いて、彼女の心は大きく揺れる。

「シェーヌ……本当に、そんなことするの？」

その幼い声に、びくりとシェーヌは体を震わせる。聞き覚えのある声の主は、その大樹の影からひょっこりと姿を現した。

「……ミュゲ、ちゃん？　ど、どうしてここに？」
「眠くないから、遊びに出てきたの。そしたら、シェーヌが、ジアミエンと、何か話してるから」

ぎゅっと胸元に、丸いボールを抱き締めて、ミュゲは悲しげな目をシェーヌに向けていた。

シェーヌはまず、大会参加にあたって行なった変装が見抜かれている事に驚く。本当は喋りや声色がそのままなのでバレバレなのだが。

そして、一番聞かれたくない相手に、自分が手を染めようとしている暗い契約を知られた事に、焦りを感じた。

シェーヌは小さいものが、可愛いものが好きである。人間に興味のない彼女も、子供は大好き。特に、僅かな間だが、知り合い、懐いてきたミュゲに対しては、特別な感情を抱いていた。

そんな彼女に、自分の汚い部分を見せたという事は、想像以上に彼女の動揺を誘った。

「ち、違うの！　ミュゲちゃん！　私はジョークが好きなだけで、そんな事絶対にしないですよ～～！」

「……シェーヌ、あなたも裏切るの？」

慌てふためくシェーヌ。それに脅迫じみた問いを投げかけるジアミエン。

しかし、その脅迫も、人間に興味のないシェーヌには無意味だった。

「ええ、裏切りますともっ！　私は真剣に戦うシェーヌさんっ！」

どんと胸を叩いてふんぞり返るシェーヌ。それを見て、カテナが呆れたといった表情で首を振った。

「相変わらずだな、シェーヌ。訳分かんねぇ」

「そっちこそ、随分と痛いんじゃないんですか～～？　カテナ」

互いに小馬鹿にし合うように、二人は挑発的な視線を交わす。そんな二人に、ジアミエンは最後の警告を送った。

「本当に、裏切るのかしらん？　シェーヌ『お嬢様』、カテナ『坊っちゃん』、あなた方の『実の母親』、我らが総帥……リエン様を！」

カテナとシェーヌは、言い放つ。決別の一言を。

「「知るかっての！！」」

カテナが中指を立てて、笑う。

「糞ババアに言っとけ！　『てめぇのやり方が気に食わねぇ』、ってな！」

シェーヌがすっとミュゲを抱き寄せ、恍惚とした表情で笑う。

「私はミュゲちゃんの喜ぶ事をするだけですから～～♪」

ジアミエンは明らかにわなわなと震えていた。ぐっと拳を握り、堂々と裏切りを宣言する二人の、上司の子供達に、怨嗟の言葉を紡ぎ出す。

「……リエン様にはきっちり伝えておくからな。あーあ、リエン様も、アリスィダもがっかりだろうよ。素晴らしき『弱き者を救う世界』の完成を前に……馬鹿な脱落者が縁者から出るなんて、なぁ？　……命を張る覚悟は出来てるかしらん？」

「ばーか！　ばーか！　帰れ！　帰れ！」
「べろべろべ～～！　知りませえ～～ん♪」
「こいつら……！」

子供のようなカテナとシェーヌの挑発に、更に震えを大きくして、ジアミエンは背を向ける。これ以上、余計な言葉は発せずに、明らかな敵意を剥き出しにしながらその場から去っていく。
そんな彼女の背中を見つめ、意外な事に、その少女は思わぬ言葉を投げかける。

「ジアミエンは、どうして、嘘をつくの？」

無邪気な少女、ミュゲの無邪気な、純粋な質問。その意味を理解できないシェーヌとカテナは、ミュゲとジアミエンに交互に視線を送って、不思議そうに口を曲げた。
果たしてミュゲは、ジアミエンのどんな嘘を見抜いたのか？
その答えを知ってか、知らずか、ジアミエンは振り向かずに一言だけ残していく。

「『弱者の為』よ、ミュゲちゃん」

白い仮面の奥底に、不気味な感情を隠しながら、暗躍する女は闇に姿を消す。シェーヌも、カテナも、ミュゲも、この場で見たことには口を紡ぐ事になる。
それは、後ろめたさからか、何かを想っての事なのか、それは定かではないが、この夜に行われたひとつの契約は、決裂という形で終わりを迎える事になる。

一一一一

時は進み……

薄葉から話を聞いた救世は、神妙な顔つきで、その全てを理解し、何をすべきかの答えを見出した。

「……きっと、彼女、レイラさんと戦えるのは、薄葉さんだけでしょう。いえ、それ以外で、あってはならない」

「……でも、本当に俺なんかで、大丈夫なんでしょうか？」

決意を固めて、その戦いに臨むつもりでも、やはり、自信が持てない。そんな薄葉に、救世は優しく微笑みかける。

「大丈夫。だって、薄葉さんは、私も救ってくれたじゃないですか」

「救世さんを？　俺が？」

ノトスでの事件。薄葉はその時の記憶がいまいち残っていない。無意識で、戦い、救世を抑え、結果的に救いを齎した事など知る由もない。

それが、余計に薄葉の、『俺』と、無意識に戦う『知らない俺』の溝を深めていく。

違う。救世さんを救ったのは、『知らない俺』。『俺』ではない。

そんな言葉を吐きかけて、薄葉は口をぎゅっと結ぶ。

決めただろうが……少しでも、『知らない俺』に近付くと。明華

にも、他の皆にも失望されない、強い俺に。

決意。自分の行く道を占う為に、薄葉は、彼女達を救うための戦いを決意する。

「私も、できる限りのサポートはします。でも、邪魔はしません」
「ありがとうございます……救世さん」
「いえ。むしろ、ごめんなさい。きっと、それは厳しい戦いになるはずです。薄葉さんにそれを押し付けてしまう、情けない私が、悔しいですよ」
「そんなことないですって！」

薄葉の慌てた否定に、くすりと笑って救世は椅子から立ち上がる。

「……では、これ以上お邪魔しても仕方がないですね。今日はゆっくり休んで下さい」

そして、とん、と薄葉の額に優しく指を添え、ぽっと指先に光を灯す。それと同時に薄葉の中に柔らかい温かさが流れ込み、体の緊張が次第に解れていく。

「餞別、です。明日元気になれるおまじない。これくらいしか私にはできませんけど……頑張りましょう」
「……ありがとうございます」

改めて人に話し、薄葉は自分の中で決意が固まっていくのを感じていた。

勝負は明日……

様々な思惑が絡み合い、夜は更けていく。

決戦の時は近い。

ＥＰ５８：　休息の準決勝前夜（後書き）

思惑が絡み合う準決勝。全てのものにとって思惑通りのカード。初戦から激突するのは、化け物と化け物。その先に、薄葉は、レイラは、ルカは、何を見るか？

次回、「魔法使いとシンデレラ」に続く。

ＥＰ５９：　魔法使いとシンデレラ（前書き）

準決勝開始

EP59：魔法使いとシンデレラ

シンデレラは、可哀想だから、魔法使いに助けてもらいました。

可哀想じゃなかったら、魔法使いはシンデレラを見てはくれません。

――

レイラはぎゅっと服の胸元を握り締め、唇を噛んだ。

結局、彼女を狙った襲撃は、あの晩二度と起こらなかった。そして、なんの問題もなく、こうして準決勝の舞台に立つ事ができている。

しかし、レイラの胸中は複雑だった。

自分を傷付け、不幸にし得る唯一の存在、薄葉との殺し合いが、彼女の最大の目的だった筈。そしてそれは目前に迫っている。

なのに、どうして、今更になって、「戦いたくない」と思い始めているの？

何かが怖い。それが何なのかは分からない。

殴って壊すのが怖い。傷付けられるのが怖い。敵として睨まれるのが怖い。怖い。怖い。怖いは不幸、愛すべきものの筈なのに怖い。

自らのアイデンティティの崩壊の危機、それに対して、彼女は頭を捏ねくり回して、思考を無理矢理捩じ伏せる。

この悩ましさも、最ッ高の不幸だわ。

そう考えて、ようやくレイラの思考は『異常』に戻る。体も心も捻じ曲げて作り替えるレイラにのみ許された特別な魔導、通称『テラス化』。名も無き異形の魔導によって、レイラは純白のドレスを纏い、舞台へと一歩を踏み出す。

ルカは昨晩の一連の出来事を観察し、その意味を理解していた。

自らの『強運』というスキルがありながらも、思わぬ敵に干渉された想定外の事態。あれは全て、変化を望む自らの意思が招き寄せたイレギュラー。新しい結末へ向かうための転換点だったのだ、とルカは考える。

今まで望んだこともない様な具体的イメージが見つかりつつあるなか、あれはそれに向かうためのイベントに過ぎず、結局は最高の結果に辿り着くことには変わりはない。

自らの想いを、レイラを変え得る唯一の存在、薄葉に話そうと思ったのも気まぐれ。運命に身を任せた選択だった。

『強運』という規格外なスキルを持ちながら、結局はレイラの制御もできないルカの致命的な欠陥、それは『幸福を知らないこと』。

『望む結果が叶うこと』が幸せだとは知っている。しかし、彼は『自分の幸せ』が何なのかを知らない。

親が居る事が幸せだと思えないから、彼は父が母と別れて去って行った時に泣けなかった。母が死んだ時に泣けなかった。

友達が居ることが幸せだと思えないから、彼は友達が離れていっても苦しくなかった。
気付けば彼は、何を自分が望んでいるのか分からなくなっていた。

彼には常に思い通りに動くという『平常』しかない。その先には、『幸福』も『不幸』もありはしない。

そんな彼の唯一の救いは、レイラという不幸ジャンキーの妹の存在だった。
彼女を通せば、『不幸』のなんたるかを見れる。彼女の生き様自身が忌避すべき『不幸』。体に作る痣は『不幸』。切り傷は『不幸』。全てに見捨てられるのは『不幸』。思い通りにならないのは『不幸』。
彼は、『不幸』を避けるようにしか、自らの『強運』を行使しない。

それは果たして、持ち前の幸運で世界が望むがままに動く故か、それとも狂った幸福論を掲げる妹のせいか、それはルカにも、周りの誰にも分からない。

しかし、そんなルカが初めて抱いた、求めるべきもの。それは、レイラに見え始めた、『幸福』という可能性。
彼は、薄葉に頼んだ。

不幸を追うレイラを、幸せにしてやって欲しい。

とにかく、彼女と全力で戦って欲しい。その先に、彼女の幸福はあるのだと。そして、もしも不幸ばかりを追うレイラを幸せに出来たとしたら、傍らに居る自分も、幸せとは何か知れるかもしれない、と。

ルカは、レイラを通して、『不幸』も『幸福』も見定める事を望んだのだ。

なんと、卑怯な事か。妹の幸せを願っての行動ではない。それは妹という道具を使っての、自分の幸福探求。そんな自分を卑下して、ルカは笑う。

「ルカ。どうしたの？　一人で笑って。気持ち悪い」
「ううん。なんでもないよ、レイラ。さ、楽しもう。此処が、目的地だ」

人を利用する事は悪いことだ。教えられたままに、ルカは繰り返す。教本通りの『善人』を演じながら、教本通りの『悪人』を嘲り、運命に愛され、あるいは嫌われた、空っぽの狂人は舞台に上がる。

一一一一

『遂にやってまいりました！　ヴォラスカーニバルも残るは三試合！　残るは勇者の名に恥じない戦士達四組！　準決勝第一試合、早速始めて行きましょー！』

司会、ピソのアナウンスにより、沸き立つ会場。昨日のレイラの暴走などまるで記憶にないかのように、観客達は更なる白熱が期待される準決勝に胸を躍らせる。

「おかしい」

その光景を眺めながら、大会運営を請け負う男、ゾハルは眉を顰めた。

前の試合で相手を瀕死の重傷にまで追い込んだレイラ。本来なら、ある程度の追求が彼女に向かう筈だった。ゾハルとしては、多少行き過ぎた行為であっても、正々堂々とした勝負の結果なら咎めるつもりなどなかったので、例えその追求があっても、より優れた戦士達の大会を実現する為に、多少の庇い立てをするつもりだった。

しかし、追及は一切なかったのだ。

ゾハルの聞いた話では、一部国の上層部からは批判の声も上がったが、それを抑え込む声が多数あったという。

それだけならば、まだ良かった。

しかし、先日は騒めいていた観客が、まるでそれを忘れてしまったかのように沸く光景に、ゾハルは薄ら寒いものを覚えた。

この大会内で生じていた無数の違和感、それがまるで煙のように消えていっている様な不可思議な感覚。

ゾハルの中に、密約を交わした協力者の怪しい影が浮かび上がる。

「まさか……な」

そこまで考えて、ゾハルは思い浮かべた事実を否定する。

そう、そんなことは絶対に有り得ない。有り得たとしても、奴には何のメリットもない筈だ。

何故、そんな思考に至ったのか、深くは考えずに、ゾハルは試合を静かに見下ろす。

『準決勝第一試合を戦うのは……このチームですっ！』

上空の結界に映し出される映像魔法。其処に浮かび上がる二つの

チーム名。それは予定調和。既に入場口で待ち構える二つのチームは、当然の如く会場へと一歩踏み出した。

『「プリプラノメノス」ＶＳ「チームアミーラ」！！』

―――

試合会場に先に立ったのはチームアミーラ。その中央に薄葉は立ち、入場してくるプリプラノメノス、レイラとルカの月島兄妹を待つ。

姿を現すプリプラノメノス。会場に舞うように登場したのは、純白のドレスに身を包む化け物。足元にガラスの靴を輝かせて、隠していた黒い長髪を靡かせ、美しく着飾ったレイラが先頭を切って姿を現した。

巨大な化け物の腕、鋭い爪、黒い翼、醜いパーツを全て削ぎ落とし、純粋なる人間の姿で現れたレイラは、今まで感じさせなかった、人間的美しさを初めて垣間見せていた。

長いまつ毛の目立つ目は、何処か蠱惑的な怪しさを醸し出し、口の下の黒子がまた大人びた雰囲気を漂わせる。今まで化け物の四肢によって隠されていた本当のレイラを目の当たりにして、薄葉は、彼女を知る者は、観客達はほんの少しの間だけ彼女に魅入られていた。

魅惑によるその静寂を突き動かすのは、にたりと歪むレイラの薄桃色の唇。

「薄葉。待ち侘びたわ。最高の殺し合いを、楽しみましょう」

そこでようやく、世界の全ては、彼女の化け物という正体を思い出す。凍りつく様な殺気。煌びやかな白いドレスとガラスの靴には似合わない、ドス黒い笑み。そして、牙を剥き出しにする『殺し合い』という物騒な言葉。

そう、彼女のヴォラスカーニバルは此処で終わる。例え、勝ったとしても。

「さあ、早くしなさい。試合開始の宣言を」

レイラの鋭い眼光に捉えられ、背筋を震わせながらピソが宣言する。

『し、試合開始ッ！！』

刹那、レイラが誰よりも早く駆け出した。その腕を醜い巨大な凶器に変える事なく、鋭い爪を伸ばす事なく、暗い翼を広げる事なく、その人間の姿のまま、真っ直ぐに。

ガラスの靴が地面を抉り、その白いドレスをひらひらと靡かせながら、一瞬で薄葉との距離を詰めたレイラが放つ蹴り。

ズン！

薄葉は口も開かずに、真正面からその蹴りを受け止めた。それを見て、レイラは歓喜に表情を染める。

「そうこなくっちゃッ！！」

レイラが足を引き、ぐるりと回転しながら更なる蹴りを叩き込む。

それに合わせて、レイラの遥か後方に構える、ルカが腕を高く掲げて、優しく、甘く微笑んだ。

「さあ、薄葉君。レイラを頼むよ。僕は、全力で……」

ルカが腕を振り下ろすと同時に、彼の脇に控えていた、二人のメンバーが動き出す。

「君の仲間の邪魔をする」

―――

魔法使いは、美しいシンデレラには興味はありませんでした。

魔法使いは、可哀想なシンデレラしか、見てはくれません。

でも、だったら、シンデレラに見惚れてしまった王子様は、どうなのか。

シンデレラを見つけた王子様は、一体彼女の何を見たのでしょう?

―――

女は自らを覆い隠す隠れ蓑を脱ぎ去った。そして、お気に入りの大きな帽子をひょいと被り、潜ませていた巨大な筆を腕に抱える。

「パノプリアじいさま！　行きますよ～～！」

筆を振り、女、シェーヌは魔法陣を描く。その号令に合わせて、プリプラノメノス最後の一人は、羽織った隠れ蓑を脱ぎ捨てて、その姿を会場に晒し出す。

「にょほほほ！　じゃあ、遠慮なく行かせてもらうかの！」

それは嗄れた声の老人。シェーヌよりも、レイラよりも身長の低い小柄な老人の右目には黒い眼帯。その姿を見て、驚愕するというよりは、頭を抱えて困り果てるのは大会の責任者ゾハルと慌てふためく司会のピソ。

「あ、あわわわわ！　シェ、シェーヌ様にパノプリア様！　どうしてお二人がヴォラスカーニバルに!?」

「シェーヌだけかと思ったが……まさか、パノプリアの爺様も出ていたとは……」

二人がその参加者を知るのも当然。その二人は知る人ぞ知るヴォラスの要人。国お抱えの超一流の魔導士なのだ。

その二人が肩入れするチーム、ますますゾハルはプリプラノメノスの、化け物のような二人の男女の正体を訝しむ。

そんな同僚の目など露知らず、シェーヌは己が見栄の為に力を行使する。

「『プロスクリスィ』」

描いた召喚陣が光ると同時に其処に飛び込む。それに続いて老人、パノプリアも同じく召喚陣に飛び込む。

次の瞬間、二人が飛び出すのは薄葉の後方、残る三人が待つその場所に、同様の召喚陣が浮かび上がり、消えた二人が姿を現す。そんな二人の動きを見守り、ルカはにこりと優しく微笑んだ。

「どうか、レイラの邪魔だけはしないでくださいね」

そして、まるで何かを操る様に、指先をくいと動かす。

「……まあ、できないんですけどね」

ルカの力、『強運』。制御不能のその能力の手綱の握り方を、ルカは度重なるハプニングの中で僅かに見出していた。

垣間見えた能力の一端。ルカはただ、『レイラと薄葉が隔離される』その状況をイメージし、『事態の変容』を願う。

ゴッ！

吹き出す火柱。砕ける足場。無数のアルマの氾濫が、一瞬で薄葉とレイラのぶつかる周囲を抉り取り、二人を隔離する。

それを見た大会運営陣は、顔面蒼白。

それもその筈。吹き出したアルマは、いくつも前の試合時に仕掛けられた『トラップ』によるもの。運営陣は会場を毎度整備したに

も関わらず、『運悪く』そのトラップは僅かに残留していたのだ。
そして、今、原因こそ分からないが、『運悪く』トラップが一斉に起動した。

「相変わらず……意味の分からない能力ですよね～～！」

シェーヌが巨大な筆を振り、襲いかかる相手は救世。しかし、大振りな一撃は躱すのに労力は要らず、ひょいと躱した救世はシェーヌと視線を交わした。

「まさかあなたがそちらにいるとは。シェーヌさん、でしたっけ？」
「これはいい機会ですね～～。オラクルでの借り、返させていただきましょうか～～？」

ダディへと、蛙の様に飛びかかるのは、老人パノプリア。その奇怪な動きに反応して、腕を薙ぎ払う様に振るダディ。しかし、パノプリアを捉えた筈のその一撃に手応えはなく、パノプリアはぴたりとダディの丸太の様な腕に張り付いていた。

「にょほほ！　シェーヌたんのお願いを聞いて来た甲斐があったわい！　可愛い子ばっかりじゃわ！　とっととむさいお前さんなど捩じ伏せて、あっちのお嬢ちゃんにちょっかい掛けに行かせてもらうかの！」
「気持ち悪いジジイだ……！」

交戦を始める二人を横目に、ハランは懐から取り出した拳銃型魔具『アイリス』を構える。照準を離れたルカに合わせ、迷いなく引鉄を引く。放つのは炎の弾。しかし、弾は突然、横から吹いた突風に流されルカの横を通り過ぎる。それは薄葉とレイラ、二人の衝突による余波の影響に過ぎないが、ルカはまるで自分が狙ってその結

果を齎したかのようににやりと笑う。

「大人しくしてましょうよ。役立たず同士、ね」

「……それで済むなら願ったり叶ったりだな」

ハランは、ルカの挑発的な言葉にも動じず、大人しく拳銃を懐に仕舞う。そして、自分に火の粉が降り掛からない事だけに注意をしながら、腕を組み、試合の様子を静観する。ひっそりと、手の中にいくつかの妨害用の道具を潜ませて。

ほぼ全員が一対一の構図を作り上げ、完全に隔離された薄葉とレイラ。しかし、それは決してルカ一人の思惑通りという訳ではなく、薄葉達にとっても願ってもないシチュエーション。

元より、薄葉は他のメンバーに『二つの事』を頼んでいた。

その一つこそが、『レイラとの一対一の勝負』。元々興味のないハランはともかく、事情を話し、救世も、ダディも納得し、今こうして他のメンバーを引きつける役回りについている。

「最高のシチュエーションじゃない！　薄葉！」

歓喜に表情を輝かせ、レイラがドレスのスカートを持ち上げながら、ガラスの靴の蹴りを繰り出す。突き出す様な数発の蹴りを、薄葉は無意識下で受け流し、一発に対して一発の攻撃を放つ。それを踊る様に躱し、レイラが蹴る。薄葉が躱す。反撃。回避。反撃。回避。

その二人の激突は、以前の殴り合いのような荒々しいものとは違った、流麗ささえ感じさせるものとなっていた。

化け物の巨腕も、化け物の鋭爪も、人外の力を一切垣間見せないレイラ。しかし、その動きは以前の暴走機関車状態とは比較にならな

ない程に洗練されていた。
　自らの鋭い蹴りで巻き起こす暴風。それを純白のドレスで捉えて、風に乗る様に自在に宙を舞う。変幻自在な動きで、薄葉を翻弄するように戦う。
　一方、無意識下で受け流す様にガードをしつつ、時に意識的に攻撃を腕で受け止めている薄葉は、以前の化け物の体とは比べ物にならない『硬さ』と『速さ』を実感していた。

「お前、前より強くなってないか？」
「あなたが弱くなったんじゃないの？　薄葉！」

　薄葉の感じ取った通り、レイラは以前よりも数段強くなっていた。自らの肉体を変質させる能力、レイラはそれを以前は曖昧に作ったイメージで築いていた。『大きな腕』、『鋭い爪』、それはあくまで『そういうもの』を作っているに過ぎない。
　それに対し、レイラが今作ったもの、それは『機能』に特化した変質。
　物質を分解、吸収し、凝縮した超重量、超硬度の『ガラスの靴』。それを操り得るだけの『筋力』。体の一部を『暴風』へと変え、重量を増した肉体を軽々と動かす。曖昧にただ大きいだけの腕とは、その練度は段違い。
　何故、此処にきてレイラがその力をより高められたのか？　事実、レイラはつい前の試合、姫神との戦いではこのような力の使い方などしなかった。否、出来なかった。
　常に感覚で力を行使するレイラが、此処にきてその姿に至った理由。それはレイラ本人にも分からない。

「思ったよりまずいな……だが」

　対して、薄葉もレイラの言うとおり、以前レイラと衝突した時よ

りも数段弱くなっていた。しかし、それは勿論、本当の意味で薄葉が弱くなったという訳ではない。

レイラの際どく、鋭く、速い蹴り。薄葉はしかし、そのスピードを次第に捉え始めていた。何とか、虫を払うように受け流すしか出来なかったその蹴りを、薄葉は次第に身を反らして回避できるまでに至っている。そして、数回の回避を成し、『反射的に飛び出そうとする拳を何とか抑えながら』薄葉は再び反撃する。

『広げた掌』を、グッと伸ばして。

「な……！？」

レイラは驚愕した。伸ばされた薄葉の手は、決してレイラを打ち抜く事などなく、がしりと強くレイラの腕を掴んだ。思わぬ攻撃に、レイラは次の薄葉の動きを警戒する。投げ技でも仕掛けるつもりか？　関節技？　でも、どうしてそんな面倒な攻撃を？　思考を巡らせるレイラ。その警戒を裏切る様に、薄葉はにやりと笑って口を開いた。

「捕まえた……！」

怯んだレイラのもう片方の腕を更に捕えた薄葉。両腕を封じられ、距離を詰められ、足を振る余裕を奪われるレイラ。しかし、本来ならば、この状態から体を変質させて薄葉を突き放せば良いだけの事。しかし、レイラは踏み止まる。

「あ……れ……？」

腹から伸ばそうとした鋭い角。それはレイラの意思に反する様に、伸びる事を拒んだ。

膨らませようとした腕。それはレイラの狙いを否定するかの様に、無抵抗に握られていた。

翼も、爪も、髪も、足も、全て、全て、異形に歪める事のできる筈の体は、人間の姿を崩す事はなかった。

「なんで……変身出来ない……」

純白のドレスとガラスの靴を纏った一人の人間は、化け物へと変貌する力を見失った。

――

「俺は、あいつを、レイラを殴って、蹴って、倒して、力を捩じ伏せる事はしない」

ルカの話を聞き、決意を固めた薄葉が、試合前にチームアミーラの天使達に語った思惑に、全員が唖然とした。

ダディがサングラスをずらし、怪訝な表情を浮かべながら尋ねる。

「どういうことだ?」

「手を出さない、って事です」

呆れた様に、ハランが言う。

「正気か？　あの化け物相手に？　死ぬぞ？」
「死なない様には努力する」
「……お前は馬鹿か？　まさか、下らない感情論で、あのイカれた化け物を止められると？」
「化け物じゃないだろ。元々人間だしな。それに、あいつは多分イカれてもいない……と思う」

曖昧な答えは、少し自信がないからか、薄葉は頬を掻きながら、難しい表情を浮かべた。しかし、何処かで確信できる事があったのか、それともダディの鋭い視線に背中を押されたからか、薄葉がはっきりと言い直す。

「あいつは化け物でもないし、おかしくもない」
「何を根拠に……」
「分かるんだ、なんとなく……いや、まあ、なんでかは分からないけど」
「同じ化け物だからか？」

ハランの挑発的な笑み。しかし、それを受け流して、薄葉は頭を下げる。

「お願いします。多分、あいつに必要なのは、力で捩じ伏せる事じゃなくて……ちゃんと向かい合ってやる事だと思うんです」
「綺麗事だな」
「綺麗事、結構じゃないですか」

鼻で笑うハランの足をぐっと踏み、救世が優しく微笑みを浮かべる。それに少し驚いた様な表情を作り、薄葉はぽかんとその微笑みを見た。

「汚いよりも、綺麗な方がいいですよ。……まあ情けない事に、私には薄葉さんが死なない様に手当てをする程度しかできませんけど……私は、薄葉さんの言うとおりにしていいと思っています」
「……く、下らないな」
「ええ、下らないですね。でも、ハランさんもそれが綺麗な事だと思っているんでしょう？」

足を踏まれて、顔を歪めながらも強い態度のハランに対し、その言い分を認めつつも受け流し、救世がにっこり笑う。その柔らかい対応に少し面食らい、それとも多少足の痛みのせいがあってか、ハランはフンと鼻を鳴らしてそっぽを向く。

「……勝手にしろ。お前が死ぬという事は、ミュゲに集るゴミムシが居なくなるという事だからな。願ったり叶ったりだ」

憎まれ口を叩きながらも、それを認めるハラン。次に救世と薄葉は、ダディの顔を見る。しかし、心配せずとも、そこに険しい表情はなく、にかっと力強い笑みがしっかりと浮かべられていた。

「てめぇが正しいと思ったんなら、そうするんだな。それが男だ。ただし、やばいと判断したら助けに入るぞ？」
「ありがとうございます」
「最初の頃より、大分男らしい顔になったじゃねぇか。これなら、助けに入る必要もねぇか？」
「そうですよ。薄葉さんはやるときはやる人なんですから。それに、死んでも私が治しますし」
「……し、死んでも？」
「ふふ、軽い冗談です」

既に和やかな空気さえ漂わせながら、薄葉の考えを認める仲間達。
そんな仲間に感謝しながら、薄葉は照れ臭そうに笑った。

「しかし、どうするつもりだ？　救うったって、何もしない訳じゃねぇんだろ？」

ダディの当然の質問。それに、薄葉は簡潔に答えた。

「……気付かせるんです」
「気付かせる？　あの女に何を？」
「いえ。それもそうなんですけど」

薄葉の目が見据えるもの。言葉にしながら、薄葉はそれがはっきりとした形になっていくのを感じていた。

「本当に、俺が、ぶつかるべきなのは……」

―――

「な、なんで？　やだ……醜くなれなきゃ、誰も私を見てくれなくなるじゃない！」

化け物へと変貌する能力。それを失い、次第に力が抜けていくのを感じながら、レイラは叫ぶ。震え、頬を赤くし、涙を流しながら、自らの『一番恐れている事』を本能的に吐き出した。

可哀想な私なら、みんなが見てくれる。
化け物みたいに醜い私なら、みんなが見てくれる。
かわいそうなばけもののわたし。まほうつかいはかわいそうなわたしだからみてくれるの。
かわいそうだから。かわいそうだから。
憐れみと蔑みの目で私を見てくれるの。同情、憐憫、時に自己満足のような善意。それがないと、誰も私を見てくれない。

しんでれらをみつけたおうじさまは、いったいかのじょのなにをみたのでしょう？

『勝手に決めつけんなッ！』

まほうつかいに、きれいにされた、しんでれらをみていたの？

『人の価値を、お前が勝手に決めるな』

だったら、がらすのくつをもって、かのじょにあいにいったおうじさま。

どうして、ほこりにまみれたしんでれらを、うけいれたの？

あの時、自分に背中を向けて、守ってくれた人の事を思い出す。
あの人は、私を憐れみの目で見ていた？　あの人は、私を同情の目で見ていた？　あの人は、私を醜いもののように見ていた？　あの人は、本当に可哀想な私を見ていたの？

怒られて、ちょっとだけ悲しかった。でも、初めて怒ってくれた。
まるで、私を人のように、扱ってくれた。
酷い事をしたのに、醜い所を見せているのに、私を化け物と呼ば

なかった。

「そんな事しなくても、お前を見てるやつはいる」

薄葉の突然の言葉に、レイラはびくりと肩を震わせる。

「見てみろ、観客席。みんな、見てる」

レイラは恐る恐る観客席に視線を移す。みんな、見ている。化け物じゃない、可哀想でもない、普通のレイラを。激しく華麗なその戦い、それに魅入られ、真剣に、レイラも、薄葉も、応援しながら。

唖然として、涙を頬に伝わらせながら、更に力を抜いていくレイラ。そんな彼女に、薄葉も顔を赤くして、照れくさそうに、ぼそりとつぶやいた。

「もっと、自信持てよ。お前……えーっと、ほら……じゅ、十分綺麗だし」

瞬間、レイラは沸騰した。

「きっ……！」

ただでさえ、泣いて赤くなっていた顔が、一瞬で茹で蛸のように紅潮する。そして、そのままがくんと力を抜いて、レイラはだらんと薄葉の胸に倒れ込んだ。

「う、うお！？　ど、どうした！？　……って、熱っ！」

思わぬ反応に、薄葉も多少びっくりする。もたれかかるレイラを支えて、慌てて声を掛ける。発熱さえ始めているレイラはぐでんと薄葉に身を任せている。

試合中とは思えない光景である。

「……うすは」

そして、レイラはぼそりと呟いた。

「……わたし、かわいそう？　わたし、みにくい？」

「全然」

薄葉は平然と答える。

「……そんな、わたしには、みるかち、なんて、ない？」

「人間に、価値なんてつけられないだろ。それに、見てんだろうが」

レイラは気付いた。

最初は、殺し合える人間として、薄葉という化け物を気に入った。でも、守られて、人間扱いされてしまって、醜く、狂ったレイラでも、普通に扱ってくれた薄葉。

そんな、普通のことが、普通にできる薄葉が、私は本当に、『好き』になってしまったんだ。

殺したくない筈だ。失うのが怖いもの。
人間の姿で出ていく気になれた筈だ。彼と、同じ場所に立っていたいもの。
人間の姿で戦う気になれた筈だ。だって、彼と一緒だもの。
化け物になれない筈だ。
もう、なりたくないんだもの。

「答えなくても、いいわ」

レイラは、素直に、今度こそ本当の意味で、想いを告げる。

「私は、あなたが好き。殺すなんて、できない。戦うなんて、できないわ」

薄葉はどきりと胸を高鳴らせ、そして、普通にへたれた。
彼女の告白、それに答えなくてもいいという、彼女の優しさに甘えて、薄葉は答えを噛み殺した。

「……そんな、普通で、へたれたあなたも好き」

ぼそりと、薄葉に聞こえない程小さな声で、レイラは呟いた。
そして、薄葉の腕の感触に身を任せながら、小さく、宣言する。

「私の負け。もう、降参す……」
「……で、お前はどうして笑ってないんだ？」

薄葉の声が急に低くなる。それにびくりと身を震わせ、レイラは薄葉の顔を見上げた。
鋭い目。まるで、『敵』を見据える様な目。それはレイラの頭を越えて、遠くをじっと見つめていた。

「こいつが、レイラが、やっと勘違いに気付けたのに。やっと不幸から逃れられるのに。どうして、お前は嬉しそうじゃないんだ？」

レイラは薄葉に縋り付きながら、後ろを振り向く。薄葉の視線の先にいたのは、双子の兄、ルカ。

彼は、無表情で立っていた。いつもは、常に微笑をたたえる彼が、冷たく、静かに、凍りつくような視線をレイラと薄葉に送っていた。

「何の、事かな？」

ルカは白々しく首を傾げる。口元を曲げて。しかし、目は全く笑っていない。

「おかしいと、思ってたんだよ」

薄葉がルカを睨み、レイラを引き寄せる。

「お前、言ったよな？　『僕は運がいいから、なんでも願えば思い通りになる』って」

「そんな風に言った覚えはないけど……大筋あってるよ」

ふふんと鼻で笑い、ルカが肯定する。

「だったら、なんでお前は、今まで、レイラの間違った道を、正そうと願わなかった？」

ルカは強運を持っている。願えば、それが全て叶う程に協力な強運を。

ならば、何故、レイラは不幸を求めた、狂った思想に溺れたのか？

ルカは、レイラの幸せを、願っていたのではなかったのか？

答えは簡単。

「お前は、ずっとレイラの不幸を願ってたんだろ？」

薄葉は冷たく、言い放つ。

それに対して、ルカはにっこりと冷たい笑顔を浮かべて答えた。

「……そんなはず、ないじゃないか？　全く、酷い言い掛かりだなあ」

シンデレラは、可哀想だから、魔法使いに助けてもらいました。

可哀想じゃなかったら、魔法使いはシンデレラを見てはくれません。

「不愉快だ。やっぱり君じゃ、レイラは救えない」

薄葉が身構える。

見据えた『本当に気付かせるべき相手』、彼が戦うと決めた本当

の相手、月島流河を鋭く睨んで。

「退場願おうかな。邪魔者」

ルカは静かに、その手を広げて動き出した。

ＥＰ５９：　魔法使いとシンデレラ（後書き）

準決勝第一試合、狂った兄妹、月島兄妹。その兄、ルカが遂に牙を剥く。レイラを、そしてルカを救うため、薄葉の危険な戦いが幕を開ける。薄葉ＶＳルカ、その先に待ち受ける結末は……？

次回、「からっぽ」に続く。

ＥＰ６０：　からっぽ（前書き）

ルカＶＳ薄葉

ＥＰ６０：　からっぽ

思えば、この世界には不自由などなく、流される様に生きてきた。

流れる河の様に力強く、時に穏やかに、立ち止まらない人間になるように。そんな願いを込めて、両親が授けてくれた『流河』という名前の通り、流れて、流れて、流されて、ずっと、ずっと生きてきた。

一度流れ始めた河は止まらない。同じ道を、ただ静かに流れるだけ。

いつか、決められた道から外れることを、河が氾濫することを、ずっと願っていた。

―――

ルカは初めて、心の奥底に湧き上がった『苛立ち』に、顔の筋肉が固まらされて行くのを感じていた。

妄言だ。

薄葉の言葉、「レイラの不幸を願っているのはルカだ」という言葉を、ルカは笑って受け流す事が出来なかった。

そんな筈がないだろう。僕は、レイラの幸せを見届けて、幸せとは何かを知りたいんだ。

止められない怒り、嘆き、悲しみ、苛立ち。期待を裏切られた気分を初めて味わい、ルカは憤る。

「頭上に注意、だよ」

ルカは願う。

薄葉の頭上の頑丈な防御結界。観客席を守るそれが、砕けて降り注ぐ事を。その傍に寄り添うレイラなど、全く気に掛ける事なく。

本来なら起こり得ない事故。一度、ルカが起こしたその現象に対応して、結界には万全の修繕が施された筈だった。

しかし、綻ぶ。

「危ない！」

誰かの声に反応して、ルカの警告に反応して、薄葉が見上げるのは頭上。ヒビが入り、砕け、落ちてくる巨大な結界の破片。それを視認した、瞬間、薄葉はレイラを地面に倒し、振り払う様に腕を振り、レイラを庇う。

「きゃっ！」

「ちっ……！」

バリン、と激しい音を立て、結界が砕け、薄葉とレイラの頭上か

ら逸れる。しかし、その破片は鋭いガラスの破片のように、僅かに薄葉の腕に傷をつけた。惚けて、ルカに気を取られ、すっかり頭上に迫っていた結界に気付かなかったレイラは、倒され、薄葉がガードしたのを見て、初めてその存在に気付く。

「当たってないか？」

「な、何してるの！？　庇って貰わなくても、その程度では私は怪我なんて……！」

「そんなの関係ないだろ。女の子一人庇うくらいの度胸は俺にもあるってんだ」

「お、女の子……！？」

痛てて、と腕の傷を見ながら、さり気なく薄葉の発した言葉に、レイラはぐるぐると目を回す。何がなんだか分からない、混乱状態のレイラ。一方、薄葉は、彼女を守る様にルカを睨む。

「遂に見境が無くなったか？　レイラまで巻き込んで」

薄葉の言葉に、はっとしてレイラは倒れたままの状態で、顔を上に向け、ルカの顔を見る。その顔にはうっすら浮かぶ笑顔。

「運悪かっただけだよ。僕は悪くない」

「ルカ……？　ねえ、あなたどうしたの？　さっきから、おかしいわ」

レイラの戸惑いさえ見られる問いに、ルカは答えない。ただ、口元だけの笑顔を浮かべて、すっと腕を持ち上げる。それを見て、薄葉がじりと足に力を込めた。しかし、それを制する様に、薄葉の後方から声が響く。

「ちょっと、ルカくん。それは一体どういうことですか～～？」

ルカもその声に気を取られたことを確認して、薄葉も振り向く。
すると、そこには、救世とダディと交戦していた筈の敵、シェーヌとパノプリアが、動きを止めて、ルカを睨みながら立っていた。
手を出すことをやめた二人に対応するように、救世とダディも止まったまま状況を伺っている。

「どうしたんですか？　続けてください」
「勝つ気がない人に、どうやって協力すればいいわけ？」

シェーヌの口調と目付きが変わる。

「レイラちゃんも巻き込もうとしたでしょ？」
「……嫌だなぁ。偶然、ですよ」
「小僧。あんまり人を舐めんほうがええぞ？」

笑って誤魔化すルカに、更にパノプリアの追及が及ぶ。

「あれだけ前の試合で滅茶苦茶しておいて、今のがお前の仕業じゃないと言える気か？　残念じゃが……わしゃ、おにゃのこを傷付けるような輩とは組めんぞ？」
「私はさして興味ないけど……下らない試合で、天才の私に恥かかせんな」

二人を怒らせたのは、レイラを巻き込もうとした、試合の事など忘れたルカの暴挙。パノプリアは、レイラを巻き込もうとした事自体に、シェーヌは反則負けという事態を起こしかけた事に対して、隠せぬ怒りを示していた。あの直撃コースだったら、並の人間ならば命はない。化け物じみた耐久を持つレイラを傷付けずとも、薄葉

を殺めれば即反則負けだ。
幾ら大会に興味のなかったシェーヌでも、そんな泥を塗られる真似は許せない。

「……誤解です。勘違い、してますよ」

ルカは笑みを完全に消した。そして、その口から出た言葉は、謝罪などではなかった。

「あなた達は最初からただの数合わせだ。僕とレイラ以外、この大会には必要ない」
「な……！」
「もっと言うと……」

パチンと指を鳴らすルカ。それと同時に、シェーヌとパノプリアの立つ位置の真上の結界がひび割れる。

「僕達の目的地は此処だ。もう、大会に興味なんてない」

一一一一

球界テッラ。
その世界に呼び出され、自らの内に目覚めた力を理解したレイラは、召喚した愚か者を捻り潰した。
その光景を見ながらも、ルカは優しく笑っていた。

彼は他人に興味などない。

それは、その本質が、他人の痛みなど微塵も理解できないルカの異常が、ほんの少しだけ、芽を出しただけだった。

―――

「あいつ……仲間を攻撃しやがった……！」

ガラガラと音を立てながら、伸し掛った結界の破片を払い除け、ダディはルカを睨み付けた。その下では、僅かに破片の直撃を受け、蹲るシェーヌとパノプリア。

「敵を庇うなんて……愉快な人達ですね？　やっぱりそれが正義の味方って奴なのかな？」

首を傾げ、ルカは笑う。その姿を見て、ダディは薄葉が試合前に言っていた事を確信し、そしてこの先に起こりうる事態を見越して叫ぶ。

「薄葉ぁッ！！　急いでケリを着けろッ！　そいつ、何をしでかすか分からねぇぞ！」

「分かってます！！」

薄葉も事態を理解した。

そもそも、ルカの言葉に感じていた疑問。

レイラとの衝突が、何故、彼女を救うことに繋がるか？
彼は、その先に待つ、悲劇を無意識の内に望んでいたに過ぎない。
『薄葉には』分かる。
そして、もしもそれを気付かせ、根本からルカを救うには、彼の『最も黒い部分』と対峙しなければならない。
それが暴走し、レイラを、そして周りの全てを滅茶苦茶にする前に、決着を着ける。

その為に、薄葉は力強く地面を蹴って、隔てる地の裂け目を飛び越して、不敵な笑みを浮かべて待つルカへと向かっていく。

「全く……これが『不幸』なのかな？」

薄葉の手が伸びる。目前に迫るルカ。
薄葉がルカに激突するその瞬間、ルカの足元が僅かに歪む。

「おっと」

ルカがバランスを崩し、後方によろめく。その仰け反りは、結果的に薄葉の攻撃を躱す要因となり、ルカは地面に尻餅を付く。大振りな攻撃を回避され、隙を見せる薄葉。その隙を突いて、ルカは偶然、その手元に転がる『それ』を発見する。

ちりん。

ルカは『それ』を『偶然』、その手に握った。小さく響いた鈴の音。その音に呼応する様に、ルカの視界にはかつてない世界が広がった。その手に握られたのはひとつの『鈴』。
まるで網目の様に広がった無数の糸の様な光。それを見て、ルカは理解する。今まで曖昧に見えていたそれの正体。そして、ルカの

力の本質を。

「全く……本当にツイてるよ！」

ルカは鈴を握る手で、無数の光の一本を手に握り、引き寄せる。それと同時に、薄葉の足元がみしりと凹み、大きくバランスを崩す。それに合わせて、ルカは直ぐ様立ち上がり、鈴を握る手で左手で糸を引き寄せながら、右手を高々と掲げる。その糸に引き寄せられる様に、みしりという音と共に、ヒビの入る結界。そして、僅かな破片と共に、くるくると何かが落ちてくる。

「漫画の主人公ってさ、ピンチになると突然覚醒したりするよね」

ぱしりと、『それ』は綺麗にルカの右手に収まった。

それは小さな木槌。奇妙な文様が刻まれた、怪しげなそれをルカはまるで自分の武器であるかのように振りかざし、振り向き、対応に移る薄葉に向けて振り抜いた。

「……逆説的に考えると……ピンチになって覚醒した僕が、絶対に正しい主人公なんだよ？」

小槌が打ち抜くのは空。一見空振りに見えるその一撃。しかし、ルカには見えている。無数に束ねられた光の糸。それを潰し、捻じ曲げ、再構成する小槌の一撃が。

「あいつ……！　何勝手に私のものを……！」

「……前の試合で使った時、こちらの空間に置き去りにしてしまったんでしょうか？」

不快そうに顔を歪める、ズィスィの天使、千歳。彼女は、ルカが握る自身の召喚する伝説の武器のひとつを睨んで、ぼそりと呟く。

「『打出の小槌』……ストックにないと思ったら……！」

「それに、一瞬見えたあの鈴……これは、想像以上に厄介ですね」

ルカの握った鈴と小槌。その両方を認識した、不動王は珍しく険しい表情を見せる。

「彼は、どうやら二人の天使の力を掠め取ったみたいです。これは、少しばかりまずいですよ」

ルカの捻じ曲げた光の糸。それは、『偶然』落ちていたものを拾い、その手に握る『姫巫女の鈴』により見通した、『運命の糸』。

この世界の運命は、全てアルマで出来ている。

元より存在する無数の運命の糸は人に吸われてその者の運命となる。ヴォラスの天使、姫巫女、姫神の力の一端は、それを選びとる事にある。

そして、『偶然』、ここに残されていて、ルカの手に『偶然』収まったその槌の名は『打出の小槌』。その本質は、存在する運命の糸を無理矢理捻じ曲げ、特別な幸福を齎す特別な『伝説の武具』。

元よりルカの持つ『強運』。それを最大限に活かしうる二つの天使の力。偶然生まれたその最高にして最悪の組み合わせにより、ルカは遂に、異世界テッラの欠陥天使として覚醒する。

ゴッ！

再び、よろめきながら薄葉の攻撃を躱すルカ。再び隙を作る薄葉の頭にぶつかるのはひとつの破片。何処からともなく現れた、闘技場の石の破片は、かなりの重量をもって、薄葉を更に崩す。

そんな、顔をしかめる薄葉の背後から、隙だらけの背中目掛けて、ルカが迫り、『打出の小槌』を振り下ろす。しかし、一般人に等しいルカのスピードは、薄葉の無意識反撃のスピードに敵う筈もなく、直ぐ様切り返す無意識下の一撃が返ってくる。

本来ならば、ここで薄葉の一撃に、ルカは沈む筈だった。しかし、ルカは既に薄葉目掛けて振り下ろした小槌で、途中、運命の糸を捻じ曲げている。

「足元注意、だね」

無意識状態の薄葉の足元が陥没し、その攻撃の軌道が沈む。無意識下の薄葉は、敵意を察知し反応する。故に、足元の急な変化には対応せずに、そのまま運に任せ、敵意を削いて、小槌に行く末を任せたルカを追わずに、バランスを崩す。そんな彼の肩に、『偶然』当たる『打出の小槌』。無意識下の高速攻撃、そのスピードに乗った薄葉の体と、ルカの小槌が綺麗に交差する。ルカの手から小槌が弾き落とされない程度の絶妙な接触は、ボコンとひとつの嫌な音を立てた。

「いっ……！」

「ああ、ご愁傷さま。肩、いっちゃったかな？　『不運な事故』だったね」

痛みで薄葉が無意識状態から覚醒する。右肩を抑え、顔を歪めながら膝をつく薄葉に対して、ふっと小槌を振り上げて、ルカはにやりと笑った。

「今度は頭、行ってみようか？　当たり所、悪くないといいね？」

振り上げた小槌で、運命の糸を捻じ曲げながら、ルカはわざと止めを刺すかのように勿体ぶった動きを見せる。それを見ていた者達は、『それに薄葉が反応しないその時点』で、それがルカの撒いた罠だと気付くべきだった。

即座に反応し、準備していた拳銃型魔具アイリスの引鉄を引いたハラン。その爆発弾の軌道は、穴の空いた結界から流れ込んだ突風に煽られる。

それは全てルカの狙い通り。『運』のコントロールを、『鈴』の力で見出して、『打出の小槌』で導いたルカは、最早事象を自由自在に操るまでに至っていた。

「薄葉君。どうやら君は、仲間の手によって、『不運にも』やられてしまう運命のようだ」

軌道の逸れた爆発弾が、薄葉の背中に接触する。その横を通り抜け、ルカの後方で爆発する筈だったその弾は、想定外の障害物との接触により、そのままその効力を発揮した。

カッ！

炎が巻き起こり、強烈な破裂音と共に、その一撃はルカの盾になる様に存在する薄葉の背中で炸裂した。

「薄葉さん！」

救世の叫びと共に、爆風に煽られ前に身を浮かせた薄葉は……

「あいつをしばき倒す」
「どうしてそうなるんですか！？」

ルカとレイラ、月島兄妹を救う方法。それは二人の行く末を、無意識の内に決定づけているルカをどうにかする事。そう考える薄葉が、ルカに何をすべきか、それを考え、行き着いた答えは酷く乱暴で滅茶苦茶なものだった。
薄葉は極めて真剣に言う。

「あいつの思ってそうな事、俺には分からなくもないですし。だからこそ、それが間違ってるって事、あいつをそんな状態に追い込んだそもそものあいつの『不幸』を、力ずくで思い知らせてやるんです」

薄葉の決意。正しいかも分からない『それ』を、薄葉は信じ、貫き通す決意を固めていた。

「レイラを介さなくても、俺が、不幸ってものを叩き込んでやりますよ」
「だが、あんな滅茶苦茶な奴に、本当に一発くれてやれるとでも？」

ダディの問い掛け。それに薄葉は自信満々に、とんでもない根拠をもって答えた。

「大丈夫です。だって……」

宙に浮いた状態で、その足を振るい、ルカの顔を蹴り抜いた。

「ぐっ！？」

ルカが顔を歪ませ、よろりと揺らめき、転倒する。『運良く』、蹴りは浅く当たり、命を奪うどころか、意識さえも奪うことはなかったようだ。しかし、確かな衝撃が、ルカの頬を走っていた。

腰を落とし、震えながら頬を抑えるルカ。それをゆっくり立ち上がりながら、痛む肩に手を当てながら、薄葉が見下ろす。

「どう……して……！？」

ルカは完全に誤解していた。

自身の引き起こす事象が、完全に自分の思うがままに動いていると。

しかし、一人だけ、そんな彼の思い上がりに逆らう男がいた。

その男は、ルカの行動、『それに薄葉が反応しないその時点』で、それがルカの撒いた罠だと気付いていたのだ。

才能こそなくとも、いや、才能がないからこそ、他人の才能に敏

感に反応し、それを見極め、生き残る道を作り出す、悪知恵の申し子。

「残念だったな」

ハランは銃口から上がる白煙をふっと吹いて、にやりと悪人の笑みを浮かべた。

「貧弱な俺には、そいつを沈める程の殺傷能力はないんだ」

「畜生、あいつ……！　また、俺に嫌がらせしてきやがって……！」

じろりと背後を一瞬睨んで、薄葉はぎりりと歯を鳴らした。それは薄葉自身にも想定外だった一撃。

しかし、ハランは見越していた。その一撃が、薄葉をどうやっても仕留められない事を。ルカを狙うその一撃が、薄葉に直撃する事を。そして、その一撃を受けた薄葉を見て、ルカが完全に油断するであろう事を。

そして、それにより導かれた結果により、ハランは分析する。今のルカの能力の全容、そして、その攻略法を。

「成程、そういうことか。ようやく分かった」

「何得意気な顔をしてるんですか？　薄葉さん撃っといて」

「痛い痛い。踏むな。足を踏むな」

足をギリギリと救世に踏まれながらも、ハランは一見平静を保ちつつ、頬をピクピクと震わせながら告げる。

「準備しておけ。此処からが、本番だ」

「……準備？」

「あと、お願いですから足を踏まないで」

ハランは、頬を抑えながら、震えるルカの表情が変質していくのをじっと見ていた。

今、薄葉の一撃が通ったのは、本当に『運の良い』、『偶然』に過ぎなかったのだ。そして、その偶然は、余程の事がなければ二度と起きない。それを、ハランも実際に対峙する薄葉も気付いている。

ハランの言葉通り、此処から先が『本番』なのだ。

「……コレが、『イタイ』？」

頬を摩り、ルカが呟く。虚ろなその目には、次第に光が灯り、その声は次第に大きくなっていく。

「『イタイ』、『いたい』、『痛い』、痛い、痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛いッ！！」

ルカは多少の『痛み』を知っている。しかし、それはあくまでも優しい、『不幸』とも思えない程度の痛み。故に、彼は今まで、進んで『痛み』を『不幸』と捉え、回避する意思を持っていなかった。それが災いし、今まさに、『避けたい』と思っていなかった一撃を、こうして貰ってしまう結果になっている。

それがルカの『欠陥』。

何が『幸福』で何が『不幸』か。それが理解できない故に、彼は未だ知らぬ『不幸』を回避する理由を知らない。どうして『痛い』のは『不幸』なの？　それをレイラを通してしか理解しないからこそ、彼はそれを忌む意思に欠けていた。

明確な目的のない、からっぽの存在。故に、彼の能力は完璧ではなかった。

「なんで？　なんで？　これはなんだ？　分からない。分からない。分からない」

ルカは震える。自らの内に沸き上がる、言い知れぬ感情に。

それは薄葉が、レイラを懐柔した時から生じていた。そのもやに、ルカは笑顔を忘れかけていた。しかし、形の見えないその感情に、ルカは疑問を抱いていた。

そんな得体の知れない感情が、今の『痛み』でどんどん膨れ上がっていく。ドス黒く、熱い、煮え滾る様な不快な感情。

「俺が憎いかよ？」

薄葉は、濁った目で鋭く見上げるルカを見下ろし、言い放つ。安っぽい、悪役のように。

「ニクイ？」

ルカは本で読んだ、テレビで見た、人が話していたその言葉を思い出す。何度も、何度も、辞書で見たその言葉を繰り返し、自らの空虚な心を満たす感情に意識を落とす。

「ニクイ、にくい、憎い、憎い、憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い……」

そして、彼は見定めた。

「これが『憎い』？」

からっぽな器に、初めて生じた人間らしい感情。それにルカは思

わず笑みを浮かべた。

「僕は、君が、レイラが、『憎い』んだ」

立ち上がる。そして、頬から手を離し、笑う、笑う、笑う、笑う、笑う、笑う、笑う、笑う。

「痛いのは嫌だ。もう、御免だ。憎い。僕を痛くする、君が憎い」

たった一度のチャンスは、損なわれた。

ルカは初めて、『不幸』のひとつ、『痛み』を知った。

そして、初めて、『憎い相手を消し去りたい』という、『幸福』を望んだ。

「全く……本当に……不幸、不幸ッ、不幸ッ！　不幸ッ！！　不幸だよッ！！」

止めどなく溢れる笑いと共に、ルカは小槌を振り上げ運命の糸を捻じ曲げる。

最早、『痛み』を拒み、『薄葉の打倒』を願うルカに、薄葉が勝つ事も、そして攻撃を当てる事さえも、叶わなくなった。

「此処からが、本番か」

薄葉は構える。だらりと垂らした右の腕。その痛みを、もう慣れたと強がり、忘れようと努めながら。

「さあ、始めよう」

ルカは上を見上げ、口を大きく開けながら笑う。その大きく開いた口に、ふわりと宙を舞い、飛び込んでくるひとつの粒。

ごくり。

ルカはそれをそのまま『運良く』飲み込んだ。『非力』、その唯一とも言える弱点。それさえも、たった一粒のその薬で消え失せる。

バキバキと音を立て、その姿を変えていくルカ。

そこまでの展開を予測しきれなかった薄葉は、思わず呟く。

「……そんなのアリか？」

「ああ、なんだろう、これ。凄く気分がいいや。なんだか、今まで抑えていたものが、すっきりと吐き出せた気分だよ」

ひっそりと、地面に転がっていた一粒の薬。それは果たして誰が落としたものか、それは分からない。

『テラス化』。それを成し遂げる、禁断の薬。それは、いつの間にか舞い上がり、吸い込まれるようにルカの一部となった。

「それじゃあ、行くよ？」

一一一一

ルカの力の本質は、『運命の糸』を手繰り寄せる事にある。

自分に都合の良い運命、それを選び、引き寄せる。

限りなく、ヴォラスの天使、姫巫女と呼ばれる予言者、姫神美命に酷似した能力。

しかし、自在に運命を選び取る姫神に対し、それは自分が本当に望む結果しか導けない。

それはルカの意思に反して、心の奥底にある願望を形作る。頭で考えた願いを招く事は不可能。限りなく、自分の思う『幸せ』に近いものを求めて、力は糸を手繰り寄せる。

無意識下で自分の為に発動する能力、その点では、その力は限りなく薄葉に似た力だった。

そんな彼が、今、自身で力を行使する事を、薄葉と同じ様に覚えた。

運命の糸を見通す『姫巫女の力』を手に入れ、運命の糸を自在に作り替える『打出の小槌』をも手に入れ、そして自身の明確な『望み』を手に入れた今、彼は変わった。

運命の糸を、自身のイメージした通りに、アルマによって引き寄せ、捻じ曲げ、都合良く繕う。

彼は今、存在し得ない運命さえも作れる、完璧な存在となった。

一一一一

幾分か伸びた身長は、それでも細く弱々しかった。

その体の表面は、黒い皮膚に覆われて、その黒い髪と合わせると、身を包む質素な布以外を全て黒に染めていた。丈が足りなくなった

服から、黒い肌はてかてかと輝いている。
天使を示す黒い瞳は、まるで彼が何かが欠けた天使だと言わんばかりに黄色く変わり、それを囲む白は真っ赤に染まっていた。
黒い闇に、赤い眼球。その中心に輝く黄色い瞳が、不気味に薄葉を追っている。

「あはははははははははは！」

左手には鈴を握り、右手には『打出の小槌』、その細く長い四肢で飛び回り、テラスと化したルカは笑う。
ルカは運が良かった。『テラス化』、その異常な変化に、彼は完全に適応していたのだ。それもその筈、双子の妹がそうなのだから、兄がそうでも不思議ではない。
それは通常よりも遥かに優れたスペックを実現する。
細い体はパワーよりもスピードに特化し、変質した眼は圧倒的動体視力を実現する。薄葉の反射、異常な能力、それにさえも対応し得る肉体を、ルカは手にした。

薄葉の反撃を見て躱し、反撃。軽く、素早く振った小槌は、当たり所が悪い様で、一撃ごとに薄葉の体を軋ませる。薄葉の咄嗟の、最高速の反撃も、偶然跳ね上がる石に阻まれ、偶然揺れる地面に揺られ、偶然落ちる結界の破片に制され、止められる。

「ぐっ……！」
「君、本当についてないね？　そんな君が、ほんの僅か、一億分の、一兆分の一の確率でも掴み取る、この僕に、勝てるとでも思ってるの？」

そんなルカの挑発にも、動じる事なく、しかし顔を顰めながら薄葉は立ち向かう。

「絶対に、勝つ！」
「残念だけど」

薄葉の目の前で、突然何かが爆発する。それは最早、原因不明、正体不明の怪奇現象。それにぐらりとよろめく薄葉に、ルカは小槌を振り下ろす。

「絶対なんて、この世界にはないんだよ？　そして、絶対がない限り、僕が負ける事はない。そう、絶対に、ね」

ゴッ、と鈍い音が響く。
邪悪な微笑み。それと同時に当たる小槌は、薄葉の頭を捉え、そのまま地面に叩き伏せた。
俯せに倒れ、動かなくなる薄葉。その下の地面にじわりと滲み出す血。

「僕にはもう、君が倒れる運命が見えている。多分、体を動かせない程度には、君を壊せたと思うよ？」

勝利宣言。
ルカは薄葉を見下し、北叟笑んだ。

かつてない満足に心を満たし、無様に転がるゴミを見て、理解する。

「ああ、僕は幸せだよ。お前ら、クズが、不幸であれば、僕はそれを噛み締められる。そうだ。薄葉君。僕は、レイラが不幸で、とっても幸せだよ」

「ルカ……」

レイラはその光景を、ただ見ているだけだった。

動けない。

彼女は迷っていた。戸惑っていた。そして、言い知れぬ感情に満たされていた。まるで体は拒む様に、変質を許可しない。テラスの力も操れないレイラは、ただの何も出来ない女の子。そう思われた事につい先程にどきりとした彼女は、今はそれをただただ呪う。

そんな彼女が出来ることは、言葉を絞り出すことだけ。

「ルカ……冗談はやめて。あなたは……そんな人間じゃないでしょ？」

「……レイラ、それは誤解だよ。君が愚図だと罵る僕は、こういう人間だったのさ」

自嘲の笑みを浮かべながら、小槌を振り上げるルカ。すると、会場は瞬く間に暗くなる。

空を覆い尽くすは雷雲。何処からともなく現れたそれは、地面を揺らす様な轟音を立てている。

これから起こる『偶然』、それを予見し、レイラは呟く。

「やめて……」

「どうしたの？　レイラの好きになった人が、大変な目に遭っちゃうよ？　ほら、レイラが大好きな不幸だ。笑いなよ。いや、笑わなくてもいいか。僕だけが笑えれば」

ルカは小槌を振り下ろし、ようやく見つけた自分の感情を吐き出す。それは心の奥底で眠っていた、目を背け続けた感情。醜いものだと、教科書通りの知識で忌避してきたその感情が、具現化したか

のような醜い姿が、それを促すかのように、ルカは素直に、愚直に解放する。

「他人の不幸は蜜の味。不幸かい？　僕は不幸じゃない。ああ、いいねえ、全く……最ッ高にツイてるよ、僕は！」

結界の隙間、それをすり抜ける様に、眩い雷が降り注ぐ。

絶体絶命の状況下、未だに薄葉は倒れたまま。

ＥＰ６０：　からっぽ（後書き）

見つけたものは、眩く光るもの。そして、醜く黒ずんだもの。決着の末に、運命に愛された少年は何を見るか？

次回、「本当に儘ならぬこの世の中」に続く。

ＥＰ６１：　本当に儘ならぬこの世の中（前書き）

引き続き、薄葉ＶＳルカ戦

ＥＰ６１：　本当に儘ならぬこの世の中

薄葉は倒れていた。そう、本来なら立ち上がれる筈もない。

しかし、彼は、『意識もなく』動き出す。

雷の直撃、それを前方に飛び上がる様に跳ね上がり回避する。『ルカに被害が及ばぬ様』に落とされる雷の効果は極めて局所的。一瞬で、ルカの眼前まで距離を詰めた薄葉には当たらない。

「な……！」

怯み、対応に移ろうとするルカ。しかし、その反応は一歩遅れる。

ズドン！

薄葉の鋭い右拳が、深々とルカの腹に突き刺さる。明確な殺意をもって振った小槌に反応した、同等の殺意をもった反撃。それはルカの強化されてなお細い体を楽々と浮き上がらせ、悲鳴を上げさせる暇もなく、闘技場の壁にまで吹き飛ばす！

拳の接触、その反動で、薄葉の意識は引き戻される。そして、いつの間にか自由になっている肩に手を当て、驚きの表情を見せた。

「あれ？　痛くない」

肩にせよ、足にせよ、薄葉の体は治療がなければ立ち上がれない

程に壊されていた。例え、無意識下であっても動けない程に。そう、『治療がなければ』。

「いざとなったら、手助けする約束でしたから」

後方で、ただ沈黙していたかに見えた救世は静かに囁き手を引っ込めた。何があっても、手出しはしないつもりだった救世も、流石に追い打ちとしか思えない落雷攻撃を見逃しはしない。いつでも動ける様にと待機は怠らない彼の迅速な対処が功を奏した。

肩の痛みの消失、軽い体を眺め回し、状況を察した薄葉が後ろを振り向く。それに対して、手を合わせ、苦笑しながら救世が溜め息をつく。

「はぁ、後でしっかり謝らないとですね」
「何をだ？」
「勿論、男と男の一対一の勝負を邪魔した事を、です」
「女々しい癖に、男らしい事を言うんだな」
「女々しい癖に、は余計です」

ハランと気の抜けた遣り取りをしながら、それでも安心し、その一方で申し訳なさそうな表情を浮かべる救世。それを気遣ってか、思ったままの事を言葉にしたからか、ハランはぼそりと呟く。

「……あいつは、そんな事を気にする様な奴には見えないがな」
「はい？」
「見てみろ」

薄葉を指指すハラン。改めてハランの指さす先を救世が見れば、薄葉は丁寧に頭を下げて、再び吹っ飛ばしたルカの方を向き直る。

「ほら見ろ。文句はないそうだ。それにこれはチーム戦。何処に咎められる理由がある？」
「それはそうですが……」
「『どちらが致命傷を負おうと、助けるつもりでいた』奴が、細かい事を今更気にするな」
「……何で分かるんですか」
「視線を追えば、誰でも分かる」
「……私ってそんなに分かりやすいですか？」
「この上なく、な」

ふん、と呆れて鼻を鳴らすハラン。それに恥ずかしそうに苦笑を浮かべる救世。しかし、そんな安心しきった表情を見て、ハランは更に呆れて首を振る。

「まだ、安心するには早いんじゃないか？」
「え？」

薄葉は、壁にめり込む黒い影がゆらりと立ち上がるのを見て、目付きを鋭くする。口元を緩ませ、不気味に笑う黒い化け物は、体を撫で回しながら、歓喜の叫びを上げた。

「痛く、ない……全く痛くない！　あは！　あははは！　どうやら僕は、君の攻撃に怯える必要はなくなったようだよ！」

『痛み』を恐れ、それを忌避したルカ。それに『強運』が与えた運命。それはテラス化による痛覚の遮断。何事もなかったかのように立つルカは、ぐっと小槌を握り締める。

「それにしても……全く理解できないな。どうして動けるの？」
「さて、何でだろうな」

ルカは記憶の中から、薄葉の事を思い返す。意識の無い状態から立ち上がる、それは明華から聞いていた。しかし、まさか本当に、あんな状態から立ち上がるとはルカも思っていなかった。明華の話は多少どころか相当に脚色されており、薄葉を知らないルカでさえも、それは言い過ぎと分かるものだった。

僅かながら、ルカは薄葉への認識を改める。常識の通用しない相手、と。

しかし、それでも、ルカは侮っていた。所詮、自らの運の前には取るに足らない相手だと。

「どんな理由があるにせよ……君は僕には絶対に勝てない！」

壁から身を起こし、一直線に立ち上がった薄葉へと駆けるルカ。その最中にも小槌を大きく振り回し、運命の糸を捻じ曲げる。回避と到達、薄葉のあらゆる攻撃を回避し、接近する光景を思い浮かべて。

迫る手刀。それさえも事前に、運命の糸で見えている。全ての攻撃を、回避不能な広範囲攻撃までも、その軌道、範囲を捻じ曲げて、その間を潜り抜けるスペースを作る。

これで１００％当たらない。

そして、目の前まで迫った薄葉の頭目掛けて小槌を振り下ろす。当たり所が悪いその一撃は、次は確実に頭蓋を陥没させる。

すっと手刀が横をすり抜け、足のひと振りも空を切る。そして、隙だらけとなった薄葉目掛けて、ルカはその小槌を落とす。

「これで最後だ！」

ゴッ！

鈍い音、それと同時に、ルカの視界の薄葉の姿は大きく揺れ動いた。

一一一一

ひとつ、全ての観客が、全ての参加者が、誤解している部分がある。

今、まさに、運命をねじ曲げる異形の怪物と衝突している一人の男は、大した人間ではないという、侮りに似た感情。人々はそんなものを抱いていた。

速さに力、全てに置いて、仲間の大男には劣る。仲間の少女の様な男のように、特別な術を持っていなければ、やたらと騒がしい男のように奇妙な行動で戦況を引っ掻き回す事もしない。相手の罠に普通に掛かり、相手の術に普通に嵌り、かと思えば普通に戦い、普通に倒す。

実際に彼の拳を受けた者は、皆、理解する。

これは人間ではない、と。

しかし、傍目から見ればごくごく普通のその男。

『痛み』という、最も彼の恐怖を知るのに役立つツールを、自ら望んで捨てた彼は、酷い思い違いをしていたのだ。

彼が、それに気付いた時にはもう遅かった。

―――

ルカは地面に薄葉が沈む光景を見た筈だった。視界の下側に落ちていく彼の頭、間違いなくその光景を覚えている。

しかし、ルカは、今、自分が置かれている状況を理解できずにいた。

「……あれ？」

目の前には空、そしてボロボロの結界。ルカは上を見上げていた。背中に接する地面の感触。それから体を離す様に、ルカは体を持ち上げる。

「あれ？」

何故、僕は倒れている？

ルカは地面に仰向けに倒れていた。何故？　それを彼は理解できない。

痛みはない。痛みを感じない上から、何かを食らったのか？

しかし、見上げる観客達、薄葉の仲間達の表情を見て、それさえも疑わしくなってきた。

彼らは全員、唖然としていた。まるで、信じられない事が起こったかのように。もしも、薄葉がカウンターを入れていたのならば、そんな有り得ないものを見るような目は出てくるだろうか？

事実、その試合を見ている殆どの人間が、ルカが何故か跳ね上がり、後方に倒れた様にしか見えていなかった。何もなく、確実に勝てる状況にありながら、何故か後ろに飛び上がり、勝手に倒れる。一見、シュールなその光景も、混乱し、周囲を見渡すルカの、状況を理解できていない様子を見ると、彼の意図したものではない、謎の攻撃があった事を思わせる。

何処から攻撃された？

そんな疑問が、まずルカの中に浮かび上がる。そう、彼の目測で、薄葉は反撃できる姿勢になかった。薄葉からあのあとに攻撃が飛んでくるとは、考えにくい。

ならば、薄葉の仲間だろうか？　思えば、前の試合でも、前衛で戦う薄葉や大男を、後方からサポートしている仲間がいた事を思い出す。ルカは運良く、『傷を癒す』その瞬間を目で捉えていた。

不覚。そう、薄葉にばかり気を取られ、仲間の危険性を意識していなかった。

ならば今の一撃も、薄葉の仲間によるものなのか？

ルカがそれを伺う為に、薄葉の仲間達を睨む。驚いている大男と、サポート係。そんな二人とは対照的に、不敵に、無表情で腕を組み立っている一人の男。

思えば、以前の戦いでも、奇策を仕掛け、チームの勝利に貢献していたその男。

「お前か……！」

ルカはその敵意を、犯人と見定めた男、ハランに、加えて邪魔となりうる存在である他の薄葉の仲間達へと向ける。そして、すかさず小槌を振り下ろそうとして、耳に飛び込む声を聞いて、ようやく気付く。

「何をしてるんだ？」

「しまっ……！」

小槌を振り下ろす暇も与えず、ズドン、とルカの腹に肘打ちげめり込む。いつの間にか、接近していた薄葉は、明らかにルカの意識外からやってきた。

「すっかり、君の仲間に気を取られていたよ……！」

「ずいぶんと余裕じゃんか」

ルカは意識を薄葉に戻し、再び反撃に備えつつ、外からの横槍に注意を向ける。本来ならこれだけでも対策は万全。全てはルカの思う良い方向へと傾いていく。薄葉の速くも対応には困らない攻撃を、再び躱し、ルカは笑みを浮かべた。

ズドンッ！

「うっく……！？」

体が揺れる。ルカは目を見開いた。

ダメージはない。しかし、確実に今、攻撃を受けた。薄葉の隙だらけの大振りな攻撃。それを躱し、反撃に移ろうとしたその瞬間に、また。意識の外側から飛んでくる一撃。ダメージはなく、無意味なものの筈にも関わらず、その不気味さにルカは顔を歪める。

「一体……何をしてきている……！」

薄葉はどうやってもあの体勢から攻撃できない筈だ。だから、攻撃は外からに決まっている。『あの男』は、一体どうやって攻撃を仕掛けてきている？

ルカの中に生じる僅かな焦り。

そんなルカの疑問に答えるかのように、その男はゆっくりと組んだ腕から何かを取り出し、その手に構えた。

何か、来る……！

――――

ハランは見逃して居なかった。

元より、戦う仲間である筈の薄葉よりも、いつこちらに向かってくるか分からないルカを警戒していた彼は、ルカが吹き飛ぶ瞬間に、薄葉がどんな体勢にあるのかを見ていなかった。故に、彼は薄葉がルカをそのまま吹き飛ばした様に知覚していた。

あいつ、中々やるじゃないか。

そう思いつつも、何故、ルカに今の一撃が当たったのかを疑問に思うハラン。痛覚を遮断したらしいルカは、今更攻撃が当たる事など気にかけないだろう。しかし、自身の攻撃を、相手の攻撃によって潰される事は望んでいない筈だ。

ハランは考え、そして悩む。腕を組み、仏頂面で考える。

その顔は、ルカの目には、不敵に佇み、今の事態に何の驚きも抱いていない人間の表情に見えたようだ。

彼の敵意がハランに向く。

そして、ハランは、自分が睨まれた事に気付いた。

「や、やばい……」

ハラン、焦る。このままでは殺される。

そこで、彼は、ルカを攻略する為にとっておいた手段を用いようと決断する。

ハランは睨む。ルカの最大の弱点は、『想定外の攻撃に弱い』という事だと。

『痛み』を知らないから、想定外の『痛み』を拒む事はできない。何が幸福で何が不幸かが分からないから、拒みきれない、拒む必要性を理解できない不幸を避けられない。

。ならば、想定外の攻撃で、相手を攻めればよい。それがハランの考える、ルカの攻略法である。

しかし、今のルカは『痛み』を拒む。ならば、どうすればいい？

彼の選ぶ手段、それは『目晦まし』。そして用いるのは特製『粉爆弾』。

舞い上がる粉末で、相手の目を晦まし、更には纏わりつく粉で汚すという、最高の嫌がらせアイテムだ。これにより、苛立たせ、判断力を鈍らせる。そこから薄葉を使って、隙を突き、一撃で立ち直

れない程に沈ませる。
攻撃と見せかけての、ただの嫌がらせ。それがハラン流のルカ突破方である。

「喰らえ……必殺……」
「おい、ハラン。男の一対一の勝負に割り込むもんじゃねぇよ」

ハランの唯一の誤算。それは、薄葉に気を取られていると思っていたルカが、しっかりと自分を視認していた事。そして、その運の後押しなどなくとも、『男らしさ』に重きを置く、大男が傍にいたことである。
粉爆弾を投げようと、それを起動し振りかぶるハランの腕を、大きな手がわっしと掴む。飛ばす筈の粉爆弾は、勢いを失い、ころんと地面に落ちる。

「あ」

ハランの間の抜けた声。それと共に、粉爆弾は起爆した。

ボフンッ！

白い粉末が舞い上がる！　そして、それに一瞬で包まれるハラン、ダディ、救世。突然の広範囲の白い爆発に、観客達の意識も、交戦を続けつつもその視界に否が応でもその光景が飛び込んでくるポジションにいるルカの意識も、奪われる。

もくもくと立ち上がる白い粉末の煙幕。

それが結界の割れ目から吹き込む風に流され消えた時、そこから姿を現したのは、体中粉まみれで、全身真っ白になった、ハラン達

の姿だった。

「……おい、これは一体どういうこった？」
「お、お前が邪魔をするから！」
「ハランさん……ちょっと、いいですか？　今、真面目にやってる所なんですけど」
「ま、待てお前ら！　やめろ！　俺は俺なりに考えをもって……！」
「ちょっと、静かにしてもらえますか？」
「はい」

試合が終わったら即座に逃げなければ。
そう強く決心して、ハランは再び腕を組み、薄葉とルカの戦いに視線を戻す。

――――

ルカは混乱した。

彼は一体、何をやっているんだ！？

勝手に爆発して粉まみれ。そうかと思えば腕を組んで、またじっと薄葉と戦う自分の様子を見ている。

訳が分からない！

薄葉の一撃を振り払う様に躱し、ルカは頭をフル回転させる。

あの動作の意図は？　彼は何を見ている？　そもそも、さっき彼は何を仕掛けた？

理解の遥か外側。その意味のわからない自爆に、ルカは完全に気を取られた。薄葉に攻め込む無数のチャンス。それを自ら犠牲にしながら、ありもしないハランの攻撃の幻想に怯える。

しかし、それでも、ルカは未だに薄葉の攻撃に対応を続ける。元より、速くとも大振りな攻撃、注意すれば何の問題もない。

そんな油断しきった彼に、その一撃は突き刺さる。

ズン！

ルカの体が再び揺れる。

まただ。また、この攻撃……！

見えない一撃。必死で打ち込み、所々に隙を作る薄葉。そんな彼の隙をカバーするかのように飛ぶ一撃。それがどうしても知覚できない。

大したダメージじゃない……大したダメージじゃない……！

言い聞かせながら、ルカはぐっと吹き飛びかける体を留め、反撃の小槌を振りかぶる。

あんな意味の分からない奴の攻撃……二度と食らうものか！

そう強く念じ、運命の糸目掛けて振り下ろす。それは薄葉を狙わず、後方のハランを狙った一撃。しかし、その小槌のひと振りは、運命の糸に接する直前に、ぴたりと動きを止めた。

「させるかよ！」

薄葉の手が、小槌を止める。そしてそれを押し返し、腕を上げて隙を作るルカの体に掌を叩き込む。ぐらりと揺れる体。走らない痛み。それを噛み締め、ルカは気付く。

あれ？　一緒？

体を打ち抜いてきた見えない一撃。それと全く同じ衝撃。

何故、狙いに気付いた？

後方を狙うその一撃の意図を、どうして彼は見抜いた？

どうして今になって止めに入ったのか。そして、何故、槌を糸直前で止める事が出来たのか。

そして、何故、僕は今の一撃に、全く反応できなかった？

攻撃を受ける瞬間に、ルカが気付けばその一撃は止まる筈だった。何かしらの現象によって、限りなく理不尽な形で。しかし、ルカは気付かなかった。その攻撃に。薄葉がどうやって自分を打ち抜いたのかにも。

大振りな手刀で、薄葉が再びルカに迫る。その一撃を強く意識し、ルカは考える。

彼は、一体どんな技を使っている？

意識する。しかし、思い出せない。分からない。

思えば、レイラと戦ったあの時。その時は、戦い方など注目もしていなかった。何かの物語に出てくる様な、妹を助けに来たヒーロー。そんな夢物語を楽しむ様に、観察していた。

そして、このヴォラスカーニバル。

ルカの記憶に、薄葉の活躍する場面は全くなかった。

気付けば相手の罠に落ち、気付けば相手の術中に落ち、戦ってても特別目立つ動きはなかった。

僕は、彼の事を、全く知らない。

今更になって気付いた事実。それに気付いたとて、時既に遅し。見えない一撃が、再びルカの体を揺らす。

「ふ……ざ、けるなぁ！」

運命をねじ曲げる『打出の小槌』。そのひと振りで、薄葉を仕留める。隙を突いて、確実に振り切れる筈のその槌は、ぴたりと途中で動きを止めた。

「なん……で……！」

小槌は止まる。薄葉に抑えられて。そして、槌を両腕で受け止めて、手を封じられた薄葉。その体から、再び見えない一撃が伸びる。ルカは足も睨んでいた。薄葉の後方にも注意を払っていた。なのに、伸びる。

そして、次第にその一撃は、増える。増える。増える。増える。

ドン。

ドン、ドン。

ドン、ドン、ドン、ドン！

揺れる、揺れる、揺れる、揺れる。次第にルカには槌を振る暇もなくなり、衝撃に揺さぶられながら後退していく。

そして、次第に消えていく、見えていた筈の薄葉の攻撃。見えない、なのに当たる。当たる。当たる。当たる。

速すぎる？　ルカはそれを捉えるだけの目を望む。生命の危機に、反応して、体が奇跡的に更なる進化を迎え、更に強化された動体視力に目覚める。

しかし、見えない。そして、理解する。

まるで虚空を見つめているような、そんな感覚。足元に転がる小石、それを気付かず通り過ぎる様な感覚。

ルカは震える。

「そ、そんな馬鹿な……」

見えない一撃が顎を打ち抜く。ぐらりと揺れる頭。しかし、倒れない。痛くもない。だが、漠然としたその恐怖に、ルカは叫ぶ。

「存在感がまるで無い！」

「失礼過ぎるだろうがぁッ！！」

両腕合わせての薄葉の強烈な一撃。それは大きくルカを揺さぶり、ずざざと大きく後退させる。がくがくと膝を震わせ、しかし、顔を落とし、薄葉を鋭く睨むルカ。

そんなルカを前にして、薄葉は素人のような構えを保ちながら、口を開く。

「俺は、普通の人間だ」

「嘘つけ！」

ルカが叫ぶ。しかし、その突っ込みに聞く耳持たずに、薄葉は続ける。

「救世さんのように常に善人では居られないし、ダディさんの様に男らしくもない。そして、ハランのように、平気で汚い真似もできない」
「おい」
ハランの突っ込みもスルーして、薄葉はどんと胸を叩く。
「だから、自分よりもできない奴を見たり、不幸な奴を見て、自分は出来てるんだって、自分は幸せなんだって、同情したり、見下したりするような、汚い気持ちも知ってる。いや、思い返して見れば、そんな事は山程ある」
「何を……言ってるんだ？　それなら！　君が！　僕を非難するなんて、おかしいじゃないか！」
ルカは笑い、そして声を荒らげる。そんな彼を一蹴するかのように、薄葉は声を荒らげる。
「それを正当化するようになったらおしまいだって言ってんだよ！」
ルカがたじろぐ。そして薄葉が責め立てる。
「どうしようもなくそう思って、そんな態度をとっても、それを悔やんで、恥じる気持ちがなきゃ、それはただのクズだろうが！　俺は、下に見られて罵られて、嘲られて、同情される事も山程あるから……それが決して気持ちいい事じゃないこと位知ってる！」
普通。
不幸なレイラと幸福なルカ。そのどちらにも寄る事のない、中心に位置する薄葉。だから、どちらを否定することも、肯定することもしない。できない。そして、許さない。

そんな彼が、ルカに言う。

「目を逸らすな。お前は、間違ってる」

「うるさい……うるさい……うるさい、うるさい！」

そして、告げる。ルカを救う、薄葉の選んだ最終手段を。

「意気地になるだろうな……だから、教えてやる」

小槌を振り下ろそうとするルカ。それよりも先に、薄葉は動いた。

「最高の『不幸』って奴をな！」

「畜生がぁッ！」

ルカの小槌が運命の糸をねじ曲げる。イメージは爆発。薄葉を阻む様に、炎の氾濫が巻き起こる！　薄葉の姿はそのまま爆発に飛び込んでいった……

かのように見えた。

「な……なんでだよッ！？」

爆炎に消えた筈の薄葉の姿は、既にルカの眼前にまで迫っていた。爆炎の中に、薄葉の気配は潜り込み、そのまま炎に焼き尽くされるかの様にその気配は消えていった筈だった。

なのに、居る。居ない筈の人間がそこに。

「僕は、絶対に、負けないんだあああ！」

「お前、自分で『絶対なんてない』って言っただろ？」

ルカの小槌が、薄葉の命を消し飛ばすその運命の糸を目掛けて振り下ろされる。しかし。薄葉もそれを止めに掛かる。
薄葉の手が小槌に触れる。しかし、ルカはにやりと不敵な笑みを浮かべた。

「無駄だ。もう、二度と、その手は通じないッ！！」

ルカは小槌でねじ曲げる。『薄葉に小槌を受け止められる運命』を。角度のズレで、薄葉の掌から、小槌がするりと滑って抜け落ちる。落ちる先は、薄葉の命を立つ糸。

「これで……終わりだあああああ！」

こつん。

静かに響く、小さな音。
薄葉の頭に当たった小槌は、太鼓でも叩くかのような、拍子抜けな音を立てて、ぴたりと止まった。

「あ、あれ？　そ、そんな馬鹿な！？　糸が……切れない！」

その光景を見て、はあ、と溜め息をつくのは不動王。

「やっぱり、まずかったですね」
「当然。私以外に、あれが使える訳がない」
二人は既に、この勝負の結末を見抜いていた。
『打出の小槌』、真の所有者、千歳がふんと鼻を鳴らす。
「元より、『運命をねじ曲げる魔法』などという規格外の魔法、並のアルマと魔法技術で扱える筈がないでしょう。その技術をカバーするのが『打出の小槌』。都合良く、ほいほいと使える程のアルマ消費軽減機能など付く筈もない。『無限機関』を持つ千歳だからこそ、扱える代物ですよ」
しかし、唯一見抜けなかった、予想外の展開。それを目の当たりにして、不動王はふふんと鼻を鳴らして笑う。
「しかし、『運が良かった』ですね。てっきり、『アルマを使い果たして死ぬ』かと思っていましたが、彼、生き残ったようですし」
「虫の息、だけど」
「痛えな、おい」
頭にこつんと小槌を当てられた薄葉の顔が、ぐいとルカに向く。
そして、その姿は、その眼力に怯んだルカの一瞬の隙の内に、『完全に消失した』。
ズン！
ルカの頭ががくんと下がる。打ち下ろされる見えない一撃。

最早、ルカを守る『強運』はない。
ルカの『強運』、この世界でのそれは、所詮はアルマで起こす奇跡。彼は常日頃、アルマを垂れ流す様に、能力を行使してきた。
そして、その高燃費のオート魔法は、『幸せ』を理解できずに、高い望みを彼が持たなかったからこそ、燃費を抑え、彼のアルマ消費を抑えてきた。
しかし今、極度に能力を行使した彼の中に、残るアルマは僅か。
最早、自身の生命維持の為、『強運』は発動しない。

ズン！

打ち上げる一撃。ルカの体が無防備にさらけ出される。

「有り……得ない……！」
「有り得るさ」

薄葉が現れる。最早、対抗手段のないルカ。そこに目掛けて、掌を広げた裏拳を振り抜き、薄葉はにやりと笑った。

「目ぇ覚ませ、馬鹿野郎ぉぉぉッ！」

突っ込みを入れるかのような腕のひと振り。それはルカの体を吹き飛ばし、崩れた壁へと吹き飛ばす！

ズズゥゥン！

激しい音と共に、ガラガラと壁を崩し、ルカの体は砂埃に消えた。
『痛み』を誤魔化し続けた結果、ルカの体はもっと早くに気付くべき『異常』に気付く事ができなかった。
完全に壊れたその体がもう動く事はなく、黒い異形の体を手に入

れたルカは、そのまま薄れ行く意識に身を任せて、ゆっくりと目を閉じた。

―――

「あなたみたいな愚図な兄を持って、私、本当に不幸だわ」

くすくすと笑いながら、妹はいつもの様に呟いた。

「私を不幸にしてくれる兄、どうしようもなく使えない愚図な兄」

憎たらしげに僕を睨んで、しかし妹はいつでもぷいっとそっぽを向く。

「だから生かしてあげる。私がいつまでも、不幸でいるために」

不幸が大好きな妹だから、使えない僕を生かしていた。そう、僕は『運が良かった』。

―――

ルカは体中に走る、鈍い痛みに目を覚ます。

そこは相変わらずの荒れ果てた闘技場。しかし、大きく変わった点がひとつ。

痛みに耐えながら、持ち上げた腕。見つめたその手は、手に入れた筈の黒い色を失っていた。

テラス化が解けている。

だから、こんなに、体が痛むのか。

「……負けたのか、僕は」

「ええ。それはもう、こっ酷くね」

その声が降りかかり、ようやくルカは気付いた。自分を膝枕するように座る、妹の顔が自分を覗き込んでいる事に。

「レイ……ラ……？」

「……面倒な事してくれてるんじゃないわよ。テラスの体に変身なんて。治すのに、手間が掛かったじゃない」

ルカのテラス化が解けたのではなく、レイラがルカのテラス化を治療した事を、ルカはそこで初めて理解する。

そして、落ち着きを取り戻したルカは、レイラに投げ掛けた心無い言葉を思い出す。

『テラス化』による高揚。感情の起伏により生まれた心の奥底にある暗い気持ちの吐露。それを思い出し、ルカは自身の醜さに、唇を噛む。

最低だ、僕は。

薄葉の言葉が今更身に染みる。例え、それが特別な状態による高揚のせいであっても、心の片隅にそんな感情があった事は確かだっ

た。そして、それから目を逸らし、知ったあとに肯定してしまったのも事実。

「ごめん……レイラ……」

その言葉は、自然と口から零れ出た。何を、とわざわざ説明はしない。見苦しい、ただ一言の謝罪。決して許される筈もない、小さな謝罪。

「……あなたみたいな兄を持って、本当に不幸だわ」

レイラは呟く。怒っているのかどうかは、ルカの視線からは伺えない。

「そう言うなよレイラ」

そして、もうひとつ。聞き覚えのある声が、ルカの頭上で響いた。ルカの視線にざっざと歩いてきたのは、自分とついさっき戦った、薄葉の姿。薄葉はレイラを見ながら、はあ、と溜め息をついて頭を掻いた。

「お前だって、一緒に居たいからこいつを連れ回してたんだろ。それに心配して、びーびー泣きながら駆け寄って治療したのはどこの誰だか……」

「う、薄葉やめなさい！　わ、私は別に……こいつの事を心配なんてしてないんだから！　泣いてないし！」

ぐしぐしと顔を擦りながら、レイラがきーきーと声を上げる。

泣いてる？

ルカはきょとんと薄葉の顔を見つめた。そんな彼に視線を返し、薄葉が気まずそうに口を尖らせながらぼそぼそ喋る。

「わ、悪い……やりすぎた」

「……うん。やりすぎだよ。体中が痛くて堪らない」

「お、お前だって大分！」

ムキになって反論しかけた薄葉だったが、ルカの柔らかい笑みを見て、自分がからかわれている事に気付き、ふんと鼻を鳴らす。その様子を見て、くすりと笑うルカ。むっとしたものの、ぐぐっと言葉を飲み込んで、薄葉はレイラの方を見る。

ルカも、笑う事を止め、代わりに自嘲の笑みを浮かべた。

「レイラ。僕を殺して」

「あ、あなた何を言って……！」

ルカは頭に手を当てて、その顔を覆い隠す。自らの過ちに気付き、自分の存在が嫌になる。

「君はようやく、『幸せ』を見つけたんだ。僕と一緒にいちゃ、きっと駄目になる。だって、僕は、そういう人間なんだから。僕みたいな愚図と、一緒にいたら、君はきっと『不幸』になる。だから……」

と、言葉を続けようとしたルカの顔を、げし、と薄葉は踏みつけた。

「ぶへっ！」

「う、薄葉！　何して……！」

「お前、勘違いしてないか？」

薄葉が呆れた顔で言う。

「お前さ、暴走しっぱなしのレイラが、この世界でお前を殺さずにいた理由を、『僕の運が良かったから～』とか思ってたりするだろ？」

「……」

図星。ルカの表情を見て、レイラも薄葉も簡単にその答えを理解した。ますます呆れて、薄葉は言う。

「お前なあ……確かにお前は運が良いんだろうが……レイラにだって『人の心』があるって事、忘れてるだろ？」

「人の心？」

「あ、ルカ……あんた、私に人の心がないとでも……」

「いやちょっと待てレイラ。そういう意味じゃないから」

ちょっと怒りかけたレイラを制して、薄葉は続ける。

「人がこう動くとか……そういうのはお前の『運』以前に、『人の心』によるものだろ？　こうしたい、とか、ああしたい、とか、そう思うから人は動くんだ。お前の運が良いからじゃない」

「……うん？」

いまいち理解ができない様子のルカ。それにああもう、と苛立つ様に、薄葉は纏める。

「だからなぁ！　レイラだってお前が必要だから連れ回してたんだろ！」

「で、でも、僕は、レイラが不幸で居る為に必要だったから」
「レイラはツンデレなんだよ！　言わせるな恥ずかしい！」
「私は別にツンデレじゃないわ！」

薄葉の投げやりな物言いに、レイラが声を上げる。それにきょとんと間の抜けた表情を作り、ぽかんとした後、ルカは苦笑した。

「……くくっ。全く……敵わないよ、君には」

ルカは思い返す。
妹を救うために現れたヒーローの姿。
それに憧れていたのは真実だった。格好いいとも思っていた。そして、嫉妬していた。
決してそうはなれない彼は、しかし、それでも彼の様になりたい、彼よりもヒーローらしくなりたいと願った。

「僕の方が、レイラと長く居るのに……君の方がレイラを理解しているようで……僕はあれほど全力を尽くしたのに……君に負けた。そして、君は、僕には眩しすぎる……そう、憎たらしく思える程に」

ルカの内に浮かび上がる新しい感情。得体の知れない感情に、ルカはぽろりと涙を零す。

「悔しいか？」

にやっと嫌味な笑みを浮かべ、薄葉が投げかけるそのヒント。
そして、ルカは理解した。

「これが……『悔しい』なの？」

『悔しい』。勝ちたい。負けたくない。ルカは初めて抱く。
『痛い』。今、体に蘇る激痛。それで、理解する。こんなのはゴメンだ、と。

これが『不幸』なのか？　でも、不思議と辛くはなかった。

結局、彼はツイていたのだ。

「……勝ちたい。君に」

ルカが初めて、心の奥底から望む事。今や、『強運』も燃料切れで、叶える事の叶わぬ夢。
それに対して、薄葉はにかっと笑って答えた。

「おう、いつでも掛かって来い」

ルカは笑う。
初めて手に入れた『目標』に、心を満たしながら。

「次は……負けない」

『ライバル』。どこまでも格好いい、憧れのヒーロー。さしずめ、自分はどこまでも捻くれた悪役。でも、だったらmヒーローといつまでも競い合う、格好いい悪役でいたい。

ルカは初めて、『幸せ』と呼んでもいいと思える、熱く、満ち溢れるような感情に頬を緩めた。

「本当に儘ならぬこの世の中」

ルカはぼそりと呟いた。
それがまるで楽しい事であるかのように。
「思い通りに、いかないものだね……この世界は」

『勝利チーム……「チームアミーラ」！』
降参を示すルカの挙手。それにより、準決勝第一試合は遂に幕を閉じた。

Ｅｐ６１：　本当に儘ならぬこの世の中（後書き）

準決勝第一試合決着！　ルカとレイラは救われたのか？　薄葉に声をかけるハランの真意は？　粉まみれにされた救世とダディィが齎す罰とは？
その一方で動き出すもうひとつの準決勝。想像を絶する壮絶な戦いが幕を開ける……？

次回、「其処に立つ」に続く。

今回で薄葉ＶＳルカ戦、決着です。次回にも、補足的な話がはいるかと思いますが、とりあえず決着。『強運の相手をどう突破するか』の回答に、がっかりされた方、申し訳ありませぬ……
結局は、当初の通り、ルカの『強運』には『欠陥』があり、そのせいで負けた、という事です。正確な話はまた次回……

そして、このＥｐから、既にお気付きかと思いますが……
タイトルが変更されております。

旧タイトル「俺は凡夫と言っておろうに！」から、変わった新タイトルは「エンジェル・フォール！」です。

ここにきて、何故タイトル変更が来たか、と申しますと……それはちょっと重要な発表と共に説明させて頂きます。

実は、この作品、「エンジェル・フォール！」、只今、アルファポリス様の元で出版化準備中でございます。
そして、タイトル変更につきましては、アルファポリス様との出版化協議による結果となっております。

実は、以前にアルファポリス様で行われた「第４回ファンタジー大賞」に、この作品で参加させていただいた際、編集者様に目を止めていただいたようでして、このようなお話を頂きました。
こうして作品を執筆している身としては、これは夢のようなお話で、前向きに、喜んで受けさせていただきました。

突然のタイトル変更で、混乱を招いてしまいましたら申し訳ございません。びっくりされた方も多くいらっしゃるでしょう。しかし、どうか、ご了承ください。

そして、まだ、出版化準備中という段階ですが、このようなお話を頂けたのも、今までこのお話に目を触れて頂いた、そして時に支持をしていただいた読者の皆様方と、今回拙作に目を止めて頂いた編集者様のお心遣いのお陰です。
この場をお借りして、改めて感謝の意を述べさせて頂きます。

皆様、誠に有難う御座います。

混乱を招く突然の報告、申し訳ありません。
こんな私ですが、今後もお付き合い頂けると幸いです。

後書きで、長々と報告申し訳ございません。一度、活動報告内でも報告を出しましたが、見ていない方もいらっしゃると思い、こちらでも報告をさせて頂きました。失礼致しました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4604v/

エンジェル・フォール！

2011年12月27日00時45分発行